
流星のロックマン 転生者の絆物語

松上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 転生者の絆物語

【Nコード】

N7251S

【作者名】

松上

【あらすじ】

神の部下のミスよって死んでしまった主人公の新井 諒。しかし神は、責任を感じて『流星のロックマン』の世界へ転生させてくれた。

人の悲しみの涙が嫌いな諒は、皆を幸せにする事が出来るのか!?

オリジナル編完結!!

ペガサス・レオ・ドラゴン編完結!!

日常編・特別編・番外編スタート!!

プロローグ1（前書き）

初投稿！がんばりました

プロローグ1

えゝまずは自己紹介させてくれ

俺の名は新井あらい 諒りょう

今年でぴかぴかの中学一年になった

なぜ急に自己紹介したかというと、俺は死んだから

何故か？

簡単に言うとまあトラックが突っこんできてひかれた

そしてぽっくりと死んでしまいましたと言っわけだ

そして今、俺がおかれてる状況・・・

白い部屋にずっと座ってる

いやゝ死んだらドラゴンボールみたいに閻魔大王様に天国行きか地獄行きか決められると思っただけど2時間もこの白い部屋に閉じ込められてるからそんな人居ないなと実感してるわけ

でも2時間は待たせすぎだろ

いくら俺が急に死んだからって2時間この部屋にいたら誰かきすぐだろ、普通・・・！？ま、まさか・・・俺って忘れられてる？

否々、いくら何でもそんなことあるわけ・・・あるわけ・・・あるかもort

？「ふうーやつと終わった。・・・あれ？貴方は一体誰ですか？」

俺がort状態になってるとそこにはイナズマイレブンに出てくるアフロデイそっくりの少年が現われた

アフロデイ？「えゝと、すみません。話聞いてます？」

諒「あ、ああ悪い。2時間もこの部屋に居たから忘れられてると思っただからちょっと落ち込んで・・・」

アフロディ？「えっ！？その話は本当ですか！？えっとあなたの名前は？」

諒「名前か？・・・諒。新井 諒って言うけど・・・」

俺の名前を聞くとアフロディ？は顔が青ざめて「少し待っててください！」「と言ってこの白い部屋から出て行った
待つのは良いが何か暇潰しが出来る物を置いてけよort

しばらくしてアフロディ？が額に汗をかいて戻ってきた
何かあったのかな？？と思って話し掛けようとしたら

アフロディ？「すいませんでした！！！！！」
いきなり土下座されました（笑）

何？

俺ってこんな美少年に土下座をされるような事をしたのか？
教えてくれよ、神様！

アフロディ？「はい今から教えますね。」

この子、今俺の心読んだ風に返事したよ！？
もしかしてこの子・・・

アフロディ？「はい。僕は神ですよ」

・・・

・・・

.....

.....

諒「な、何イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!?!?!?!?!」

俺は大声を出して驚いた

プロローグ1（後書き）

ガンバって更新させます

プロローグ2（前書き）

がんばりました 応援してください

プロローグ2

諒「すいません。急に大声なんか出しちゃって。」

アフロディ？「いえいえ、僕の方こそ急に貴方の心の中を読んでしまつてすいません。」

俺は頭を下げた謝つたが、逆にアフロディ？に謝られた

諒「そんな、頭を上げてください。悪いのは俺ですから・・・そう言えば、どうして急に土下座をしてきたんです？」

俺はアフロディ？は悪くないと言い、何故急に土下座してきたのか聞いた

アフロディ？「・・・怒らないで聞いてくれますか？」

諒「良いですけど、1つ条件があります。」

アフロディ？「・・・良いですけど何ですか？」

アフロディ？は小刻みに震えながら返答してきた

諒「否、そんな怖い事じゃないから落ち着いて下さい。」

そう言つとアフロディ？の震えが止まつた

諒「その条件は、貴方の事をアフロディと言つていいかと言つ事です。」

俺がそう言つと一瞬驚いた顔をしたが、笑顔で「良いですよ」と言ってくれた

諒「それじゃあアフロディさん。」

アフロディ「止して下さい、さん付けなんて。普通に友達感覚で話して下さいよ。」

そう言われたが神様を友達感覚で話すなんて・・・まあアフロディが言ってるしな

諒「分かり・・・分かった。これで良いだろ？それより、何で土下座なんかしたんだ？俺なんかに？」

アフロディ「・・・実は神にも部下がいます。」

アフロディが話し始めた

しかし、神にも部下なんているんだな（笑）

アフロディ「そして僕も神なので部下がいます。」

やっぱアフロディって偉いんだ

でも敬語は使わせてくれないんだよなあ

アフロディ「そして、僕の部下の1人が今日ある1人の人間を間違えて殺してしまいました。」

・・・やっぱ誰でもミスはあるんだなあ

アフロディ「その人間は、横断歩道を渡っている時に突っこんできたトラックを“妹を守りたい”という気持ちで妹を庇い、そして死にました。」

その話を聞いてその人間は良い奴だなと思ったけど、なぜか他人とは思えなかった

アフロディ「その人間は今、黙って僕の話聞いてます。」

諒「……………もしかして、俺？」

アフロディに質問すると黙って頷いた

諒「そうか……………だから他人とは思えなかったのか。」

俺がそう呟いた

アフロディ「本当にすいませんでした。僕が情けないばかりに。」

アフロディは泣きながら謝ってきた

諒「おいおい、泣かないでくれよ。誰でもミスはあるんだ。そのせいで死んだのが俺だったんなら許してやるし。」

俺自身、妹を置いて来ちまった事に未練はあるが、死んだ原因が神様の（部下の）ミスで死んだのなら許せるな
好きで殺したわけでもないし

それに、1人の人間の死に泣いてくれてる神様だっているし、許さないわけにはいかないよな

しかし、いくら許すって言ってもアフロディは顔を上げず泣きなが

ら謝っている

諒「（どうしたのか。許すって言っても顔を上げてくれないし。・
・・！！）そうだ。」

俺が突然言葉を言った所為なのか、アフロディが顔を上げた

諒「何か罪滅ぼしがしたいならさ、アフロディの神の力があるだろ
？その力で俺に何かしてくれ。それで良いから、な！」

俺がそう言つとアフロディの顔に笑顔が戻った

アフロディ「本当に貴方は優しいですね。でも、僕に出来るのは転
生させて、能力をあげるくらいしかできないよ。」

諒「！？じゃ、じゃあ元の「出来ないんだ。」世界に・・・どうし
て？」

元の世界に帰れると思ひ、言おうとしたら途中でアフロディに“帰
れない”と言われた
転生させることは出来るのに、元の世界には帰れないと言われても
納得がいかない

アフロディ「貴方の世界では、既に貴方は死んでいるんです。なの
に、死人が生き返つたらどうなると思います？」

諒「・・・・・・・・」

確かに・・・

死んだ筈の人間が生き返つたら、今まで通りには過ごせない

諒「じゃあ“流星のロックマン”の世界に転生したい!!」

アフロディ「分かりました。それでは欲しい能力を言ってください。言ってくれた能力は全てあげますよ。」

此処に来てチート能力大量にくれる発言!

諒「じゃ、じゃあ・・・

- 1：生きてた頃の記憶は忘れない
- 2：身体能力MAX
- 3：瞬間記憶能力
- 4：NARUTOに出てくる忍術・幻術・体術の使用可能 ただし万華鏡写輪眼などのデメリットは無し
- 5：BLEACHに出てくる武器の召喚、技の使用可能
- 6：デジモンになる力
- 7：ロックマンエグゼ・流星のロックマンに出てくる全ての変身可能(但し、ソウルユニゾンしてないナビやノイズ変身に無い電波体のノイズも変身可能)
- 8：イナズマイレブンに出てくる必殺技使用可能
- 9：妹の願い事は出来るだけ叶えてあげてほしい

諒「これくらいかな。」

アフロディ「可能だけど最後のは?」

諒「ああ、最後のは兄が妹にしてやれる最後の仕事さ。」

アフロディ「何故そこまで妹のことを気にするの?」

諒「俺の両親さ、事故で早くに亡くなってるんだ。だから、俺と妹の2人で今まで頑張って生きてきたんだ。近い身内も居ないから、何時もお互いを支えてきたが、俺が死んであいつは本当の孤独になっちゃったからな・・・」

多分俺の顔は暗いと思う

アフロディも、「しまった」という顔してるしな

諒「・・・取り敢えず、妹の事を頼むな。」

アフロディ「分かったよ。それじゃあ相棒を決めよう。」

諒「相・・・棒？」

相棒って？

アフロディ「そう、星河 スバルならウォーロックみたいな感じ。」

なるほど、変身に必要な相棒なわけだな

諒「・・・それなら俺の相棒は“フォルテ”で。」

アフロディ「了解！それじゃあ能力を貴方に授けよう。」

アフロディがそう言いながら右手を俺の頭に置いてきた

アフロディ「貴方に言われた能力は全て授けました。それとこれを。」

そう言うとフォルテのマークがついた黒の携帯を渡してきた

諒「これは？」

？「お前が俺の主人か？」

携帯から声が聞こえたので携帯を開けるとフォルテが画面にいた

諒「お前・・・フォルテか？」

俺は恐る恐る聞いてみた

？「何当たり前な事言ってるやがる。俺は正真正銘お前の相棒のフォルテだよ。」

まさか、フォルテからこんなことが聞けるとは・・・

諒「ありがとよ、アフロディ！」

アフロディ「否々、元はと言えばこちらが悪いわけだし。・・・それじゃ“流星のロックマン”の世界に送るよ。後、原作始まる数年前に送るから。」

諒「分かった。じゃあ妹の事頼むな。」

俺がそう言うとアフロディが頷いて「任せてよ」と言ってくれた
これだと思い残す事は無いな

諒「じゃあ送ってくれ。」

アフロディ「了解！」

アフロデイがそう言うと俺の体の後ろに扉が現れた

アフロデイ「その扉の先が“流星のロックマン”の世界だよ。・・・
・ ・ ・ 頑張っ てね！」

アフロデイの言葉を聞いた俺は振り返って笑顔で「嗚呼!!」と言
い、扉を開け新たな世界に入って行った

プロローグ2（後書き）

次回は主人公設定かなあ

主人公設定とデバイス設定（前書き）

今回は諒とフォルテの設定！

主人公設定とデバイス設定

名前：松上 諒 まつがみ りょう

性別：男

容姿：BLEACHに出てくる黒崎一護を幼くした姿

年齢：スバルたちと同じ年

性格：困ったり泣いたりしたりする人をほっとけない。またそんな性格なのでフラグがいつのまにか立ってたりするが本人は気付いていない。

能力：1生きていた頃の記憶は忘れない

2：身体能力MAX

3：瞬間記憶能力

4：NARUTOに出てくる忍術・幻術・体術の使用可能 ただし万華鏡写輪眼などのデメリットはなし

5：BLEACHに出てくる武器の召喚、技の使用可能

6：デジモンになる力

7 ロックマンエグゼ・流星のロックマンに出てくるすべての変身可能（ただしソウルユニゾンしてないナビやノイズ変身でない電波体のノイズも使用可能）

8：イナズマイレブンに出てくる必殺技使用可能

9：妹の願い事はできるだけ叶えてあげてほしい

備考：一護みたいに眉間に皺は寄ってない。体付きは必要な筋肉しかない。

相棒

フォルテ

待機状態：フォルテのマークが入った黒の折り畳み式の携帯
能力：諒のバトルのアシスト、武器の転送、メール、電話、家計簿
性格：原作とは違いかなり落ち着いてる。無口だが諒が困ったら助
言してくれる。また家のお金の責任者で必要なものを買い物の時教
えてくれる。

主人公設定とデバイス設定（後書き）

次回はあのキャラが登場＋初の戦闘 次回もよろしく！

第1話 女の子を泣かせるな！(前書き)

連続投稿！ 頑張ってます！

第1話 女の子を泣かせるな！

side 諒

俺はアフロデイが出した扉を潜り抜けた
潜り抜けたその場所は・・・

諒「“ドリームアイランド”のゴミ捨て置場・・・か。」

ドリームアイランドとは、双葉 ツカサが親に捨てられその憎しみ
でツカサのもう1人の人格である双葉 ヒカルが生まれた場所なの
だが・・・

諒「何か空気がおかしい・・・」

俺が居る場所は、何か殺気が漂っていた

諒「フォルテ・・・この近くに生命反応はあるか？」

こんな戦いに素人な俺ですら、殺気に気付くのだからやばい何か
きつと近くに居る筈

フォルテ「少し待て・・・！！？諒、東150mに生命反応が
2つ。しかも片方はかなり衰弱してる！！」

諒「！？」

俺は、フォルテの言葉を聞いて急いで東エリアに向かった

side???

わたしはひとり

まいにち、しらないおとなからぼつりよくをふるわれる

わたしはひとり

まいにち、しらないこたがいしなどなげてくる

わたしはいつもばけものをみるようなめでみられる

わたしはみんなになにかしたのかな？

しんだほうがらくだとおもった

でもしねなかった

こわかった

どこにいけばたのしいの？

どこにいけばわらえるの？

そんなことをかんがえながら、きょうもごみおきばにたべものをさがしにいった

いつもはごみおきばにはいったら、だれかがいしをなげてくるけど

きょうはいしがとんでこなかった

わたしはすぐくうれしかった

やっど、このくるしさからかいほうされるとおもった

だけどそれはまったくちがった

いつものばしょにいくと、おおきなあかくわがたむしがいた

そのまわりには、いつもわたしをいじめてくるこたがたおれていた

わたしはこわくなってそこからげようとした

でも、あしもとにあったかんにあたってしまいおとがなってしまうた

それにきずいたおおきなくわがたむしは、わたしをこうげきしよう

としてむかってきた

わたしもうしぬのかな？

そうおもいながらめをつむった

だけどいくらまってもいたくはなかった

そしてゆっくりめをあけるとそこには、おれんじいろのかみのけをしたおとこのこがながくてくるいけんをつかつてわたしをまもってくれていた

side 諒

諒「(ぎりぎり間に合った。でも何故この世界にこの子が？しかも、襲っていた奴がクワガーモンなんて・・・まずはこの子に隠れてもらわないと) ねえ君!!」

俺が声を掛けると、目に涙を溜めながらこ俺を見てきた

諒「(怖かったんだな・・・) 俺がこいつを引き付ける。だから君は、何処か安全な場所に隠れていてくれ!!」

俺がそう言つと、急いで女の子は近くにあったゴミ山に隠れた

諒「(よし、上手く隠れたな。) 待たせたな、くわがた!! 女の子を泣かせた罪の大きさをテメエー体に教えてやる!! 行くぜフォルテ! 電波変換! 新井 諒、オン・エア!」
俺がそう叫ぶと、俺の体は光りに包まれた

side 三人称

諒が光りに包まれたので、クワガーモンは目が眩み攻撃が出来なかった

そして光が消えると諒の姿が変わっていた
黒を基調とした体、蝙蝠をイメージする頭、少しボロボロな茶色のマ
ント、そして右手には漆黒の日本刀・天鎖斬月を持っていた

諒「さて、初めての戦闘だからフォルテ、サポートよろしく！」

フォルテ「嗚呼、任せろ……」

諒「行くぞ！くわがた！！」

クワガーマン「シャアアアア！！！！」

そして、クワガーマンと諒の戦いが切って落とされた……

第1話 女の子を泣かせるな！（後書き）

次回は初の戦闘！ そして女の子の正体が明らかに！？

第2話 俺が幸せにしてやる！（前書き）

なんか題名がプロポーズみたいですね・・・
本文はかなりご都合主義ですけどよろしくお願いします

第2話 俺が幸せにしてやる！

side?????

わたしはすぐわれた

おれんじのかみをしたおとこのこにたすけられた

いままで、そんなことなかった

おなじくらいのおとこのこは、いつもいしをなげてわたしのすがたをみてわらってた

でも、あのおとこはちがった

あのおとこのこはわたしのことをしんぱいしてくれた

わたしがいないのにきがつくと、あのおとこのこはおおきくわがたにさけんだとたんひかりがあのおとこのこをつつんだ

そして、ひかりがおさまるとさっきのおとこのこじゃなくてごうもりのようなおとこのこがたっていた

side 諒

俺は電波変換をしクワガーモンと戦っている

諒「（相手の攻撃が簡単に読める。フォルテがサポートしてくれるからか？だが、今はそんな事はどうでもいい！！このくわがたに、あの子を泣かせた罪の大きさを体に教えてる！！）」

sideフォルテ

フォルテ「（こいつ本当に戦闘初心者か？確かにサポートはしてるが、それでも俺は2割しかサポートしてないし・・・ますます興味が湧いたぞ！！諒！！）」

side 諒

クワガーモンの動きが鈍くなってきた
スタミナが切れてきたのだろうが、俺は全然切れない
やっぱ身体能力MAXは伊達じゃないな
クワガーモンは早く俺と決着がつけたいのか、必殺技のシザーアームスの構えをとった

諒「良いぜ、俺も早くお前と決着が付けたかった！！！！行くぞ！！！！」

俺がそう叫ぶとクワガーモンが突っ込んで来た
だが俺は、右手に持っていた天鎖斬月を焦らず両手で持った
そうすると、黒いオーラみたいなものが俺の周りに漂った
そして俺は叫んだ

諒「月牙・・・・・・・・天衝！！！！」

黒いオーラを、黒い刀で尻ぎ払いながら叫んだ

side 三人称

一瞬の事だった

クワガーモンが諒にシザーアームズをしようと突っ込んだ
しかし諒は、天鎖斬月を焦らず両手で持った
天鎖斬月を両手で持った瞬間、諒の周りに黒いオーラが漂った
そして、諒は天鎖斬月を横に振った
黒いオーラを黒い刀で凧ぎ払いながら叫んだ

諒「月牙・・・天衝！！！！」

そうすると、諒の周りに漂っていた黒いオーラが斬撃に変わりクワ
ガーモンに当たった
そして、月牙天衝を喰らったクワガーモンは0と1のデータとなっ
て消えた

諒「これが、女の子を泣かせた罪の大きさだ！！」

side?????

おとこのこたたかいは、わたしのめじゃぜんぜん見えなかった

おとこのこは、わたしのために起こってくれた

なぜそこまでしてわたしのためにがんばるんだろ？

なぜだろう？

いったいどうしてだろう？

そうおもっているとおおきなあかいくわがたむしが、おおきなはさ
みをかまえておとこのこにつっこんだ

あぶないってさげぼうとしたとき、おとこのこのまわりからくろい
かぜみたいなのがたくさんでた

そして、おおきなあかいくわがたむしとのきよりがかなりちかくな
ったときにおとこのこが「月牙・・・天衝！！！！」とさげび

ながら、おおきなくろいけんをよこにふった
そうすると、くろいかぜがけんのふったぶぶんにあつまりおおきな
あかいくわがたむしにあたった
そして、おおきなあかいくわがたむしはきえていった
そしておとこのこが「これが女の子泣かせた罪の大きさだ！」と
いってわたしにほうにかおをむかってわらってくれた

ドキッ

あのおとこのこがわらってくれたとき、むねがあつくなった
どうしよう・・・
きつとわたしはあのおとこのこに・・・

side 諒

クワガールモンを倒した後、俺はあの女の子が居る所に向かって笑った
そしたら、女の子は顔を赤くして目を逸らした
結構シヨックだ

だが、今は落ち込んでいる場合じゃない

諒「フォルテ、アフロディと話せるか？」

俺はフォルテに、アフロディと話せるかどうか聞いた
どうしても、聞きたい事があるからだ

フォルテ「嗚呼、電話帳に入ってるから何時でも話せるぞ……」

神様と電話で話せるなんてな……
だがそれは後回しだ
今はしないといけない事が沢山ある

諒「此処にいる奴らの怪我の治療と記憶の削除だな。フォルテ……頼むな。」

俺はフォルテに頼んだ

フォルテ「……分かった。だが、このガキ供はそんなに大きな怪我はしてない。だから、応急処置しかない。……だがあつちの子は……」

フォルテは、何が言いたいのか俺には分かった

諒「分かっている。あの子は、心も体もボロボロだ。だからこそ、俺はあの子に笑ってほしいんだ。」

そお言いながら俺は、隠れてる女の子の所に行った

side?????

どうしよう

あのおとこのこのえがおをみて、めをそらしちゃった
で、でもはんそくだよね!!

あんなかつこいいかおが、きゅうにかわいいえがおになるんだから

!!

・・・いままで、あんなかおでみてもらったことなかったからわたし、すごくうれしかった
そうおもっていると、おとこのこがこっちむかってあるいてきた
どうしよう・・・
まだかおがぜったいあかいよ・・・

side 諒

フォルテに後の事は任せ、俺は女の子の所に向かい話し掛けた

諒「大丈夫か？怪我とかしてないか？」

さっきまで怖い思いをしたから、出来るだけ笑顔で話さないとな

????? 「うん。だいじょうぶだよ。////////」

女の子は、顔を真っ赤にして言ってきた

諒「大丈夫か？顔が真っ赤だけど？」

もしかしたら、クワガーモンに攻撃されたのかもしれない
なので、俺は女の子の顔に近付いて聞いた

????? 「う、うん。ほ、ほんとうにだ、だいじょうぶだから／／／／」

女の子は、更に顔を真っ赤にして言った

まあ本人が大丈夫って言ってるし大丈夫だろう
取り敢えず、自己紹介が始めだな

諒「まだ名前を言っただけだったな。俺の名前は新井 諒って言うんだ。君の名前は？」

俺は出来る限り優しい声で聞いた

?????「りょうって言うんだ。かっこいいね！わたしのなまえはふえいとって言うの！よろしくね！」

女の子、否、ふえいとは笑顔で俺に言ってきた

諒「ありがとな。ふえいとも良い名前だな。」

俺は素直にふえいとを誉めた

人間、正直・素直・真面目に生きなきゃな！！
まあ俺は真面目じゃないがな・・・

ふえいと「そ、そんなことないよ。／＼／＼／＼／」

ふえいとは顔を真っ赤にして違うと言った
だが、フェイトはかなり可愛い

諒「可愛いなあ」

ふえいと「えっ！？／＼／＼／＼／」

あっ、声に出してたのか・・・

まあ良いか、マジで可愛いし

ふえいと「あ、あ、ありがとね／＼／＼／＼」

ふえいとは、今まで以上に顔を真っ赤にしていた
・・・そうだ、すっかり忘れてた

諒「なあふえいと？」

俺がふえいとに話し掛けると、ふえいとは俺の目を見てきた

ふえいと「なに？どうしたの？／＼／＼／＼」

ふえいとは、まだ顔を赤くしながら聞いてきた

諒「ふえいとつて帰らなくて良いのか？幾らまだ、太陽が出ていてもこんな事があつたんだ。両親が心配してるんじゃないのか？」

こんな事があつたんだ

幾らドリームアイランドから離れていても、誰か一人くらいは気付くと思う

それに気付けば、遊びに行ってる子供達を心配するのは誰もが当たり前の行動だ

だが質問されたふえいとは、顔が暗くなった

ふえいと「・・・しんぱいしないよ。だってわたしには、おとうさんもおかあさんもいないもの・・・」

諒「!？」

俺は耳を疑った

まだ小学校3年生くらいの女の子が、両親が居ないなんて事は有り得ないから

諒「じゃ、じゃあふえいとは一体今までどうやって生きてきたんだ？」

俺は動揺しながらも聞いた

分からない

こんなまだ小さい女の子が、どうやって両親無しで生きてこれたのか

ふえいと「わたしがめをさましたとき、もうおとうさんもおかあさんもいなくなつたゆ。それに、まちにいけばみんなわたしのことをばけものを見るめでみてきたよ。おとなはぼつりよくをふるってきたし、おないどしのこたちもいしなんかをなげてきた。でもいつしようけんめい、わたしはいきてきた。ここには、すてられたたべものもあつたし……」

ふえいとは話してる時震えてながら泣いていた

本人は気付いてないのか、今までの事を淡々と話している

ふえいとが何をした？

ふえいとに一体何の罪がある？

こんな可愛い女の子に、よくもそんな仕打ちが出来るな

怒りが湧き出てきた

しかし同時に、ふえいとを幸せにしてやりたい気持ちに怒りより出てきた

だから俺、はふえいとを抱き締めた

ふえいと「りよ、りよう、な、なにをするの!?!はずかしいよ!?!?ノノノノノ」

ふえいとは、顔を赤くし本当に恥ずかしそうにした
だが俺はふえいとを離しはしなかった

諒「よく今まで頑張ったな、ふえいと。辛かっただろ？淋しかった
だろ？だがもう安心しろ！俺がお前を幸せにしてやる！お前から、
淋しさを取り除いてやる！．．．だから思いっきり泣いても良いん
だ。大丈夫、此処には俺とお前しか居ない。だから．．．泣いとけ
．．．」

俺がそう言つと、ふえいとは「いいの？」と聞いてきた
だから俺は、笑顔で「大丈夫だ」と言つた
そうすると、ふえいとの目から涙が出始めた

ふえいと「う、うわああああああん！！！！つらかった．．
．．さみしかった．．．しあわせになりたかった．．．だれかと
いっしょにわらいたかったよお．．．」

諒「大丈夫。俺が付いてる。お前は、俺が幸せにしてやる。だから、
今は気の済むまで泣いとけ。俺は此処に居てやるからよ。」

俺はそう言いながら、ふえいと髪を撫で続けた

ふえいと「うわああああああん！！！！」

それから暫くしてふえいとは泣き止んだ

ふえいと「ありがとう、りょう。おかげですっきりしたよ。」

ふえいとは、俺を見ながら笑顔で言ってきた
諒「やっぱふえいとは笑ってるほうが可愛いぞ。」

俺は頬笑みながらふえいと言った

ふえいと「あ、ありがとう。／＼／＼／＼」

ふえいとは顔を赤くしてお礼を言った
そろそろフォルテの方が終わったかもな

諒「さて、フォルテの方は終わったかな？まあ行ってみたら分かるか。さあ行こうぜ、ふえいと!!！」

俺はふえいと共に笑顔で言った

そうすると、ふえいとは笑顔で言った

ふえいと「うん!!！」

ふえいとは、笑顔で俺の右手に抱き付いてきた

諒「何で抱き付くんのだ？・・・まあこれがお前の幸せなら別に良いんだがな・・・」

俺はそう言って、フォルテの居る場所に歩いて向かった

第2話 俺が幸せにしてやる！（後書き）

さあ次回は何故流星のロックマンの世界にデジモンがいるのか？

何故魔法少女リリカルなのはに出てくるフェイトがいるのか？ 何

故ふえいとがいじめられていたのか？

次回もおたのしみに！

第3話 明かされる真実(前書き)

ご都合主義だらけですがよろしくお願いします！

第3話 明かされる真実

side 諒

俺はふえいとに抱き付かれながらも、フォルテの居る場所まで歩いた

諒「フォルテ、頼んだ仕事は終わったか？」

フォルテ「・・・俺を誰だと思っている。応急処置も記憶の消去もとつくに終わってる。」

俺がフォルテに聞くと、フォルテは素っ気なく俺に言った
頼りになる相棒だな、フォルテは・・・

諒「そうか、ありがとな。」

フォルテ「・・・俺は疲れたから眠る。緊急事態の時以外は、絶対に起こすなよ・・・」

フォルテはそう言って、スリープモードになって眠った

諒「ありがとな、マジで。」

俺はもう一度お礼を言って、今後の事を考えた

あの話を聞いて、ふえいとを1人には絶対させたくない
だが、孤児院に行けばまた苛められるかもしれない・・・
そうなると答えは1つしかないな・・・

諒「・・・なあ、ふえいと？」

俺は、俺の右腕に抱き付いているふえいとに質問した

ふえいと「なに、りょう？」

ふえいとは、顔を傾けて聞いてきた

か、可愛かったので、言いそびれそうだったがなんとか聞いた

諒「ふえいと・・・俺と一緒に暮らさないか？」

sideふえいと

りょうは、わたしにいつしよにくらさないかってきいてきた

わたしはすごくうれしかった

りょうのやさしさが、すごくわたしのなかにはいつてきた

でもわたしは、ふあをだつのでたきいてみた、ううん、きいちゃった

ふえいと「・・・いいの？わたしなんかいつしよにすんでも？」

わたしのばか！

なんでこんなときいちゃったの！？

もしだめといわれたらどうするの！

わたしはふあんで、ずっとりょうのかおをみつめた

でもりょうは「当たり前だろ！俺はふえいとを幸せにするって言っ

たんだ。俺はふえいとに傍に居たい。」と行ってわたしのあたまを

なでながらわらってくれた

うれしい／／／／／

わたしをしあわせにしてくれるって、はじめていつてもらえた／／／／／

だからわたしは、りょうにからだにだきついた／＼／＼／＼
でもりょうは、わたしのことをうけとめてくれてあたまもなでてく
れた／＼／＼／＼

ドキッ！！

またこころがあつくなった・・・
やっぱりわたし、りょうのことが・・・すきなんだ・・・

side 諒

ふえいとに抱き締められた時、俺は思った

諒「(俺・・・家つてあるのか?)」

俺は元々、この世界の人間じゃない
転生した、しかも来たばかりの人間だ
・・・心配になってきた

ふえいとにあんな事言っておいて、一文無し・帰る家も無い
・・・恥ずかしすぎる!!
だから俺は、ふえいとに離れてもらってあいつ(、、、、)に電話した

諒「・・・！もしもし、アフロディか？」

俺が電話をした相手は、俺をこの世界に転生させてくれた神様・ア
フロディだ

アフロディ「嗚呼、そうだよ。・・・どうしたんだい？」

アフロディが、電話越しに聞いてきた俺の家に付いて聞かないといけないが、まず最初に聞かないといけない事がある

諒「まずお前に聞きたい！この世界は“流星のロックマン”の世界だよな？」

アフロディ「そうだよ、その世界は“流星のロックマンの世界”だよ。・・・本当にどうしたんだい？」

この世界は“流星のロックマン”らしい
じゃあ何故、この世界に・・・
聞いたら分かるか・・・
俺はアフロディに聞いた

諒「・・・この世界にクワガーモンが出た。」

アフロディ「！？分かった、今から調べてくるよ！10分後にもう一回電話をするよ！！じゃあ・・・」

アフロディはそう言って、電話を切った
俺は携帯をポケットに入れた
すると、ふえいとが俺の顔をずっと見ていた

ふえいと「りょう、いまだれとはなしてたの？」

ふえいとは顔を傾けて聞いてきた

俺は動揺したが、なんとか顔に出さずにふえいとに言った

諒「なあに、ただの友達さ。」

俺はそう言っつて、ふえいとの頭を撫でる

ふえいと「フニヤア／＼／＼／＼／＼」

ふえいとは、猫の鳴き声の様な声を出して顔を赤くした

俺はそんなふえいとの顔を見ながら、時間が過ぎるのを待った

俺とふえいとが談笑していると携帯がなった

諒「もしもし？」

アフロディ「諒！大変な事が分かったよ！！」

アフロディの声は何時もよりも慌てていて、かなり声が大きかった

諒「どうしたんだよ、アフロディ。そんなに慌てて？少し落ち着いたらどうだ？」

何事にも落ち着きが大切だからな

俺はアフロディに落ち着くよう促す

アフロディ「そうだね・・・よし！落ち着いた。それでさっきの話しただけ・・・」

一体何故、クワガーモンがこの世界に居るんだ？

何故ふえいとがこの世界に居るんだ？

どうしてふえいととは、苛めあっていたんだ？

アフロディ「……実は諒が入った扉なんだけど……」

……アフロディが出した扉か……

アフロディ「あの扉、実は僕1人の力じゃ出すことは出来ないんだ……」

諒「そ、そうなのか？」

驚いた

アフロディにも出来ない事があるなんてな……

アフロディ「うん……だから、僕の部下の力も借りて扉を出したんだ。」

部下の力をねえ……

……!?

諒「ま、まさか!？」

ま、またなのか!？」

アフロディ「うん……僕の部下がまた間違えて“デジモン”の扉と“魔法少女リリカルなのは”の扉を“流星のロックマン”の扉と合体させてしまったんだ。」

……ハア

何故アフロディの部下は、ミスが多いんだ？

絶対に損してるよな、アフロディ

でも、部下も好きでミスをしてるんじゃないよな……

諒「分かった、それはしょうがないさ。誰にでも、ミスは絶対にあるもんだ。で、何でふえいとは苛められてたんだ？この苛めは幾ら何でも酷過ぎるぞ。」

俺は疑問になってる事を聞いた

ふえいとは見た所、魔法は使えないだろう

バルディツシユは持ってない

苛められる要素は、何処にも無い

なのに、何故なんだ？

アフロディ「……それは、彼女にあるデジモン）、）、）、）、）が封印させられてるからなんだ。」

諒「……あるデジモン？」

アフロディ「そう……そのデジモンの名前は“チンロンモン”。」

諒「！？それって！」

俺は凄く驚いた

何故なら、チンロンモンはデジモン達が居るデジタルワールドを守る四聖獣の一匹なのだから

封印される理由が分からない

諒「……どうして封印されたんだ？」

俺は驚きながらアフロディに聞いた

アフロディ「……まずチンロンモンが封印されたのは、今から4年前（、、、）なんだ。」

諒「な!？」

4年前に封印されたと言う言葉が、更に俺の謎を深めた
俺がこの世界に来て、まだ半日も経っていないのにおかしい、否、
おかし過ぎる

アフロディの部下が扉にミスをして“デジモン”と“魔法少女リリカルなのは”の世界が“流星のロックマン”の世界と合体したとはいえ、何故ふえいとに封印されてるんだ？

しかも、4年前に封印されたなんて……

アフロディ「……実は、諒はもっと原作の始まる前にその世界に行く筈（、）だったんだ。」

!?

俺はその言葉を聞いて、全ての謎が一本に繋がった

……言い方が、江戸川 コナンみたいだったが気にしない

諒「……つまり、アフロディの部下がミスをしたからか？」

これで答えが「はい」なら、この謎も解決したも同然だ

しかし、アフロディの答えは俺の答えと180度真逆だった

アフロディ「違うんだ。僕もそう思って部下に聞いたんだけど、誰一人そんなミスしてないらしいんだ……」

諒「じゃ、じゃあ一体誰が・・・！？ま、まさか・・・」

俺は一つの予想が思い浮かんだ

だが、俺の予想は違ってほしかった

しかし、アフロディイの答えは俺の予想していた事と同じだった

アフロディイ「多分、諒が考えてる通りだと思うよ。・・・暗黒デジモンが、君がこの世界に来る時間を強制変更したんだと思う。それに、四聖獣を封印したのもその暗黒デジモンだと思うよ。」

クソッ、アフロディイの部下も厄介なミスをしたな！

その事に関しては怒ってないが、かなり俺の状況がヤバくなった

諒「分かった。・・・つまり、その暗黒デジモンは原作を最悪な形・BAD ENDにしたいわけだな？」

アフロディイ「多分ね。・・・気を付けてよ、諒は狙われてる可能性があるから！」

俺が言うと、アフロディイはそう言って注意してきた

諒「分かってる。後、もう1つ聞きたいんだけど良いか？」

この事を聞いて、更に疑問が増えたので聞いた

アフロディイ「良いけど・・・なんだい？」

諒「・・・四聖獣は皆、誰かに封印されてるのか？」

ふえいとチンロンモンが封印されてるって事は、他の四聖獣も封

印されてるのかどうかだ

アフロディ「・・・うん、封印されてる。でも、誰に封印されて今何処に居るのは分からないけどね。」

やっぱりか・・・

諒「分かった、ありがとな。・・・何かあったら連絡するよ。」

アフロディ「分かった。こっちも何か分かったら連絡するよ。後、諒の住まいはコダマタウンの高級マンションの502号室でお金は常に銀行に預けておくよ!」

ま、マジで!?

諒「あ、ありがとな、アフロディ!」

良かった、住まいと金には困らないな

アフロディ「どういたしまして、それじゃあまた。」

諒「ああ、またな!」

俺は電話を切り、携帯をポケットに再び入れた

さて、俺の家はコダマタウンの高級マンションだったよな
・・・あそこか

諒「ふえいと、俺達の家に行こうぜ。」

ふえいと「うん!・・・だけど、いえはどこにあるの?」

ふえいとは、頭に？マークを浮かべていた
その顔も凄く可愛かった

諒「それは行ってからののお楽しみだ！」

俺がそう言つと、ふえいとは笑顔で俺を見てきた

ふえいと「わかった！じゃあいえにかえろっよ！！！」

諒「嗚呼！」

そして俺等は、俺達の家があるコダマタウンに向かった

余談だが、ガキ達の記憶は消えていてるが数人完全に消えてない奴
らがい tara しいが、子供の話だから信じてもらえなかったそうだ

第3話 明かされる真実（後書き）

どーも！作者の松上です。

諒「主人公の新井諒だ。」

いやー毎日更新頑張ってます！

諒「それが普通だ。こんな駄文を読んでもくれる人がいるんだからそれが恩返しになるだろう。」

グザッ

そんなにストレートに言わなくても

諒「まあ頑張ってるのは本当だしな。」

まあな

諒「それより次回予告をしないとよ。」

そうだな！

次回予告

ふえいとのお願いはいつたい？

主人公とまさかの接触！

2人「お楽しみに！！」

第4話 主人公との接触（前書き）

昨日更新しなくてすみません

HR合宿に行っていたため更新できませんでした

なので今日がんばって2話以上更新させます

本当にすみませんでした

第4話 主人公との接触

side 諒

俺達は今、コダマタウンの展望台のベンチに座っている
えっ？話を飛ばすなって？

・・・分かったよ

じゃあ、どうやって来たか簡単に説明するぜ

電波変換する

ふえいとをお姫さま抱っこする

全速力でウェーブロードを走る

コダマタウンの展望台に無事に到着！

ウェーブアウトする

展望台で寛いでる 今此処

まあ簡単に言うところこんな感じかな

俺は疲れてないんだが、ふえいとが「やすんだほつかいいよー!」っ

て言ってきたので、俺達はベンチに座って休んでる

ふえいとは、俺の隣に座って俺の腕を抱き締めてる

時間も大分経ったし、そろそろ出発しようと思う

俺は立ち上がり、ふえいとを見た

ふえいとは、顔を傾けて俺を見てきた

・・・無意識でやってるんだから、余計に可愛い

諒「ふえ、ふえいと、そろそろ家に行こうぜ？」

俺がそう言つとふえいと笑顔になった

ふえいと「わかった。はやくいえにいつてかいものしにいこうね！」

ふえいとは笑顔でそう言いながら、俺の腕に抱きついてきた

諒「・・・フェイトファンが「一度でいいから、生でフェイトの笑顔を見てみたい！」つて言つてた理由が漸く分かった。スゲー可愛い！！俺じゃなかったら一発KOなんだな」分かった。じゃあ行こうぜ！」

俺はそう言つて、家に向かつて歩きだした

謎の視線を2人に向けていた少年を残して・・・

ふえいと「おおきいねえ。・・・ねえ、ここがわたしたちのいえ？」

ふえいとは、目の前のマンションを見ながら俺に聞いてきた

諒「嗚呼、このマンションの502号室が俺達の家だ。」

俺がそう言つと、ふえいと俺の右腕をで引つ張ってきた

ふえいと「はやくいこうよ！」

ふえいとは、目を輝かせながら俺に言ってきた

諒「分かった分かった。」

俺はふえいとに引つ張られながらも足をマンションの中に進めた

まず部屋の印象は大きい・広い・綺麗の3つだった

ふえいと「すごーい！！」

ふえいとの目が、さつきより輝いていた
まあ俺も、ふえいとの事は言えないがな
・・・しかし、何故机や冷蔵庫があるんだ？

諒「ん？何だ、これ」

机の上に、文字が書かれた手紙があった

俺はその手紙を取って、読み始めた

諒「え、何々・・・」

『部屋は気に入ったかい？日常に必要な物は一通り揃えておいたよ。後、君達（、、、、）は来週から学校だよ。既に君たちの転入届は出しているから。もう一つ、ふえいとちゃんの名前は、君と同じ新井にしておいたよ。そして、両親は既に他界している設定にしておいたから。遠い親戚の勧めで、コダマタウンに来た設定だから。ただ、服や下着・食べ物送れないからそっちで揃えてね。もし、必要な物が有ったら電話してね。直ぐに送るから。――アフロディより――』

これは助かるな。でも、服と食べ物・下着は送れないのか。・・・よし、なら買いに行くか！」

そうと決まれば、家を探険しているふえいとを呼ばないとなー！！

諒「ふえいと！」

俺が呼ぶと、ふえいとは直ぐに俺の所まで来て抱き付いてきた

ふえいと「どうしたの、りょう？」

ふえいとはまた、顔を傾けて聞いてきた

俺のライフを0にする気か！？

そう心の中でボケながら、ふえいとに言った

諒「ん？今から買い物に行くぞ。」

俺がそう言つと、ふえいとは目をまた輝かせた

ふえいと「りょうー！はやくいこつよー！！」

ふえいとは言つて、俺の左腕を引っ張つてきた

諒「分かったからちよつと待てつて。・・・フォルテ、俺つて今、どれくらい金を持つてるんだ？」

俺は携帯を開け、今一番気にしてる事をフォルテに聞いた

フォルテ「・・・金か？今は3000万携帯に入ってるぞ。」

・
・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

ウン、イマ、スゴイキングガ、キコエタヨウナキガスル

諒「……すまん、もう一度言ってくれないか？」

聞き間違いだ、絶対に聞き間違いだ！！

俺は信じないぞ！！

3000万携帯に入ってるなんて！！

フォルテ「……3000万ゼニーだ」

・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

諒「……すまん、もう一度言ってる？」

ブチッ！！

何かが切れる音がした

フォルテ「だ〜か〜ら、3000万ゼニーだって言ってるだろうがア!!!」

フォルテが遂に切れてしまった!!

・・・これは認めるしかないようだな、嫌だけど

諒「悪かった、フォルテ。・・・それで、さ、3000万ゼニーだな？」

フォルテ「全く・・・嗚呼そうだ、3000万ゼニーだ。これだけあれば、服や下着・食べ物に十分に見える。」

否、十分過ぎる位置えるから

まあ別に良いんだけどさ・・・

諒「・・・まあ行こうか？」

俺がそう言つと、ふえいとが「うん」と笑顔で言ってくれた
そして俺達は、近くのスーパーに向かった

side???

僕は信じてた

“必ず帰ってくる”と言つ言葉を信じて待ってたのに裏切られた
僕はもう誰も信じられない
信じたくない

だから学校にも行っていない
行きたくない

友達を作って裏切られるのが怖い
だから行かない

今日も学校に行っていない
そして展望台に向かった

此処なら誰も居ないし、凄く落ち着ける
でも、今日は違った

今日は、僕と同じ位の歳のオレンジ色の髪をした男の子と、金髪の
女の子がベンチに座っていた

僕は2人にバレない様に隠れた
2人からかなり離れていたから、会話は聞こえなかったが、多分2
人はカップルだろう

僕は疑問に思った

どうしてお互い愛せるのだろうか？

どうして信じ合えるのか？

裏切られるのが怖くないのか？

どうして？

どうして？

どうして？・・・

僕の頭は疑問で一杯になった

そう考えると2人がこっちに向かって歩いてきた

僕は急いで草陰に隠れた

どうして僕は隠れたのだろうか？

・・・分からない

疑問が僕の頭の中を駆け巡った

2人が去った後、僕は2人が座っていたベンチに座った
どうして僕はこのベンチに座ってしまったんだろうか？

他にもベンチはあるのにどうしてだろうか？

ずっとその事を考えていたら、太陽が西の空に沈んでいた
どれくらい考えていたのだろうか？

・・・分らない
なので一度家に帰ろうとした時、誰かがこっちに向かって歩いてき
ていた

side 諒

俺達は今、近くのデパートに来ている

理由はアフロデイのお陰で大半の日常用品は揃っているが、服や下
着・食物は送れないらしいのでデパートに買いに来ている
それに、ふえいとと格好は余りにも不自然な格好なので周りの人か
らかなり変な目で見られる

だから今、女の子の服売場にいるわけだが・・・

諒「フォルテ？」

フォルテ「・・・凄く聞きたくないが、聞いてやる。何だ？」

そ、そこまで言う!？

ま、まあ、今回はフォルテは聞きたくない内容だからしょうがない
けどさ・・・

諒「どうしよう、ふえいとにどの服を着せても似合うんだよ・・・
全部買う訳にはいかないよな?」

俺は、妹とよく買い物に行ったのでファッションセンスには自信がある
だが、ふえいとは流石は美少女と言っべきか、どの服を着ても似合う
だけど、家のおはフォルテに任せてある為は何を買うにもフォルテ
の許可が無いと買えない
・・・やっぱり無理なんだろうなあと思いつながら、ふえいとの所へ
向かおうとする

フォルテ「・・・ハア、今日は大目に見てやるよ。」

・

・

・

・

諒「マジっすか!?!」

俺が大声を出すと、他のお客さん達が俺を痛い子を見る様な目で見
てきた

俺は頭を下げて、誰も居ない階段に移動した

フォルテ「さっきの続きだが、今回は大目に見てやる。だが、次に
来た時は、こんな事は無いからな。」

フォルテは笑いながら俺に言ってきた

俺はフォルテが神様に見えた

まあ本物の神様は、実際に見た事があるんだけどな(笑)

フォルテの許可が出たから、速く買いに行かないとな!!

諒「それじゃあ買いに行ってくるぜ！」

フォルテ「・・・諒、何着買うつもりなんだ？」

俺が買いに行こうとしたら、フォルテが聞いてきた

俺は手に持っていた（此処は突っ込まないでほしい）服を数えた

諒「えーと・・・俺は服が10着・下着は5着、ふえいとは服が15着・下着は10着だぜ。」

・

・

・

・

フォルテ「ハァー。」

フォルテに、呆れた風に溜め息を吐かれた

良いじゃないか、何着買つてもさ！

中1から小学3年まで体が縮んでるから、沢山買わないといけなし！

それに、ふえいとは何を着ても可愛いから全部買おうしたけど、それはダメだなっと思って数をかなり減らしたぞ！！

フォルテ「早く買ってやれ。彼女の服はボロボロだから目立ってる。早く服を買って着せてやれ・・・」

諒「・・・分かったよ。」

俺はそう言っつて、服を持って人が居なかったレジに向かった
そして服を出して値段を合計してもらったら値段が13万6200
ゼニーだった

・・・まあ余裕に買えるけどな

俺は13万6200ゼニー丁度出して、服を袋に詰めてもらったん
だが、1着だけ別の袋に詰めてもらった

そして服を受け取っつてふえいとの所に向かい、その袋を渡した

諒「ふえいと、これに着替えてくれ。」

ふえいと「うん！」

ふえいとは俺から袋を受け取っつて、試着室に入っていった
俺は近くにあったベンチに座っつて、携帯に曲を入れ始めた

この携帯、俺の元の世界の曲などが録れるから、凄く嬉しいぜ

曲を何曲かダウンロードし終わっつたら、誰かが俺の前に立っつた

俺は顔を上げて、誰かを確認した

そこには、黒い長袖の服を来ていて、白いミニスカートをはいてい
たふえいとが居た

ふえいと「ど、どうかな？に、にあっつてるかな？」

ふえいとはその場で一回転して、似合っつてるか聞いてきた
そんなの、確認する必要は無いだろ

諒「嗚呼、凄く似合ってる、否、凄く可愛いぜ！！まさに美少女と
言う言葉がぴったりだな！！」

俺は素直にそう言つと、周りの人から冷やかしの言葉が凄く飛んで
きた

・・・何故だ？

普通に想つた事を言つちやダメなのか？

ふえいと「ありがとう／＼／＼／」

俺が悩んでいると、ふえいとが顔を赤くしてお礼を言ってきた
その顔がまた可愛かったと言っておこう

そしてその後、食材を買い溜めし、家に帰ってる
・・・そうだ

諒「ふえいと、ちょっと展望台に行ってくるわ。」

ふえいと「えー・・・わかった。でも、はやくかえってきてよ
！」

諒「嗚呼、直ぐに帰ってくるからな。」

俺はふえいとにそう言われたので、ふえいとに言いながら頭を撫でた

ふえいと「／＼／＼／＼／」

追記：顔を今まで以上に赤らめていたふえいとは、今日見た顔の中
で一番可愛かった

俺はふえいと別れた後、展望台に向かった

太陽は西に沈みかけていた
もう居ないかもしれないが、アイツ（、、）に話さなければなら
ない事が、少し、否、沢山ある

そう、この世界の主人公の“星河 スバル”に話さないといけない
事が・・・

アイツは、俺達が展望台で休憩していた時に来ていた

だが、アイツは何処にも座らないで俺達をずっと観察していた

何故分かるのかと言うと、白眼でこの町を観察していたら展望台に
向かってくる人が居たので、よく調べたらスバルだった

俺を設定した時代より後の時代に送った奴が居る以上、このまま原
作道理に進める訳にはいかない

俺は展望台の階段を上ると、ベンチに一人の男の子が座っていた

俺はその男の子に話し掛けた

諒「なあ、君、君って星河 スバル君だよな？」

俺に話し掛けられたスバル？は、一瞬びっくりしたが直ぐに答えて
くれた

スバル「・・・はい、そうですけど。」

s i d eスバル

僕は急に、オレンジの髪をした男の子に話し掛けられた

僕は一瞬驚いたけど、相手に質問されて答えないのは悪いので仕方
がなく答えた

よく見たら、この男の子は昼頃にこのベンチに金髪の女の子と一緒に座っていた男の子だった

男の子「そうか、良かったぜ。早速質問したいんだが・・・」

男の子が突然、質問したいと言ってきた

僕は質問されるのが嫌なので、ベンチから立って帰ろうとした

男の子「なんだ、帰るのか？人の話も聞かないなんて、俺の気持ちを裏切るのか？人に裏切ったら裏切り者と言ってくせに、自分がする態度は関係ないのか？矛盾してるぞ、星河 大悟の息子のスバル。」

スバル「!？」

僕は驚いた

今日初めて、僕と会ったのに僕の事を知ってるなんて怪し過ぎるそれに、父さんの事を知ってる

僕は歩くのを止めて、男の子の所に戻った

スバル「ごめんなさい、話を聞かなくて。そうだね、君が言ってることは正論だ。だから話を聞くよ。」

僕はこの男の子から父さんの事を聞く為にそう言った
すると突然、体が言う事を聞かなくなった

第4話 主人公との接触（後書き）

今とてつもなく眠い作者の松上です

諒「ふえいとを甘やかしすぎだと思われてる主人公の諒だ。」

ふえいと「そしてみらいりようとけっこんするつもりのふえいとです！」

いやー今とてつもなく眠い

諒「ちよつと待てー！！今ふえいとの自己紹介にとてつもなくおかしな文があつたのにスルーするの？スルーしちゃうのか！？」

だってみんなはもう絶対そう思ってるし・・・

諒「確かにふえいととは可愛いしやさしいから好きだが結婚は早すぎるだろーが！」

すごいなー、そんな事言うなんて

諒「えっ？・・・！！？う、うわー／／／／／」

よかつたなふえいと

ふえいと「うん！！わたしりょうのおよめさんになるようにがんばる。」

すごいいい子だよな

まだ増えるのに・・・

諒「それは本当か！？」

復活したのか？

大胆プロポーズ野郎

諒「うわー／／／／／／／／／／／」

さて次回予告はふえいとよろしく！

ふえいと「うん！

次回「暗黒デジモンの手下はスバル？ 転生者が起こす奇跡！」

3人「次回もよろしく（な）（ね）！」

第5話 暗黒デジモンの手下はスバル？ 転生者の新たな絆の力（前書き）

予告したとおり2話目です

長い・話の展開が急・ご都合主義の3つがあります！

話が最終回扱いですがまたまだ続きますから

応援してください！

第5話 暗黒デジモンの手下はスバル？ 転生者の新たな絆の力

side 諒

スバルをうまく引き止めた

スバルは大悟の事を聞こうと必死に俺の質問を答えてる

正直この質問はどうでもいい

どれだけ人を信じられるかのテストであって質問自体に意味はない
俺はスバルに真実を告げる

原作が壊れようとスバルはこの時に人助けのすばらしさがわかれば
いずれくるだろうウォーロックを助けるだろう

諒「・・・以上で質問を終わる。今からは大悟のことを話す。」
と言うとスバルの目の色が変わった

スバル「・・・長げーんだよ。てめえーはよ!?」と言うとスバル
は俺の腹を殴ってぶっ飛ばした

ありえない

人の、しかも小学校3年生のパンチが人をぶっ飛ばす力があるなんて
諒「はあ・・・おまえは誰だ!!!・・・はあ・・・」

俺は声を荒げてスバル?に聞いた

スバル?「俺か?俺は星か「嘘を言うな!!!」・・・嘘を言う必要
はないな。俺の名は“デビモン”!星河スバルに取りついているの
は“闇の帝王”の部下だ!」

諒「はあ・・・“闇の帝王”だと?」

聞き慣れない単語を鸚鵡返しに聞いた

デビモン「闇の帝王はお前をこの時代に呼んだ御方だ。」

諒「!?!?」俺は驚いた

こいつの言うことが本当なら闇の帝王は俺たちで言う暗黒のデジモ
ンなのだから

しかも敵は1人じゃなく部下がいるなんて

デビモン「おしゃべりはここまでだ。俺はお前を殺して幹部入りを

してやるぜ！いくぜ！！」

そう言うところから黒いデジヴァイスを取り出した

デビモン「デジビュージョン！！星河スバル×デビモン」

と叫ぶ

そうするとスバルに取りついていたデビモンは黒い球体に包まれた
その姿はまさに

諒「デビモン」

そうまさにデビモンの姿だった

デビモン「まあまあだな。ただガキの体だからそんなに力がだせん
がな。」

諒「お前を倒してスバルを救う！！」そうだ、俺は誰かが悲しむ姿
は見たくない

諒「電波変換！新井諒、オン・エア！」

そう叫ぶと俺は光に包まれた

sideふえいと

おそいよりよう

すぐにかえるっていつてたけど30分もたってる

さびしいよ・・・

りようがないだけでこんなにもさびしいなんて・・・

いつかはわたしもりようをささえたい

ささえられてるばかりではなく

ふえいと「わたしもりようをすくいたい！・・・でもどうすればいいの？」

わたしがそうつぶやくと

????????「ぼくのちからをつかえばいい。」

ふえいと「！？だれ！？」

わたしがへやをみわたすけどだれのすがたもなかった
ふえいと「きのせいかな？」

????????「気のせいじゃないさ。それに僕が見えないのは君の
頭のなかに喋りかけているからさ。」

またきこえた

きのせいじゃない

でもだれもいない

やっぱり頭のなかに喋りかけられているのかな

じゃあわたしもこたえないと

ふえいと「あなたはだれ？わたしはふえいと。」

わたしがそういうと

????????「僕の名前はチンロンモン。君のことは知ってる。な

ぜなら僕は君のなかにいるのだから。」

ふえいと「どういうこと？」

いみがわからなかった

チンロンモン「ここじゃ説明しにくい。一度目を瞑ってくれるかい

？」

と言われた

わたしはめをつむつた

そしてめをあけるとそこにはあおいろのおおきなからだをし、12

このたまがからだのまわりにうかんでいて、まるでかみさまのよう

なすがたをしたりゆうがいた

ふえいと「あなたは？」

わたしがりゆうにきくと

龍「僕がチンロンモンさ。ふえいとちゃん。」

わたしはおどろいた

なぜならわたしはちんろんもんがりゆうなんてかんがえもしなかつ

たから

チンロンモン「驚いているね。でも時間がないんだ。手短に話すね。

君は諒君と戦い力がある。」

わたしはそのことをきいてうれしかった

たしかにおどろいたけど、りょうといつしょにたたかえることがすぐうれしかった

チンロンモン「だけど条件があるんだ・・・」

ふえいと「じょう・・・けん？」

チンロンモン「そう。君は過去のことをほとんど覚えてないだろう？」

たしかにちんろんもんのいうとうりだ

わたしはむかしのことをほとんどおぼえてない

ふえいと「どうしてちんろんもんがそのことをしってるの？」

わたしがきくとちんろんもんはむずかしいかおをしてわたしにいったチンロンモン「どうして君が過去の記憶のほとんどを覚えてないのを知ってるかって？だって君の記憶は僕が消したものだ。」

ふえいと「！？どうしてそんなことをするの！？」
つらかった

むかしのきおくがないのはいじめられていたからとずっとおもってきたから

わたしがそういうとちんろんもんがかなしそうなかおをして

チンロンモン「僕だって本当はしたくなかったさ・・・君の過去はあまりにもつらすぎる。僕は君に封印されてるから君のことを知ってる。このことを覚えていたら君は生きていけなくなる・・・だから君の記憶を消したんだ。」

といった

うれしかった

わたしのためにきおくをけしてくれただ

でもわたしは！

ふえいと「ちんろんもん？どうすればちからをもらえるの？」

わたしはきいた

チンロンモン「君が過去の記憶を受け入れれば力は与えられる。でも君は無理して力を手に入れなくてもいいんだよ！！」

ふえいと「だいじょうぶ！わたしかくごはできてるから。」

チンロンモン「どうして力を手に入れようとする！！諒君のためかい！？」

ふえいと「そうだよ。」

チンロンモン「！？」

わたしのことををきいたちんろんもんはおどろいてた

ふえいと「わたしはいままでひとりだった。まいにちいじめられてつらかった。しにたいなんておもったのもなんかいもあった。」

わたしがはなしだすとちんろんもんはだまってわたしのはなしをきいくれてる

ふえいと「でもしぬのもこわくてしねなかった。そんなまいにちをすごしていた。でもきょうほんとうにしぬっておもった。おおきなあかいくわがたむしがわたしをいじめていたこたちをたおしていたから。わたしはにげようとしたけどけっきょくばれちゃってくわがたむしはわたしをころそうとしてきた。だからわたしはめをつむつた。でもそのときりょうがたすけてくれた。りょうはわたしがいないのを見るとほんきでくわがたむしにおこってくれた。りょうはわたしをしあわせにしてくれるっていつてくれた。だからわたしはりょうのことがすきなわの！りょうといっしょにいたいわの！！わたしりょうとけっこんしたいわの！！！けどりょうはこまってるひとをほつとけない。だからもしかしたらりょうはじぶんをぎせいにしてこまってるひとをたすけるとおもうの。だからもしりょうがいなくなつたらわたしいきていけない！だからわたしはちからがほしい！りょうとたたかうちからが！りょうをまもるちからが！だからおねがいちんろんもん、わたしにちからをちょうだい！！」

わたしはわたしのおもいをちんろんもんにつたえた

チンロンモン「・・・もし、諒君が君を恐怖したらどうする？」
ときいてきた

だけどわたしのこたえはきまつてる！

ふえいと「だいじょうぶ！だつてわたしはりょうのことをしんじて

るもの!!」

チンロンモン「……わかった。僕の負けだ。君に過去の記憶と僕の力を授けよう。」

ふえいと「ありがとう、ちんろんもん。」

チンロンモン「どういたしまして。」

そしてわたしはちんろんもんからこのきおくとちんろんもんのちからをさずかった

side 諒

俺は今防衛に必死だ

実力では俺のほうがずっと上なのだが俺が攻撃しようとするスバルの体に戻りやがるのでこうげきできない

忍術は奴が印を結ばせてくれない

幻術は奴には効かない

体術はスバルの体を傷つけるので無理

イナズマイレブンの必殺技は威力が低すぎる

BLEACHの必殺技及び武器は強力すぎる

デジモンの必殺技が一番いいんだがスバルの意識がはっきりしてないかぎり使うことはできない

どうすればいい……

デビモン「考え事とはずいぶん余裕だな!!」

デビモンの声が聞こえたと思ったら

スポッ!!

左の腹の部分からデビモンの腕が出ていた

諒「(痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいたいいたいいたいいたいいたいいたいイタイイタイイタイイ

タイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイ
タイ・・・)

あまりの痛さに俺は行動ができなかった

初めて敵の攻撃があたった

アフロデイから能力をもらい最強になったつもりだった

だがいくら能力が最強であつても一番戦闘に必要なものが俺にはない

それは“経験”

経験がなければ相手がどのような力があつてどのような戦闘をする
かが予測不能である

俺は油断した俺を呪った

その時俺の体はいつのまにか黒い空間に立っていた

その空間にいるときは転生する前の体になっていた

そして目の前には俺より身長が低く、俺と同じオレンジの髪、そし

てまだ幼さを残す顔の女の子がいた

そして女の子が聞いてきた

「どうして油断したの？」

自分の力に慢心したから

「何故救う力があつたのにしなかったの？」

できないと思つたから

「どうして戦略を練らなかつたの？」

スバルを乗っ取つたデビモンに怒りで考えてなかつた

「どうして能力を貰つたの？」

誰かを救うため

「じゃあ今何をしなければならぬの？」

スバルを救うこと

「じゃあ早く立ち上がつてよお兄ちゃん(、、、、)!!」

ああ、。。。。ごめんな。お前を1人にしちまつて、幸せにしてやる
つて言つたのに。。。。

「うっん、お兄ちゃんに会えて私今すごく幸せだから!!」
でも。。。。

「お兄ちゃん!!」

な、なんだ？

「今お兄ちゃんがしなければならぬのは私に謝ることじゃないでしょ!!それに・・・」

それに？

「アフロディに聞いたよ、私のお願いをかなえてほしいってお願いしたんだよね・・・」

ああ、俺はお前に何もして「違う!!」どうして？

「私お兄ちゃんがいたから今まで頑張れた。お兄ちゃんは私にとって最高だった。確かに私をかばって死んじゃったときはつらかった。でも大丈夫!私はお兄ちゃんのこと・・・だったから生きていく」

何ていったんだ？

「時間だ・・・。頑張つて勝つてねお兄ちゃん!!私ちゃんとした形でお兄ちゃんに言いたいから。」

何を言いたいんだ!!教えてくれ!!

「じゃあ、またあとでね(、、、、、、)」

ティアナーーー!!!!

そして俺の体は展望台に戻っていた

デビモン「死ねーーーーー!!!!!!」

俺はまだ体が反応してない

やられる!?

俺は目をつぶった

しかしいつまでたつてもデビモンのデスクロウのダメージがこない目を開けるとそこには金髪のツインテール、黒を基調とした服、白のミニスカート、そして黒のマントをしていて大きな黒い鎌を女の子がいた

?????「よかった、間に合ったね、チンロンモン。」

チンロンモン「うん。まさか諒君が負けてるなんてね。これは油断しないほうがいいね。フェイト(、、、、、、)。」

諒「!?!」

俺は驚いた

何故なら俺が知ってるふえいとは魔力はなくバルディッシュもないからバリアジャケットもはれないはず

だが彼女は現にバリアジャケットを着ている

しかも彼女の口から“チンロンモン”と言う言葉が飛び出た

彼女はチンロンモンの存在を知らないはず

俺が考えていると

ふえいと? 「無理しないでよ諒。」

と目に涙をためながら言ってきた

諒「本当にふえいとなのか?」

俺は聞いた

自分ではわかってる

この綺麗な金髪

可愛い顔

優しそうな目

俺より少し小さい体

だが聞かなくてはいけなかった

ふえいと? 「ううん、私は生まれ変わったフェイト、フェイト・新

井! 諒の奥さんになる女の子だよ!!!」

諒「どういう事だよ? 生まれ変わったってどういう事だよ? わけわ

かんねえよ。」

フェイト「それはね「デスクロウ!!!」少しは話させてよね!」

そう言うとデビモンの後ろに回り込み手をかざして

フェイト「メガブラスター!!!」

フェイトが叫ぶと手からカプテリモンの必殺技のメガブラスターを出した

デビモン「ぐわーーーーー!!!!!!」

とデビモンが叫びながらぶっ飛んだ

諒「どうしてフェイトがメガブラスターを?」

そう呟く

そうするとフォルテが何かに気付いた

フォルテ「!?!?おい諒!?!誰かが物凄い早さでで向かってきている
!?!あと10秒後だ!?!」

フォルテがそう言ってきたので左の腹の傷口を押さえながら点鎖斬
月を構えた

しかしそこにあらわれたのは俺の唯一の血のつながった人でオレン
ジ色の髪、両腰には2丁の拳銃、服装は“魔法少女リリカルなのは
Strikers”に出てくるあるキャラの服装をしていた

諒「お前・・・」

?????「さつきぶりだね!」

諒「なんでいるんだよ!?!」

俺は認めたくなかった

この世界にいるってことは死んでいるということになる
だから認めたくなかった

?????「だつてお兄ちゃんがない世界は耐えられないもん!?!」

諒「ティアナ・・・!?!?グフツ」

俺は口から血を吐き出した

諒「ゲホツゲホツ」

ティアナ「お兄ちゃん!?!」

俺にティアナが近づいてくる

フェイトも俺の異変に気付きデビモンをマヒにしこっちに近づいて
きた

フェイト「諒!?!大丈夫!?!」

フェイトが聞いてくるが俺は口からも腹からも血を流しているため
答えれない

医療忍術を使えばいいのだが血を流しすぎて手に力が入らない
フォルテは俺の傷を防ぐのに必死なので血には手が回っていない
俺死ぬのかな?

でも死にたくない

そう思いながら俺は意識を失った

side 三人称

諒が気を失ったあとフェイトとティアナは必死に諒を起こそうとしているが諒は目を開けない

しかしそれを隙と見たかデビモンが2人にデスクロウをしようとしたデビモン「そんなにそいつの傍にいたいならすぐに逝かせてやるよ！！」

2人は間に合わないと思い目を瞑った

しかし聞こえた悲鳴は「ぎゃあああああああああああ！！！！！！」
「デビモンの声だった

しかもデビモンは右腕がスバルのものになっていた

2人は目を開けるとそこにはオレンジの髪で2枚の天使の羽と氷の羽が背中からはえており、左手には氷の龍の頭になっており服装は世宇子中学のようなものを着ていた男の子がいた

フェイト「諒・・・なの？」

フェイト男の子に聞いた

男の子「悪かったな心配かけて。だが安心しろ！すぐに終わらせる、質問はそのあとだ！！いいな！？」

諒がそう言うと2人が頷いた

諒「ありがとな、5分で終わらせる！」

諒はそう言いデビモンに近づいた

side フェイト

心配した

諒が死んじゃったと思った

私の隣にいる女の子もきつと諒のことが好きだ

諒はこの子のことを知っていた

だからこの戦いが終わったら絶対聞いてやるんだから

side ティアナ

よかった

お兄ちゃんは生きてた

お兄ちゃんが気を失ったとき隣にいる女の子も心配していた

この子・・・よく見ると“リリカルなのは”のヒロインのフェイト
よね

やっぱりアフロディの言う通り)、)、)、)、)、)、)、)、)、)、)、)、) 世界が合
体しているんだね

この子いい目してる

お兄ちゃんの魅力に気付くなんて・・・

この子ならお兄ちゃんと私とこの子と一緒になら!!

この戦いが終わったらお兄ちゃんに聞いてみよ

side 諒

俺は気を失うと白い空間にいた

諒「俺って死んじゃまったのかな？」

と呟くと「違うよ(わ)」と言う声が聞こえた

諒「誰だ!？」

俺は声を荒げて言った

「????「久しぶりだね・・・諒」

「????「大きくなって私たちがうれしいわ。」

後ろから声が聞こえたので振り向いた

そこにいたのは20代くらいの男女の2人組で男の方は見た感じ武装錬金の武藤カズキで女の方は見た感じONEPIECEのナミのような感じだった

諒「父さんに・・・母さんなのか？」

そう2人は俺の両親に似ていた

「????「そうだ(ね)。」

その言葉を聞いた瞬間俺は喜んだ

2人は俺が小学校3年のころに事故で死んでいる

なので実際4年も会っていないので再会するのは嬉しい

父さん「時間ない。用件だけ言うぞ。」

諒「時間がない？用件？」

俺は何を言ってるかわからなかった

母さん「実は私たちはアフロディの力で今ここにいられる。でも時間が限られてるの。だから用件だけ言うわ。」

母さんが補足してくれてようやく理解した

またアフロディに借りができちまったなと思った

父さん「お前に新しい力を与える。」

諒「新しい力？」

父さん「そうだ。お前にしか使えない力だ。」

諒「俺にしか使えない力？」

母さん「そう。あなたはいつも自分より他人の幸せを望んだ。私たちが死んだあともめげずにティアナを大切にしてくれた。血が繋がらないのに(、、、、、、)あなたは本当の妹のようにしてくれた。だから私たちがあなたが死んだとき最高神に頼んだの。」

諒「何を？」

父さん「お前が誰かを守りたいと言う気持ちが強ければ強いほどお前の能力を強くするよう頼んだんだ。」

母さん「だからクワガーモンの時もフェイトちゃんを守りたい気持ちが強かったから相手の動きが読めたの。」

フォルテ「そうか！だからあの時諒の動きがよかったか。」

俺はその言葉に驚いた

諒「あの時はフォルテがサポートしてくれたんじゃなかったのか？」

フォルテ「いや、俺はあの時は殆どサポートしてなかった。だから

お前は初心者なのにあんな戦いができたのか。」

諒「じゃああの戦いができたのは父さんたちのおかげだったのか・

・

父さん「諒！！」

父さんが俺の名を叫んだ

父さんを見ると父さんの足が消えていった

諒「父さん！！足が消えてる。母さん！！父さんの足が・・・！？」

母さんの方を見ると母さんの足も消えていた

諒「父さん！！母さん！！」

俺は驚いていた

父さん「大丈夫。ただの時間切れだから気にすんな。」

父さんはそう言うのが心配しないわけにはいかない

諒「でも！！」

母さん「諒。」

諒「母さん。」

母さん「私たちは天国であなたたちのことを見守ってる。ただ忘れないで。あなたは私たちの自慢の“息子”よ。だから頑張ってね！！」

俺はその言葉を聞いて泣いてしまった

父さん「諒。お前は強い。それは認める。だが人を頼ってもいい時は頼れ！娘を幸せな嫁にしてくれよ。それから奥さんはたくさんいてもいい。俺は認める。あと子供は3人くらいがいいぞ。」

諒「父さん！！前半はいい事言ってるけど後半すごいこと認めてるよ。／／／／／」

まったく泣いてしまった俺が恥ずかしい

父さん「はは。まだまだお前も小さいな。・・・頑張れよ。」

父さん「あなたは最高の息子よ。例え血が繋がってなくても私たちは家族よ。あなたは自分の夢をめざして。あなたは一人じゃないから。」

母さん・・・

父さん「さあ行ってこい。俺たちの息子よ!!」

母さん「頑張つてね!!」

諒「父さん、母さん。行ってきます!!」

父さん・母さん「いつてらっしやい!!」

そして俺は目を覚ますとデビモンが2人にデスクロウをしようとしていた

俺は2人を守りたかった

そしたら俺の頭の中に何かのプログラムが流れてくる

フォルテ「クロスシステム送信完了!! エンジェモン×大紅蓮氷輪丸×アフロデイ!! クロスヒュージョン!!」

そして俺はヘブンスタイムを使い2人の前に行き右手にエネルギーを溜めてデビモンに放った

諒「ヘブンスナックル!!!」

そしてヘブンスタイムを解く

そうするとデビモンは叫びながらぶっ飛んだ

ヘブンスナックルを受けた右手はスバルのものになっていた

フェイト「諒・・・なの?」と聞いてきた

まあそりやそうだろ

さっきまで後ろにいたのに急に目の前に現われて自分達を救ってくれたのだから

だが質問されてる時間はない

早くスバルを救ってやらないといけないからな

諒「悪かったな心配かけて。だが安心しろ! すぐに終わらせる、質

問はそのあとだ！！いいな！？」

と言うと2人は頷いてくれた

だから俺は素直にお礼を言った

諒「ありがとな、5分で終わらせる！」

そして俺は飛びながらデビモンに近づいた

第5話 暗黒デジモンの手下はスバル？ 転生者の新たな絆の力（後書き）

今睡魔と闘ってる作者の松上です！

諒「今デビモンと闘ってる主人公の諒だ。」

ティアナ「今お兄ちゃんに対する性欲と闘ってる新井ティアナです！」

諒「待て待て待て待て！！！！お前まで何言ってるんだよ！！」

ティアナ「だって私はお兄ちゃんと結婚してあんなことやこんなことをするのが夢なの！！」

諒「な、何言ってるんだ！！俺たちは兄妹なんだから結婚はできないじゃないか！！／／／／／」

しかし今回の話でお前たちは血の繋がらない兄妹で親も認めてるから結婚もできるぞ。というかさせるし！！

2人「本当か（なの）！？」

ああ、ただまだあと2人増えるけどいいか？

ティアナ「全然OK！！お兄ちゃんの魅力がわかる子ならOKだからさ！！」

諒「何ネタバラしてんだよ！！って言うか一夫多妻制かよ／／／／／」

そうだぞ

諒「そんな・・・ort」

さて主人公があんなんだからティアナ次回予告よろしく！！

ティアナ「うん！！」

次回 転生者の友情？フェイトの願いはかなりやばい！！」

2人「それじゃあー次回までさよならー」

諒「一夫多妻制なんてort」

第6話 転生者の友情？ フェイトの願いはかなりやばい（前書き）

話の内容がバラバラ

本当にすいませんでした……………!!!

フッフッフ

マツテイロ

カナラズコノセカイヲアンコクノセカイニソメテヤル
マツテイロ！！アライリヨウ！！
ワタシハクロイクウカンデサケンダ

side 諒

あの戦いが終わったあと俺はフェイトとティアナに抱きつかれ「心配させないでよ！！」と言われた

まあ一度死んでしまつて父さんたちに生き返らせてもらったからなだから俺は二人の頭を撫でた
そうすると

フェイト「／／／／／／／／／／」

ティアナ「やっぱりお兄ちゃん優しいよ／／／／／／／／／／」と顔を赤くした

そしたらスバルが起き上がった

スバル「ここは？」

諒「よう！目が覚めたか？」

俺は頭を撫でるのをやめスバルの方へむかった

もちろん電波変換は解いてるぜ

ただ頭を撫でられていた2人は残念そうだった

スバルは俺を見たら顔からすごい汗があふれていた

俺はスバルに声をかけようとしたが「ごめんなさい！！」頭を下げられ謝られた

諒「どうしたんだよ、急に？」

俺はスバルに謝られることなんかしてないぞ

スバル「僕デビモンっていう悪魔に乗っ取られていたとき意識はあ

つたんだ。」

そうか、だから謝ってるのか

諒「いいよ、気にしなくて。だってあれはデビ「違うんだ!!!」・・・
・どういう意味だ?」どう違うのかわからなかった

スバル「僕、戦わなかったんだ。君が腕で貫かれても、女の子達が
殺されそうになっても、僕は戦えなかった。僕が頑張れば3人を救
えたのかもしれないのに、僕は・・・」

そうか

自分がデビモンを体の外に出せば俺が傷つかなかったし、2人が死
にそうにもなかった

そういうことか

諒「スバル!!!」

スバル「!?!」

俺に名を呼ばれ驚いたが真剣な顔をした

諒「俺が言う条件を呑んだら許してやる!!!」

スバル「条件・・・」

諒「・・・その条件は・・・」 “俺と友達になることだ”

!!!」

スバル「えっ?」

スバルがわけわかんないよって顔をしている

諒「いいか!!!俺はお前と友達になりたいんだ!!!そんな奴に罰を
与えたら一生友達になれない、俺はお前と友達になりたいからお前
に話し掛けた、お前を救った!!!いいじゃないか別に、俺の体に傷
を付けようと。友達には喧嘩もする。そんなとき殴りあいだっ
てするかもしれないその時怪我しないなんてありえない。そして次
の日には仲直りしている。これが友達だ!!!」

スバル「いいの、僕なんかで?僕は父さんが死んで引きこもりだし、
人を信じられないし・・・そんな僕なんかでいいの?」

スバルが不安そうに聞いてきた

諒「いい!!!友達になるのに今の状況とか関係ない!だから俺と友

達になろう！俺は新井諒、小学校3年だ。」

俺が右手を出す

そうするとスバルは泣きながら俺の右手をつかんだ

スバル「僕は星川スバル、コダマ小学校3年。よろしくね諒君！」

諒「ああ、よろしくなスバル！」

こうして俺はスバルと友達になった

スバル「諒君、僕とブラザーになつてくれない？」

と言ってきた

マジかよ、スバルの初めてのブラザーがミソラじゃなくて俺かよ

まあいいか、スバルが言ってきたんだ

それを断る理由はない

諒「ああ、いいぜ！！」そして俺はスバルとブラザーバンドを結んだ

???「絆エネルギー確認！絆エネルギーによりLEVEL4解放

！！」

またあの声が聞こえた

だが別にどうだっていい

俺はみんなを守るから

スバル「！？ご、ごめん！！用事を思い出したから僕帰るね！！じ

やあね！！！」

諒「お、おい。行っちゃった。何かに怯えてたけど俺の後ろに何か

あるのか？」

そういつて振り返った

いや、振り返ってしまった

フェイト「話が長すぎるよ、諒。」

ティアナ「私達抜きで盛り上がるなんてずるいよ、お兄ちゃん。」

そう言う2人がいた

本能が叫んでる

2人に逆らうなと

逆らえば死んでしまう

スバルはこれを見て帰ったのか？

教えてくれたっていいじゃないか！

そう思ってるよ携帯がなかった

スバルからだ

『明日、お見舞いに行くね。』

死亡フラグたつたな

だが死にたくない

一か八か試してやるぜ！！

諒「ごめん！！今日一緒に寝てやるから許してくれ！！」

頭を下げながら言うよ

フェイト「一緒に・・・ついに私達・・・でも私達はまだ子供だし

・・・でも諒がそう言うなら・・・うんいいよ！！！！！！！！！！

ティアナ「そんな・・・私達兄妹だよ・・・でもお兄ちゃんなら

・・・うんOKだよ！！！！！！！！！！

顔を真っ赤にして二人は許してくれた

ただ最初の方は小さすぎて何言ってるかわからなかったが・・・

そして俺たちは家に帰った

諒「えー、自分がどうなったか話す会議を始めます。」

2人「いえーい。」

何してるかって？

自分の力とか話し合うんだよ

諒「簡単にまとめてくださいね。作者が死んじゃうから。」

フェイト「諒、メタ発言禁止だよ！」

諒「ああ、悪かった。えーまずティアナからな？」

俺がティアナに言う

ティアナ「うん。まず私は新井ティアナ。お兄ちゃんのおY「妹だ」

むうー。で私が何でこの世界にいるかというと私はお兄ちゃんが死

んじゃって目の前が真っ暗になったの。それでお兄ちゃんと一緒に

に居たいって心の中で願ったの。そしたらアフロディっていう神様

が私をお兄ちゃんのいる世界につれていってくれるって言ったの。でも私は死んでないからアフロディから力はもらえなかったけどお兄ちゃんと一緒にいるのに力はいらなかったからすぐにこの世界に送ってもらったの。でも送ってもらった時はお兄ちゃんが来る4年前で四聖獣のうち3体は封印されていたの。周りは火の海。安全な場所を探した。歩いていたら目の前に大きな狼のようなデジモンがいたの。」

諒「それって・・・」

ティアナ「うん、お兄ちゃんの思っているとおり。バイフーモンだったの。でもバイフーモンは今にも死にそうで助けてあげたかった。でも周りは火の海で手当てする道具もない。でもバイフーモンを助ける方法が1つあったの。」

諒「それは？」

ティアナ「それはバイフーモンを私のなかに封印すること。」

諒「!？」

ティアナ「封印の仕方はバイフーモンが教えてくれて封印はできた。でも四聖獣の残りね3体は無理矢理封印させられたみたいだけど・・・」

諒「じゃあお前に力があるのは・・・」

ティアナ「バイフーモンのおかげ。そして頑張って特訓して強くなった。そして今日お兄ちゃんの力を感じてあそこにあらわれたわけ。これで私の話は終わるわ。」

フェイト「質問です！」

ティアナ「何？」

フェイト「諒が死んだとか、アフロディがどうか意味がわからな
いんだけど・・・」

そう、フェイトにはまだ話してない

だから俺が話さなければならぬ

諒「俺が説明するよ、フェイト。」

そして俺は話した

俺は一度死んでること

転生してこの世界に来たこと

アフロディから力をもらったこと

俺が来たせいで世界がいくつか合体してこの世界が生まれたこと
父さんと母さんにもらった力を

すべて話した

諒「・・・以上が俺たちの秘密だ。」

嫌われてもかまわない

それだけ俺はこの世界に不幸をもたらしたのだから

フェイト「私も話すね、過去のこと。」

諒「過去の記憶を思い出したのか？」

フェイト「うん、チンロンモンからすべて聞いた。」

諒「チンロンモンから？」

????????「うん、僕が彼女のすべてを話した。」

諒「誰だ!？」

突然声が聞こえたので大声を出して聞いた

フェイト「落ち着いて、この声はチンロンモンだから。」

諒「本当か？」

フェイト「うん、チンロンモン。」

そついうとポケットから蒼いデジヴァイスを取り出した

諒「それは!？」

それはフェイトが持っているとはいけないものだった

その画面からチンロンモンがあらわれた

チンロンモン「まずは自己紹介だ。僕の名前はチンロンモン。デジ
タルワー「知ってるよ。」・・・そうかい。なら早い。僕がフェイト

に力を与えた。そして力を受け取る条件は過去の記憶を受け取るこ
と。」

諒「!？じゃあ記憶を受け取ったのかフェイト？」

フェイト「うん。」

諒「それで大丈夫だったか？辛くなかったか？悲しくなかったか？」

俺は心配だった

フェイトの過去は絶対悲しいと思った

だから俺は聞いた

フェイト「・・・確かに辛かった。一度暴走してお母さんを殺しちゃった過去も思い出した。」

諒「！？どうしてそんな過去を思い出させたんだ？チンロンモン！」

チンロンモン「・・・それが力を得るための条件だったんだ。」

諒「だからといってそんな過去を思い出さなくてもよかったんじゃないのか！？」

フェイト「やめて、諒！！私は思い出してよかったと思ってるよ。」
その言葉を聞いて耳を疑った

なぜ、悲しい過去を思い出してよかったのか？

辛くないのか？

そんなことを思っているとフェイトが口を開いた

フェイト「・・・確かに辛かったよ。いやな思い出が多かった。でも楽しい思い出もたくさん会った。お母さんと笑った日々は私にとって宝物なの。だから今お母さんに言える。私は今までは辛かった。でも、もう大丈夫。だって今とっても優しい人というからって。」

諒「えっ！？」

俺は驚いた

嫌われる言葉を言われるどころか誉める言葉を言われた

諒「なんで、俺が来た所為でこの世界にデジモンが来たんだぜ。それがどうしてすごいんだ？」

わからなかった

俺がこなければフェイトはリリカルなのは世界で幸せに暮らせたはずなのに・・・

フェイト「だって諒は自分よりティアナを守ったんでしょ？それに転生してもなお人を助けようとする。すごいよ。」

諒「でもそのせいでフェイトはいじめられていたんだぜ。」

そう、俺が来た所為で闇の帝王にチンロンモンを封印されいじめられていた

だから誉められる義務はある分けない

フェイト「でもそのおかげで諒に会えた。諒は私に初めて優しくしてくれた男の子。強くて、いつも私のことを気にしてくれて。確かにまだ会ってそんなに経ってないけどこの気持ちに嘘はつきたくない！！だから伝えるね、私の気持ち！」

フェイトの・・・気持ち？

フェイト「私は諒のことが好きです！いつまでも一緒に居たい！だから私と結婚してください！！」

諒「う、嘘だろ？」

フェイト「本当。私は諒とずっと一緒に居たい。」

突然の告白に俺の頭はついていってない

ティアナ「そうか、フェイトちゃんもお兄ちゃんのこと好きだったんだね。」

諒「フェイト“も”？」

やばい、聞き間違えであってほしい

ティアナ「お兄ちゃん！私もお兄ちゃんのこと好き！だからお兄ちゃんとフェイトちゃんと私で幸せな家庭を築こう！！」

ここに来て一夫多妻制了承されたよ

フェイト「それはいいね。でもあと2人までだね。諒、私頑張るね。」

なんか話がどんどん進んでるぞ

だがいいのか？こんな俺なんかで

諒「いいのか？俺なんかで？」

と聞くと

2人「私は諒（お兄ちゃん）以外考えられない。諒とずーと一緒に居たい！！」

と言われた

こんなにも俺は好かれていたのか

ならこいつらと幸せに暮らしたいな

諒「ありがとうな、2人共。絶対2人を幸せにしてやる！こんな俺でよければ結婚してください！！」

と言うと

2人「よろこんで！！」

と言って抱きついてきた

諒「ありがとな。絶対幸せにしてやる！」

フェイト「でもあと2人までならいいよ、諒。」

諒「なっ！／＼／＼／」

ティアナ「うん、お兄ちゃんの魅力のわかる子に悪い子はいないから。」

とあと2人までならOKと言われた

父さん・・・

一夫多妻制認めてくれてありがとな

フェイト「ちゃんと一緒に寝てよね。」

あっ

ティアナ「今日は寝れない夜になるね、お兄ちゃん！！」

俺の理性

頑張ってくれ！！

sideスバル

スバル「明日諒君の家にいかないかね。」

???「スバル、諒君って誰なの？」

スバル「うわっ！！」

???「スバル驚きすぎよ。」

スバル「誰だつて後ろから急に話し掛けられたら驚くよ、母さん。」
母さん「そう？それより諒君って誰？新しい友達？」

スバル「うん、僕の友達で僕の最初のブラザーなんだ。」
母さん「そう、明日諒君の家に行くの？」
スバル「うん。」
母さん「じゃあ、お土産を持っていかないかね。だから早くお風呂入って寝なさい。」
スバル「うん！」
母さんに言われお風呂に行った

sideアカネ

まさかスバルに友達にができてブラザーバンドまで・・・
諒君って言ってたわね

今度お茶にでも誘ってみましようか？
安心してね、大悟さん
スバルは生まれ変わったわ
見守ってあげてくださいね・・・

余談

諒は無事寝ることができた
やましいことはしてないぞ・・・
たぶん

第6話 転生者の友情？ フェイトの願いはかなりやばい（後書き）

自分の文才力のなさを呪ってる作者の松上です

諒「こんな話にした作者を呪っている諒だ。」

だってしょうがないじゃん

俺文才力ないし！！

こんな話になるのは必然だし！！

諒「必然じゃねえーよ！！やばかったぞ！！理性があと少しで切れ

そうだったぞ！！」

で、どうだった2人は

諒「いやーすんげえ可愛かったぞ。しかも寝言で「諒（お兄ちゃん）

大好き」って言われたとき俺死にかけた。あれが一番理性に大きな

ダメージを与えたな。うんうん。」

このリア充が！！

諒「うるせえー！そんなことはあとにして次回予告だ！！」

そうだな。今回はキャラ設定を書こうかな

諒「またすんのか？」

いやお前の新しい力やフェイト、ティアナのことも書かないと

諒「わかった。で、原作はいつ始まるわけ？」

いや、まだお前の嫁をこの原作始まる前までに登場させてから原作

スタートしたい

諒「じゃあまだまだだな。」

ああ、皆さんもこんな作者を応援してください

諒「感想とかも待つてるぜ。」

それじゃ

諒「次回を」

2人「お楽しみにー」

ああそうだ。次回から後書きだけ出演する人出てくるから

諒「それを今言うなよ！！」

キャラ設定パート2（前書き）

予告したとおりキャラ設定

あと後書き専用キャラが出ますのでよろしく！

キャラ設定パート2

主人公

名前：新井諒あらいじりょう

性別：男

年齢：9才

能力：前に書いたのでそれを読んでください

クロスシステム
新能力クロスヒュージョン：今まで一つの力しか使えなかったが諒

の頑張りに諒の父親と母親が最高神に頼み授かった力

誰かを守りたい心や絆力が高ければ高いほどクロスできる力が增える

今のLEVELは4

電波変換後の容姿：フォルテクロスロツクマンで胸のマークがフォ

ルテのもの、茶色のマントを羽織っており、右手に天鎖斬月を持つ

ている

身長：135cm

体重：35kg

家族：ティアナと死んだ両親とは血が繋がってない

しかしそんなことは気にしなくティアナは本当の妹のように思っ

ていた

家事スキル：すべての家事ができ、料理も3星レストラン並み

服を1から作ることも可能だが時間がなかったためあまり転生前で

は作らなかった

備考：スバルの母親とはお茶会の友達

主人公の相棒

フォルテ

能力：武器転送、敵にあったクロスヒュージョンのチョイス、ブラ

ザーバンドの契約

その他は前と同様

性格：諒に影響されかなり原作とは違い友好的、諒の頼みは嫌々言
いながらやってくれる頼もしい相棒

電話帳に登録されている人：フェイト、ティアナ、アフロディ、ス
バル、スバルの母親、父親、母親

備考：諒の父親と母親の電話番号はアフロディに頼み聞いた
週末には一回電話する

また、スバルの母親とはスバルを孤独から救ってくれた恩人として
家に呼んだら意気投合して携帯の番号を教えあった

フェイト・新井

性別：女

容姿：魔法少女リリカルなのはに出てくるフェイト・テストロッサ
年齢：9才

性格：冷静沈着だが諒のことを見るとすぐに抱きつきに行くので諒
を困らせてる

しかもかなり天然

身長：130cm

体重：28kg

能力：雷を使う力があり雷系の技をすべて使える

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはに出てくるフェイトの
バリアジャケットをそのままにしたイメージ

備考：諒の将来の嫁で1人部屋をもらったが夜ティアナと一緒に諒
の布団に潜り込むため毎朝諒の悲鳴で朝を起きる、またチンロンモ
ンの人柱力

フェイトの相棒

チンロンモン

待機状態：蒼いデジヴァイス

能力：ブラザーバンドの契約、電話、メール、フェイトのバトルの
アシスト

性格：かなり優しいし落ち着きがある
備考：フェイトの過去を知ってなお普通に接してくれる諒とティアナに大きな感謝をしている

新井ティアナ

性別：女

容姿：魔法少女リリカルなのはStrikerSに出てくるティアナ・ランスターを小さく、幼くした姿
年齢：9才

性格：かなりのブラコン、しかもかなりHなことを知っており諒にさせようとして困らせていて諒の一夫多妻制を認めているが4人までと決めている、そのうちの2人はフェイトと自分である

身長：128cm

体重：25kg

能力：風の力が使え風系の技がすべて使える

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはStrikerSに出てくるティアナのバリアジャケットをそのままにしたイメージ

備考：自らバイフーモンの人柱力になり力を得た、またフェイトと一緒に1人部屋があるが、夜にはフェイトと一緒に諒の布団に入り諒を困らせている

ティアナの相棒

バイフーモン

待機状態：白のデジヴァイス

備考：まだ謎があるデジモン

4年前に起こった四聖獣封印計画(、、、、、、)にいち早く気付き闇の帝王に挑んだが瀕死にされた

そこに偶然ティアナが通りかかりティアナに封印された

封印される際、最後の力を振り絞りティアナに力を与えた

今はずっと眠っており体を癒してる

主人公に救われた主人公

星河スバル

性別：男

容姿：原作のスバルを小さくした姿

年齢：9才

性格：原作とは違いこの時から人との絆の大切さを知っている
だがまだ学校には行っていない

身長：133.5cm

体重：32.7kg

備考：学校には行っていないが諒に勉強を教えてもらってるのでか
なり頭は賢い、特に理科が・・・

キャラ設定パート2（後書き）

今回は結構いいできだと思ってる作者の松上です

諒「今回もまあまあだなと思ってる主人公の諒だ。」

????「みなさん初めまして。後書き専用キャラのすずかです。」

今回からよろしくね、すずか

すずか「はい、がんばります。」

諒「容姿は見たまんま魔法少女リリカルなのはの月村すずかだ。」

この子めっちゃしつかりしてる！

誰かと違って・・・

諒「悪かったな、しつかりしてなくて。」

しかしどうだった、今回のキャラ設定は？

諒「まあまあだな。」

すずか「松上君は頑張ったよ！」

ありがとう、君だけだよ俺を誉めてくれるのは

諒「・・・なあすずか？」

すずか「はい？」

諒「何で作者のことを君付けするんだ？」

すずか「だって松上君は・・・」

俺は高1だけ

諒「何！？本当か？」

ああ、だから一昨日合宿行つてて更新できなかつたんだよ

諒「そうだったのか・・・」

すずか「松上君はすごく頑張つてかつこいいよー!!」

ありがとうすずか！

好きだ！！愛してるぞ！！

すずか「えっ／＼／＼／＼／」

諒「（フラグが立ったな。）・・・それより作者次回予告は？」

ああ、そうだったな

すずか頼むぜ

すずか「はい

次回 3人目の人柱力登場！！

お前はしっかり生きなきゃならね

え！！！」

それじゃ

諒「みんな」

すずか「次回を」

3人「お楽しみにー！」

第7話 3人目の人柱力登場！！ お前はしっかり生きなきゃならねえ！！（前

すいません！予告した題名と違って

ただあの題名だとこの話にあわなくて

本当にすいませんでした！！！！

只ちゃんと書きなおしてるので・・・

第7話 3人目の人柱力登場！！ お前はしっかり生きなきゃならねえ！！

side 諒

PPPPPP！！

目覚ましがなった

時刻は午前5時

昨日寝たのは12時前

なぜそんなに遅くに寝たかという原因がある

その原因はというと

フェイト「すうー・・・すうー・・・」

ティアナ「すう・・・すう・・・すう・・・」

そう、原因はフェイトとティアナだ

昨日2人と寝ると約束したので寝たのだが2人が寝る時俺にしがみついていた

しかもパジャマなので2人の体温が直に伝わってきた

それに2人が時々寝言で「諒（お兄ちゃん）大好き・・・」と言っ

てきたので興奮して寝れなかった

なら何故こんなに早く起きたかというと昨日の戦闘だ

昨日のデビモン戦は経験の差で負けてしまった

だから修業しなければならぬ

そして俺は2人の抱き枕状態から抜け出し昨日買った黒のジャージに着替え展望台に向かった

やはりまだ日が昇ってそんなに時間が経っていないので人が全然いない

そんなことを思いながら準備体操をしようとした

そしたら展望台のベンチに誰かがいた

俺は近付き声をかけた

side???

ウチは辛かった

親が交通事故で入院しているのに誰も力を貸してくれへん

しかもみんなウチのこと化けもんって言っし

化け物の親にやるもんはないとか言われたこともあった

たしかにウチには………が封印されてるけど化け物とちゃうでもウチは頑張った

はよ親によくなってもらおうと頑張った

やけど今日親が死んだ

ついにウチは1人になってもうた

淋しかった

やから病院を抜け出して近くの展望台に来た

やっぱりまだ朝早いから誰もおれへんかった

ベンチに座ってポーツとしてると誰かが階段を上る音が聞こえた

ウチは階段の方に目を向けるとウチとそない変わらん年で黒のジャ

ージを来たオレンジ色の髪をした男の子やった

その男の子が準備体操しようとする視線に気付きこっちにやってきた

side 諒

俺はベンチに座っている女の子に話し掛けた

諒「よう。どうしたんだ、こんなに朝早くから?」

???「そりゃこっちの台詞や。何でこんなに朝早くからここに来たんや?」

と質問したのに質問された

諒「俺か?俺はトレーニングしに来た。」

「????」「トレーニング?」

諒「ああ、大切な人たちを守るために自分を鍛えようと思ってな。君は?」

と質問すると女の子が暗い顔をした

諒「何かあったのか?俺でよければ相談に乗るぜ。」と言う

しかし女の子は顔を横に振る

「????」「ええよ、別に。そない大したことじゃないしな。」

と明か無理に笑っている表情をした

諒「大したことじゃなかったらどうしてそんなに辛そうなんだ?」

「????」「!?全然辛くないで。やから気にせんといて。」

と一瞬驚き俺の言葉を否定する

しかし目には涙がたまっていた

だから俺は女の子を優しく抱き締めた

「????」「な、なにするんや!?恥ずかしいからやめてーな。」

しかし俺は離れない

諒「目に涙をためるほど辛いことがあったんだろ?なのに泣かないのはもつと辛い。だから今しつかり泣いとけ。今の時間帯なら人は寝てる。しかもここにはほとんど人が来ない。だから安心して泣け。俺が泣き止むまでいてやるよ。」

俺がそう言うと女の子が「ええの?迷惑とちゃう?」と聞いてきた

諒「迷惑なもんか、目の前で辛い思いをした女の子がいるのに助けないわけにはいかねえーよ。」

そう言うと女の子は泣きだした

「????」「きょう、おやがしんでん。ウチつらかったん。ウチがばけもんやからだれもたすけてくれへん。つらかった。こわかったよ・
・うわああああああん!!!!!!」

俺は女の子を抱き締めながら右手で髪を撫でた

諒「辛かったな。だが安心しろ。俺がお前を助けてやる。お前は化け物じゃねえ。だから今は気のすむまで泣けばいい。」

「????」「うわああああああん!!!!!!」

俺は女の子が泣き止むまで彼女の傍にいた

そして女の子が泣き止んで「ごめんな、服汚してもうて。」と言ってきた

諒「いいよ、別に。美少女の涙で汚れるなんてうれしいことだよ。」
「???」「美少女なんてそんな／＼／＼／＼」
と顔を赤らめて言ってきた

諒「また自己紹介がまだだったな。俺は新井諒。小学3年だ。」
「???」「ウチは八神はやて。平仮名ではやてや。ウチも小学3年や。」

「
諒「いい名前だな。」

はやて「そ、そうか?／＼／＼／＼」

諒「ああ、はやてにぴったりの名前だな。」

はやて「あ、ありがとうな。／＼／＼／＼」

と顔を真っ赤にしながら言ってきた

諒「で、はやて?」

はやて「ん、なんや?」

諒「はやてが化け物ってどういうことだ?」

side はやて

諒君がウチが化けもんってどういうことって聞いてた

諒君には知られたくなかったんやけど

でも話したほうがええよな・・・

でも、もし諒君に嫌われたらどうしよ・・・

ウチはどうしたらええねん!?

side 諒

俺が質問するとはやては体が震えていた

諒「(そこまで話しづらいのか・・・)はやて。」

俺がはやての名を呼ぶ

はやて「な、なんや？」

やはりまだ震えていた

諒「俺の秘密を話してやるよ。」

はやて「諒君の・・・秘密？」俺の秘密を話せばはやての心も楽になるだろう

秘密を話して軽蔑されてもかまわない

はやてがそれで幸せになるならな・・・

side はやて

ウチが悩んでると諒君が自分の秘密を話してくれるって言ってきた

諒君はどうしてウチのためにそこまでするんやろか？

ウチが泣いたときもずっと抱き締めてくれて髪を撫でてくれとったし／／／／／

諒君の事思うと胸が熱い

あかん、ウチ諒君に・・・

そないなこと思ってたら諒君が話してくれた

諒「・・・俺、一度死んでんだ。」

えっ!？

な、何言つてんねん

諒君が一度死んでる？

そないなことがあるわけないやん

諒「はやては“転生”って言葉聞いたことないか？」

転生？

はやて「えつと、確か死すべき時ではない人間が新たな命をもらい違う世界で暮らす事やる？」

確か前に本で読んだことがあつたような？

諒「そうだ、俺はその転生者だ。」

はやて「！？」

ウチは驚いた

いや、驚き以外の感情が出てこうへんかった

諒「俺さ、転生する前はさ普通の中学生だったんだ。まあ、両親は早くに交通事故で亡くなつたけどな。」

はやて「そ、そんな。」

諒君の言ってることが本当やったらウチと同じ人間やん

諒「でさ、俺にはさ妹が居たんだ。血の繋がらない。」

血の繋がらない？

はやて「それって親の再婚相手の娘か？」

ウチは聞いた

聞いたらあかん事を聞いてしもうた

諒「・・・いや、俺の本当の両親は幼稚園の頃通り魔に殺されて死んだんだ。」

はやて「！？」

諒「俺、まだガキだったからよ。一人で生きていけないだろ？だから親父の親友の家族に養子として入つたんだ。」

じゃあ諒君は本当の両親も第2の両親も亡くなつたんか

そんなん辛すぎるで

諒「で、第2の両親も俺と妹を残して死んじゃったんだ。」

はやて「り、諒君は辛くなかつんか？」

何バカなことを聞いてんねんウチは！

そんなん辛いに決まつてるやんか

諒「確かに辛かったさ。でも俺が折れると妹はどうやって生きていける？両親が死んだって事も知らないのに。だから俺は泣かなかつ

た。妹が幸せに暮らせるように努力する。それが父さんたちにできる最初で最後の親孝行だから。でもな、中学一年の時に妹と横断歩道を渡ってたんだ。そしたらトラックが俺たちに突っ込んできて俺は妹を守りたい一心で頑張って“妹だけ”助かったんだ。」

はやて「妹だけ?」

諒「ああ、俺が妹をぶっ飛した。そして俺1人が死んだ。」

じゃあ諒君は本当に・・・

でも!!

ウチは認めたくなかった!!

こんなに辛い思いをしてるのになんで諒君ばかり不幸になるんや

諒「そして、死んだ俺は死後の世界に行った。」

はやて「死後の世界?」

諒「ああ、そこに行つて神様にあつた。そして神様に俺のことを言つて調べたら神様の部下のミスで死んだらしい。」

それを聞いた瞬間ウチはカチンときた

しかしウチはその怒りを必死に押さえ諒君に聞いた

はやて「で、そのあとどうなったんや?」

諒「ああ、そのあと神様が土下座してきて泣いたんだ。自分はミスしたくないのにな。」

それを聞いてウチの怒りが少しだけ納まった

諒「それで許してるやるって言ってるのに頭を上げないから神様にできることを罪滅ぼしのつもりでやってくれって言つたんだ。」

諒君優しすぎるで

そう思つてると諒君が話した

諒「そしたらその神様は転生させる力があるって言つたんだ。」

それを聞いてウチはようやくわかった

はやて「それじゃあ今ここにおける諒君は転生した諒君なんやな?」

諒「ああ、そうだ。」

はやて「それじゃあ神様の力でこの世界に来たんやね。」

諒「まあそうだが、この世界には俺以外にもイレギュラーがある。」

諒君以外のイレギュラー？

諒「まず、俺が転生する際神様は俺に力をくれた。」
はやて「力？」

諒「そう、この世界は未来大変なことが起こるからそれを乗り切るための力だ。」

未来に起こる大変なこと？

4年前よりすごいことなんか？

諒「それで俺は力をもらったあと神様をお願いをしたんだ。」
はやて「お願い？」

諒「そう、“妹の願いはできるだけ叶えてほしい”ってな。」
はやて「なんでなん？」

ウチが聞くと諒くんは丁寧に教えてくれた。

諒「俺に血の繋がらない妹が居たのは知ってるだろ。妹は俺が死んだことによつて完全に孤独になつちまつたんだ。だから、せめて1人でも幸せになれるようにそう願つたんだが・・・」
はやて「願つたんだが？」

諒「妹の願いは“俺と一緒に居たい”だったんだ。」

それを聞いて驚いた

まさかそこまでブラコンなんて・・・

ライバルの登場や

諒「で、今妹は家に居るんだがな。」

はやて「妹が諒君以外のイレギュラーか？」

それだけやつたら全然問題ないと思うんやけどなあ

諒「いや、まだある。」

どんだけイレギュラーがおんねん！！

諒「俺が転生する際に神様がこの世界に行くための扉を出したんだ。」

「

ウチはそこで冗談を言ってみた

はやて「まさかそこでまた神様の部下がミスをしてイレギュラーが増えたとか？」

ウチがそう言うのと諒君が驚いとった

諒「はやて正解。よくわかったな。」

ウチが冗談で言ったことがほんまなんて

神様の部下ミスしすぎや！！

諒「で、その扉は本来はこの世界世界だけを結ぶ扉だったんだけど神様の部下のミスで違う世界とも結んじゃったってわけ。それがイレギュラーってわけ。」

はやて「ありがとうな。ウチに話してくれて。」

と言うが

諒「いいよ別に。はやてだったから話したわけだし。」

と言ってくれた

ウチやったからって嬉しすぎるでノノノノノ

諒君が話してくれたたんやからウチも話さないとな

はやて「ウチな「ドガーーーーーン」なんや!？」

誰やウチが話そうとしたのに!!

これは少しO・H A・N A・S H Iが必要やね

side 諒

俺が話し終わりはやてが話そうとした瞬間大きな音が聞こえた

俺とはやては音があつた場所に向かった

そこには・・・

はやて「青い狼?」

そうはやてが言うようにそこにはガルルモンがいた

ガルルモン「君を倒して僕が闇の帝王の幹部になつてやる。」

諒「やはりテメエもか!はやて、どこかに隠れてろ!!」

俺がそう言うとはやては頷き走ろうとする

ガルルモン「なんだ?君は戦う力があるのに戦わないのかい?」

とガルルモンが言ってきた

諒「何言ってやがる！はやては普通の女の子だぞ！！お前の目は節穴か？はやて、奴の言葉は気にするな！だから早く隠れる！！」
と俺が声を荒げて言う

しかしガルルモンは俺の言葉を笑いながら否定した

ガルルモン「はっはっはっはっはっは！！何も知らないんだね！その子の秘密を。」

何を当たり前の事を・・・

諒「知らないに決まってるだろ。」

ガルルモン「そうだろう、知っていてそんな化け物を守ろうとしな
いしね。」こいつもはやてのことを！！

諒「ふざけるな！！はやてのどこが化け物だ！！可愛い女の子だろ
うが、どう見ても。」

ガルルモン「可愛い？笑わせないでくれよ！！教えてあげるよ。そ
の子はねシェンウーモンと言うデジモンが封印されているんだよ！
！」

諒「！？何をバカなこと！！はやてにシェンウーモンが封印されて
るわけないだろうが！！はやて、お前も何か言ってやれ！！」

俺ははやてに何か言うよう言ったがはやては震えながら言った
はやて「・・・本当だよ。」

ガルルモン「ほら見ろ、本人も認めてる！！君はそんな化け物を守
のかい？」

side はやて

狼にウチの事を言われてしもうた

確かにさっきは自分から言おうとしたけど狼の言葉がウチの心にも
しかかる

諒君の方を見る

これでウチはみんなと同じふうには諒君も接するんやなと思った
しかし諒君はウチに笑ってこっちにきた

side 諒

はやてが泣きながら俺のことを見てきた
だから俺は笑顔ではやての所に行った
そしてはやてを抱き締めた

諒「大丈夫、はやてがどんな奴でも関係ない。俺はお前を見捨てない。だから安心しろ！俺がお前を守ってやる！」

そう言う俺はガルルモンの方に歩き始めた

諒「おい、クソ狼。」

ガルルモン「何だい？」

諒「はやてどんな奴だろうと関係ない。俺ははやてを守ってみせる
！！」

ガルルモン「君は話をちゃんと聞いてたかい？あいつには「うるさい！！」なんだと。」俺はガルルモンの話を遮った

諒「いいか、男がやってはいけないことが2つある。女の子を泣かせることと食べ物を粗末にすることだ！！」

ガルルモン「それがどうした！！」

諒「俺ははやてに笑顔でいてもらう。それを壊すものならどんな敵であろうと倒す！！」

フォルテ「クロスシステムLEVELUP！！LEVEL5！！豪
炎寺×ブルース×サスケ！！クロスヒュージョン！！」

諒「電波変換！新井諒、オン・エア！」そして俺は光に包まれた

side はやて

諒君はウチを守ってくれるってゆうてくれた
うれしかった

諒君はウチのために怒ってくれてる

ドキッ！！

あかん、やっぱりウチは諒くんのが好きなんやな
そつと解れば告白や！

でも振られたらどないしよ

あかん、マイナスになるな八神はやて！！

女は度胸や！

やから無事に帰ってきてな、諒君！！

side 三人称

諒の姿は赤を基調とした服、髪の色は白、両目は写輪眼をした姿
だった

ガルルモン「貴様あああ！！！！！」

ガルルモンが叫びながら諒に突っ込んだ

しかし諒は特に焦ることなく左手に雷を集めた

そしてそれをガルルモンにぶつけた

諒「千鳥！！！」

千鳥を直撃したガルルモンは2、3mぶっ飛んだ

しかし諒は休むことなくガルルモンに技を使った

諒「バトルチップ、ワイドブレード、踏み込み斬！！！」

諒がそつ言つと右手から横に長い剣が出てきて一瞬にしてガルルモ
ンの懐に潜り込んだ

ガルルモン「！？！」

ガルルモンも気付いて逃げようとするが時すでに遅し

諒「うおおおおおおお！！！！」

諒は叫びながらガルルモンを斬った

ガルルモン「ぐわああああああああ！！！！」

ガルルモンはあまりのダメージに悶え苦しんでいる

しかし諒はそんな時間も与えなかった

諒「はやてに言った言葉がどれだけ重いか地獄に行くときに考えるんだな！！」

そう言うつと諒は回転しながら上空に飛び上がった

そして上空で千鳥をサッカーボールくらいの大きさまで作り足元に放出した

諒「見せてやるよ、オリジナルの必殺技をよ！！」

そう言うつと右足が炎に包まれ千鳥で作られたボールを叫びながら蹴った

諒「サンダートルネード！！！！」

蹴られた千鳥は炎に包まれ回転しながらガルルモンに直撃した

ガルルモン「ぎゃああああああああ！！！！」

諒「炎と雷の攻撃を一度に受けたことないだろ。地獄で自慢しとけ・・・」

とガルルモンに諒は言った

そして諒がガルルモンに背をむけ歩きだすと

ドッカーーーーーー

ガルルモンは爆発して消えた

諒VSガルルモン

勝者 新井諒

俺はガルルモンを倒し終えはやてのところ向かった
諒「はやて、終わっ「諒君」うわっ!？」

はやてが俺に抱きついてきた

諒「は、はやて!？」

はやて「大丈夫か?どこか怪我とかしてないか？」

と心配してくれた

諒「あ、ああ。どこにも怪我はしてねえぜ。」

はやて「そっか、よかった。・・・なあ諒君？」

諒「ん、なんだ？」

はやて「ウチに聞くことないんか？」

諒「えっ、えーととな、・・・特にないな。」

そう言うのと抱き締めるのをやめて俺の両肩を持った

はやて「嘘や!！ウチにシエンウーモンが封印されてることとか聞

くことがあるやる!！」

諒「別に、そんなこと聞いたってなんかあるのか？」

そう言うのと

はやて「そんなことって、諒君は何とも思えへんのか?ウチがばけ

もんとか、気持ち悪いとか、そんなこと思えへんのか!？」

パシンっ!

俺ははやての頬を叩いた

諒「自分で自分をけなすなよ!！俺がそんなこと思うわけないだろ

!！俺がはやてに持っている印象は可愛い・優しい・好きの印象だ

!！だから自分をけなさないでくれ。」

いい終わると俺ははやてを抱き締めた

はやて「ウチはここに居てええんやるか？」

諒「当たり前だ、俺はお前が必要だ。だから傍にいてほしい、だめ

かはやて？」

はやて「そんなわけないやん。好きな人の頼みは聞きたいんや!！」

諒「ありがとな、はやて。」

はやて「どういたしましてや、諒君!！」

俺たちはそのあと抱き締めあった

第7話 3人目の人柱力登場！！ お前はしっかり生きなきゃならねえ！！（後

オリ技を考えるのに必死な作者の松上です

諒「作者のオリ技を使って疲労する主人公の諒だ。」

すずか「松上君を心配して眠れない後書き専用キャラのすずかです。」

「????」そして、今回から話に加わるヒロインの八神はやてや！

いやー、はやてのしゃべり方には苦労したぜ

諒「まあ、しゃべり方が独特だからな。」

はやて「がんばってな、作者さん！！」

ああ、頑張るぜ！！

すずか「今回の話は“仮面ライダーカブト”に出てくる天道総司の名言が出ましたね。」

ああ、名言好きなんだ

俺

すずか「（松上くんは“名言好き”つと）」

はやて「あの言葉を言われたときは嬉しかったわ。」

それが名言の力！

諒「で、また俺に言わせるのか？」

いや、名言のなかにもお前にはあわない名言があるからな

諒「まあ、そりゃそうだろ。」

そこでみなさんにアンケートです！

諒「アンケートとか早すぎるだろうが！！」

いや、俺の知らない名言があるはずだ

だからこの小説を読んでくださってるみなさんに聞くんだ！

はやて「・・・もし誰も教えてくれへんかったらどうするんや？」

その時は知ってる名言を使う

只、数に限りが・・・

すずか「みなさん、名言を教えてください！お願いします。」

もし、教えてくださる方は感想に題名と誰が言ったか、そしてその名言を書いて教えてください

できるだけ使いますのでお願いします

諒「作者、そろそろ次回予告をしないと。」

ああ、そうだったな

すずかよろしく！

すずか「はい

次回 女の子は仲良くなるのが早い スバルの家はすごいことに！

それじゃあ

諒「また次回」

はやて「会うときまで」

4人「さよならー！！」

第8話 女の子は仲良くなるのが早い スバルの家はすごいことに(前書き)

飛ばしすぎてすみませんでしたーort

只自分の文才だと説明しにくかったので

本当にすみませんでしたー!!

第8話 女の子は仲良くなるのが早い スバルの家はすごいことに

side 諒

あのあと俺ははやてに離れてもらい影分身を1体作り特訓している影分身は影分身の俺がしたことを消えたときに経験値として本体の俺にプラスするのでマジでお得な術なのだ

何故1体なのかというと朝のガルルモン戦があつて今の時刻は午前7時

この時間帯だと人が起きだす時間なのでそんなに作れないのだそして特訓の内容だが本体の俺は電波変換してウイルスとバトル、影分身は筋トレをしている

はやては電波変換をしてウェーブロードで俺の戦いを見ているはやてのデジヴァイスだか緑色だった

シエンウーモンとは仲が良く、特訓をはじめの前にははやてに紹介された

まあ、最初は俺もシエンウーモンもぎこちなかったがはやてのお陰でなんとか普通に話せるようになった

そんなことを思っているとメールが来た
フエイトからだった

諒「え〜何々

『今どこにいるの？心配だから早く帰ってきて！』
つて書き置きするの忘れてた。」

俺が動きを止めたことに不思議がってははやてがきた

はやて「どうしたんや、急にとまって？まさか！？どこか怪我したんか！？」

と言ってきた

しかしはやては優しいなあ

諒「大丈夫、只早く帰ってこいってメールが来たただだから。」

はやて「それって諒君がさっき言ってた子か？」

諒「ああ、だから今日の特訓はここまでだな。」

はやてにはもうフェイトたちのことを話している

一夫多妻制のことをはなしたら呆れられるどころか喜んだ

理由は「諒君はかつこええし優しいからウチ以外にも好かれてると思つとつた。いいやん、一夫多妻制！浮気されて泣くよりみんなで幸せに生きたいし！」と言われた

はやてはもう親が死んでいて身内からも散々言われていたので俺の家に住ませることにした

細かい事はアフロデイに頼めばいいしな

そして俺とはやてはウェーブアウトをし、影分身を消した

そしたらすごい量の経験が俺の中に堆積された

やっぱ影分身はチートだなっと思いつながら俺とはやては家に向かった

俺は今スバルの家にいる

えっ？また飛ばしたなつて？

作者の文才力がないんだ

俺に切れんな！

作者に切れる！！！！

・・・まあ、簡単に説明させてくれ

俺とはやて家に到着

フェイトとティアナに心配され泣かれる

はやての存在を知る

俺とはやてが朝の出来事を説明する

2人が納得する

はやてが俺と結婚したいという

2人は了承する

新しい家族ができたのでパーティーをしたいと3人が言う

しかし用意がなく、フェイト、ティアナ、はやての3人で買い物に行く

フォルテが持つていかれる

俺何もすることない

仕方がなくスバルの家に行く

スバルの家に行きスバルの部屋で談笑する 今ここ

こんな感じでスバルと今談笑中

スバル「本当に良かったよ、あのあと何にもなくて。」

諒「いやいやいや、何であの時教えてくれなかったんだよ!!」

スバル「だって、あの2人の顔を見たら体が恐怖して自分の身を守るのに必死だったからさ・・・」

まああの顔を見たらそうなるわな

諒「まあ、なんとか許してくれたけどさ。」

そんなことを話していると喉が渴いた

諒「なあ、スバル。」

スバル「ん、どうしたの諒君？」

諒「いや、ちょっと喉が渴いたから飲み物貰ってきていいか？」

スバル「うん、いいよ。確か今キッチンには母さんがいるはずだし・
・」
諒「わかった。すぐに戻ってくるよ。」
そう言う俺はスバルの部屋から出た

sideアカネ

今日は昨日スバルが言ってた諒くんが来た
何でも最近引越してきたみたいで学校もコダマ小学校に行くみたい
スバルのことに感謝すると「いえいえ、俺は人として当たり前のこと
をしたままでです。」と言われた

スバルと同じ年なのに礼儀正しくしつかりしてるなあーと思った
少ししか話してないけどおもしろい子ね
今度はゆっくりとお話したいわ
そんなことを思っていると彼が下りてきた

side諒

俺はスバルの部屋から出てキッチンに行くとアカネさんがいた
諒「すいません、喉が渴いたので飲み物をくれませんか？」
やはり年上の人には敬語を使わないとな！
アカネ「ええ、わかったわ。麦茶は飲めるかしら？」

と聞いてきた

諒「はい、飲めます。」

俺が笑顔で言う

アカネ「わかったわ、ちょっと待っててね。」

と言われた

そしてアカネさんから麦茶のコップを受け取り少しずつ飲んだ

アカネ「ねえ、諒くん？」

アカネさんが質問してきた

諒「はい？」

アカネ「本当にありがとうね。スバルのこと。」

諒「いいえ、俺もこの町に引っ越してきたばかりなので友達ができ
て良かったですし。」

引っ越してきたのは嘘だが友達ができて嬉しかったのは真実だしな
アカネ「それでもよ、ありがとね。お礼に今度家にご飯を食べに着
てちょうだい。」

と言われた

スバルの母さんのマイブームは確か料理だったので食べてみたかつ
たんだよなー

諒「はい、楽しみにしています。それからその時は家族を呼んでもい
いですか？」

と聞くと笑顔で「ええ、待ってるわ。」と言われた

そしたらインターホンがなった

アカネさんがドアの方に行った

俺は残っていた麦茶を飲み干してスバルの部屋に向かおうとする
そしたら

アカネ「諒くん、お客さんよー！！」

と言われた

はて？俺にお客なんて誰だろう？

俺は解らなかつたのでアカネさんに聞いた

諒「誰ですか？」

俺は聞くがアカネさんは笑顔で「開けてからのお楽しみに。」と言
われた

わけが分からなかつたので俺は渋々ドアを開けた

そしたら俺の目の前はオレンジと茶色と黄色に染まった

諒「ぎゃ、ぎゃあああああああ！！！！！！」

俺は誰かに押し倒され急に体に重みが生じた
スバル「ど、どおしたの！？」

俺の悲鳴を聞いてスバルが自分の部屋から飛び出してきた

諒「ス、スバル。・・・た、助けてくれ・・・」

俺はスバルに助けを求めるが

スバル「ごめんなさい」

と言って自分の部屋に帰って行きやがった

諒「裏切るなあー！！スバルー！！」

俺の叫び声が星川家に響いた

第8話 女の子は仲良くなるのが早い スバルの家はすごいことに(後書き)

最近目が痛い作者の松上です

諒「今回の話で体中が痛い主人公の諒だ。」

すずか「松上君の事思つと胸が熱くなる後書き限定キャラのすずかです。」

スバル「諒君に救ってもらつてブラザーになった星川スバルです。」
いやー今回はスムーズに書けた

オリジナルはやっぱ難しいぜ

諒「まあ、自分で考えないといけないからな。」

ああ、でもあと1回ストーリーを考えないと!

スバル「フェイトちゃん、はやてちゃん、ティアナちゃんが出てきてあのキャラが出ないなんてありえないもんね!」

ああ、だから少しで登場だぜ

すずか「頑張ってくださいね!!」

ああ、すずかのために頑張るぜ!!

すずか「う、嬉しいですノノノノノ」

諒「すずかとこんな駄文を読んでくれる皆様のためだろ?」

もちろん、皆様のためにもがんばります

スバル「頑張れ!」

おう、そろそろ次回予告だ

すずかよろしく!

すずか「はい

次回 諒の料理の味 またまた眠れない夜!」

それじゃあ

諒「次回の」

スバル「更新まで」

4人「お楽しみにー」

第9話 諒の料理の味 またまた眠れない夜！（前書き）

ぐだぐだだ どうしよう・・・

第9話 諒の料理の味 またまた眠れない夜！

side 諒

俺は今フェイト、ティアナ、はやて、スバルをスバルの部屋で正座させてる

理由？こいつらのせいでアフロディに会いそうになったからだよ！スバルに関しては俺を見捨てたからだ！

フェイト「諒、足が痺れてきたよ。」

フェイトが涙目になりながら俺に言ってきた

だがここで許す訳にはいかない

諒「ちゃんと反省してください、フェイトさん。」

俺がそう言っているとフェイトは下を向いた

ティアナ「で、でもお兄ちゃん！」

ティアナが反論してきたが俺はあくまで他人の演技をする

諒「でも？なんですか、ティアナさん？」

ティアナ「確かに私たちはお兄ちゃんに抱きついてお兄ちゃんを天

国に送りそうになったけども、お兄ちゃんも悪いんだよ！」

はやて「そ、そや。諒君だって悪いねんで！」

俺も悪いと言ってきたよ、この2人！！

諒「俺が一体何をした？」

ティアナ「家に帰ったら誰もいないし、心配したんだよ！！」

はやて「そうや、それで3人で探してんで！何でスバル君の家にお

るって教えてくれへんかったんや？」

誰のせいで教えそなかったと思ってる

諒「何故教えなかったか？・・・それはお前たちのせいだろうかあ

あああ！！！！！！」

3人「ひっ！？」

3人が驚いて抱き締めあってる

スバルは自分のベッドに入って丸くなってる

あとで覚えてるよ

諒「お前たちがフォルテを勝手に持っていくから連絡できなかったんだろぅがあ!!!!!!」

フェイト「だ、だって家のお金を管理してるのはフォルテだし・・・

「
諒「俺にちゃんと言えばお前等のデジヴァイスに金を入れてやったわ!!!!!!」

俺が正論を言うが向こうもまだ引かない

ティアナ「連絡できなかったとしても場所くらい教えることができただでしょ!!!」

諒「俺はちゃんと書き置きしたわああ!!!!!!」

ティアナ「嘘っ!?!」

諒「俺は机の上に

『スバルの家に行ってくる』

って言う書き置きしたわああ!!!!!!」

俺でもどこかに行くときは書き置きするわ

と言うかティアナは転生する前から俺がどこかに出かけるときは書き置きしてたのに忘れたのか!?!

はやて「で、でも会いたかったわけやし・・・」

諒「会いたかった奴を殺そうとしたのか!?!ヤンデレか!?!ヤンデレなのか!?!」

俺がそう言うところ人は黙り込んだ

諒「・・・俺に対して言うことは?」

3人「ごめんなさい・・・」

と顔を下げ謝ってきた

諒「(まあちゃんと反省したみたいだしいいか。)次からはちゃんと確認しろよ?」

と言うところ人が顔を上げた

フェイト「許してくれるの?」

諒「ああ。」

ティアナ「もう怒ってない？」

諒「怒ってない。」

はやて「ほんまか？」

諒「本当だとも。」

俺がそう言うのと3人が抱きついてきた

だが3人はちゃんと反省したみたいで抱きついてきても死にそうにはならなかった

フェイト「やっぱり諒は優しね。」

ティアナ「さすがはお兄ちゃん!!」

はやて「違うやるティアナちゃん。さすがはウチ等の旦那、、、、
、、、やる?」

ティアナ「あつ!?!?そうか!!」

と和気霽々で話しているとアカネさんが来た

アカネ「無事解決してみたね。」

諒「ええ、なんとか。」

まさかそれだけを言いに部屋まで?

アカネ「実はね、諒くんをお願いがあるの。」

諒「お願い?」

アカネ「スバルって学校行ってないでしょ?だからもし学校に行ったら勉強がついていけないと思うの・・・」

何が言いたいかわかったぞ

諒「俺にスバルの家庭教師をやってほしいわけですか？」

俺がそう言うときアカネさんは笑顔になった

アカネ「正解!! やってくれないかしら？」

それを聞いたフェイト、ティアナ、はやて、スバルが否定してきた
アカネ「どうして？」

フェイト「だってもし諒がスバルの家庭教師になったら私達といられる時間が減っちゃうから!!」

フェイトがそう言うときティアナとはやてが頷いた

アカネ「それなら大丈夫よ!!」

3人「?????」

アカネ「みんな諒くんに勉強を教わればいいのよ！そうすれば一緒にいられるでしょ？」

3人「そうか!!!」

アカネさんと3人娘が話をどんどん進めている

スバル「諒君・・・」

諒「言うなスバル。ここで口を出せば俺等の命が無い。」

スバル「そうだね・・・」

2人「・・・はあ～～」

フォルテ「（哀れだな。）」

ここでスバルとの絆力があがった

午後5時

そろそろ家に帰ろうとした時アカネさんが

アカネ「また今度お話したいから電話番号教えてくれる？」

と言ってきたので俺は携帯番号を教えた

結局ずばるに勉強を教えることになった

場所は俺の家

教える曜日は水、金

さすがにお金を貰うのはまずいので料理のレシピを月謝としてもらうことにした

それで今家に帰ってるわけなんだが・・・

フェイト「～～」

ティアナ「～～」

はやて「～～」

状況を説明しよう

右手にはフェイト、左手にははやて、そして背中にはティアナが抱きついてるといふ状況で歩いている

周りかば嫉妬や殺気の視線が向けられる(男)

またにやにやしてる奴もいる(女)

そんな視線に堪えながら俺は家に着いた

諒「さ、俺は晩飯を作るからお前等は風呂にでも入ってこい。」

俺がそう言つとフェイトとはやてが驚いた顔をした

はやて「諒君つて料理できんのか!？」

フェイト「で、でも昨日はコンビニのお弁当だったよ!？」

まあ、小学3年が料理を作るのは普通だったら(、、、)おかしいもんな

諒「料理はできる。昨日は時間が無かったから弁当だったわけだ。」

俺がそう言つとティアナが補足してきた

ティアナ「お兄ちゃんは料理以外の家事もできるんだー。まさに主

夫つて感じたよなー。」

諒「まあそう言つこつた。今日はたくさん作るからさっさと風呂に

入ってこい!」

俺がそう言つと

3人「りよ〜かい!」

と言つて風呂場に行った

俺はオレンジのエプロンをした

俺はメニユーを考えた

やはり唐揚げかな?

よし、今日は唐揚げだ!

そうと決まれば鳥肉を下準備しないとな

そう思つてるとあることが俺の脳をよぎつた

俺は鳥肉の下準備にかかる前に机に置いてあるデジヴァイスに話し

掛けた

諒「なあ、みんな?」

そう言つと蒼いデジヴァイスからチンロンモンが出てきた

チンロンモン「どうしたんだい、諒？」

そしたら今度は緑のデジヴァイスからシエンウーモンが出てきたシエンウーモン「どうしたんじゃ、諒？」

諒「ああ、四聖獣の最後の一匹喪封印されてるんだよな？」

チンロンモン「うん、バイフーモン以外はみんな無理矢理封印されたからね。」

諒「じゃあ、人柱力がどこにいるかわかるか？」

シエンウーモン「この町におるのは確かじゃ。しかも子供じゃ。」

諒「どうして子供（、）なんだ？」

何故子供に封印するのか分からなかった

言っちゃ悪いが高齢者に封印すればすぐに亡くなると思うんだが・

チンロンモン「僕達を全員封印しようとするとかかなりのエネルギーが必要なんだ。もし全員大人に封印しようとするとかかなりのエネルギーが必要なんだ。でも子供は心も体も成長中、だから必要なエネルギーは大人の半分でいいんだ。」

シエンウーモン「じゃから、子供に封印されてることが解るのじゃ。」

とチンロンモンが説明してくれ、シエンウーモンが補足してくれた諒「わかった、ありがとな。」

チンロンモン「どういたしまして。」

シエンウーモン「礼にはおよばん、だが早く飯の準備をしたほうがよいぞ。」

シエンウーモンに言われ俺は急いで鳥肉の準備をし始めた

そして晩飯を作り終えた

えっ？また飛ばしたなって？

いいじゃんそんな重要なことじゃないし

影分身を作って素早く終わらせたんだよ！

メニューは唐揚げ、キャベツの千切り、ご飯、味噌汁と言うシンプルなものだ

まあこれだけあれば足りるだろう・・・たぶん

諒「フォルテ、今日はいくら使った？」

フォルテ「ああ、今日は食材を買って、はやての荷物をこちらに移動させるために人を雇ったから7万ゼニーだな。」

諒「な、7万!？」

フォルテ「ああ。」

まさか7万も使うなんて

まあいいか。

はやて「諒君は」

はやての声が後ろから聞こえたので振り向いた

そこには下着姿(、)のはやてがいた

諒「ななななななんてかかかか格好してた／＼／＼／＼／＼」

はやて「なんや？ウチの体見て動揺しとんのか？襲ってもええねんで？」

はやてが俺の顔を見てそんなことを言ってきた

諒「なななななにiiiiiiiiiii言ってた。はははは早くふふふふ服をききき着ろ!／＼／＼／＼／」

ままままつたく、ななな何言ってた

たまた確かにはやては可愛いがおおお襲うなんてそんなことできるか!!!

はやて「まあ服は着な風邪引くな。夜にやってもらおと!」

ふう、やっと服を着てくれる・・・

ん、夜?

諒「夜って？」

聞き間違いだ!!!

聞き間違いであってほしい!!!

って言うか絶対聞き間違いだ

はやてはそんな子じゃないはずだ!!!

はやては茶色のパジャマを着ながら言った

はやて「そんなん決まってるやん。今日はウチと一緒に寝るんや！」

諒「はあ~~~~~!?!?!?!?!?」

イツシヨニネル?

ナニイツテルンダハヤテサン?

諒「はやてには1人部屋をあげただろうが!!」

1人部屋をあげたのに何故一緒に寝なければならんだ!?

はやて「風呂入ってるとき聞いたで。昨日2人と寝たって。」

あの2人余計なことを・・・

俺が黙つてるとはやてが急に泣きそうになった

はやて「・・・やっぱりウチのことが嫌いなんやね。」諒「な、何

言っただよ。」

はやて「だってそうやる!2人とは一緒に寝てウチとは寝てくれへん、これはウチのことが嫌いやからやる!!」

はやてが泣きながら言ってきた

俺にとつたらフェイトたちと一緒に寝るのは恥ずかしいから嫌だけ

どはやてたちは一緒に寝たいのか・・・

俺ははやてを抱き締めた

諒「ごめんな、お前の気持ちに気付いてやれなくて。でも俺ははやてたちと一緒に寝ると興奮して寝れないんだ。だから無理って言っただ。でもそれだとはやてが不平等だよな?だから今日は一緒に寝てやるけど、次に寝るときは結婚してからにしないか?」

俺がそう提案する

リアルに襲ったらやばいからな

捕まっちまうよ・・・

はやて「わかった、でもどうしても一緒に寝たいときはええよな?」

まあどうしてもって時はいいか

諒「ああ、いいぜ。」

俺がそう言うとはやてが笑顔になって俺に「これはお礼や!」と言つてキスしてきた

・・・えっ、今何したんすか？はやてさん
はやて「ウチのファーストキスや！！ちゃんと諒君にあげたで！！」
俺はボーツとしてたら黄色のパジャマを着たフェイトとオレンジの
パジャマを着たティアナが「ずるいよ！！」と言ってキスしてきた
あまりにもすごいことがあって俺はそこで意識を失った

side 三人称

諒が気絶したことによって3人は慌てたがフォルテたちが冷静な判断で3人は諒を部屋につれていって寝かした

はやて「まさかキスされて気絶するなんてな・・・」

はやてがそう言うのとティアナが頷いた

ティアナ「あれ位で気絶されたら続きなんかできないよ！！」

ティアナがそう言うのとフェイトが何を言ってるのか解らない顔をした

フェイト「続きって？」

フェイトがティアナに質問するとティアナは待つてました！と言わんばかりの顔で答えた

ティアナ「続きってのはね（ピーー）や（ピーー）みたいなことだよ！！」

と笑顔で言った

それを聞いた2人は

フェイト「／／／／／／／／」

はやて「ティアナちゃん詳しくすぎんで／／／／／／／／」

と顔を真っ赤にしていた

ティアナ「そうかな？それより早くご飯を食べようよ！！」

ティアナが何事もなかったように「ご飯を食べよう」と提案する

フェイト「そ、そうだね。／／／／／／／／」

はやて「そ、そうやね／／／／／／／／」

2人はまだ顔が赤かった

しかし2人の顔が驚きにかわった

フェイト「こ、これ全部諒が作ったのかな？」

はやて「そ、そうやったらすごすぎんで。」

そう、2人は机に置かれていた料理の量に驚いていた

ティアナ「えっ？これくらい普通だよ。」

フェイト・はやて「ほんまか本当！？」

2人はティアナの発言に驚いた

フェイト「り、諒って何でも有りだね・・・」

フェイトがそう言うとはやては何か閃いたみたいで

はやて「そうや！！諒君に料理を教えてもらって諒君とウチの2人

で料理を作るんや！！新婚みたいやる！！」

はやての発言でフェイトとティアナも目の色が変わった

フェイト「それはいいアイディアだね！！」

ティアナ「じゃあ明日にでも聞いてみようよ！！」

はやて・フェイト「そうだね（そうやね）！！」

と3人が話し合っていると

フォルテ「話し合っているとこ悪いが。」

チンロンモン「せつかくのできたてなのに。」

シェンウーモン「冷めてしまうぞ。」

3人「！？」

3体？に言われ3人は話を中断して晩ご飯に手を付けた

フェイト「！？この唐揚げおいしい！」

はやて「！？この味噌汁も出汁か効いておいしいで！」

2人が諒の料理を絶賛しているとティアナが話した

ティアナ「おいしいよ、だって転生する前に3つ星レストランから

スカウトが来るくらいだったもの。」

ここにきてティアナがすごいことをカミングアウトした

フェイト「そ、そんなにすごいんだ・・・」

はやて「絶対追い付いたんでっ！！」

そのあと3人は談笑しながら食事をした

side 諒

今の時刻は1時23分

何故こんな時間に起きたのかも俺も解らない

左にはフェイト

右にはティアナ

そして俺の上ではやてが寝ていた

只1つ言えることがある

それは・・・

諒「興奮して寝れねえ。」

第9話 諒の料理の味 またまた眠れない夜！（後書き）

パワプロ君ポケットで選手育成にはまってる作者の松上です
諒「オリジナルの料理を作るのにはまってる主人公の諒だ。」

すずか「松上君にあげるための服を作ってる後書き限定キャラのすずかです。」

アフロディ「今回は僕が参加だね。」

ああ、よろしくな！

アフロディ

アフロディ「よろしくね。」

しかし諒の料理のメニューを考えるのに苦労した

諒「あのメニューでよく考えたと言えたな！！」

しょうがないじゃん！

俺は唐揚げが好きなんだ！！

諒「いやいや、誰も聞いてねえーよ！！」

すずか「（松上君は唐揚げが好きっど。）」

アフロディ「それより次回はどうするんだい？」

ああキャラ設定でも書こうかと思ってる

諒「また書くのか！？」

ああ、はやてやアフロディのことなどを書こうとしている

アフロディ「僕のことを書くのかい？がんばってね。」

おう！

すずか「それじゃあそろそろ」

諒「そうだな。」

アフロディ「次回も」

4人「お楽しみにー！」

キャラ設定パート3 (前書き)

キャラ設定だー!!

・・・すいません調子に乗りました

キャラ設定パート3

八神はやて^{やがみ}

性別：女

容姿：魔法少女リリカルなのはA・sに出てくる八神はやて

年齢：9才

性格：明るくムードメーカーだがネガティブになったら泣きだしてしまっ

身長：129cm

体重：28.5kg

能力：水を使う力があり水系の技はすべて使える

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはA・sに出てくるはやてのバリアジャケットをそのままにしたイメージ

備考：ネガティブになると泣きだしてしまうが諒に抱き締められ頭を撫でられると泣き止む、またフェイト、ティアナとは違い無断に布団には入らずかならず許可を貰って一緒に寝る。寝るときはかならず抱きつき諒はかならず寝不足になる。またシエンウーモンの人柱力

はやての相棒

シエンウーモン

待機状態：緑のデジヴァイス

能力：ブラザーバンドの契約、電話、メール、はやてのバトルのアシスト

性格：一番長く生きているだけあって冷静

備考：はやての行動に頭を悩ませ、いつもあとで諒たちに謝っている

主人公に力を与えた神様

アフロディ

性別：男

容姿：イナズマイレブンに出てくるアフロディ

年齢：かるく500才は越えてるらしい

性格：責任感が強く人に頼まれたら断れない

身長：160cm

体重：なし

能力：転生させる力、能力を与える力

備考：自分の部下のせいで諒が死んだことを後悔していたが諒に励まされ神の仕事も自分の力でできることは自分でやっている、また諒に両親と連絡したいと頼まれたときは最高神に掛け合ってくれた

主人公の義理の父

あらい かずま
新井一真

性別：男

容姿：武装錬金の武藤カズキ

年齢：享年32歳

性格：クールだが肝心なところが抜けている

身長：185cm

体重：なし

備考：諒の義理の父でティアナの父親、諒の父とは仲が良く、何度も飲みに行った仲。しかし通り魔に殺され、1人残った諒を本当の息子のように育てようと思いい、養子にした。死んでからは諒とティアナの頑張りを見て喜んでいた

主人公の義理の母

あらい ゆきこ
新井由紀子

性別：女

容姿：ONEPIECEに出てくるナミ

年齢：享年30歳

性格：優しく心配性

身長：165cm

体重：なし

備考：養子で来た諒を本当の息子のように育てた、最近では週末に諒とお話するのが日課

キャラ設定パート3（後書き）

仮面ライダーディケイドが好きな作者の松上です

諒「仮面ライダー555が好きな主人公の諒だ。」

すずか「仮面ライダー電王が好きな後書き限定キャラのすずかです。」

いや〜かなりキャラが出てきて大変だ！！

諒「でもまだまだ出てくるんだろ？」

そうなんだ、でも頑張るぜ！

すずか「それで次回は何をするんですか？」

ああ、前の後書きにアンケートしただろ？

諒「ああ、確か

『名言を教えてくださいーい！』

だったよな？」

そう、いまさらだけどちゃんと説明したほうがいいだろ

諒「本当に今更だけどな。」

いいじゃん

なので次回はアンケートの回をします

もちろん後書きは書きますよ！

すずか「それじゃあ」

諒「次回まで」

3人「さよならー！！」

アンケートです！（前書き）

アンケートの仕方の説明です！

アンケートです！

みなさんこんにちは！

作者の松上です

諒「主人公の新井諒だ。」

突然のアンケートすみません

諒「本当ならこの話をもっと早めにする予定だったが作者が書くのを忘れて今回になった。」

いや〜本当にすみません

諒「さあ、アンケートの内容は？」

ああ、皆様に名言を教えてくださいなのです

アニメ、ドラマ、ゲームなど何でもいいのです

「名言だ！」と思うものを教えてくださいなのです

諒「作者が名言好きだからどうしても小説内で使いたらしい。」
はい！使いたいです！

アンケートの仕方はまずその名言が出るアニメやドラマの題名、次に名言を言った人物、最後にその人物がいった名言を書いて感想に送ってほしいのです

諒「別に全員参加じゃないから無理に探さなくてもいいぞ。」

はい、無理をしないで知ってる名言を教えてください

教えて下さった名言は前書きと小説内で載せますので！

諒「それじゃ」

アンケートの方を

2人「よろしく頼む（お願いします）！！」

アンケートです！（後書き）

たくさん来ることを願っている作者の松上です

諒「少しでも来ることを願っている主人公の諒だ。」

すずか「皆様のアンケートの参加を願っている後書き限定キャラのすずかです。」

たくさん来るといいな

諒「だがお前も調べるよ？」

わかってるさ

すずか「今回はあまりしゃべることがないですね。」

諒「まあ、アンケートだしな。」

ここでもう一回お願いします

3人「アンケートの参加お待ちしてます！！！」

じゃあすずか次回予告の方頼むぜ！

すずか「はい！」

次回 遂に集結！ 四聖獣を護るのはこの俺だ！」

諒「この題名からすると・・・。」

ああ、あの子が登場だ！

諒「遂に出るのか。」

ああ、戦闘はマジで少ないけどな

諒「その方が俺は楽だ！」

すずか「松上君？」

ああ、そうだな

諒「それじゃあ」

すずか「次回も」

3人「お楽しみにー！」

第10話 遂に集結！ 四聖獣を護るのはこの俺だ！（前書き）

名言教えてくださいましてありがとうございます

今回教えてくれた方はデステイニーさんです

名言はゴットイーターバーストからで

『逃げるなー！・・・生きることから・・・逃げるなー！』
です

本当にありがとうございます

かならず使わせてもらいます

それでは本文スタート！！

第10話 遂に集結！ 四聖獣を護るのはこの俺だ！

side 諒

俺とティアナとフェイトは今コダマ小学校の職員室の前にいるえっ？あのあとどうなったか？

大丈夫だ！やましいことはしてないぞ！

で、学校に行く前までの出来事は、アフロディに親の電話番号を教えてもらった

やっぱり親と話したいしな

天国でも電話はあるらしく俺の携帯は普通に電話ができるらしいマジでお得だな！

・・・でも本当の親の電話番号は教えてもらってない何を話したらいいか解らないからな

だからちゃんと話せるようになったらアフロディに電話番号を教えてもらおうことにした

次に朝の特訓にフェイトたちが加わった

理由は俺を護るためだそうだ

俺って愛されているなって思った

さすが四聖獣の力というか飲み込みが早い

フェイトは千鳥が使えたし、ティアナは風遁螺旋丸をマスターしたし、はやてには刀を渡したら氷輪丸になるというすごいことが起こった

まあ3人は俺と同じ技が使えて喜んでいたがな

あとはスバルの家庭教師だな

スバルは記憶力がいいから一度覚えたらずっと覚えるチートぶりを見せてくれた

まあ、朝起きたらフェイトとティアナが勝手に布団に潜り込んでいたり、はやてが週に3回ぐらい俺と寝たいって言うてくるがフェイト達と違って許可を取ってくれるので毎回OKを出してる

これくらいかな？

ああ、あとアフロデイが神様の力ではやてとスバルと同じクラスにしてくれたらしい

しかも3人ともだ

フェイトと俺が同じクラスと言うのはありえるがティアアナとは兄妹なのに同じクラスで怪しまれないなんてすごいや、アフロデイ！

そしたらがたいの大きい男が扉から出てきた

男「私が君たちの教師だ、よろしく。」

3人「よろしく（お願ひします）。」

お互い名前を確認し教室に向かった

男の教師は田中先生らしい

まあ、この人はモブキャラだからあまり関わらなくてもいいか・・・そんなことを思っていると俺たちの教室に着いた

田中先生「私が呼ぶまで待っていてくれ。」田中先生がそう言つと俺たちは教室の前で談笑しだした

フェイト「緊張してきた。」

フェイトは世程緊張してるのかかなり深呼吸していた

諒「落ち着けフェイト。転校生なんて名前を言つてよろしくーって言えばいいんだよ。」

ティアナ「そうよ、落ち着いてフェイトちゃん。」

俺とティアナがフェイトに落ち着くよう促す

諒「それにクラスにははやてがいるわけだし、他の奴と無理して仲良くならなくてもいいわけだしな。」

まあ、フェイトやティアナに近づく男子は俺が認めた奴以外は潰すけどな

フェイト「私は諒たち以外は仲良くしないよ！」

ここで友達作らない宣言！！

ティアナ「私も。だって人柱力つてわかつた瞬間いじめられるのも目に見えてるもん。」

フェイトとはやてもそうだったな

つてことは最後の人柱力の子もいじめられてるのか？
その子も絶対護つてやんなきゃな！！
俺が決意を固めたとき田中先生が「入ってこい」と言う声が聞こえた
俺たちは話すのを止め教室に入った

side???

今日は転校生が来るらしいの
私はいつもいじめられてるの
私の中には????????があるからみんな私を化け物扱いするの
友達はやてちゃんしかいないの
はやてちゃんは最近嬉しそうなの
どうしたのかと聞くと好きな子ができたらしいの
しかもお互い両思いらしいの
しかもはやてちゃんの秘密を知って優しくしてくれるなんて羨まし
いな
そんなことを思っていると先生が転校生が入ってきたの
仲良くできるといいな・・・

side 諒

先生に呼ばれ教室に入ったら物凄い注目された
男子からは歓喜の声が聞こえた
たぶんフェイトとティアナを見て喜んでだろうな
さっさと自己紹介して座るか
めんどくさいから

諒「え、家の事情で引越してきた新井諒だ。まあよろしくな。」
俺が言い終わる女子から歓声が聞こえた。

フェイトとティアナは笑っているが後ろに組んでいた手は拳になっていた

そして次にティアナが挨拶をした

ティアナ「新井ティアナです。諒君とは義理の兄妹です。よろしく
お願いします。」

ティアナが挨拶したら半分くらい男子が声を上げた

先生が何とか黙らせフェイトの番が来た

フェイト「フェイト・新井です。諒とは遠い従兄にあたります。よ
ろひくお願いします！」

あゝあ囁んじゃった

フェイトの顔が恥ずかしさで真っ赤だ

男子全員がフェイトの顔を見て声を上げた

すごく耳障りだったのでクラス全員を万華鏡写輪眼で眠らせた

フェイト、ティアナ、はやて、そして茶髪のサイドテールの女の子
は目を瞑っていたので気絶はしていない

先生は後ろに立っていたので気絶していない

田中先生「ど、どうしたんだお前等!？」

驚いてる驚いてる

適当に言っとくか

諒「たぶん興奮しすぎて貧血にでもなっただんでしょ。」

俺も興奮することはあるが貧血はしないな

田中先生「確かに興奮すると貧血を起こすな・・・」

起こすんかい!!

フェイトとティアナ、はやてに茶髪のサイドテールの子は先生の言
葉を聞いて引いていた

田中先生「まあそれは置いてお前たちの席だがな・・・」

席はなんとすごいことになった

俺の左はフェイト、後ろははやて、前はティアナ、右は茶髪のサイ

ドテールの子だった

俺は茶髪のサイドテールの子に笑顔で話し掛けた

諒「さつきも自己紹介したけど俺は新井諒。よろしくな！」

そう言いながら右手を彼女に出した

????「私は高町なのはって言うの。よろしくね。／／／／／／／／
と顔を赤くして握手してきた

sideなのは

新井諒くんが一瞬目の色が赤色変わったのを見たら?????????
が目を閉じるよう言ってきたから目を閉じたの

そしたら私とはやてちゃん以外の子がみんな倒れていたの

諒くんは貧血って言ってたけど絶対違うと思うの

そんなことを思ってたら諒くんの席が私の隣になったの

少し不安になってると諒くんが笑顔で「さつきも自己紹介したけど

俺は新井諒。よろしくな！」って言ってきて右手を私の前に出して

きたの

諒くんの笑顔がかっこよくて顔が熱いけど私はちゃんと自己紹介を
したの

諒くんとは仲良くなりたいな・・・

side 諒

無事1時間目終了!!

まあクラスのはほとんどは幻術で眠らせたから起きるのは放課後だと
思う

しかし！友達はできた

名前は高町なのは

あの魔法少女リリカルなのはの主人公だ！

いや〜名前を聞いたときはびっくりしたぜ

まあお互いの第一印象が良かったのか今休み時間だが俺となのは、

フェイト、ティアナ、はやてで固まって話している

しかし転校生ってすごいよな〜

もう噂が広まって見に来てる奴がいる

まあ質問しようにも俺たちが固まって話してるからそんな奴はいな

いんだけどね

楽しく談笑していたら数人の男子がこっちに来た

男子1「おいお前、いくら染めてもいいからってオレンジはダメだ

ろ〜が。」

あ〜、これ絶対喧嘩売られてるパターンだ

適当に返しておくか

諒「染めてねーよ、これは生れ付きだよ。」

男子2「生れ付きかあ〜。それは残念だな。せつかく絞めてやろう

としたのに・・・」

諒「それは残念でしたね。」

男子3「て、てめえ〜。おちよくってんのか！！」

あ〜マジでうるさい

せつかく楽しく話してたのに

諒「話はそんだけ？じゃあ帰ってくれる、俺彼女達と早くお話がし

たいんだからさ。」

俺がそう言うつと男子共はフェイトの方を見る

そうすると男子の1人が笑いながら話してきた

男子2「言いことを教えてやる。」

諒「いや結構。お前等のいいことなんか大抵つまらないからな。」

俺がそう言うつが男子共は笑って話を続ける

男子4「まあ聞け、あそこにいる茶髪の奴らはばけもんなんだぜ。」

諒「なに？」

男子1「あそこにいる八神はやてと高町なのはには四年前この町を襲った化け物が封印されてるんだぜ。」

男子2「悪いことは言わねえ。あいつらには関わらないほうがいいぜ。あいつらは化け物なんだからな。」

だめだ、こいつらには一度痛い目にあわないとな

諒「言いたいことはそれだけか？」

sideなのは

諒くん達と仲良く話してたの

フエイトちゃんもテイアナちゃんも優しくとってても楽しかったのでも私たちが話していたらいつも私とはやてちゃんをいじめてくる男の子たちが来て諒くんに突っ掛かて行ったの

そして男の子たちが私とはやてちゃんの事を話したの

また私たちはいじめられると思つてたけど諒くんは違った

諒「言いたいことはそれだけか？」

side諒

こいつには一度痛い目にあわないとな

男子2「ああ、どういう事だよ。」

諒「言葉の通りだよ。言いたいことはそれだけかと聞いてるんだよ
！！」

やっべー自分でもわかる

俺完全に切れてる

男子4「な、てめえまだあいつらとつるむつもりかよ。あんな化け物はほつといて俺たちと楽しくやるうぜ！」

と男子の1人が右手を出してきた

俺は右手を出した

男子3「これからもよろ「ボキッ!!」!?!」

男子4「ぎゃ、ぎゃああああああああああ!!!!!!!!!!」

腕を折られた男子は叫びだした

廊下にいた奴らもその叫び声を聞いてこっちに注目してきた

男子2「て、テメエー何しやがる!!」

何って決まってるだろうが

諒「害虫駆除。」

男子2「ふざけんなあー!!!!!!!!」

男子の1人が切れて突っ込んできた

こいつらにはボールを使うのも勿体ない

諒「ジャツジスルー2V3!!」

俺は男子にジャツジスルー2V3を使った

ボキッ!!

あっ、肋骨が折れた

まあいいか

ジャツジスルー2V3をくらった男子はぶっ飛ばされた

ぶっ飛ばされた男子は壁に当たり気絶した

男子4「いい気になるよな!!」

男子1「ぜってー許さねー!!」

男子2「潰せ潰せ潰せー!!!!」

残りの男子共が突っ込んでくるが無駄だ

諒「真キラースライド!!」

俺は滑り込まなく片足で真キラースライドを使った

そしたら1人は足が折れ、1人はあらゆる所にあざができ、片手が

折れてた男子はもう片方の腕も折れたらしい

ここでかっこよく決めとくか

諒「いいか、俺は護りたい人がいれば世界を敵に舞わしても構わない。はやてとなのはが化け物？どうでもいいね。例えどんな事情があっても俺は彼女達のことを化け物とは思わない。ただの可愛い女の子として接する。もし他にも彼女達を傷つける奴がいたら俺はそいつを殺しに行く。今回は最初だからこの程度で済んだが次はないと思えよ。」

俺は男子や見ていた野次馬にそう言うとはやてたちの所に向かった

sideなのは

うれしかった

私とはやてちゃんのことを知って私たちのために怒ってくれて嬉しかった

それに諒くんは「いいか、俺は護りたい人がいれば世界を敵に舞わしても構わない。はやてとなのはが化け物？どうでもいいね。例えどんな事情があっても俺は彼女達のことを化け物とは思わない。ただの可愛い女の子として接する。もし他にも彼女達を傷つける奴がいたら俺はそいつを殺しに行く。今回は最初だからこの程度で済んだが次はないと思えよ。」って言うてくれた

諒くんの顔を見ると笑って私を見てくれた

ドキッ！！

ああ、どうしよう

私、諒くんのが好きになっちゃった

でもいいよね！

私は諒くん以外考えれないし

よーし今日は頑張るぞ！

sideフェイト

なのは完全に諒に惚れたんだね

諒の笑顔を見ると顔が赤くなって何かを決意した顔になったからたぶん今日告白するんだろうな

でもあと1人までならOKだし、なのはも私たちと同じだったからなおさらかな

sideティアナ

怒ってるお兄ちゃんもかつこよかった!

人のために怒れるなんてお兄ちゃんらしい

なのはちゃんにフラグを立てたみたいだし

確かなのはちゃんも親は亡くして今は1人暮しだったよね

じゃあ今日から家に来るかも!?

今日もきつとパーティーだ

sideはやて

諒君格好良すぎんで

また惚れ直してもうたやんか

でもなのはちゃんも諒君のこと好きになったみたいやし

ちよつと聞いてみたらうか

はやて「なあ、なのはちゃん?」

なのは「な、何はやてちゃん?」

やっぱり動揺してるな

はやて「なのはちゃん、単刀直入に聞くで。諒君の事好きになつたやろ？」

なのは「どどどおしてわかつたの！？／／／／／／」

やっぱりか

はやて「でな、ウチも諒君が好きやねん。」

それを聞いたなのはちゃんは驚いとつた

なのは「それは本当なのはやてちゃん！？」

なのはちゃん顔が近いって

はやて「ウチだけやないで。フェイトちゃんにティアナちゃんも諒

君の事が好きやねん。」

それを聞いたなのはちゃんは

なのは「じゃあみんなライバルなの？」

と聞いてきた

普通やつたらライバルやけどウチ等は普通やないんやな〜これが

はやて「違うで。」

ウチが否定するとなのはちゃんは頭に？マークを浮かべてた

はやて「実はな諒君の義理のお父さんが一夫多妻制を認めてくれて

んねん。」

それを聞くとなのはちゃんは笑顔になつた

なのは「ってことは」

はやて「そう言うことや！ウチ等は4人共諒君と結婚できんねん！」

なのは「よかつた。私はみんなを敵に回したくないからね。」

はやて「ウチも」

フェイト「私も」

ティアナ「当たり前だよー。」

みんな同じ思いやつたんか

じゃあ今後のことを考えとかないとな

はやて「なのはちゃん、今日から諒君家に住めへん？ウチ等は住ん

でんけど・・・」

そう聞くとなのはちゃんは笑顔で答えてきた

なのは「うん、私も住みたい！」

はやて「じゃあ今日のウチに荷物を運ばなあかな！」

フェイト「私も手伝うよ！」

ティアナ「私も!!！」

はやて「そうか、なら今日は頑張るか!!！」

3人「おおー!!！」

あつ、諒くんに許可貰うん忘れとった

まあええか!

第10話 遂に集結！ 四聖獣を護るのはこの俺だ！（後書き）

感謝の気持ちでいっぱい作者の松上です！

諒「驚きの気持ちでいっぱい主人公の諒。」

すずか「松上君と同じで感謝の気持ちでいっぱいの後書き限定キャラのすずかです。」

????「そして今回からヒロインとして出る高町なのはです!!」
今すごく嬉しい

諒「ヒロインは全員出て、アンケートに答えてくれた人がいたかな
！」

ああ、デステイニーさん本当に

4人「ありがとうございました。」

なのは「この名言はいつ使うかはもう決めたの？」

ああ！もう誰が言うか、そしていつ言うかも決めませ!!

すずか「それはすごいです!!」

諒「まだまだ教えてくれる人がいるかもしれないからちゃんと話は
考えとけよ。」

ああ

なのは「すずかちゃん、次回予告お願いね!」

あつ、それ俺の台詞・・・

すずか「うん

次回 暁の登場!」

なのは「それじゃあ」

諒「次回も」

3人「お楽しみにー!」

俺の台詞・・・

第11話 暁の登場！（前書き）

予告を代えてしまってますいません

どおしてもあの題名だとすごく長い文になるので・・・

そして今回から松上の知ってる名言を2、3個程載せていきます
すべて使うわけではありませんがこんなのがあるよ〜みたいな感じ
なので

今回はONEPIECEの名言です！

『男にやどうしても戦いを避けちゃならねエ時がある。“仲間の夢”を笑われた時だ！』

Byウソップ

『俺には、強くなかなかなくて一緒にいて欲しい仲間がいるから俺が誰よりも強くならなきゃそいつらをみんな失ってしまう！』

Byルフィ

『男の道をそれるとも女の道をそれるとも、踏み外せぬは人の道。散らば諸共、誠の空に。咲かせてみせようオカマ道！』

Byボン・クレー

いやー名言は痺れますねえ

それでは本文スタート！！

第11話 暁の登場！

side 諒

男子をぼこぼこにしたら先生に呼び出され今職員室にいる

まあ、俺は悪くないから反省する必要はないし

田中先生「まったく、転校してきて初日に男子生徒4人を病院送りにするなんてな。」

諒「後悔はしてませんよ。」

田中先生「わかってる、お前を顔を見たら誰でも分かるよ。」

諒「で、なんか処分でもあるんすか？」

俺はさっさと戻って楽しく談笑をしたいのに

田中先生「処分はない。」

諒「へえ〜そうすか。」

4人が重傷なのに処分がないなんて裏があるのバレバレじゃん

田中先生「処分がないのはこの方がお前は悪くないって言うてくれたからだ。」

？「ヒーローが弱い人を護るのは当然。それなのにヒーローが処分を受けるなんて理不尽だしね。」

そう言いながら入ってきたのは20歳前後の青年だった

諒「あんたが言うてくれたんだ。ありがとよ、“暁シドウ”さん。」

暁「こいつは驚いた。君みたいな子供にも俺の名前が知られてるなんてな。」

諒「御託はいい、さっさと用件を言ったらどうだ、“エース”？」

暁「君には驚かされるばかりだな。それじゃあ用件を言うぞ。今日俺と「嫌だ！」速答かよ！」

当たり前だ、何しに行かにならんのだ

暁「頼むよ、長官から連れてくるよう言われたんだよ〜」
いい大人がするなよ

気持ち悪い、でもフェイトたちがしたら可愛いんだろうな

・・・長官？

諒「なぜ長官？」

俺が暁聞くと暁は深刻そうな顔をした

暁「今から話す。すいません先生、部屋から出てくれませんか？」

先生に聞かれるとやばい話をするんだな

田中先生「はい、わかりました。」

そう言うと先生は部屋から出た

諒「小学3年生を1人にして何考えてんだよ。」

暁「ああ、お前に対して大切な話がある。」

諒「告白なんて事はすんなよ。俺もう心に決めてる奴らがいるから。」

「

暁「奴ら？」

諒「ああ。」

暁「その歳でハーレムを築くなんて、今の小学生は進んでるな。」

そんなことはどうでもいいから早く言えよ

もう授業始まってんだからさ

暁を睨んでるとようやく話しだした

暁「そんな顔すんな、それで話つてのはお前・・・いや、お前たち

(、、、、)には重要なことだ。」

諒「俺たち？」

そう聞くと暁は真剣な顔をして話した

暁「まあ、待て。今呼んでる奴らがいるから。」

暁がそう言うと扉が開いた

そこにはなのは、フェイト、ティアナ、はやて、スバルがいた

諒「な、なんでお前R「りょう」ってフェイト抱きつくな！」

俺がみんなに質問をしようとしたらフェイトが抱きついてきた

フェイト「だって、諒が男子を倒したら先生に連れていかれて淋し

かったんだよ！」

諒「それは悪かったけどな急に抱きつくなよ！」

フェイト「じゃあ先言っておいたら抱きついていいんだね？」

フェイトが強くなってる・・・

俺がフェイトの質問に戸惑っていると女神が助けてくれた
なのは「ダメだよフェイトちゃん。諒くんが困ってるよ。」

ありがとうなのは

君は今日から女神と言わせてもらうぜ

しかしなのは俺の期待を裏切った

なのは「そ、それに私もその、抱きつきたいの／＼／＼／＼」

ハア？ ナニツテルンデスカ？ ナノハサン

諒「なのは、何言ってるんだよ。好きでもない男に抱きつきたいなんて言ったらダメだろ？」

そう言うとなのは「だ、大丈夫だよ／＼／＼／＼」と言ってきた
何が大丈夫なんだ？

なのは「あ、あのね／＼／＼／＼」

なのはが顔を真っ赤にしている

なのは「わ、私は諒くんのが好きなんです！！だ、だから私も
諒くんとか、結婚したいです／＼／＼／＼」

諒「ほ、本当かなのは！？」

なのは「う、うん。ダメかな？」

なのはは泣きそうになっていた

諒「ダメなわけないだろ。俺はなのはが俺がいて幸せになるならい
くらでもいてやる。これからもよろしくな！」

俺がそう言うとなのはが抱きついてきた

諒「な、なのは！？／＼／＼／＼」

なのは「これからもよろしくね、諒くん！！」

諒「任せておけ！！」

はやて「やったなのはちゃん！」

フェイト「これで私たち夫婦だね！」

ティアナ「じゃあ今日もパーティーだね！」

スバル「よくわからないけどおめでとう！」

みんな幸せな空気を出してるのに1人が空気を壊した

暁「あ、ちよつといいか？」

はやて「KY」

なのは「最悪なの！」

ティアナ「クズ」

フェイト「ティアナ、それだとクズの人が可愛そうだよ。」

諒「そんなんだから、結婚できないんだよ。」

俺たちがぼろくそに言つと暁は部屋の隅に行き三角座りをした

スバル「みんな言いすぎだよ、大丈夫ですか？何で僕達を呼んだんですか？」

暁「・・・ああ、お前たちを闇の帝王対策部隊に任命されたことを言いに来たんだ。」

6人「闇の帝王対策部隊？？」

名前からして闇の帝王と戦う部隊だろう

しかし俺やフェイト達は戦えるが何故戦えないスバルまで呼んだんだ？

はやて「何でスバル君は呼ばれたんや？ウチ等は分かるけどスバル君は戦われへんで。」

俺が思つてたことをはやてが聞いた

スバルも頷いてる

暁「それもあつて俺と一緒に来てほしいんだ。」

何時のまにか復活した暁が言った

諒「で、どこに連れていくんだよ？」

暁「来てくれるのか！？」

諒「話が話だしな。それに早退届けは出したんだろ？」

暁「ああ、例え嫌だつて言つても無理矢理連れていくつもりだったしな。」

本当にこいつ警察か？

言つてることがやばいぞ

ティアナ「どうやって行くんですか？」

ティアナが聞くと

暁「こつちが用意した車で行く。」
そりゃそうだろ

スバル「どこに行くんですか？」

そんなの決まってるじゃん

暁「WAXAニホン支部だ。」

そして俺たちは暁が用意した車に乗ってWAXAに……
行かなかった

はやて「やからウチが諒君の隣やって！」

ティアナ「違うよ、私がお兄ちゃんの隣だよ！」

なのは「違うの、私が諒くんの隣なの！」

フェイト「みんな違うよ！私が諒の隣なんだよ！」

そうこの会話を聞いて分かるように誰が俺の隣を座るかをもめてる

スバル「あ、はははははは……はあ。」

スバルは苦笑いし溜め息をついた

暁「なあ、あまり待たせると怒られるんだけど……」

諒「暁“だけ”がだろ？」

俺がそう言うと目に涙をため「今日は残業か……」と空を見上げていた

まあ、暁はどうでもいいけど長官を待たせるのはまずいよな

諒「ジャンケンしろよ、お前等」

俺がそう言うと4人がこつちを向いてきた

はやて「でも、それやったら1人しか座られへんやんか。」

こいつらわかってないなあ

諒「俺が真ん中に座れば2人が俺の隣に座れる。しかも行きに隣に座れなかった奴は帰りに俺の隣に座ればいいだろ？」

俺がそう言うと4人が「その手があった（やん）（の）！」と言つてジャンケンした

そして行きの隣が……

はやて「　」

なのは「　」

フェイト「あそこでグーを出してれば・・・」

ティアナ「帰りがある、帰りがあるよ！」

なのは「はやてだった」

やっと出発できると暁が喜んでいたのは言うまでもない

第11話 暁の登場！（後書き）

ROOKIEES卒業ーを見て感動した作者の松上です

諒「劇場版魔法少女リリカルなのはを見て感動した主人公の諒だ。」

すずか「劇場版ポケットモンスター ダイヤモンド・パール・プラチナ ギラティナと空の花束シェイミを見て感動した後書き限定キヤラのすずかです。」

暁「今回の話に登場したみんなのヒーロー・暁シドウだ！」

・・・

諒「・・・」

すずか「・・・」

暁「ちよ、何でみんな黙ってるんだよ!？」

いや、だつてなあ

諒「いい歳をした人がみんなのヒーローってなあ。」

すずか「警察を呼んだほうがいいかな？」

暁「ゲサツ!!」

まあ暁はほっておいて・・・

なのはの話し方ムズ!!

諒「まあ、頑張れとしかいいようがない。」

すずか「今回は松上君に頑張ってもらうしか・・・」

わかつてるさ、努力するよ

諒「で、次回はどうするんだ？」

ああ、次回は意外な人を登場させようと思ってる

諒「モブキャラじゃなくてか？」

ああ、とらえ方によっちゃあ主人公と見てもいいくらいの人が出るぜ

諒「それはすごいな。」

ああ、頑張るぜ

じゃあすずか、次回予告よろしく!

すずか「はい

次回 結成！闇の帝王対策部隊」

それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

暁「俺・・・殆ど喋ってない。」

まあ、頑張れ

第12話 結成！闇の帝王対策部隊（前書き）

今回の名言は聖なる夜天さんが教えてくださった名言です
レジェンズ甦る竜王伝説からの名言です

『マツク止めるんだ、いつまでもサーガであることに怯えてんじゃ
ねえ！！』

『逃げるな！！お前を守ろうと一生懸命な奴らをお前も守るんだ！
』

Byシロン

『目を覚ませガリオン！お前がしようとしてることはお前が望んで
いないことだ！！』

『お前が悲しむのがわかってるから、俺は命をかけてお前を止め
る！！お前が俺を止めてくれた時のようにな！！』

Byゲリードー

すごくいい名言です！

アニメを知りませんがこの名言を見た瞬間アニメを見たくなりまし
た！！

本当に聖なる夜天さんありがとございました！！

皆さんの期待になるような場面で使用させてもらいます！

第12話 結成！闇の帝王対策部隊

side 諒

俺たちは今暁が用意した車に乗っている

席の座席は

スバル 暁

なのは 俺 はやて

ティアナ フェイト

となっている

しかもなのははやては俺の腕に抱きつき頭を俺の肩にのせてる
なのですごい暑い

早くWAXAに着くことを思った

sideなのは

今物凄く幸せなの！

好きな人といるとこんなにも楽しいなんて知らなかったの

しかも今日から諒くんの家でみんなと一緒に住めるからとっても嬉
しいの

それに今日は諒くんと・・・／／／／／／

考えただけで顔が暑くなるよ／／／／／／

早く引越しを終わらせたいなあ

side はやて

今とつても幸せな気分や！

いつもはフェイトちゃんとティアナちゃんがおるから寝るときしか抱きつかれへん

しかも今日からなのはちゃんも家に住むからさらに抱きつかれへん

・

！？そうや、これなら！！

帰りの車が楽しみや！

side 諒

車に乗ること30分

しかし早いな！！

暁がWAXAの証明書を見せると特別な道を開けてそれを通っていたのでたぶんその道は未来ウェーブライナーが使う道だと思っしかしゲームではあまり大きさが分からなかったがWAXAでかいなあ

確か入り口は指紋認証が必要だったな

暁「え、ここがWAXA二ホン支部だ。」

暁が説明しているが知っているの俺はさっさと指紋認証を終わらせた

暁「……だ。中に入るには指紋認証が必要だからちゃんとしてよ！」

諒「もう終わったよ。」

暁「何！？お前本当に小学生か？」

諒「早く行くこうぜ、長官が待ってんだろ？」

暁「ああ、そうだったな！」

早く帰らせてえー

そんな事思いながら俺はWAXAの中に入った

side???

驚きました

彼がここまで知ってるとは

?????。「?????はん。彼は大丈夫でっしやるうか?」

????。「わかりません。でも僕は彼を知りたくありません!」

?????。「?????はんらしいでんな。」早く彼にあってみたいです

side 諒

俺たちは今司令室にいる

かなり目線がやべー

フェイトたちはその目線で怯えて俺に抱きついていて

早く集まってくれないかな

そう思ってるってと暁の顔が真剣になった

ようやく来たか

扉の方見ると3人がこっち向かってきて机の向かい側に立った

??。「すまなかつたな。君たちを急に呼び出して。しかし、事態は

かなり深刻なのだ。おっとまだ自己紹介がまだだったな、私はまあ

長官とでも呼んでくれ。」

?????。「次は私ね。私はヨイリーよ。よろしくね、みんな。」

まあこの2人は知ってるからいいんだが最後の1人はイレギュラー

だった

????。「僕の名前は泉光子郎です。みなさんよろしくお願いします。

それからこっちが僕のパートナーの」

?????。「テントモンです。よろしゅうたのんます。」

デジモンアドベンチャーに出てくる泉光子郎にテントモンかよ

諒「俺の名前は新井諒。」

一応名前を言っておいた

ティアナ「新井ティアナです。」

フェイト「フェイト・新井です。」

はやて「八神はやてや。」

なのは「高町なのはです。」

スバル「星河スバルです。」

俺が自己紹介すると他のみんなも自己紹介した

だが自己紹介はどうでもいい

諒「何故俺たちを呼んだ？何故俺たちの力をあんなら知ってるんだ？」

暁「おい諒！！失礼だぞ！！」暁はそう言うがいきなり呼ばれ、さらに秘密まで知ってる

なのは達は余りこのことを知られたくないからな

長官「すまない。急に呼んだり君たちの力を勝手に調べたことは謝る。しかし事態は大変なんだ。」

と言う

諒「どう大変なんだよ？」

暁「諒！！」

何だよ、ため口でいいだろ？

肩書きで人の偉さは決まらねえ

長官「構わん。」

暁「ですが！！」

長官「時間が勿体ない。早く説明しとかないとな。」

暁「・・・わかりました。」

諒「で、話つてのはなんだ？」

長官「君たちは闇の帝王のことは知っているか？」

やっぱり・・・

諒「知ってる。なぜなら俺は奴の部下と数回戦っているんだからな。」

「

長官「!?!やはり君がデジモンを倒してくれていたのか!?!」

諒「別に……。ただ俺は大切な人を守るために戦っただけだ。」

そう、俺はただみんなを守るために戦っている

長官「それでもだ、君のおかげで多くの人が救われた。本当にありがとう。」

と言つて俺に頭を下げてきた

諒「よしてくれ。それで俺たちに何のようだ?お礼を言うために連れてきたわけではないだろ?」

光子郎「本当に諒君は勘が鋭いですね。」

ヨイリー「本当ね。諒ちゃんの言うとおり、あなたたちをお願いをするために来てもらったの。」

おいおい、男にちゃん付けかよ

知つてたけど面に向かって言われると虫酸が走る

ウォーロックとアツシッドの気持ちに分かるぜ

長官「その願いは我々と一緒に闇の帝王と戦ってほしい。」

諒「いいぜ。」

暁「ほ、本当か!?!」

俺が言つと暁が確認をとつてきた

諒「だが条件がある。」

まあ、この条件さえ呑んでくれたらいくらでも手伝つてやるがな

長官「その条件とは?」

諒「1つ目、俺たちは学生だから会議には出ない。絶対参加でも俺たちは参加しない

2つ目、俺たちの事は絶対公表しない。正体がばれたら面倒臭いから

3つ目、俺たちはやばくなったらすぐに逃げる。俺たちは死ぬのは

怖い。それに関して責めるな。責められたら俺たちはあんた達には協力しない

これが条件だ。」

暁「諒!!!調子に乗るのもいい加減にしろよ!!!お前たちには人を救える力がある。命懸けで人を守るのが普通なんじゃないのか!!!」

諒「じゃあ何で今までフェイトたちを見捨てていたんだよ！」

暁「何!？」

諒「だってそうだろ?今までフェイトたちには四聖獣が封印されてるって事で散々いじめや虐待を受けてたんだぞ!!もし俺が会わなかったら死んでしまったのかもかもしれないんだぞ!!あんたらはその事は知ってたのに見捨てたんだろ?なのに力をコントロールできたら力を貸せ?調子乗ってんのはお前等の方だろうが!!」

今まで思ってたのを言う

最近思ってた

WAXAの情報網ならフェイトたちのことを知るのに時間はかからないはず

なのに4年間も何も分からないわけがない

そうなると答えは1つ

WAXAが見捨てた事になる

諒「フェイトは記憶喪失になっていじめや虐待を受けていたんだ。理由も分からなくていじめや虐待を受けて生き続けようと思った。

そこにクワガーモンが現れフェイトを殺されかけたんだぞ!!

もし俺が助けなかったらフェイトは死んでいたかもしれないんだぞ

!!!

スバルは大吾の事で学校に行けなくなつて1人悩んでいたんだ。そこをデビモンに付け込まれ人を殺そうとした。わかるか?もし俺がデビモンを倒さなかったら意識がある状態で人を殺し続けたのかもしれないんだぞ!!!まさに生き地獄だ!!!

はやては両親が事故に遭い助けてもらおうとした。だがはやてにはシエンウーモンが封印されてるってだけで誰も助けなかったんだ!!そして最近亡くなってはやては孤独になった。そこにガルルモンが来てはやてを殺そうとした。もし俺がはやてに話し掛けていなければ彼女はガルルモンに殺されていたのかもしれないんだぞ!!そしてさいごなのは。

なのはは本当はやさしい奴ですごく可愛いんだ!だがなのははスー

ツエーモンの人柱力と言うだけでいじめを受けていたんだ！親も早くに亡くなっていてなのは誰にも辛さを話せずにいたんだ！もし俺がコダマ小学校に転校しなかったらなのは心はいずれ壊れたのかもしれないんだぞ！！！！

俺たちはちゃんと生きてる1人の人間なんだ！！

俺たちはあんたらを捨て駒じゃあないんだよ！！！！

あんたらが九を助けーを見捨てる正義なら俺は十を助ける正義になつてやる！！

例え世界を敵にまわしてもな！！！！

俺が思つてることを話すと光子郎が話しだした

光子郎「僕はこの世界に来てまだそんなに経っていませんが諒君が言つてゐることは賛成です。だから僕は諒君に付きます。もしあなた達が諒君の条件を呑まなかったら僕はWAXAを辞めます。」

諒「光子郎……」

テントモン「光子郎はんが辞めるんやったらわても辞めさせてもらいますわ。」

諒「テントモン……」

テントモンがそう言うのと暁がこっちに来た

暁「諒、何も言わずに俺を殴つてほしい。」

俺は頷くと暁の顔までジャンプし、おもいつき殴つた

やはりジャンプしてるせいで力が入らなかつたがそれでも2mはぶつ飛んだ

暁「ありがとう諒。お前の言葉に目が覚めた。目の前で困っている人がいるのに見捨てるのはヒーローのすることじゃない。だから俺は困つてる人を全員助けたい！そのために俺はWAXAに入ったんだ！」

暁も俺の言葉を聞いて真の正義に目覚めた

長官「……まさか君に間違つてしていると教えられるとはな。」

ヨイリー「長生きもしてみるのも悪くないわね。」

諒「人の間違いを指摘するのに肩書きや歳なんかは関係ない。本当

に必要なのはそれを間違いだといえる“勇気”さ。」

長官「本当に必要なのは勇気・・・か。・・・諒君さっきの条件を呑もう！上が何か言ってきたても君たちは絶対守ってみせる！！だから私たちを信じてほしい。」

諒「条件さえ呑んでくれたら俺たちは手伝いますよ。」

長官「ありがとう。君たちも手伝ってくれるかい？」

フェイト「私が私でいられるのは諒のおかげ。だから諒が手伝うなら私も手伝う！！」

ティアナ「私はお兄ちゃんのお陰で生きてこれた。お兄ちゃんが困つてるときは私が力を貸す番！！」

はやて「ウチは孤独やった。やけど孤独の悲しみから救ってくれた諒君が行くならウチも行く。それが闇だろうと地獄でもやで！！」
なのは「私を初めて受け入れてくれたのが諒くんだった。もう諒くんがいないのなんてたえられない！！だから私も諒くんのお手伝いをする！！」

スバル「僕は父さんが事故に遭い裏切られたと思い学校に行けなかった。でも諒君は僕に話し掛けてくれた。僕がデビモンに乗っ取られても諒君は一生懸命僕を救おうとしてくれた。僕が諒君に大怪我をさせても「友達だろ！！」って言うてくれた。僕に戦う力はなくても僕は諒君と戦いたい！！それがブラザーだから！！」

みんなの言葉を聞いて涙ぐんでしまった

諒「ありがとな、みんな。」

長官「決まりだな。諒君言うてくれるか？」

諒「ああ、これにより闇の帝王対策部隊を結成する！！！！」

第12話 結成！闇の帝王対策部隊（後書き）

みなさん、こんばんは
作者の松上です！

諒「主人公の諒だ。」

すずか「後書き限定キャラのすずかです。」

????「そして今回からこの小説に出させていただく泉光子郎です。」

ええーまずは

4人「聖なる夜天さんありがとうございました!!!」

いやー聖なる夜天さんの教えてくれた名言がすごくぴったりなキャラがいるんだ

諒「それはすごいな！」

すずか「いつ使うの？」

ああ、このオリジナルのストーリーに使わせてもらおうぜ

光子郎「ってことは、まだまだこの話は続くんですね？」

ああ、頑張って原作に入ろうとしているんだがちゃんと書かないとな
諒「で、次回は何するんだ？」ああ、次回はなのはたちのキャラ設定だな

諒「なるほど。」

頑張って更新するぜ！

すずか「それじゃあみなさん！」

光子郎「次回も」

4人「お楽しみにー！」

キャラ設定パート4（前書き）

今回はWindさんが教えてくれた名言です！！

まずは天元突破グレンラガンで

『いいか……シモン……。お前を信じる俺でもねえ……。俺を信じるお前でもねえ……。お前は信じるお前を信じる……。あばよ、ダチ公。』

Byカミナ

勇者王ガオガイガーFINALで

『俺は一人じゃない……。俺たちは一つだ！！』

By獅子王凱

機動戦士クロスボーン・ガンダムで

『見せてやるよ……。奇跡ってやつをな！』

Byキンケドウ・ナウ

アニメ版マクロスFで

『確かに人は一人だ……。だが！』

『一人だからこそ誰かを愛せるんだ！！』

Byブレラ・ストーン&mp;早乙女アルト
でした

本当に今回も痺れる名言でした！！

Windさん、本当にありがとうございました

キャラ設定パート4

高町たかまちなのは

性別：女

容姿：魔法少女リリカルなのはに出てくる高町なのは

年齢：9才

性格：恥ずかしがり屋だが諒のことになると性格が変わる

身長：131cm

体重：30.3kg

能力：火を使う力があり炎系の技はすべて使える

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはに出てくるなのはのバリアジャケットをそのままにしたイメージ

備考：料理が得意でみんな楽しんで暮らすのが夢、またはやて同様許可をもらって一緒に寝る、スーツエーモンの人柱力

なのはの相棒

スーツエーモン

待機状態：紅のデジヴァイス

能力：ブラザーバンドの契約、電話、メール、なのはのバトルのアシスト

性格：四聖獣唯一のメスなのでパーフェクト、しかし一度切れると・

備考：やはりメスなのでなのはたちは女の子の会話に入ってはなのはたちに助言している、その間チンロンモン達は諒と一緒に行動している

真あかつきの正義に目覚めたヒーロー

暁シドウ

性別：男

容姿：流星のロックマン3 ブラックエース/レッドジョーカーに出てくる暁シドウ

年齢：19歳

性格：ゲーム同様優しいが諒の言葉にさらに人に優しくなり真のヒーローを目指している

身長：185cm

体重：80kg

備考：まだアシッドは完成していないが、いつでも電波変換できるように訓練をしている。また闇の帝王対策部隊の隊長

異世界からやってきた頼もしい味方

泉光子郎いずみみつしろう

性別：男

容姿：劇場版デジモンアドベンチャー ぼくらのウォーゲームに出てくる泉光子郎

年齢：10才

性格：冷静だが一度興味を持ったものは集中して調べたがるので周りが見えないこともしばしば

身長：145cm

体重：40kg

備考：闇の帝王の力で流星のロックマンの世界に飛ばされてしまったが偶然暁に保護された、この世界のことを調べようと思ったが異世界の文化を調べて自分の世界で危険なことになってしまおうと思い調べていない、またテントモンは究極体まで進化させることができる

光子郎の相棒

テントモン

待機状態：紫のデジヴァイス

性格：心配性

備考：光子郎とともに闇の帝王に飛ばされたデジモン、光子郎の抑え役で危険になれば光子郎だけでも助けようとする勇敢なところもある、また究極体に進化でき退化しても完全体までなら連続で進化が可能

主人公により正義とは何かを教えてもらった長官
ちょうかん
長官

性別：男

容姿：流星のロックマン3 ブラックエース/レッドジョーカーに出ってくる長官

年齢：63歳

性格：面倒見が良くかなり慕われている

身長：165cm

体重：60.5kg

備考：諒の言葉を聞き本当の正義とは何かと考えそれを実行した、今は給料3割を恵まれない人に寄付している、また闇の帝王対策部隊の本部長

優しい科学者

ヨイリー

性別：女

容姿：流星のロックマン3 ブラックエース/レッドジョーカーに出ってくるヨイリー

年齢：68歳

性格：前向きで夢を持つ人を応援する性格

身長：145cm

体重：42.5kg

備考：諒の言葉を聞き改めて命の大切さを知った、しかも誰にでもちゃん付けだったが諒だけ君付け、またデジヒュージョンの力を実用化しスバルに与えるということをした、また闇の帝王対策部隊で

はオペレーター

キャラ設定パート4（後書き）

少しネタばれが入って後悔している作者の松上です

諒「そんな作者に呆れている主人公の諒だ。」

すずか「そんな松上君を慰める後書き限定キャラのすずかです。」

フェイト「皆さんこの場では久しぶりです！ヒロインの一人のフェイトです！！」

まずは

4人「Windさんありがとうございました！！」

今回の名言もいつ使うかはもう決めませ

諒「そういうのは早いよな。」

これが名言の力！！

すずか「その調子で頑張ってください！！」

ああ！この調子で頑張るぜ

すずか「（張り切ってる松上君もかっこいい／＼／＼）」

フェイト「それで次回はどうするの？」

次回は日常編だな

諒「久しぶりに休めるな。」

・・・休めたらいいな

諒「お、お前！何するきだ！？」

すずか、次回予告よろしく！

諒「無視すんなー！！」

すずか「はい、

次回 諒はまた眠れない」

フェイト「まさか、この話って・・・」

フェイトの思ってるとおり

諒「寝不足決定！！」

フェイト「り、諒頑張れば寝れるから・・・たぶん。」

まあ、主人公はほっておいて、

みなさん！

すずか「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

諒「睡眠薬買ってこよう。」

「
頑張れ

第13話 諒はまた眠れない(前書き)

さあ今回は一度名言を教えてくださいましたデステイニーさんがまた教えてくださいました

FATAからで

『誰かを救いたっていい気持ちには決して間違いないんじゃないんだから!!』

By衛宮士郎

この言葉、名言だ!!

この名言も使いたい!!

なので頑張ります!!

応援してください!!

第13話 諒はまた眠れない

side 諒

諒「なあ、暁？」

暁「どうした、諒？」

諒「闇の帝王と戦うのって俺やデジヒュージョンできるフェイト達だけなのか？」

まあ、聞かなくても答えはわかっているが一応確認のためにな・・・

暁「いや、まだいるぞ。」

諒「！？だ、誰だよ？」

まだいる？他にデジヒュージョンできる奴がいるのか？

暁「まず一人目は光子郎だ。」

諒「光子郎が？」

光子郎「ってデジヒュージョンできたのか？」

まあ、テントモンがいるからできるんだらう

光子郎「正確にはテントモンです。」

諒「テントモンが？」

テントモン「そうでんがな。」

暁「光子郎はこの世界の住人じゃないらしい。」

諒「！？」おかしい、光子郎は確かにこの世界の住人じゃないがそれを自覚してるなんてありえない

なのはやフェイト、はやてもこの世界の住人ではないがそれを自覚してはいない

なのはどうして光子郎は自覚しているんだ？

光子郎「僕はこの世界じゃない世界、つまりパラレルワールドの住人なんです。」

なのは・フェイト・はやて「パラレルワールド？？？」

3人は理解してないな

まあ俺とティアナもパラレルワールドの元住人だから知ってるし、

スバルは理科で前に一度教えたから理解している
だが3人はわかっていないようなので説明しとく
諒「パラレルワールドってのは・・・簡単に言くと俺がいない世
界みたいなものだ。」これならわかるだろ
3人「そんな世界は嫌なの(だ)(や)!!!」
と言つて抱きついてきた

俺は無防備だったので3人の勢いを緩めることができず床におもい
つきし体を打ち付けた

なのは「私、そんな世界は嫌なの!!!」

フェイト「諒がいないなんて嘘だ!!!」

はやて「そんな世界があんねんやつたらウチが潰したる!!!」

諒「だから、それがもしもの世界。パラレルワールドなんだって!

!光子郎が説明できないから早く退けよ!!!」

そう言つと3人は渋々俺の体から退いた

ティアナ「それで、どうして光子郎さんはパラレルワールドからこ
の世界に来たんですか?」ティアナがそう聞くと光子郎からすごい
答えが出てきた

光子郎「・・・実は僕達は闇の帝王の力によってこの世界に連れて
こられたんだと思います。」

諒「バカな!?パラレルワールドから人を連れてこられるデジモン
がいるわけ・・・いや、一体だけいる。」

暁「何!?そいつはどんなデジモンなんだ?」

暁だけじゃない

この場にいるすべての人が驚いている

諒「名はパラレルモン、究極体、その名の通りパラレルワールドを
行き来できる力を持っている。」

光子郎「究極体ですか?」

ヨイリー「究極体はどれくらい強いのか?光子郎ちゃん?」まあ、こ
の場で究極体を知ってるのは俺とティアナ、それから光子郎くらい
だもんな

光子郎「究極体は僕がこの前テントモンをアトラークプテリモンに超進化したでしょ？あれよりも数倍強いのが究極体です。」

長官「あれよりも強いのか、その究極体と言う奴は？」

諒「ああ、パラレルモンそんな力はないがデジモンによっちゃあ世界を破壊する力を持つ奴だっている。」

俺と光子郎、ティアナを除く全員は驚いていた

諒「だが、闇の帝王にパラレルモンがいると考えたほうがいいだろう。」

ティアナ「そうね、パラレルモン自体にそんな力はないから幹部がいいところじゃないかな。」ヨイリー「これはうかうかしていれないわね、シドウちゃん？」

暁「そうですね、こつちにいくら諒達がいっても諒達が戦えなくなったらこちらは敗北決定だ。・・・ヨイリー博士。」

ヨイリー「ええ、一週間あれば完成するわ。」

暁とヨイリー博士が何か話している

諒「何が完成するんだ？」

俺が聞くと長官が答えてくれた

長官「人工デジモンとデジヒュージョンを可能とするデジヴァイスだよ。」

諒「！？な、人工デジモンとデジヒュージョンを可能にするデジヴァイスだと！？」

驚き以外の言葉が見つからない

それだけヨイリー博士が作っているのはそれだけすごいものなのだから

スバル「それで一体誰がデジヒュージョンをするんですか？」

スバルが聞くが暁以外ないだろう

しかし俺の答えはいとも簡単に打ち砕かれた

暁「それはスバル、お前だ！！！」

な、スバルだと！？

諒「暁、冗談はやめろよ。」

冗談だ、冗談だと言ってくれ

ヨイリー「シドウちゃんが言ったとおりよ、諒くん。」
嘘だろ

諒「な、何でスバルなんだ？暁は無理なのか？」

暁は未来アシッドと電波変換するから訓練しているはず

暁「確かに本当は俺がしたい、だがスバルは一度デビモンとデジヒュージョンしている。だから人工デジモンともシンクロ率が俺より高いんだ。・・・悔しいがな。」

暁は本当に悔しそうな顔をしていた

スバル「でもどうして僕なんですか？確かに僕は一度デジヒュージョンしていましたがそれだけでシンクロ率は高くなるもんですか？」

スバルの言うとおり一度のデジヒュージョンだけで高くなるものか？

ヨイリー「それはね、ここからは私が話します。」そうね、あなたが話したほうがいいわね。」

ヨイリー博士が話そうとしたら誰かが話を遮ってきた

?????。「私の名前はエンジエモン。なぜスバル君が私とシンクロ率が高いのかというとデジヒュージョンした相手がデビモンだったからです。」

エンジエモンは机の真ん中から出てきて説明しだした

ティアナ「デビモンだったからってどういうこと？」

ティアナが質問する

エンジエモン「私は光エネルギーで作られています。しかし光エネルギーが強すぎて普通の人は体が持たないんです。」

フェイト「じゃあデビモンはその逆ってわけなの？」

フェイトはそう言う

エンジエモン「その通りです。デビモンは闇のエネルギーで作られています。しかしデビモンとデジヒュージョンして闇エネルギーを体に貯えているままでは体が傷ついてしまいます。なので私とデジヒュージョンして闇エネルギーを光エネルギーで相殺させます。そうすると光と闇の力が体に害を与えないで使用可能になります。」

つまりエンジエモンとデジヒュージョンしないとスバルは体が傷つくなんて答えが1つしかねえじゃないか

スバル「そんなの答えは決まっています。僕は戦います。諒君達と一緒に戦いたいから!!」

諒「スバル・・・」

エンジエモン「決まりですね。ヨイリー博士。」

ヨイリー博士「わかったわ。みんなデジヴァイスは一週間で完成させる。だから今日はもう帰っていいわ。」
しかしそう言うが

なのは「スバルくんの体は大丈夫なんですか？」

確かに、デビモンとデジヒュージョンして一週間、さらに一週間待たないとエンジエモンとデジヒュージョンできないとスバルのからだが傷つくはずだしな

エンジエモン「それは大丈夫です。諒君のおかげでね。」

諒「俺のおかげ？」

俺が何をした？

エンジエモン「諒君は闇に対して威力が高くなる“ヘブンズナックル”を使いましたよね？それのおかげで三週間程度ならスバルくんの体は傷つくこともありませんしね。」

よかった、あの時エンジエモンの技を使っておいて良かったと思うはやて「なら、もうウチ等は帰ってええねんな？」

長官「ああ、デジモンが現われないかぎり君たちと会うのは一週間後だ。」

諒「なら帰るわ。暁頼むぜ。」

暁「わかってるよ。」

そう言うて暁は下に行った

諒「早く帰ってなのは引越しをしようぜ。」

俺がそう言うともみんな頷いて俺についてきた

諒「じゃあ、俺たちは帰るから。」

長官「ああ、一週間後に会おう。」

俺たちは長官たちに挨拶をして暁のところに向かった

side長官

まさか子供に教えられるとはな
だがあの子もまだ子供だ

我々大人がしっかりあの子達を守らなければならない

長官「我々も準備をしたほうがいいな“ベルゼブモン”。」

ベルゼブモン「あいつらの盾になってやれるのは俺たちなんだから
な。」

長官「ああ、そうだな。」

side 諒

長官に挨拶をした俺たちは暁がいる所に向かった

暁「よし、全員いるな？」

暁が確認をとってくる

諒「全員いるぜ。」

暁「なら車に乗ってくれ。」

俺たちは暁に言われ車に乗った

しかしここで問題が起こった

フェイト「はやて！どこに座ってるの！？」

ティアナ「ずるいよ！私もそこに座りたいよ！！」

なのは「そうだよはやてちゃん！なんで“諒くんの足の上”に座って
るの！？」

そう、なんとはやてが俺の足の上に座っているのだ

諒「何でこんな所に座っているんだ、はやて？」

俺が聞くと笑顔で振り向いてきた

はやて「だってな、今までフェイトちゃんやティアナちゃんがおつたからウチは全然諒君に抱きつかれへんかってんで。それに今日からなのはちゃんまで一緒に住むからウチが諒君に抱きつけるのは寝るときだけになるやる。やからウチは少しでも一緒にいられるときに諒君と振れあつときたいねん。」

これは何をいつても退かないな

諒「いいじゃんか、別に。」

3人「!？」

諒「大して困るわけでもないし、それにはやてばかり悪いわけでもないだろ？なのはは今日一緒に寝るから我慢できるな？」

俺がそう言つと3人は渋々了承した

暁「そろそろ動かしていいか？」

諒「ああ、いいぜ。」

俺はシートベルトをしてはやてが落ちないようにした

諒「はやて、キツかったらいつてくれよ。」

はやて「う、うん。わかつたで／＼／＼／＼／＼（ウチと諒君がさらに密着してる）」

そして俺たちはコダマタウンに帰った

今なのはの家にいる

えっ？車での様子はどうだったか？

フェイトとティアナは腕に抱きついて頭を俺の肩に乗せて寝ていたはやては何故かしらんが気絶して今は3人仲良くなのはの部屋で寝ている

なのはは荷物を段ボールに詰めている

俺は影分身を使い荷物を家に送っている

諒「なのは、まだ荷物はあるのか？」

なのは「これで最後だよ。」

俺はその段ボールを影分身に任せ2人で休憩をしている

諒「やっと終わったな。」

なのは「諒くんのおかげでお昼前に終わっちゃったね。」

そうなのは言うとおりの時間は11時42分

お昼前に引越しが終わったのだ

諒「さて、頑張りますか！」

俺がそう言うとなのはは？マークを頭に浮かべていた

諒「なのは達を幸せにするために気合いを入れただけさ。」

俺がそう言うとなのはは顔を赤くして「ありがとう／＼／＼／＼」と

言ってきた

諒「そうだ、なのは今日の晩ご飯何が食べたい？」

俺が聞くと笑顔で「ハンバーグが食べたい！」と言ってきた

ハンバーグが、てことは今日は洋食だな

諒「わかった。じゃあ頑張っておいしいハンバーグを作るぜ！！」

俺がそう言うとなのはは笑顔になった

なのは「楽しみにしてるね！それからちゃんと約束は守ってね？」

はて約束なんかしたかな？

なのは「忘れないですよ！今日一緒に寝てくれるんですよ！！」

忘れてた・・・

なのは「今日は寝かさないからね／＼／＼／＼」

マジデスカ

そのあとフェイトたちを起こし昼飯を食べて家に帰りなのはの荷物

を片付けて晩飯の食材を買いに行った

その時みんなついてくるといったが俺がいないときにできる話をし

とけつて言ったらチンロンモン、シエンウーモン、バイフーモンを

渡された

どれだけ聞かれたくないんだよ・・・

スーツエーモンはメスらしいので聞かれてもいいらしい

あとバイフーモンは他の四聖獣の力で一週間もすれば目が覚めるら

しい

早く帰って晩ご飯を作らないと
そんなことを思いながら食材を選んだ

はい、今布団のなかにいます！

えっ？晩ご飯はどうしたかって？

作ったぜ、明日の晩ご飯用として作っておいたハンバーグがなくな
った時は驚いた

それだけ美味しかったらしい

そしてそのあとお風呂に入ろうとしたらはやてが「一緒にはいろっ
や」と言ってきたがさすがに断った

そして寝る前からなのはが腕に抱きついている

俺からしたらなのはの体温が直に伝わってくるので興奮していた

そして布団に入ったらなのはが「好きだよ、諒くん。」と言ってキ
スしてきた

そこで俺は意識を失った

sideなのは

キスをしただけで気絶するなんて諒くん可愛いな

こんな幸せな時間が毎日続くなんてうれしいな
ずっと好きだよ

諒くん

s i d e 諒

今の時刻は12時54分

今なのはに抱きつかれて興奮して眠れません
そんなことを思いながら日が昇るのを待った

第13話 諒はまた眠れない（後書き）

祝20話投稿！！

全員「イエイイ！！」

だが喜ぶ前にみんな

全員「デステイニーさんありがとうございます！！」

諒「まさか2回も答えてくれる人がいるなんてな！」

フェイト「本当驚きだよ！」

ティアナ「しかも教えてもらった名言がすごく格好良いから全部使
うんでしょ？」

ああ、教えてもらった名言がまた痺れるんだな

スバル「しかも今回の話で20話投稿なんだもんね！」

はやて「ほんま、この小説を読んでくれた人たちに感謝や！」

なのは「作者さん、みんなの気持ちを無駄にしないでね！！」

ああ、頑張ってみなさんに喜んでもらえるような作品にするぜ！！

アフロディ「作者君に負けないように僕達も頑張らないとね！」全

員「当たり前だ！！」

それじゃあすずか

次回予告お願いな！！

すずか「はい！！」

次回 本当の勇氣！僕は君達を救いたい！！」

それじゃあ

諒「次回も」

全員「お楽しみにー！！！！」

第14話 本当の勇氣！僕は君達を救いたい！！（前書き）

またサブタイトル変更してすみません！！

しかし名言の力で頑張ります

今回教えてくださったのはAIさんです

本当にありがとうございました！！！！

ガンダムSEEDで

『気持ちだけで、いつたいなにが守れるっていつんだ！』

Byキラ・ヤマト

『俺は不可能を可能にする男だ！！』

Byムウ・ラ・フウガ

ガンダム種デスで

『命は、何にだってひとつだ！』

『だからその命は君だ！彼じゃないっ！！』

Byキラ・ヤマト

ガンダム名言格好いい！！

これを参考にしてもっと面白い小説にします

ありがとうございます！！

第14話 本当の勇氣！僕は君達を救いたい！！

side 諒

俺は白い大きな部屋でスバルと向かい合わせで立っている

そう今日はスバルとエンジエモンのデジヒュージョンの日だ

この一週間のことを簡単に説明するぜ

まず学校

俺が大怪我をさせた男子と目が合ったらなんと「一生付いていきま
す！兄貴！！」と言われた

何故兄貴と呼ぶのかと聞いたら俺がいった言葉を聞いたこいつらの・

・いや、俺の言葉を聞いたすべての男子が感動して、今までの自
分を後悔して新しい自分に生まれ変わったらしい

また、一部では俺の舎弟になりたい奴もいるらしい

怪我をさせた男子の親から「息子をやさしい人にしてくれありがとう。
う。」と怒られるどころかお礼を言われた

さらに今週から水曜日だけスバルが学校に行きだした

暁が「人を助けたいならまず人と関わりを持たないとな！」と言っ
たので一日だけ学校に行っている

アカネさんはうれしすぎて泣いていた

また暁や長官、ヨイリー博士、さらに光子郎とブラザーバンドを結
んだ

あとは朝の修業になのはとスバルが加わった

スバルはまだデジヒュージョンできないので筋トレなどして体力を
つけている

なのははフェイト達が俺の技を使ってるのを見て「私も諒くんの技
を使いたいよ！！」と言ってきたので頑張ってマキシマムファイア
を教えた

そしたら手からマキシマムファイアが出たのでこれには驚いた

これでどこからもマキシマムファイアが使えるのであとは自分の改

良次第といった

そしたらなのは爆熱スクリューを使えるようになったし、フェイトは千鳥流しを覚えたり、ティアナは風遁螺旋手裏剣をデメリットなしで使えるように完成させたし、はやては卍解・大紅蓮氷輪丸を完璧にマスターした

ついでに言うと毎日2人ずつ寝るようになった

なのはとフェイトのペア、ティアナとはやてのペア

なので漸くみんなと寝るのに慣れたので何とか眠ることができる
ついでに言っておくとバイフーモンが眠りから覚めたので話し掛け
たらずごく気が合った

シエンウーモンとは苦労人として、チンロンモンは料理人として、
スーツエーモンとは仕事人として話が合うがバイフーモンとは遊び
人として話が合った

四聖獣ってキャラが濃くてすごかったのは言うまでもない
そんな感じの一週間だった

そして今俺はかなり緊張している

もしもの時のためになのはたちはデジヒュージョンをして四聖獣の
バリアを張っている

高まる緊張を落ち着けるために深呼吸をする

スバルの方を見たら完全に緊張して震えていた

諒「スバル、落ち着け。」

スバル「おお落ち落ち着いていいよよ。」

何を言ってるのかわからん

だがスバルが落ち着かないとこのデジヒュージョンは失敗する

諒「スバル安心しろ。例え失敗したっていい。だからおまえは自分
ができることを精一杯やればいい。もしお前ができなくても俺たち
はお前を見捨てないからな。」

俺がそう言うとスバルの顔がいつもの顔に戻った

スバル「ありがとう諒君。僕頑張るよ！」

そう言うとスバルは灰色のデジヴァイスを出して叫んだ
スバル「デジヒュージョン！！エンジェモン&mp・デビモン×
星川スバル」
スバルがそう叫ぶと灰色の球体に包まれた

sideスバル

ここはどこだろう？

僕は確かデジヒュージョンをした筈なのに何でここにいるんだ
灰色の世界
冷たい

ここはどこかわからないけど1つわかることがある

ここは1人の世界

誰もいない世界

???「ここはあなたが望んだ世界。」

僕が望んだ世界？

??「ここはお前を試す世界。」

僕を試す世界？

君たちは誰なんだい？

???「私はヒカリ。光の力を司るものです。」

??「俺はヤミ。闇の力を司るものだ。」

ヒカリとヤミ？

ヒカリ「そう、あなたは力を求めこの世界に来ました。」

ヤミ「そして俺達はお前に力を与えるために来た。」

僕に力を？

ヒカリ「癒しの力か？」

ヤミ「破壊の力か？」

ヒカリ・ヤミ「どっちを選ぶ？」

side 三人称

スバルがヒカリとヤミに出会っている頃諒はスバルと戦っていた
諒「まさか、デビモンの力を使うなんてな。」

そう、本来デジヒュージョンはエンジエモン“だけ”の名前を言う
ものだった

しかしスバルはエンジエモンとデビモンの名を叫んだ

これによりスバルのなかに溜まっていた闇のエネルギーが使われデ
ビモンが復活した

エンジエモンはあまりにも急だったためデジヒュージョンができな
かった

デビモン「まさかこんなところでお前に会えるなんてな!!」

諒「俺はあまり会いたくなかったがな。」

諒が小馬鹿にした笑いで言う「デビモンが突っ込んで……
来なかった

デビモン「おっと、もうその手には乗らねえぜ。俺を怒らせ勝負を
つけるつもりだったんだろ!!」

デビモンの言っていることは半分あっている(、、、、、、、、)
何故半分かと言うと怒りで我を忘れてもらえれば少ないエネルギー

で対応できるからだ

しかしデビモンは前の戦闘で怒りに任せて敵に挑むとどうなるかを
経験しているので突っ込んでこなかった

ならあとの半分の答えは何か?

諒はスバルが叫ぶ前からこお思っていた

諒「(いくら光の力で闇を押さえてもいつも光がいるわけではない。
その闇を乗り越えて初めて人は強くなる。)」

そう、諒はスバルに自分1人の力でデビモンを倒してほしいがため

に今まで手を出していない
また諒はデビモンと戦う事前にこの事を暁達に話しているので誰も
文句を言うものはいない
またなのは達はバリアをフルパワーで張っていない
デビモンの技は基本的に相手に直接当てる技なので諒が避けた部分
を強化している
なのでなのは達は疲れてバリアが解けることはない
諒はただデビモンの攻撃を避けた
スバルが帰るのを信じて

sideスバル

ヒカリ「癒しの力か？」

ヤミ「破壊の力か？」

ヒカリ・ヤミ「どっちを選ぶ？」

ちよつと待つてよ！

どっちを選ぶつて1つしかくれないの？

ヤミ「当たり前だ！人はただでさえ力の1つを満足に扱えないのに
2つの力など持つていても宝の持ちぐされだ！」

ヒカリ「なのであなたが受け取る力は1つだけなのです。」

ちよつと待つてよ

もし僕が選ばなかったほうはどうなるの？

ヤミ「そんなの決まつてる。消えるんだよ。」

そんな！？

ヒカリ「どちらを望んでもあなたに罪はありません。力を手に入れ
るのにはかならず何かを犠牲にしなければなりません。」

待つてよ！力のためにどちらかを犠牲にしるつてそんなのおかしい
よ！！

ヤミ「口だけは達者なんだな！！いいか？この世に犠牲にしなくて平和になることなんてないんだよ！！かならず平和があればどこかでは誰もが絶望している場所がある！！この世に必要なのは優しさじゃない！！何かを切り捨てる“勇気”だ！！」

間違ってる！そんなの勇気じゃない！！

僕は知ってる

勇気は誰かを助けるために必要なもの！

何かを切り捨てた力なら僕はいらない！！

ヒカリ・ヤミ「！？」

君たちがどんな風に見てるのかは知らないけど僕が力を欲しいのは僕の恩人を助けたいから！！

彼は今も僕のために頑張ってる

何もできない僕を彼は必要としてくれた！！

そんな彼は大きな敵と戦おうとしている

僕は彼の支えになりたい！！

なのに力を手に入れるのに2人のうちどちらかを犠牲になんかしたら彼ならきつとそんな力を望まない！！

ヒカリ「本当にいいのですか？」

うん！僕は力はいらない！！

ヤミ「後悔するぞ？」

後悔なんかしない

2人が消えなくて済むなら後悔する必要なんかないよ！

ヒカリ「・・・ヤミ。」

ヤミ「ああ、こいつは」

ヒカリ・ヤミ「合格で（だ）！！」

えっ、どういうこと？

ヤミ「最初に言っただろ？『ここはお前を試す世界。』って。」

うん、確かに言ったよ

ヒカリ「そして私たちはあなたを試しました。そしてあなたは私たちが望む答えを言ってくれました。」

君たちが望む・・・答え？

ヤミ「そうだ。力を手に入れようとする奴は必ず私利私欲の為に使う。今までだってそうだった。」

「ってことは君たちは・・・」

ヒカリ「はい、何度も消えています。」

酷い！何でそんな人たちに力を与えたの！？

ヤミ「それが俺達の存在する理由だったからだ。」

存在する理由の為に君たちは何回も消えたの！？

ヒカリ「確かに何回も消え、何回も力を与えました。しかし後悔はしていません。」

「ど、どうして？」

ヤミ「お前に会えたからだ。」

僕に会えたから？

ヒカリ「そう、私達の力、つまり光と闇を両方の力を必要としたものには一生付いていくという使命があります。今までの者は私達のことを考えない者でしたがあなたは違った。」

ヤミ「お前は俺達のことを考え、力を他人の為に使うと言った。だから俺達はお前に付いていく！！」

じゃあ

ヒカリ「あなたに癒しの力を」

ヤミ「お前に破壊の力を」

ヒカリ・ヤミ「授けます（授ける）！！」

ありがとうございます、ヒカリ！ヤミ！

ヒカリ「それでは行きましょう。」

ヤミ「お前を待っている奴等の所に。」

うん！！

side 諒

それは突然起こった

俺にデビモンがデスクロウをしようとしたとき急にデビモンが苦し
みだした

諒「(いつたい何が?)」

そう思っていたらデビモンが光りだした

デビモン「ぐ、ぐわあああああ!!!」

そしてデビモンからついにあいつが出てきた

そいつは右手に白の剣、左手に黒の銃、右の背中は天使の翼、左の
背中は悪魔の翼、服装はルーチェモンFMフョールドアウンモードの格好をした男子がいた

???「ごめんね、諒君。」

諒「何言ってるんだ。俺はお前を信じてやってただけだ。謝るんなら
俺に力を見せてみるよ。・・・スバル。」

そう言うといつもの笑顔で言ってきた

スバル「任せてよ!」

そう言うときデビモンが突っ込んできた

諒「来たぜ!!」

スバル「行くよ!ヒカリ!!ヤミ!!」

スバルとデビモンの戦いが始まった

第14話 本当の勇氣！僕は君達を救いたい！！（後書き）

GREENが好きな作者の松上です

諒「和田光司さんが好きな主人公の諒だ。」

すずか「ポルノグラフィティが好きな後書き限定キャラのすずかです。」

ティアナ「みなさんお久しぶりです！ヒロインのティアナです！！
えーまずは

4人「AIさんありがとうございます！！」

ここでガンダムの名言が来るなんてな

諒「しかも教えてもらった名言がなんかこう胸に来る感じだったな。」

だろ！？やっぱり名言は最高だな

すずか「まだ感想も来てますしね。」

ああ、これは頑張らずに入られない

ティアナ「次回はいにスバル君の心の闇との最終決戦ね！！」

ああ、スバルには名言を言ってもらわないとな！！

諒「頑張れよ。」

ああ！！それじゃあすずか次回予告よろしく！！

すずか「はい！

次回 スバルVSデビモン 心の闇との最終決戦！！」

それじゃあ

諒「次回も」

4人「お楽しみにー！！」

第15話 スバルVSデビモン 心の闇との最終決戦!! (前書き)

話の展開が早い!!

今回はジエスター!! アーカムさんが教えてくれた名言です!

デビルメイクライで

『俺たちがスパイダの息子なら受け継ぐのは力じゃない! もっと誇り高い...魂だ!』

Byダンテ

『お前は行け。魔界に飲み込まれたくはあるまい。俺はここでいい。親父の故郷の、この場所が。』

Byバージル

『家族のために涙を流す悪魔のいるのかも。』

Byレディ

でした

男らしいですね

教えていただいてありがとうございます!!

第15話 スバルVSデビモン 心の闇との最終決戦！！

sideスバル

みんな信じてくれた

僕が帰って来ることを信じてくれた

だから僕は勝つ

僕の心の闇に！！

スバル「いくぞー！！」

side三人称

その戦いは一方的だった

デビモンの攻撃はスバルに当たらない

しかしスバルの攻撃はデビモンに当たる

デビモンは攻撃の当たらなさ、そして戦いの初心者にここまでボロボロにさせられてる自分に怒り我を忘れ“攻撃”しかしていない
しかしスバルは必要最低限にしか避けておらず相手の隙をうまくついている

デビモン「ちょこまかと動くんじゃあねえー！！！！！！」

スバル「何の考えもなしに動かないよ。」

スバルの言葉にデビモンは動きを止める

デビモン「何だと!？」

スバル「確かに君は強い。前までの僕ならすぐに負けていたのかもしれない。だけど君にはなくて僕にあるものがある！！」

デビモン「俺になくてお前にあるものは何だっというんだよ！！！！」

デビモンは声を荒げながらスバルに聞く

そしてスバルは答えた

スバル「それは絆さ。」

デビモン「絆だと！？笑わせるな！！俺はデジモンでもありお前の心でもあるんだ！！お前の親父が死んだときおまえはどうだった！？お前は裏切られたと思いい絆を深めるのをやめただろぅが！！そんなお前に絆があるだと！？冗談は顔だけにしろよ！！！」

デビモンはスバルに叫びながら言う

しかしスバルは喋り続ける

スバル「確かに僕は一度何もかも信じられなくなった。だけど！！絆とは決して断ち切ることでできない深い繋がり！たとえ離れていても心と心が繋がっている！だから僕は絆の為に戦う！！だから君を倒す！！！」

スバルが宣言するとデビモンが突っ込んできた

デビモン「ふざけんなー！！！」

スバル「大丈夫。もう君を会うこともないと思う。さよならもう一人の僕。」

スバルは白い剣で大きく円を描いた

そうすると丸型の金色の扉が出てきた

スバル「ヘブンスゲート！！！」

そう言うと扉が開いた

デビモン「何だと！？」

デビモンは勢いがありすぎて止まることができなかった

デビモン「嫌だ！！死にたくない！！助けてくれ！！」

しかし誰も助けない

スバル「今までありがとう。もう一人の僕。」

デビモン「うわああああああ！！！！！！！！」

そして扉が閉まった

スバルVSデビモン

勝者 スバル

side 諒

無事スバルが勝った

俺は目を瞑り右手を挙げた

スバルは笑顔で右手で俺の手を叩いた

諒「お疲れさん、お前が勝つことを信じてたぜ。」

スバル「ありがとう。」

そして俺達は暁達の所に向かった

暁「バカヤロー!!!」

暁の声が鼓膜を震わせる

諒「だから俺はスバルを信じてたから戦いに参加しなかったんだって。」

俺とスバルは暁から説教されている

俺はスバルとデビモンの戦いに参加しなかったから

スバルはデジヒュージョンの時デビモンの力を使ったから

ヨイリー「シドウちゃん。そのくらいにしてあげなさい。」

暁「しかし、ヨイリー博士!」

ヨイリー「いいじゃない。子供は大人の引いたレールを歩くより自分が作るレールを歩いたほうがいい。中身がどうであれ結果がすべてよ。」

ヨイリー博士は暁を説得し暁の説教が終わった

諒「スバル、お前の相棒は?」

俺が聞くとスバルは両手についていた黒と白のブレスレットを見せてきた

スバル「これが僕の相棒、白のブレスレットがヒカリ、黒のブレスレットがヤミだよ。」

ヒカリ「治癒の力を授けるもの、ヒカリです。」

ヤミ「破壊の力を授けるもの、ヤミだ。」

スバルが説明するとヒカリとヤミが挨拶してきた
なので俺達も挨拶した

諒「俺は新井諒だ。」

ティアナ「私は新井ティアナです。」

フェイト「フェイト・新井です。」

はやて「八神はやてや。」

なのは「高町なのはです。」

暁「俺は暁シドウだ。」

光子郎「泉光子郎です。」

長官「私は長官だ。」

ヨイリー「私はヨイリーよ。」

みんなが挨拶をすると急に警報がなった

暁「なにことだ!？」

暁が聞くとWAXAの局員が走ってきた

局員「大変です!!コダマタウン上空に未確認生物が突然現われま
した!!」長官「映像をこちらに流せ!!」

局員「了解!!」

そういつて局員は未確認生物の映像を出した

その姿はまるで

ヨイリー「化け物ね・・・」

そう、未確認生物は文字道理化け物だ

スバル「これ、なんか体の変だよ。何ていうかいろんな生きものを
合体させたみたいないな感じ。」

諒「正解だスバル。こいつは合成魔獣“キメラモン”だ。」

全員「キメラモン?」

俺の言葉にみんなが聞き返した

諒「こいつは頭はカブテリモン、髪はメタルグレイモン、身体はグ
レイモン、上羽根はエンジエモン、下羽根はエアドラモン、上腕は
デビモン、右腕はスカルグレイモン、左腕はクワガーモン、足はガ

ルルモン、尻尾はモノクロモンで構成されている。」

ティアナ「お兄ちゃん、こいつが出てきたってことは……」

諒「ああ、闇の帝王がついに動きだしたってことだ！」

全員「!?!」

俺の言葉を聞き全員顔が真剣になった

局長「このままでは10分後にはコダマタウンに到着します!」

長官「みんなよく聞いてくれ!」

長官の顔を俺達は真剣な顔で見た

長官「これが闇の帝王との最終決戦だ!いいかこれがこの隊にする最初で最後の命令だ!全員死ぬな!」

全員「はい!」

長官「全員……出動!」

全員「了解!」

俺達は最終決戦に向かった……

第15話 スバルVSデビモン 心の闇との最終決戦!! (後書き)

えー今回は諒達は最終決戦のため作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかと」

アフロディ「諒に力を与えた神、アフロディでやります。」

まずは

3人「ジエスター!!アークムさんありがとうございます!!」

今回は最後の言葉っぽいな

アフロディ「今回初めて名言を読んだけどかっこいいね!!」

だろ!これが名言の力だ!

すずか「ついに最終決戦ですね!!」

ああ、だが次はキャラの新能力やこの小説だけの設定を書くことと思う

アフロディ「最終決戦の前に確認だね?」

そう言うこと

すずか「それじゃあみなさん!!」

アフロディ「次回も」

3人「お楽しみにー!!」

キャラ能力（前書き）

今回はキャラの能力の確認及びオリジナル設定の解説です！！
今回はまたAIさんが教えてくれました！

ガンダム種デスで

『あんたは俺が討つんだ！今日！ここで！』
Byシン・アスカ

『明日が欲しいんだ、どんなに苦しくても、変わらない世界は嫌なんだ！』

Byキラ・ヤマト

ロクマンゼロで

『俺は正義の味方でもなければ、自分を英雄と名乗った覚えもない、俺はただ自分が、信じる者のために、戦ってきた、俺は悩まない、目の前に敵が現われたなら、叩き切るまでだ！』

Byゼロ

やはりゼロの言葉は格好良いですね！！
ただ、死亡フラグみないになりそうですがさせません！！
教えてくれてありがとうございます！！！！

キャラ能力

主人公

新井諒（諒）

能力：1・電波変換

- 2・NARUTOの忍術、幻術、体術使用可能
- 3・イナズマイレブンの技使用可能
- 4・BLEACHの技使用可能、武器の転送
- 5・クロスヒージョン
- 6・ロックマンエグゼ、流星のロックマンのすべての変身可能
- 7・デジモンに変身可能

ヒロインの1人

新井ティアナ

能力：1・電波変換

- 2・デジヒージョン
- 3・すべての風の技使用可能
- 4・風遁螺旋手裏剣の使用可能

ヒロインの1人

フェイト・新井

能力：1・電波変換

- 2・デジヒージョン
- 3・すべての雷の技使用可能
- 4・千鳥流しの使用可能

ヒロインの1人

八神やがみはやて

能力：1・電波変換

2・デジヒュージョン

3・すべての水の技使用可能

4・卍解・大紅蓮氷輪丸使用可能

ヒロインの1人

高町たかまちなのは

能力：1・電波変換

2・デジヒュージョン

3・すべての炎の技使用可能

4・マキシマムファイアの使用可能

原作の主人公

星河ほしかわスバル

能力：1・デジヒュージョン

2・バーストモード

頼りになるヒーロー

暁あかつきシドウ

能力：1・デジヒュージョン

2・バーストモード

部隊の隊長

長官

能力：1・デジヒュージョン
2・バーストモード

やさしき科学者

ヨイリー

能力：なし

異世界からの訪問者

いすみつこうじろう
泉光子郎

能力：なし

オリジナル設定

クロスシステム：諒だけが使うことができる力

能力の同時使用や技の威力の増大など様々な力がある

また誰かを守りたい気持ちや絆力が高いとさらなる力が発揮する
今のLEVELは7

デジヒュージョン：電波変換と異なりデジモンの力を使うことができる
また容姿もそのデジモンの姿になる

バーストモード：力を100%解放する力

能力などすべての力をMAXにする

ただ制限時間があり

キャラ能力（後書き）

今回も作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかと」

アフロデイ「アフロデイで頑張ります！」

ます

3人「AIさんありがとうございました!!」

今回の名言はラストを飾るのにふさわしい名言だな

アフロデイ「そうだけど・・・能力説明遅くないかな？」

ああ、でもあまり早く書きすぎるとネタばれになってつまらなくなるだろ？

アフロデイ「まあ、そうだけどね。」

それより次回から最終決戦だ!!

すずか「ついにオリジナルも大詰めだね！」

ああ、頑張って書くぜ!!

アフロデイ「頑張ってるね！」

おう！それじゃあすずか、次回予告よろしく！

すずか「はい！」

次回 最終決戦！1」

それじゃあ

アフロデイ「次回も」

3人「お楽しみにー！」

第16話 最終決戦！1（前書き）

ついに最終決戦！！

ここで名言を紹介だ！

今回教えてくれたのは聖なる夜天さんです！！

ツバサ RESERVOIR CHRONICLEで

『さくらは絶対死なせない！』

『やると決めたことはやる、それだけだ』

By小狼

教えてくれてありがとうございます！！

第16話 最終決戦！1

俺達闇の帝王対策部隊はWAXAの広場にいる

長官「いいか！これよりコダマタウン向かうが2人1組で行動して
もらう！まず高町なのは！」

なのは「はい！」

長官「フェイト・新井！」

フェイト「はい！」

なのはとフェイトのペアか

長官「1組目はこの2人だ。次八神はやて！」

はやて「はい！」

長官「新井ティアナ！」

ティアナ「はい！」

成る程、この2人のペア、いいチームだ

長官「次、星河スバル！」

スバル「はい！」

長官「泉光子郎！」

この2人がペアなんてな

長官「最後に私と暁だ。」

暁「ちよつと待てよ！長官と暁デジヒューションできるのかよ！？」

暁「俺はエンジEMONとデジヒューションする。」成る程、スバル
はヒカリとヤミがいるからな

長官「私はいつかいる。」

????????「俺の名前はベルゼブモン。よろしく。」

まさか、長官の相棒がベルゼブモンなんて……

暁「俺は？」

人数的に俺は1人か？

暁「お前はラスボスの所に行け。」

長官「我々がキメラモンを倒す、暁はヤミの帝王を倒してくれ！」

そう言うことか

諒「わかった、闇の帝王は俺が倒す!!」

長官「ありがとう、時間がない!!最終決戦に行くぞ!!」

全員「おう!!」

諒「電波変換!新井諒、オン・エア!」

なのは「電波変換!高町なのは、オン・エア!」

フェイト「電波変換!フェイト・新井、オン・エア!」

はやて「電波変換!八神はやて、オン・エア!」

ティアナ「電波変換!新井ティアナ、オン・エア!」

暁「デジヒュージョン!暁×エンジェモン!!」

長官「デジヒュージョン!葛城×ベルゼブモン!!」

長官の上の名前つて葛城つていうんだ・・・

光子郎「テントモン進化です!!」

テントモン「はいな!!」

テントモン「テントモン!進化!・・・カプテリモン!!カプテリ

モン!超進化!・・・アトラークカプテリモン!!」

みんなの姿は

俺はフォルテクロスロツクマンで右手には天鎖斬月を持っている

なのはは魔法少女リリカルなのはに出てくるのはのバリアジャケット、右手にはレイジングハートの様な杖を持っている

フェイトは魔法少女リリカルなのはに出てくるフェイトのバリアジャケット、左手にはバルディッシュの様な鎌を持っている

はやては魔法少女リリカルなのはA'sに出てくるはやてのバリア

ジャケット、右肩に氷輪丸を掛けている

ティアナは魔法少女リリカルなのはStrikerSに出てくるテ

ィアナのバリアジャケット、両腰には拳銃を装備している

スバルはルーチェモンFMの格好、右手に白の剣、左手に黒の銃を

持っている

暁はホーリーエンジェモンの姿

長官はベルゼブモンの姿

長官はベルゼブモンの姿

長官はベルゼブモンの姿

テントモンは赤の兜虫の様なデジモン、アトラーカブテリモンにワ
ーブ進化した

長官「それでは出動！！！」

全員「了解！！」

俺達はウェーブロードに乗って決戦地のコダマタウンに向かった・

・

第16話 最終決戦！1（後書き）

今回も作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかと」

アフロディ「アフロディでやります。」

ますは

3人「聖なる夜天さん教えてくれてありがとうございます！！」

今回は名言の説明まで教えてくれました！！」

すずか「オリジナル編では使わないの？」

使いたい！！

でもシーンを考えたら原作入ってからのほうがいいだろ

アフロディ「難しいね。」

ああ、でも使ってみせる！！

アフロディ「頑張ってるね。」

ああ！！

それじゃあすずか！

次回予告よろしく！！

すずか「はい！

次回 最終決戦！2 なのはとフェイト」

それじゃあ

アフロディ「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

第17話 最終決戦！2 なのはとフェイト（前書き）

今回はなのはとフェイトの話です!!

今回教えてくれたのはWindさん

ありがとうございます!!

それでは名言です

FINAL FANTASY2で

『未来を信じ、現在を貫く……それだけだ!』

Byフリオニール

FINAL FANTASY9で

『誰かを助けるのに理由があるかい?』

Byジタン・トライバル

TOVで

『選ぶんじゃない、もう選んだ。』

Byユーリ・ローウエル

新機動戦記ガンダムWで

『ゼクス、強者など何処にもいない!人類全てが弱者なんだ。……

俺もお前も弱者なんだ!』

Byヒイロ・ユイ

たくさん教えてくれてありがとうございます!!

第17話 最終決戦！2 なのはとフェイト

side 諒

俺達は今ウェーブロードを使いコダマタウンに向かっている

そこに電話が鳴った

暁「どうしました!？」

ヨイリー「大変よ!!コダマタウンの北、東、西、南エリアにエネルギー反応よ!!」

長官「闇の帝王め!!東西南北及び上空からコダマタウンを消すつもりか!!」

光子郎「長官!手分けして行ったほうがいいと思います!!」

光子郎の言うとおり手分けして行ったほうがいい

諒「俺もそれに賛成だ。」

長官「わかつている。まず北エリアはなのは君とフェイト君、東エリアははやて君とティアナ君、南エリアはスバル君と光子郎君、最後に西エリアは私と暁で行く。諒君はキメラモンの所に行ってくれ。そして戦いが終わったチームは必ず救援に向かうこと。いいな!!」

全員「了解!!」

そして俺達はそれぞれのエリアに向かった

side 三人称

ここは北エリア

ここに一匹のデジモンがいた

????????????「ふん、こんな町俺の力ですべて破壊してやる

!!」

「「待ちなさい!!」」

そこに2人の少女が現われた

高町なのはとフェイト・新井だ

なのは「あなたは一体誰!？」

なのはがデジモンに聞く

????????? 「俺の名前はメタルシードラモン!! ダークマ
スターズの1匹で闇の帝王の幹部だ!!」

そうやつはデジモンアドベンチャーに出てきて選ばれし子供たちを
苦しめたダークマスターズの1匹、メタルシードラモンだ

メタルシードラモン「俺の邪魔をする奴は例えガキでも破壊するの
み!!」

そう言うとメタルシードラモンはある構えをとった

メタルシードラモン「アルティメットストリーム!!!」

そう、ある構えとはメタルシードラモンの必殺技アルティメットス
トリームだ

メタルシードラモン「消えてなくなれ!!!」

ドッカーンンンン!!!

アルティメットストリームは2人を直撃した

メタルシードラモン「この程度か!!! こんなもんなら新井諒つて
奴も対したことないな!!! なんてつたてこいつ等を助けていい気
になつてる奴だもん!!! はははははははははははは!!!」

メタルシードラモンは勝利を確信し思つたことを叫ぶ

しかし煙の方からある音が聞こえる

チツチツチツチツ

ポウポウポウポウ

メタルシードラモンは驚いて煙の方を向いた

しかし煙が晴れたが「そこには」誰もいなかった

メタルシードラモン「な、なんだ。驚かせやがって。てつきり生き
「ズボッ!!!」えっ!?!?」

メタルシードラモンは驚いた

目の前には雷を手に集め自分の体を貫いてきたフェイトがいたから

フェイト「千鳥・・・」

メタルシードラモンは体を貫かれた痛みによって悲鳴をあげようとした

しかしメタルシードラモンは忘れていた

ここに現われた少女は“2人”いたこと

なのは「マキシマムファイアー！」

スパッ！！

なのはは足から出したマキシマムファイアでメタルシードラモンの尻尾を切り落とした

メタルシードラモン「

！！！！！！！！」

この世の言葉とは思えない言葉で悲鳴を出した

フェイト「諒は強くて優しいんだよ。私たちを助けていい気になんか一度もなつてない。」

なのは「諒くんは私達を変えてくれた大切な人。大切な人をバカにするデジモンは」

なのは・フェイト「許さない！！！！」

なのはとフェイトがメタルシードラモンに言うとポケットから紅と蒼のデジヴァイスを取り出した

なのは「全力全快であいつを倒すよ！スツエーモン！！」

スツエーモン「はい！！諒をバカにしたことを後悔させてやりましょう！！！！」

フェイト「チンロンモン、準備はいい？」

チンロンモン「うん！！諒は僕達を認めてくれた恩人！！諒をバカにする奴は許さないよ！！！！」

なのはとフェイトはこう叫んだ

なのは・フェイト「デジヒュージョン！！！！」

そうするとなのはは炎に、フェイトは雷に包まれた

メタルシードラモン「く、なにをするきだ。」

ようやく痛みが和らいだメタルシードラモンは2人の様子を見ていた

そして炎と雷が次第に大きくなっていった

そして炎と雷は光に包まれた

メタルシードラモンはあまりにも眩しかったので目を瞑った

そして光は納まりメタルシードラモンは目を開けた

そこにいたのはなのはとフェイトではなく紅き姿をした不死鳥を思わせる鳥と、蒼い体をした伝説の龍を思わせる龍がいた

????「高町なのは×スーツエーモン」

紅き鳥は言った

????「フェイト・新井×チンロンモン」

蒼き龍は言った

メタルシードラモン「お前等は一体誰なんだ!!!!!!」

メタルシードラモンは叫んだ

????「私は高町なのは。そしてスーツエーモン」

紅き鳥、なのはは言った

????「私はフェイト・新井。そしてチンロンモン」

蒼き龍、フェイトは言った

メタルシードラモン「ふざけんなー!!!!!!アルティ

メットストリーム!!!!!!」

メタルシードラモンは今までにない力でアルティメットストリームを放った

しかしそれは届くことはなかった

なのは「紅炎!!!!!!」

フェイト「蒼雷!!!!!!」

2人の攻撃によりアルティメットストリームはかき消され、メタルシードラモンは悲鳴をあげずに消えた

そして2人はいつもの姿に戻りハイタッチをした

しかしハイタッチをしたあとすぐに顔が真剣になった

なのは「早く行こう!!!!!!」

フェイト「諒が戦つてるところに!!!!!!」

そして2人は諒が戦っている場所に行った

メタルシードラモンVSなのは・フェイト
勝者なのは・フェイト

第17話 最終決戦！2 なのはとフェイト（後書き）

今回は作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかと」

なのは「今回の話の主役の1人の高町なのはと」

フェイト「もう1人の主役のフェイト・新井で頑張ります！」
まずは

4人「Windさんありがとうございます！！」

今回教えてもらった言葉はライバルなどに言いそうな名言だったな
それからなのは、フェイトとりあえずお疲れ！！

なのは「本当に今回は怒っちゃったよ！！」

フェイト「うん、あんな奴がまた出てきたら体をこの世に存在させ
ない！！」

なのは「頑張ろうね、フェイトちゃん！！」

フェイト「頑張ろう！！」

（2人を怒らせたらダメだ！）次回ははやととティアナの話だ！！

すずか、次回予告よろしく！

すずか「はい！

次回 最終決戦！3 はやととティアナ」

それじゃあ

なのは・フェイト「次回も」

4人「お楽しみにー！」

第18話 最終決戦！3 はやてとティアナ（前書き）

今回ははやてとティアナです！！

話が急なのはごめんなさい！

今回教えてくれたのはジェスターIIアーカムさんです
ありがとうございました

デビルメイクライシリーズで

『Devils never cry.（悪魔は泣かない。）』
です

ありがとうございました！！

第18話 最終決戦！3 はやてとティアナ

side三人称

なのはとフェイトがメタルシードラモンと出会った頃

ここ東エリアにも一体のデジモンがいた

???????「ホント、つまないよな。こんな町の人間だけを殺すなんてさ。誰か僕の相手をしてくれないかな?じゃないとこのエリアの人間を殺しちゃうよ・・・」

「ちよい待ち!!」

???????「誰だい!?!」

デジモンの呟きを止めた少女に名前を聞いた

はやて「ウチは八神はやてや!!」

少女、八神はやては名乗った

はやて「あんたは誰や!!」

はやてはデジモンに名前を聞いた

???????「僕かい?僕はピノッキモン。ダークマスターズの1人で闇の帝王の幹部さ。」

そう、こいつもデジモンアドベンチャーに出てきたダークマスター

ズの1人で汚い手で太一と大和を戦わせた奴だ

ピノッキモン「ねえ、僕と遊ばない?」

はやて「何やて?」

はやてはピノッキモンの言葉を聞いて驚いた

ピノッキモン「僕さ、闇の帝王に時間までここで待機って命令されて暇だったんだよね!。だからさ僕と遊ぼう。遊びは・・・殺し合いをしよう。君が死ぬと君の負け。ね!楽しそうでしょ!!」

ピノッキモンの言葉を聞いてはやては思った

こいつは危険だった

ピノッキモン「じゃあスタート!!」

はやて「!?!」

はやてはピノツキモンの言葉を聞いた瞬間空を飛んだ
ドカーーーーーー！！

はやてがいた場所は煙に包まれていた

ピノツキモン「へえーやるじゃん！これなら退屈しないぞ！！」

ピノツキモンはそう言うと思って持っていたハンマーを地面に叩きつけた
「ブリットハンマー！！」

はやてはぎりぎり避ける

ピノツキモン「ほらほら頑張って！！君が死んだら新井諒を殺すからさー！！」

ピノツキモンの言葉を聞いてはやてが動きを止めた

はやて「何やて？」

ピノツキモン「君が死んだら新井諒を殺すって言ったのさ。あいつ少し人を助けたからってヒーロー気取り。やってることは僕達と同じなのにむかつくんだよ！！」

ピノツキモンがそう言うのと誰かがピノツキモンに近づいた
一体誰か？

答えはティアナだ

しかしティアナは何故隠れていたのにばれなかったか？

答えは簡単、ピノツキモンははやて“しか”会っていない
なのでティアナがいることに気が付かなかった

ティアナ「螺旋丸！！」

ティアナはピノツキモンに螺旋丸をぶつけた

あまりにも急だったためピノツキモンはガードできず直撃した

ピノツキモン「ぐわああああああ！！！！」

ピノツキモンは螺旋丸をくらい回転しながら“はやての所”に飛ばされた

はやては肩から氷輪丸を出してピノツキモンに構えた

はやて「水氷鱗！！」

はやてが水氷鱗を使うとピノツキモンの右腕が凍り付き使えなくなった

ピノツキモン「僕を傷つけていいと思ってるのか!？」
ピノツキモンは声を荒げて言うがは yet は冷静に言った
は yet 「あんたみたいな奴に諒君を侮辱できるわけないやん。あんに何がわかるんや? 諒君の何がわかるんや!！」
は yet はそう言うのとポケットから緑のデジヴァイスを出した
ティアナ「あなたにお兄ちゃんを殺させない!! お兄ちゃんは人のために戦ってる!! 少しの人だけ助けることなんかしない!! あなたとお兄ちゃんを一緒にしないで!!！」
そう言うのとティアナはポケットから白のデジヴァイスを取り出した
は yet 「出番や、シエンウーモン!」
シエンウーモン「ワシらの大切な友、諒は殺せん!!」
ティアナ「いくよ、バイフーモン!」
バイフーモン「今回ばかりは俺たちも許せないよ!!」
そしては yet とティアナは叫んだ
は yet ・ティアナ「デジヒュージョン!!!」
は yet は水に、そしてティアナは風に包まれた
ピノツキモン「な、何をするんだよ!!」
左手だけでハンマーを構えながら叫ぶ
そして水と風は次第に大きくなり光りだした
ピノツキモン「目があ、目がああ!!」
ピノツキモンがムスカの真似をしていると光が納まりピノツキモンは目を開けた
そこには甲羅があり、その甲羅から大きな木が生えている頭が2つある緑の亀と、大きな牙を持ち、白い毛で覆われた虎がいた
??? 「八神は yet xシエンウーモン」
緑の亀は言った
???? 「新井ティアナxバイフーモン」
白い虎は言った
ピノツキモン「お、お前たちは誰なんだよ!!!」
ピノツキモンは叫んだ

「????」ウチは八神はやて。そしてシエンウーモン」
緑の亀、はやては言った

「????」私は新井ティアナ。そしてバイフーモン」
白い虎、ティアナは言った

ピノッキモン「僕を馬鹿にするな——————!!!!!!」ブリ
ットハンマー!!!!!!」

ピノッキモンは最大パワーでブリットハンマーを使った

しかし2人の怒りに触れたピノッキモンは“死”と言う未来しかな
かった

はやて「霧幻!!!!!!」

ティアナ「金剛!!!!!!」

2人の攻撃によりブリットハンマーは消えピノッキモンは跡形もな
く消えた

はやて・ティアナ「これが愛の力(だ)!!!!!!」

そう叫ぶと2人はデジヒュージョンをといた

はやて「ほな行こか!!!!!!」

ティアナ「お兄ちゃん^んの所に!!!!!!」

そして2人も諒が戦っている場所に向かった

ピノッキモンVSはやて・ティアナ

勝者 はやて・ティアナ

第18話 最終決戦！3 はやてとティアナ（後書き）

今回は作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかと」

はやて「今回の話の主役の八神はやてと」

ティアナ「新井ティアナで頑張ります！！」

まずは

4人「ジエスター」アーカムさんありがとうございました！」

今回はなんと初の英語の名言！

すずか「でも使えますか？」

・・・頑張るさ！

はやて「しかし今回の敵はムカついたで！！」

ティアナ「あんな敵が来たら苦痛を与えてから消してあげるんだから！！」

はやて「頑張るな、ティアナちゃん！！」

ティアナ「頑張ろうね、はやてちゃん！！」

（前の話でもこんな話が有った・・・怖い！！）

すずか「えつと

次回 最終決戦！4 スバルと光子郎」

そ、それじゃ

はやて・ティアナ「次回も」

4人「お楽しみにー！！」

第19話 最終決戦！4 スバルと光子郎（前書き）

今回は前編です！！

今回はなんとあいつらが！？

今回はAIさんが教えてくれた名言です！！

Zガンダムで

『歯あ食いしばれ！そんな大人・・・修正してやるっ！』

『命・・・命は力なんだ・・・命はこの宇宙を支えてるものなんだ
』！』

Byカミーユ・ビダン

ガンダムUCで

『人の心を、哀しさを感じる心を知るものなら・・・ガンダム！俺
に力を貸せ！！』

Byバナージ・リンクス

ありがとうございます！！

第19話 最終決戦！4 スバルと光子郎

side 三人称

殺風景の景色

その言葉しか見つからない景色

植物があり、昆虫が居たり、鳥類などがいた場所は茶色の土が一面に広がっていた

スバル「何もない……………」

光子郎「どうしてここは何もないんだ？」

スバルと光子郎はそれぞれ思ったことを口にする

そう、ここは南エリア

自然がたくさんあることで知られるがあるのは土と“クレーター”のみ

スバル「一体どうしてクレーターがあるんだ？隕石が降ったにしては威力が強すぎるし…」

光子郎「わかりません。ただこれはデジモンの力じゃないと無理でしょう。」

アトラカブテリモン「！？光子郎はん！！10時の方角に何かいますで！！」

それを聞いたスバルと光子郎はお互い目で合図した

スバル「行こう！何かわかるかもしれない！」

光子郎「アトラカブテリモン、お願いします！！」

アトラカブテリモン「はいでんがな！！」

スバルと光子郎、アトラカブテリモンは10時の方角に行った

????????「キャノン！！」

ドカーカーカーカー！！！！

スバル「何だあの機械でできた物は？」

アトラ―カブテリモン「光子郎はん！！あれは確か・・・」

光子郎「ムゲンドラモン・・・」

スバル「光子郎さん、ムゲンドラモンってあれもデジモンなんですか？」

スバルは何か知っている光子郎に質問した

光子郎「ムゲンドラモンは最強のデジモンといっても過言はありません！！」

光子郎は自分がいた世界でデジタルワールドに行ったことがあり、その時ムゲンドラモンと出会い圧倒的な力で負けそうになったことがある

しかしその時は勇気の紋章の持ち主である八神太一とそのパートナーデジモンであるアグモンが究極体のウオーグレイモンのお陰でなんとか勝てたが今ウオーグレイモンはいない
勝つ事は0に等しい

“敗北”その言葉が光子郎の頭をよぎった

スバル「・・・郎・ん・光・さ・！光子郎さん！」

スバルの声により光子郎は現実に戻ってきた

光子郎「ダメです。勝てません。」

スバル「な、何言ってるんですか！まだ戦ってもいないのに諦めたらダメです！！」

光子郎の弱気な言葉にスバルは驚き勇気付けようとする

光子郎「あいつは最強なんです！僕達がいくら頑張っても勝てるわけありません！！」

しかし光子郎は勝てないと言い張る

スバル「・・・じゃあ僕だけでも行きます。」

光子郎「！？だ、ダメです！！僕の話をちゃんと聞いてましたか！？僕達が行ったて負けるだけです！！」

スバルの言葉を聞いた光子郎は必死に残るよう言う

スバル「僕は何もしないで負けるのは嫌だ！！だから僕は行きます！！行くよ、ヒカリ！ヤミ！」

ヒカリ・ヤミ「了解！！」

スバルは光子郎の言葉を振り切つてムゲンドラモンの所に向かった
光子郎「スバル君・・・」

アトラカプテリモン「光子郎はん、わても行きます！」

光子郎「！？ダメです！！君は知ってる筈です！奴がどれだけ強いのかを！！」

アトラカプテリモンの言葉を聞き光子郎は行かせるのを止めようと
とする

アトラカプテリモン「確かに太一はんとウオーグレイモンがいないと勝つ可能性は0に等しい。やけど0やない。やからわてはそれに賭けてみたい。」

光子郎「アトラカプテリモン・・・」

アトラカプテリモンの言葉を聞き光子郎は背中から降りた

アトラカプテリモン「ほな、行つてきます。」

光子郎はアトラカプテリモンの背中を見ていた

sideスバル

僕は今ムゲンドラモンの前にいる

スバル「おい、お前は何しに来た！！」

僕はムゲンドラモンに大きい声で話し掛ける

ムゲンドラモン「私の名はムゲンドラモン、ダークマスターズの一
体で闇の帝王の部下、そして私がここに来た理由、それは・・・」

スバル「それは？」

僕は危険を察知した

ムゲンドラモン「お前を倒すために来た！！ キヤノン！！！！」

僕はぎりぎり避けた

キヤノンが命中したところは直径50mくらいのクレーターがで

きた

ムゲンドラモン「ほお、避けたか。だが次はない!!」
????????????「ホーンバスター!!!!」

ドカーン

ムゲンドラモン「まだカスが居たか。」

そこには大きな赤い兜虫がいた

スバル「アトラーカーブテリモン!!」

アトラーカーブテリモン「助けに来ましたで!!」

これは嬉しい救援だ!

スバル「頑張つてムゲンドラモンを倒そう!!」

アトラーカーブテリモン「はいでんがな!!」

ムゲンドラモン「キャノン!!!!」

僕とムゲンドラモンの戦いが始まった

side 光子郎

また僕は逃げてしまった

どうしてみんな勇敢に戦えるのでしょうか?

わかりません

友達が危険な目に合っているのに僕は逃げているなんて

みなさんならどうしますか?

光子郎「と考えるても答えてくれる人はいませんが・・・」

??「なら俺達が答えてやるよ、光子郎!」

嘘だ、あの人はここにいない

でも確かに聞こえた

???「俺達は仲間だ。お前が悩んでいるんだからそれを聞く。だ

ら、光子郎?」

まただ、あの人もここにはいないのに声が聞こえた

？「光子郎君、怖いって思うのは悪くないの。」

？？「でも逃げてばかりじゃダメだよ光子郎君！」

「まただ、また聞こえる

幻聴なんかじゃない

？「光子郎、君は僕と一緒にデータを信じすぎるんだ。だからもつと自分の意志に自信を持てよ！」

？？？「光子郎さん、どんなに辛くても希望を捨てちゃダメだ。今まで負けそうになったことが有ったけど僕達は諦めなかった、そうでしょ！！」

？？？「だけど私達は諦めなかった。そして最後には笑った。だから諦めないで。私達は今も光子郎さんの帰りを待ってる。」

ありがとうございます

太一さん、ヤマトさん、空さん、ミミさん、丈さん、タケル君、ヒカリさん

僕・・・諦めません！！

今まで辛いことがありましたが皆さんと一緒に乗り越えてきました
太一「光子郎、今辛いことを一緒に乗り越える仲間が俺達じゃない。」

ヤマト「今一緒に辛さを乗り越える仲間はスバル達だろ？」

はい、そうです

丈「じゃあ君が今すべき事はなんだ？」

ムゲンドラモンを倒すことです！！

スバル君と一緒に！！

タケル「これなら安心だね、お兄ちゃん！」

ヤマト「ああ、何て言っただって光子郎は俺達の仲間だ！こんなところで挫けたりなんかしない！」

空「だから、少しだけ光子郎君に私達の力をあげるわ。」

皆さん力ですか？

太一「俺の勇気！」

ヤマト「俺の友情！」

空「私の愛情！」

ミミ「私の純真！」

丈「僕の誠実！」

タケル「僕の希望！」

ヒカリ「私の光！」

全員「お前（光子郎）（光子郎君）（光子郎さん）に力に！！」

皆さんの力が僕にみなぎってくる

太一「行ってこい！光子郎！」

ヤマト「仲間の所に！」

はい！皆さん行ってきます！！

全員「いつてらっしゃい！！」

僕はスバル君達の所に向かった

side アフロディ

アフロディ「まったく、ヒヤヒヤしたよ。」

???「だがこれで光子郎君達は勝つ。」

アフロディ「まったく、あなたの言うことは無理にも程があります。

選ばれし子供たちをこの世界に一時的に連れて来いなんて。あなた

がすれば良かったんじゃないですか？“最高神様”。」

最高神「これはあなたが管理している世界。あなたがしないと意味

がありません。」

まったく・・・諒

また今度電話してきたときは愚痴を聞いてもらってからね

sideスバル

強すぎる！

これが最強の力！？

服はぼろぼろ、右足が折れてるし、左腕は血を流しすぎて力が入らない

天使と悪魔の羽根も半分くらいもげてない

アトラーカブテリモンも退化してテントモンになっている

絶望的だ

ムゲンドラモン「死ねー！ー！ー！ー！」

考え事に集中しすぎてムゲンドラモンの攻撃に気付くのが遅れた
もう避けられない！！

僕は目を瞑った

「やめてくださいー！ー！ー！ー！ー！」

その声が聞こえた瞬間ムゲンドラモンの攻撃がとまった
声の聞こえた方を見ると光子郎さんがいた

side三人称

光子郎の声で攻撃をやめたムゲンドラモン

そのお陰でスバル無事だった

ムゲンドラモン「何のようだ、力を持たない人間？」

光子郎「お前を倒しに来ました。」

光子郎がそう言うともゲンドラモンは笑いだした

ムゲンドラモン「はははははははははは、力を持たない人間か私を倒す
？冗談はやめろ。」

光子郎「冗談なんかじゃありません。僕はお前を倒しに来ました！
！」

テントモン「光子郎はん」

テントモンが歩きながら光子郎の所に来た

光子郎「テントモン、今度は僕も戦います。だからもう一度戦ってくださいか？」

光子郎はテントモンに聞く

テントモン「もちろんでんがな！わては光子郎はんのデジモンさかい。」

ムゲンドラモン「別れの挨拶はすんだか？」

光子郎「別れじゃありません！始まりなんです！！テントモン！進化です！！」

そう叫ぶと光子郎の胸から8つの紋章が浮かび上がりテントモンのなかに入った

テントモン「力がみなぎってくる！

テントモン！！ワープ進化！！

ヘラクルカブテリモン！！！！

テントモンは8つの紋章の力で究極体のヘラクルカブテリモンに進化した

ムゲンドラモン「な、バカな！！」

光子郎「スバル君！！」

名前を呼ばれたスバルは光子郎の方を見た

光子郎「僕ができるのはここまでです！！一緒に勝ちましょう！！」それを聞いたスバルは頷き決心した

スバル「ヒカリ、お願い」

ヒカリ「わかっています！ファイナルヒール！」

ヒカリが技を使うとスバルは全回復した

スバル「ヤミ、お願い」

ヤミ「了解！バーストモード始動！！」

スバル「オーバードライブ！！」

そう言うと右手に持っていた白の剣はオレンジの恐竜の剣、左に持っていた黒の拳銃は青の狼の銃になり天使と悪魔の羽根はマントに

なり、服装は白の鎧になった

その格好はまるで

スバル「フォームオメガ!!」

オメガモンの様だった

スバル「勝負はまだこれからだ!!」

ムゲンドラモンと第2ラウンドが始まった

第19話 最終決戦！4 スバルと光子郎（後書き）

今回は作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかで頑張ります！！」

まずは今回は前編なので2人で頑張ります

まずは

2人「AIさんありがとうございます！！」

今回は難しいよ

すずか「確かに今回の名言は使えるかわからないね・・・」

だが努力はするぜ！

すずか「頑張つてね！」

ああ、次回は後編だ

すずか次回予告よろしく！！

すずか「はい！

次回 最終決戦！5 スバルと光子郎」

それじゃあ

すずか「次回も」

2人「お楽しみにー！！」

第20話 最終決戦！5 スバルと光子郎（前書き）

今回は後編！！

さあどんどん書きますよ！！

今回はジエスターIIアーカムさんが教えてくれた名言です

デビルメイクライ4で

『キリエ……。俺が悪魔でも、人間じゃなくても……。平気なのか？』

『ネロ、ネロはネロだから。私の大好きな……。誰よりも人間らしい人だから』

Byネロ&キリエ

何かいいな・・・

こんな事言ってくれる人がいるなんて

諒もこんな感じに見ようかな・・・

今回はある映画の名言が出ます！！

第20話 最終決戦！5 スバルと光子郎

side 三人称

天と地の差

先程までのスバル達の状況

しかし光子郎の勇氣、友情、愛情、知識、純真、誠実、希望、光の紋章の力で立場が入れ替わった

スバルは一時的に能力をMAXにするバーストモードを使い、グレイソード、ガルルキャノンを上手に使いムゲンドラモンを翻弄するそこにヘラクルカブテリモンが技を入れる

これがずっと続いている

光子郎は紋章の力とデジヴァイスで結界を作りムゲンドラモンの必殺技である キャノンの被害を最小限にしている

ムゲンドラモン「何故だ！あれ程まで絶望させたのに何故お前達は心が折れない！！！」

ムゲンドラモンは疑問に思った

人は絶望に追い込まれると何もかも諦めてしまう

実際にムゲンドラモンの強さは“普通の人”なら心が折れてもいいはず

しかしスバル、ヘラクルカブテリモン、光子郎は心が折れてなく希望の光でいっぱいだった

スバル「確かにお前は強い。だからさつきは心が折れそうだった。

だけど！！！」

光子郎「僕はお前の強さを知っています。だけど！！！」

ヘラクルカブテリモン「わてはもうダメかと思った。だけど！！！」

3人「どんな絶望のなかでも僕達の心から光は消え去ることはないんだ！！！」

スバル「仲間が声を掛けてくれるから！！！」

光子郎「仲間と約束したから！！！」

ヘラクルカブテリモン「仲間が信じてるから!!」

3人「僕達は戦うことができるんだ!!!」

ムゲンドラモン「ふざけるな!!!」

3人の言葉を聞いたムゲンドラモンは突っ込んできた

スバル「これで」

光子郎「最後です!!」

スバル「グレイソード!!」

スバルはグレイソードで両腕を切り落とし刻んで両腕を消した

ムゲンドラモン「キサマ!!!」

ムゲンドラモンは キャノンをスバルに放った

光子郎「スバル君は傷つけさせません!!!」

そう言うとき光子郎は紋章の力でスバルの前にバリアを張った

その強度は キャノンをもちとしない

光子郎「スバル君!!ヘラクルカブテリモン!!今です!!」

スバル「うん!!」

ヘラクルカブテリモン「はいでんがな!!」

光子郎がスバルとヘラクルカブテリモンに言うときそれぞれの必殺技

を準備した

そして

スバル「ガルルキャノン!!!」

ヘラクルカブテリモン「ギガブラスター!!!」

ムゲンドラモン「ぐわああああ!!!」

ムゲンドラモンは叫びながら消えていった

スバル「はあ...はあ...」

スバルはガルルキャノンを放ったことによりバーストモードは解けた

光子郎「大丈夫ですか、スバル君?」

光子郎はスバルを心配する

スバル「はあ...大丈夫、はあ...僕だけ休むわけにはいかないよ。

諒君の所に行かないと...はあ」

そう言うがかなりスバルは疲れている様子だ

ヘラクルカブテリモン「スバルはん、わての背中に乗ってください。
わてが諒はんのところまで飛びます。」
スバル「ありがとう。ヘラクルカブテリモン。」
そう言うとスバルはヘラクルカブテリモンの背中に乗った
ヘラクルカブテリモン「ほな行きまっせ!!」
そしてスバル達も諒の所に向かった

第20話 最終決戦！5 スバルと光子郎（後書き）

今回は作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかと」

スバル「今回の話の主役のスバルと」

光子郎「光子郎で頑張ります。」

まずは！！

4人「ジェスター」「アーカムさんありがとございました！！」
今回はラブシーンに使いそうだな

スバル「諒君はまたフラグをたててしまうのか。」

・・・お前の可能性もないわけじゃないぞ

スバル「何か言った？」

いや、何でも

光子郎「次がラストのダークマスターズですね。」

ああ、皆さんはもう気付いてると思うぜ

すずか「感想では闇の帝王の正体を予想してる人もいたしね。」

ああ、だがもうこれ以上は言えないぜ！！

すずか！！じゃあいつもの頼むぜ！！

すずか「はい！」

次回 最終決戦！6 暁と長官」

それじゃあ

スバル・光子郎「次回も」

4人「お楽しみにー！！」

第21話 最終決戦！6 暁と長官（前書き）

今回も前編です！！

良いところで終わるのは普通ですね

今回の名言を覚えてくれたのはAIさんです
ありがとうございます！！

ガンダムOOで

『過去じゃない、未来のためだ』

『嬉しい事があれば、誰だって笑うさ』

By刹那・F・セイレイ

劇場版ガンダムOOで

『てめえの好意は偽善だ』

『それでも善だ！僕はもう命を見捨てたりはしない！！』

Byハレルヤ& amp ;アレルヤ

今回も痺れる名言でした！

ありがとうございます！！！！

第21話 最終決戦！6 暁と長官

side三人称

なのは・フェイトがメタルシードラモンを倒した頃

はやて・ティアナがピノツキモンを倒した頃

スバル・光子郎・テントモンがムゲンドラモンを倒した頃

西エリアでは

????? 「まさか、子供たちに我らダークマスターズが倒されるとは見てくびってしまいましたね。油断していたのでしょうか？それとも子供たちが強かったただけでしょうか？その真実は誰もわかりません。そうだとは思いませんか？そこに隠れているお二人方。」

デジモンが言うとビルから暁と長官が出てきた

暁「いつから気付いていた？」

暁は殺気を放ちながら質問する

????? 「最初からですよ。」

暁・長官「!？」

2人は驚いた

最初から・・・

つまりここに来ることを知っていた

すべて筒抜けだった

暁「お前は誰だ!！」

暁は最悪な場面を想像してしまい声を荒げて聞いた

????? 「私の名前はピエモン。ダークマスターズ及び闇の帝王の

幹部そして・・・ “闇の帝王の側近”。」

長官「!？ダークネススクロー!?!?!」

暁「!？へブンズナツクル!?!?!」

“闇の帝王の側近”

その単語を聞いた瞬間長官は瞬時にピエモンに近付きダークネスク

ローで攻撃しそのままジャンプ

ジャンプした瞬間暁が最大出力のヘブンズナックルをぶつけた

ピエモンがいた場所は煙で包まれていて倒したかどうかかわからない
しかしお互い全力で必殺技を使ったのでかなりの深手を負ったに違
いないと思いい煙から目を放す

ザシユー！！

コンマ一秒

煙から剣が4本

暁、長官に2本ずつ刺さる

あまりにも急だったので2人は防御する事もできず剣の餌食になった
ピエモン「驚きました、まさかここまで強いとは、服が少し破れて
しまいました。」

暁は声のする方に顔を向ける

そこには右腕の袖の部分にちよつと穴が開いていたビルに座ってい
るピエモンがいた

暁「ま・・・さか、無傷・・・なん・・・て。」

傷が深く血を流している暁の言葉はとぎれとぎれだった

ピエモン「無傷じゃありませんって。ほらここ、穴が開いちゃった
んです。」

ピエモンは穴が開いた部分を指す

長官「ば・・・けも・・・のめ」

長官は血を流しすぎて意識がはつきりしていない

ピエモン「さて、あと5分ですね。」

ピエモンは何か時間らしきことを言った

暁「5分・・・だ・と」

暁はなんとかピエモンの言葉に質問する

ピエモン「聞こえてましたか。まあ、いいでしょう。教えてあげま
すよ。5分後の残劇を。」

長官「ざん・・・げ・き・・・だと?」

ピエモン「そう残劇です！！キメラモンによる技を上空から垂直に

あいつに本当の気持ちを伝えられずに死ぬ
死ねない

俺は死ねない

あいつらを救いたいから死ねない

俺は死ねない

ヒーローになりたいから死ねない

俺は死ねない

みんなともう一度笑いたいから死ねない

俺は死ねない

困っている人を救いたいから死ねない

俺は死ねない

あいつに本当の気持ちを伝えたいから死ねない
ならどうすればいい

答えは簡単

死ぬ気になって敵を倒せばいい

エンジエモン「答えは決まりましたか？」

ああ、起動させるぜ！！バーストモード！！

side長官

1人の少年に“正義”を覚えてもらったのに死ぬのか？

みんなを幸せにするために頑張ったのにそれができずに死ぬのか？

ダメだ！！

こんな弱気になってはいけない

私は約束した

必ず守ると彼たちに約束した

私は命令した

死ぬな！と

私は彼たちを裏切ってはいけない！

必ず生きて帰るんだ!!!
ベルゼブモン「覚悟は？」
決まっている!!!
バーストモード機動!!!

第21話 最終決戦！6 暁と長官（後書き）

今回は作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかで頑張ります！」

二回連続前後編！！

すずか「何で一つに纏めなかったの？」

いや、それだと読んでいる人が想像できないだろ？

すずか「じゃあ何で最終決戦編の最初から前後編にできなかったの？」

頭のなかにイメージができてしまっただけで気付けば1話になっていた

すずか「あ、あははははは。」

まあこの話は置いて

2人「AIさんありがとうございます！！」

いやー何度も教えてくれるっていい人だな！

すずか「ちゃんと話を作っただね！！」

ああ！！・・・すずかのために

すずか「わ、私の為じゃなくて教えてくれた人の為でしょ！！／／／

／／／（最近言われないから嫌われちゃったと思ったけどよかつ

た！）」

もちろん！

それじゃあすずか！！

いつもの頼むぜ！！

すずか「はい！！」

次回 最終決戦！7 暁と長官

それじゃあ

すずか「次回も」

2人「お楽しみにー！！」

第22話 最終決戦！7 暁と長官（前書き）

後編だ！！

ただ物凄く急なのですが許してください！！

今回教えてくれたのはWさんです！！

ありがとうございました！！

ONEPIECEで

『俺達の命一緒に懸けてみる！！！！……仲間だろつが！！！！』

『つまらない冒険なら俺はしねえ！！！！』

『俺の仲間……誰一人……！！！！……死んでもやらん！！！！』

Byルフィ

『ロビン！！！！……まだお前の口から聞いてねえ……』
「生きて
い」と言ええ！！！！！！』

『生きたいっ！！！！……私と一緒に……海へ連れてって！！！！』
Byルフィ & amp; ロビン

泣いた、凄く泣いた！！

このシーンで泣いた人絶対います！！

泣かないなんてありえない

ルフィ！！お前は格好良いぞ！！！！

第22話 最終決戦！7 暁と長官

side 三人称

奇跡

まさにこの2人に相応しい言葉

ピエモンのトランプソードをくらい出血大量で死んでもおかしくない
しかし2人は生きている

ピエモン「何故です、何故です！何故諦めないのです！？目を瞑
れば楽になるのに何故私に立ち向かってくるのです！！！」

ピエモンの頭の中は疑問でいっぱいだった

死ねば楽になれる

なのにこの2人は立ち向かってくる

何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故
何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故

つても過言ではない白い大剣オメガソードを持っていた
ピエモン「バカな、傷がなくなっているだと!？」

そう2人のバーストモードはスバルと違い、傷を全回復させることができる

しかしデメリットもあり、バーストモードを解くとかなりの疲労が体にのしかかる

ピエモン「負けません、私は最強なんです。闇の帝王の側近なんです。私が……あなた達に……負けるはずがないんだー
—————!!!」

ピエモンは叫びながら2人に突っ込んだ

しかしこの2人のパワーは諒とほぼ対等

ピエモンの動きを見ることは簡単なこと

長官「遅い!!」

長官は一瞬にしてピエモンに近付きオメガソードで斬り掛かった

ピエモンはなんとか気付きたランプソードで防御する

しかしオメガソードには特殊な力がある

それはデータの初期化

オメガソードに斬られたものはどんなものでも初期に戻ってしまうのでピエモンが防御に使ったランプソードは初期化し消えた
あまりに突然だったためにピエモンは避け切れずオメガソードに斬られた

生きてるものに対する初期化は体が弾け飛ぶような痛み

ピエモンはその痛み悲鳴をあげようとした

しかしここで忘れてはいけない

ここには一体のデジモンと“2人の人間”がいたことを

暁「クオ・ヴァデイス!!」

暁はピエモンに必殺技のクオ・ヴァデイスを放つ

ピエモンはデータの初期化の痛みで頭がいっぱいで暁の攻撃に気付かない

ピエモンは暁の技を完璧にくらった

新たな痛みにより、意識が朦朧としているピエモンに暁と長官が近づきそして

暁「インビンシブルソード……！」

長官「オメガブレード……！」

2人はピエモンを斬り裂いた

2人に斬り裂かれたピエモンはデータとなって消えた

暁「急ぎましょう……！」

長官「諒君を助けに……！」

そして2人はバーストモードの状態で全力で諒の所に向かった

第22話 最終決戦！7 暁と長官（後書き）

今回は作者の松上と

すずか「後書き限定キャラのすずかと」

暁「今回の話の主役の暁で頑張るぜ」

あれ？長官は？

暁「長官は体がついてこないらしい。」

まあ、あの年でこんな戦闘したんだしな

すずか「それよりみなさん！！」

3人「Wさんありがとうございます！！」

まさか弟が教えてくれるなんて・・・

2人「お、弟！？」

ああ、中三の弟

すずか「弟から教えてもらってすごいね。」

弟に「感想書いたから」って言われたときはびっくりした

暁「それよりもバーストモードって姿まで変わるなんてな」

ああ、キャラ設定に書かなかったのは読んでくれてる人に驚いてほしかったからな

すずか「でも、デジモンのチョイスを選ぶのはどうだったの？」

いやー大変だった

スバルと暁は簡単に出たが長官は悩んだ

暁「まあ、ベルゼブモンだからな。」

まあな

みなさん！！それじゃあみなさん！！オリジナル編もいよいよラストバトル！！

すずかよろしく！！

すずか「はい！！」

次回 ラストバトル前編！！」

それじゃあ

暁「次回も」

3人「お楽しみにー!!!」

第23話 ラストバトル前編!! (前書き)

今回は3つに分けました!!!

ついに諒の戦い

最後まで見てください!!

今回名言を教えてくださいたのはスイさんです

ありがとうございます!!

家庭教師ヒットマンREBORNで

『誇りだから譲れないんじゃない、譲れないからこそ誇りなのさ』

BY雲雀恭弥

雲雀格好良い!!

いつもと違った雲雀みたいですね

第23話 ラストバトル前編！！

side 諒

俺は皆と別れたあとキメラモンの所に行く

俺はすでにクロスヒュージョンをしており、今回のクロスヒュージ

ヨンはナルト×円堂×セレナード×シャイングレイモンBMだ

バーストモード

格好はシャイングレイモンBMの炎の翼、セレナードの服、金髪の頭にヘヤバンドをしていて右手に炎でできた剣、左手に炎でできた盾を持っている

ぐあああああ！！！！

遂に着いた

諒「さて化け物、お前の命もここまでだ！！」

????? 「ソレハドウカナ？」

その声と共に極太の光線が俺を狙ってきた

諒「規格外にも程があるぞ！！！！イジゲン・ザ・ハンド！！！！」

俺は炎の剣と盾を消し即座にイジゲン・ザ・ハンドを使った

なんとか防御が間に合ったお陰で無傷だった

諒「誰だ！！！！」

俺が叫ぶとキメラモンの隣に黒のフードを被ったやつが出てきた

????? 「マサカアノコウゲキヲフセグトハ・・・オモシロイ。キ

ヨウミガワイテキタゾ、アライリヨウ！！！！」

諒「！！？何故俺の名前を知っている！！！！」

わからなかった

こいつとは初対面なのに俺のことを知っているなんて・・・！！？

まさか！！

????? 「イマオマエガオモツテイルトオリダ。ワタシガヤミノテ

イオウ！！！！ヨネンマエシセイジユウヲフウインシオマエヲコノセ

カイニオクツタチヨウホンニンダ！！！！」

やはりこいつが闇の帝王・・・

諒「思っていた以上に小さいんだな。」

そう、闇の帝王はここからでもわかるくらい小さい
予想では暁より少し小さいくらいの身長だ

闇の帝王「タシカニ“ココニイル”ワタシハチイサイ。」

諒「ここにいるだと？」

闇の帝王の言葉に謎が生まれた

闇の帝王「ソウダ、ワタシハチカラガアマリニモツヨスギテデジタルワールドカラデレナインダ。ナノデジタルワールドカラデテコレルサイショウゲンノチカラデアルノガイマココニイルワタシダ。」
じゃあ俺の前にいるのは本体ではないのか！？

闇の帝王「ワタシノホントイハデジタルワールドニイル。」なら俺
がすることはただ一つ！！

諒「お前等を倒して闇の帝王を倒しに行く！！」

闇の帝王がいるかぎりこんなことは続く

大将を倒さないかぎりデジモンたちはどんどんこっちの世界に来る
闇の帝王「ワレラヲオス？ジョウダンハヨシテクレ」

諒「何だと、お前等の力じゃ俺に勝てないぞ！！」

闇の帝王「タシカニ、イマノママナラワレラハオマエニマケル。ダ
ガワレラガ“ヒトツ”ニナレバオマエニマケルハズガナイ！！」

諒「何だと！！」何をやる気だ！？

闇の帝王「アンコクプログラムシドウ！！デジモンダウンロード！
！タイシヨウデジモンムゲンドラモン！！ムゲンドラモンダウン
ロードカンリヨウ！！アンコクヘンカン！ムゲンドラモン、オン・
エア！！！」

闇の帝王がそう言うのと闇の帝王は黒の球体に包まれた

そして黒の球体は大きくなっていく

そして大きさがキメラモンと同じくらいになると球体に罅が入った
そして球体が砕けるとそこにいたのは・・・

諒「ムゲンドラモンだと！？」

そう、全身が機械でできたデジモン

ムゲンドラモンがいた

しかし

諒「ムゲンドラモンになった俺には勝てないぞ!!」

ムゲンドラモンは最強といっても過言でもない

しかし最強にも弱点がある

それはウオーグレイモンのドラモンキラーだ

ドラモンキラーはその名の通り竜族に対して最強の力を持つ

そのため原作でも太一とウオーグレイモンにムゲンドラモンは負けている

闇の帝王「サイショニイツタハズダ!!ワレラハ“ヒトツ”ニナルト!!!」

ムゲンドラモンにキメラモン・・・!?

諒「まさか!？」

闇の帝王「ソウダ!!ダガモウオソイ!!!ムゲンドラモン!!キメラモン!!ジヨグレスシンカ!!!ミレニアモン!!!」

最強と最強

究極の破壊の化身

決して生まれてはいけなかった存在

諒「ミレニアモン・・・」闇の帝王「フハハハハハハ!!!究極の破壊神、ミレニアモン!!コレデセカイヲハカイシテヤル!!!」

諒「誰がそんなことさせるか!!!この世界は俺が守ってみせる!!!行くぞ!!!」

闇の帝王「コイ!!!」

俺と闇の帝王との戦いが切って落とされた

第23話 ラストバトル前編!! (後書き)

遂に最終決戦！ラストバトル!!

テンションMAXの作者の松上です!!!

すずか「松上君のテンションの高さを少し抑えたい後書き限定キャラのすずかです。」

まずは!!!

2人「スイさん！ありがとうございます!!」

今回の名言は雲雀の다가いつもと違う感じの言い方だから余計胸に来た!!!

すずか「スイさん！ありがとうございます!!」

しかし今回の戦いは皆さんの予想とは違っていたと思います!!

すずか「確かに、ダークマスターズが出てきたから皆さんはあのデジモンを思い浮べたと思います。」

しかも今回は3つの話に分けた!!

すずか「ラストバトルだもんね!!」

ああ!! 頑張つて更新するぜ!!

!? そうだ!!

すずか「どうしたの!？」

次回の後書きに重大発表があるからみなさん!! 見てくださいね!!

すずか「重大発表って何だろう?」

それは次回のお楽しみ!!

すずか、いつもの頼むぜ!!

すずか「は、はい!! 次回 ラストバトル中編!!」

それじゃあ次回も

2人「お楽しみに!!」

第24話 ラストバトル中編!! (前書き)

中編!!

しかも今回はAIさんに教えてもらった名言を少し変えて書きました!!

次回からも教えてもらった名言を書けるようにします!!

今回教えてくれたのはジエスター!!アーカムさんです!!
いつもありがとうございます!!

ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還で

『退くな!踏みとどまれ!ゴンドールとローハンの息子たち!わが
同胞よ!諸君の目のなかに私をも襲うだろう恐れが見える
人間の勇気がくじけて友を見捨てる日が来るかもしれぬ

だが今日ではない

魔狼の時代が訪れ盾が砕かれ人間の時代が終わるかもしれぬ

しかし今日ではない

今日は戦う日だ!

かけがえのないすべてのものに懸けて

踏みとどまって戦うのだ

西方の強者たち!』

Byアラゴルン

痺れる……

こんな名言作りたいな……

頑張るぜ!!

第24話 ラストバトル中編！！

side 三人称

油断すれば死ぬ

攻撃を止めれば死ぬ

防御しなければ死ぬ

動かなければ死ぬ

まさにその言葉がミレニアモンにはぴったりだった

諒「どうした？この程度か？」

諒は右手に持っている炎の剣コロナブレイズソードでミレニアモンを斬りながら諒は聞く

闇の帝王「マダマダダ！！ワレラノチカラハコンナモノデハナイハズダ！！！！コノセカイヲハカイスルマデワレラハマケルワケニハイカナインダ！！！！」

なのは「そんなことはさせない！！」

そこになのはとフェイトが来た

フェイト「私達はこの世界を守りたい！！」

はやて「好きな人がおるから！！」

ティアナ「守りたい人がいるから！！」

はやて、ティアナもここに駆け付けフェイトの言葉に続ける

スバル「信じてくれる人がいるから！！」

光子郎「待つてくれてる人がいるから！！」

ヘラクルカブテリモンの背中に乗っているスバルと光子郎もミレニアモンに言う

暁「助けたい人がいるから！！」

長官「守りたい約束があるから！！」

バーストモードの状態で来た暁と長官も叫ぶ

全員（諒以外）「この世界を守りたい！！！！！！！！」

闇の帝王「ナゼダ！？コノセカイハヤミデソマツテイル！！ニンゲ

ンガニンゲントタタカイアラソイコロシアウ!!!ソナセカイヲ
スクツテナンニナル!!!!!!」

ミレニアモン・・・闇の帝王はこの世界のことを叫ぶ

何故人は争うのか？

何故人は戦うのか？

何故人は殺し合うのか？

何故人はお互いを信じ合わずにいるのか？

何故この世界は平和にならないのか？

この世界のダメな所を挙げればいくらでも出てくる

だがこんな世界だからこそできることがある

諒「闇の帝王・・・」

諒はミレニアモンに話し掛ける

諒「確かにこの世界は闇でいっぱいだ。だが闇があるからこそできることがある!!!」

闇の帝王「ソレハイッタインダトイウンダ!!ヤミヲケシテエイ
ユウニナルコトカ!!!セイギノミカタニナルコトカ!!!イッテ
ミロ!!!エイユウサンヨ!!!セイギノミカタサンヨ!!!」
闇の帝王は叫ぶ

諒「俺は正義の味方でもなければ、自分を英雄と思った覚えはない、
俺はただ自分が、信じるもののために、戦うつもりだ、俺は悩まない、
守りたい仲間の前に闇が現れたなら、俺が闇を光に変えるだけ
だ!!!」

闇の帝王「フザケルナー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
ンデストロイヤー!!!!!!」

闇の帝王が放ったデイメンションデストロイヤーが諒を包み込んだ
全員「諒(君)(くん)(お兄ちゃん)!!!!!!」

闇の帝王「ドウダ!!!ケツキヨクカツノハヤミナダ!!!!イクラ
ツヨクテモヒカリハヤミニハカテナインダヨ!!!!!!」

ミレニアモンは諒を包んでる闇に言った

諒「確かにな」

カイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハ
カイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハ
カイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハ
カイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハ
カイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハ
カイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハ
カイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハカイハ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

狂ったように闇の帝王は言う

諒「みんな!!」

諒に呼ばれみんな諒を見る

諒「あいつはミレニアモンから進化しZDミレニアモン、あいつに
スイード

は俺一人の攻撃じゃあ倒すことはできない!!だから!!」

諒は真剣な目でみんなを見た
諒「俺に力を貸してくれ!!!!」

全員「了解!!!!」

諒「行くぞ!!!!最後の戦いだ!!!!!!」

諒達のラストバトルが切つて落とされた

第24話 ラストバトル中編！！（後書き）

遂に中編でテンションMAXの作者の松上です

すずか「凄く嬉しそうな松上君を見て嬉しい後書き限定キャラのすずかです！」

ますは！

2人「ジエスター」「アーカムさん、AIさんありがとうございまして！！」

今回初めて教えてもらった名言を使いました！！

すずか「これからも使っていけますので教えてください！！」

そして遂に次回最終決戦決着！！

すずか「諒君たちはZDミレニアモンを倒すことができるのか！？」

お楽しみに！！

それから重大発表は次回にお預けだ！！

すずか「みんなで聞きたいもんね！」

そう言うこと

それじゃあすずか！

よろしく！！

すずか「はい

次回 ラストバトル後編！」

それじゃ次回も！

2人「お楽しみにー！！」

第25話 ラストバトル後編!! (前書き)

遂にオリジナル編完結!!

しかし短い・・・

だがこれからもっとわかりやすく、そして楽しい小説を書くぜ!!
今回もジェスターIIアーカムさんが教えてくれた名言です!!!

スターウォーズシリーズで

『May the force be with you. (フォースと共にあらんことを。)』

指輪物語で

『死んだっていいとな! たぶんそうかもしれぬ。
生きている者の多数は、死んだっていいやつじゃ。』

そして死ぬる者の中には生きていてほしい者がある。

あんたは死者に命を与えられるか?

もしできないのなら、そうせつかちに死の判定を下すものではない

『どのような代に生まれるかは、決められないことじゃ。』

わしらが決めるべき事は、与えられた時代にどう対処すべきかにある

Byガンダルフ

な、なんだこの名言!?

こんなすばらしい名言は知らないぞ!!

本当にありがとうございました!!!

第25話 ラストバトル後編！！

side 三人称

光と闇

あなたはどちらが勝つと思いますか？

正解は引き分け

何故？って思った人もいるかも知れません

しかし光と闇は人の感情によって強弱がわかります

希望があるなら光

絶望があるなら闇

人の心は闇が勝つと思われていた、デジモンたちが現れれば人の心は絶望が支配していた

しかし今回は違う

今までにない強さを持ったデジモン

ダークマスターズ、ミレニアモンが現れたのにも関わらず誰も心に希望を持っている

何故でしょうか？

答えは簡単です

絶望から救い出してくれる戦士達が戦っているからです

その戦士達はそれぞれの悲しい過去があり、守りたい心を持ち、今を守るうとしています

相手は究極の闇、ZDミレニアモン^{スネード}

こちらは小さな光

しかし光は小さくそしてたくさんあります

そして究極の闇と小さな光の戦いに終止符が打たれようとしています
あなたも小さな光になり彼らを応援してあげてください

それではどうぞ・・・

ありがとな光子郎、ヘラクルカブテリモン

暁「みんなを笑顔にする！クオ・・・」

お前は真正正銘のヒーローだ暁

長官「お前なんぞにこの子たちの未来は消させん！ハイパー・・・」

あんたは立派だ、長官

俺も！！

諒「俺達は明日に進む！それを邪魔するならお前を倒す！！これで決める！！カイヤードルター！！」

俺達在必殺技をためるとZDミレニアモンが俺達に必殺技を使ってきた

ZDミレニアモン「デストロイヤー！！！！！！」

だが俺達は負けない！！

諒・なのは・フェイト・はやて・ティアナ「ブレイカー！！！！！！

！！！！！！」

スバル「キャノン！！！！！！！！」

ヘラクルカブテリモン「ブラスター！！！！！！！！！！」

暁「ヴアデイス！！！！！！！！！！」

長官「プロミネンス！！！！！！！！！！」

俺達の必殺技が一つになりZDミレニアモンのタイムデストロイヤーを打ち破りZDミレニアモンを直撃した

ZDミレニアモン「ワスレルナ！！！！ホンタイハワタシイジヨウノ

チカラデキサマラヲクルシメル！！！！コンカイヤカタコトヲコウ

カイスルヲダナ！！！！フハハハハハハハハハハハハハハハハ・・・」

ZDミレニアモンはそういう笑いながら消えた

諒「上等だ！！例えばどんな本体の闇の帝王がやってきても俺は大切な人を守るために倒す！！それだけだ！！！！」

こうして俺達の戦いは終わった

ZDミレニアモンVS闇の帝王対策部隊

勝者 闇の帝王対策部隊

三日後

俺達はWAXAの広場にいる

理由は光子郎とテントモンを見送るためだ

闇の帝王が傷を癒すために仕掛けてこない今光子郎達を元の世界に戻すにはちょうどいい

今いるのは俺、なのは、フェイト、はやて、ティアナ、スバル、ヨイリー博士、松葉杖を持った暁、車椅子に乗っている長官

暁と長官は戦いが終わったあと一日中集中治療室にいた

その時はマジで心配した

そして暁が最初に言った言葉は「ヒーローは不滅だ!!」

これを聞いたみんなは暁を殴った

あの光子郎やヨイリー博士まで殴るから相当イラついたんだろう
スバルは戦いが終わったあと半日も寝ていた

まあ、力を手に入れてすぐにZM事件があったからな

相当無理をしたらしい

えっ? ZM事件は何かって?

スライムニアモン
ZM事件って意味だ

あのあとヨイリー博士が記者会見しうまくやってくれた
もちろん俺達のこととは内密だ

光子郎「それじゃあお願いします。」

諒「了解!」

俺はパラレルモンの力を使いデジモンアドベンチャーの世界に通じる扉を出した

光子郎「皆さん、今までお世話になりました。」

堅いな、おい

テントモン「光子郎はん堅すぎでっせ。」

光子郎「そうでしょうか?」

2人の漫才みたいな会話に俺達は笑う

諒「じゃあ光子郎、テントモン。“またな”！」

光子郎「また・・・ですか？」

諒「そう、生きてさえいれば必ず会える。だからまたな！」

光子郎「はい！！また会いましょう！みなさん！！！」

テントモン「ほなまた」

光子郎とテントモンはそう言うつと扉に入ってしまった

そして扉は閉まり扉は消えた

諒「またな！！世界を越えた親友・・・」

俺は空に向かって言った

オリジナル編完結！！

第25話 ラストバトル後編！！（後書き）

まずは！！

全員「お疲れさまでしたー！！！！」

諒「まさかこんなにも人気が出るとはな！！」

なのは「今回は頑張ったの！！」

フェイト「しかも嬉しいことに重大発表があるんだよね！！」

ああ！！この重大発表はみんなが嬉しいことだぞ！！

はやて「もつたいぶらんとはよ教えてーな！！」

実はな・・・

ティアナ「ドキドキ」

この作品のPVとユニークがな・・・

スバル「ゴクツ」

35000越え及び35000越えをしたんだー！！

全員「な、なんだってー！？」

暁「そ、それは本当なのか！？」

本当だ！！俺もこの数字を見たときリアルに泣いた

すずか「それは凄いですね！！！！」

ああ！！だから記念に諒とヒロインズのデート編を書こうと思って
るぜ！！！！

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「それは本当なの（か）！！！！！！」

ああ、しかも一人ずつ、そしてデートの内容も違っぞ

諒「本当かよ！？」

本当だ！！

はやて「ならデートに着ていく服を選ばな！！じゃあ作者さんあと
よろしくな！！」

なのは「私もなの！！」

フェイト「私は服を買いに行かないと！！」

行っただな・・・

諒「あれ？何でティアナは残ってんの？」

ティアナ「私はお兄ちゃんと買い物に行ってそこで服を選んでもらうのー！！」

スバル「あ、あははははは。大変だね、諒君」

暁「見たらわかる。」すずか「それじゃあ次回はデート編なの？」

いや、次回はスバルのバーストモードなどの設定だな

諒「キャラ設定か？」

ああ

！？忘れてた！！

いつものあれやってない！！

全員「あっ！！」

よし今からしよう！！

全員「ジエスター」アーカムさんありがとうございました！！」

危ない危ない

諒「気を付けないとな」

ああ！！それじゃあ次回はキャラ設定なので！！

全員「お楽しみにー！！」

キャラ設定パート5（前書き）

今回は新能力の設定です！！

今回名言を教えてくださいましたのはWindさんです！

TODで

『たとえ何度生まれ変わっても、必ず同じ道を選ぶ！』

Byリオン・マグナム

『楽しく暮らせりやそれでいい。ただ……それだけだ。』

Byゼロス・ワイルダー

『なんでお前だけ辛い思いするんだよ！なんでお前だけ傷だらけになるんだよ！友達つてのは苦しいときに助け合うもんなんだぞ……！』

Byスタン・エルロン

『何かを得る為にリスクがあるなんて当たり前じゃない。その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる。何も傷付けずに望みを叶えようなんて悩み、心が贅沢だからできるのよ。』

Byリタ・モルディオ

『言っただろ。俺は絶対……お前を消させないと！』

Byアスベル・ラント

今回は使いやすい名言でした

ありがとうございました！！

キャラ設定パート5

世界を救った主人公

あらいりょう
新井諒

オリ技：サンダートルネード

（ファイアトルネードをしながら千鳥をサッカーボールくらいの大
きさまで作り足元に放出する、それにより雷と炎が交ざり回転しな
がら敵に向かう、敵にあたれば炎と雷の同時攻撃により大ダメージ
を与える）

ヒロイン1

たかまち
高町なのは

オリ技：スターライトブレイカー

（文字通り原作のなのはの必殺技、しかしその中にスーツエーモン
の炎属性が交ざっている、打ち方なども原作通り）

マキシмумブレード

（諒に教えてもらったマキシмумファイアを手から出したもの、こ
れの切れ味は抜群でメタルシードラモンの体を切れるほど）

ヒロイン2

あらい
フェイト・新井

オリ技：プラズマザンバーブレイカー

（なのは同様原作のフェイトの必殺技、打ち方なども原作どおり、
しかし、チンロンモンでさらに電気の入っている）

ヒロイン3

やがみ
八神はやて

オリ技：ラゲラノクブレイカー

（なのは、フェイト同様原作のはやての必殺技、打ち方も同様、しかしシェンウーモンの力で水属性が交じっている）

ヒロイン 4

新井ティアナ あらい

オ리지：シャイニングブレイカー

（2つの銃を1つの大型銃にし光の光線を放つ、銃のイメージはインペリアルドラモンFMのギガデス）
ファイターモード

原作の主人公

星河スバル ほしかわ

新能力：バーストモード

バーストモードになるとオメガモンの鎧、武器になる

異世界の親友

泉光子郎 いずみこうじろう

新能力：紋章の覚醒

諦めかけていた光子郎に太一たちが自身の紋章の力を託した

デジモンのパワーアップ、怪我の治療、バリアを張ることができる

WAXAのエース

暁シドウ あかつき

新能力：バーストモード

バーストモードになることでデュークモンCMの鎧、武器になる
クリムゾンモード

WAXAの長官

葛城秋道 かつらぎあきみち

新能力：バーストモード

バーストモードになることでインペリアルドラモンPMの鎧、武器になる
パラディンモード

キャラ設定パート5（後書き）

Greenの扉が好きな作者の松上です

諒「和田光司さんのThe Biggest Dreamerが好きな主人公の諒だ」

すずか「ポルノグラフィティのサウダージが好きな後書き限定キャラのすずかです！」

まずは！

3人「Windさんありがとうございました！」

今回の名言は中々使いやすいぞ！！

諒「しかも何回も教えてくれる人が沢山いるしな。」

ああ！！

今回は短かったが次回からは長いぞ！！

すずか「デート編ですしね！！」

諒「・・・真剣ですんの？」

当たり前だあ！！Byルフィ

諒「ここで名言を使うなよ！！」

いいのいいの

それじゃあすずか

よろしくね！

すずか「はい！

次回 特別編1 なのはとデート」

それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

特別編1　なのはとデート（前書き）

今回はなのはとデートの回です！！

少しご都合主義がありますが気にしないでください

今回もジェスター、アーカムさんが教えてくれました！

デビルメイクライシリーズで

『感情を高ぶらせて流れ落ちる涙は、他人を想う心を持つ人間の特権であり、証明なのだ。もしも涙が流せたなら、そいつはもう悪魔なんかじゃない』

『悪魔みたいな人間もいれば、人間みたいな悪魔もいるのね。』

Byレディ

今回もありがとうございます！！

特別編1　なのはとデート

side 諒

光子郎とテントモンが元の世界に帰って一週間

俺達は今WAXAにいる

何故か？

昨日家でのんびりしていたら暁から電話がきて「渡したいものがあるから明日WAXAに来てくれ。あとなのは、フェイト、はやて、ティアナを連れてきてくれよ。」と言われたからだ

そして椅子に座つてると暁が来た

暁「よし、全員いるな！」

諒「なんだよ、渡したいものって？」

俺が聞くと暁はなのは達を見た

何故だ？

暁「お前達はZM事件を解決させた。だがお前達は解決させたのに
お礼をもらってない。そこで！！」

暁はポケットから何かのチケットを数枚出した

暁「お前達にぴつたりのお礼をしたい！！」

暁はそう言つとチケットを俺に渡した

暁「それは動物園、水族館、遊園地、映画の無料チケットだ！！しかもペアチケットだ！！！」

暁がそう言つとなのは達は俺からチケットを取った

なのは「ペアチケットかー！！！！」

フェイト「これを使えば・・・！！！！」

はやて「ええなこれ！！！！！！」

ティアナ「ねえお兄ちゃん！私と一緒に行かない？！！！！」

諒「ん、ああい「ストップ！！！！」」

俺が言おうとしたら3人が止めてきた

なのは「ずるいよティアナちゃん！！」

フェイト「抜け駆けはダメだよ!!」
はやて「ここは公平にジャンケンや!!」
ティアナ「うー、わかった!絶対勝ってやる!!」
はやて「ほないくでー」
4人の目付きが真剣になった
4人「じゃーんけーん・・・ほい!!!!」
もう勝手にしてくれ

次の日

俺は今公園にいる

服装は黒の半袖に茶色のズボンだ

なんで公園にいるのかと言うと待ち合わせをしているからだ

その待ち合わせをしている相手は

なのは「ごめんね、少し遅れちゃった。」

そうなのはだ

昨日暁から貰ったペアチケットで誰がいつ俺と行くかでジャンケンし勝ったのがなのはだ

待ち合わせた理由はなのはがしたかったらしい

諒「いいよ、別に。時間はあるし。」

まあ、10分は待ったがこれを言わないのがルールだ

なのは「諒くんってやっぱり優しいね!!」

そう言っつて俺の右腕に抱きついてきた

諒「なのは、その服・・・」

なのは「えっ、どこがおかしいかな?」

なのはの服装は白の半袖の服にピンクのミニスカートに何かバスケットのようなものを持っていた

諒「いや、いつも可愛いけど今日は一段と可愛いな!!!!」

俺は素直な感想を言う

人間素直じゃないとな

なのは「あ、ありがとう／＼／＼／＼」

なのはは顔を赤くしてお礼を言ってきた

諒「可愛いなー」

俺がそう言つとなのはは顔をさらに赤くした

諒「さ、早く行こうぜー!」

なのは「う、うん／＼／＼／＼」

なのはは顔を赤くして俺の腕に抱きついてる

やっぱり可愛いなー

動物園に着きましたー

えっ？移動手段は何か？そんなのバスに決まってるじゃん

えっ？じゃあなんで飛ばしたか？

バスのなかは嫉妬の視線だけで書くことなんかなかったよ!!!

なのは「諒くん!!早く入ろうよ!!」

そんなことを思い出しているとなのはが俺の腕を引っ張って言ってきた

諒「わかつてるから引っ張るなつて。」

テンションが高くなるのはいいが少し落ち着いてほしい

そして俺達は動物園に入った

諒「なのは、どれから見たい？」

俺はパンフレットを持ちながら抱きついてるなのはに聞いた

なのは「えーと、まずはパンダが見たい!!」

パンダをチョイスするなんて可愛いな

諒「わかった、パンダだな？よし、じゃあ行こうぜー!」

なのは「うん!!」

俺達はパンダのエリアに向かった

パンダエリアに着きました

諒「着いたな！」

俺は横を見るとなのは目を輝かせていた

諒「さ、早く見ようぜ」

なのは「うん！！」

俺達はパンダを見に行った

諒「えー、何々

『この中に飼育されているパンダは家族です』

へえー、パンダの家族か。」

なんかいい家族って

そんな事を思っているとなのはが顔を赤くして何かいいたそうな顔だった

諒「どうしたなのは？」

俺がなのはに聞くとなのは話し始めた

なのは「あ、あのね／＼／＼／＼／＼」

顔を真っ赤にしながら言ってきた

なのは「あのね！！私子供は3人くらいほしいの！！！！」

な、なんて事言ってるんだ！！

ほら、オバサンたちがひそひそしはじめた

諒「逃げるぞ！！！！」

俺はなのはの腕を掴んで走った

諒「まったく、あんなところで言うなよ。」

なのは「だって、パンダの家族を見たら子供はそれくらいほしいと思ってる……」

なのははそう言つと顔を下に向けた

諒「まあ俺もそれくらい子供は欲しいけどな。」

なのは「本当？」

なのはは顔を上にあげた

諒「本当さ！」

そう言うとなのはは笑顔になった

諒「さあ、他の動物も見て回るうぜ！」

なのは「うん！！」

そして俺達は動物を見て回った

今の時刻は12時39分

お昼の時間帯だ

諒「さーて、お昼は何にするかな？」

なのは「ねえ諒くん。」

俺が昼ご飯を何にするか悩んでいるとなのはが話し掛けてきた

諒「ん、どうしたなのは？」

なのは「あのね、今日私お弁当作ってきたの。」

諒「本当か!？」

なのは「うん。だから食べない?」

諒「食べる食べる!奥さんの料理食べたいもん!!」

なのは「う、うん。じゃあ向こうで食べようノノノノノノ」

諒「ああ!!!」

諒「おおーサンドウィッチか!!!」

なのはが作ったのはサンドウィッチだ

なのは「あまりうまく作れなかったから不味かったら残してもいいよ?」

おいおい、そんなことするわけないだろ

諒「なのはが作ったのに不味いわけないだろ。」

なのは「ありがとう。」

俺はなのはにお礼を言われるとサンドウィッチを取った

諒「いただきますー！」

そして俺はサンドウィッチを食べた

！？

なのは「ど、どうかな？」

これは・・・

諒「美味いぞ、これ！！なのは、どうして料理できるのを教えてくれなかったんだ？」

なのは「だ、だって諒さんの料理の味に比べたら私の味なんてまだまだだから・・・」

なんだ、そんなことが

諒「そんなら今度教えてやるよ！」

なのは「ほ、本当！？」

諒「ああ、今度一緒に作るうぜ！」

そう言うとなのはは笑顔で「うん！！」と言ってきた

諒「さ、早く食べてまだ見てない動物を見ようぜ！」

なのは「うん！！」

そして俺達は談笑しながら昼ご飯を食べた

俺達が動物を見ていると放送が聞こえた

『今から広場でカラオケコンテストをします。出場したい方はすぐに広場にお集まりください。・・・』

カラオケか

久々に歌ってみるか！

諒「なあ、なのは？」

なのは「どうしたの？」

諒「俺、カラオケコンテストに出てみたいんだがいいか？」
なのは「うん！いいよ。じゃあ私一番前の席で応援してるね！！」
諒「ありがと！じゃあ行つてくるわ。」
なのは「またあとでねー！」
そして俺は広場に向かった

諒「まさかトップバッターかよ。」

俺はあのあと受け付けをしたらトップバッターになった

諒「まあ、いいか。」

司会「さあ、今週もやって参りました！！カラオケコンテスト！！
まずはトップバッター！！コダマタウンから来た新井諒君です！！」
おっ、出番だな

諒「コダマタウンから来た新井諒です。精一杯歌います！！」
キヤーーー

観客が盛り上がってる

なのはも喜んでるみたいだ

司会「それじゃあ諒君！！皆を盛り上げてくれよ！！」
司会がそう言うと、音楽が流れだした

結果から言うと、俺は優勝してしまった
優勝した俺自身も、今だに驚いている
景品として、パンダのぬいぐるみを貰った
そして俺は、なのはの所に向かっている
そして俺はなのはの所に向かった
なのはは、ベンチに座っていて俺を待っていた
諒「なのはー！！」

俺が呼ぶとなのはは走って俺の所まで来た

なのは「お疲れさま！！凄く格好良かったよ！！」

そんなに誉められると照れるな

そうだ！

諒「はいこれ。」

俺はなのはに持っていったパンダのぬいぐるみを渡した

なのは「どうしたのこれ？」

諒「優勝した景品。此処ってお土産を買う所ってないだろ？だから

それが俺となのはの初デートの記念。」

なのは「ありがとう！！」

なのははお礼を言うとパンダのぬいぐるみを抱き締めた

諒「さあ、まだ見てない動物を見て回ろうぜ！」

なのは「うん！！」

そして俺となのはは閉園時間ぎりぎりまで動物を見て回った

そして帰りのバスではなのはが眠り俺の肩に頭を置いていたので揺

らさないようにしてあげた

そしてなのはをおんぶして家に帰った

特別編1　なのはとデート（後書き）

魔法少女リリカルなのはが好きな作者の松上です

諒「デジモンテイマーズが好きな主人公の諒だ。」

すずか「ロックマンエグゼが好きな後書き限定キャラのすずかです！」

なのは「今回の話に出てきたヒロインのなのはです！！！」
まずは！

4人「ジエスター！！アーカムさんありがとうございます！！！」

なのは「今回の話はとうだった？」

なのは「凄く嬉しかった！！だからまた作ってね！！！」

当たり前だー！！

諒「もういいって、その名言。」

さて、次回も大変だ！！

すずか「また諒君に歌ってもらうんですか？」

ああ！特別編は全部歌ってもらうぜ

諒「まあ、歌うことは嫌いじゃないから別にいいがな。」

よし！

それじゃあすずか！

いつものよろしく！！

すずか「はい！」

次回　特別編2　ティアナとデート」

諒「それじゃあ」

なのは「次回も」

4人「お楽しみにー！」

特別編2 ティアナとデート（前書き）

今回はティアナとデート!!
頑張りました

今回はAIさんが教えてくれました

マクロスFで

『俺は俺一人の力で生きる。死ぬ時も一人だ。それでいい』
BY 早乙女アルト

『人が本気で好きになるのは命がけなんだな』
BY ミハエル・ブラン

『死ぬのが怖くて恋ができるーっ!!』
BY クラン・クラン

『歌はお前の心だ。それも、お前だけの物だから。』
『悲しみも、怒り、喜びも、思いの全てを歌に込めて・・・』
BY プレラ・スターン

今回もありがとうございます!!

特別編2 ティアナとデート

side 諒

今日はティアナとデートをする

なのは同様公園で待ち合わせをしている

俺の格好は白の半袖のTシャツ、黒のスボンだ

ティアナ「お兄ちゃん!!」

来たみたいだな

ティアナ「ごめんね、遅くなっちゃって」

ティアナの服装はなんと白の服に黒のミニスカートという俺とお揃いの服だった

諒「まあ、時間はまだまだあるし遅くなるのはいいんだが。ティアナ、その服・・・」

ティアナ「もちろんお兄ちゃんとお揃いだよ!!お兄ちゃんの服を見て着替えたんだ!!」

まあ、別にいいが・・・

諒「似合ってるぞ」

ティアナ「本当!?!」

諒「本当さ」

ティアナ「ありがとうお兄ちゃん!!」

そう言っつて俺に抱きついてきた

諒「さ、早く行こうぜ」

ティアナ「うん!!」

そして俺達はバス停に行きバスに乗った

映画館到着!!

やはりバスに乗ってる男から嫉妬の視線で見られた

まあ、ティアナは幸せそうだったのでいいがな
諒「えーと、何の映画を観るんだ？」

映画を観ることは知ってるが何を観るかは知らない
ティアナ「えーと、『ROOKIES卒業』だつて」

諒「ああ、不良が甲子園を目指して頑張るやつか。」
まさかこの世界で観れるなんてな

本当は転生する前に観たかつたんだが人気がありすぎて観れずに死
んじまつたんだよな・・・

ティアナ「さ、早く入ろうよ!!」

諒「ああ!!」

マジでわくわくするぜ!!

諒「グスッ」

ティアナ「グスッ」

映画を観おわつた

マジで感動した

みんな格好良いこと言いすぎだろ

後半からずつと泣いてたよ俺達

諒「グスッ、ティアナ早く出ないと」

ティアナ「グスッ、わかってる」

そして俺達は泣きながら映画館を出た

諒「ふうーやつと落ち着いた」

ティアナ「うん、そうだね」

俺達は映画館を出たあと近くの公園で落ち着くまで泣いた
時々小母さんたちが心配して話し掛けてくれた

本当みんな優しすぎだろ

そんなことを思いながら公園の時計を見た

11時48分

そろそろ昼ご飯だな

諒「ティアナ、そろそろ昼だからご飯を食べに行こうぜ」

ティアナ「うん！！いっぱい泣いたからお腹すいちゃった」

諒「じゃあ行こうぜ！」

ティアナ「うん！！」

ティアナは俺の右腕に抱きついて言った

そして俺達はデパートのレストランを目指し歩きだした

デパートのレストラン到着！！

なぜデパートのレストランで昼ご飯を食べるのかと言つとこのレストランのスパゲッティがおいしいらしい

なので食べに来たわけ

店員「いらっしやませー！！お二人ですか？」

諒「はい」

店員「わかりました！！それでは席へご案内します！」

俺達は店員についていき席に着いた

店員「ご注文はなんですか？」

諒「スパゲッティにオレンジジュースで」

ティアナ「じゃあ私も！」

店員「わかりました！すぐにお持ちしますね！！」

そう言つて店員は厨房へ言った

ティアナ「ねえお兄ちゃん知ってる？」

諒「何がだ？」

料理を待つてるとティアナが聞いてきた

ティアナ「このデパートってね、今日カラオケコンテストがあるみ

たいなの。だからお兄ちゃん出てみない？」

カラオケか・・・

なのはの時だけでは歌い足りないからな
出ますか！

諒「じゃあ出てみるわ」

ティアナ「本当！？じゃあ私応援するね！！」

ティアナがそう言うのと料理が来た

店員「スパゲッティとオレンジジュースです！！」

諒「ありがとうございます」

店員「それではごゆっくり」

店員はそう言うのと厨房に戻った

ティアナ「それじゃあ」

諒・ティアナ「いただきます！！」

そう言うのと俺達はスパゲッティを食べた

諒「うまいなこれ！」

うまい！今度家で作ってみるか・・・

ティアナ「お兄ちゃん、今度家で作ろうと思ったでしょ」

！？

諒「な、なんでわかった？」

こいつはいつから人の心を読めるようになったんだ

ティアナ「私はお兄ちゃんと長い時間いるんだから大体予想できるよ」

なるほどな

諒「ま、今度作るとして早く食べてカラオケコンテストにエントリー

ーしてこないとな」

ティアナ「そうだね」

そして俺達はスパゲッティを食べた

司会「さあーカラオケ大会最後の出場者だ!!」

俺はカラオケ大会にいて最後の出場者だ

まさか司会が動物園にいた司会なんてな

司会「最後の出場者は私も一目置いている選手だ!!コダマタウンから来た新井諒君だ!!」

司会が言うつと観客が騒めき始めた

まったくあの司会は・・・

諒「皆さんこんにちは!コダマタウンから来た新井諒です。頑張つて歌いますので聞いてください!!」

司会「諒君、この前みたいに頼むよ!!」

司会が言うつと音楽が流れだした

俺は無事に歌い終わった

諒「ありがとうございますー!!」

俺が言うつと観客から拍手を貰いアンコールされてしまった

司会「諒君、明日どこに行く?」

司会が聞いてきた

諒「明日は水族館に行く予定ですけど・・・」

そう言うつと司会が笑った

司会「諒君の歌が聴きたい方は明日水族館に来てください!!明日

も水族館でカラオケコンテストをします!!」

まあいいか

司会「今回参加してくれた諒君にはネックレスをプレゼントします
!!」

ラッキー!!

司会「みなさんそれではまた明日ー!!」

俺は一礼して舞台から降りた

諒「気持ち良かったー」

ティアナ「お兄ちゃん!!」

俺がベンチに座っているとティアナが走って来て俺に抱きついてきた

ティアナ「お疲れさま!! 凄く格好良かったよ!!」

諒「ありがとな。そうだ、これやるよ。」

俺はティアナにネックレスを渡した

ティアナ「いいの?」

諒「ああ! このネックレスはデートの記念な。嫌だったか?」

ティアナ「全然!! 凄く嬉しい!! ありがとねお兄ちゃん!!」

諒「どういたしまして」

そのあと俺達はゲームセンターや服屋を回ったりした

そして俺達は家に帰った

特別編2 ティアナとデート（後書き）

ルフィが好きな作者の松上です

諒「ゾロが好きな主人公の諒だ。」

すずか「エースが好きな後書き限定キャラのすずかです!」

ティアナ「今回の話に出てきたヒロインのティアナです!」
まずは!

4人「A Iさんありがとうございました!」

ティアナ「今回の話はどうだった？」

ティアナ「お兄ちゃんの優しさを改めてしれてよかった!」またお
願いね!」

当たり前だー!」

諒「飽きたからそれ。」

グサツ!」

ティアナ「次回は水族館に行くのよね?」

あ、ああ

すずか「次回も諒君は歌うんだよね?」

諒「ああ」

そ、それじゃあすずか

た、頼むな・・・ガクッ

すずか「は、はい

次回 特別編 フェイトとデート」

諒「それじゃあ」

ティアナ「次回も」

3人「お楽しみにー!」

・・・次回も頑張ろう

特別編3 フェイトとデート（前書き）

今回はフェイトとデート!!
今回も頑張った

今回はジェスター!!アークムさんが教えてくれた名言です

ビーストウォーズで

『笑いは心のビタミンだ!』

Byダイノボット

ありがとうございます!!

特別編3 フェイトとデート

side 諒

諒・フェイト「行ってきますー」

俺とフェイトは家を出た

今日はフェイトとデート

俺の格好は胸にドクロが描かれた黒のTシャツに薄い黒のジーパン
フェイトは黄色の半袖のシャツ、黒のミニスカートだ

諒「さて、水族館か・・・」

俺とフェイトのデートの行き先は水族館だ

フェイト「私、水族館初めて行くから楽しみ!!」

と俺の左腕に抱きついていているフェイトが言った

諒「なら今日はしつかり楽しまないとな!!」

フェイト「うん!!」

そして俺達はバスに乗って水族館に向かった

水族館到着!!

やはり今回も男共の嫉妬の視線があつた

本当しつこい!!

フェイト「諒!早く入る!!」

俺がそんな事を思っているとフェイトが俺の腕を引っ張って言うてきた

諒「わかったから引っ張るなつて。」

そして俺達は水族館に入った

フェイト「綺麗・・・」

諒「久しぶりに水族館に来たけどやっぱいいな。」

綺麗な魚達を見ながら呟いた

フェイト「凄く可愛い・・・」

フェイトは魚達に興味津々

しかし迷子にならないように手はつないでる

俺はフェイトを見ながら魚を見た

俺達は今レストランに来ている

あのあといろんな魚を見て回りお腹が空いたので水族館のなかにあるレストランに来た

店員「ご注文をどうぞ！」

諒「じゃあ俺はオムライス」

フェイト「わ、私も！」

店員「かしこまりました！少しお待ちください！！」

諒「フェイト、ちゃんと楽しんでるか？」

俺がフェイトに聞くとフェイトは笑顔で答えた

フェイト「当たり前だよ！綺麗な魚達を好きな人と見てるんだから楽しいに決まってるよ！！」

諒「それはよかった」

店員「お待たせしました！オムライスです！！ごゆっくり！！」

俺達が会話しているとオムライスが来た

諒「じゃあ食べようぜ！」

フェイト「うん！！」

諒・フェイト「いただきます！！」

そして俺達はオムライスを食べた

そしたら

司会「やあ！こんな所にいたのかい！！」

諒「一体なんのようですか？」

カラオケコンテストの司会が俺に話し掛けてきた

司会「なに、今回はお礼の前払いさ。」

そう言うどプレスレットを置いてきた

司会「時間は一時からだからよろしくたのむよ!!」

そう言うてどこかに行った

フェイト「諒、あの人誰？」

諒「ああ、カラオケコンテストの司会者。なのはやティアナとデートしたときにやってたから参加したわけ。」

フェイト「私も諒の歌聴きたい!!」

うーん、まあフェイトが聴きたいって言うてるし参加するか

諒「OK!なら早く食べようぜ!!」

フェイト「うん!!!!」

俺達は急いでオムライスを食べた

司会「さあ、このコンテスト一番の注目選手!!コダマタウンから来た新井諒君だ!!」

凄いにんきだな俺って・・・

諒「頑張つて歌いますので応援よろしくお願いします!!」

司会「今回も盛り上げてくれよ!!!!」

司会がそう言うど音楽が流れだした

俺は無事に一曲歌い終わった

だけど、今回は二曲歌わないといけない

俺はマイクを持ちなおした

司会「二曲目も盛り上がって行こう!!それではどうぞ!!!!」

諒「ありがとうございます！！」

俺が歌いきると拍手に包まれた

司会「諒君、明日はどこに行くの？」

諒「遊園地ですけど」

司会「なら明日も歌ってくれない？」

諒「お礼をしてくれれば歌いますけど」

司会「なら決まりだね。みなさん！！明日は遊園地です！！絶
対見に来てください！！！」

俺は一礼してフェイトがいるところに向かった

フェイト「お疲れ！！諒！！！」

俺がフェイトの所に行くくとフェイトが抱きついてきた

諒「どうだった、俺の歌？」

フェイト「凄く格好良かったよ！！！」

俺はフェイトに聞くとフェイトは笑顔で答えてくれた

諒「ありがとな！まだ時間もあるしまだ見てない魚を見ようぜ！！！」
フェイト「うん！！！」

そして俺達は時間ぎりぎりまで魚を見た

ブレスレットはフェイトにあげた

俺とフェイトのデートの記念として・・・

特別編3 フェイトとデート（後書き）

吹雪士郎が好きな作者の松上です

諒「豪炎寺が好きな主人公の諒だ。」

すずか「ヒロトが好きな後書き限定キャラのすずかです!」

フェイト「今回の話に出てきたヒロインのフェイトです!」
「まずは!」

4人「ジェスター!」
「アーカムさんありがとうございました!」
「フェイト今回の話はどうだった?」

フェイト「諒の格好良い姿が見れて幸せ!」
「またお願いね!」

ああ!!

諒「今回は言わなかったな。」

当たり前だ!!

諒「やっぱり言ったよ、この人!」

すずか「次回で特別編もラストだね。」

ラストスパートだ!

それじゃあすずか!

いつものよろしく!

すずか「はい!」

次回 特別編4 はやてとデート

それじゃあ

諒「次回も」

4人「お楽しみに!」

特別編4 はやてとデート(前書き)

ついに特別編最後!!

楽しんでもらえたら幸いです

今回はAIさんが教えてくれた名言です

マクロスFで

『反応弾が無理ならミサイル!ミサイルが無理なら銃!それが無理なら最後は拳になるうが齒だろうが爪だろうが戦う意志が欠片でも残る限り俺は戦う、戦ってみせる!!』

『ふっ、こんなのかすり傷だ。妹も惚れた女も守れないでなにが男だ!』

『悪いが俺は大人じゃなくて男なんだよ』
Byオズマ・リー

凄い男、いや凄い漢だ!!

格好良すぎだろ!!

ありがとうございます!!

特別編4 はやてとデート

side 諒

今日のはやてとデートの日だ

はやて「諒君、この服でええかな？」

はやては下着の状態（、、、、、、）で俺に服を見せてきた

諒「ただただだから、しししししし下着のじじじじじじじじじじ状態で来るなよ！！／／／／／／／／／／」

はやて「やっぱり可愛いな諒君！」

そう言つて俺に抱きついてきた

諒「はははは早く服を着ろ！！ででででデートに行けなくなるぞ！

！／／／／／／／／／／」

はやて「そらあかん！！早く服を着な！！」

俺がそう言つとはやては急いで服を着た

はやて「さ！早く行こ！！いつてきまーす！！」

はやては驚くべき早さで服を着て俺の左腕を掴んで俺を引っ張りながら走つた

諒「じゃあいつてきまーす！！」

そして俺達はバス停に向かった

諒「早く来すぎたな・・・」

はやて「そっやね・・・」

俺とはやては早く来すぎてバスが来る10分前に着いてしまった

今回の俺の服装は赤の半袖のTシャツ、黒のジーンズ

はやては白のパーカーに赤のミニスカートだ

諒「今日も歌うのか・・・」

はやて「歌うって？」

俺が呟くと左腕に抱きついていたはやてが聞いてきた

諒「ああ、実はなのは達とデートしたときにカラオケコンテストがあつてな、そのコンテストに俺出たんだ。そしたら凄く人気なつちまつて今日行く遊園地でも歌ってくれて頼まれたんだ。」

はやて「ほんまか！？じゃあ諒君の歌が聴けんねんなー。楽しみや！！！」

諒「はは、まあ頑張るさ。おっ！バスが来たみたいだな。」

俺達が話してたらバスが来た

はやて「デートの始まりや！！！」

俺達はバスに乗った

遊園地到着！！

やはり今回もバスのなかは嫉妬でいっぱいだった

だが俺も成長した！！

もう気にならない！！

やはり人間は日々成長してるんだな

はやて「さ、早く入る！！！」

俺がそう思っているとはやてが腕を引っ張ってきた

諒「ああ！！！」

そして俺達は遊園地に入った

諒「はやて、まず何に乗りたい？」

はやて「メリーゴーランドや！！！」

俺がはやてに聞くとメリーゴーランドと速答された

諒「わかった。じゃあ行こうぜ！！！」

そう言つて俺達はメリーゴーランドに向かった

メリーゴーランド到着!!

従業員「2人ですね？」

諒「はい」

従業員が聞いてきたので俺は答えた

従業員「それではどうぞ。まもなくスタートします。」

従業員に言われ俺達は馬に乗りに行った

はやて「なあ、諒君？」

突然はやてが声を掛けてきた

諒「どうした？」

俺が聞くとはやては顔を赤くして言った

はやて「あ、あのな。えっと、ウチをな。その、お姫さま抱っこし

て乗ってほしいねんけど・・・／／／／／／／／／／

ヒョイツ

はやて「キャッ!!」

俺ははやてをお姫さま抱っこして馬に乗った

はやて「りよ、諒君!?!?!?!」

諒「可愛いお姫さまの願いを叶えるのが俺の務めですから。」

俺がそう言うとはやては顔を赤くして「ありがとうな／／／／／／／／／／

と言ってきた

諒「やっぱ可愛いお姫さまだ。」

はやて「そ、そんな／／／／／／／／／／

そしてメリーゴーランドが回り始めた

はやて「凄く嬉しかったわ!!」

諒「それはよかった。」

本当に嬉しそうで俺も嬉しいな

司会「涼くん!!」

せつかく楽しんでたのに

この人はクロノ並にKYだな

涼「なんですか?」

司会「いやー、涼くんを見に来た人の要望でカラオケコンテストが今からすることになっちゃって。」

おいおい、俺の許可は

司会「だから今から歌ってくれない?」

歌うのはいいがまずは貰わないとな

涼「で、報酬は?」

司会「猫のぬいぐるみと指輪さ、指輪の種類はルビー、サファイア、エメラルド、ダイヤモンド、パール、の指輪。総額300兆860ゼニーさ。」

涼「はやて「はあああああああ!?!?!?!?」

アホだろこの人!!

小学生に300兆ゼニー使うなんて!!

司会「驚いているね、しかしいいんだ!!君のおかげで僕もレギュラー15本持てるようになったし。ただ僕の番組に時々でいいから出演して歌ってくれない?」

まあ、いいか

涼「いいぜ!」

司会「ありがとう!!それじゃあ10分後に広場で!!」そう言つて司会は走っていった

はやて「凄い人だな。でも涼君の歌がこんなにも早く聴けるなんてラッキーや!!」

まあ、結果オーライだな

涼「じゃあはやて、俺行ってくるな!!」

はやて「ウチ応援してるな!!」

涼「ありがとな!!」

はやて「頑張つてな!!」

諒「ああ!!」

そして俺は広場に向かった

司会「皆さん大変お待たせしました!!新井諒君のコンサートが始まります!!」

うおー!!!!!!

司会「それじゃあ呼びましょう!!今回の主役の新井諒君です!!」

諒「皆さんおはようございます!!新井諒です!!今回集まってくれてありがとうございます!!精一杯歌うので聴いてください!!」

広場は人でうめつくされていて遊園地の従業員全員いた
仕事しろよ

司会「それじゃあ一曲目です!!それではどうぞ!!」
司会が言つと音楽が流れだした

はあ、まだ歌わないといけないんだよな・・・

司会「次は二曲目!!どうぞ!!」

司会がそう言つと、音楽が流れ始めた

・・・やつと最後だ

司会「次が最後の曲!!楽しんでくださいね!!それではどうぞ!!」

諒「ありがとうございますー!!」

俺がお礼をすると拍手か鳴り響いた

司会「ありがとうございます!! 諒君の歌が聴きたい方は来週の金曜日の8時から始まるミュージックステーションを観てください!! 僕の番組で諒君に出演してもらいます!! 今日歌わなかった曲を歌いますのでよろしくお願いします!! ありがとうございます!!」

そう司会が言う

テレビに出るのか・・・

なのは達も誘ってみるか

そう思いながら俺は舞台からさった

はやて「諒君お疲れさま!!」

はやては俺に抱きつきながら言った

諒「ありがとな、はやてが聴いてくれたから歌えたんだ。」

はやて「ウチはなんもしてへん。しかしテレビに出るなんてな、凄すぎるで!!」

まあな

俺がはやてにテレビに一緒に出てみないかと聞こうとしたら

司会「諒君!! 忘れ物だよ!! ぬいぐるみと指輪!!!! じゃあ来週

また会おう!!」

そう言ってぬいぐるみと指輪を俺に渡して去っていった

諒「はやて、まずはぬいぐるみをやるよ。もらい物だけど、俺とはやてのデートの記念な。」

そう言いはやてにぬいぐるみを渡した

はやて「ありがとうございます!! 大事にするな!! で、指輪はどうするん?」

指輪を持って遊ぶ奴なんかいないだろう

普通は(、、、、)

諒「何、フォルテのなかに入れておくから大丈夫さ。な！フォルテ」
フォルテ「落とされるよりマシだからな。」

そう言つてフォルテは指輪を入れてくれた

諒「さ、はやてまだ時間はある！！思いつきり遊ぶぞ！！」

はやて「おおー！！」

そう言つて俺達は遊んだ

時刻は夕方

あのあとはやてと遊園地のすべてのアトラクションをすべて回つて
お昼にハンバーグを食べた

時々俺の歌を聞いたお客が握手を求めてきたので握手したらたくさ
んの人が求めてきたので驚いた

そんなこんなで夕方になった

はやて「諒君、最後にあれ乗らへん？」

はやてが指を差した乗り物は観覧車だった

諒「ああ、いいぜ。」

そして俺達は観覧車に乗った

乗ったのだがお互い無言だった

そして観覧車が一番高い場所まで来た

そしたらはやてが急に抱きついてきた

諒「は、はやて？」

はやて「ウチはもう諒君とは離れたくない。だからウチのこと嫌い
にならんといてな。諒君が望むんやったらウチ何でもするからウチ
のこと捨てんといてな・・・」

はやてはそんなことを言ってきた

だから俺ははやてにキスをした

はやて「んっ！？／＼／＼／＼／」

諒「んっ」

そして俺ははやての口から口を離した

はやて「りよ、諒君！？／＼／＼／＼／」

はやてはキスをされて顔が赤かった

諒「大丈夫、俺ははやてを捨てたりなんかしない。俺ははやてとず
つと居たい。だからそんなこと言わないでくれ。」

はやて「ごめんな。こんな事言ってもうて。やけどもうちょっと」
のままできてくれへん？」

諒「いいぜ。」

そして俺ははやてを抱き締め続けた

そして観覧車からおりた

そしてバスに乗って家に帰った

家に帰って俺はなのは達をリビングに集めた

集めた理由はあれを渡すためだ

なのは「どうしたの？」

フェイト「みんなを集めて？」

ティアナ「渡したいものって？」

みんな聞いてくる

はやては知ってるのでずつと笑顔だ

諒「今日おまえたちに渡すものはこれだ。」

なのは、フェイト、はやて、ティアナに小さな箱を渡す

なのは「開けていいの？」

諒「当たり前だ。」

そしてみんな箱を開ける

なのは「すごい・・・」

フェイト「綺麗・・・」

ティアナ「お兄ちゃんこれは？」

諒「それは婚約指輪だ。」

3人「!?!」

やっぱびくっぴりしてるな

諒「もしよかったら受け取ってくれないか？」

なのは「ありがとう!!」

フェイト「凄く嬉しい!!」

ティアナ「まさかこんなサプライズがあるなんて。」

はやて「これからもよろしくな、あなた(、、、)」「(」

諒「まだ結婚は先。だからその言い方もお預け。」

はやて「まあええか。」

そして俺はテレビのこといいなのは達とテレビに出る約束をして、

ご飯を食べ、お風呂に入った

今日はみんなで寝たことをいっておこう

みんなの寝顔は幸せそうだったので安心して俺も寝た

特別編4 はやてとデート（後書き）

まずは！！

すずか・松上「おめでとー！！！！」

諒「ありがとな。」

なのは「凄く嬉しいの！！」

フェイト「幸せだな・・・」

ティアナ「これからもっとお兄ちゃんと仲良くしなくちゃ！！」

はやて「諒君に相応しい女になるで！！」

しかしあの司会者凄いな

諒「ああ、子供に300兆ゼニー使うなんてな。」

はやて「条件が自分の番組に出て歌ってほしいやからウチ等有名な

になるで！！」

なのは「私頑張らないと・・・」

フェイト「はは、それより遂に原作入りだね！！」

ああ！！

頑張るぜ！！

ティアナ「！？松上君！！いつもの！！」

えっ？

あっ！！忘れてた！！

じゃあ！！

7人「AIさんありがとうございました！！」

危ない危ない

諒「気を付けるよ。それにしても遂に原作入りかー」

フェイト「長かったね。」

ああ、原作もオリジナル設定は入れるけどな

それじゃあすずか！

頼むぜ！！

すずか「はい！！」

次回 原作スタート！ 始まった物語！！」

松上・諒・すずか「それじゃあ」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「次回も！！」

7人「お楽しみにー！！」

第26話 原作スタート！ 始まった物語！！（前書き）

遂に原作スタート！！

今回からも頑張ります！！

今回はジェスター・アーカムさんが教えてくれた名言です！！

シャーロック・ホームズで

『君はただ眼で見るだけで、観察ということをしな。見るのと観察するのでは大違いなんだぜ。』

『資料もないのに、ああだこうだと理論的な説明をつけようとするのは大きな間違いだよ。人は事実にあう論理的な説明を求めようとしないで、理論的な説明にあうように、事実を知らず知らず曲げがちになる。』

『心で見ないからだ。眼で見るだけなら、ずいぶん見てるんだがねえ。僕は十七段あると、ちゃんと知っている。それは僕がこの眼で見て、そして心で見ているからだ。』

Byシャーロック・ホームズ

凄いこと言ってる

絶対こんなこと言えないよ

第26話 原作スタート！ 始まった物語！！

ズイまビニアモン

ZM事件から早2年

この事件は本来この世界では起きなかつた事件

しかしこの事件を解決させた人達がいた

その中の一人は人の悲しむ姿が嫌いで誰かが危険になれば命掛けで守ろうとする少年、新井諒

この話はそんな新井諒の大切な人との絆物語である

side 三人称

ガキンツ！！ ガキンツ！！

午前5時26分

まだ日が昇ってそんなに経ってない時間帯から金属と金属がぶつかり合う音が聞こえる

??? 「ライトブレイド！！！」

? 「月牙天衝！！！」

2人の少年がお互い剣から斬撃を飛ばした
しかし斬撃は丁度真ん中でぶつかり消えた

片方の少年は黒を基調とした蝙蝠のような体にちよつとぼろぼろの茶色のマントを羽織っており、右手には黒の剣を持っていた

もう片方の少年は天使と悪魔の羽根が生えており、服装はまさに天使と悪魔の服が交ざった服、そして右手には白の剣、左手には黒の銃を持っていた

? 「次で決めるぞ、スバル！！！」

マントを羽織っていた少年が叫んだ

スバル「いくよ！！ヤミ！！！」

スバルと言われた少年は銃、ヤミに何かをいった

ヤミ「ああ！！バーストモード始動！！」

スバル「オーバードライブ！！」

ヤミは何かのプログラムを始動させスバルはそのプログラムの名を叫んだ

そうするとスバルは光に包まれた

そして光が納まるとスバルの格好が変わっていた

天使と悪魔の服が交ざった服は白の鎧になり、右手に持っていた白の剣はオレンジの恐竜の剣、左手に持っていた黒の銃は青の狼の銃になり、天使と悪魔の羽根はマントになっていた

スバル「フォルムオメガ！！さあ諒君も本気を出してよ！！」

？「いくぞ！！フォルテ頼む！！」

諒と呼ばれた少年はフォルテに言う

フォルテ「クロスシステム始動！！ウォーグレイモン×ナルト×大紅蓮氷輪丸×吹雪！！クロスヒュージョン！！」

フォルテがそう言うと言いつつ諒は光に包まれた

そして光が納まると諒も姿が変わっていた

両手はウォーグレイモンのドラモンキラー、髪型は吹雪、服装はナルト、背中には氷の翼が生えていた

スバル「グレイソード！！！！」

諒「ドラモンキラー！！！！」

2人は素早く近づきあい真ん中でぶつかり合った

ガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツガキンツ

何度もぶつかり合う

そしてお互い10mずつ離れた

そしてスバルは諒にガルルキャノンに向けた

諒は大玉螺旋丸を作り足元に放出し両足でまたぐようなモーションをとる

そうすると大玉螺旋丸は氷が集まった

そしてお互い技を放った

スバル「ガールルキャノン!!!!!!」

諒「氷遁螺旋丸!!!!!!」

スバルはガールルキャノンから砲撃し、諒は氷に包まれた螺旋丸を蹴った

ドカーーーーーーン!!!!!!

お互いの技がぶつかり合い煙が立ちこめた

そして煙が晴れると2人の姿が見えた

だがその体勢は

諒「俺の勝ちだな。」

スバル「僕の負けみたいだね。」

諒はドラモンキラーでスバルのグレイソードとガールルキャノンを押さえ、諒の足がスバルの顔の目の前にあつた

????? 「2人ともお疲れー!!!」

勝負が決まるとオレンジの髪をした少女が2人に叫んだ

????? 「2人とも早く汗を拭かないと風邪を引くよ。」

金髪のサイドテールの少女が2人に汗を拭くよう促す

????? 「汗を拭いたら朝ご飯にするから手を洗うよ!!!」

茶髪のサイドテールの少女が2人に手を洗うようお願いする

????? 「さ、早くご飯にしよう。ウチお腹が空いて倒れそうや!!!」

茶髪で髪を短く切った関西弁の少女がお腹を両手でさすりながら言う

スバル「あ、あはははははははははは」

スバルは苦笑いしている

諒「はあ・・・今行くよ!!!」

そして2人はウェーブアウトした

side 諒

遂にこの日がやってきた

F M 星人来襲の日

この日のためにスバルを強くしたのも過言ではない
だがスバルが強くなつたからって介入しないわけではない
がつつり介入してみんなを救う

「???」「どうしたの諒くん?さつきから全然食べてないけど・・・」
諒「ちよつと考え事してただけだよ、なのは。」

茶髪のサイドテールの女の子、高町なのはが聞いてきたので俺は素
直に答えた

なのはは俺の将来の嫁の1人でスーツエーモンの人柱力

「???」「よかつた。てつきりおいしくないのかと思つたよ。」

諒「みんなが作つたものが不味いわけないだろ。」

俺の言葉を聞いた金髪のサイドテールの少女、フェイト・新井が安
心したので俺はフェイトの言葉を否定する

フェイトも俺の将来の嫁の1人でチンロンモンの人柱力

「???」「しかし今回の戦いも凄かつたで。ウチらは目で追うのがや
つとやつたで。」

諒「何、俺達はまだまださ。もつと強くなつてみんなを守れるよう
にしないと。」

茶髪で髪を短く切つた関西弁の少女、八神はやての言つたことに俺
は謙遜する

はやても俺の将来の嫁でシエンウーモンの人柱力だ

「???」「お兄ちゃんつてやつぱり優しいね!」

諒「人が人を守るのは当たり前だろ。」

俺と同じオレンジの髪をした少女、新井ティアナの言つた言葉を俺
は当たり前と言う

ティアナは俺と血の繋がらない兄妹で俺の将来の嫁、またバイフー
モンの人柱力

スバル「僕も人を守れるくらい強くないと!」

諒「お前は十分人を守れるくらい強いよ。」

スバルの言葉に俺は強いと言う

スバルは俺のブラザーで2年前のZM事件と一緒に解決させた仲間だ
スバル「ありがとう、諒君が言ってくれると何だかそんな気がして
きたよ。」

諒「お前は十分強いんだから自信を持って！！それよりスバル、今日
は学校には来ないんだよな？」

スバル「うん、今日はここで星を見るんだ。」

俺達が今いる場所は展望台

スバルは水曜日しか学校に来ていない

何故かというときスバルは小さいとき父親である星川大吾の事故死で
心を閉ざしていた

そこに俺が話し掛けスバルの心を開かせた

ZM事件が起きる前、俺達の隊長だったWAXAの暁シドウにより
水曜日だけ学校に行っている

学校側もそれを了承している

大吾が生きていることは2年前に話しているためスバルは大吾が帰
ってくるのを待っている

諒「ごちそうさまでした。」

全員（諒以外）「ごちそうさまでした！！」

そして朝ご飯をかたづけ展望台をあとにした

諒「じゃあスバル、夕方にまた会おうぜ！」

スバル「うん、またねみんな！！」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「またねー！！」

俺がそう言うとスバルは手を振りながら家に帰っていった

諒「さ、早く帰って学校の準備しようぜ！」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「うん！！」

そして俺達も家に帰った

諒「（今日遂にウォーロックが来るんだよな・・・絶対にHAPPY
YENDにしてやる！！）」

俺はそう思いながら家に帰った

第26話 原作スタート！ 始まった物語！！（後書き）

皆さんこんばんは、作者の松上です

諒「どーもー、主人公の諒です。」

すずか「皆さんこんばんは！！後書き限定キャラのすずかです！！」
まずは！！

3人「ジエスター」アカムさんありがとうございます！！
いやー遂に原作入り！！

諒「これもみんなのおかげだ！！ありがとな！！」

これからガンガン更新しますのでよろしくお願いします！！
すずか「次回は何をするんですか？」

ああ、次回は成長したみんなのキャラ設定だ！！

諒「今回は必要だもんな」

ああ！！

頑張るぜ！！

すずか「それじゃあみなさん！！」

諒「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

キャラ設定パート6（前書き）

今回は成長した諒達の設定です！！
少しネタバレは含みますが・・・

今回教えてくれたのは武御雷さんです！！

マブラヴ オルタネイティヴで

『……怖いという感情は、決して恥ずかしいものじゃない。そのおかげで生き残れるのよ。どんなに勇敢でも死んだらそこまで、どんなに人が褒めたって格好が良くなったって……死んだら終わり。もう誰も守れない。怖さを知る者は臆病だと言われて笑われるかも知れない。でも……生き残る。白銀はどっちがいい？』

『臆病でも構わない。勇敢だと言われなくてもいい。それでも何十年でも生き残って、一人でも多くの人を守って欲しい……』

『そして、最後の最後に……白銀の……人としての強さを見せてくれればそれでいいのよ』

B y 神宮司まりも

『悲しい事ですが……全ての者達の望みを満たす道が、常にそなたの前に有るとは限りません。道を指し示そうとする者は、背負うべき責務の重さから……目を背けてはならないのです。そして……自らの手を汚すことを厭うてはならないのです。』

B y 煌武院悠陽

すい……

こんな事言われたらどんな人も涙する

格好良いぞー！！

キャラ設定パート6

主人公

あらいりょう

新井諒

CV：森田成一

代表作：BLEACH（黒崎一護役）、ONE PIECE（マルコ役）

性別：男

年齢：11才

身長：153.5cm

体重：51.6kg

容姿：BLEACHに出てくる黒崎一護を小さく、幼くした姿

性格：誰にでも優しいが大切な人を傷つけられたりすると相手を半殺しにする

能力：1. 転生する前の記憶は忘れない

2. 身体能力MAX & amp; 瞬間記憶能力

3. ロックマンエグゼ・流星のロックマンに出てくるすべての変身可能（ただしソウルユニゾンしてないナビやノイズ変身がない電波体にも変身可能）

4. NARUTOに出てくる忍術・幻術・体術の使用可能（ただし万華鏡写輪眼等のデメリットはなし）

5. BLEACHに出てくる技・武器使用可能

6. デジモンになる力

7. イナズマイレブンに出てくる技の使用可能

8. クロスヒュージョン（力の同時使用能力）

9. 電波変換

電波変換後の容姿：フォルテクロスロックマンで少しぼろぼろのマトントを羽織っており、右手に天鎖斬月

備考：2年前のZM事件を解決させた闇の帝王対策部隊の1人。ま

た2年前テレビに出て歌ったことから歌手になった。チームメイトはなのは、フェイト、はやて、ティアナ、諒。チーム名はヒカリ。なので時々休んで歌手活動をしている。

またスバルの母とはお茶友達、相棒はフォルテ、指輪の宝石はパール

ヒロイン1

たかまち
高町なのは

CV：田村ゆかり

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ（高町なのは役）、N A R U T O シリーズ（テンテン役）

性別：女

年齢：10才

身長：152.4cm

体重：???kg

容姿：魔法少女リリカルなのはA・sに出てくる高町なのはを成長させた姿

性格：誰にでも優しいが、諒のことをバカにされると相手をこの世から消す行為をする

能力：1. デジヒュージョン

2. すべての火の技使用可能

3. マキシマムファイア使用可能

4. 電波変換

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはに出てくる高町なのはのバリアジャケットをイメージ

デジヒュージョン後の容姿：四聖獣の1匹のスーツエーモンの姿

備考：諒の将来の嫁で指輪の宝石はルビー。チームヒカリで諒達と歌手デビューしたので学校は時々休んでいる。相棒はスーツエーモン

ヒロイン2

フェイト・新井^{あらい}

CV：水樹奈々

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ（フェイト・テストロッツサ役）、NARUTOシリーズ（日向ヒナタ役）

性別：女

年齢：10才

身長：152.3cm

体重：???kg

容姿：魔法少女リリカルなのはA'sのフェイト・テストロッツサを成長させた姿

性格：落ち着きがあるが諒の前では甘えん坊になる、だが諒をバカにする奴には全力で攻撃する

能力：1. デジヒュージョン

2. すべての雷の技使用可能

3. 千鳥使用可能

4. 電波変換

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはに出てくるフェイト・テストロッツサのバリアジャケットをイメージ

デジヒュージョン後の容姿：四聖獣の一匹のチンロンモンの姿

備考：諒の将来の嫁で指輪の宝石はエメラルド。なのは同様チームヒカリで諒達と歌手デビューしたので学校は時々休んでいる。相棒はチンロンモン

八神^{やがみ}はやて

CV：植田佳奈

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ（八神はやて役）、ハヤテのごとく！！（愛沢咲夜役）

性別：女

年齢：11才

身長：152.9cm

体重：???kg

容姿：魔法少女リリカルなのはA・Sに出てくる八神はやてを成長させた姿

性格：明るく元気、一番諒に甘えていて諒に対しては恥じらいがない
能力：1. デジヒュージョン

2. すべての水の技使用可能

3. 氷輪丸使用可能

4. 電波変換

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはA・Sに出てくる八神はやてのバリアジャケットをイメージ

デジヒュージョン後の容姿：四聖獣のシエンウーモンの姿

備考：諒の将来の嫁で指輪の宝石はダイヤモンド。なのは同様チームヒカリで諒達と歌手デビューしたので学校は時々休んでいる。相棒はシエンウーモン

新井^{あらい}ティアナ

CV：中原麻衣

代表作：魔法少女リリカルなのはシリーズ（ティアナ・ランスター、ラグナ・グランセニツク、メガーヌ・アルピーノ）、Angel

Beats！（音無初音）

性別：女

年齢：10才

身長：151.4cm

体重：???kg

容姿：魔法少女リリカルなのはStrikerSに出てくるティアナランスターを小さく、幼くした姿

性格：ブラコンで諒至上主義

能力：1. デジヒュージョン

2. すべての風の技使用可能

3. 螺旋丸使用可能

4. 電波変換

電波変換後の容姿：魔法少女リリカルなのはStrikerSのティアナ・ランスターのバリアジャケットをイメージ

デジヒュージョン後の容姿：四聖獣のバイフーモンの姿

備考：諒と血の繋がらない兄妹で諒の将来の嫁、指輪の宝石はサファイア、なのは達と同じでテレビに出演するため時々学校を休んでいる、相棒はバイフーモン

原作の主人公

ほしがわ

星河スバル

CV：大浦冬華

代表作：流星のロックマンシリーズ（星河スバル役）、TOLLOVERーとらぶるーシリーズ（レン・エルシ・ジュエリア、ルン・エルシ・ジュエリア役）

性別：男

年齢：11才

身長：152.8cm

体重：51.4kg

容姿：原作と同じ

性格：原作と違いかかなり優しいが諒達以外の人にはかなり素っ気ない

能力：1・デジヒュージョン

2・オーバードライブ

デジヒュージョン後の姿：姿はルーチェモンFMで右手に白の剣^{ヒカリ}、左手に黒の銃^{ヤミ}を持っている

オーバードライブ後の姿：デジタルワールドを守るロイヤルナイツのオメガモン

備考：諒の親友でブラザー、戦闘能力はかなりありウイルスバステイングのレベルはS、また学校には水曜日だけ行っておりそれ以外は展望台で星を観察している、諒に勉強を教えてもらってるのだから賢い

キャラ設定パート6（後書き）

皆さんどうも！！

作者の松上です！！

諒「よう！主人公の諒だ！！」

すずか「みなさんこんにちは！！後書き限定キャラのすずかです！！」

まずは！！

3人「武御雷さんありがとうございました！！」

今回の名言でなんか生きることの大切さを知ったような気がする

諒「そうか・・・しかし今回のキャラ設定では俺とスバル以外の体重が???になっていたがどうしたんだ？」

女心をもつと理解しろよ・・・

すずか「サイテー・・・」

諒「グハツ！！」

俺は彼女達のことを配慮したんだ！！

すずか「やっぱり松上君は優しいね／＼／＼／
ま、まあな／＼／＼」

諒「そ、それより・・・次回予・・・告は？」

あっ、そうだったな！！

じゃあすずかよろしくな！！

すずか「は、はい！！」

次回 ウォーロック登場！！」

それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

第27話 ウォーロック登場!! (前書き)

遂に原作一話!!!

あのキャラが諒と・・・

今回はスイさんが教えてくれた名言です!!

ハヤテのごとく!で

『言葉にはしなくていい言葉は不完全だから言葉にすれば誤解を生む。勘違いの元となる。そうだろ?』

『ここから先の未来は・・・お前が私を守ってくれあの星に・・・

・・・約束したではないか過去でも未来でもお前が私を守って

・・・だったらここから先の未来はお前が私を守ってくれお前が守っ

てくれるならだったらお金はいらないよお金にかわって・・・お前

が私を守ってくれるなら・・・守って・・・くれるんだろ?』

B Y 三千院ナギ

・・・この子本当に子供?

だが突っ込んではいけない

それがルールだ

第27話 ウォーロック登場！！

side 諒

スバルと別れた俺達は家に帰った

そして俺は特訓で出た汗を流すために風呂に入った

諒「新曲はどれにしよう・・・」

俺は2年前にカラオケコンテストに出て実力が認められ、なのは達とチームを組んで歌手になった

まあ、歌は転生前の歌ばかりだが

なので時々学校を休んでる

諒「創聖のアクエリオンかな。」

はやて「それってどんな歌なんや？」

俺が新曲を選んでいたら横からはやての声が聞こえた

俺は横を見ると裸のはやて(、、、)がいた

諒「ななななな何でここここここにいいいいいい居るんだよ
!!!/!/!/!/!/!/!/」

俺ははやてを見ないように顔を横に向けながら聞いた

はやて「いやー、諒君と一緒に入りたかったからな。ダメだった？」

諒「ただただダメじゃないが、せせせせせせてタオルを巻いてくれ。」

はやて達は体が成長して胸など膨らんでいるため直視したら死んでしまう

はやて「わかった！タオルを巻いたら一緒に入ってええねんな！

！今日から一緒に入るうな！！」

なのは・フェイト・ティアナ「ずるい(の)(よ)!!!」

はやてがそう言うとなのは達が風呂の扉を開けてずるいと言ってきたなのは「ずるいよはやてちゃん！！」

フェイト「私達も諒と一緒に入りたいよ!!!」

ティアナ「だから毎日交替で入ろうよ!!!」

なんか話がどんどん進んでるが・・・
はやて「そんななん当たり前やん！ウチらは諒君の将来の奥さんなん
やから独り占めなんてせえへん。」
なのは・フェイト・ティアナ「それなら許す（の）（よ）」
そんなこんなで朝の時間が過ぎていった

俺は今コダマ小学校に向かっている

まあ朝のことはみんなが決めらしいから俺は知らない
????「おはよう、諒君。」

俺がそう思ってたら緑の髪をした女顔の少年が挨拶してきた

諒「よう、ツカサ！」

そう、彼は双葉ツカサ

5年になって初めて同じクラスになった

ついでに言うておくとなのは、フェイト、はやて、ティアナ、スバ
ルも同じクラスだ

ツカサ「今日は何か委員長達がスバル君に会いに行くみたいだよ。」
諒「あいつらもしつこいな。スバルの事わかってんなら本人が毎日
来るのを待ってやれよな。」

ツカサ「ははは、まあ諒君はスバル君のブラザーだからスバル君の
事僕らよりもわかってあげてるもんね。」

諒「まあな。」

なのは「諒くん、早く教室に行かないと遅刻しちゃうよ。」

ツカサと談笑してたらなのはが教えてくれた

諒「もうそんな時間か。ありがとななのは。ツカサ早く行こうぜ！
！遅刻したらうるさいのが叫ぶぞ。」

俺がそう言つとツカサはさらに笑った

ツカサ「はははは、諒君は怖いもの知らずだね。」

諒「あんなの怖いと思ってたら命が幾つ有ってもたんねーよ！」

俺はそう言いながら教室に向かった

昼休みで屋上にいます!!

えっ? 何で飛ばしたか?

勉強の話なんて誰が聞きたいんだよ...

それに小学校の習う事なんかもう知ってるよ。

俺、スバル、なのは、フェイト、はやて、ティアナは中学で習うことは全部勉強した

だから授業中はイメージトレーニングしてる

屋上にいるメンバーは俺、なのは、フェイト、はやて、ティアナ、ツカサだ

ツカサ「それにしても本当にみんな仲が良いよね。」

突然ツカサが言ってきた

諒「何言ってるんだ。俺達はみんな仲が良いに決まってるだろ。勿論お前も入れて。」

ツカサ「ははは、そうだったね。」

ツカサが二重人格のことは俺達は知ってる

最初はツカサから避けられたが次第に心を開いてくれて今じゃブラザーだ

????「こんな所に居ましたのね!!」

出た、うるさい奴とそのお供

本当、こいつとはやての声をしてる人が同一人物って認めたくないよな

はやてはめっちゃ可愛いがこいつはうるさい

ツカサ「どうしたの、委員長、キザマロ君、ゴン太君?」

ツカサは3人に聞く

ゴン太「いや、ちょっと委員長が無理やR「ギロツ!!」ち、ちょっと諒に話があるんだ!!」

脅されてるじゃん

可愛そうに

ん？

諒「俺か？」

俺が聞くとキザマロが答えてくれた

キザマロ「はい。諒君も知っているとありますが僕達のクラスに星河スバル君がいるでしょう？スバル君は水曜日しか来てないじゃないですか。だから僕達が毎日来るように説得しに今日の放課後に行くのですが・・・」

委員長「私達だけじゃ学校に来る楽しさがわからない。だからあなたにも一緒に来てもらおうわ！」

諒「却下です。」

まったくこいつは俺をだしにするつもりか

委員長「な、なんでよ！？星河君も毎日学校に来ればあなただって楽しいはずよ！！」

まったくうるさいなー

楽しい時間が減るだろうが

諒「俺はスバルの気持ちに任せる。俺は無理してまで学校に来てほしくない。だから説得しに行くならお前等だけで行け。」

俺がそう言つと委員長はイライラして「なら私達だけで行くわよ！行くわよ！！ゴン太！！キザマロ！！」と言って去っていった

諒「大変だな、ゴン太、キザマロ。」

ゴン太「そう思うなら反論しないでくれよ。」

キザマロ「本当です。あとでとばっちりを受けるのは僕達なんですから。」

委員長とは仲が悪いがゴン太とキザマロとは仲が良い

諒「悪かったな、お詫びにこれをやるよ。」

俺は携帯から2冊の本を出し2人に渡した

ゴン太「こ、これは！？」

キザマロ「あ、ありがとうございます！！」

諒「早くあいつの所に行かないとうるさいぞ。」

そう言うと2人は俺に礼をして去っていった

ティアナ「お兄ちゃん、2人に何の本をあげたの？」

ティアナは聞いてきた

みんなも聞きたそうな顔をしていた

諒「ゴン太には『おいしい牛丼の作り方ベスト20』、キザマロには『これで身長10cmUP!』ベスト20』をあげた。」

全員「なるほど。だから2人は喜んでいたのか。」

俺が言うと全員納得した

そしたら昼休み終了を告げるチャイムが鳴った

はい、放課後です

また飛ばしたなって？

いいじゃん別に

あのあと授業が終わって俺達はツカサと途中まで帰り別れた
そして俺は食料がなくなつたのでみんなで買い物に来ている

諒「おつ、今日は卵が安いな。」

なのは「諒くん！玉ねぎが2割引だよ！！」

なに！？玉ねぎが2割引だと！！

ティアナ「お兄ちゃん！人参が半額だよ！！」

は、半額だとー！！

諒「フェイト！！はやて！！俺ちよつと行ってくるからあとの事頼むな！！」

フェイト・はやて「了解！！」

そして俺は玉ねぎ売場と人参売場に向かって走った

諒「いやー今日は安く沢山買えてラッキー！」
あのあとタイムサービスがあつて俺達は沢山買った
ティアナ「今日のご飯は何にするの？」
諒「今日は卵が沢山買えたからオムライスだな。」
フェイト「本当！？やっただー！！」
フェイトは俺の言葉を聞いて喜んでいた
フェイトは俺とデートに行ったときに食べたオムライスが好きにな
り俺がオムライスを作ると喜ぶ
その姿がまた可愛い
！？

諒「ごめんみんな。ちょっと行ってくる。」
俺がそう言うとなのは達は俺が持っていた買い物袋を持った
なのは「無理はしないでね。」
フェイト「早く帰ってきてね。」
はやて「何かあつたら知らせてな。」
ティアナ「すぐに行くからね。」
諒「大丈夫！すぐに行つて帰る！」
そう言つて展望台に向かつた

sideスバル

僕は朝の特訓が終わつて、家で本を読んでいた
そして時間が過ぎるのを待った
お昼ご飯を食べてるときに母さんが「そろそろ毎日学校に行つてみ
ない？」と行つてきたが僕は拒んだ
正直学校に行つたつて無駄だ
勉強は諒君に教えてもらつてるし、運動も毎日している
諒君達以外と絆を作つたつて裏切られる

諒君達は絶対裏切らない

だから淋しくない

そして諒君が出した宿題をした

そして出された宿題を終わらせたなら太陽が傾いていた

なので僕は展望台に向かった

そして展望台の階段を上ろうとしたら薄い金髪で両サイドにドリルを作ってる女の子、眼鏡を掛けた背の小さい男の子、そしてポツチヤリとした背の高い男の子が話し掛けてきた

??? 「あなたが星河スバル君ね！」

スバル「そうですね・・・」

早く言いたいことを言ってくれないかな

一番星がわからなくなっちゃうよ

??? 「私はあなたのクラスメートで委員長の白金ルナよ！」

女の子が自己紹介してきた

??? 「僕は最小院キザマロです！」

眼鏡を掛けた小さい男の子が自己紹介してきた

??? 「俺は牛島ゴン太だ！」

ぼっちゃりした男の子が言ってきた

スバル「それで、僕に何のようですか？」

委員長「単刀直入に言うわ！学校に毎日来なさい。」

スバル「嫌だ。」

委員長「なっ!？」

スバル「僕は学校にちゃんと行ってる。僕は毎日学校に行く気は今のところない。じゃ、僕は用事があるから。」

そう言っ僕は展望台の階段をあがった

後ろで何か言ってるけど気にしない

時刻は午後8時

僕は展望台で星を見ている

スバル「父さん、生きてるんだよね。だから早く帰ってきてね。僕と母さんは待つてるから。」

僕は夜空に言う

そしたら青い流れ星がどんどん近づいてきた

スバル「な、なんだ!？」

僕はビジライザーを掛けた

諒君が教えてくれたけどビジライザーはただの眼鏡じゃなくて電波を見ることが出来る特殊な眼鏡だって

どんどん青い流れ星は近づいてくる

僕に当たりそうだったので僕は横に移動した

そしたら青色の姿をした犬みたいな奴がいた

そいつは僕に気が付くと話し掛けてきた

????? 「お前は星河スバルだな!!俺はウォーロック!!お前の親父の星河大吾に頼まれ地球に来た!!さっそくで悪いが力を貸してもらっぜ!!」

これが僕とウォーロックの出会いだった

第27話 ウォーロック登場！！（後書き）

遂に原作一話！！

今にも泣きそうな作者の松上です！

諒「作者ほどではないが喜んでいる主人公の諒だ。」

すずか「松上君の気持ちが伝わってきて少しウルウルしてる後書き限定キャラのすずかです！！」

???「みなさん初めまして。双葉ツカサです。」

まずは！

4人「スイさんありがとうございました！！」

原作ブレイクしたな、諒

諒「いいだろ。なっ！ツカサ！！」

ツカサ「そうだね。」

ツカサと諒の出会いの小5で諒が話し掛けて二重人格の事を話して最初はツカサは諒のことを避けていたが次第に諒に心を開いてブラザーになったわけ

ツカサ「あの頃はごめんね、諒君。」

諒「いいって。誰にも知られたくない秘密を知ってたらあんな態度を取るって。それに俺達はブラザーだろ。お互いを許し会うのが友達だろ？」

ツカサ「ありがとう、諒君。」

すずか「ヒカル君はどうなったの？」

それはまた話す

それじゃあすずか

頼むな！

すずか「はい！

次回 ウォーロックは驚きの連続！！」

それじゃあ

諒・ツカサ「次回も」

4人「お楽しみにー!!」

第28話 ウォーロックは驚きの連続!! (前書き)

今回はスバルの電波変換の初の戦闘ですが早いです

今回はスイさんが教えてくれた名言です!!

家庭教師REBORN!で

『ずっと人を信じ続けることがこんなに難しいのかと思ったよ』

B Y 沢田綱吉

『本当に困ってる時に助けてやれるから友達なんじゃなーか』

B Y 山本武

『風紀の2文字は何があっても譲らないよ』

『空があると雲は自由に浮いていられるけどね。でもいずれ大空さ
え噛み殺す』

B Y 雲雀恭弥

ハヤテのごとく!で

『守りたいんだ．．．誰よりも速く．．．誰よりも速く．．．君の
元に駆け付けて!』

B Y 綾崎ハヤテ

『家族っていうのはさ．．．どれだけそこにあるのが当たり前でも
．．．ポディーソープみたいに替えがきくもんじゃないから．．．い
ずれなくなってしまうものなんだから．．．大事にしれよ．．．!
!もう．．．なくなっちゃった奴もいるから．．．だ．．．!』
けど．．．たまには．．．遊びに来てくれよな!!約束だぞ』

B Y 三千院ナギ

ハヤテ格好良すぎ!!!
ナギ良い事言ってる・・・泣いちゃうよ・・・グスッ

第28話 ウォーロックは驚きの連続！！

side スバル

スバル「力を貸せってどういう事さ！？それから君は父さんの事を知ってるの！？」

ウォーロックと名乗る奴が力を貸せって言うてきた

それに父さんのに頼まれ地球に来たって

もう何が何だかわからないよ！！

ウォーロック「説明はあとだ！！俺はある奴に命を狙われてる！！だから俺に力を貸せ！！」

命を狙われてる！？

スバル「わかった！！君を助けてあげる！！それで敵はいつ来るの！！」

僕も人を助けたい！！

諒君がしてたように！！

ウォーロック「それはだな・・・！？来たぞ！！スバルだったな！

？相手は力を持ってやがる！！だから俺がお前に力を貸してやる！

！俺と電波変換するぞ！！」

電波変換って諒君がしてるやつだよ

てことは相手も電波体！！

スバル「いくよ、ウォーロック！！電波変換！星河スバル、オン・

エア」

ウォーロック「な、何でお前が電波変換の仕方を！？」

そして僕は光に包まれた

俺は全速力で展望台に向かっている
みんなと帰ってる途中に青の流星が展望台に落ちた
つまり原作が始まったわけだ！！
俺は展望台の階段をのぼった
そこにはあの姿したスバルがいた

sideスバル

僕は電波変換して自分の姿を見た
青を基調とした体

胸の中心には流星のマーク

そして左手にはウォーロックの顔が僕と繋がっていた

スバル「な、なんでウォーロックの頭が僕の左手に!?!」

諒「スバルー!!!」

僕があたふたしてると後ろから諒君の声が聞こえた

スバル「諒君!!!」

諒「敵はどこにいる!?!」

諒君に言われ思い出した

スバル「そ、そうだ!!!ウォーロック!!!敵は!?!」

僕は左手についているウォーロックに聞いた

ウォーロック「敵は・・・!?!?来たぞ!!!」

そして僕は構えた

そしたら目の前にいかにも悪そうな、しかし雑魚キャラばい2人が
あらわれた

s i d e 諒

俺達の目の前にジャミンガーが2体あらわれた

ウォーロック「ちっ、こいつが来るなんて。しかも2体かよ・・・」
何諦めてんだよ

諒「スバル、1体任せるぜ！」

俺がそう言つとウォーロックが驚いた

ウォーロック「な、何言つてやがる！！お前に何ができるんだよ！！」

諒「うるさいぞ。俺は家に帰つてみんなの晩ご飯を作らないといけないんだ！！さつさと終わらせるぞ！！電波変換！新井諒、オン・エア」

そして俺はフォルテクロスロックマンの状態になった

諒「フォルテ、氷輪丸を頼む！」

フォルテ「氷輪丸、召喚！！」

フォルテが召喚した氷輪丸を左手に持った

諒「さつさと終わらせるぞ！！スバル！！」

スバル「うん！！」

俺とスバルはジャミンガーに向かった

s i d e ウォーロック

ありえねえ

こいつ等戦い慣れしてやがる

ジャミンガー相手にまったく怯えることなく戦つてやがる

しかもあの新井諒つて奴、電波変換しやがった

スバルも電波変換のやり方を知つてやがった

こいつ等ならあいつ（、、、）に・・・

side 三人称

戦いが始まってわずか5分

既にジャミンガーはぼろぼろだった

ウォーロックは驚きの連続だった

戦い慣れしているスバルに

突然あらわれて電波変換している諒に

そして圧倒的2人の強さでジャミンガーはぼろぼろだということに

諒「次で決めるぞ、スバル!!!」

スバル「うん!!!」

そう言うと2人はバトルカード（チップ）をプレゼンションした

諒「バトルチップ!!!踏み込み斬!!!」

スバル「バトルカード!!!リュウエンザン!!!スイゲツザン!!!ライメイ

イメイザン!!!タイボクザン!!!」

諒は踏み込み斬でジャミンガーの懐に入り込み天鎖斬月と氷輪丸で

斬った

スバルはジャミンガーをロックオンし一瞬でジャミンガーの前に行

きリュウエンザンで縦に斬り、スイゲツザンで横に斬り、ライメイ

ザンで右斜め上から斬り最後にタイボクザンで左斜め上から斬った

ジャミンガー達は悲鳴をあげずに消えた

side 諒

俺達はジャミンガーを倒しウェーブアウトした

早く帰ってみんなの晩ご飯を作りたいんだがある人が帰らせてくれない

ある人というのが

ウォーロック「おい！！何でテメエが電波変換できるんだよ！！」

諒「なあ」

ウォーロック「ああ！？」

諒「明日にしねえ？今日は早く帰りたいからさ。じゃあなスバル！

！」

そう言つて俺は展望台から去つた

ウォーロックが叫んでいたが

sideウォーロック

あの野郎！

絶対明日聞いてやる！！

ウォーロック「スバル！！俺達も帰るぞ！！」

スバル「あ、うん。」

俺はスバルのトランサーってやつに入った

第28話 ウォーロックは驚きの連続!! (後書き)

今回は少し無理矢理感があって後悔している作者の松上です・・・
はあ

諒「作者に今回も呆れてる主人公の諒だ。」

すずか「松上君を慰めてる後書き限定キャラのすずかです。松上君
頑張つて!!」

はあ・・・まずは

3人「スイさんありがとうございます!!」
はあ

諒「おい、次頑張れよ!次は最初のボスとの戦いだろ!!その時に
もつと頑張れば名誉挽回だろ!!」

すずか「そうだよ!!こんな所で落ち込んでちゃだめだよ!!次に
頑張れば良いんだよ!!」

!?

そうだな!!

ありがとな2人共!!

次を頑張れば良いんだな!!

よっしゃー頑張るぜ!!

それじゃあすずか!!

いつもの頼むぜ!!

すずか「(よかった、元気になって)はい!!

次回 最初のFM星人 俺はあくまでサポートだ」

それじゃあ!!

諒「次回も」

3人「お楽しみ!!!!」

第29話 最初のFM星人 俺はあくまでサポートだ(前書き)

今回はあいつとのバトルまでの話です
つまらないかもしれませんが御了承下さい

今回名言を覚えてくれたのはWindさんです!!

天元突破グレンラガンで

『怯むな、皆!』

『当たり前だ!これだけの仲間が居て何を恐れる必要がある!?!
俺達を、誰だと思っていやがる!!』

Byシモン& amp・キタン& amp・大グレン団メンバー

TORで

『苦しいんなら苦しいって言えよ!辛いんなら辛いつて言えよ!』

Byタイトレイ・クロウ

『ありがとう……君が僕でよかった』

Byエミル・キャスタニエ

『ふざけるな!目の前の人も教えなくて世界再生なんてできるかよ
!』

Byロイド・アーヴィング

『知ってる。この世界には……悲しい事が、沢山あるって。』

Byコレット・ブルーネル

ありがとうございました!!

第29話 最初のFM星人 俺はあくまでサポートだ

side 諒

俺は今展望台から歩いて家に向かっている

そしたら前から緑の髪をした女みたいな少年が歩いてきた

????「よう、諒。」

諒「その言い方はヒカルだな。」

そう、話し掛けてきたのは双葉ツカサのもう1人の人格の双葉ヒカルだ

ツカサは小さい時に親に捨てられその憎しみによってヒカルが生まれた

俺はツカサと友達になった時からヒカルと話していた

最初は親に復讐すると言っていたが俺の説得とツカサの気持ちが変わりツカサと共存することを決めた

なのでイナズマイレブンの吹雪士郎（覚醒前）みたいにいつでも人格チェンジができる

ヒカル「どうしたんだよこんな夜に？」

諒「いや、少し強いウイルスが出たから倒してきたところ。お前は？」

ヒカル「俺は風にあたりたくてな。」

俺が質問に答えて質問すると渋い答えが返ってきた

諒「風にあたりにねえ。まっ、俺には関係ないけどな!! そうだ、早く帰って晩ご飯の準備をしないと。じゃあなヒカル!!」

ヒカル「じゃあな。」

俺は走りながらヒカルに手を振る

ヒカルも歩きながら手を振ってくれた
やっぱ・・・原作を変えてよかった

そう思いながら家に帰った

sideスバル

あのあと僕は家に帰ってウォーロックに質問した

スバル「ねえ、ウォーロック？」

僕はトランサーにいるウォーロックを呼ぶ

ウォーロック「ああ!？」

スバル「・・・少し声のボリュームを下げてよ。母さんにはれちゃうよ。」

ウォーロック「つたく。で、何だ？」

僕が言うのと文句を言いながらも声のボリュームを下げてくれた

スバル「まず質問¹。君は一体何者なんだい？」

まずは根本的なことを聞かないと話が進めない

ウォーロック「俺はFM星人だ。」

FM星人？

聞いたことのない星人だ・・・

まあいい、次だ!

スバル「どうして君は命を狙われてたの？」

ウォーロック「俺が裏切り者だからさ。」

スバル「裏切り者？」

何を裏切ったんだろう?

ウォーロック「今は言えねえ。だが俺はお前の父である星河大吾に

頼まれて地球に来た。」

そ、そうだ!?

スバル「と、父さんに会ったの!?!父さんはどこにいるの!?!」

ウォーロック「うるさいぞ!?!お前が声を大きくしてどうすんだよ

!?!」

僕はウォーロックに言われ我にかえった

スバル「ご、ごめん。それで父さんはどこにいるの?」

ウォーロック「宇宙・・・としか言い様がねえ。だがあいつは生きてる。」

ウォーロックの目が彼の目に似ていた
スバル「わかった。信じるよ、君の事を。」

僕がそう言つとウォーロックが驚いた

ウォーロック「な、お前信じるのかよ!?俺が嘘をついてるのかも
しれないんだぞ!？」

何だ、そんなことか

スバル「うん信じる。君の目は諒君のような目をしている。だから
君は嘘を言っていない。だから僕は君を信じるよ。」

僕がそう言つとウォーロックはしばらく黙り込み口を開いた

ウォーロック「・・・なら今度は俺が質問をするぜ。あの男、新井
諒は誰だ?何故あいつが電波変換できる?どうしてお前等は戦闘慣
れしている?」

なるほど、そんなことか

スバル「まずは最初の質問に答えるね。彼の名前は新井諒、僕を救
つてくれた僕の親友さ。」

ウォーロック「お前を救つた?」

ウォーロックが僕の言葉を鸚鵡返しで聞いてきた

スバル「うん、この話をしておいたほうが良いね。2年前にね

(説明中・・・)

・・・って事があつて僕は戦闘慣れしてるんだ。」

僕は2年前の僕の状態、諒君との出会い、どうして諒君が電波変換
できるか、そしてZM事件の事をウォーロックに話した

ウォーロツク「なるほど、つまり諒って奴のおかげで今のお前があるわけだな？」

スバル「そういう事。それから僕と暮らすからには朝は早いよ。」
ウォーロツク「どういう事だ？」

ウォーロツクは？マークを浮かべていた

スバル「僕は毎日5時に起きて展望台で諒君と特訓してるんだ。」

ウォーロツク「諒達？」

ふふふ、わからないよね

スバル「それは明日のお楽しみに！それじゃあ僕は寝るね。明日も早いから。」

僕はベッドに向かった

ウォーロツクが「教えるー！！」とか言ってるけどそのまま僕は布団に入った

ふふふ、明日驚くぞ

何だって諒君の他に来る人は皆諒君のお嫁さんなんだから
そう思いながら僕は意識を失った

side 諒

諒「やつと着いた。」

ヒカルと別れた俺は急いで家に向かいやつと着いた

諒「早く、皆の飯を作って風呂に入る・・・ただいM「りよー
ーう！！んっ」んっ！?!?!?!」

俺が扉を開けてただいまと言ってる途中にフェイトが抱きついてきて俺にキスをしてきた

フェイト「・・・ぷはあ。おかえり諒！！」

諒「はあ・・・はあ・・・いきなりキスをするなよ！！死ぬかと思ったぞー！！」

マジでやばかった

混乱して呼吸するのを忘れてたからな

フェイト「だってー、諒がないと私生きていけないんだよ・・・」
生きていけないんだよって・・・

諒「たった30分いないだけでお前は死ぬのか？」

フェイト「私にとつたら5年分の長さだよ!!」

こいつは・・・

なのは「はやて・ティアナ」フェイトちゃん？何を諒君（諒くん）
（お兄ちゃん）にしたのかな？私達も心配したからしたいんだよ。」
やばい・・・

皆笑ってるけど目が笑ってない・・・

フェイトも震えて俺に抱き締めてる

俺も怖くてフェイトを抱き締めてる

なのは「はやて・ティアナ」O・H A・N A・S H Iしようか」

諒・フェイト「い、いやああああああ・・・」

只今の時刻3時25分37秒

目が覚めたら俺は皆と布団の中で寝ていた

フェイトは少し離れた所で寝ていた

諒「何で俺皆と寝てんだ？・・・ダメだ記憶がない・・・思い出し・・・
ちやダメだ。何でかわからないが俺の脳が思い出すなど言ってる・・・俺は誰に言ってた。」

独り言を言っているとフェイト以外が起きた

なのは「おはよう諒くん!!んっ」

諒「んっ!？」

俺はなのはに挨拶をされるとキスをされた

なのは「・・・ぷはあ。おはようのキスだよ!!」

はやて「諒くん」

なのはに文句を言おうとしたらはやてに呼ばれたのではやての方に顔を向けた

はやて「おはような！んっ」

諒「んっ!？」

はやての方に顔を向けたらはやてにまでキスをされた

はやて「・・・ぷはあ。やつぱ諒君とキスするのはええな!!」

諒「お、お前等なN「お兄ちゃん」ああ？」

文句を言おうとしたらティアナに呼ばれたので顔を向けた

ティアナ「いただきまーす！」

諒「お前なんD「んっ」んっ!?!?!?!?!」

俺がティアナに突っ込もうとしたらキスをされた

しかも只のキスじゃなくディープの方だ

ティアナ「んちゅ・んちゅ・んちゅ・んちゅ。ぷはあ。ごちそうさま!!」

諒「おおおおおおお前等なななな何ややややややややってん

だ!!!!!/!/!/!/!/!/!/」

やばい、気絶しそうだ・・・

なのは「昨日私達だつて心配したのに・・・」

はやて「フェイトちゃんだけキスしたやろ？」

ティアナ「だから私達はおはようのキスで許してあげることにした

の!!」

確かに昨日はフェイトとキスしたがあれはフェイトが無理矢理して・

・・そつから何されたんだ？昨日の夜から記憶がやっばりない・・・

考えるのはやめよう・・・

俺も悪いわけだしな

諒「さつさと着替えよう。」

そして俺は着替る為に自分の部屋に戻った

俺達は展望台にいます

すまん、また飛ばして・・・
簡単に行動を説明するぜ
俺着替え終わる

フェイト目が覚める

昨日の記憶がないことに共感する

お話と言う単語を聞くと何故か俺とフェイトは震える

何故かと考えるがわからないので諦めて朝ご飯を作る

展望台に行く

展望台に着く

準備運動をしながらスバルを待つ　今ここ

諒「早くこないかな・・・」

俺は準備運動しながらスバルを待った

そしたら階段から誰か来た

スバルだ

スバル「お待たせ!!」

諒「おう!!じゃあ早速始めようぜ!!電波変換!新井諒、オン・エア」

スバル「電波変換!星河スバル、オン・エア」

俺とスバルは電波変換し、ウェーブロードの上に移動した

諒「デジヒュージョンじゃないのか?」

スバルはデジヒュージョンの方が慣れてるはずだ
だがスバルは電波変換した

スバル「大丈夫。僕はデジヒュージョンしなくてもヒカリとヤミを使えるんだ。いくよ、ヒカリ!! ヤミ!!」

スバルがそう言うところから白の剣が出てきて黒の翼が生えてきた

諒「凄いな・・・俺とほぼ同じ力か。」

スバル「いくよ!! 諒君!!!!」

諒「こい!!!!」

side 三人称

まさに互角

それが2人にぴったりだった

諒はクロスヒュージョンの力を使ってスバルに攻撃している

スバルは電波変換しながらオーバードライブしガルルキャノンとグレイドを使い諒に攻撃している

攻撃しては防御し防御しては攻撃する

その繰り返しだが20分続いた

諒「はあ・・・はあ・・・はあ」

スバル「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ」

毎日鍛えてる諒達でも20分間全力で動き続けていたので方で息をしている

諒「はあ・・・スバル・・・はあ・・・次で決めるぞ!!!!」

スバル「はあ・・・うん!!!!」

そう2人が言うとお互い距離をとった

スバル「ガルル!!!!」

スバルはガルルキャノンを構え

諒「月牙!!!!」

諒は天鎖斬月を構え

そして・・・

スバル「キャノン!!!!」

諒「天衝!!!!」

2人は必殺技を放った

2人の放った必殺技は真ん中でぶつかり煙が上がった

そして2人は煙のなかに入ってしまった

ガキンツ!!!!!!

剣と剣がぶつかる大きな音がした

煙が晴れていく

そして勝負の結果は・・・

スバル「・・・引き分け・・・だね。」

諒「・・・みただな。」

スバルと諒は片手で剣を持ちぶつかっている

スバルはガルルキャノンで諒の胸に突きつけている

諒はぶつかる直前に出したジオグレイソードをスバルの首下に当てていた

つまりこの勝負は引き分けだった

そして短い特訓という名の戦いが終わった

side 諒

あの戦いのあと俺達はいつも通り朝ご飯を食べた

ウォーロックに「ここにいる奴全員は電波変換できるのか?」と聞かれたので「ああ」と答えたら驚いていた

さらになのは達は俺の将来の嫁と言ったら口を大きく開けて驚いて

いた
スバルはウォーロックの反応を見て爆笑していた
そんな楽しい時間は少しだけ続いた

今俺達はレコーディング室にいます
えっ？学校はどうしたかって？

今日は歌手の仕事があるから休み

今日は新曲を歌うために来てるわけ

帰りが8時なので少しスバルのことが心配だ

何故なら今日はあの牛のFM星人が来る日だからだ

スバルは強いが俺というイレギュラーがいるのでシナリオ通りには
進まないのかもしれない

監督「それじゃあ歌ってみようか！」

そんなことを考えていたら歌うよう言われた

スバル、俺達もなるべく早く終わらせるから無事でいてくれよ

そう思いながら俺はギターを弾いた

午後7時45分

早めにOKが出たので今日は早めに帰れる

俺達は誰もいない公園に行った

なのは「急ごう、何があるかわからないもの!!」

俺達はなのはの言葉に頷き電波変換した

諒「電波変換！新井諒、オン・エア」

「！！」

ジャミンガーに放った

俺は一瞬できた道を全力で走りスバルが戦っているだろう車の電波世界にウェーブインした

そこにはオックス・ファイアと大量のジャミンガーを相手に戦っているスバルの姿が見えた

諒「スバルー！！」

俺はスバルの名前を叫びながら大量のジャミンガーを天鎖斬月で斬りまくってスバルの下に向かった

スバル「！？諒君！！」

スバルは俺に気付き声を掛けてきた

オックス・ファイア「ブロロロロロ！！誰だお前は！？」

オックス・ファイアが聞いてきたが無視だ

諒「スバル、俺がジャミンガーを倒す。だからお前はオックス・ファイアを倒してくれ。」

スバルは無言で頷いた

諒「さあ！！親友を可愛がってくれた礼はたっぷりとしてやるよ！！」

俺と大量のジャミンガー・スバルとオックス・ファイアの戦いが始まった

第29話 最初のFM星人 俺はあくまでサポートだ（後書き）

少しホームシックな作者の松上です

諒「……………主人公の諒だ。」

すずか「松上君のことが心配な後書き限定キャラのすずかです。」
まずは

「Windさんありがとうございました!!」

今回はヒカルの事が書きたくてこんな感じになっちゃった!テヘツ

諒「気持ち悪いからやめる。」

カシャツ

すずか「やった!写真がうまく撮れた!!」

諒「……………」

まあ、今回は戦闘だから頑張るさ!

諒「……………いつも頑張れよダメ作者。」

……………うわ……………ん!!すずかあー諒がいじめるよー

すずか「よしよし、松上君はダメな作者じゃないよ。だから泣かないで。」

すずかあ……………!!

すずか「よしよし」

諒「……………作者と後書き限定キャラがあんな感じだから俺が次回予告するぜ。」

次回 VS オックス・ファイア

それじゃあ次回もお楽しみにー!!」

すずかあ……………!!

すずか「泣かない泣かない。」

諒「長すぎるぞー!!」

第30話 VS オックス・ファイア（前書き）

メチャクチャ早いです!!
期待した人すいません!!

今回教えてくれたのはジェスター!!アーカムさんです!!

ビーストウォーズで

『・・・オレは正直に生きてきた。

いいことも・・・悪いことも・・・みんなオレのせいさ。・・・思
い残すことはねえ。

『・・・ありがとう・・・あばよっ・・・。』

Byダイノボット

死亡フラグ確定名言・・・だが使う!!

絶対に死なせはしないがな!!!!

第30話 VSオックス・ファイア

side 諒

俺は大量のジャミンガーを消しまくっている
スバルとなのは達が心配だ

なので俺は出し惜しむことなく必殺技を使っている

諒「風遁螺旋丸！！千鳥！！月牙天衝！！無限氷獄！！ガイアフォ
ース！！コキユートスブレス！！」

ジャミンガー達「ぐ、ぐわあああああああああ……」

ジャミンガー達は俺の必殺技をくらい叫んで消えた

しかしまだまだいやがる

諒「鬱陶しいだよ！！影分身の術！！」

俺は影分身を2体出した

そしてそれぞれ大玉螺旋丸を作った

そして

影分身A「アトミックフレアV3！！！！」

影分身B「ノーザンインパクトV3！！！！」

諒「ゴッドブレイクG5！！！！」

大玉螺旋丸をボール代わりにし必殺技を蹴った

そして3つの必殺技が1つの技になった

諒・影分身A・B「カオスブレイクG5！！！！！！！！」

カオスブレイクG5はジャミンガー達を一瞬で消し去った

そして影分身が消え俺はスバルの所に向かった

side スバル

僕が彼を救わないとダメなんだ

フェイト「千鳥!!」

はやて「氷輪丸!!」

ティアナ「螺旋丸!!」

ドカーーーーン!!」

4人はジャミンガーを得意技で攻撃し消している

しかし・・・

はやて「あかん!!全然減らへん!!一体何体おんねん!!」

はやての言うとおりに倒しても減る傾向がないのだ

フェイト「わからない。でも負けない!!負けたくない!!」

なのは「だって諒くんは私達のことを信じてスバル君を助けに行つた!!」

ティアナ「だから弱音を吐くなんてしちゃいけない!!」

3人にいわれはやくも弱音を吐かなくなった

はやて「そうやね。ウチ等より大変な思いをしてんもんな!ウチ等が諦めたらあかんやん!!」

はやても諦めない心を取り戻した

なのは「みんな、私に言い考えがあるの!!」

なのははこの場を解決させるアイディアを思い付き皆に話した

フェイト「やってみる価値はあるね!!」

はやて「と言うかそのアイディアしかないやろ。」

ティアナ「じゃあやろう!!」

そう言うとなのは北、フェイトは東、はやては南、ティアナは西の方角についた

ジャミンガー達はいきなりなのは達が移動したので立ち止まっている

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「いくよ(いくで)!!スー

ツエーモン(チンロンモン)(シエンウーモン)(バイフーモン)

!!!!!!デジヒュージョン!!!!!!」

そう言うとなのはは炎、フェイトは雷、はやては水、ティアナは風に包まれた

そしてどんどん大きくなっていく

そして炎、雷、水、風が消えるとそこにはデジタルワールドを守護する四聖獣の姿があった

なのは「みんないくよ!!」

フェイト・はやて・ティアナ「うん!!」

なのはが言うと皆は頷いた

そして

なのは「紅炎!!!」

フェイト「蒼雷!!!」

はやて「霧幻!!!」

ティアナ「金剛!!!」

4人の必殺技はジャミンガーを消したあと中心で相殺した
なのはの作戦はこうだ

大量のジャミンガーを倒すには四聖獣の必殺技じゃないとできない
しかし四聖獣の必殺技は強力すぎて他の物に被害が出てしまう恐れ
がある

そこで全員が同じ力でそして同じタイミングで撃って相殺させて被害をなくすという作戦だった

作戦は成功しジャミンガー達は全て消え、被害もなかった

なのは「急ごう!!!」

フェイト「諒の所へ!!!」

4人はデジヒュージョンをとき諒の所に向かった

場所は変わってスバルとオックス・ファイアの戦い

スバル「スイゲツザン!!!」

オックス・ファイア「!?!?ぐわあああああ!!!」

スバルはロックオンしてスイゲツザンでオックス・ファイアを斬った
オックス・ファイアの属性は火なので弱点は水

スイゲツザンの属性は水なのでオックス・ファイアは2倍のダメー

ジを受ける

オックス・ファイア「ブロロロロロ……な、何故お前は躊躇なく攻撃できる？」

スイゲツザンのダメージが大きいのかオックス・ファイアの声はかなり弱々しかった

スバル「ゴン太は僕を信じてくれている。だから僕はゴン太の信頼に答えない！！だから君を躊躇なく攻撃できるんだ！！」

スバルはオックス・ファイアにそう叫ぶ

オックス・ファイア「ふざけるなー！！！！！！！！」

オックス・ファイアはスバルに突っ込んだ

しかしそれは自ら負けを認めた行為に値する

スバルは焦ることなくスイゲツザン、そしてライメイザンをプレデクションした

そして！！

スバル「スイゲツザン！！！！ライメイザン！！！！」

スバルはオックス・ファイアを斬った

オックス・ファイア「ぐわああああああああああああ……」

・
」

オックス・ファイアは悲鳴を叫びながら消えその場所にゴン太が倒れていた

第30話 VS オックス・ファイア（後書き）

最近一話しか更新できないことが悩みの作者の松上です

諒「“お話”と言う単語を聞くと恐怖することに疑問を抱いてる主人公の諒だ。」

すずか「地震で被災された方に何かしてあげれないかと悩んでる後書き限定キャラのすずかです。」

まずは

3人「ジエスター!!アーカムさんありがとうございました!!」

今回はご都合主義を使ってしまった・・・

諒「オリジナルじゃなくてシナリオがあるからそれを見て書けよ。」

ペガサス・レオ・ドラゴン持ってないの!!

諒「じゃあこれからどうやって書いていくんだよ?」

ネットで調べて書くぜ!!

すずか「なので一日1〜2話しか更新できないのでよろしくお願いします!!」

ですが頑張って更新させます!!

すずか頼むぜ!!

すずか「はい!!」

次回 戦いのあとの絆

それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみに!!」

第31話 戦いのあとの絆（前書き）

今回はオックス・ファイア戦の後の話です
しかも短い・・・

今回名言を教えてくれたのはAIさんです

マクロスFで

『俺なら全てを知っていたい。他人に自分の運命を任すのは真つ平だ！』

BY早乙女アルト

『散れ！銀河の果てへ！！』

BYブレラ・スターン

『我翼に誇りを持つ者よ、我に続けー！！』

BYジェフリー・ワイルダー

今回もありがとございますー！！

第31話 戦いのあとの絆

side 諒

俺は大量のジャミンガーを消したあとスバルの所に向かった
しかし勝負はついていた

諒「お疲れさん、スバル。」

俺が話し掛けるとスバルはこっちに顔を向けて話してきた

スバル「うん、僕はゴン太を救わなきゃいけなかった。僕の所為で
ゴン太はFM星人に乗っ取られたんだ。だから当たり前的事をした
まてだよ。」

ゴスツ！！

俺はスバルの頭を殴った

スバルは涙目になりながら聞いてきた

スバル「な、何するのさー。」

諒「はあー。いいかスバル、人間完璧な奴なんていないんだ。時に
はミスだつてする。そのミスをいつまでも引きずるな！」

まったく、そんな事言ったら俺は一体何年間引きずらないといけな
いんだ・・・

スバル「で、でもー。」

まったく、こいつは変なところで頑固になるんだよな

諒「いいか、まずミスをしたら謝るんだ。いじいじしないでちゃん
と謝るんだ。そしてどうしてそんな事をしたかちゃんと説明するん
だ！それから反省するんだ、いいな？」

なのは「諒くーん！！！」

俺が説教しているとなのは達が走ってきた

諒「（よかった。無事みたいだったんだな）おーい！！！」

俺はなのは達に手を振る

なのは「諒くん！！！」

なのはは俺に抱きついてきた

諒「よかった、みんな無事だったんだな!!」

フェイト「そうだよ!!でも・・・」

はやて「諒君も無事でよかったわ!!やけど・・・」

ティアナ「皆無事だね!!だけど・・・」

諒「どうしたんだ?」

フェイト・はやて・ティアナ「なのはちゃんだけ諒(諒君)(お兄ちゃん)に抱きついてずるい(で)(よ)!!!!!!」

成る程、そういう事か

諒「じゃああとで抱き締めてやるから我慢してくれるか?」

フェイト・はやて・ティアナ「もちろん(や)(だよ)!!!!」

よかった何もなくて

諒「それじゃあ早く帰ろうぜ。お腹も空いたしな。」

俺達が帰ろうとしたらスバルが止めてきた

スバル「ちょ、ちょっと待ってよ!!ゴン太はどうするの!?!」

そんなの決まってるじゃん

諒「スバルが連れて行くに決まってるだろ。」

スバル「な、なんでさ!?!」

分かり切ったことを聞くなよ

諒「お前はまずゴン太に謝らないといけない。だからゴン太をキザマロ達の所に連れて行ってそこで謝れ。」

スバル「で、でも」

はあー

諒「スバル、誰かを救いたい奴になりたいんだろ?だったら自分がしたミスはちゃんと謝らないと。じゃないとお前は偽善者って言われちゃうぞ。」

スバル「!?!そ、そうだね。ちゃんと謝らないとね。ありがとう!」

スバルに礼を言われ俺達はウェーブアウトして家に帰った

もちろん皆を抱き締めたぞ

それ以外はやってないぞ!!

本当だぞ！！

sideスバル

諒君達と別れたあとゴン太を連れてウエーブアウトした
キザマ口達は気を失っていたのでラッキーだと思った
僕はゴン太を車に寝かせようとした
そしたら

ゴン太「ん・くっ・・・ここは？」

ゴン太は目を覚ました

スバル「ゴン太大丈夫！？どこか痛いところとかない！？」

僕はゴン太の体を心配した

オックス・ファイアを倒す時にゴン太の体を傷つけてしまったので

僕は心配した

ゴン太「大丈夫、俺はぴんぴんしてる！」

よかった

体は大丈夫みたいだね

じゃあ

スバル「ごめん！！」

僕は頭を下げて謝った

ゴン太「な、なにやってんだよ？謝るのはこっちだぜ！」

スバル「いや、僕が悪いんだ。僕が殴ったりしたからゴン太はFM
星人に体に乗っ取られたんだ！だからゴン太は悪くない。」

僕が悪いんだ

ゴン太「いや、俺も悪い。お前の事も考えずに（委員長に無理矢理
だが）学校に来ていつて言った。だから俺も悪い！ごめんな！」

ゴン太はそう言って頭を僕に下げてきた

ウォーロツク「このまま行ったら永遠に続いちまうからよ、お互い

謝って許せばいいんじゃないか？」

僕はゴン太のやったことは許してるけどゴン太まで許したら気分が晴れないよ

ゴン太「そいつの言う通りだな。スバル、俺はお前を許すぜ！」

スバル「ぼ、僕だってゴン太のことを許してるさ。」

ウォーロック「一件落着だな。」

なんかウォーロックの言うとおりになっただけどまあいいか

ゴン太「スバル、俺とブラザーになっただけねえか？」

スバル「い、いいの？僕なんかで？」

僕なんかでいいのだろうか・・・

ゴン太「当たり前だ！俺はお前と友達になりたい！だから俺とブラザーになってくれ！！」

ゴン太・・・

スバル「わかった。ブラザーになろう！！これからもよろしくね、

ゴン太！！」

ゴン太「これからもよろしくな、スバル！！」

これで僕とゴン太はブラザーになった

ゴン太「スバル達が変わ身できることも黙っておくぜ。もちろん委員長長達にもな！！」

スバル「ありがとう！！」

そしてそのあと委員長とキザマロが起きて明日は行くからと伝えて家に帰った

委員長は騒いでいたが気にしちやいけない

第31話 戦いのあとの絆（後書き）

こんにちは！！作者の松上です！！

諒「よう！！主人公の諒だ！！」

すずか「みなさんこんにちは！！後書き限定キャラのすずかです！！」

まずは！！

3人「A Iさんありがとうございます！！」

今回は短かつたな

諒「まあ、いいじゃないか。スバルとゴン太がブラザーになったんだしよ。」

まあ、いいか

すずか「それより次回は何をするの？」

次回は諒達の相棒と原作キャラの設定だな

諒「またか・・・」

いいだろ！！

・・・それじゃあ

すずか「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

キャラ設定パート7（前書き）

今回はキャラ設定です！！

今回はW（弟）が教えてくれた名言です

銀魂で

『人は、トラウマを……乗り越えて……強くなってゆく』
By 坂田銀時

ありがとな

キャラ設定パート7

諒の相棒

フォルテ

性別：男

待機状態：黒の折畳みの携帯

能力：電波変換、諒の戦いのアシスト、クロスシステム、武器転送、物の出し入れ、ブザーバンドの契約、電話、メールなど

性格：諒に影響され有効的、無口で諒に言われたことは文句を言いながらもやる

備考：諒の相棒、物の出し入れが可能で携帯の中にはいろんな物が入っている、また諒達のお金を管理している

なのはの相棒

スーツエーモン

性別：女

待機状態：紅のデジヴァイス

能力：電波変換、デジヒュージョン、なのはの戦いのアシスト、ブザーバンドの契約、電話、メールなど

性格：女性なのでパーフェクトだが一度怒らせると・・・

備考：なのはの相棒、諒とは仕事に関して意気投合する

フェイトの相棒

チンロンモン

性別：男

待機状態：蒼のデジヴァイス

能力：電波変換、デジヒュージョン、フェイトの戦いのアシスト、
ブラザーバンドの契約、電話、メールなど

性格：かなり優しく落ちて着きがある

備考：フェイトの相棒、諒とは料理に関して意気投合する

はやての相棒

シエンウーモン

性別：男

能力：電波変換、デジヒュージョン、はやての戦いのアシスト、ブ
レーザーバンドの契約、電話、メールなど

性格：一番長く生きているだけ冷静、そして温厚

備考：はやての相棒、諒とは苦労する仲間として意気投合する

ティアナの相棒

バイフーモン

性別：男

能力：電波変換、デジヒュージョン、ティアナの戦いのアシスト、
ブラザーバンドの契約、電話、メールなど

性格：かなりお調子者でふざけているが皆が真剣なときは調子に乗
らない

備考：ティアナの相棒、諒とは娯楽を分かち合える仲で意気投合し

ている

スバルの相棒 1

ヒカリ

性別：女

能力：治癒能力、光エネルギーの増大、スバルのバトルのアシスト、デジヒュージョン

性格：優しくスバルの体をいつも心配している

備考：スバルの相棒の1人で死にかけている人でも全回復させる力を持っている、またヒカリの力（治癒能力）を授けるもの

スバルの相棒 2

ヤミ

性別：男

能力：破壊能力、闇エネルギーの増大、バーストモードの制御、デジヒュージョン

性格：口調に合わず優しい

備考：スバルの相棒の1人でどんなものも破壊する力を持っている、またヤミの力（破壊能力）を授けるもの

スバルの相棒 3

ウォーロック

性別：男

能力：電波変換、電話、メール

性格：かなり偉そう、しかし以外にも優しい

備考：スバルの相棒の1人でFM星の裏切り者として命を狙われる、スバルの父（星河大吾）にスバルのことを頼まれ地球に来た

復讐をやめた少年

ふたは
双葉ツカサ・ヒカル

性別：男

性格：ツカサは優しく、ヒカルはクール

備考：諒の説得により復讐をやめた、諒のブラザー、イナズマイレブンの吹雪士郎（覚醒前）のようにならなくても人格チェンジができる、諒のことを1の親友だと思っている、また諒達の力のことを知っている数少ない人物

優しい男

うしじま
牛島ゴン太

性別：男

性格：優しく友情に熱い

備考：諒とスバルのブラザーで自分を救ってくれたスバルの事を親友だと思っている、また数少ない諒とスバルの力を知る人物で秘密にしている、牛井がやっぱり大好き

本当は優しい委員長

しろがね
白金ルナ

性別：女

性格：一言で言えばツンデレ

備考：諒達のクラスの委員長でゴン太とキザマロを連れていることがほぼ、なので諒からは水戸黄門やうるさい奴とそのお供などと言われている、諒が自分の言うことを聞かないときはゴン太達に八つ当たりしている

小さい物知り博士

さいしょういん
最小院キザマロ

性別：男

性格：優しいが何かに熱中すると周りが見えなくなる

備考：諒のブラザーでかなり雑学の知識がある、背の事を気にしており諒からもらった『これで身長10cmUP!!ベスト20』を毎日している

キャラ設定パート7（後書き）

今回は早くできて嬉しい作者の松上です！

諒「松上までとはいかないが喜んでる主人公の諒だ。」

すずか「松上君と同じくらい喜んでる後書き限定キャラのすずかです！！」

まずは……

すずか離れてくれ……

すずか「いやーだー！！（松上君に抱きつけるのに簡単に離れたくないよ／＼／＼／＼／＼）」

諒「（松上にすずかが抱きついてる状況だ）はぁー、いいじゃないか別に。たまにはよ。」

まあ……いいか……

まずは

3人「Wさんありがとう（ごさいました）」

現実で教えてくれよ……

すずか「あはははははは……」

諒「まあ……いいか。で、次回はどんな話にするんだ？」

次回は日常編だな

諒「ふゝゝん。」

まつ！そう言うこつた

すずか頼むぜ！！

あと離してくれ

すずか「離すのは嫌！！次回予告はします

次回 体育の授業は戦争？」

はぁーフラグ立てたのは俺だしな……

諒「自業自得だ。」

次回もよろしくな！！」

すずか「松上くーん」

はあ、やっちゃまったな・・・犯罪者だよ俺

第32話 体育の授業は戦争？（前書き）

今回は前後編です！！

楽しんでもらえたら幸いです！！

今回の名言を覚えてくれたのは武御雷さんです！！

史上最強の弟子ケンイチで

『人生にや出来るも出来ねーもねえ！！…“やるかやらないか”だ！！』

B Y 逆鬼至緒

『ボクがここに来たのは、誰のためでもない！！己自身のためだ！！友人を見捨てるのが、殴られるより嫌だったからだ！！だから、あの二人が感謝してくれなからうが、自分が損しようが関係ない！！決して何も求めないし、後悔もしない！！なぜなら……友情は取引じゃないからだ！！』

『本当の仲間というのは過ちを犯したときこそ、親身になってくれる関係のことだ！！』

B Y 白浜謙一

『もしかすると、その疑問には必ずしも答えは出ないかもしれない……だが覚えておきたまえ。…“答えが出ないという答えの存在”を知ること、時には重要なのだよ。』

B Y 岬越寺秋雨

ありがとうございました！！

第32話 体育の授業は戦争？

side 諒

俺達は学校に向かってる

今回も飛ばしたから説明するぞ

4時に起きる

皆起きる

おはよつのキスをされる

気絶しかける

踏張って着替える

展望台に向かう

スバルが来る

今回はなのは達との合体必殺技を特訓する

いくつか成功する

朝ご飯を食べる

一度家に帰るため別れる

風呂に入る

なのはが乱入してきた

なんとかなのはを見ないで風呂から出る

着替える

スバルと一緒に学校に向かう 今ここ

説明終わり!!

ツカサ「諒くーん!!」

後ろからツカサの声が聞こえたので俺達は振り替える

ツカサ「おはようみんな。」

全員（スバル以外）「おはよう!」

これで全員揃ったな

俺達は学校に行こうとすると

委員長「よくぞ来てくれたわスバル君!!」

うるさい奴登場

朝から大声出すなよ、うるさいから

俺はそう思いながら皆の顔を見るとなのは・フェイト・はやて・ティアナ・ツカサは苦笑いしており、スバルは無表情、キザマロ・ゴン太は疲れた表情をしている

スバル「何のよう?」

スバルは無表情でうるさい奴に聞く

いつもならこんな表情していたら拳骨する所だが相手が相手なので許す

委員長「私の説得があなたに伝わって学校に来る気になったのでしよう?」

スバル「違うよ。」

こいつ何勘違いしてんだよ

今日は水曜日だからスバルは学校に来る日だろうが

委員長「な、なんですてえー!?!?私の説得されて学校の楽しさがわ

「からないの!？」

わかるわけないだろ

後ろを見るとゴン太とキザマロは手を合わせて謝ってる

可愛そうに・・・

スバル「僕はある人に言われて学校に来てるだけ。正直学校で楽しいのは諒君達と話す事だけ。それ以外は全然楽しくない。話はそれだけだね、じゃあ遅刻したくないから僕行くね。」

スバルはそう言うとうと学校に向かって歩きだした

俺達もあとを追い掛けた

後ろで怒鳴り声が聞こえたが気にしない

物凄い暇だ

状況を説明するぞ

あのあと俺達は教室に入って話した

スバルとツカサは最初はぎこちなかったが今じゃ普通に話せる

ブラザーバンドを組むように言って組ませた

これでジェミニに心を付け込まないだろう

そのあと来たうるさい奴とそのお供はうるさい奴は自分の席に座っ

て不機嫌オーラを出していたが無視した

ゴン太とキザマロも俺達の所に来て話に加わった

スバルはキザマロの状況を知ってかなり早く仲良くなってブラザー

バンドを組んだ

そのせいで不機嫌オーラが増したが無視した

そしてチャイムが鳴って先生が来た

そして今日の1日の流れを言って授業が始まった

だから俺の今の状況は1時間目の授業を受けている

物凄く暇だ

スバルを見ると腕を枕にして寝ている

なのは右手の人差し指から小さな炎を出して力のコントロールを上げる特訓してる

フェイトは真面目にノートを書いているがもう教えたものなのでときどき欠伸をしている

はやては一滴の水を浮かべて集中力を上げる特訓をしている

ティアナは鉛筆を浮かべながらずっと俺を見ている

ツカサは4人娘の姿を見て声を出さないように笑っている

ゴン太は涎を垂らしている

キザマロはそんなゴン太を注意している

うるさい奴は手を挙げては問題を解いている

どや顔されても全然凄くないから

クラスの1人1人を観察したらチャイムが鳴った

先生「次は体育だから遅れないように！！」

そう言つて教室から出ていった

スバル「んーよく寝た。」

スバルは両手をあげながら言った

諒「眠たいなら無理して特訓に来なくていいぞ。」

無理して体を壊されたらもとももない

スバル「眠たくないよ。ただ授業がつまなくてさ。」

ティアナ「わかる！もうお兄ちゃんに教えてもらったから何もすることないからずっとお兄ちゃんの顔を見て妄想してた。」

確かに俺が教えたがスバルの教育方針を間違えたか？

それからティアナ、人の顔を見て妄想するな

フェイト「な、何の妄想してたの？」

フェイト、それは聞いちゃいけないだろ！！

ティアナ「そんなの決まってるじゃん！！私とお兄ちゃんが（ピー

ー）している妄想！！」

はやて「は、早く着替えに行かなあかん／＼／＼／＼／」

はやて、お前も（ピーー）に近い行為はしてるぞ

フェイト「わ、私には早い／＼／＼／＼／」

フェイト「わ、私には早い／＼／＼／＼／」

フエイト、お前は常識を持ってきて嬉しさが抱きつきながら言う
と矛盾してるぞ

なのは「もし私と諒くんなら・・・凄く楽しそうだよー／／／／
／／／」

なのは、妄想しないでくれ

スバル「ぼ、僕行くね。ツカサ君行こう！！／／／／／／」

ツカサ「う、うん／／／／／」

スバル、ツカサお前等何時の間に着替えた？

しかも女子がいる前でよく着替えれてな

諒「はぁー、お前等早く教室から出る。皆着替えられないだろ。」

俺がそう言つと4人は体操服を持って教室から出ていった

諒「やつと着替えられる。・・・スバルとツカサはどうやって着替

えたんだ？」

そう思いながら俺は体操服に着替えた

グラウンドにいまーす

俺は体操服に着替え準備体操してるんだがスバル？ツカサ？ゴン太
？キザマロ以外の男子から嫉妬のオーラが溢れている

何故かと言つと・・・

フエイト「」

フエイトが俺におんぶされてるから

体操服に着替え教室を出てわずか3秒

フエイトが俺の背中にしがみついていた

いくら離れると言つても離れてくれない

それどころか力を入れてさらに密着している

なので胸が背中当たってかなりやばい

なのは達は「帰ったらしてもらおう！！」と言つて帰つてもなのは達
をおんぶしなければならぬ

諒「なあフェイト、あまり体をくっつけないでくれ。胸が当たって
／／／／／」

フェイト「当ててるの!!! 諒なら私の全部をあげるね!!!」

男共（スバル達を除く）「新井—————!!!」

フェイトの発言を聞いた男共が俺に突っ込んできた

諒「はあー、お前等俺にそんなことしていいのか？」

男共「すいませんでした!!!」

俺が男子共を睨み付けると全員土下座して謝ってきた

諒「お前等……怪我をしないように体育をするんだぞ（ニコッ）

┌

さあ、ショータイムだ!!!

第32話 体育の授業は戦争？（後書き）

・・・未だにすずかが離れてくれなくてちょっと疲れしてきた作者の
松上です

諒「はあ・・・なんか相手にするのも疲れた主人公の諒だ。」

すずか「今とつても幸せな後書き限定キャラのすずかです!!」

・・・まずは

3人「武御雷さんありがとうございました。」

・・・今回は前後編なのでちょっと短いな

諒「まあな・・・本当に大丈夫か？」

・・・大丈夫さ

・・・悪いのは俺だしな

すずか「松上君は何も悪くないよ!!」

・・・次回も頑張るわ

諒「（本当に大丈夫かよ・・・）」

・・・それじゃあ

・・・すずか

・・・頼むな

すずか「はい!!!」

次回 戦争スタート！ 皆同情してるよ

・・・それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみにー」

第33話 戦争スタート！ 皆同情しているよ（前書き）

諒のキャラが壊れます・・・
あのキャラの名言が出ちゃった

今回名言を覚えてくれたのはジエスター！！アーカムさんです

ロード・オブ・ザ・リングで

『エルフの隣で討ち死にとは。』

『友達の隣でなら？』

『いいね、それならいい。』

Byギムリ、レゴラス

ありがとうございました！！

第33話 戦争スタート！ 皆同情しているよ

side 諒

俺達は準備体操を終わらせサッカーのチーム分けをした

今回の体育の授業はサッカーなのだ

俺のチームメイトはなのは、フェイト、はやて、ティアナ、スバル、ツカサ、ゴン太、キザマロ、うるさい奴、女子だ

相手チームは残りの男子と残りの女子だ

先生「5分後に試合をするからポジションを決めるよ!!」

ふふふ、ポジションはすでに決まっている

諒「全員ポジションを言うぞ!!まずFWは右からなのは、俺、フェイト。MFは右からはやて、ツカサ、スバル、ティアナ。DFは右からキザマロ、女子、うるさいの。GKはゴン太だ。いいか!!男子に絶望を見せるぞ!!いいな!!」

全員（委員長以外）「了解!!!!」

委員長「何であなたが勝手に決めてるのよ!?それから私はうるさくないわよ!!」

俺が言つとうるさいのは反論していたがその他の皆は了解してくれた諒「いくぞー!!!!」

全員輪になって

全員（委員長以外）「GO!!!!ニコ学!!GO!!!!」
叫んだ

委員長「ちよつと無視するんじゃないわよ!!それからなんでニコ学なのよ!!ROOKIESじゃないわよ!!!!」

俺達はうるさいのを無視してコートに向かった

先生「まずは新井がいるチームがボールを持つ。しっかりと楽しみよ
!!!」

先生、楽しむに決まってるじゃないですか

先生「それでは始め!!!」

先生の笛が鳴って試合が始まった

俺はまずなのはにパスをしてゴール前までフェイトと一緒に走る
後ろを見るとなのはは2人の男子に行く道を防がれていた

しかしなのはにそんなのは効かん!!!

なのは「フレイムベールV2!!!」

なのははボールを地面に勢いよく足で埋め込む

そうすると炎が地面から吹き出し男子2人に向かって当たった
なのは「はやてちゃん!!!」

なのはは後ろに居たはやてにバックパスをする

はやて「よっしゃ、任せとき!!!」

はやてはボールを受け取ると華麗なドリブルで敵陣地を切り込む
しかしはやての前に1人の女子がはやての道を防いだ

はやて「そんなんじゃあウチは止められへんで!!!」

はやてはなのはと同じくボールを地面に勢いよく足で埋め込んだ
そうすると炎ではなく水が吹き出してきた

はやて「ウォーターベールV2!!!」

はやてはウォーターベールで女子を抜いた

はやて「フェイトちゃん!!!」

はやてはフェイトにパスをした

フェイト「ナイスパス!!!」

フェイトははやてから貰ったボールをトラップした

フェイト「諒!!!」

フェイトは俺にパスしてきた

諒「俺を怒らせた罰をしつかり目に焼き付けておくんだな!!!なの
は!!!フェイト!!!」

俺は叫ぶとボールを上空ぬ蹴った

そうするとボールは紫のオーラで包まれた

そしてそのボールに雷が落ちた

俺、なのは、フェイトは上空に飛び上がった

そして!!

諒・なのは・フェイト「イナズマブレイクV3!!!!」

俺達は同時にボールを蹴った

GK「う、うわあああああ!!!!!!」

GKの男子は叫びながら横に逃げた
なので

先生「ゴール!!!!」

まずは一点

だがこれで終わりだと思うなよ!!

お前等には絶望してもらおうぜ

ふはははははは!!!!!!

先生「試合終了!!!!15対0で新井チームの勝ち!!!!」

諒「男子共俺に言うことはないんか?ああん?」

男子全員(スバル達以外)「すいませんでしたー!!!!!!ort」
男子共に土下座させ謝らした

スバル「(なんか可愛そう……)」

ツカサ「(今回は同情するよ……)」

ゴン太「(腹減ったー)」

キザマロ「(ゴン太君、よくこの場面でそんなこと思えますね……)」

委員長「(私にはまったくボールが回ってこなかった……)」

フェイト「(やっぱり諒は格好良いよノノノノノノ)」

なのは・はやて・ティアナ「(帰ったら絶対おんぶしてもらおう!!!!)」

第33話 戦争スタート！ 皆同情しているよ（後書き）

すずかの思いを正面から受けようと決意した作者の松上だ！！
すずか「今両思いになって凄く幸せな後書き限定キャラのすずかです！！」

アフロディ「今回は何故か（、、）来れない諒の代わりに来たアフロディです。」
まずは！！

3人「ジエスター」アカムさんありがとうございます！！

アフロディ「松上さん、すずかちゃん、おめでとー！！」

い、いやー（^^ゞ／／／

すずか「ありがとう！！」

アフロディ「諒に負けなくらい幸せになってね！！」

あ、ああ！！

すずかを幸せにしてやるぜ！！

すずか「これからも頑張ろうね！！」

ああ！！

アフロディ「2人が幸せそうなので次回予告は僕がするよ

次回 天地登場！！

それじゃあ次回もお楽しみにー！！」

第34話 天地登場！！（前書き）

題名どおり天地が出ますが短いです・・・

今回はW（弟）が教えてくれた名言です！！

銀魂で

『オイ、デカブツ……こんなもんじゃ……俺の魂は折れねーよ』

『くたばるなら……大事なもの傍らで……剣振り回してくれたばりやがれ』

『まっすぐに生きて……バカの魂はな……たとえその身が滅びようが……

……消えやしねー』

『てめエのペースで……やりやいいんだよ……「自分」を殺すな』

『もう終わったんだよ……それをいつまでも……ネチネチネチネチ……

……京都の女か！』

『こいつが届く範囲は……俺の国だ』

By坂田銀時

ありがとう

第34話 天地登場！！

side 諒

体育の時間は何か壊れてすまん

あれから時間が経って今は昼休み

俺達は屋上に来ていつものメンバーで昼ご飯を食べている

諒「しかし必殺技が成功してよかったな。」

なのは「これも朝の特訓のおかげだね！！」

なのはの言葉にフェイト・はやて・ティアナが頷く

ツカサ「でも凄かったね。僕にも出来るかな？」

諒「できるできる！！なら今度俺が教えてやるよ！！」

ツカサ「本当！？ありがとう！！」

ツカサに技を教える約束をした

委員長「随分と楽しそうじゃない。」

出たうるさいの

スバルの顔を見たら笑顔が無表情になっていた

委員長「スバル君学校は楽しいでしょ？毎日来たら楽しいわよ。」

またこの話かよ

いい加減しつこい

ゲームでも思ってたけど現実でされると鬱陶しいな

スバル「しつこいよ。僕は学校で楽しいことは諒君達と話すことだ

け。それ以外はつまらないよ。」

本当スバルの教育をどこで間違えた？

委員長「が、学校で知らないことを学ぶのも楽しいわよ。」

うるさい奴は一生懸命言ってるが無駄だろ

スバル「学校で習うことなんか全部諒君に教わったから授業中は寝

てるよ。」

やっぱり・・・

委員長「あ、あんだねえ！！私わざわざ言っちゃってるのにその

態度は何よ!!」

ついに切れた

後ろではゴン太とキザマロが土下座してる

本当可愛そうだ・・・

スバル「無理して教えてくれなくていいからさ。話は終わりだね。

じゃあ僕はトイレに行くから。」

スバルはそう言ってうるさい奴の隣を横切ってエレベーターに乗った

俺達も下に行こうとしたらうるさいのが止めてきた

諒「・・・なんだよ。」

委員長「どうしてスバル君に学校の楽しさを教えないの!!」

なんだよ、自分が説得できなかったら他人のせいだよ

諒「俺はスバルが自分で学校の楽しさを見つけたら待つ。前にも

言ったがスバルに無理してまで学校に来てほしくない。だから俺は

待つ。それがブラザーである俺が出来ることだ。」

そう言っただけ俺はエレベーターに乗った

皆エレベーターに乗った

屋上に残ったのはうるさいのとゴン太、キザマロだった

放課後です

あのあとうるさいのは不機嫌オーラーを纏ながら教室に入ってきた

ゴン太とキザマロはかなりやつれていた

うるさいのは俺とスバルを睨んでいたが無視した

そして授業を聞いて学活して帰ってる

ツカサとは家の方向が逆なので途中で別れた

スバルは展望台にそのまま行った

そして俺達も家に帰ろうとしたが誰かに話し掛けられた

??「君達ちよつといいかい?」

俺は後ろを向いた

諒「なんですか？」

??「君達は星河スバル君を知っているかい？」

諒「知っていますが・・・あなたは誰ですか？」

??「ああ、すまない。僕の名前は天地まもる。スバル君の父親である星河大吾さんの部下だったものだよ。」

これが天地さんとの出会いだった

第34話 天地登場!! (後書き)

すずかと付き合いだした作者の松上です!!

諒「なのは・フェイト・はやて・ティアナと付き合ってる主人公の諒だ。」

すずか「松上君と付き合ってる後書き限定キャラのすずかです!!」
まずは

3人「W^{さん}ありがとう(ございまた)」

また弟からだよ

諒「いいじゃねーか。」

まあいいがな

諒「で、次回は何すんだ?」

ふふふ、聞いて驚くな!!

次回はアンケートをするぜ!!

諒「Why?」

英語で聞くな

実はな、この小説のPVとユニークが...

すずか「・・・ゴクッ」

60000越え及び60000越えをしたからだ!!

諒「!?マジか!?!」

マジだ!!

だから記念にアンケートをするぜ!!

なので今回はここまでです

諒「次回も!!」

3人「お楽しみにー!!」

PV60000越え及びユニーク60000越え記念!! (前書き)

今回はアンケートです!!

今回もW(弟)が教えてくれた名言です

『もつと熱くなれよ!...熱い血燃やしてけよ!...人間熱くなつた時が本当の自分に出会えるんだ!』

『人の弱点を見つける天才よりも...人を褒める天才がいい』

『頑張れ頑張れ!!出来る出来る!!絶対出来る!!頑張r(r

y

』人はいつ死ぬと思う?...誰かに忘れられた時さ...』

『気にすんなよ...くよくよすんなよ...大丈夫、どうにかなるって...』

ドントウオーリー!!...ピーハッピー!』

『一生懸命生きていれば...不思議なことに疲れない』

『本気になれば自分が変わる!...本気になれば全てが変わる!』

『よく時間が解決してくれるという言うけれど...そうは思わない。』

...でも、行動した時間なら解決してくれるはずだ』

By松岡修造

ありがとな

PV60000越え及びユニーク60000越え記念!!

まずは!!

全員「おめでとー!!!!」

諒「まさか60000を越えるとはな・・・」

ツカサ「まだ信じられないよ。」

だが嘘ではない!!

なのは「それで一体何をするの?」

ああ、人気投票をしようと思う!!

フェイト「ほ、本当なの!?!」

本当だ!!

はやて「みなさん!!ウチに清き一票を!!!!」

待て!!

まずはやり方を説明しないと

まず一人一票です

そしてこの小説に出てくる自分が一番好きなキャラの名前を書いて
ください

そして何故そのキャラが好きか教えてください

感想に書いて教えてください

期限は今日から一週間後の5月19日です

強制じゃないので無理に参加しなくてもいいですよ

ティアナ「必ず一人一票なのでじっくり考えてね。」

暁「人じゃなくてもフォルテやチンロンモン達でもいいぞ!」

スバル「光子朗君や松上さん、すずかちゃんでもいいよ!!」

それじゃあ!!

全員「アンケートの参加お待ちしてます!!!!」

PV60000越え及びユニーク60000越え記念!! (後書き)

今回は次回予告だけです!!

次回 アマケンに行つてきまーす!!

次回もお楽しみに!!

第35話 アマケンに行ってきたーす！（前書き）

アマケンに行くまでの話です！！
楽しんでください！！

今回もW（弟）が教えてくれた名言です！！

ONEPIECEで

『支配なんかしねエよ…この海で一番自由な奴が海賊王だ！！！！』

『居たくもねエ…あいつの居場所なんて…俺が全部ぶっ壊してやる』

『海で名を上げることが…怖くて海賊なんてやれるか！…俺の名前を一生覚える！』

Byルフィ

『オーナーゼフ…長い間……くそお世話になりました！！……このご恩は……一生忘れません！！』

『食いてエ奴には……食わせてやる……コックってのはそれでもいいんじゃないのか』

Byサンジ

『俺は神には祈らねえ……信じるのは己と仲間だけだ』

Byゾロ

『力に屈したら……男に生まれた……意味がねエだろう』

Byエース

『安いもんだ……腕の一本くらい……無事でよかった』

『例えどんな事があるうと……友達を傷つけるヤツは絶対に許さない！！！！』

Byシャンクス

ありがとう

第35話 アマケンに行ってきたーす！

sideスバル

僕は諒君達と別れたあと展望台に来た

スバル「・・・ムカつく。」

僕は委員長の態度にイラついている

僕はトイレに行く際ウォーロックに頼んで屋上に残ってもらって僕が居ない間何を話していたか聞いてもらった

そしてウォーロックに教えてくれた話によると委員長が諒君達を責めたらしい

その話を聞いて僕はムカついた

なので諒君達といると怒りをぶつけてしまいそうだったので展望台に来た

スバル「原因は僕なのにどうして他人を責めたんだ！！」

僕は空に向かって叫んだ

少しでも気分を晴らそうとした

そしたら

バサツ、バサツ、バサツ

と言う音が空から聞こえた

僕は上を見ると機械で出来た翼で空を飛んでいる人がいた

バサツ、バサツ、バサツ・・・ヒューーーーーン・・・ドカ

ンッ！！！！

空を飛んでいた人の翼が急に止まりその人は落ちた

僕はすぐにその人の所に向かった

???「う、うーん・・・」

スバル「だ、大丈夫ですか!？」

???「は、はい。大丈夫です。」

よかった、怪我はしてないみたい

スバル「僕は星河スバルです。」

「????」ボクの名前は宇田海しんすけです。一応アマケンの職員です。」

アマケンの職員かー

スバル「それで、その翼が生えた機械はなんですか？」

宇田海「これはボクが作ったメカです。今日はこのメカをテストしていたんです。」

スバル「そのメカで空が飛べるなんて凄いですね！」

宇田海「いえいえまだ完成してませんから凄くありません。」

宇田海さん謙遜してるけど普通の人(、、、)は空を飛ぶのに憧れているからこれが完成したら凄いことになるぞ

まあ、僕は電波変換やデジヒュージョンさえすれば空を飛べるからいいけどさ

宇田海「スバル君、お願いがあるんですけど聞いてくれますか？」

宇田海さんが聞いてきた

スバル「何ですか？」
宇田海「実はこのメカはまだ誰にも見られなくなかったんです。なので……」

スバル「わかりました！黙っておきますね！」秘密を話されたくないのは誰だつてそうだ

宇田海「ありがとう！そうだ、これをあげるよ。」

宇田海さんは十数枚のチケットを渡してきた

スバル「これは？」

宇田海「それはアマケンの無料招待チケットです。今度の日曜日に来てください。私が案内します。」

スバル「い、いいんですか？」

宇田海「はい！秘密にしてくれるお礼です！お友達を連れて来てくださいね！それじゃあ！」

そう言つて宇田海さんはメカを持って展望台から去つていった
スバル「……諒君達でも誘つて見ようかな。」

僕は家に帰るために展望台を去つた

ムカつきもいつのまにか消えていた

side 諒

諒「天地さんがスバルに何のようなんですか？」

俺達は天地さんに引き止められ色々質問しあつてただいま談笑中

天地「先輩の子供がどんな子が見たくてね。それで午前中にスバル君の家に向かったんだけど学校に行つてね。それで時間を潰していたら君達にあつたわけ。」

ゲームでも優しいけど現実でも優しいなんて格好良いな

天地「それにしてもアカネさんの言つていた通りの子だな、諒君は。」

諒「何がですか？」

アカネさん、一体何を言つたんですか？

天地「友達に優しくして、子供なのに大人びた雰囲気。少ししか話していないけど君は僕の予想以上だ。」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「当たり前だよ（や）！！何て言つたつて私達の将来の夫なんだもの（やから）！！」

おいおい・・・

天地「ははは、君はかなり愛されているね。」

諒「あ、あははははは・・・」

笑うしか出来ねーよ

スバル「諒くーん！！」

俺が笑っているとスバルが走つてきた

sideスバル

僕が帰っていると諒君達が誰かと話していた

その人は宇田海さんと同じ服を着ていたのでアマケンの職員だとわかった

僕は諒君達に今度の日曜日にアマケンに誘おうとした

スバル「諒くーん!!!」

諒「よう、スバル。」

????「ス、スバル君だって!?スバル君かい!?」

アマケンの職員の人は僕の名前を聞いたら急に聞いてきた

スバル「そ、そうですけど・・・」

????「そうか、君が先輩の・・・。自己紹介がまだだったね、僕は天地まもる。君のお父さんである星河大吾さんの元部下だったものさ。」

と、父さんの部下!?

スバル「そ、それは本当ですか!?!」

天地「ああ!君のお父さんにはよくお世話になったよ。それより諒君に話があるんじゃないのかい?」

そ、そうだ

スバル「諒君、日曜日って暇かな?」

諒「特に用事はないが・・・どうした?」

スバル「実はさっきアマケンの職員の人に招待のチケットを貰ったんだ。それで友達も連れてきていいって言われたから行かない?」

諒「俺は別にいいが・・・みんなは?」

諒君はなのはちゃん達に聞いた

なのは「私も行くよ!!!」

フェイト「私も!!!」

はやて「ウチもや!!!」

ティアナ「お兄ちゃんが行くなら私も!!!」

全員参加だね!!!

諒「スバル、ツカサも呼んでいいか?」

ツカサ君なら全然OKだよ！！

スバル「もちろん！！」

諒「それじゃあこR「話は聞かせてもらったわ！！私達も参加させてもらうわ！！」・・・」

諒君の言葉を遮って委員長が勝手に参加してくると言った

後ろではゴン太とキザマロか頭を下げて謝っていた

可愛そうだよ

天地「そうかい！なら日曜日みんな来てくれ！！その時は僕も案内するよ！！それじゃあまた日曜日にね！！」

そう言つて天地さんは帰つていった

委員長「あのアマケンに行けるなんて感激だわ・・・いい！絶対遅刻しないこと！！それじゃあ。」

委員長は帰つていった

ゴン太「すまねえー、スバル。」

キザマロ「すいません、スバル君。」

2人が謝ってきた

スバル「何で2人が謝ってるのさ。悪いのは委員長。だから謝らないですよ。それより2人も一緒にいこうね！！」

ゴン太「ありがとな、スバル！！」

キザマロ「ありがとうございます、スバル君！！」

僕達は握手しあった

諒「スバル、今ツカサに聞いたら参加するってよ！！」

ツカサ君も参加するんだ

何か楽しみな

スバル「それじゃあ日曜日は遅れないでね。じゃあね！！」

僕は手を振りながら家に向かった

全員「またなー（ね）！！」

みんなも手を振ってくれた

日曜日が楽しみだ

side 諒

アマケンって事はギグナスだな

宇田海さんはスバルに任せて俺はイレギュラーだな
絶対イレギュラーに原作は変えさせねえ！！

なのは「諒くん、落ちそうだよ！」

はやて「なのはちゃんの次はウチやで！！」

ティアナ「最後は私だよ！！」

フェイト「もう一回おんぶしてもらいたい・・・」

なのはをおんぶしながら決心した

第35話 アマケンに行ってきたーす！（後書き）

ついにシナリオ2話！！喜びに浸っている作者の松上です

諒「スバルの教育方針をどこで間違えたか悩んでいる主人公の諒だ。

」

すずか「松上君に抱きつけて嬉しい後書き限定キャラのすずかです

！！」

まずは

3人「W^{さん}ありがとう（ございました！！）」

3回目だな・・・

諒「まあな・・・それよりも人気投票どんどん来てるな！！」

参加してくれて嬉しいぜ！

すずか「それよりも直ぐで60話投稿だね！！」

凄いペースだから自分でも驚いている

諒「凄いよな、今のところHR合宿以外の日は毎日更新してるからな」

これからも頑張るぜ！！

すずか！！頼むぜ！！

すずか「はい！！！！」

次回 アマケンでまさかのライブ？「それじゃあ！！」

諒「次回も！！」

3人「お楽しみにー！！」

第36話 アマケンでまさかのライブ？（前書き）

今回も短いですが楽しんでもらえたら幸いです
あとアンケートしてますから参加してくれたら嬉しいです

今回名言を教えてくださいましたのは武御雷さんです

マブラヴ オルタネイティヴで

『死なせたたくない……俺たちの街で……これ以上死なせたたくないんだあああああああああああ……！』

BY海鳴孝之

『……人類をツ……なめるな……ツ……』 『……人間をなめるなあああああ……！』

BY御剣冥夜

『……旅立つ若者たちよ』

『諸君に戦う術しか教えられなかった我等を許すな』

『諸君を戦場に送り出す我等の無能を許すな』

『……願わくば、諸君の挺身が、若者に送る事無き世の礎とならん事を』

BYパウル・ラダビノッド

ありがとうございます……！

第36話 アマケンでまさかのライブ？

side 諒

天地さんと出会って3日が経った

つまり日曜日だ

今日はスバル達とアマケンに行く予定だ

集合時間は午前10時でバス停

今の時刻は9時半

なので俺達はアマケンに行く準備をしている

なのは「楽しみだなー。」

諒「ん？なのは、そんなにアマケンに行くのが楽しみなのか？」

なのは「違うよ！諒くんと久しぶりに出かけるから楽しみなの！！」

諒「成る程な・・・」

俺達は歌手活動をしているせいか休みの日でも仕事をしなければならぬ時間がある

なのでみんなで出かけるのは久しぶりなのだ

フェイト「ねえみんな？」

フェイトが突然俺達に質問してきた

フェイト「今日帰りに展望台に行って新曲の練習に付き合ってくれない？私まだ完璧じゃないからさ。」

確かにな

今回の新曲ではフェイトは初のボーカルだからな

いつもは俺が歌っているが少し前からフェイト達にも歌っている

理由？みんなの歌声が聴きたかったからだよ！！

はやて「ウチはええで。」

なのは「私も！！」

ティアナ「当たり前だよ！！」

みんな参加するようだ

フェイト「諒は・・・一緒に練習してくれる？」

フェイトは不安そうに俺に聞いてきた

諒「もちろん俺も参加するぜ！！俺達はチームであり家族であり夫婦なんだから！！」

フェイト「ありがとう！！」俺がそう言うとフェイトは抱きついてきた

はやて「フェイトちゃん！！ずるいで！！ウチ等だって諒君に抱きつきたいんやで！！」

はやての言葉にみんなが頷く

フェイト「わかったよ。」

フェイトは渋々俺から離れた

はやて「今度はウチや！！」

そう言つてはやてが抱きついてきた

そのあとなのは、ティアナにも抱きつかれ俺は楽器をフォルテに入れた

そして俺達はバス停に向かった

バス停に向かうと既にみんな集合してた

委員長「遅いわよ！！」

何言つてんだよ集合時間5分前に来たのに遅刻扱いかよ

諒「集合時間5分前に来たんだからいいだろうが。」

委員長「それでも遅いのは遅いのよ！！」もう相手にするのはやめよ、こいつとは分かり合えない

俺は黙った

委員長「ち、ちよつと無視するんじゃないわよ！！」

諒「…………おつバスが来たぜ。」

委員長「だから無視するんじゃないわよ！！」

俺はうるさいのを無視し続けた

そしてバスの席に座った

今回は前もつてなのは達に「ツカサと座りたい。」と言っているの
で隣に座らなくてもいい

バスの座席は前から

うるさいの ゴン太

スバル キザマロ

なのは ティアナ

俺 ツカサ

はやて フェイト

となっている

またゴン太とキザマロはジャンケンをして負けたゴン太がうるさい
奴の隣に座っている

ご愁傷さまです

俺がそう思っているとバスが動きだした

アマケン到着！！

今回はバスの中であつた事を説明するぞ

まず1つ目はツカサと特訓する日を決めた

やはりまだ最初と言うことで土曜日の朝方に参加してもらつことに
した

2つ目はスバルとキザマロがお互いの知ってる雑学を話し合っていた
なのでかなり友情が深まったと思う

フェイトとはやてはフェイトが歌詞を暗記できたかはやてがテスト
していた

聞こえた範囲では完璧に覚えていた

なのはとティアナは………小さい声であつたがアッチ系の話
をしていた

なのはってこんなにアツチ系に興味を持ってたっけ？

そんなこんなでアマケンについた

宇田海「ん？・・・スバル君！！」

宇田海さんが走ってきた

現実で見るのは初めてだが見た感じ宇田海だ

ただ様子がゲームと違いかなり明るい

やはりイレギュラーか・・・

宇田海「よく来てくれましたね！！お友達をたくさ・・・！！？」

宇田海さんは俺達を見ると話すのをやめた

諒「どうしました？」

宇田海「きききき君達ってあああああのバンドグループのヒヒヒヒヒヒカリだよね！！？」

かなり動揺していた

諒「まあ、そうですけど。」

宇田海「やつぱり！！」

そう言っただけの手を掴んで握手してきた

宇田海「僕、君達の大ファンなんだよ！！ここで会えるなんて感激

だよ！！！」

そう言いながら宇田海さんはなのは、フェイト、はやて、ティアナとも握手した

宇田海「自己紹介がまだだったね！！僕は宇田海しんすけです！！

よろしく！！・・・それでさっそくお願いがあるんだけど聞いてもらえるかな？」

諒「出来る範囲なら聞きますが・・・」

宇田海「本当かい！？なら言っよ！！ここで一曲歌ってくれないかな？」

・

・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

諒・なのは・フェイト・はやて・ティアナ「は？」

第36話 アマケンでまさかのライブ？（後書き）

アンケートに参加してくれる人がいて嬉しい作者の松上です
諒「アンケートの結果が早く知りたい主人公の諒だ。」

すずか「松上君に一票でも入ってたら嬉しいあと書き限定キャラの
すずかですー!!」

ますは!!

3人「武御雷さんありがとうございました!!」

バイト探してるんだけどなかなか見つからない

諒「バイトしたら更新できねーんじゃないのか？」

いや!!絶対毎日更新してやる!!

例えレジ打ちしても書く!!

諒「見つかるなよ。」

あたりM「もういいから。」・・・最後まで言わせてくれよ

諒「それで次回はライブすんのか？」

あ、ああ

2曲歌って貰ってバトルまで話を入れる予定だ

諒「わかった。」

よし!!すずか!!

頼むな!!

すずか「はい!!」

次回 ライブしたら沢山人が来た・・・

それじゃあ!!

諒「次回も!!」

3人「お楽しみにー!!」

第37話 ライブしたら沢山人が来た・・・（前書き）

今回はライブの話です

歌の歌詞でうめつくされてます・・・

今回名言を教えてくださいましたのはAIさんです!!

ONEPIECEで

『女の嘘を許すのが男だ』

Byサンジ

Vガンダムで

『荒らんだ心に、武器は危険なんです!!』

Byウツソ・エヴィン

ZZガンダムで

『憎しみを育てるもの・・・憎しみを育てる血を吐きだせ!』

Byジュドー・アーシタ

ありがとうございます!!

第37話 ライブしたら沢山人が来た・・・

side 諒

わざわざわざわざわ(ry

諒「・・・みなさん今日は忙しい中僕らヒカリのライブに来てくれてありがとうございます」

諒くん!!

ティアナ「私達一生懸命がんばります!!」

ティアナちゃん!!

なのは「だからみんなも盛り上がっていいーね!!」

なのはちゃん!!

はやて「みんないくでー!!」

はやてちゃん!!

フェイト「まずはMy Tomorrowです!!聴いてください!!」

フェイトちゃん!!

みんな状況が飲み込めないよな!!

だから最近流行りの回想シーンで説明するぜ!!
スタート!!

10分前

諒・なのは・フェイト・はやて・ティアナ「は?」

宇田海さんがライブをしてくれて頼んできたから俺達は間抜けな声を出してしまった

宇田海「君達の歌はCDなどで聴いてるけどやはり生で聴いてみたんだ!!だからお願いします!!」

宇田海さんは言い終わると土下座してきた

諒「ち、ちよつと何してるんですか!？」

宇田海「お願いします!!ライブしてください!!ステージは5分あればできるから!!必要なお金も渡すから!!してください!!」

「!」

どうしよう・・・

楽器はフォルテの中に偶然(と言う名の著作権限で)入ってるからライブは出来るんだが・・・

なのは「諒くん・・・」

なのはに話し掛けられたのでなのはの方を見た

なのはの・・・なのは達の顔が決意した顔になっていた

諒「・・・はぁー、わかりました。ライブをしましょう。」

なのは達は優しいよな・・・

宇田海「本当かい!?!ありがとう!?!すぐに準備するよ!?!楽器はあるかい?」

諒「ありますよ。」

宇田海「わかった!?!すぐに天地さんに頼んで準備してくるよ!?!それからニユースにしてみんなに教えよう!?!よっしゃー!?!頑張るぞー!?!」

宇田海さんは全速力で走っていった

スバル「諒君達のライブかー。中々行けないんだよねー。」

諒「ん?そうなのか?」

言ってくればチケットあげるのに

ツカサ「諒君達の歌が聴けるなんてついてるね!」

キザマロ「そうですね!?!諒君達は響ミソラちゃん並みに人気ですからね!?!」

国民的アイドルと同じって凄いな

ゴン太「諒!?!楽しみにしてるぞ!?!」

ははは、まあ頑張るか

諒「まあ、楽しんでくれよ。俺達は音合わせしてくるわ。」

委員長「ふん！！私はアマケンに先に行くわ！！」

勝手に行けよ・・・

いちいち口に出すなよ

諒「じゃあ行こうぜ！！」

そしてなのは達を連れて音合わせに行った

天地さんもなんと俺達のファンでライブをすると宇田海さんから聞いたら3分でライブ開場を作った

・・・マテリアウエーブできてるんじゃない？

それから5分後にライブ開場を見ると既に人でうめつくされていたうるさいのは居なかったがスバル達、アマケンの職員のみなさんが最前列に居た

諒「・・・仕事しろよ。」

はやて「は、ははははははは。」

なのは「でも頑張らないと！！」

諒「だな。今日はなのは達がボーカルな。ギター弾きながらやドラム叩きながら歌ってくれよ。」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「もちろん！！」

諒「それじゃあ成功させようぜ！！」

俺達は輪になって

全員「GO！！ヒカリ！！GO！！」

俺達は気合いを入れた！！

今回も使ったぜ！！ROOKIESネタ！！

そして俺達は舞台に出た

そして冒頭にいたるわけ

今回は俺とフェイトはギター、なのははベース、ティアナはキーボ

ード、はやてはドラムだ

なんかけいおん！のメンバー+aだな

今回歌うのはなのは達専用の歌だから歌わない

そして俺とフェイト、ティアナが音楽をはじめた

そしてなのは・フェイト・はやて・ティアナは歌いだした

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「ありがとうございました！
！」

4人が頭を下げてお礼を言うと拍手された

俺はフェイトに近づいた

諒「フェイト、いけるか？」

フェイト「わからない・・・でも私、頑張ってみるよ！！」
さすがだな

諒「わかった。さあみんな準備をしようぜ！！」

そして俺はマイクを持って観客に言った

諒「次が最後だけど新曲を歌います。フェイトの初のボーカルの曲
です！！聴いてください！！」

フェイトはギターを外しマイクを持ち舞台の真ん中に来た

俺はそれを確認するとなのはとアイコンタクトをしギターを弾きだ
した

ジャンーン！！

フェイト「ありがとうございました！！」

全員「ありがとうございました！！！！」

ウォーーーーー！！！！

パチパチパチパチ（ry

無事ライブは終わった

第37話 ライブしたら沢山人が来た・・・（後書き）

明日から休みなのでテンションが上がってる作者の松上です!!

諒「みんなの歌声を聴けてテンションが上がってる主人公の諒だ。」

すずか「松上君の子供のような姿で気持ちが高ぶってる後書き専用キャラのすずかです!!」

ますは!

3人「A Iさんありがとうございました!!」

今回はヒロイン達が活躍したな

諒「ああ!!ところでなのは達にもソロで歌わす曲があるのか?」

勿論!!

だがそれはまた今度だ!!

諒「ふーん。で、次回は何をやるんだ?」

次回はアマケンの見学の話だ

諒「話が進まないな・・・」

う、うるさい!!

いいんだよ、自分のペースを保たないと

すずか!!頼むぜ!!

すずか「はい!!」

次回 アマケンはゲームで見たより広い

それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみに!!」

第38話 アマケンはゲームで見たより広い(前書き)

今回もご都合主義& a m p・短いです!!

今回名言を教えてくださいましたのはジェスター!!アーカムさんです

ファイナルファンタジーXで

『他の誰でもない。これは、お前の物語だ。』

『生きていれば、生きていれば無限の可能性があんたを待っているんだ!!』

Byアロン

・・・使える

第38話 アマケンはゲームで見たより広い

side 諒

ライブが無事に終わって俺達はベンチに座っている

諒「完璧じゃないか、フェイト。」

俺はフェイトを素直に誉める

水樹奈々さんの声でのアケエリオンが聴けて嬉しかったけどさ

フェイト「そ、そうかな？」

なのは「凄く可愛かったよフェイトちゃん!!」

なのははフェイトを誉める

はやて「で、次の歌は誰がソロで歌うん？」

はやてが俺に質問してきた

諒「う〜〜ん・・・はやてやってみるか？」

はやて「う、ウチか!？」

そんなに驚かなくても・・・

諒「全員1回はソロで歌ってもらってから遅かれ早かれ歌わないとい

けないんだ。まあ、予定は次ははやてだな。」

まあ、女性歌手の歌を歌ってもらうんだがな・・・

はやて「わかった!ならウチ頑張るわ!!」

そう言っってはやては抱きついてきた

諒「おいはやて、いいから離れるよ。」

はやて「嫌や!!」

はあ・・・

諒「はやて離れる。スバル達が待ってたんだ。」

俺がそう言うとはやては渋々離れてくれた

諒「さ、スバル達の所に行こうぜ!」

俺達はスバル達の所へ向かった

スバル達の所には天地さんと宇田海さんもいた

スバル「諒くん!!」

スバルは俺達に気付き手を振りながら走って俺達の所に来た
みんなもあとから来た

スバル「お疲れさま!!」

諒「ありがとな。」

ツカサ「凄く格好良かったよ。学芸会で歌ってみたらいいのに・・・

┌

諒「学芸会は舞台をするだろ。やるなら文化祭だ。」

宇田海「そ、それじゃあ文化祭に行けばヒカリのライブが見られるんだね!？」

諒「え、ええ。まあ。何かリクエストあります?」

宇田海「歌ってくれるのかい!?!なら僕は brave heart をリクエストするよ!!あの歌には何度も勇気をもらったからね!

!」

天地「ゴッホン!そろそろみんなを案内したいんだが・・・」

宇田海「あつ!?!は、はい!?!それじゃあみなさん僕についてきてください!!」

俺達はようやくアマケンに向かった

広い!!!

すまん、やはりゲームと見比べてしまっから一度言ってみたかったんだ

俺達は天地さんと宇田海さんに案内してもらってる

スバルは目を輝かせて天地さん達の説明を聞いている

ゴン太はさつき買ったアイスを食べながら歩いている

キザマロは積極的に質問してる

俺達もスバル程ではないが初めて見るものなので少しはしゃぎながら見ている

天地「ここがアマケン最大の目玉で疑似宇宙室だ。ここでは宇宙空間を感じる事ができるんだ。」

スバル「早速入りましょう!!」

スバル、落ち着けよ

天地「ははは、わかったよ。それじゃあ宇田海準備を。」

宇田海「了解です。」

宇田海さんはどこかに走っていった

天地「みんなこの中に入って宇宙服を来てくれ。」

そして俺達は部屋に入り宇宙服を着た

諒「(さあ、ギグナス!!いつでもかかってこいや!!)」

第38話 アマケンはゲームで見たより広い（後書き）

イナズマイレブン3で全仲間LEVEL99を目指している作者の
松上です

諒「なのは達の技LEVELMAXを目指している主人公の諒だ。」
すずか「松上君とのラブラブ度を上げている後書き限定キャラのす
ずかです!!」

まずは!!

3人「ジエスター」アークムさんありがとうございました!!

今回は第2のFM星人との戦いだな

諒「まあ、今回も俺はサポートだろう。」
違うぜ

諒「ま、マジで?」

ああ、次回の戦いはお前も戦ってもらうぜ

諒「ま、いいけどよ。」

よし!すずか!!

いつもの頼むぜ!!

すずか「はい!!」

次回 VSギグナス・ウイング

それじゃあ

諒「次回も!!」

3人「お楽しみに!!」

第39話 VSギグナス・ウイング（前書き）

今回も諒のキャラが壊れます!!
御了承ください!!

今回名言を教えてくださいましたのは武御雷さんです!!

機動戦士ガンダムSEED DESTINYで

『未来を決めるのは、運命じゃないよ…!』

Byキラ・ヤマト

機動戦士ガンダムSEEDで

『俺たちは生きてるんだ。てことは生きつづけなきゃいけないってことなんだよ。』

Byムウ・ラ・フラガ

『君の歌は好きだったんだがね・・・だが世界は歌のように優しくはない!!』

Byラウ・ル・クルーゼ

『戦争には点数も得点もない、スポーツのような…ね。ならどうやって勝ち負けを決める?どこで終わりにする?敵であるものをすべて滅ぼして、かね?』

Byアンドリュー・バルトフェルド

ありがとうございました!!

第39話 VSギグナス・ウイング

side 諒

疑似宇宙室で楽しんでる主人公です

・・・すまん調子に乗った

あのと宇宙服に着替えて疑似宇宙室に入った
そしたらうるさいのがいたが無視してる

うるさいのは冥王星の辺りで1人で楽しんでる

俺達は反対側の火星の辺りで楽しんでる

天地「無重力の世界はどうだい？」

天地さんが無線で聞いてきた

スバル「凄く楽しいです！！」

諒「スバル、少し声のポリウムを下げてくれ。耳が痛い。」

スバルの声が凄く大きいためみんなヘルメットの耳の部分を押さえ
てる

スバル「あつ、ご、ごめん。」

スバルが謝ってきたので許す

ブーブーブーブー

突然警報が鳴った

天地「宇田海！！一体何があった！？」

ま、また耳が・・・

宇田海？「疑似宇宙室は私が乗った。」

中央の塔の上でギグナス・ウイングが言った

おかしい、この話のシナリオは宇田海さんが天地さんに裏切られた
と思っただけで電波変換する話のはず

しかし宇田海さんは天地さんとブラザーで人を疑わない人だった

それに話し方が宇田海さんと違う

宇田海？「私の名はギグナス・ウイング。分け合っこの人間の体
を乗った。まずは！！」

まずい！！

諒「みんな！！今直ぐにあいつに背を向けるんだ！！！」

俺の言葉を聞いたなのは・フェイト・はやて・ティアナ・スバル・ツカサは後ろを向いた

しかし天地さん・ゴン太・キザマロ・うるさいの・その他の人は訳が分からずそのままギグナス・ウイングを見た

ギグナス・ウイングは塔の上で回転し始めた

そしたら天地さん・ゴン太・キザマロ・うるさいの・その他の人はギグナス・ウイングと同じように回転し始めた

ギグナス・ウイング「ふふふふ。みんな美しいじゃないか。酸素が切れるまで残り30分。楽しませてもらうよ。」

ギグナス・ウイングはそう言うのと塔の電波世界に入った

諒「急いであいつを止めるぞ！！俺が扉を開けるからツカサはみんなに酸素がなくならないように外から酸素ポンベを渡してくれ！！

それ以外の奴は俺と一緒にあいつの元へ迎う！！行くぞ！！」

全員「了解！！」

俺はフォルテに頼み入り口のロックを強制解除させた

そしてツカサは酸素ポンベをみんなに渡しに行った

俺達は人に見つかりにくそうな場所へ行き

全員「電波変換！」

諒「新井諒、オン・エア」

なのは「高町なのは、オン・エア」

フェイト「フェイト・新井、オン・エア」

ティアナ「新井ティアナ、オン・エア」

スバル「星河スバル、オン・エア」

電波変換した

そしてウェーブロードに乗ると雑魚ウイルスが大量にいた

なのは「諒くん！！スバルくん！！今回も私達に任せて！！」

諒「わかった！！行くぞスバル！！」

俺達は全力でウェーブロードを走った

ウイルス達が俺達に攻撃してくるがなのは達が俺達に来た攻撃を防いでくれた

そして俺達は塔の電波世界にウエーブインした

諒「き、気持ち悪りー」

スバル「ど、同感だよ。」

俺達が最初に見たのは白鳥の泉を踊ってるギグナス・ウイングと大量のジャミンガーだった

そして俺達に気付くと話し掛けてきた

ギグナス・ウイング「む？貴様等一体どうやって・・・成る程、ウオーロツクか。ジャミンガーあの黒いけがわらしい奴を消せ。」

カッチーーン

死刑決定ー！！

ジャミンガー「死ねー！！！！」

諒「邪魔だ・・・ゴミー！！」

攻撃してきた一体のジャミンガーを天鎖斬月で斬った

ギグナス・ウイング「！？ば、バカな！！」

ギグナス・ウイングは驚いている

諒「スバル、こいつは俺が殺るよ。だから適当にジャミンガーを倒せ。反論はないな？」

スバル「ブンブンブンブン（ry）」

俺がスバルに聞くとスバルは何十回も頭を縦に振ってくれた

諒「よろしい。ギグナス・ウイング俺とO・H A・N A・S H I L
ないか？」

ギグナス・ウイング「お話だと？ふざけるのM「ザシュツ！！」ぎ
やあああああああああ！！！！」

俺は話してる途中のギグナス・ウイングの右の翼を切り落とした

諒「おいおい、そんな酷い悲鳴出していいのか？」

ザシュツ!!

俺は左の翼も切り落とした

ギグナス・ウイング

ッ!!!

この世の言葉ではない悲鳴でギグナス・ウイングは叫んだ

諒「スバル、今すぐこの電波世界からウェーブアウトしろ。じゃな
いと死ぬぞ。」

ジャミンガー達と戦っていたスバルは俺の言葉を聞くと一瞬にして
ウェーブアウトした

ジャミンガー「お前1人で何ができるんだ？」

ジャミンガーの1人が聞いてきた

諒「罰ゲーム。ニコッ」

ジャミンガー達「ふざけんなー!!」

俺がそう言うのとジャミンガー達は突っ込んできた

突っ込んできたら負けなの知ってたのか？

諒「ふうー……. 冗解・千本桜景敵!!!!!!」

ジャミンガー達「ぎゃあああああああ…….」

俺は冗解・千本桜景敵でジャミンガーを消した

ギグナス・ウイング「ば、ばかな…….」

壮絶な痛みで苦しんでいたギグナス・ウイングもようやく状況が読
めたらしい

諒「さて……. 後悔しながら死ね」

俺はそう言いながらギグナスを消した

そしてその場には宇田海さんだけ残った

諒「さーて、まだこんなもんじゃ俺のイライラは消えねーぞ ウイ
ルス達待ってるよー」

宇田海さんを担いでウェーブアウトした

第39話 VSギグナス・ウイング(後書き)

最近諒のキャラが壊れる話が増えたような気がする作者の松上です
すずか「最近松上君が構ってくれなくて淋しい後書き限定キャラの
すずかです。」

暁「今回諒が何故か来れなかった(、、、、、、、、、、)ので急遽
参加した暁だ。」
まずは!!

3人「武御雷さんありがとうございました!!」
ごめんなすずか

最近構ってやれなくて……

すずか「松上君は忙しいんだもの。しょうがないよ……」
すずか!!

すずか「ん!?!?!?!?!?!」
ん

暁「ヒュー。大胆だな松上!!」

……ぷはあ

すずか俺ができるのはこれくらいしかできないから許してくれるか?
すずか「う、うん。(松上君にキスされちゃったよ!?!?!?!?!?)
/ /)」

暁「それで次回はどんな話をするんだ?リア充」

リア充じゃない!!

……次回も諒が壊れる話をする

すずか!!頼むな!!

すずか「は、はい!!」

次回 諒の壊れ方は異常だ」

それじゃあ暁「次回も」

3人「お楽しみに!!」

第40話 諒の壊れ方は異常だ(前書き)

諒がー！！諒がー！！大変なことになってるよー！！

今回名言を教えてくれたのはWindさんです！！

TOLで

『難しいからこそ……人は人に対し、手を差し延べるんじゃないか？』

Byセネル・クーリッジ

『神様がつくった都合のいい夢を見て、現実から目を背けて、それがお前の欲しかった幸せかよ！？』

Byロニ・デユナミス

『リッド……大切な人を守れ。極光術は……そのためにあるんだ。』
Byレイス

『許す事……許されなくても償う心を忘れない事……それは……強さです。』

Byプレセア・コンバティール

セネルの名言とか使いやすそうだ……

ありがとうございました！！

第40話 諒の壊れ方は異常だ

sideスバル

諒君に言われてウェーブアウトし、なのはちゃん達の所に向かって
いる

ウォーロック「スバル！何でウェーブアウトしたんだよ!？」

スバル「君はあの笑顔を見てわからなかったの!？あの諒君が壊れて
化け物になったんだよ!!あそこにいたら絶対僕らも死ぬよ!!」

僕はウォーロックに言った

諒「誰が化け物だって？スバル」

ゾッ!!

寒気が僕の体を包み込んだ

諒「なあ、こっち向けよ。スバル」

ガチガチガチガチガチガチ

僕は震えながら諒君の方を見た

諒「誰が化け物だって？人を化け物扱いする奴とはO・H A・N A・

S H I しないとな」

スバル「た、助けてええええええ!!!」

そして部屋に連れていかれ僕はそこから意識を失った

sideはやて

諒君達が行ってまだ10分やのにもう疲れてきた

毎日諒君と特訓してるウチ・・・否、ウチ等でもスタミナが切れ
てきた

相手は雑魚ウイルスやけどその数が半端じゃない

前の戦いみたいに四聖獣の必殺技を使えばええんやけど、ここは

室内、野外と違って広さも違う
やから無闇に必殺技を撃たれへん
なのはちゃん達もわかってるから、得意技でウイルスを倒してる
誰かこのウイルス達を消してーな！！
諒「おおー、まだこんなにいるよ」
声がした方を見たら宇田海さんとスバル君を担いでる諒君がおった
しかも満点の笑顔で・・・

side 諒

スバルとO・HA・NA・SHIしたあとスバルも担いでなのは達の
所に向かいました

さしたら大量のウイルスが沢山いました

諒「おおー、まだこんなにいるよ」

僕がそう言うとなのは達は愚かウイルス達も僕を見てきました

注目料をあとで取らないとね！

そして僕は宇田海さんとスバルを寝かせ影分身を7体作りました

諒「なのは フェイト はやて ティアナ 今すぐそこ退かないと

死んじゃうよ」

僕がそう言うとなのは達は一瞬で僕の所まで来ました

そして8方位に僕達は分かれ大玉螺旋丸を作りイナズマイレブンの

必殺技を使いました

諒A「爆熱ストームG5」

諒B「ウルフレジエンドG5」

諒C「ゴッドブレイクG5」

諒「流星ブレードV3」

諒D「アトミックフレアV3」

諒E「ノーザンインパクトV3」

諒F「真へブンドライブ」

諒G「真ダークマター」

ウイルス達「

ッ!!!!!!」

ウイルス達は人間では解読できない悲鳴をあげて消えました
終わり

side 三人称

諒がウイルス達を消した時のなのは達の会話では

なのは「今日見た諒くんは忘れよう・・・」

フェイト「あと絶対諒を怒らせたらいけないね・・・」

はやて「キャラが違う諒君も格好ええねんけどな・・・」

ティアナ「でも命懸けで見るもんじゃないよね？」

なのは・フェイト・はやて「うんうん。」

諒「僕は正義だ!!! 誰もが理想とする新世界の神となる男だ!!! フ

ハハハハハハ!!!」

なのは「・・・今日は展望台の練習止めとこうね。」

フェイト・はやて・ティアナ「うん・・・」

そのあと諒は10分前後壊れたそうだ

第40話 諒の壊れ方は異常だ（後書き）

今回も諒が壊れたのを面白く思っている作者の松上です

「前回は松上君にキスされて凄く幸せな後書き専用キャラのすずかです!!」

アフロデイ「みなさん覚えてくれてるかな？諒を流星の世界へ送った神のアフロデイです。今回も何故か（、、）諒が来れない状況なので代わりに来ました。」

「まずは!!」

3人「Windさんありがとうございました!!」

今回の諒の壊れ方は想像以上に面白かった!!

アフロデイ「また諒のキャラを壊すの?」

「勿論さ!!」

何かと諒が壊れたら面白いと感想が来てるしな

アフロデイ「そうなんだ・・・そういえばもうすぐで60話投稿だね!!」

「ああ!!」

だから60話はツカサと諒の出会い編を書くぜ!!

それよりすずか!!

頼むぜ!!

「すずか「はい!!」

次回 戦いの後もやっぱり歌うんだ」

それじゃあ

アフロデイ「次回も」

3人「お楽しみにー!!」

第41話 戦いの後もやっぱり歌うんだ(前書き)

今回はあまり面白くありませんが御了承ください

今回名言を教えてくださいましたのは遊戯王さんです!!

名探偵コナンで

『勇気って言葉は身を奮い立たせる正義の言葉……。人を殺す理由なんかに使っちゃダメですよ……。』

B Y毛利蘭

『わけなんているのかよ？人が人を殺す動機なんて知ったこっちゃねーが人が人を助ける理由に論理的な思考は存在しねーだろ？』

『死ぬときは一緒だぜ』

B Y工藤新一

『それが大切な思い出なら忘れちゃダメです……。人は死んだら、人の思い出の中でしか生きられないんですから……。』

B Y高木刑事

ありがとうございます!!

第41話 戦いの後もやっぱり歌うんだ

side 諒

みんな久しぶりだな！！

えっ？何が久しぶりかって？

前々回の後半、前回の記憶がないからみんなに会うのは久しぶりだなっと思っよ

まあ、メタ発言はこれくらいにしてあの後どうなったか説明するぜ！俺の意識が覚醒して周りを見たらウイルスの残骸でウェーブロードがうめつくされていた

それで、少し記憶がなかったからなのは達に聞いたら「何もなかったよ！！」と言われた

まあ、みんなが何も無いって言ってるから何もなかったんだろう

そしたら気絶していたスバルがいた

なのでスバルを起こしたらめっちゃ恐がられた

これには俺のガラスのハートが粉々にされて部屋の隅で三角座りしたスバルはなのは達の必殺技をくらいまた気絶した

“ここは室内だから必殺技を使うなよ”と思っただが口には出さなかった

そしてウェーブアウトしてツカサ達の所へ行ったらみんな洗脳が解けたみたいだった

そして宇田海さんが目を覚ましたので話し掛けたら謝られた

記憶がないがたぶんスバルがギグナス・ウイングを倒したのだろう
宇田海さん曰く疑似宇宙室のコントロール室に入った瞬間何ものかに体に乗っ取られたらしい

ゴン太の時もそうだったが、原作のシナリオと違いこの世界のFM星人は無理矢理電波変換できるようだ

その事件があつて天地さんと宇田海さんに力の事もばれてしまった
しかし2人は俺達に怯える事はせず感謝してくれた

そして2人とブラザーバンドを契約した

なので記念に1曲歌うと言ったら大喜びしてくれた

まあ、俺は歌わないつもりだったけど宇太海さんがどうしてもbrave heartを歌ってほしいといってきたので仕方なく歌うことにした

またライブをすると聞き付けた俺達のファンがライブ会場に集まっていた

なので俺は真剣に歌った

そしたらアンコールされたので残酷な天使のテーゼを歌った

そして歌い終わってアマケンから帰る時天地さんたちが「僕らにできることがあれば何でも言ってくれ!!」と言われたので素直にお礼を言っただけで帰った

展望台に行こうとしたらフェイトが「きよ、今日ので自信がついたから大丈夫だよ!？」と言ってきたので渋谷家に帰った

これがあとの起こった事だ

諒「(強制的に電波変換ができるから気を付けないな!)」
そう思いながら晩ご飯を作った

第41話 戦いの後もやっぱり歌うんだ(後書き)

無事諒が復活したことに少し悔しがってる作者の松上です

諒「作者にストレスをためてる主人公の諒だ。」

すずか「60話更新が近付きドキドキしている後書き限定キャラのすずかです!!」

ますは!!

3人「遊戯王さんありがとございました!!」
しかしもう直ぐで60話更新かー

諒「まだ2週間ちよいしか経ってないもんな。」

まあな。

たぶん・・・否、確実に200話越えると思う。

すずか「越えるね。」

諒「まあ、長い目で見てやってくれ。」

お願いします!!

それじゃあすずか!!

頼むぜ!!

すずか「はい!!」

次回 本当久しぶりのWAXA

それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみにー!!」

第42話 本当久しぶりのWAXA（前書き）

今回は言うことなし！！

今回名言を教えてくださいましたのは武御雷さんです！！

スクライドで

『お前に足りないのはツ！情熱思想理想考気品優雅さ勤勉さ！そして何よりー速さが足りない！』

Byストレイト・クーガー

『俺はどこにも行かない。ここで、この大地で、俺は理想を追い求める』

By劉鳳

『その平等ってヤツ、そいつが気に入らねえ……。俺たちはみな違っているのが当たり前だろ』

『死ぬのが怖いわけじゃない。何もせずに死ぬのが怖い。なんの証も立てないまま、朽ち果てるのは……それだけは死んでもゴメンだ』！

Byカズマ

『私は何も知らないで安穩と暮らすより、真実を知って傷つく方を選びたい。そのために私はここに来たと気づいたのです。』

『かあ、真面目に仕事しすぎだつて。たく、アルター能力もないくせに一体何やってなんだろうな俺はよ！けどよ、俺はあいつと出会っちまったんだよなあ、ああ、出会っちまった。だったら、やるしかねえだろうが。それになあ、こんなチンケな俺にも、すぐに諦

めちまう俺にもくすぶってるものがあるのさ…意地があんだろ、男の子にはあ…!』

B Y君島那彦

ありがとうございます…!!

第42話 本当久しぶりのWAXA

side 諒

アマケンの事件から3日が経った

俺達はWAXAに来ている

何故なら暁に呼び出しされたからだ

暁「よ！久しぶりだな！！」

暁が話し掛けてきた

諒「何なんだよ一体。授業中に緊急呼び出ししやがって。」

暁「悪い悪い。でもお前等は授業に出なくてもわかるだろ。」

まあ、そうだけだよ

諒「それで2年ぶりに呼び出して一体何の話をするんだよ？」

暁「ああ、それは司令室で話す。この話は極秘だからな。」

暁は真剣な顔をして言ってきたので俺達も真剣な顔をした

暁「俺についてきてくれ。」

俺達は暁についていった

長官「久しぶりだなみんな。」

全員「お久しぶりです！！」

長官が挨拶をしてきたので挨拶した

長官「みんなは既に知っていると思うが地球にFM星人が来て攻めてきた。」

諒「わかってる。既に2回戦った。」

暁「やはりそうか。奴らが来たことよって電波ウイルスが急激に増えた。我々はそのウイルスなら倒せるが奴らは電波世界に入れる。我々はデジヒュージョンしか出来ないため奴らを倒すことが出来ない

い。だからもう一度我々に力を貸してくれないだろうか？」

今回からはWAXAの力がないとイレギュラーに対して対処ができない

諒「2年前の条件覚えてます？あの条件さえ守ってくれれば俺達は力を貸しますよ。なあみんな！！」

全員「うん！！！」

俺が聞くとみんなは賛成してくれた

長官「ありがとう。ならばここに宣言する！！闇の帝王対策部隊を改めFM星人対策部隊を結成する！！」

全員「了解！！！」

俺は新しい仲間を手に入れた

第42話 本当久しぶりのWAXA（後書き）

最初に！！

3人「武御雷さんありがとうございました！！」

いつもと違うやり方をしたので少々緊張している作者の松上です

諒「なら何故した！！と突っ込みたい主人公の諒だ。」

すずか「今回は言うことがなくて困っている後書き限定キャラのすずかです！！」

しかしあと少しで60話か・・・

諒「まあ、今回はあまり話すことがないな。」

まあな、それじゃあさっさとしますか！！

すずか！頼むな！

すずか「はい！！」

次回 敵は暁？」

それじゃあ

諒「次回も」

3人「お楽しみにー！！」

第43話 敵は暁？（前書き）

今回は短い！！

だが後悔はしていない！！

すいません調子に乗りましたort

話は変わりますが今回名言を教えてくださいましたのはジエスター「アーカムさんです！！」

指輪物語で

『フロドよ、自分の家の玄関を出て行くということは、危険な仕事なんだよ。道に足を踏み入れたら最後、倒れないようにちゃんと立つてなければ、どこに流されて行くかわかったもんじゃない』

Byビルボ

人間しつかりと立たないといけませんね・・・

今回も名言を教えてくださいありがとうございました！！

第43話 敵は暁？

side 諒

俺は今暁と向かい合わせで立っている

暁「まさかお前が俺の相手をしてくれるとはな。」

諒「しょうがないだろ、ヨイリー博士の頼みなんだから。」

話が急すぎたから説明するぜ

みんなで団結した

用事が済んだので帰ろうとした

ヨイリー博士に止められる

暁と戦ってほしいと頼まれる

ヨイリー博士の頼みなので渋々了承する

特訓ルームに移動する

暁と向かい合っている 今ここ

暁「さて、始めようか。」

諒「さっさと終わらせるか。」

そう言うのと暁は赤のデジヴァイスを出した

暁「デジヒュージョン！！暁×セラフィモン！！」

暁の姿が変わりセラフィモンの姿をしていた

諒「ホーリーエンジエモンじゃないのかよ・・・」

暁「あれから2年間特訓し強くなった！！今の俺はあの頃の俺と違うぞー！！」

確かに普通に戦えば負けるな

諒「なら俺も少し本気にならないとな！」

そう言うとフォルテから黒い固まりを10出して握り潰した

暁「何をしたんだ？・・・！？な、なんだ・・・体が急に重く・・・

」

諒「さて準備は整った。電波変換！新井諒、オン・エア」

俺は電波変換した

フォルテ「250%越えた。十分いけるぞ！」

ならやりますか！！

諒「ファイナライズ！！・・・ブラックエース！！」

俺はファイナライズをした

そしてブラックエースになった

暁「な、何故姿が？」

諒「俺が潰したのはノイズの欠けらっつていうノイズが物質化したもの。それによりこの部屋にはノイズが溜まった。ノイズは本来なら体に悪いものだが俺はあるプログラムを持っているのでノイズをコントロールできる。」

さて、初めてのブラックエースで戦うからテスト台になってもらおうぜ！！

暁「くっ、だが俺もこのまま何もせずには負けたくない！！いくぞ！

」

諒「こい！！」

俺と暁の戦い（？）が切つて落とされた

第43話 敵は暁？（後書き）

遂に次回60話更新で喜んでる作者の松上です!!

諒「60話更新で今までのことを思い出している主人公の諒だ。」

すずか「今まで応援してくれた皆さんに感謝している後書き限定キヤラのすずかです!!」

ますは!!

3人「ジエスター!!アーカムさんありがとうございました!!」

しかし遂に60話かー

諒「早かったな・・・」

すずか「まだ一カ月も経ってないからね!」

そうだよなーまだ一カ月も経ってないんだよな

諒「記念すべき60話はどんな話をするんだ?」

ツカサとお前の話をしようと思う

諒「俺とツカサが会った頃の話か?」

ああ、俺的にはやりたかったんだがやるなら何かの記念でやりたかったからさ

諒「ふーん。」

そういうこつた!

それじゃあすずか!!

いつもの頼むな!!

すずか「はい!!」

次回 60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶

それじゃ

諒「次回も」

3人「お楽しみにー!!」

60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶（前書き）

今回は60話投稿記念なので1話に纏めたかったですけど記念に仕上がったのでわけました

期待した方すいませんでした!!ort

それから明日でアンケートが終了しますのでまだ投票してない方は投票しておいてください

記念なので名言の紹介はお休みします

すいませんでした!!

60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶

sideツカサ

みなさん久しぶりです

双葉ツカサです

今日は僕にとって大切な思い出を話させてもらいます
僕と諒君がブラザーになった日の事を・・・

数カ月前

今日から5年生か・・・

ツカサ「楽しいのかな？」

ヒカル「ツカサ！学校なんかに行っていないで早くあいつらを探そうぜ！！」

僕は二重人格だ

何故なら僕は小さい頃親に捨てられその憎しみで僕のもう1人の人格、双葉ヒカルが生まれた

ツカサ「ダメだよ。僕みたいな子供が朝早くからうろつろついていたら怪しまれるよ。だからあの人達を探すのは学校が終わってだよ。」

ヒカル「・・・わかったよ。」

僕がそう言っているとヒカルは渋々了承してくれた
さて

ツカサ「学校に行くか。」

僕は学校に向かった

教室に入ると凄く騒がしかった

ツカサ「一体どうしたの？」

僕は近くにいた男子生徒に聞いた

男子「お前知らないのか？このクラスに人気アイドルグループ“ヒカリ”のメンバー全員がいるんだぜ！！」

“ヒカリ”つか・・・

ツカサ「ありがとう。」

僕はお礼を言つて席に着いた

それから少ししてから教室がさっきの2倍以上の騒がしさになった

？「あー、腹減った！」

????「さつき朝ご飯を食べたばかりだよ、諒くん。」

????「5年生になって最初に言った言葉が『あー、腹減った！』

つて・・・」

????「諒君らしいで。」

????「今日はそんなに長く学校にいないから家に帰ったらご飯が食べれるよ！」

1人の男子と4人の女子の声が聞こえた

ツカサ「（あれが“ヒカリ”つか・・・あんまり僕達と変わらないね）」

ヒカル『俺達には関係ないがな』

ツカサ「（そうだね・・・）」

ヒカルと心の中で会話したら男子が声を掛けてきた

？「俺は新井諒！お前は双葉ツカサだよな？」

男子・・・新井君が自己紹介をしてきた

ツカサ「うん、そうだよ。」

諒「よろしくな！早速で悪いんだが屋上に来てくれないか？」

本当に突然だね・・・

ツカサ「まあ・・・いいけど。」

諒「じゃあ行こう！！今すぐ行こう！！」

僕が返事すると新井君が僕の右手を掴んで走り出した

60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶（後書き）

今回は予告だけ

次回 60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶

次回もお楽しみに！！

60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶（前書き）

記念なのにうまく書けなかった
本当にすいません！！

今回も名言はお休みです

今日がキャラ投票最終日なのでまだ投票していない人は投票してください！！

60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶

sideツカサ

新井君に屋上に連れてこられ僕達は向かいあつて座っている

諒「悪いな、急に連れてきて。」

ツカサ「いいよ別に。それよりここに来て一体何の用？」

連れてこられたことにはあまり怒ってないがここまで来て何の話を
するのか気になってしょうがない

諒「ああ、あまり人に聞かれたくない話だからな。それじゃあ話す
ぜ。……………」

復讐は止める。」

！？何故彼がそのことを知っているんだ！？

僕は全くわからなかった

今日初めて会ったのに僕の事を知ってるなんて……

ヒカル「ツカサ！！俺に代われ！！俺がこいつをやる！！」

ツカサ「（ダメだ！理由を聞かない限り僕達の敵なのかわからない

！！だからもう少しだけ待ってくれ！！）」

ヒカル「わかったよ……」

僕はヒカルを説得し新井君に話し掛けた

ツカサ「何で新井君はそのことを知ってるんだい？」

僕は出来る限り笑顔で話した

諒「俺は何でも知ってる。お前が親に捨てられたのも。親に対する
憎しみでお前のもう一人の人格、双葉ヒカルが生まれたのも。そし
て今お前等は親に復讐しようとしてること。」

知りすぎている

だが！！

ツカサ「僕達は復讐を止めない！！僕達は必ず親に復讐するんだ！
！」

僕はそう叫ぶと走ってエレベーターに乗った

ヒカル『ツカサ！あいつ言う事なんかきにするな！！』

ツカサ「（当たり前だよ！）」

僕達はそう決めた

しかし新井君はそのあと話し掛けてこなかったので諦めたと思った
が彼はしつこかった

登校中

諒「おーいツカサ！！復讐なんか止めるよ！！」

休み時間

諒「ツカサ、復讐なんか止めて俺と遊ぼうぜ！！」

昼休み

諒「ツカサ！俺と一緒に『復讐したってしょうがない』会議を開こうぜ！！」

下校中

諒「ツカサ！復讐なんかしたって残るのは虚しさだけだぞ！！それじゃあ明日！！」

しつこい・・・

ヒカル『ツカサ！俺があいつに言ってやる！！いくら言ったって俺達は復讐を止めないってな！！』

ツカサ「（いや、まず何でそこまで僕達に復讐を止めさせたがるのか聞いてからだ。）」

ヒカル『お前は甘ちゃんだな！！』

僕はヒカルにそう言うのと新井君の席に行った

諒「ん、どうしたツカサ？遂に復讐を止める気になったか？」

ツカサ「・・・少し話がある。僕と一緒に屋上に来てくれるかい？」

僕がそう言うのと新井君は黙って頷き僕の後ろについてきた

諒「それで、話つてのはなんだ？」

ツカサ「何でそこまで僕達に復讐を止めさせたいのさ！僕と新井君は何の関係もないのにどうしてそこまで僕達に関わるんだ！？」

僕は新井君に叫んだ

僕達と新井君は何の関係もないただのクラスメート

なのにどうして僕達に関わるのかわからなかった

諒「何も関係がない？俺はお前の友達だから止めようとしてるんだよ。」

友・・・達・・・だつて

ツカサ「ふざけないでよ！！いつ僕と新井君が友達になつたの！！」
まったく意味がわからないよ

僕達は一体いつ友達になつたんだ・・・

諒「ある人が言った。『名前を呼び会えば友達』と言った。現に俺はツカサ、お前は新井君つて言ってるだろう？だから俺とお前は友達だ！！」

な、なんて自分勝手な

諒「それにさ、復讐なんかしたつて一体何が残るんだ？何も残らないだろ。だからその辛さや憎しみを違う感情にすればいい。」

違う・・・感情？

諒「嬉しいや楽しい、幸せ・・・挙げればキリがない。お前が嬉しくなりたいなら！お前が楽しくなりたいなら！お前が幸せになりたいなら俺はお前に協力する！！それが友達だ！！」

嬉しい・・・

ここまで僕の事を思ってくれる人がいるなんて

僕は何で気付かなかつたんだ？

悔しい・・・

そう思っていると新井君がハンカチを渡してきた

諒「泣きたいなら泣いとけ。泣いても俺は笑わない。だから泣いとけ。」

僕はハンカチを受け取ると声を殺して泣いた
諒「よく頑張ったな・・・」

あれから5分経ち授業がもう既に始まっていた
だが別にどうだっていい

僕は最高の友達を見つけたから

ヒカル『ふん、親に復讐することのために生まれた俺は復讐しかしねえ！お前の体に乗っ取ってでも俺は復讐する！』

ツカサ「（確かに復讐するために生まれた君はその感情しかないと思う。だけど、いつか君と分かり合える日が来るまで僕は君を説得する！）」

ヒカル『精々頑張るんだな！はっはっはっはっはっは！』
いつか来るさ

君と分かり合える日が・・・

現在

ツカサ「しかしこうして思い出してみると諒君のお陰で今の僕達がいるんだね。」

ヒカル『そうだな。あいつのしつこさは異常だがそのせいで俺はお前と共存することを決めただんだな。』

ツカサ「うん、僕達にとって忘れられない大切な記憶だね。」

ヒカル『俺達と諒の大切な記憶さ。』

ツカサ「そうだね・・・」

ありがとうね諒君

僕達が今こうして生きられるのも君のお陰だよ

だからまたいつか言わせてほしい

“僕達を救ってくれてありがとう”って・・・

60話投稿記念 僕と彼の大切な記憶（後書き）

今回は次回予告だけ！！

次回はキャラ投票の結果発表ですので楽しみにしておいてください！！

結果発表だー！ー！！！！（前書き）

今回はキャラ投票の結果発表です！！

参加してくれた皆様、ありがとうございました！！

今回から名言コーナーを再開します！！
今回名言を教えてくださいましたのはケイさんです！！

TOHで

『この輝きがある限りどんな絶望からも立ち上がれるさ！！』
By シング・メテオライト

TOLで

『間違えたり逃げたりするのは、誰にだってあることだ。苦しみに
ひとりで立ち向かうのは、凄くきついことだからな。
だけど、苦しいからこそ、辛いからこそ、俺達は繋がっていけるん
だと思う。一人で解決する強さを人は持ち合わせてないからな。』
By セネル・クーリジ
・・・使える

ありがとうございました！！

結果発表だ――！！！！

松上「第一回キャラ投票結果発表！！！！」

全員「イエーイー！！」

松上「司会を務めさせてもらうのはこの小説の作者、松上と！！！！」

すずか「後書き限定キャラのすずかですらやらせてもらいます！！！！」

全員「パチパチパチ（ry）」

松上「しかし、第一回目なのに投票してくれた人が沢山いて、集計するのに大変だったな……」

すずか「だけどそれだけ読んでくれる人がいるって事だよね！！」

松上「そうだな、それじゃあみんな！結果発表の前に！！！！」

全員「投票してくれた皆様、そしてこの小説を読んでくれる皆様！ありがとうございます！！！！」

松上「お礼も言ったことだし、そろそろ結果発表をするぜ！！！！」

全員「おおー！！！！」

すずか「まずは第四位！！投票数は一票です！！！！」

全員「……」

松上「(全員急に静かになって恐ろしいぞ)・・・第四位はなんと五人いる!!」

スバル「ご、五人つて・・・」

諒「しかし、それだけ違う奴を選ぶなんて凄いな・・・」

すずか「発表します!!まず一人目は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・高町なのはちゃん!!」

なのは「やったー!!投票してくれた人ありがとうなの!!」

諒「・・・・・・・・なのは、喋り方が幼稚化してるぞ。」

なのは「えっ?いいの別に!!本当にありがとうなの!!」

すずか「それでは二人目を発表します!!二人目は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・フェイト・新井ちゃん!!」

フェイト「えっ!?!投票してくれた人ありがとうございました!!」

諒「おめでとうな、フェイト!!」

フェイト「ありがとう、諒!!」

すずか「次に三人目を発表します!!三人目は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・八神はやてちゃん!!」

はやて「嘘やろ!?!嬉しいわ!!投票してくれた人ありがとうな!

「！」

諒「おめでとうな、はやて！」

はやて「ありがとうな、諒君！」

すずか「続いて四人目を発表します！！四人目は……………
……………星河スバル君！！」

スバル「ぼ、僕！？」

諒「良かったじゃねーか、スバル！！」

スバル「う、うん。投票してくれた人ありがとうございました！！」

すずか「最後の一人を発表します！！最後は……………
……………フォルテです！！」

諒「ふ、フォルテ！？意外な奴だな……………」

フォルテ「俺だって驚いてるよ……………まあ、投票してくれて、その、
ありがとな。」

全員「（フォルテがお礼を言ってる……………」

フォルテ「……………今お前等、変なこと考えただろ？」

松上「（まずい、話題を代えないと！！）次は第三位だ！！」

フォルテ「話を代えやがったな……………」

暁「な、なら第一位だ!!ここが俺の順位なんだ!!」

松上「暁……黙れ(ニコツ)」

暁「は、はい……」

諒「(暁、今のはお前が悪い。)」

すずか「発表します!!第一回キャラ投票一位に輝いたのは!!……
……
……新井諒君です!!おめでとう!!」

諒「お、俺か……投票してくれてありがとうな、みんな!!」

暁「俺じゃなかったよー!!」

松上「投票数は四票。さすが主人公だな!!あと暁うるさい。黙らないと出番減らすぞ?」

暁「……」

諒「ありがとな!!しかしPV60000越え及びユニーク60000越え記念なのにまた越えたんだろ?」

松上「ああ!!なんとPV80000越え及びユニーク80000越えしたんだ!!」

全員「す、凄い!!」

松上「だろ?皆さん、自分が投票したキャラは何位でしたか?また

必ずしますのでその時も参加してください……それじゃあ監ちゃん！
」

全員「ありがとうございました……！」

結果発表だー！ー！！！！（後書き）

今回も次回予告だけ！！

次回 これは一般的に苛めっていうんだ

次回もお楽しみに！！

第44話 これは一般的に苛めっというんだ(前書き)

久々の本編だが・・・諒がまた壊れます

最近諒が壊れまくってる・・・なんとかしないと

今回名言を教えてくださいましたのは武御雷さんです！

ドラゴンクエストダイの大冒険一で

「…………おれが…本当にくじけそうな時…本当にあきらめてしま
いそうな時…………いつも最後のひと押しをしてくれた奴…俺を立ち上
がらせてくれた奴…最高の友達…ホップ…！！君に出会えて…良かっ
た…！！！」

Byダイ

「あんたらみてえな雲の上の連中に比べたらおれたち人間の一生な
んでどのみち一瞬だろう！！？だからこそ結果が見えてたつてもい
き抜いてやる！！！一生懸命に生き抜いてやる！！！残りの人生が
50年だつて5分だつて 同じ事だつ！！！一瞬…………！！！だけど…閃
光のように…………！！！まぶしく燃えて生き抜いてやる！！！それがお
れたち人間の生き方だつ！！！よつく目に刻んどけよッ！！！この
バツカヤローッ！！！！！」

「…………とりあえずゆっくり泣いていいぜ…………つき合つてやるよ月夜
の散歩もたまにやいいもんだ…………」

Byホップ

「…………いいなあ 普段はいがみあつていても心の中では何か強いもの
で結ばれている…家族というやつはいいもんだ…………」

Byクロコダイ

『己の立場を可愛がっている男に真の勝利などないっ！！！』

B y ハドラー

『…傷つき迷える者たちへ…』

敗北とは傷つき倒れることではありません。そうした時に自分を見失った時のことを言うのです。強く心を持ちなさい。あせらずにもう一度じっくりと自分の使命と力量を考えなおしてみなさい。自分にできることはいくつもない。一人一人が持てる最前の力を尽くす時たとえ状況が絶望の淵でも必ずや勝利への光明が見えるでしょう。

…！』

B y アバン

ありがとうございます！！！！

第44話 これは一般的に苛めっていうんだ

side三人称

諒はブラックエースになって暁の特訓相手（ブラックエース実験相手）として戦っている

諒「おいおい、この程度かよ？メテオライトパレッジ！！」

諒が質問するが答える暇を与えず、両手にエネルギーを溜め幾つもの流星群のように暁に放った

暁「くっ、ヘブンスゲート！！」

暁はホーリーエンジエモンの必殺技『ヘブンスゲート』を使いメテオライトパレッジを防いだ

諒「やる！じゃあ次はこれだ！！アトミックブレイザー！！」

諒は素直に暁を誉め、右手に力を溜め炎を光線のように放った

暁「少しは手加減をしろ！！ヘブンスナックル！！」

暁は諒に文句を言いエンジエモンの必殺技である『ヘブンスナックル』をアトミックブレイザーに放った

しかし『ヘブンスナックル』は闇に対して絶大な力を発揮するが、それ以外はあまり力を発揮しない

なのでアトミックブレイザーは威力が少し下がったくらいだった

暁「威力が下がる！スピードも落ちる！！この程度のスピードなら俺でも避けれる！！」

暁は『ヘブンスナックル』を使ったのは、アトミックブレイザーと相殺させるためじゃなく、あくまで自分が避けれるスピードに落とすためだった

諒「少しは見なおしたぜ！！ならこれならどうだ？エレメンタルサイクロン！！」

諒はそう暁に言つとその場で高速回転し木の葉の竜巻を作り、暁に向かつていった

暁「お前、俺を苛めてるよな？絶対苛めてるよな！！」

暁は叫ぶ、が諒は暁の言葉を気にすることなくエレメンタルサイクロンを暁にぶつけた

暁「絶対土下座させたる！！セブンスへブンス！！」

暁は遂に切れ、エレメンタルサイクロンの中でセブンスへブンスを放ち竜巻から出た

しかし

諒「お疲れ様ー。ダイナミックウエーブ！！」

諒は暁が出てきた瞬間『お疲れ様ー』の一言を言い、大きな波を3つ『ダイナミックウエーブ』を放った

暁「！？ぐわああああ！！！！」

暁は当然避けられなく、ダイナミックウエーブをくらった

諒「まだまだ終わってねえ！！サンダーボルトブレイザー！！！！」

諒はイナズマケンを出し、暁に右に斬り、左に斬り、最後は上から雷を落とした

暁「・・・グハツ・・・」

暁は体が濡れてる状態で雷の技を食らったのでダメージは2倍

しかもそれぞれの必殺技は威力が十分あるのでそれをくらって立っているものは誰一人いない

なので

暁「・・・まいっ・・・た」

そう言い倒れた

諒「な、何で倒れるんだよ！！これからだぞ！！・・・！？ちょうかーん、俺と特訓しませんか？拒否権はないですけど・・・」

諒は暁が倒れると悔しがつたが、直ぐに獲物を見つけた

暁はサテラポリス局員により緊急治療室に運ばれた

長官は逃げるところもないのでみんなに遺言らしき言葉を言った

長官「みんな、今まで楽しかった。ありがとう。それじゃあ、逝ってくる！」

そう言うのとデジヒュージョンし、諒の所に向かった

諒「それじゃあ、第2ラウンドスタート！！ブラックエンドギヤラ

クシー!!」

諒はそう言つと右手を上にあげ小さな黒い玉を出し、長官に投げたその小さな黒い玉は長官に当たると大きくなり何でも吸い込むもの、まるで小さなブラックホールが現れ、諒はそのブラックホールを斬った

それにより、小さなブラックホールは爆発した

長官「ぐわあああああああああ……」

長官は悲鳴をあげ気絶した

諒「一撃でダウン？本当に特訓してたの？まあいいや!! 次の相手は……」

この発言を聞いた人はみんなこう思った

全員「(WAXAの最強の悪魔が誕生した……)」と

諒「じゃあ、次はあんたな!!」

同員「ひっ!!」

諒はそのあと遊びまくったようだ(笑)

第44話 これは一般的に苛めっというんだ(後書き)

久々の本編で少々疲れている作者の松上です

諒「今回は納得のいく話で良かったと思っっている主人公の諒だ！」

すずか「諒君の態度を見て、かなり引いている後書き限定キャラのすずかです。」

まずは！

3人「武御雷さんありがとうございました!!!」

しかし今回は怪我人が続出し、諒が今まで以上にキャラが壊れた話だったな

諒「凄く気持ち良かったぜ!!!またこんな話を作れよ!!!」

(無理だと思うが・・・) まあ・・・考えとく

まあ、今回は早めに切り上げるか!!!

すずか、いつもの頼むぜ!!!

すずか「はい!!!」

次回 脱走者は国民的アイドル!!!」

それじゃあ

諒「次回も!」

3人「お楽しみにー!!!」

第45話 逃走者は国民的アイドル(前書き)

今回からハーブ・ノートの話です

楽しんでもらえたら幸いです！

今回名言を教えてくださいましたのはWindさんです！

TOSで

『ふざけるな！正義なんて言葉、チャラチャラ口にするな！』

Byロイド・アーヴィング

『ごめんね、ロイド。せつかくロイドが私のために泣いてくれるのに…凄く嬉しく泣きたいくらいなのに…私、涙もでない……ごめんね……！』

Byコレット・ブルーネル

『最後に格好悪い所見せたくないんだ…。…行けよ！行けったら』

Byジーニアス・セイジ

『世界を変える前にまず、私が変わらなくては…。』

Byリフィル・セイジ

ありがとうございました！！

第45話 逃走者は国民的アイドル

side 諒

WAXAの騒動から4日が経った

あれ以来、WAXAに行くとか『WAXAの最強の悪魔が来たー!!』
殺されるー!!逃げろー!!』と言われる

まあ、少しやり過ぎたと思ったが後悔はしていない!!

だが『WAXAの最強の悪魔』ってどういつあだ名だよ!!

俺は『管理局の白い悪魔』じゃないぞ!!!!

まあそれは置いて、俺とスバルは展望台に来ている

ヘルプシグナル?ってやつが鳴ったから来てみたんだが誰もいない

スバル「・・・誰もいないね。」

ギグナスの次は確か・・・!?

????「ねえ、君達?」

やっとお出ましか

スバル「君は?」

スバル、少しはテレビを見とけよ

????「ええー!?君、私のこと知らないの?・・・まあ、いいか。私の名前は「響ミソラ」。俺達と同じ歌手だぜ、スバル。」ちよつと!私が言おうとしたのに!!!」

おいおい、俺の顔を忘れたのかよ・・・

諒「おいミソラ、俺の顔を忘れたのかよ?」

俺がそう言つとミソラは俺の顔を真剣に見た

ミソラ「あつ!?諒くん!!!久ぶりー!!!」

諒「・・・お前、俺の事忘れてただろ?」

ミソラ「あ、あははははは・・・」

笑つて誤魔化すなよ、何か悲しいからさ

スバル「それより、何でヘルプシグナルを使ったのさ?」

おつ、スバルが無表情じゃない

まあ、ミソラはなのは達とキャラが似てるからな

ミソラ「・・・マネージャーから逃げてきたの。」

ハーブはどうやって攻めてくるんだ?

そう思いながらミソラの話聞いた

ミソラ「・・・だから私はマネージャーから逃げてきたの。」

いつの間にかミソラの話が終わっていた

スバル「それは酷いね！」

スバルの言う通り酷いよな

マネージャーがお金を求めたらダメだろ

諒「で、どうすんだよ？これから。」

シナリオ通りならアマケンなんだけどさ

ミソラ「それなんだけどさ。ねえ、諒くん？」

ちよっと待て、嫌な予感しかしないぞ……

ミソラ「今日さ、諒くんの家に泊めてくれない？」

やっぱりだー！！

どうすんのこれ？

泊めてもいいが、ハーブとの戦闘フラグが無くなっちまうな

物凄く嫌だが、心を鬼にしないと

諒「ダメだ。俺の所はもう人を止めるスペースなんてない。」

ミソラ「ええー！！……じゃあ君の家に泊めてくれない？」

ミソラ、それは無理だろ

スバル「僕の家も無理かな。でも、」

ミソラ「でも？」

たぶんアマケンだろ

スバル「僕が知ってるT」ミソラー！！」誰？」

あいつ、本当KYだな

ミソラ「私のマネージャーだ！！どうしようっ？」

少し眠ってもらうか・・・

諒「スバル、少し眠らせるからどっかに隠れてる。」

俺がそう言つとスバルは頷き、ミソラと一緒に汽車の後ろに隠れた

マネージャー「ミソラー！！」

ミソラのマネージャーが展望台の階段を上ってきて走って来た

諒「うるさいぞー！！」

俺は右手に千鳥を出した

諒「千鳥ー！！」

俺は千鳥をマネージャーにぶつけた

マネージャー「ぐわあああああああ！！！！」

マネージャーは叫んで気絶した

ミソラ「・・・し、死んじゃったの？」

人を殺したりなんかするか！！

ちゃんと十分の一の強さにした！！

諒「気絶させたただけだ！！死んでなんかいない！？それより、アマケンに行くんだろ！！」

俺がそう言うとスバルは思い出した顔をした

諒「スバル、忘れてただろ！！とりあえず早くバス停に行くぞ！！！」

俺達はバス停に向かった

第45話 逃走者は国民的アイドル（後書き）

最近“とあるシリーズ”を観だした作者の松上です

諒「最近『劇場版 NARUTO 疾風伝 ザ・ロストタワー』を観た主人公の諒だ。」

すずか「最近『ロックマンエグゼ 光と闇のプログラム』を観た後書き限定キャラのすずかです。」

まずは！！

3人「Windさんありがとうございました！！」

今回から少し書き方を変えたぜ！！

諒「まあ、こっちの方が読みやすいだろう。」

すずか「それにしてもやっとハープ・ノートの話だね！」

長い・・・

諒「いいじゃんか、別に・・・」

まあな、ただ俺的にはコラボしてみたい・・・

諒「言ってくれる人が来るまで我慢しろ。」

わかったよ

それじゃあさすが！！いつもの頼むぜ！！

すずか「はい！！

次回 ハープ襲来？」

それじゃあ

諒「次回も！」

3人「お楽しみにー！！」

第46話 ハープ襲来？（前書き）

今回は短い一言につきる！！

すいません、調子に乗りましたort

今回名言を覚えてくれたのは霞さんです！

リトルバスターズで

『おまえのほづが、逆にうなぎパイに食われたというところ。』

BY宮沢 謙悟

ありがとうございました！！

第46話 ハープ襲来？

side 諒

俺はスバルとミソラを連れてアマケンに来た

バスに乗る時、俺とミソラは有名人なので帽子を被ってバスに乗ったが・・・

スバル「天地さん、了解してくれるかな？」

ミソラ「えっ！？ここなら泊まらせてくれるんじゃないの？」

スバル「・・・そういう事はミソラが居ない時に言えよ・・・」

諒「ミソラ、100%泊めてくれるわけ・・・・・・・・あるかもな。」

あの人なら確実に泊めてくれるだろ・・・

ミソラ「ほっ！なら安心だね！！」

スバル「・・・・・・・・確かにあの人なら。」

スバルも思い出したか・・・

俺達は天地さん達の所に向かった

宇田海「もちろん、大歓迎さ!!!」

やっぱり

俺が100%泊めてくれる人とは天地さんの部下、宇田海さんの事だ

天地「諒君の頼みなら断らないが・・・一日だけだからね!」

まあ、今日にハーブが来る予定だったはず

ミソラ「はい、ありがとうございます!!諒君、スバル君、ありがとね!!」

諒「まあな、友達が困ってんだからな、それを助けるのが友達だからな。」

スバル「どういたしまして。」

そのあと、天地さんがブラザーバンドを結ぶよう言ってきたが、ハーブの事があるので断った

そして、スバルはそのまま家に帰った

俺は、アマケンに残りハーブが来るまでベンチに転がって寝た

ドカーーン!!!!

俺が寝てると大きすぎる目覚ましが鳴った

諒「ふぁー……いつの間にかハーブが来たのか？……眠たいからスバルに任せたいが、今までの同じならイレギュラーが出るはず……行きますか！！」

俺はハーブ・ノートとの戦いに参加することを決め、電波変換して戦闘が起こってる場所まで向かった

第46話 ハープ襲来？（後書き）

けいおん！のアニメを一話から観ている作者の松上です

諒「魔法少女リリカルなのはを読み出した主人公の諒だ。」

すずか「デジモンアドベンチャーを観だした後書き限定キャラのすずかです！」

まずは！

3人「霞さんありがとうございます！」

しかし今回は短かった

諒「原作覚えてないよな？」

何回かしたことあるんだけど全然覚えてない！！

諒「それで大丈夫かよ？」

なんとかなる！！

すずか「人間諦めたらそこで試合終了だもんね！！」

安ざぎ・すずか先生！！

諒「今確実に安西先生って言い掛けただろ！？」

すずか先生！！いつものお願いします！！

諒「無視するなやー！！」

すずか「はい！！」

次回 歌は人を救うためにある 決して人を傷つけるものじゃない
！！」

そるじゃあ次回も！

諒「無視するな！！」

2人「お楽しみにー！！」

諒「言い損なつたort」

第47話 VS ハープ・ノート（前書き）

今回は長い！！

しかもヒロイン追加！！

なんか色々大変なことになってきた！！

今回名言を教えてくださいましたのはスイさんです！！

ハヤテのごとく！で

『私の名前は桂ヒナギク！どんな勝負も絶対負けたりなんかしないんだから！！！！』

『それでも．．．．．苦しくて．．．辛くて．．．死んでしまいたい．．．．．なにもにも換え難たい本当の喜びがあつたりするのよ．．．』

B y 桂ヒナギク

『僕が守るよ。君を．．．泣かせようとする奴から．．．僕が．．．君を守るよ。それでもいいかな？』

『大丈夫！！過去でも未来でも！！僕が君を守るから．．．！！一緒に．．．！！一緒に星を見に行きましょう！！』

B y 綾崎ハヤテ

『だから床屋が約束を破って王様の耳はロバの耳っていう秘密をばらしちゃうんだろ？誰にも言うなって言ったのに。それで怒った王様が．．．床屋を殺そうとするんだ。けどさ許してやるんだ。王様は．．．自分もかつて過ちを許されたって事を思いだして。つまり

さ・・・誰かを許して・・・許されて・・・そうやって人と人とは
つながっていくっていう・・・そういう・・・おとぎ話を
Bと三干院ナギ

ありがとうございました！！

第47話 VS ハープ・ノート

side 諒

俺は電波変換し、爆発音があった所に向かった

諒「くそっ!!」

俺はある光景を見て自分に怒りを覚えた

その光景とは、音符で関係のない人まで巻き込まれている光景だ

ミソラが起こす事件は罪だとは思わない

大好きな歌を歌わせてくれない事、自分の利益しか考えないマネー
ジャーに怒りを覚えるのは共感できる

だが、大好きな歌で人を傷つける事は気に入らなかった

だが、俺というイレギュラーがいるせいで関係ない人まで攻撃され
てるということに俺は自分に怒りを覚えた

諒「あいつを止めないと!!」

俺はスバルとミソラが居るだろう場所に向かった

side ミソラ

私は戦う力を手に入れた

これで私は大好きな歌を歌える

でも、私を邪魔してくる人がいる

星河スバル君

私を助けてくれた人の一人だったけど、私がしようとする事を邪魔しようとしてくる

彼も戦う力を持っている

だから、私はハーブの力を使い彼に攻撃している

スバル「歌をそんなことに使っちゃダメだ!!」

ミソラ「私はママの為に歌わなきゃダメなの!!」

ママの為に歌いたい!!

私は星河君を攻撃しようとした

だけど

「ショックノート!!!!」

私の攻撃は誰かの攻撃で防がれた

私は攻撃が来たほうを見た

そこには私と同じ格好をしていた少年がいた

sideスバル

僕は諒君と別れたあと展望台に向かった

そしたら、響さんのマネージャーがいた

僕は茂みに隠れマネージャーの独り言を聞いた

マネージャー「たつく、あの女は・・・私の為に歌を歌って金を入れてくれればいいもの・・・役にたたん奴だな!!」

その言葉を聞いて僕は怒りが溢れだした

あまりにも酷すぎる!!

僕は文句を言いにくいこうしたら、マネージャーに音符が飛んできた

マネージャー「ぐわあああああ!!!!」

その音符にぶつかったマネージャーは叫びながら倒れた

僕は直ぐにマネージャーに近づいた

そしたらマネージャーに一人の女の子が急に現れた

「やった!これで私は大好きな歌を歌える!!」

ウォーロック「スバル、あいつはFM星人だ!!」

スバル「な!？」

ウォーロックに言われ僕は警戒した

「あつ、星河君!!」

彼女は僕の事を知っている!?

スバル「君は一体・・・」

僕は警戒しながら聞いた

「私だよ!響ミソラだよ!!」

!?

スバル「な、何で君がその力を・・・」

「私が与えたからよ。」

僕の質問に答えたのは一体の電波体だった

ウォーロック「ちっ、ハープか!!」

ハープ「やっぱりあなただったのね、ウォーロック。・・・ミソラ、彼らもあなたの敵。彼らはあなたの大好きな歌を奪おうとしている。」

」

スバル「な!?!」

どんな嘘を言うんだ!?!

ミソラ「そうなの、ハーブ!?! って事は星河君も私の敵!?!」

スバル「な、何を言っているのさ!?!」

必死に弁解をしようとするが彼女は聞く耳を持たなかった

ミソラ「ショックノート!?!」

マネージャーを気絶させた技を使ってきた

ウォーロック「スバル!?!」

ドカーン!?!

ミソラ「やった!?!」

響さんの喜ぶ声がする、がこの程度の攻撃なら諒君の月牙点衝の方が何十倍も痛い

それに、あの程度のスピードなら電波変換するのに十分すぎる時間だった

スバル「まだ負けてないよ!?!」

僕はそう言っとライメイザンをプレゼンションした

ミソラ「まだ立ってる！行くよ、ハーブ！！」

響さんはギターを構え攻撃してくる

僕はライメイザンで確実に音符を攻撃して、自分にダメージがないようにしている

ハーブ「ミソラ、場所を変えるわよ！！」

ハーブがそう言うと響さんはアマケンに向かった

ウォーロック「スバル、逃がすな！！」

言われなくてもわかってる！！

僕は直ぐに追い掛けた

そして追い付くと響さんの戦い方が変わっていた

音符を乱射していた

ここは人が多い

乱射すれば確実に人にあたる

僕は新たにスイゲツザンをプレデクションし、音符を消していった

彼女が力を求めたのには納得がいく

だが、音楽で人を傷つけるなんて響さんのお母さんは望んでいない
！！

スバル「歌をそんな事に使っちゃダメだ！！」

僕は必死に叫ぶが聞く耳を持ってくれない

響さんが攻撃してきた時、別の攻撃で僕は防がれた

攻撃が飛んできた方を見ると、響さんの格好を男の子バージョンにした服、黒のギターを構えていた男の子が立っていた

だが、僕はその男の子が誰なのかわかった

スバル「やっぱり来てくれたんだ・・・諒君。」

僕は小さく呟いた

side 諒

俺はバグのカケラを使いノイズ変身し、ハーブノイズになった

本来、このノイズはゲームには登場しない、が俺はアフロディに頼み「すべてのナビのソウルユニゾン及び電波体のノイズ変身可能」の力を持っているので変身が可能なのだ

俺が爆発音があった所に向かうと、ミソラがハープ・ノートに電波変換しておりスバルを攻撃していた

なので俺はスバルを守るために攻撃した

諒「ショックノート!!」

そしたら、2人は俺を見てきた

諒「ミソラ、お前は一体何をしてんだよ!!」

俺はミソラに叫んだ

sideミソラ

「ミソラ、お前は一体何をしてんだよ!!」

男の子が叫んだ

ミソラ「(何で私の正体を・・・それにこの声・・・何処かで聞いたような・・・安心できるような・・・!?)・・・まさか、諒君なの?」

私が聞くと男の子は頷いた

諒「ミソラ、お前は歌を歌うことが好きだったんじゃないか
!?!?何でこんな事をしたんだ!?!」

何でって・・・

ミソラ「私はママの為に歌ってきた！！なのに、あの男は私を只の
商売道具としてしか歌わせなかった！！許せなかった・・・だから、
私は力を入れた！！そして、あの男に復讐した！！」

私は叫んだ

side 諒

ミソラ「私はママの為に歌ってきた！！なのに、あの男は私を只の
商売道具としてしか歌わせなかった！！許せなかった・・・だから、
私は力を入れた！！そして、あの男に復讐した！！」

何だと・・・

諒「ふざけるな！！」

俺はミソラに叫んだ

諒「歌は人を救う為にある、決して人を傷つけるものじゃない！！
お前の母親はこんな事を望んだのか！？お前にとって歌は人を傷つ
ける道具なのか！？」

俺は偽善者だ

だが、偽善者でも救える奴は沢山いる

だから、俺はミソラを救う！！

ミソラは俺に言われ泣いていた

ハーブ「ちょよ、ちょっとミソラ！！何休んでんのよ！！早くあの男をやっちなさいよ！！」

ハーブはそう言うがミソラは立たなかった

諒「ミソラ、俺の歌を聴けエ！！」

そう叫んでギターを弾き始めた

俺はギターを弾き始めた

俺は歌い終わった

スバル「勇気が出る歌だ・・・」

スバルの言う通り、俺は勇気が出る歌を歌った

諒「歌は人に希望を与える。お前の歌も誰かの希望になっている。希望を持って、響ミソラ！！お前は、俺が認めた最高の歌手だ！！だから、もう一度お前自身の力で立ち上がってみんなに希望を与える！！」

ミソラ「わたしは・・・みんなのきぼうになんか・・・なれないよ・・・」

泣きながら無理とிட்ட

俺はミソラに近づき抱きしめた

ミソラ「!!?」

諒「誰も一人で皆の希望になれなんて言っていない。俺達はお前の友達だ!!だから、辛い事や悲しい事があれば俺達を頼ってくれ!!俺達は絶対にお前を裏切らない!!」

スバル「そうだよ、響さん!!僕達は友達でしょ?僕達は君を絶対裏切ったりしない!!」

成長したな、スバル

ミソラ「・・・ありがとう、りょうくん、ほしかわくん。わたしがんばってみるよ!だからもしつらいことがあったらたすけてくれる?」

諒・スバル「当たり前だ(当たり前前だよ)!!」

ハーブ「どうやら、私の負けみたいのようね。」

ハーブは降参してきた

諒「これからどうするんだ、ミソラ、ハーブ?」

ミソラ「私、頑張ってもう一度歌手になる!!今度の歌手はみんなに希望を与える歌手になる!!それに・・・」

諒「それに？」

ミソラ「りよ、諒君に言いたいことがあるけど、今の私に言う権利はない。だから、私がみんなに希望を与える歌手になったら聞いてくれる？」

諒「当たり前だろ！俺達は友達なんだ、待っててやるよ。」

ミソラ「ありがとう！！！」

諒「それで、ハーブはどうするんだ？」

ハーブ「私はミソラと居るわ。作戦は失敗だから戻ったって罰を受けなくちゃいけないし。それにミソラの事を応援しなくなっちゃったから！！！」

何の応援だよ・・・ああ、歌手活動のことか

ミソラ「ちょ、ちょっとハーブ！！！！！！！！」

何故顔を赤くする？

歌手活動を頑張るだけなのに顔を赤くする理由がわからない

ウォーロック「ちっ、テメエもこっちに残るのかよ。」

ハーブ「そうイライラしない、これからは仲間なんですもの。仲良くしましょ。」

ウォーロック「やなこった！！！」

ウォーロックとハーブの漫才みたいな会話を聞いて俺達は笑った

side 三人称

場所は変わって諒の家では

なのは「諒くんが女の子にフラグを立てたような気がする。」

フェイト「なのはもそう思う?」

はやて「そやけど、一体誰に立てたんやろっな?ウチらみたいなの
やったら諒君のお嫁さんを認めたるのに・・・」

ティアナ「でも、最初に4人までって決めたよね?それはどうする
の?」

なのは「とりあえず、帰ってきたら少しO・H A・N A・S H I L
ないかね。」

フェイト「はやて・ティアナ」うんうん。」

この会話がされた直後諒は寒気を感じたらしい

第47話 VS ハープ・ノート（後書き）

瞬間記憶能力が欲しい作者の松上です

諒「安らぎの時間が欲しい主人公の諒だ。」

すずか「松上君が凄く欲しい後書き限定キャラのすずかです!」

すずか、少し自重してくれ・・・

すずか「嫌だ!」

はぁー、あとで構ってやるからさ・・・

すずか「自重します!」

諒「・・・そろそろいいか?」

あ、ああ

3人「スイさんありがとうございます!」

今回は長かったな

諒「久しぶりじゃないか、こんなに長いのは?」

ああ、マジで久しぶりだな

すずか「それにしても、よいよハープ・ノートの話が終わったね

「!!」

あと三分の二くらいだな

諒「頑張れっとしかいいいようがない・・・」

まあ、いいけどよ

それじゃあ、そろそろすずか!!いつもの頼むな!!

すずか「はい!!」

次回 響ミソラの最後のライブ

それじゃあ

諒「次回も!!」

3人「お楽しみにー!!」

すずか「それじゃあ、少し松上君行くところか？」

ど、何処へ？

すずか「勿論ベッドだよ!!」

諒「俺お邪魔みたいだからいなくなるわ!!」

ちよつと諒!?

諒「さらばだ!!」

裏切り者ー!!!

すずか「じゃあ行こうー!!」

嫌だ、まだ捕まりたくない!!

すずか「やろうか？」

ギャー——!!!!

諒「……ご愁傷さまです」

第48話 響ミソラの最後のライブ（前書き）

ご都合主義・無理矢理な所があるから気を付けろよ！！

・・・すみません、また調子に乗ってしまいました

今回名言を覚えてくれたのはジェスター「アーカムさんです

ジェスター「アーカムの父親で

『自分のために料理を作ろうしないやつに、人のために料理を作れるはずがない。』

こんな事言ってくれる父親が羨ましい

教えてくれてありがとうございました！！

第48話 響ミソラの最後のライブ

side 諒

俺はミソラと家に向かって帰っている

えっ？何でミソラが居るかって？

理由は、ハーブが俺達の仲間になったからだ

F M星人にしたらハーブは裏切り者になる

なので、ミソラも命を狙われる可能性がある

なので、暫くの間俺の家で保護？することになった

そして、マンションに入り自分の部屋の前に向かうとツカサが扉の前立っていた

はて？俺、何かツカサと約束事でもしたかな？

そう思いながらツカサに声を掛けた

諒「ツカサ、何で俺の部屋の扉の前で立ってんだ？」

「・・・何も聞かずに諒君だけ部屋に入ってくれる？」

ツカサは無表情、尚且つ目を合わせずに言ってきた

これはただ事ではないと思い、ミソラに少し待ってもらい部屋に入

った

リビングまで走っていく

リビングにはなのは達が座って俺の事を見ていた

諒「よかった、皆無事みたいだな・・・」

なのは「諒くん・・・」

俺は一安心するとなのはが呼んできた

諒「ん、何だ？」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「少しO・H・A・N・A・S・H
Iしようか？」

4人が声を合わせて言ってきた

そこで俺は意識を失った

sideミソラ

今日から（少しだけだが）諒くんの家に住める！！

なのはちゃん達と仕事の関係でよく話すが、いつも会話に出てくるのは諒くんの話

なのはちゃん達と諒くんは両思いだっって聞いた

将来皆で幸せな家庭を築くことも聞いた

無理な恋だとはわかっていても、自分の気持ちに嘘は吐きたくない

だから、一度歌手を引退する

そして、初心に戻って皆に希望を与える歌手なる！！

私が目指す歌手になれたら諒くんに告白する！！

振られたらしょうがないで終わりたくない

だから、一生懸命頑張っって、なのは達や諒くん認めてもらい私も幸せな家庭を築きたい！！

そう思いながら歩いてると諒くんの家に着いた

そして諒くんの部屋まで向かうと黄緑の髪をした男の子？が立っていた

諒くんがその男の子？話し掛けると、私に少し待っててくれと言っ
て部屋に入った

諒くんが部屋に入って数分

男の子？のトランサーがなった

そして少ししてから私に話してきた

ツカサ「もう入っていいみたいだよ・・・」

何で私を待たせたのだろう？

部屋の掃除かな？

そう思いながら扉を開け、部屋に入った

そして、リビングに向かうと白目をした諒くんが物凄く笑顔のなのはちゃん達がいた

なのは「いらっしやい、ミソラちゃん!!」

ミソラ「えっ・・・と、お邪魔します。」

フェイト「今、お菓子を用意するから座ってて!!」

フェイトちゃんが座るよう言ってきたので座った

はやて「それにしても、どうしたんや急に家に来て？」

隣に座っていたはやてちゃんが聞いてきた

ミソラ「うん、実はね・・・」

(説明中...)

「……というわけで、今日から少しの間だけここに住むんだけどいいかな？」

私は皆に、今日あった事を話した

ティアナ「ミソラちゃん、質問していいかな？」

ティアナちゃんが聞いてきた

ミソラ「うん、別にいいけど……」

何を質問してくるのだろう……

ティアナ「単刀直入に聞くよ？……ミソラちゃん、お兄ちゃんのことが好きになったでしょ？」

・

・

・

・

ミソラ「え、ええ……！！！！？／／／／／／／／」

な、何でわかったの!？

なのは「やっぱり。」

やっぱり？

フェイト「O・H A・N A・S H Iして正解だったね。」

O・H A・N A・S H I？

はやて「そやけど、これからどうする？」

何を？

ティアナ「最初は4人までって決めてたけど、ミソラちゃんも私達と同じ辛さを味わってるし・・・」

皆と同じ辛さ？

なのは「今回は特別でいいよね？」

特別？一体何なの！？

フェイト「ミソラ、あなたを諒の第5番目のお嫁になる事を認めます！！」

・

・

・

.....

ミソラ「ええー！ー！ー！ー！！！！？」

私、皆に認められちゃったよ！？

何で！？どうして！？

諒くんの許可なしで大事なことを決めていいの！？

ハーブ「よかったじゃない、ミソラ！！」

よかったのはよかったけど・・・

ミソラ「いいの、本当に？」

なのは「いいの、別に。」

フェイト「でもミソラだから特別なんだよ。」

はやて「諒君は恋人じゃなくても困ってる人を助けるからな。いつの間にかフラグが立ってたりするからな。」

ティアナ「それに、お兄ちゃんなら私達を平等に愛してくれるからいいの！！」

そうなんだ・・・

ミソラ「この事は諒くんには内緒にしてほしいの。私は自分の口で言いたいから。」

私がそう言つと皆頷いてくれた

ミソラ「ありがとう！それより皆のことも話してほしいな。」

皆は自分達の秘密を話してくれた

諒くんが転生者だということ

皆の中には6年前に現れたデジモンが封印されてること

2年前に起こつた事件を解決させたのは皆だということ

なのは「これが私達の秘密だよ。」

フェイト「私達のこと怖い？」

フェイトちゃんが不安そうに聞いてきた

ミソラ「怖いわけじゃない！皆は私の親友だよ！！」

私がそう言つと、ティアナちゃん以外が今にも泣きそうになっていた

ミソラ「どうしたの、皆！？私、変な事言つた！！？」

なのは「ううん、これは嬉し涙なの。」

フェイト「私達の正体を知って優しくしてくれたのは諒だけだから。

」

はやて「ミソラちゃん、ありがとうな!!」

ミソラ「お礼を言うのは私だよ!! 私も諒くんのお嫁になっていい事を許してくれてありがとうね!!」

この話で私達はブラザーになった

諒「ん・・・うん・・・あれ、何で俺寝てたんだ？」

諒くんが起きた

そういえば、O・H・A・N・A・S・H・Iって何なんだろう？

side 諒

俺はいつの間にか寝ていたようだ

目を覚ますとなのは達とミソラは楽しそうに話していた

これなら安心だな

俺は晩ご飯を作りに行った

そして晩ご飯を作り、皆で食べた

今日の晩ご飯はラーメン、餃子、唐揚げ、ニラレバ、天津丼という中華料理にした

ゲームでも沢山食べると言われていたので沢山作った

それだけ作ったのに、たった30分でなくなった

明日は保つだろうと予想していたが、ミソラの驚異の食欲によって
全てなくなった

そして、暫くしてお風呂に入った

今日は誰も入ってこなかったので安心した

しかも、今日は俺にとって最高といっても過言じゃなかった

何故なら、久しぶりに1人で寝れるからだ

なのは達も流石に客人がいる時は我慢してくれたんだなっと思いは眠った

side 三人称

時刻は午後10時26分

諒の部屋の扉の前に5つの影があった

「本当に行くの？」

「そや、誰かが家族の仲間入りしたら必ず皆で寝る。それがウチ等のルールや。」

「恥ずかしいなら無理しなくてもいいんだよ？」

「な！？私も諒くんの事が好きだもん。恥ずかしくなんかないよ。」

「早くしないと諒くと寝る時間が減っちゃう。」

「それじゃあ、入るよ。」

5つの影は諒の部屋に入った

第48話 響ミソラの最後のライブ（後書き）

……作者の松上です。

諒「ど、どうしたんだよ、そのテンションの低さは!?!」

……何でもない、ただ物凄く疲れた

諒「（前回のことが・・・すずか、一体どれだけしたんだよ!?!）
自己紹介がまだだったな、主人公の諒だ。」

すずか「初体験をして凄く気持ち良かった後書き限定キャラのすずかです!?!」

諒「（すずかの肌がつやつやしてる、けどもう少し自重してほしい。・・・松上、警察には言わないぞ!?!あれはお前が襲われたんだからな!?!）」

……まずは

3人「ジェスター」「アーカムさんありがとうございました」

スマン諒、今日は俺休むわ

諒「あ、ああ、あとは任せろ。」

頼むぜ・・・ZZZZ

諒「しかし今回は一番ご都合主義・無理矢理だったな。」

すずか「しょうがないよ。」

諒「しかし、次回ライブしてハープの話も終わりか。」

すずか「やっと半分かな？」

諒「そうじゃないか？それじゃあいつもの頼むわ。」

すずか「うん！」

次回 さよならは悲しい言葉じゃない」

諒「それじゃあ次回も！！！」

2人「お楽しみにー！！！」

第49話 さよならは悲しい言葉じゃない(前書き)

引退ライブ!!

今回名言を教えてくださいましたのは水銀さんです!!

・hack/ /GUで

「もう失いたくないんだ・・・二度と・・・二度と・・・仲間を」

「いいか、よく聞け・・・俺は、お前が・・・必要だ!」

By八セヲ

ありがとうございました!!

第49話 さよならは悲しい言葉じゃない

side 諒

p i p i p i p i p i ! ! ! ! !

ガチャツ!!

俺は目覚ましを止める

ハープ・ノート事件の翌日

今日もスバルと特訓するために午前5時に起きた

諒「さーで、早く起きて皆の朝ご飯を作らないとな・・・」

俺は布団から出ようとする

しかし右手以外動かない

諒「あれ？」

もう一度チャレンジ!!

しかし動かない

布団をよく見ると膨らみが幾つもあり、体に何かが乗っていた

諒「(空気だ!!荷物だ!!だって、ミソラが居るのに布団に入ってくるはずがない!!)」

そう思いながら右手を使い布団を捲った

そこには、凄く幸せそうな顔で寝ているはやての顔があった

俺は右手を器用に使い、布団をどかした

俺はその光景を見て叫びそうになった

その光景とは、左手をきつちり抱きしめてるなのは、俺の体をがっちり抱きしめているフェイトとティアナ、俺の上で寝ているはやてなのは隣の隣で寝ているミソラの光景だった

俺は直ぐに影分身を作り、皆を退かせた

諒「なのは達はわかるが、何でミソラまで一緒に寝てるんだよ・・・

」

そう呟き俺はジャージに着替え朝ご飯を作りに行った

チンロンモン「あつ、おはよう。」

シェンウーモン「昨日の夜はスマンかった。はやてを止めれなかった。」

スーツエーモン「しかし、偶にはいいんじゃないでしょうか？」

バイフーモン「そうだZE!!!ティアナの奴」最近構ってくれない

「！！」って言ってたしYO！！」

諒「おはよう、チンロンモン。シェンウーモン、気にするな。スーツエーモン、お前の言ってる事はあってるぞ。バイフーモン、あんまりティアナに構うと（ピーー）を求めてきそうだから毎日構えない。」

俺は、机のうえに居たチンロンモン達に挨拶をして朝ご飯を作り始めた

諒「しかし、今日は皆起きるのが遅いよな。いつもなら、俺が起きる頃には皆起きて朝ご飯作ってるのに・・・昨日疲れることでもしたのか？」

チンロンモン「（昨日は皆O・H A・N A・S H Iしたからね・・・）」

シェンウーモン「（記憶が無くなるくらいの恐怖とは、どれ程恐ろしいO・H A・N A・S H Iなんじゃ・・・）」

スーツエーモン「（“知らぬが仏”ですね・・・）」

バイフーモン「（今回は俺っちも同情するZE・・・）」

なんだろう・・・今、物凄く泣きたくなつた

そんなことを思いながら朝ご飯を作った

あれから数日が経った

俺達は舞台裏で音合わせをしている

今回も恒例の簡単説明をするぜ！

あのあと、展望台へ行きスバルと特訓した
スバルは、なのは達が居ないので心配していたが俺が説明すると納得してくれた

特訓が終わりスバルと別れ、家に帰ってお風呂に入った
お風呂から出ても皆起きていなかったので起こした

そして、ミソラが引退するので俺達は付き添う為に学校を休んだ

ミソラの事務所に行って説明すると、事務所もわかってくれたので引退してもOKだそうだが、『いつか復活してくれるなら』という条件だったがミソラは復活する気100%だったので承した

ミソラのマネージャーは解雇になった
当たり前だがな

そして、引退会見をしてライブする事を言った
俺達も出ることを伝えといた

そして、それが終わるとライブの準備などで適当に過ごした

説明終わり！！

今ミソラはライブで歌っている

俺の知ってる奴で来てるのは

スバル、ツカサ、ゴン太、キザマロ、うるさい奴、スバルの母親、
天地さん、宇田海さんだ

諒「今日は頑張れよ、はやて！」

はやて「任せとき！！」

今日のボーカルは、はやてなので応援した

ミソラ「最後に私、響ミソラと私の親友達であるグループ、ヒカリの
コラボ曲をします！！」

諒「それじゃあ、頑張りますか！！」

俺達は円になって

4人「GO！！ヒカリ！！GO！！」

気合いを入れて舞台に向かった

諒「今日は俺達の親友であるミソラ、そして、ミソラのファンである
皆さんに歌のプレゼントを持ってきました！！今日、ミソラは引

退しますが必ず、皆さんの所に帰ってきます！！今日はさよならを
いいますが、悲しい言葉じゃありません。新しい自分の始まりなん
です。今日はそんな歌を歌います。聴いてください！！」

ミソラ「曲名はまだありません。ですが、凄く良い歌です！！それ
じゃあ皆、最後まで聴いてねー！！」

俺とフェイトとなのははギターを弾きだした

そして、ミソラとはやては歌いだした

）・・・

俺達は演奏を終えた

ミソラ「みんなー！！かならず、またかえってくるからー！！まっ
ててねー！！」

ミソラは泣きながら観客に言った

そして、無事引退ライブは終了した

第49話 さよならは悲しい言葉じゃない（後書き）

今、物凄く『瞬間記憶能力』が欲しい作者の松上です

諒「特に欲しい能力が無い主人公の諒だ。」

すずか「『相手の心を詠める能力』が欲しい後書き限定キャラのすずかです！！」

まずは！！

3人「水銀さんありがとうございます！！」

やばい、マジで『瞬間記憶能力』が欲しい・・・

諒「明日、テストだからか？」

マジでやばいよort

諒「まあ、頑張れ！！！」

ああ、だが勉強しないといけないから今日はここまで！！

すずか、頼むな！！

すずか「はい！！

次回 ライブの後ってやっぱり・・・違った」

それじゃあ

諒「次回も！」

3人「お楽しみにー！！！」

第50話 ライブの後ってやっぱり・・・違った（前書き）

今回は短い・・・

後悔はしたが、後悔したってしょうがない!!

今回名言を覚えてくれたのはムラサメさんです!!

NARUTOで

「…確かに忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる
…けどな…仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ」

Byオビト

「人は…大切な何かを守りたいと思った時に本当強くなれるものな
んです」

By白

「運命なんて誰かが決めるもんじゃない」

Byネジ

「人が終わる時は死ぬ時ではない。信念をなくした時だ」

By半蔵

銀魂で

「美しく最後を飾りつける暇があるなら最後まで美しく生きようじ
やねーか」

ありがとうございました!!

第50話 ライブの後ってやっぱり・・・違った

side 諒

ミソラの引退ライブも無事に終わり、俺は展望台で空を見ている

「諒くん？」

誰かに話し掛けられたので後ろを見ると、ミソラが居た

諒「どうしたんだ？」

ミソラ「少し空を見にね。」

そう言っつてミソラは俺の隣に来た

諒「引退したのを後悔してるのか？」

俺は聞くがミソラは首を横に振った

ミソラ「皆、私が戻ってくるのを信じてくれたから。後悔はしてないよ。」

諒「そうか・・・俺達も応援してるぜ。」

ミソラ「ありがとう！」

ミソラは笑顔で言った

その笑顔は悲しい笑顔じゃなく、心から喜んだ笑顔だった

諒「やっぱりミソラは笑顔が一番だな。」

ミソラ「あ、ありがとう／＼／＼／＼／」

顔を赤くしてお礼を言ってきた

諒「可愛いな。」

ミソラ「か、可愛いなんて、そんな／＼／＼／＼／」

本当に可愛いよな

これが将来スバルの奥さんになるんだから羨ましいな

ミソラ「ねえ、諒くん？」

将来のスバルに嫉妬していたらミソラが話し掛けてきた

諒「ん、どうした？」

ミソラ「あのね、私とブラザーになっけてくれないかな？」

・

・

・

諒「えっ!？」

ちよつと待てよ

俺、完全にスバルとミソラのブラザーになるフラグ折っちまった・

・

ミソラ、スバルの事好きにならない・

ま、いいか

諒「ああ、いいぜ！」

俺は携帯を出した

そして、ミソラとブラザーになった

ミソラ「これからもよろしくね、諒くん!!」

諒「よろしくな、ミソラ!!」

そして、俺達は空を見ていた

sideスバル

スバル「・・・母さん。」

僕は母さんに話し掛けた

アカネ「どうしたの、スバル？」

スバル「僕、学校に毎日行ってみようと思っただ。」

アカネ「ほ、本当！？でも突然どうしたの？」

スバル「今までは学校に行く楽しみは『諒君達と話すこと』だったんだ。でも、諒君達以外の友達ともっと過ごしたいからさ。」

僕がそう言つと母さんは涙ぐんでいた

アカネ「わかった、明日から頑張つてね。」

スバル「ありがとう、母さん！」

僕はそう言つて自分の部屋に向かった

sideアカネ

スバルが明日から学校に行くみたい
これも諒君のおかげね

アカネ「さーて、今日はご馳走を作らないとね！..！」

そう言つてデパートに向かった

第50話 ライブの後ってやっぱり・・・違った（後書き）

テストが終わって安心している作者の松上です

諒「とりあえず更新できて安心している主人公の諒だ。」

すずか「松上君を見て安心してしている後書き限定キャラのすずかです。」

ますは！！

3人「ムラサメさん、ありがとうございました！！」

遂にハーブ・ノートの話が終わったな

諒「次はてんびんだな。」

まあ、短いかな

諒「予想はしてた。」

この調子なら300話越えちまうから、こつこつモブの戦いは省略しないとな

諒「メタ発言はやめる。」

悪かったよ・・・

それじゃあすずか、頼むな！！

すずか「はい！！」

次回 スバルが！！スバルが！！しかもクラスに元歌手が！！」

それじゃあ

諒「次回も！」

3人「お楽しみにー！！」

第51話 スバルが！！スバルが！！しかもクラスに元歌手が！！（前書き）

こんな展開誰が予想した？

（多分）誰もいないだろう

最近、なのは達のO・H A・N A・S H Iが多いような・・・

気にしたら負けだ！！

今回名言を覚えてくれたのは武御雷さんです！！

RAVEで

『芯が強エモンは絶対に折れねエ！！剣も人間もな』

Byガレイン・ムジカ

ドラゴンクエスト・ダイの大冒険で

『い…生命にゴミ同然のもんなんで…一つもない！たとえどんな生物でも…！！それがわからないとしたら…あんたこそ本当のゴミよっ！！！！』

Byマアム

『…不思議なものだ。あれほど憎んだのに…殺してやりたいとすら思ったのに…！！師よ！！瀕死のオレをこうして立ち上がらせてくれたのはいつもあなただった…！！！！』

Byヒュンケル

『…本当…言うとな…好きになっちまったんだよな、おまえら…人間たちを…そしておまえらの仲間もな…！！』

『ここにいた奴ら全員…オレは好きだぜ 絆を守るためなら生命も捨てるバカばかり…!』

『オレの戦友たちとそっくりだった…!!もう…誰一人悲しい顔にやあさせたくねえんだよ…!!』

BYヒム

ありがとうございました…!!

第51話 スバルが！！スバルが！！しかもクラスに元歌手が！！

side 諒

ミソラの引退ライブの翌日

ミソラは朝早くに何処か出かけたが、俺達は学校があるので学校に向かっている

「諒くーん！！！！」

名前を呼ばれたので振り向いた

そこには、走ってきているスバルがいた

諒「す、スバル！？な、何で？今日は月曜日だぞ？」

スバルが月曜日から来るなんて・・・

スバル「僕も毎日学校に行ってみようと思ってね。」

す、スバル、お前・・・

諒「成長してくれて嬉しいぞー！！」

俺は嬉しくなってスバルを抱きしめた

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「ああー！！！！！！！！？」

ツカサ「やあ、みんな・・・な・・・ごめん、先行くね。」

スバル「ちょ、ちょっとツカサ君!!!?待ってよ!!!」

スバルはツカサを追い掛けて行った

諒「しかし、スバルも大人になっただなあ。」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「諒くん(諒)(諒君)(お兄ちゃん)……」

俺が親父臭い事を言ったら、なのは達が話し掛けてきた

諒「ん、一体なんの……よ……う……だ……」

俺は振り替えると、笑っているが目は笑っていないなのは達がいた

なのは「諒くんはスバルくんがいいんだ……」

フェイト「そんなに抱きつきたいなら、私達にすればいいのに。諒は、スバルにするんだ……」

はやて「ウチらに最近してくれへんかったんは、スバル君に乗り換えたからか……」

ティアナ「何で黙ってたのかな？」

こ、殺される!!!

諒「皆、俺の話を聞いてくれ!!!」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「O・H・A・N・A・S・H・I・L
ようか?」

俺は公園に連れていかれた

・

・

・

・

諒「ぎゃあああああああああああああああ！……！！……！！……！！」

俺は気を失った

・

・

・

・

！？

諒「あれ、何で俺、学校にいるんだ？」

目を覚ますと自分の席に座っていた

俺は隣に座っていた男子に聞いた

諒「なあ、今何時間目で、俺は何で此処にいるんだ？」

男子「あつ、起きたのか。えーと、今はまだHRも始まってないぞ。それから、諒がいる理由は、高町達がお前の肩を背負って来て、席に座らせたぞ。あの時は皆びっくりしてたぜ、何ていったってあの委員長が心配するくらいだからな。」

諒「ありがとな。」

あの、うるさいのが心配するなんてな……一体俺はなのは達に何をされたんだort

キーンコーンカーンコーン

チャイムよ、俺に少しの時間もくれないのか？

先生「よし、席につけー！今日は転校生を紹介するぞー！それから新井、早く席につけ。」

先生、俺は失われた記憶を取り戻そうと頑張ってるんだ！！

そう思いながら席についた

先生「それじゃあ、呼ぶぞー！！くれぐれも興奮するなよー！！」

興奮するなよって……俺達は子供か！！（十分子供です。）

変な電波が聞こえたが無視だ！！

先生「それじゃあ入ってこい!!」

クラスの皆は絶句した

何故なら、そこには昨日引退した歌手がいたからだ

ミソラ「響ミソラです!!これからよろしくね!!」

諒「不幸だ・・・」

俺はとあるシリーズに出てくる上条当麻の言葉を言った

第51話 スバルが！！スバルが！！しかもクラスに元歌手が！！（後書き）

O・H A・N A・S H Iが続いて笑いが止まらない作者の松上です・
・ククク

諒「O・H A・N A・S H I！？ガクガクブルブル・・・主人公・
・諒・・・ガクガクブルブル（ry）」

すずか「O・H A・N A・S H Iの怖さがよくわからない後書き限定のすずかです！」

まずは！！

2人「武御雷さんありがとうございました！！」

つておい諒、何でお礼を言わないんだ！！

諒「ガクガクブルブル・・・武御雷さん・・・ありがとう・・・ガクガクブルブル（ry）」

ダメだこりゃ・・・

すずか「O・H A・N A・S H Iってそんなに怖いのか？」

諒がこんなになるんだから、凄い怖いんだろ・・・

そろそろ可愛そうになってきたから、次回予告しようぜ
すずか、頼むな！

すずか「はい！！」

次回 ミソラの爆弾発言？」

それじゃあ

すずか「次回も！」

2人「お楽しみにー！！」

諒「…………お楽しみに……………ガクガクブルブル（ry）」

第52話 ミソラの爆弾発言？（前書き）

諒が番長化？魔王化？する話です

まあ、楽しんでください

今回名言を教えてくださいましたのはムラサメさんです！！

銀魂で

『何人たりともここは通さねえ、何人たりとも俺達の魂は汚させねえ、俺は近藤勲を護る、最後の皆真選組を護る、最後の剣、真選組副長土方十四郎だアア！！』

By 土方十四郎

『いいか…てめーらが宇宙のどこで何しよーとかまわねー。だが俺のこの剣、こいつが届く範囲は俺の国だ
無粹に入ってきて俺のモンに触れる奴あ
將軍だろーが
宇宙海賊だろーが
隕石だろーが
ブツた斬る！！』

By 坂田銀時

シャーマンキングで

『でもあたしはそれ以上に…！この男を愛してしまった』

By アンナ

『いよいよここでお別れだマタムネ』

お前と旅した三日間、本当に楽しかった

オイラお前の事はずっと忘れん

たからいつかこの媒介を使って必ず呼んでやるからな
じゃな』

By葉

ありがとうございました！！

第52話 ミソラの爆弾発言？

side 諒

まさか、ミソラが転校してくるなんて・・・

原作がまた壊れたな

そう思いながらミソラを見ていたら、ミソラもこっちに気付き手を振ってきた

俺も小さく手を振った

男子（スバル、ツカサ、ゴン太、キザマロ以外）「新井ー！ー！！！」

男子（スバル、ツカサ、ゴン太、キザマロ以外）が俺の名前を叫びながらこっちに向かってきた

諒「・・・死ぬか？（ニコッ）」

男子（スバル、ツカサ、ゴン太、キザマロ以外）「すいませんでしたー！！！！ort」

俺が聞くと一瞬で全員土下座した

諒「なら、早く座ろっね（ニコッ）」

男子（スバル、ツカサ、ゴン太、キザマロ以外）「い、イエッサーー！！！！！」

男子（スバル、ツカサ、ゴン太、キザマロ以外）は自分の席に戻った
諒「先生、話を進めていいですよ。」

先生「わかった、それじゃあ響の席だが・・・」

先生が言った瞬間、男子（俺、スバル、ツカサ以外）の目の色が変わった

諒「（どうせ、『自分がミソラの隣なんだ』とか言ってるだろうな・・・まあ、席は先生が既に決めてるはずだろうが。」

そう思いながら先生の話聞いた

先生「響は何処の席に行きたいか？」

それを聞いた瞬間、男子（俺、スバル、ツカサ以外）が積極的に自分の隣をアピールしていた

諒「（うるせー）」

そう思っていたらミソラが言った

ミソラ「私は、諒さんの隣がいいです!!」

先生「わかった、響は新井の隣だ!!」

・
・

第52話 ミソラの爆弾発言？（後書き）

コラボがどうしてもやりたい作者の松上です

諒「何故そこまでコラボがしたいのかわからない主人公の諒だ。」

すずか「どうしても、松上君と一つになりたい後書き限定キャラのすずかです!!」

・・・

諒「・・・」

すずか「どうしたの、2人とも?」

諒「い、いや、何でもねえ。」

何でもないぞ・・・

すずかのキャラが（ボソッ）

すずか「何か言った?」

いや、何も言ってないぞ

それより!!

3人「ムラサメさんありがとうございました!!」

コラボがしたーい!!

諒「何故そこまでコラボがしたいんだよ？」

コラボするのに憧れてるの!!

誰かやりましょーう!!

諒「まあ、ここまで言ってるからやってくれる人、教えてくれ。」

お願いしまーす!!

それじゃ、すずか!!いつもの頼むぜ!!

すずか「はい!!

次回 ミソラに告白!・・・告白相手を潰す(勿論死にはしない、死にはね。)

それじゃあ

諒「次回も!!」

3人「お楽しみにー!!」

すずか「それじゃあ、松上君。」

や、やめてくれ!!

諒、助けてくれ!!

諒「電波変換!新井諒、オン・エア」

見捨てるなー!!

すずか「それじゃあ、気持ち良くなるっね!!」

ぎやあああああああああ!!!

諒「(松上、お前の犠牲は無駄にはしない!!)」

やめてくれええええええええええ!!!

すずか「気持ち……ん……いい……んっ」

これ以上はお見せできない!!!

強制終了だ!!

第53話 ミソラに告白！・・・告白相手潰す（勿論死にはしない、死にはね。

キャラ崩壊レベル100%！！（ノリでエヴァの伊吹さんだ！！）

気を付けてね・・・皆・・・（ノリでエヴァの葛城さんだ！！）

今回名言を覚えてくれたのはWindさんです！！

TOVで

『いるんだよ世の中には…死ぬまで人を傷つける悪党が！ そんな悪党に弱い連中は一方的に虐げられるだけだ！』

『外道二はいつか天罰が下る、そういう形であれな…』

『世のためだろうが何だろうが、それで誰かを泣かせてりや世話ねえぜ』

『やるしかねえんだ、やってみるさ。』

『あいつらが今死んで救われたやつがいるのも真実だ。おまえは助かった命に いつか法を正すから、今は我慢して死ねって言うのか！』

Byユーリ・ローウエル

ありがとうございました！！

第53話 ミソラに告白！・・・告白相手潰す（勿論死にはしない、死にはね。

side 諒

キーンコーンカーンコーン

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った

委員長「起立！！気を付け！！礼！！」

全員「ありがとうございますー！！」

男子（俺、スバル、ツカサ以外）「ミソラちゃーん！！！！」

先生に挨拶が終わった瞬間、学校中の男子（俺、スバル、ツカサを除く）がミソラの席に集まった

ミソラ「あ、あははははは」

退いてるよ、ミソラの奴

スバル「凄いね、響さんの人気って。」

スバルがそう言いながら俺の席に来た

諒「非リア充達はミソラを手に入れ、リア充の仲間入りを目指そうとしている。」

ツカサ「何か、ドラクエの説明文みたいだね。」

ツカサが俺の言葉に突っ込みを入れてきた

第53話 ミソラに告白！・・・告白相手潰す（勿論死にはしない、死にはね。

キャラ崩壊レベルMAXだが、気にしていない作者の松上だ！！！
フハハハハハハ！！！！

諒「主人公の諒だ。何があつたんだ、松上！！！！答えてくれ！！！！」
「すすか「久しぶりに一つになって気持ち良かった後書き限定キャラ
のすすかです！！！」

諒「やはりあれが原因なのか！！！！？」

フハハハハハハハハ！
まずはだな！！！！

3人「Windさんありがとうございました！！！！！」

フハハハハハハハハ！
気分が実に愉快だ！

諒「松上、頼む！！戻ってきてくれ！！！！！」

フハハハハハハ・・・はっ、俺は一体？

諒「よかった、戻ってきてくれたんだな・・・」

あれ？俺、前回何したんだっけ？全然覚えてないや・・・今は何して
るわけ？

諒「(そのまま、何も覚えださないでくれ!!)次は次回予告だ。」
な、何!?もうそこまで進んだのか!?
なら、すずか!!頼むぜ!!

すずか「はい!!」

次回 あれ、男子生徒少なくてね?

それじゃあ

諒「次回も!」

3人「お楽しみにー!!」

すずか「しかし、昨日は激しかったな／／／／／」

何が?

すずか「最初は私がやってたのに、途中で松かm「何もなかった!!何にもなかったぞ!!!」人が話してる途中なのに。」

ま、まあ、諒がそう言うなら何にもなかった事にしとくわ

諒「何にもなかった!!何にもなかったぞ!!!」

わかったって・・・

第54話 あれ、男子生徒少なくなね？（前書き）

コダマ小学校校内に巨大な負の感情をキャッチ！！（ノリでエヴァの伊吹マヤ）

何ですてえー！？（ノリでエヴァの葛城ミサト）

まさか・・・WAXAの最強の悪魔・・・（ノリでエヴァの赤木リツコ）

まあ、あらすじみたいな感じです

今回名言を教えてくださいましたのはジェスター！！アーカムさんです！！

サンダーバードで

『われわれ国際救助隊の使命は永遠に変わることはない。尊い命を救うのが唯一の使命だよ。かけがえのない命だ。』

Byジェフ・トレーシー

ありがとうございました！！

第54話 あれ、男子生徒少なくなね？

side 諒

俺はスバル達と学校中の男子にお仕・・・ゲフンゲフン、スバル達と学校中の男子にO・H A・N A・S H Iをした

皆、俺達のO・H A・N A・S H Iに感動したのか、全員気絶している

だが、なのは達のO・H A・N A・S H Iは俺達の3乗くらい恐ろしかった

スバル「これが某管理局の白い悪魔が使うO・H A・N A・S H Iか・・・」

なのは「私は白い悪魔じゃないよ!」

スバルの言葉になのはが反論した

スバル・・・何故お前が管理局の白い悪魔のことを知っているんだ？

なのは「だから、私は白い悪魔じゃないって!」

フェイト「なのは、今は誰も言っていないよ。」

なのは「言つとかなないと後悔する気がしたから・・・」

な!？お前は人の心が読めるのか!？

なのは「私の場合は直感だよ」

はやて「なのはちゃん、誰に言ってるんや?」

なのは「この作品を読んでくれる神様（読者）にだよ」

メタ発言はやめる

ティアナ「変なのはちゃん。」

ティアナの言う通りだ!!

ツカサ「それより、これはどうするの?」

ツカサ、そいつらは一応生きてるぞ

一応人権があるからこれ扱いはダメだぞ!

スバル「もうこの際ゴミとして捨てちゃう?」

5人「それだ!!」

諒「ちよつと待てー!!!!」

こいつら、O・H A・N A・S H Iしてからおかしいぞ!!

こいつ等に任せると何か凄い事になりかねん!!

諒「こいつ等は暁に預ける!!保健室に運んだって全員は入れないからな!!」

そう言い、携帯を開き、暁に電話した

諒「……もしもし？」

暁『お掛けになった電話番号は現在使用されておりません。はっ、WAXAをこの世から消すぞ。』すいませんでしたー！！』

ふざけるのも大概にしないと、お兄さん怒って日本地図書きなおさせるよ

暁『それより、一体何のようだ？』

それよりだって？

今度、WAXAに遊びに（苛めに）行ってやるYO！

暁『何だろう……寒気がしたような？』

お前の勘は合ってるZE！！

諒「頼みたい事がある。今直ぐにコダマ小学校に來い。救急車連れて來い。」

暁『は、何で？』

諒「俺に質問するな。早く來ないとWAXAがこのy『今直ぐ行くから待つてる！！おいつ、救急車を100・・・200台をコダマ小学校に向かわせる！！！！さもないとWAXAがこの世から消えるぞ！！！！』これでよし！！」

俺は電話を切った

3分後

暁「此処に倒れている男子を全員病院に連れて行け!!」

おおー、次々に非リア充共が運ばれていく

委員長「・・・もうあなたを普通の人とは思わない。」

うるさいのよ・・・俺は普通じゃない!!

心の中で言っているとクラスに気絶していた男子（俺、スバル、ツカサを除く）が綺麗に居なくなった

暁「俺達のする事はやったからな!!やったからな!!」

そう言っただけは帰っていった

キーンコーンコーンコーン

授業始まりのチャイムが鳴った

先生「よし、皆席に・・・男子が居ないぞ!!!!?」

男子が居ないって俺達は男ですよ

ツカサとスバルは女顔だから、女装させたら女子に見えるが、俺は完全に男顔だから男子ですよ!!

諒「先生！俺達、男子なんですけど・・・」

一応言っておいた

先生「新井達はリア充だろうが！私が言ってる男子は“非”リア充の男子だ！！！」

先生、それは酷……………
……………くないですね！！！！

俺達の事をバカにする奴は一生非リア充してろ！！！！

男子共『嫌だ————！！！！！！！！！！』

男子の残念な声が聞こえたが無視だ

先生「まあ、授業をサボるあいつ等が悪い。授業に入るぞー！！！」

フッフッフ、これが俺達を怒らせた罰だ！！

その後、全校集会があったが男子が俺とスバルとツカサだけだったので空気が気まずかった

第54話 あれ、男子生徒少なくなね？（後書き）

最近バトル要素が無くて困っている作者の松上です

諒「バトルしてないのに体が時々痛くなってる主人公の諒だ。」

すずか「発情と現在進行形でバトルしている後書き限定キャラのすずかです！」

・・・もう嫌だ

諒「・・・頑張れ！」

すずか「????とりあえず、まずは!?!」

3人「ジエスター」「アーカムさんありがとございました!?!」

最近、エヴァをまた観だしたんだよな

諒「今回の前書きのシーンに使われたエヴァネタは原作にあったっけ？」

いや、あれは『CR新世紀エヴァンゲリオン 最後の使者』に出てくるオリジナルのシーンだ

すずか「それってパチンコだよ!?!どうして、パチンコのリーチのシーンを知ってるの!?!」

えっ?だって父さんと母さんがパチンコ番組を見てるときに偶々出

て覚えた

諒「（瞬間記憶能力か!!!）」

しかし、プレミアムの『おめでとうリーチ』はいいぞ！

諒「ま、まさか・・・」

ああ、PV100000越え記念及びユニーク100000越え記念で次回やるぜ!!

諒「やっぱり・・・だけど、この作品とエヴァって関係なくね？」

いいの別に

記念なんだからさ

すずか「松上君!!! 私にも出番はある？」

ああ、この作品のキャラは出るぞ!!!（多分）

諒「それじゃあ、次回は特別編だからな!!!」

それじゃあ

3人「お楽しみに!!!」

今回は記念です!!

後、コラボしてもいいっていう人、大募集中!!
待ってまーす!!

今回名言を覚えてくれたのは武御雷さんです!!

ティルズオブデステイニー2で

『取り返しよのない過ちも、教え切れないほどの後悔も、そのすべて

が僕らの生きた証なんだ』

Byジューダス

NARUTOで

『自分を信じてない奴なんか努力する価値はない!!』

Byマイト・ガイ

機動戦士ガンダムSEEDで

『平和を叫びながら、その手に銃を取る――それも又、悪しき選択なのかもしれない。でも、どうか、今、この果てしない争いの連鎖を断ち切る力を…!!』

Byラクス・クライン

ドラゴンクエストダイの大冒険1で

『オレは男の価値というのはどれだけ過去へのこだわりを捨てられるかで決まると思うている。たとえ生き恥をさらし、万人にさげすまれようと、己の信ずる道を歩めるならそれでいいじゃないか…』
Byクロコダイン

あしがとひいぢれごましたー！

PV100000越え及びユニーク100000越え記念!!

まずは!!

全員「かんぱーい!!」

しかし、この数字は凄いな!

諒「一カ月ちよいしか経ってないのにな!」

本当だぜ!!

だが、今回はオリジナルストーリーを作ってみた!!

スバル「オリジナルストーリーって?」

CR新世紀エヴァンゲリオン 最後のシ者 に出てくる『おめでと
うリーチ』をこの作品に出てくるキャラでやってみた!!

全員「おおー!!!!」

あまり期待するなよ!!

それじゃあ、スタート!!

スバル「僕はここにもいいのかもしれない…」

ピキッ

スバル「そうだ…僕は僕でしかない…」

ピキッ

スバル「僕は僕だ…僕でいたい。」

ピキッ

スバル「僕はここにいたい！」

ピキッ！

スバル「僕はここにもいいんだ！！」

ガシャーン！！

全員（スバル以外）「うわあああああ！！！！」

パチパチパチパチ（ry

諒「おめでとう！」

なのは「おめでとう！」

フェイト「おめでとう。」

ティアナ「おめでとう。」

暁「おめでとう」

ミソラ「おめでとう！」

ゴン太「めでたいなあー！」

はやて「おめでとうさん！」

すずか「おめでとう！」

ツカサ「おめでとう！」

キザマロ「おめでとう！」

委員長「おめでとう！」

光子朗「おめでとう。」

大吾・アカネ「おめでとう。」

スバル「……ありがとう」ニコッ

母に、ありがとう

父に、さようなら

そして、全ての読者に

ありがとうー!!

ザア・・・ザア・・・

松上「おめでとう。」

どうゆっ?

全員「全員出ている感想が言えない!!」

じゃあ、皆さん!!

今回の話の役割を最後に言っておきます!!

シンジ 星河スバル

ミサト 新井諒

アスカ 高町なのは

レイ フェイト・新井

リツコ 新井ティアナ

加持 暁シドウ

ヒカリ 響ミソラ

ケンスケ 牛島ゴン太

トウジ 八神はやて

ペンペン 月村すずか

日向 双葉ツカサ

青葉 最小院キザマロ

マヤ 白金ルナ

冬月 泉光子朗

ゲンドウ 星河大吾

ユイ 星河アカネ

カヲル 松上

暇があれば、これの前を書きます!!
それではみなさん!!

全員「ありがとうございます!!」

PV100000越え及びユニーク100000越え記念!! (後書き)

武御雷さんありがとうございました!!

今回の記念を作れたのも皆さんのおかげです!!

ありがとうございました!!

次回 第4の刺客!

それじゃあ次回もお楽しみに!!

第55話 第4の刺客（前書き）

短いが気にしたら負けだ!!

.....すいません、調子に乗りましたort

今回名言を覚えてくれたのはムラサメさんです!!

NARUTOで

『オレは火影になるまでぜってエ死なねーからよ!!』

Byナルト

『ボクの親友を馬鹿にすることはどんな高級な料理の最後のひと口を横取りされることよりデブってバカにされることより許せない！』

Byチヨウジ

ありがとうございました!!

第55話 第4の刺客

side 諒

男子とO・H A・N A・S H Iした翌日

俺達は学校に向かっている

スバル「それにしても、昨日は某管理局の白い悪魔の得意技である『O・H A・N A・S H I』をしちゃったけど、皆大丈夫かな？」

なのは「私は白い悪魔じゃないもん！！」

スバルの言葉に、俺の右腕に抱きついているなのはが否定した

はやて「やからなのはちゃん、誰もなのはちゃんに言ってないって。」

俺の左腕に抱きついているはやてが言った

なのは「言わないと神様（読者）が勘違いするから！！」

諒「なのは、メタ発言はやめろ。」

そんな感じで談笑しながら教室に入った

先生「おいお前達！！遅刻だ！！早く席につけ！！」

先生が俺達に怒鳴りながら言ってきた

ツカサ「おかしいね、まだチャイムも鳴ってないし、それに、先生

が怒鳴るなんて何かあったに違いないしね（ボソッ）」

「諒「確かに、だが、今は先生の言う通りにおこうぜ（ボソッ）」

俺は皆に小さく呟いて席に座った

先生「学校長により、このクラスにも強化プログラムをする事にした。無論、反論は許さん！！」

先生がそう叫ぶとクラスが騒ぎだした

よくよく考えれば男子が全員出席してるよ・ギャグ補正だからか？

だが、先生の様子からしてしてリブラが来たわけだな

先生「うるさい！！今直ぐ始めるぞ！！」

そう言つて先生は強化プログラムを始動させた

諒「！？皆、直ぐに席から離れる！！」

俺の言葉を聞いてなのは、フェイト、はやて、ティアナ、ミソラ、スバル、ツカサは自分の席から離れたが、その他の生徒は強化プログラムのお餌食になった

先生「全ては平等に判決しなければならない！！」

そう言つて先生は電波変換し、リブラ・バランスになり、何処かに行つた

諒「ありや完全に体に乗っ取られてやがる！！早くあいつを倒さない
いと皆の頭がペアになっちまう！！ツカサは他の先生にこの事を伝
えて現実からどうにかしてくれ！！他の奴は俺と一緒にリブラの所
に向かうぞ！！」

全員「了解！！！！」

ツカサ「じゃあ、僕は職員室に行ってくるよ！！」

そう言つてツカサは教室から出て、走つて職員室に向かった

諒「皆行くぞ！！電波変換！新井諒、オン・エア」

なのは「電波変換！高町なのは、オン・エア」

フェイト「電波変換！フェイト・新井、オン・エア」

はやて「電波変換！八神はやて、オン・エア」

ティアナ「電波変換！新井ティアナ、オン・エア」

スバル「電波変換！星河スバル、オン・エア」

ミソラ「電波変換！響ミソラ、オン・エア」

俺達は電波変換し、リブラの後を追い掛けた

第55話 第4の刺客（後書き）

今回も次回予告だけ

次回 VSリブラ・バランス

お楽しみに!!

第56話 VSリブラ・バランス(前書き)

早ツ!!だが、次回から『目指せ、4ページ!!』をレゾンにします!!

頑張ります!!

今回名言を教えてくださいたのは遊戯王さんです!!

バトルスピリッツブレイヴで

『救えるものは全て救う』

Byバシン ダン

ありがとうございました!!!!

第56話 VSリブラ・バランス

side 諒

諒「8 23!!」

スバル「ビックバン!!」

なのは「ゆううつ!!」

フェイト「下関条約!!」

はやて「be going to!!」

ティアナ「ファイナルフォームライド クウガ!!」

いきなり何を叫んでるか解らないよな？

今回はちゃんと説明するぜ！

俺達は電波変換した後、リブラを追い掛けサイバーインした

その電腦はやはり、勉強の問題が俺達の邪魔をしていた

しかも、内容が高校生レベルまでの問題が出るのでミソラは答えらるはずもない

しかも、俺達も完全に高校の勉強内容を全部覚えていない

なので、俺達は得意教科だけの問題を答えている

俺は数学、スバルは理科、なのはは国語、フェイトは社会、はやて

は英語、ティアナは一般常識(?)を担当している

ミソラは何かあると嫌なので、俺がおんぶしている

説明しているとまた前から問題が来た

問題「1919年に結ばれた条約は？」

はやて「社会はウチの担当や！！答えは“ベルサイユ条約”や！！」

こんな感じに問題を解いていった

背中に乗っているミソラは「凄い」とだけ言っていた

リブラ・バランス「ほう、あの問題を解いて此処に来る奴がいるなんてな・・・」

本当にムカつく奴だな、存在が気に入らねえがスバルの戦いの経験を取りたくないから俺達は戦闘には不参加

スバル「リブラ・バランス！！先生の体を返してもらおうぞ！！行くぞ、ヒカリ！！ヤミ！！」

ヒカリ・ヤミ「はい（ああ）！！」

スバルはそう言い、白の剣と黒の銃を出した

リブラ・バランス「私にかて「月牙天衝！！」グハッ！！」

あれ？何でスバルが月牙天衝を使えるのかな？

俺一度もスバルに教えた事ないのに・・・

しかも、人（？）が話してる途中に攻撃するなんて、スバルのキャラが完全に壊しちゃったな・・・

スバル「僕は、お前みたいに人の体を無理矢理使う奴が、大嫌いなんだ!!!お前の話なんか聞きたくない!!!さつさと消える!!!全力全開!!!!スターライト……」

あれ？スバル君が、なのはの必殺技を使おうとしてるのは、俺の気のせいかな？

リブラ・バランス「ま、待ってK「ブレイカー!!!!」ぎゃああああああ!!!?」

気のせいじゃなかった……

皆の顔を見ると俺と同じで茫然としていた

リブラ・バランス「グハツ……」

リブラ・バランスも凄いな、管理局の白いあk「私は悪魔じゃないよ!!!」人の心の中を読むなよ……

スバル「まだ生きてたんだ……次で死ぬ!!!!雷光一閃!!!プラズマザンバー……ブレイカー!!!!」

リブラ・バランス「ぐああああああ!!!!!!?」

次はフェイトの必殺技かよ……
お前は一体どうして皆の技が使えるんだ？

スバル「まだ死んでないよね!!!響け終焉の笛!!!ラゲラノク……
ブレイカー!!!!」

今度ははやての必殺技かよ……

もう、驚くのに疲れた

リブラ・バランス」

「！！！！！！？」

ツ！！

リブラ・バランスはこの世の言葉とは思えない言葉を叫んだ

スバル「次で完全に消してあげるよ！！絶望を砕く光！！シャイニング……ブレイカー！！！」

……帰ってきたらお話な、スバル

勿論、O・H A・N A・S H Iじゃないぜ

リブラ・バランス」

「

リブラ・バランスは何も叫ばずに消え、先生だけが残った

……今回は同情するぞ！！リブラ！！

第56話 VSリブラ・バランス（後書き）

久しぶりです皆さん、作者の松上です！

諒「久しぶりだな皆！主人公の諒だ！」

すずか「お久しぶりです皆さん、後書き限定キャラのすずかです！」

まずは！

3人「遊戯王さんありがとうございました！！」

それにしても、もう80話更新かぁー

諒「一カ月ちょいで80話更新って凄くないか？」

わからんが、俺的には頑張った方だと思っぜ！！

諒「まあな。それにしても、ペガサス・レオ・ドラゴン編もあと少しだな！」

ああ！！頑張って6月中には終わらせるぜ！！……………只、中間テストが6月に……………

諒「……………頑張れ！」

……………はあ、頑張ってみるよ
それじゃあすずか、頼むな！！

すずか「はい！！
次回 スバルの新しい力 なんか最近、俺達の正体知る人増えてね
？」

それじゃあ

諒「次回も！！」

3人「お楽しみにー！！」

コラボ大募集！！（前書き）

お願いと言っか何と言っか・・・

まあ、題名から解るようにコラボ大募集中です

コラボ大募集!!

コラボ大募集!!

諒「いきなり過ぎて解らん!!ちゃんと説明しろ!!」

解ったよ・・・

前から後書きなどと言っていましたが、『流星のロックマン 絆物語』とコラボしてくれる小説を大募集しています!!

諒「最初からそう言わないと解らんだろうが・・・」

すまん・・・

それじゃあ皆さん!!コラボしてくれるのを待ってまーす!!

諒「まあ、頼むな!!」

それじゃあ!!

2人「待つてまーす!!!!」

言い忘れていましたが、自分が書いている『デジモンアドベンチャー』転生したらこうなった『もよろしく!!』

諒「最後に宣伝しやがったよ、こいつ!!格好良く終わりたかったのに!!」

それじゃあ、次回もお楽しみにー!!

諒「無視しやがった!!」

コラボ大募集！！（後書き）

コラボ待ってまーす

それじゃあ

第57話 スバルの新しい力 なんか最近、俺達の正体知る人増えてね？（前書

スバルの新しい能力チートの発表！

なのに、短いよ・・・

今回名言を覚えてくれたのはムラサメさんです！！

NARUTOで

『力を持てば孤立するし傲慢にもなってくる

最初は望まれ求められていたとしてもだ』

Byイタチ

るろくに剣心で

『剣は凶器

剣術は殺人術

どんなに綺麗事やお題目を口にしてもそれが真実けれども、拙者は
そんな真実より薫殿の言う甘っちょろい戯れ言が好きでござるよ』

By剣心

ありがとうございます！！

第57話 スバルの新しい力 なんか最近、俺達の正体知る人増えてね？

side 諒

あの後、教室に戻ると他の先生が来ていて、「今日は臨時休校にします、速やかに家に帰ってください！」と言われたので、俺はいつものメンバーを連れて展望台に来た

諒「・・・さて、スバルに聞く！！どうして、お前が俺達の技を使えるんだ？」

技を使った事に関しては怒っていない
だが、“教えてもないのに使える”という事に関して疑問を持っている

スバル「・・・実は、僕は一度見た技を自分の技として使えるみた
いなんだ。」

コピー忍者 スバル誕生？

・・・チートか!!!？

一度見た技を自分の技にするなんて、写輪眼だろ!!!
いくら記憶力がいいからって、そこまで覚えれるものなのか!？

・・・待てよ、俺もなのは達の技を見れば使えるかも？

そして、パラレルモンの力を使って平行世界に行つて、写輪眼で技
を見れば使えるかもしれない!!!

写輪眼バンザイだな!!!

よし、明日から行つてみるか？

いや、だがFM星人がいつ来るかもわからんから、アンドロメダを
倒してからの方がいいか？

そうだな!!!アンドロメダを倒した後は、2カ月もブランクがある

からその時に行けばあいか!!
そうだ、そうしよう!!

スバル「えっ……と、諒君、大丈夫？」

今後の計画を考えていたせいか、ずっと無言だったようだ

諒「大丈夫大丈夫!!ありがとな、スバル!!」

スバル「????一体、何の事？」

諒「気にするな!!」

ツカサ「変な諒君だね……」

自覚はあるが、そこまで変じゃないぜ!!

ミソラ「取り敢えず早く家に帰ろうよ。お腹が空いたよお。」

うっ、可愛い……

お持ち帰りしたい……家一緒じゃん!!
だけど、スバルの嫁なんだよなあ

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「諒くん(君)(お兄ちゃん)
……」

やばい、殺される!!!

諒「すみません!!家に帰ったら何でもしますから、許してください
い!!!ort」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラ「それなら許す!!」

何故ミソラまで反応するんだよ・・・

まあ気にしないがな・・・

諒「さつさと帰」「新井ー!!!」先生!？」

何故先生が此処に？

先生「よかった、お前達にお礼が言いたかったんだ。」

まさか・・・ばれちゃった？

先生「今日はすまなかった!!私が宇宙人に乗っ取られてしまって、お前達に攻撃してしまった!!!本当にすまなかった!!!」

このパターンは確定だな・・・

諒「もういいですよ。」

先生「だが本当にすまなかった!!」

ループしそうだな・・・

諒「だったら、俺達の正体を黙ってください。正体を知られるとめんどくさいですから」

その後も色々言われたが、何とか黙ってもらえた
今回もブラザーになったがな・・・

翌々考えれば、FM星人と戦う度に正体がばれてるよな・・・
まあいいがな・・・

第57話 スバルの新しい力 なんか最近、俺達の正体知る人増えてね？（後書

どーも、作者の松上です！

諒「主人公の諒だ。」

すずか「後書き限定キャラのすずかです！」

まずは！

3人「ムラサメさんありがとうございました!!」

なあ、諒？

諒「どうしたんだよ、急に・・・」

俺さ、もしものストーリーを作ってみたいんだ・・・

諒「もしものストーリー？」

ああ、お前が“流星のロックマン”じゃなくて、違うアニメの世界に行っていたらどうなっていたかっていう話だ

諒「まさか、それも毎日更新なのか!？」

いや、それはネタが思い浮かんだときだけ更新する予定だ

諒「どんな世界に行くんだよ？」

予定では『NARUTO』『ポケットモンスタースペシャル』『魔法少女リリカルなのは』『TOLLOVER』『新世紀エヴァンゲリオン』『家庭教師ヒットマンREBORN』『めだかボックス』などだな

諒「お前の趣味全開だな・・・」

ほっとけ!!

すずか「そろそろ次回予告していいかな？」

あ、ああ

じゃあ頼む!!

すずか「はい!!」

次回 目指すは平行世界？」

それじゃあ

諒「次回も！」

3人「お楽しみにー!!」

第58話 目指すは平行世界？（前書き）

今回は平行世界に行くまでの話です

今回も短いですがね・・・

今回名言を覚えてくれたのはジエスター「アーカムさんです!!」

金色のガツシュ!で

『どちらかが死ぬのではない、全てを助けるのだ!!』
BYガツシュ

『どっちが強大かじゃねえ!どっちが大切かだ!!』
BYテッド

『運命や障害に立ち向かわないでなにが王だ!!』
BY高嶺清麿

『何かが変わるきっかけを生み出せるのは、腕に力があるヤツじゃ
ねえ。心に力があるヤツだ・・・』
BYバリー

ありがとうございました!!

第58話 目指すは平行世界？

side 諒

リブラ・バランスの戦いの翌日

今日は学校は臨時休学になった

まあ、昨日の事件をコンピューターのミスと見たらいいので、今日は全ての機械のメンテナンスをするらしい

諒「……………暇だ!!」

口にも出したように、俺は今家でゴロゴロしている

なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラは、デパートに買い物に行き、夕方まで帰ってこないらしい

スバルは、アカネさんと一緒に知人を尋ねて行って、コダマタウンにはいない

ツカサは、ドリームアイランドのゴミ掃除でいない

ゴン太・キザマロは、うるさいのに呼ばれて何処かに行った
なので、物凄く暇なわけだ

諒「オヒュカスが来るのもうちよつと先だし、かと言って特訓は影分身がしてるし……………する事がねえ！」

何もする事がないので、叫ぶ事しかない

フォルテ「うるさいぞ、諒。」

フォルテに怒られたが、する事がないのでしょうがない

諒「じゃあ暇潰しになるような事を考えてくれよお。」

他人任せと言われてもしょうがないが、暇が有り余っている人はこんな状況だと、何も考えれなくなる

フォルテ「だったら、平行世界に行けばいいじゃないか。」

・・・え？

フォルテ「昨日、スバルの話を聞いて平行世界に行こうとしたんだろ？ だったら、今行けばいいじゃないか。今日は、夕方までなのは達は帰ってこないんだろ？ こういう時間に平行世界に行って、友を作っておけば、将来に役立つんじゃないか？」

フォルテ「・・・お前・・・」

諒「お前は天才か!？」

フォルテ「誉めても何も出ないぞ。・・・それで、行くのか、平行世界に？」

言わなくても解ってるだろ？

諒「行くに決まってるだろ!!」

さーて、最初に行く平行世界ならあいつ(、)、()がいる世界だろ!!

フォルテ「よし、なら早く行くぞ!!」

諒「了解!! 電波変換! 新井諒、オン・エア! デジモンダウンロー

ドー！対象デジモン、パラレルモン！！」

俺は電波変換し、アフロディから貰った“デジモンになる力”を使い、パラレルモンの力をダウンロードした

諒「これで準備完了だ。それじゃあ行きますか！！」

俺はそう言い、平行世界の扉を出して中に入った

諒「（元気かな・・・光子朗は・・・）」

そう思いながら、平行世界に向かった

第58話 目指すは平行世界？（後書き）

最近、ネタが浮かばない作者の松上です

諒「ネタに付き合つのが疲れた主人公の諒だ。」

すずか「そんな二人の姿を見るに耐えない、後書き限定キャラのすずかです！」

まずは！

3人「ジエスター」アーカムさんありがとうございました！！」

イナズマイレブン3 世界への挑戦 ボンバー 目標達成！！

諒「何を達成したんだよ？」

フッフ、聞いて驚くな！！

全キャラのレベル99にしたんだ！！

諒「暇人か、お前は・・・」

な！？いいじゃないか！！気付いたらレベル99になっていたんだ！！！！

諒「あっ・・・そ！」

うわーん、すずかあ、諒が苛めてくるよお！！

すずか「諒君！！松上君を苛めないですよ！！」

諒「今の会話を聞いて、何時俺が、松上を苛めたあ！！」

すずか「私は今から松上君を慰める！！次回予告は諒君がやっててよね！！・・・行こうか、松上君？」

すずかあ！！

諒「もう勝手にしてる

次回 久しぶりの対面

それじゃあ次回もお楽しみにー！！」

すずかあ！！

すずか「よしよし、泣かないで。」

諒「・・・・・・・・」

第59話 久しぶりの対面（前書き）

久しぶりに長くなった

短い日と長い日の差が激しすぎる・・・

でも、頑張った！！

今回名言を覚えてくれたのはスイさんです！！

ハヤテのごとく！！で

『けど人生の9割は、きつと・・・思い通りにならない事ばかりだから・・・その想いはどんなにがんばっても・・・届かないかもしれないわ。だから人は、どんな願いも叶えてくれる・・・神様の力みたいなものを求めてしまうけど・・・でもいいのよ。想いも願いも通じなくても。たとえ・・・どんなに願いが通じなくても・・・悲しい夜に・・・側にいてくれる誰かがいるなら、その人はそんな不幸になつたりしないわ・・・』

By 桂 雪路

ありがとうございました！！

.....

.....

諒「成る程、すっかり忘れてた！」

人って、信じられない状況になると周りが見えなくなるって聞いたが、まさか本当だったとはな！！

フォルテ「早くしないと死ぬぞ。」

！！？

諒「ゴッドブレイク！！！！！」

俺はゴッドブレイクの翼を出し、ゆっくり降下していった

諒「フォルテ、この世界の西暦、日付、場所、時間を教えてくれ。」

俺は無事に降りる事が出来て、人目の無いところに行き、フォルテに聞いた

フォルテ「2003年3月27日午後2時36分48秒、場所はお台場だ。」

そうかぁ、2003年・・・2003年・・・2003年！！！！？

諒「原作終わって、まさかの劇場版かよ!!!!!!.....よくよく考えれば、アーマーゲモンを俺が倒しても原作に全く支障が無いわけだから.....倒すか!!!そうと決まればお台場中学校に行くぜ!!!!!!」

光子朗ともそこで会えるだろう!!

そう思いながら、お台場中学校に向かった

諒「すうー.....はあー.....すうー.....はあー.....」

俺はパソコンルームの前で深呼吸している

やはり、2年ぶり(?)の再会だからか、かなり緊張している
だが、いつまでも此処に立っているわけにもいかないので、勇気を
出して扉を叩いた

ココココン

「デジデジ?」

中から暗号らしき物が聞こえた

俺は、この暗号らしき物の答え方を知っている
さてどうする.....

1・暗号に答えて中に入る

2・あえて知らない振りをして中に入る

・・・2だな

諒「何を言ってるんだ？中に入るぞ！」

そう言う中から「少し待ってください！！」と言われ、急に中が騒がしくなった

しかも、かなり焦っているのか、会話が外に聞こえてくる

「テイルモン、此処に入って！！」

「パタモンはこっちだ！！」

「ホークモン、もっと奥に入りなさい！！アルマジモンが入らないでしょ！！」

「アルマジモン、もっとホークモンとくっついて下さい！！」

「ワームモンは外に出ていてくれ。」

「えっと、えっと！！」

「大輔、この下にブイモンを隠せ！！！！」

「ありがとうございます、太一さん！！」

シーーン……

やっと静かになった

「ど、どうぞ!!」

そう言われたので俺は中に入った

中に入ると、選ばれし子供が俺の顔を見ていた

俺は光子朗の所に歩いて向かった

諒「久しぶりだな、光子朗。」

俺は光子朗に話し掛けた

光子朗は俺の顔をまじまじと見ていた

光子朗「ま……まさか、諒君ですか？」

諒「ああ！真正正銘、お前の親友の新井 諒だ!!」

そう言うと俺は右手を光子朗に出した

光子朗は俺の手を見ると、自分の右手で握手してきた

光子朗「久しぶりです!! 皆さん、彼は僕が平行世界に飛ばされた時に助けてくれた人です!!なので、デジモンの存在も知っています!!」

光子朗がそう言うとデジモン達が色んな所から出てきた

ブイモンは机の下から、ホークモンとアルマジモンは小さいロッカーの中から、テイルモンはカバンの中から、パタモンは引き出しの中から、ワームモンは窓の外から出てきた

諒「じゃあ、まずは自己紹介だ。俺の名前は新井 諒。小学校5年で、光子朗とは2年前に会った。デジモンの存在は知ってるし、戦う事も出来る。多分……いや、確実にオメガモンやインペリアルドラモンより強いぞ!!」

俺かそう言つとゴークルをした少年、本宮大輔が笑いだした

大輔「はははははは!! オメガモンやインペリアルドラモンより強いだつて? 冗談が上手いんだな、お前は!! はははははははは!!」

光子朗「大輔君、諒君の言ってる事は本当ですよ。以前話したように、諒君は3年の頃、あの『キメラモン』……いや、『キメラモン』と『ムゲンドラモン』がジヨグレスした『ミレニアモン』を簡単に倒すことができるんですから。」

大輔「えっ……嘘?」

大輔は、光子朗の話を聞いて笑うのをやめた

諒「倒してないって、倒せそうだったのに進化したじゃん。結局、ミレニアモンが進化した『ズイードミレニアモン』だつて皆で倒したもんだしな。」

俺は光子朗の話に補足を付ける

俺が補足を付けると、デジモン達が俺の周りに集まってきた

「なあ、どうやったら強くなれるんだ？」

青色で額にVのマークがあれ小さな小竜、ブイモンが聞いてきた

諒「俺は守りたい人がいるから強くなれる。お前等もそうだろ？」

俺が強いわけは、皆を守りたいから

人は、誰かを救おうとした時に凄い力を出せる！！！！・・・っ
て誰かが言ってた

俺が聞くと、デジモン達は頷いた

だが、余り時間もないので光子朗に目で合図した

光子朗は、俺の合図を受け、前のモニターに画像を出した

光子朗「皆さん、これを見てください。」

モニターに映し出されたのは、カメラにピースをしている太一の写真だった

大輔「ぷぷぷ、誰コイツww」

太一「すまん・・・俺だ・・・」

ぷぷぷ、大輔ダッセーww

光子朗「ネット中にはらまかれているようです。」

モニターの写真が太一から替わり、ヤマトと空の写真になった
やっぱこの世界でもヤマトと空が付き合ってるだな・・・

まあ、俺には関係ないがな!!

京「あ、悪質なイタズラですよね!!?」

イタズラなら既にばれてるだろ・・・

光子朗「ディアボロモンが復活したようです。」

まあ、俺にかかれば秒殺だがな!!

大輔「ディアボロモンって・・・」

京「3年前に現れた・・・」

伊織「オメガモンが倒したんじゃないんですか?」

オメガモンに倒されたが、生き残ったデータが増殖した・・・

ヤマト「倒したはずなのに・・・」

太一「奴はまだ生きていた。」

光子朗「3年前に生き残ったデータが増殖して生き長らえたんだと思います。しかも奴は、この写真と同時にクラモンを現実世界に送り込んでいます。」

そうやってパソコンの画面を俺達の方に向けた

大輔「だ、大丈夫なんですか?」

大輔、びびり過ぎだろ・・・

そんなにびびってたらヒカリの好感度が減るぞ

まあ、結婚は出来ないんだがなww

光子朗「大丈夫です、これはキャプチャーしてもらったやつですから。」

そう言っつてパソコンの画面を自分の方に向け直し、画像を削除した

タケル「核ミサイルまで発射させた奴だからね・・・」

パタモン「現実世界に出てきたら、何をしでかすかわからないよ！」

俺がいるからそんな事はさせないが、念には念を入れて用心しとくか・・・

太一「光子朗、ネットの中にゲート開けるか？」

ヤマト「何処かにクラモンを送り込んでいるマザーが居るはずだ。」

太一「そいつを叩く!!」

「俺も行く!!」

太一がそう言っつとヒカリが立ち上がりついて行くことと言おうとしたが、大輔に遮られた

大輔・・・ドンマイ

太一「大輔、お前達はクラモンの方を頼む。もし奴らが、現実世界

で進化したら大変な事になるからな。」

確かに太一の言う通りだが、進化しないんだよな・・・

光子朗「そうですね、やはり此処は、オメガモンに任せようがいいでしょう。太一さん、ヤマトさん、ネットの途中でアグモン達と合流してください。」

光子朗がそう言うと、太一とヤマトは光子朗の所に向かった

俺はヒカリの顔を見ると、心配そうな顔をしていた

少し元気づけますか・・・

諒「大丈夫だって！俺達は俺達が出来ることをやろうぜ。」

そう言うと、ヒカリの顔は大分マシになった

光子朗「皆さんはクラモンの方を頼みます。くれぐれも攻撃して、進化させないように・・・」

確か二人一組だったよな・・・

俺はどうすればいいんだ？

光子朗「あつ、諒君は太一さん達と一緒に行ってください。」

まじかよ・・・

第59話 久しぶりの対面（後書き）

『けいおん！』完全制覇した作者の松上です！！

諒「どうも、主人公のりょうだ。いきなりどうした？」

すずか「ポケットモンスター ハートゴールドでポケモンリーグを完全制覇した後書き限定キャラのすずかです！！」

まずは！

3人「スイさんありがとうございます！！」

しかし、02に来たな・・・

諒「02でも劇場版だぞ。」

まあな

諒「すずかの完全制覇は解るが、お前のは解らん。」

俺はアニメ『けいおん！』をわざわざパソコンで見て、全話見たから完全制覇ってわけ

諒「ふーん。次は何を見る気なんだ？」

『ゼロの使い魔』か『ぬらりひよんの孫』の予定だ

諒「また深夜アニメか・・・」

しょうがないだろ!!

俺は中学3年まで9時就寝だったんだから!!

諒「早ッ!!」

まあ、今は何時まで起きててもいいがな
それじゃあすずか!!頼むな!

すずか「はい!!」

次回 VS アーマーゲモン パート1

それじゃあ

諒「次回も!」

3人「お楽しみにー!!」

第60話 VSアーマーゲモン パート1(前書き)

風邪気味だ・・・

今回も長い・・・

今回は名言コーナーをお休みします

本当にすいません

第60話 VSアーマーゲモン パート1

side 諒

俺は太一達と一緒にディアボロモンの所に向かってる

太一「諒、お前が本気になればオメガモンを倒せるって言っていたが……本当なのか？」

太一が俺に聞いてきた

諒「さあ、オメガモンと戦った事がないからわかんねえすよ。だが、俺の方が強いと思うすよ。」

チートだしな

太一「そうか……頼りにしてるぞ!!」

頼りにしてるって……

諒「俺はディアボロモンの事を知らないから、俺はあくまでサポートすよ。」

俺がそう言うとパスワードが出てきた

太一「……いくぞ!!!」

そう言うと太一のデジヴァイスとヤマトのデジヴァイスが光ったそして、アグモンはウォーグレイモンの頭に、ガブモンはメタルガルルモンの頭になって、太一とヤマトはそれぞれの頭の上に乗った

諒「それじゃあ、俺もいきますか！！デジモンコンプリート！！デュークモン！！」

ここで少し説明しておくぜ！

デジモンの力を使う時には2種類の方法がある

1つはダウンロード

ダウンロードは、デジモンの力や能力、武器などと言った1つの力を使う場合

もう1つはコンプリート

コンプリートは、対象デジモンの全ての力を使う事ができる場合

但し、ダウンロードと違ってコンプリートは体に与える疲労がかなり大きい

しかも、デジモンのレベルが高ければ高いほど疲労は大きくなる

説明終わり！！

太一「それがお前の姿か？」

諒「違うに決まってるだろ！！これは俺の力！！」

ヤマト「見えてきたぞ！！」

太一に突っ込んでいたら、ヤマトが教えてくれた

ああ、生のオメガモンが見れる！！

テンションが高くなってるのが、自分でも解る！！

そして、広い空間に入った瞬間、ウォーグレイモンの頭とメタルガールモンの頭が合体して、オメガモンにジョグレス進化した

太一とヤマトは、それぞれオメガモンの肩に乗っている

諒「生のオメガモンきたー！！！！！！」

俺は感動の余り叫んだ

太一「諒……お前、変わってるって言われるだろ？」

諒「少なからず！！」

ヤマト「はあー、何でお前は緊張感がないんだよ……」

太一の質問に答えると、ヤマトに呆れられた

諒「緊張したってしょうがない！！！！それに俺は早く帰って遊びたい！！！！」

俺がそう言うと、太一とヤマトはこけた

よく、オメガモンの肩から落ちなかったな

そう思っていると、クラモン達が俺達の周りに集まった

諒「俺の周りに集まっているのは親友だけじゃー！！！！ロイヤルセーバー！！！！」

俺はクラモン達にロイヤルセーバーを使って、大量に消した

諒「何してんすか！？早く消しちゃいましょう！！！！」

太一「（敵に回さなくて良かったな、ヤマト）あ、ああ。」

ヤマト「（当たり前だろ、太一）じゃ、じゃあいくぜ！！！！」

俺達はクラモンを消していった
時々、奥の黒い球体からディアボロモンが出てきていたが、無視っ
てやったぜ!!

諒「全然減らねえ!!!」

ずっとクラモンを消しているのに、全然減る気配がない
やっぱり、原作通りにディアボロモンを倒さないといけなさそうだ
な……

そうと決まれば、ヒカリ達が来る前「お兄ちゃん!!!」遅か
った……

いや!!大輔達が、京にゲートを開けるよう頼んで、沢山ゲートを
出しすぎてクラモンが現実世界に出る

それまでにディアボロモンを倒せば!!?

アーマーゲモンは、正直倒したかったが、映画以上の強さだったら
やばいしな……

そう思っていたら、クラモンが俺達に攻撃してきた

諒「考えごとぐらいさせろやー!!!ロイヤルセーバー!!!」

俺はロイヤルセーバーを乱射した

あつ、勿論太一達に当たらないようにだけ

本当だからな!!

信じてくれよな!!

京「ビンゴ、ビンゴ、ビンゴ……!!」

・・・遅かった
もうやけだ!!

諒「エンジエモン、エンジエウーモン!!!ディアボロモンをあ
の黒い球体から出す!!手伝ってくれ!!」

エンジエモン・エンジエウーモン「了解!!!オメガモン、頼む
わ)!!!」

クラモン達はディアボロモンに危険を感じたのか、ディアボロモン
を自分の体で護るよう固まった

諒「そんなの無駄じゃー!!!おらあ!!!!!!」

俺はエンジエモンとエンジエウーモンと一緒に、クラモンのバリア
に体当たりして行き、黒い球体を壊してディアボロモンを外に出した

ヒカリ「お兄ちゃん!!」

太一「おう!!」

ヒカリの合図に太一が反応して、オメガモンがディアボロモンにゲ
レイソードで刺した

タケル「兄さん!!」

ヤマト「おう!!」

今度はタケルの合図にヤマトが反応し、オメガモンはグレイソード
を刺したまま、ガルルキャノンでディアボロモンの腹にくっつけ、

弾を撃った

それにより、ディアボロモンは死んだ
だが、死んだ事によってディアボロモンが保険に残っていたクラモンがデータから物質化した

そして、京が開けたゲートの中に入っていった
しかも、ゲートがどんどん閉じられていった

太一「ゲートが・・・」

ヤマト「閉じられていく・・・」

太一とヤマトはこの事に呆然していた
ゲートが全て閉じられた時、暗くなった空間にエンジェウーモンの体が光りだした

ヒカリ「どうしたの？」

エンジェウーモン「心配しないでヒカリ、私に任せて。」

此処から、どうやって出るのか知らないから任せるか・・・
そう思いながら、エンジェウーモンを見た

諒達がディアボロモンと戦う前・・・

side大輔

大輔「なあ、賢？」

俺は、一緒に行動している仲間の一乗寺 賢に話し掛けた

賢「どうしたんだよ？」

大輔「あの諒って奴・・・オメガモンやインペリアルドラモンに絶
対勝てるって言ってたよな・・・お前はどっと思っ？」

俺はオメガモンやインペリアルドラモンが、負けるのを認めたくな
かった

賢「彼の言っていたように、僕達じゃ勝てない。」

賢から返ってきた答えは、『負ける』だった

大輔「な、何言っただよ！？あいつに太一さん達や俺達や負ける
って言うのかよ！？」

賢「落ち着け大輔。彼の目は、幾つもの戦いを乗り越えた目だった。
しかも彼は、デジモン達に『守りたい人がいれば強くなる』って言
ったんだ。強さを求める人間の口から、あんな言葉は出ない。だか
ら、彼は強いと思うよ。」

賢の言葉を聞いて俺は何も言えなくなった

p i p i p i p i p i p i ! ! !

「うわー！！！？」

「何じゃー！りゃー！！！？」

「キヤー！！！？」

携帯の画面からクラモンが出てきた

大輔「!? 電車の中で携帯を使うなー!!!」

大輔「勝手に出てきて進化しやがって、しかも攻撃まで!!」

ブイモン「だつてえー。」

俺達はなんとかクラモンを回収し、電車から降りた

賢「まあ、全部回収したんだし・・・」

確かにそうだがよ・・・

大輔「光子朗さんに怒られるかも・・・トホホ。」

俺は駅から出て、クラモンを光子朗さんに送って、電話した

光子朗「ええ!!!? クラモンに攻撃した!!!?」

大輔「そうなんですけど、進化しなかつたんです・・・」

光子朗「進化しない・・・何で・・・」

大輔「取り敢えず、クラモンを探し」大輔、あれ!!!!」何だよブイ・・・!?!?」

俺はブイモンの指差した方を見た

そこには、オメガモンと大量のクラモン、そして騎士みたいなデジモンが映っていた

「また誰かが流してくれたんだよ、あの戦い。」

「俺ん家、パソコン無かったから見れなかったんだよな・・・この前の戦い。」

戦いを見ていた子供達がそう言った

その戦いを暫く見ていると携帯が鳴った

光子朗「大輔君！！太一さんとヤマトさん、それに諒君の援護にヒカリさん達が向かいました！！君達は引き続きクラモンの方を頼みます！！！！」

そう言って電話が切れた

・

・

・

・

大輔「ヒカリちゃんーん！！！」

賢「よせ、此処は光子朗さんの言う通りにするべきだ。」

俺が、ヒカリちゃんを助けに行こうとしたら、賢が俺の服を掴んで
そう言ってきた

大輔「でもなあ！！！」

ブイモン「大輔、あれ！！！」

俺はブイモンに言われ、モニターを見た

そこには、エンジエモンとエンジエウーモンの苦戦している姿が映
っていた

俺はそれを見て、パソコンを持っている人の前に立った

大輔「すいません、それを貸してください！！！」

俺は頭を下げて頼んだ

賢「大輔、何を言ってるんだよ？」

大輔「ヒカリちゃんが苦戦しているんだ。俺達が助けに行くんだ。

・・・お願いします、貸してください！！！」

そう言うとパソコンを貸してくれた

大輔「ありがとうございます！！！」

お礼を言って京に電話を掛けた

大輔「京か？俺達もネットの中に入る！！ゲートを頼む！！」

京「わかった、直ぐに準備するわ！！」

そう言つて電話が切れた

そして、ゲートが開いたので行こうとしたら・・・

ブイモン「大輔、後ろ！！！」

大輔「な、何じゃこりゃー！！！」

大量のクラモンが現実世界に出てきた

ブイモン「大輔、こいつら一体一体捕まえてると進化しちゃう！！」

わかつてるよ！！

俺は京に電話してある事をするよう言った

そしてしばらくして、電工掲示板に文字が出てきた

『クラモンに告ぐ！！東京湾にて待つ。選ばれし子供達』
その言葉を見たクラモン達は、一斉に東京湾に向かった

賢「なんで東京湾なんだ！？」

なんでつて・・・

大輔「こんな町中じゃ戦えないだろ？インペリアルドラモンに乗っ
ていっく「大輔ー！！」「賢ちゃーん！！」ブイモン（ワームモン）
・
・
・」

ブイモンとワームモンは、クラモンに乗って東京湾に向かった
その様子を俺達は呆然として見ていた

第60話 VSアーマーゲモン パート1（後書き）

今回は次回予告だけ・・・

次回 VSアーマーゲモン パート2

次回もお楽しみに！！

第61話 VSアーマーゲモン パート2（前書き）

遂にアーマーゲモンの戦いも終わります!!

今回も長くなつてしまいましたが楽しんでください!!

今回名言を教えてくださいましたのはムラサメさんです!!

ロックマンZXで

『…なら…お前が世界を運べ。お前の信じる未来まで…この世界を送り届ける』

Byジルウエ

『キミが作る未来を…ボクは信じるよ』

ByモデルX

『運命に立ち向かえ

未来を切り開け

それがお前達…

この世界に生きる者全ての戦いだ』

ByモデルZ

ありがとうございました!!

第61話 VSアーマーゲモン パート2

side大輔

大輔「はあ．．．はあ．．．はあ」

賢「はあ．．．はあ．．．」

俺と賢は東京湾に向かって全速力で走っている
何故こんなに全速力で走ってるのかと言うと5分前．．．

京「大輔、クラモン達が大きなデジタマになった!!」

大輔「デジタマ!?ディアボロモンじゃなくてか?」

京「うん!!今、私と伊織しかないから．．．早く来てー!!」

そして今に到る

大輔「はあ．．．はあ．．．俺達．．．間に合うのか?」

賢「はあ．．．はあ．．．君は僕なんかと違って、どんなに追い詰められても諦めなかつたろ。」

俺は立ち止まって弱気な事を言つと、賢も立ち止まって励ましてくれた

p i p i p i p i p i p i p i ! ! ! ! !

俺の携帯が鳴った

大輔「はあ．．はあ．．もしもs」大輔、大変！！デジタマが孵った！！！！』！？解った、今すぐそっちに行く！！賢、デジタマが孵った！！急ぐぞ！！」

賢「ああ！！」

俺達は東京湾に向かって、また走りだした

デジタマが孵る少し前．．．

s i d e 伊織

僕はアルマジモンと一緒に東京湾に来た

伊織「！？京さーん！！」

僕は京さんを見つけ、走った

京「伊織！！今、伊織が来たわ。」

京さんは誰かと電話していた
多分、大輔さんでしょう．．．

ホークモン「ん．．！！？京さん！！」

ホークモンが叫んだので僕は東京湾を見た
クラモンが上空に浮かんでいき、一つになっていった

京「進化が始まった……これでディアボロモンに……」

伊織「違う……」

僕は京さんの言葉を否定した

ピカッ!!

クラモン達は大きなデジタマになった

京「デジタマ……」

伊織「何が……生まれるんだ……」

僕はデジタマを見て呟いた

それから5分が経った

デジタマの様子がおかしくなった

伊織「孵る……」

そう呟いた瞬間、デジタマから一体のデジモンが生まれた

ドカーン!!

デジモンの隣を光線のような物が通った

そして、前には“オメガモン”と“赤いマントを羽織った白い騎士”が立っていた

side 諒

俺達はエンジエウーモンのおかげで、現実世界に帰ってこれた
だが、出迎えてくれたのはアーマーゲモンだった

諒「オメガモン、アイツは強い。協力しないと勝てそうにない。一緒に戦ってくれるか？」

正直な話、デュークモンをコンプリートしてかなり時間が経っている
ので、体がキツくなってきた

俺が聞くとオメガモンは頷いてくれた

諒「じゃあ行くぜ!!」

俺とオメガモンは二手に分かれてアーマーゲモンを攻撃し始めた

先輩は女の子を見た

丈「……待ってくださいーい!!!」

「なに!?なに!?!」

大輔・賢「……はあ。」

俺と賢は、先輩の行動を見て溜息を吐いた

side 諒

オメガモン「うおおおおお!!!」

オメガモンはグレイソードでアーマーゲモンの頭を刺し、ガルルキヤノンを口の中に入れて撃った
しかし

ヒューーン

ドカーーーーン!!!!!!

オメガモン「うわあああああああ!!!?」

ガルルキヤノンは効いておらず、振り返ちにあった
そして、攻撃をくらったオメガモンはそのまま吹っ飛び、太一達が
いる所に落ちた

オメガモン「……あ……ああ」

ドカーーン!!

オメガモンは立ったが、両腕が落ち、目に光が無くなった

諒「ふざけんなー!!!!ロイヤルセーバー!!!!!!」

俺はオメガモンがやられた事に切れ、アーマーゲモンにロイヤルセーバーを放った
しかし

「うわあああああああああ!!!!!!?」

ロイヤルセーバーはアーマーゲモンには効かず、逆に技を使われ、ぶっ飛ばされた

ザバーーン!!!

そして、海に落ちた

side大輔

大輔「オメガモンと……」

賢「諒君が……」

俺達は自転車に乗って東京湾に来た
そして、目についたのは両腕が地面に落ちているオメガモンと、
った今海に落ちた諒だった

ブイモン・ワームモン「大輔ー（賢ちゃーん）！！！」

声が出た方向を見た

大輔・賢「ブイモン（ワームモン）？」

俺達はブイモン達の所に向かうため、人込みの中に入った

大輔「どけて！通せてば！！！」

賢「すみません！！！」

ブイモン達の所に向かおうとしても、人が邪魔をして通れない

大輔「ブイモーーーーーン！！！！！！！！！」

賢「ワームモーーーーーン！！！！！！！！！」

俺と賢は叫んだ

そしたら、皆は俺達の為にブイモン達が居る所までの道を作ってく
れた

「いっけーーーー！！！」

一人の少年がそう言うと、皆も俺達を応援してくれた
俺達は頷き、ブイモン達の所に走って向かった

大輔「いくぞ、ブイモン！！！！！」

賢「待たせたな、ワームモン！！！！！」

ブイモン・ワームモン「おう！！！！！」

ブイモン「ブイモン進化ー！！・・・エキスブイモン！！！！！」

ワームモン「ワームモン進化ー！！・・・ステイングモン！！！！！」

エキスブイモン・ステイングモン「ジヨグレス進化ー！！！！・・・

パイルドラモン！！！！！」

パイルドラモン「究極進化ー！！！！・・・インペリアルドラモン
！！！！！！！」

インペリアルドラモンはデジモンの所に向かった

デジモンは背中からミサイルのような物をインペリアルドラモンに
撃った

そして、インペリアルドラモンはミサイルを直撃した

大輔「まだだ！！！！！」

賢「諦めるな！！！！！」

インペリアルドラモン「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！」

インペリアルドラモンはファイターモードになって、胸から必殺技のギガデスを放った
しかし

インペリアルドラモン「グハッ!!!」

デジモンには効いておらず、デジモンが放った技でインペリアルドラモンはボロボロになった

「そんなあ・・ダメなのか？」

賢「やっぱり僕達じゃ無理なんだ・・・」

誰かが言った言葉で賢は諦めてしまっていた

だが!!

大輔「諦めるな、どんな状況でも俺達は乗り越えてきただろ!!」

賢「・・・あぁ!!!」

俺の言った言葉で賢はまた、希望を取り戻した
そしたら

アグモン「そうだ・・・君達は最後まで諦めなかった!!」

ガブモン「皆の思いを託す!!」

アグモンとガブモンが最後の力を振り絞って、ホーリーリングを出

した
ホーリーリングは大きな白の剣になって、インペリアルドラモンの前に浮かんだ

「諦めんなよ!!」

そんな声が聞こえたと思ったら、海が二つに割れた

そして、その真ん中から赤い何かが上に飛び、インペリアルドラモンの隣に来た

その姿は、十枚の純白の羽根を背中に持っていて、紅蓮の鎧を身に纏っていて、右手に神々しい槍、左手に神々しい剣を持っていた

諒「こんな所で諦めるな!!俺達は護らなきゃいけないんだ!!」

俺はあいつが諒だと解り、インペリアルドラモンに叫んだ

大輔「受け取れ!!!!!!!!!!」

賢「皆の力だ!!!!!!!!!!」

インペリアルドラモンは白の剣を受け取ると姿が変わった
全体が黒から白へ

side 諒

諒「インペリアルドラモン、俺がお前を護る!!お前はあいつを倒すことだけを考える!!!!」

インペリアルドラモン「わかった!!!」

俺はその返事を聞くとインペリアルドラモンの前に出た
そして

諒「いくぞ!!!」

俺達はアーマーゲモンに向かって急降下していった
無論、アーマーゲモンは攻撃してきたが

諒「インビンシブルソード!!!!!!」

神剣ブルトガングでアーマーゲモンの攻撃を斬って、そして俺はイ
ンペリアルドラモンの前から移動すると大輔と賢の声が聞こえた

大輔・賢「いっけーいっけー!!!!!!」

その声と同時にインペリアルドラモンはオメガブレードで!!

グサツ!!!!

アーマーゲモンの頭に刺した

そして、オメガブレードをアーマーゲモンから抜くとそこからクラ
モンが出てきた

オメガブレードの能力は“データの初期化”

つまり、アーマーゲモンの初期はクラモン

なので、クラモンが大量に出てきた

side 伊織

デジモンを倒せたのはいいですが、クラモンが出てきてしまった

伊織「このままじゃ奴らのデータが生き残ってしまう……ごみ箱！？今なら戻せます！！皆さんの携帯で！！」

僕は京さんのパソコンを見て思いつきました

京「ビンゴ……！！」

僕は階段を上り、皆さんに聞こえるように叫んだ

伊織「皆さんの携帯を剣に……剣に集中させてくださーい！！！！」

デジヴァイスの光を剣に集中させながら言った

side 諒

伊織の言葉を聞き、皆が携帯やデジヴァイスをオメガブレードに集中させた

諒「これは俺からだ！！！！受け取れ！！！！」

俺はオメガブレードに神槍グングニルを投げた

そうすると、グングニルはオメガブレードに飲み込まれアルファベ
ット版のデジモン文字『initialize』が光出した

そして、光が東京湾を包み込むとクラモンは消えていた

俺は変身を解き、大輔達の所に降りた

大輔「お疲れさん……」

賢「ありがとう……」

諒「どういたしまし……ふぁーあ」

俺が欠伸をすると大輔達も欠伸をした

諒・大輔・賢「はははははははははは……!……!」

その後、俺達は壁にもたれ掛かって眠った

第61話 VSアーマーゲモン パート2（後書き）

『デジモンアドベンチャー02 ディアボロモンの逆襲』がうまく書いて嬉しい作者の松上です

諒「アーマーゲモン戦ではあまり出番が無かったが、楽しかった主人公の諒だ。」

すずか「連続投稿に驚いている後書き限定キャラのすずかです!!」

まずは!

3人「ムラサメさんありがとうございました!!」

しかし、今回は頑張ったぜ!!

諒「俺も、アーマーゲモンを倒せてよかったと思ってるしな。」

だろ?まあ、次回で02の世界も終わりだな・・・

諒「本編進めないとな・・・」

まあ・・・

それじゃあすずか、頼むな!!

すずか「はい!!」

次回 また会おうな!!」

それじゃあ

諒「次回も！」

3人「お楽しみにー！！！」

第62話 また会おうな!! (前書き)

今回で02も終わりです

短いですがどうぞ

今回名言を覚えてくれたのはケイさんです!!

ゴッドイーターバーストで

『命令は3つ。死ぬな、死にそうになったら逃げる。そんで隠れる。運が良ければ不意をついてぶっ殺せ。・・・ああこれじゃあ4つか悪い悪い』

『さて、俺も生きるためにかっこ悪く足掻いてみるか。背中では預けるぜ?リーダー。』

By雨宮リンドウ

テイルズオブイノセンスで

『もう、バカでいいよ。バカ事しちゃったんだから、もっとバカを通してみる。』

『この素晴らしい世界の中、僕らの旅路は続いていくんだ。未来永劫、来世の先の先まで――』

Byルカ・ミルダ

ありがとうございました!!

第62話 また会おうな!!

side 諒

俺は選ばれし子供達と向かい合って立っている

諒「それじゃあそろそろ帰るわ。」

光子朗「はい、ありがとうございました!!」

全員「ありがとう(ございました)!!」

光子朗がお礼を言つと、皆お礼を言ってきた

諒「俺はお礼を言われることなんかしてねえよ。俺が勝手にやったことだしな。」

光子朗「ですが・・・」

まったく、2年前(?)と全然変わってないな

諒「だったら今度は家族や友達を連れてくるから、その時にお礼をしてくれよ。それでチャラだ!! 勿論、「うん」か「はい」しか答えてはいけないな。」

そう言つと光子朗が笑つた

光子朗「君は全然変わってませんね。」

諒「お前もな!!」

第62話 また会おうな!! (後書き)

やっと終わって一安心している作者の松上です

諒「また会える日を楽しみにしている主人公の諒だ。」

すずか「80話投稿越えをして驚いている後書き限定キャラのすずかです!!」

まずは!

3人「ケイさんありがとうございます!!」

しかし、長かったな・・・

諒「たった3日が長いつてお前な・・・」

すずか「それにしても、80話投稿越えて凄いね!!」

諒「確かな・・・。02が終わったから、次回から本編か?」

ああ、次回から蛇なんだけど・・・

諒「だけど?」

ネタが思いつかん・・・

諒「ネタってお前・・・だが、毎日更新するんだろ?」

勿論！！それじゃあ今からネタを考えるから、今回は此処まで！！
それじゃあすずか、頼むな！！

すずか「はい！！」

次回 コピー開始！！ターゲットはなのは！！」

それじゃあ

諒「次回も！！」

3人「お楽しみにー！！」

第63話 コピー開始！！ターゲットはなのは！（前書き）

明日から中間テスト一週間前なので、更新できない日があるかもしれませんが御了承ください

今回名言を教えてくださいましたのはスイさんです！！

戦国BASARAで

『この幸村、誰の意思でもなく自分の意思で戦おう』

BY真田幸村

戦国無双で

『知っています。貴方の苦しみを、その深さを、その所以を』

BYお市

『百万一心！！百万の矢なら誰にも折れないさ』

BY毛利元就

『鎧は胸にあり・・・強い心こそが何よりの防具なのです』

BY綾御前

『意地か。それも一つの生き様だが・・・人は脆い 大切なものがあるならば、決して手放すな。』

BY長曾我部元親

『義だの友情だの、言葉にせぬと不安か？逃げるな・・・それはただの言葉だ』

『治めるのは義ではない。義の基たる人よ』

B Y 右田三成

ありがとうございました！！！！！

第63話 コピー開始!!!ターゲットはなのは!

side 諒

なのは「デイバインバスター!!!!」

諒「ダークネスオーバーロード!!!!」

ドカーーン!!!!

諒「強くなったな、なのは!!!」

なのは「当たり前だよ、絶対勝ってデートしてもらうんだから!!!」

諒「簡単に負けるか!!!エターナルブリザードV3!!!!」

なのは「負けてもらうの!!!真ファイアトルネード!!!!」

ドカーーン!!!

何故俺がなのはと戦ってるのか解らないよな?

理由は昨日の夜にあるんだ

それじゃあ回想スタート!!!

昨日の夜

なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラ「模擬戦をする?」

諒「そうだ、模擬戦をするんだ。」

俺はリビングに皆に言った

フェイト「でも何で急に模擬戦をするの？」

フェイトが顔を傾けて聞いてきた

フェイトの質問に皆が頷いた

諒「実はな・・・」

(説明中)

・・・てな事があったから模擬戦をするんだ。」

俺は今日(正確には昨日と今日)のアーマーゲモンの事を話した
今のままじゃいつかは負けてしまう

俺だけ強くなっても意味がない

スバルは勿論、なのは達も強くないといけない

その話を聞いた皆は模擬戦する事に賛成してくれたが、はやてはし
てくれなかった

はやて「ウチはいやや!!」

諒「何でだよ、はやて?」

はやて「確かに諒君の言ってることは正しいけど・・・ウチ等
が諒君に勝てるわけないやんか!!」

……確かに

はやて「やから、ウチは諒君と戦うのはいやや!」

諒「うーん……!?じゃあさ、俺と模擬戦して俺に傷を付けたら一つお願い聞くってのはどうだ?」

はやては、一度言った事はどんな事があっても曲げないなので、これしかはやての言葉を曲げさせる言葉が見つからない
そう思いながらはやてを見ると、頭を抱えながら悩んでいた

諒「……はやて?」

はやて「諒君!?!?!?」

諒「は、はい、なんですか、はやてさん!」

はやてが急に大声を出すから、敬語で返事してしまった

はやて「お願いって何でも聞いてくれるんか?」

諒「あ、ああ。俺が出来る範囲なら、何でもしてやるぞ。」

そう言うとはやては笑顔になって俺に抱きついてきた

諒「は、はやて?」

はやて「解ったで!!!倒すのは無理でも、傷一つくらいなら、ウチでも付けれるはずや!!!傷を付けて久々にデートしてもらおうや!

「！」

なのは・フェイト・ティアナ・ミソラ「ずるい(よ)、はやて(ちゃん)！……！」

はやての言葉を聞いて、皆がはやてにずるいと言った

はやて「勿論ウチだけとちゃうで、なのはちゃん達も同じ条件や！
やる、諒君？」

俺にキラークラスをするな！！

ああもう！はやての言葉を聞いて、皆の目がキラキラしてるよ！！
俺は弱くない！！

弱いと言った奴、目の前で4人の美少女の期待を裏切れるか？
裏切れる奴……反省しようか？

諒「はあ……わかったよ。皆も同じ条件でいいぞ。」

俺がそう言つと皆は笑顔になった

なのは「それはそうと、順番はどうするの？」

諒「ジャンケンでいいんじゃないか？1日に何人とも模擬戦できないから、勝った奴順にやっていく形で……」

はやて「ほないくでー！！！！」

俺が言い終わった瞬間、ジャンケンが始まった

なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラ「ジャーケン……」

・ホイ!!!」

・

・

・

・

しばしの沈黙

諒「なあ、誰が勝ったん「やったー、私が勝ったー!!!」なのはか・・・」

5人いて1人勝ちって凄いな・・・

よく考えれば、皆でジャンケンした時って、必ずなのはが勝っていたよな・・・
気のせいかな？

なのは「じゃあ、明日は私と模擬戦だね!!!」

諒「ああ。よろしくな!!!」

そして今に到る

諒「ノーザンインパクトV3!!!!」

なのは「アトミックフレアV3!!!!」

これも引き分け

諒「なのは、時間がないから次で決めるぞ!!」

時間を見たら午前5時47分

次でラストにしないと学校に遅れてしまう

俺がそう言うとなのはは頷いた

なのは「いくよ、諒くん！全力全快!!!!スターライト……………」

諒「(来た!!)写輪眼!!!!そして、月牙!!!!」

俺はなのはのスターライトブレイカーを自分の物にしようと目を写輪眼にした

そして、ただ見ていると俺の負けなので天鎖残月を構えた
そして!

なのは「ブレイカー!!!!!!」

諒「天衝!!!!!!」

なのはのスターライトブレイカーと俺の月牙天衝がぶつかった

なのは「くっ……………」

なのははかなり辛そうだった

諒「おりゃおりゃおりゃおりゃー！！！！！！！！」

俺は月牙天衝を連続で放った

なのは「ええ〜〜〜〜！！！！？ズルいよ、諒くん！！！！」

ズルいってお前な・・・

諒「月牙天衝一発だったら俺が負けるだろうが！！！！」

なのは「負けてよ！！私、久しぶりに諒ちゃんとデートに行きたいもん！！！！」

グハッ！！

そんな事言われて、俺が勝ったら全男子を敵に回す事になる・・・だが、今回は心を鬼にして！！

諒「またデートくらい行ってやるわあ！！！！月牙天衝！！！！」

俺は今日一番大きな月牙天衝を放った

なのは「やったあ！！なら、本気でいって違うお願いも聞いてもらう！！！！」

諒「えっ？」

まさか俺・・・火に油を注いじゃった？

なのは「スターライトブレイカーにスーツエーモンの力を加えた私

の最強の技！！！！」

ちよつと待てよ！！！！

只でさえスターライトブレイカーは強力なのに、それを上回る力だと？

俺死ぬじゃん！！！！

スターライトブレイカーの時に“全力全快”って言ったよね、なのはさん！！！！

なのは「究極進化！！！！ハイパーコウエン・・・」

まさかの究極に進化！！！！？

スーツエーモンの紅炎を使っちゃダメだろ！！！！

なのは「ブレイカー！！！！！！！！」

炎の光線が俺にめがけて放たれた

諒「ぎゃああああああああああ！！！！！！！！！！」

俺はそこで意識を失った

第63話 コピー開始!!ターゲットはなのは! (後書き)

テスト勉強するのがいやな作者の松上です

すずか「松上君と入れられない時間が嫌いな後書き限定キャラのすずかです!」

諒は何故か(、)、(来れないので、今日は2人でします
それじゃあ!

2人「スイさんありがとうございました!」

テストいやだ!

すずか「頑張れとしか言いようがないよ。」

頑張るが、勉強しないといけないので更新できない日があるかもしれないので、御了承ください
今から勉強するから、今回は此処まで!
すずか、頼むな!!

すずか「はい!

次回 今度は負けない!! ターゲットははやて!!」

それじゃあ次回も!

2人「お楽しみにー!!」

第64話 今度は負けない!! ターゲットははやて!! (前書き)

なんとか書けた

だから、無理矢理だ

ごめんなさい

今回名言を覚えてくれたのはジエスター!! アーカムさんです!!

ベン・ハーで

『憎しみがあるから生きられる』

ありがとうございました!!

第64話 今度は負けない！！ ターゲットははやて！！

side 諒

諒「ん……うーん……」

俺は重い目蓋を無理矢理開けた

諒「……あれ？此処って仕事場の仮眠室だよな？」

俺は周りを見渡して此処が何処か解った

此処は俺達が時々使っているので、解る

俺は机に置いてあつた携帯を開けた

フォルテ「おつ、起きたのか。」

諒「なあフォルテ、俺は何で此処にいるんだ？」

俺は此処に来た記憶がなかった

フォルテ「覚えて……ないか。お前は高町と模擬戦をして、お前は負けたんだ。」

フォルテに言われ俺は思い出した

今朝なのはと模擬戦をして、負けたんだよな……ort

はやて「諒くん、起き……！？何があつたんや！？」

俺かort状態になつてるとははやてが来て俺を心配してくれた

諒「あ……いや……ただ、なのはに負けた事を思い出して落ち込んでるだけだから……あはははは……ちくしょう」

はやて「ど、ドンマイ。」

慰めないでくれ、惨めになるからさ……

そういえば、なのは達は何処にいるんだろうか？

学校は行かなくて良いんだろうか？

諒「はやて、なのは達は何処にいるんだ？それに、俺達は学校に行かなくていいのか？」

俺ははやてに聞いた

はやて「なのはちゃん達は今、アルバム作りに励んどるで。学校は仕事やから休みや。」

俺ははやてに説明され理解した

はやて「なあ諒君、ウチと模擬戦しいひんか？」

はやてが突然俺に聞いてきた

諒「俺は構わねえが、次ははやてなのか？」

はやて「そうや、ウチはアルバム作りとか、チマチマしたこと嫌いやねん。それに暇やったしな。こういう時間を模擬戦に使えば時間効率もええやろ？」

確かにはやてはチマチマしたことは嫌いだよな

チマチマすること全部が嫌いじゃない

料理などはチマチマするものでもちゃんとするが、アクセサリー作りや図工の物作りなどが嫌いなのだ

はやての説明は以上！！

諒「いいぜ、じゃあ早速外に行こうぜ！！」

はやて「うん！！」

俺とはやては外に出た

諒「じゃあやろうぜ！！電波変換！新井諒、オン・エア」

はやて「ほな行くで！！電波変換！八神はやて、オン・エア」

俺達は電波変換した

諒「いきなり行くぜ！！風遁螺旋丸！！！！」

はやて「ほんまいきなりやな！！マヒヤドデス！！」

えっ？マヒヤドデスだって？

何でドラクエの技が使えるの？

俺は変わり身の術を使い、ぎりぎり避けた

はやて「惜しい、あと少いでデートできたのに！！」

はやては指を鳴らして惜しがっていた

諒「は、はやてさん？何でその技の事を知ってるのでしょうか？できれば私に教えて頂きたいのですが・・・」

はやて「や、やめてえな。諒君に敬語で話されたくない。まあ、使える理由はアフロデイに偶々送つてもらった荷物の中にドラクエがあつたんや。それを皆でやって、ウチ等も使つてみようって事になつてな、努力して使えるようになったんや！！あつ、皆もドラクエの技使えるで。ウチは氷、なのはちゃん火、フェイトちゃんは雷と雷、ティアナちゃんは風と回復の技使えるで！！まあ、他にもゲームして使えるようになった技があんねんけどな。」

チート？写輪眼なしで使えるって・・・俺って本当にこの小説の主人公なのか？

はやて「お喋りおしまいや！！さっさと決めたる！！響け終焉の笛！！ラグラノク・・・」

必殺技早ツ！！

だが、簡単には負けたくない！！

諒「写輪眼！！全力全快！！スターライト・・・」

俺は今朝手に入れたなのはの技をチャージした
そして！！

諒・はやて「ブレイカー！！！！！！」

お互いの技が放たれ、丁度真ん中でぶつかった

はやて「な、なのはちゃんの技！？つ、強い、やけどー！！」

えっ？まさかこのパターンって・・・

はやて「究極進化！！ハイパームゲン・・・」

はやても究極進化！！？

俺の敗北フラグ立ったよこれ！

はやて「ブレイカーー！！！！！！！」

諒「もういやだああああああああああ！！！！！！！！！」

また俺は意識を失った

第64話 今度は負けない!! ターゲットははやて!! (後書き)

遂にコラボできるので嬉しい作者の松上です!!

すずか「後書き限定キャラのすずかです!今回も何故か(、)、(、)
諒君はお休みです。」

まずは!

2人「ジエスター!!アーカムさんありがとうございます!!」

遂に来た!!

すずか「それで、誰がコラボしてくれるの?」

聞いて驚くな!!

俺の憧れの先生の一人であるライ先生がコラボしてくれるんだ!!
だからお礼を言わないと!!

2人「ライ先生、ありがとうございます!!」

すずか「それで、誰が来るの?」

来てくれる奴も凄いぞ!!

ライ先生が書いた小説『魔法少女リリカルなのは 黒い聖騎士』
に出ている主人公の御剣 一真が来てくれるぞ!!

すずか「そ、それは凄いね。それじゃあ、いつ出てくるの?」

未定だが遅くて今週中、早くて明後日だな

それじゃあ、そろそろネタを考えるから今回は此処まで！！
すずか、頼むな！！

すずか「はい！！」

次回 三度目の正直！！ えっ、まさかのー対三 俺を殺す気か？」

それじゃあ次回も！

2人「お楽しみにー！！」

第65話 三度目の正直！！ えっ、まさかの1対3 俺を殺す気？（前書き）

諒・・・ドンマイ

今回名言を教えてくれたのはWindさんです！！

TOIで

『心は剣を持ち、誰かの楯となれ！！』

Byスパルダ・ベルフォルマ

TOVで

『傷ついても、立ち止まっても、諦めなければ必ず、また歩き出せるはずです！』

Byエステリーゼ・シデス・ヒュラツセイ

TOEで

『何も起きないのが1番だよ、何も変わらないのが本当の幸せってもんだろ...』

Byリッド・ハーシエル

TOLで

『恨みに恨みを返すことは簡単なことだと思う。でも、それじゃきつと何も変わらない』

Byシャーリイ・フェンネス

TOAで

『奪われるだけの過去もない。それでも俺は俺であると決めたんだ。おまえがどうだったとしても俺はここにいます。それがおまえの言う強さに繋がるなら、俺は負けない!』

Byルーク・フォン・ファブレ

ありがとうございました!!

第65話 三度目の正直！！ えっ、まさかの1対3 俺を殺す気？

side 諒

諒「ん……うーん……此処は……家か？」

俺は重い目蓋を無理矢理開けた

そして布団から起き上がり、周りを見渡すと自分の家だと解った
俺は時計を見た

時刻は13時29分

グウー……

時間を見ただけで腹の虫が鳴った

取り敢えず、枕の近くにあった携帯を開けた

フォルテ「今回も随分と寝てたぞ。お前の言いたいことは解る。お前は八神と模擬戦をして負けた。そして、仕事が終わった高町達がお前を此処に運んだ。高町達は展望台で模擬戦している。」

お前って本当、俺が聞きたいこと解ってるよな

だが……また負けたort

本当俺ってこの小説の主人公？

そう思いながら、フォルテをズボンのポケットに入れて展望台に向かった

フェイト「ん？……あっ、諒！！！！」

俺が展望台に着くとフェイトが俺に気付き、抱きついてきた

諒「それで、俺は誰と戦えばいいんだ？」

今日だけで既に二連敗中

せめて一勝はしたい

フェイト「戦う相手は私とティアナとミソラだよ!!！」

・

・

・

・

諒「は？」

何言ってるんですか、フェイトさん？

只でさえなのはやはやてに二対一で負けてるのに、一対三って……俺を殺したいの？

俺はフェイトの目を見るが、純真な目をしていた

や、やめてくれ!!

そんな目で、俺を見ないでくれ!!

戦えばいいんだろ!!!

戦って負ければさ!!!

諒「電波変換！新井諒、オン・エア!!！」

フェイト「なのはもはやても諒を倒してるから、私達も頑張るぞ！
！電波変換！フェイト・新井、オン・エア」

俺とフェイトは電波変換しウェーブロードに乗った
そこには、準備体操をしているティアナとミソラ
遠くでは、フェイト達を応援しているのはとはやてがいた

諒「三度目の正直だ！！絶対負けないぞ！！！！！！」

フェイト「私達も負けない！！」

諒「行くぞ！！流星ブレードV3！！」

俺はフェイトに流星ブレードV3を放った

ティアナ「フェイトちゃんばかり集中していいの？螺旋丸！！」

ティアナは俺の隙について螺旋丸を使ってきた

諒「そんなもん俺n「シヨックノート！！」グハツ！！」

俺はティアナにカウンターしようとしたが、ミソラの事を忘れていた
たので攻撃をくらってしまった

ミソラ「やった！！これをお願いを聞いてもらえる！！だけど、も
っと傷付ける！！」

発言がヤンデレみたいに聞こえるのは俺だけだろうか？

諒「イテテテ・・・お前等絶対勝つたる！！写輪眼！！響け終焉の

笛！！ラグラノク……」

一気に必殺技で決めたる！！

えっ！敗北フラグ？

知るか！！！

俺は負けない！！！

フェイト「必殺技だね……私達の方が強い！！雷光一閃！！プラズマザンバー……」

ティアナ「お兄ちゃんと（自主規制）するの！！絶望を打ち砕く光！！シャイニング……」

ミソラ「絶対に負けない！！ポジトロン……」

あれ？何で俺、一対三なのに必殺技使ったんだろ？

さっきは負けないって言ったけど、敗北フラグだよ、これ

しかも、ミソラがインペリアルドラモンの必殺技使えるって……

死ぬな……俺

あがくくらいはするか……

諒・フェイト・ティアナ「ブレイカー！！！！」

ミソラ「レーザー！！！！」

ドカーン！！

なんと必殺技が互角だった

諒「これなら勝てる！！！！」

希望を持った
だが・・・

フェイト「究極進化！！ハイパーソウライ・・・」

ティアナ「究極進化！！ハイパーコンゴウ・・・」

ミソラ「究極進化！！ハイパーポジトロン・・・」

あっ・・・負けた

フェイト・ティアナ「ブレイカー！！！！！！」

ミソラ「レーザー！！！！！！」

諒「もう・・・やだ・・・」

俺は本日三回目の気を失った

第65話 三度目の正直！！ えっ、まさかの1対3 俺を殺す気？（後書き）

諒が5連敗！！

笑いが止まらない作者の松上ですww

すずか「後書き専用キャラのすずかです！今回も何故か（、、、（
諒君はお休みです。」

まずは！！

2人「Windさんありがとうございました！！」

書いてて気持ち良かった

すずか「まさかの5連敗って・・・」

まあ、諒自身本気だしてなかったしな

それに、もともと模擬戦した理由が“なのは達の技をコピーするため”だしな

すずか「でも、なのはちゃん達もチート化しちゃったね。」

最初から決めてたことだしな

まあ、どのアニメの技を使うか悩んだがな

すずか「じゃあもつと増える可能性は？」

100%増える！！

すずか「あ、あはははははは。」

それじゃあ、勉強しないといけないので今回は此処まで……
すずか、頼むな！

すずか「はい！！」

次回 俺の全力を出してやる！！ 全員掛かってこいや！！」

それじゃあ次回も！

2人「お楽しみにー！！」

第66話 俺の本気を出してやる!! 全員掛かってこいや!! (前書き)

諒……酷い

今回名言を教えてくださいましたのはA Iさんです!!

マクロス7で

『俺の歌を聴けえ!!』

B Y熱気バサラ

ターンAガンダムで

『命を大事にしない人とは、誰とでも戦います!!』

『人の英知が作り出したものなら。人を救って見せるお!!』

B Yロラン・セアック

ガンダムS E E Dで

『生きるほうが戦いだっ!!!!』

B Yカガリ・ユラ・アスハ

魔法少女リリカルなのはで

『世界は、いつだって……こんなはずじゃないことばかりだよ!! ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ!! こんはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは、個人の自由だ! だけど自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでもいい権利は、どこの誰にもありはしない!!』

B Yクロノ・ハラオウン

今回は凄い名言ばっかりだ・・・

ありがとうございました!!

第66話 俺の本気を出してやる！！ 全員掛かってこいや！！

side 諒

俺は何回目か忘れたが重い目蓋を無理矢理あける
そして起きて最初の一言は

諒「俺の本気を見せてやる……」

俺はなのは達の所に向かった

なのは「あつ、諒くん！！起きたんだね、早速模擬戦しよ！！私達
対諒くんで！！」

ふっ、いいだろう

見せてやるよ、俺の本気を！！！！

全員「電波変換！！！！」

俺達は電波変換した！！

なのは「沢山ダメージを与えて、沢山お願いを聞いてもらっつよ！！
紅炎！！」

フェイト「これでもくらえ！！蒼雷！！」

はやて「これでウチ等の勝ちや！！霧幻！！」

ティアナ「家に帰って（自主規制）をやってもらったから！！金剛！！」

ミソラ「皆と一緒に教えてもらった技、受けてみて！！パーフェクト・・・ブレイカー！！！！」

なのはは“紅炎”、フェイトは“蒼雷”、はやては“霧幻”、ティアナは“金剛”、ミソラはハープを大きな魔法陣4つを作りそれぞれ“スターライトブレイカー”、“プラズマザンバーブレイカー”、“ラグラノクブレイカー”、“シャイニングブレイカー”を同時に放ち一つにした技“パーフェクトブレイカー”をそれぞれ放った

ドカーーン！！！！

なのは「やったあ！！これでまたお願いが聞いてもらえる！！」

諒「誰がお願いを聞くんて？」

俺はなのは達の後ろで聞く

フェイト「な、なんで！？だつて、さっきあそこに・・・」

フェイトはそう言ってさつき俺がいた場所を見た
そこには、ほぼ炭になっていた木があった

諒「これで理解したか？さて、少しお前等は調子に乗りすぎたな。
だからさ・・・O・H A・N A・S H Iするぞ、勿論拒否権はないかな」

全員「う、嘘……」

全員、顔を真つ青にして呟いた

諒「本当 影分身の術!!そして!!」

影分身A「究極進化!!ハイパーコウエン……」

影分身B「究極進化!!ハイパーソウライ……」

影分身C「究極進化!!ハイパームゲン……」

影分身D「究極進化!!ハイパーコンゴウ……」

影分身E「究極進化!!パーフェクト……」

諒「究極進化!!最後の月牙……」

影分身達はそれぞればらけ、コピーした必殺技を

俺はつい最近マスターした最後の天鎖残月の必殺技を

放った

影分身達「ブレイカー……!!……!!」

諒「天衝!!……!!」

全員「いやああああああああ……!!……!!?」

諒「もう調子に乗らないか？」

俺は全員を正座させて説教し、全員に聞く

えっ？O・H A・N A・S H Iしたのに何故説教したかって？

身だけじゃなく心なもちゃんと言教しないとな!!!

誰だ、今鬼と言った奴は・・・

O・H A・N A・S H Iしてやるっか？

全員「はい、もう調子には乗りません。」

皆は反省した顔で言ってきた

諒「なら許してやる。さ、早く帰ろうぜ！お腹が空いて倒れそうだ

!!!」

なのは「りよ、諒くん!!!?」

諒「なんだ？」

家に帰ろうとしたらなのはが呼んできた

なのは「あ、あのね・・・デート・・・してくれるの?」

なんだ、そんな事か・・・

諒「勿論だ。だから、また今度行こうな!」

そう言うと全員笑顔なって抱きついてきた
あれ？ミソラにフラグを建てたっけ？
まあ気のせいだろ
そう思い、皆と一緒に家に帰った

第66話 俺の本気を出してやる！！ 全員掛かってこいや！！（後書き）

今晚は、作者の松上です！

諒「久しぶりだな！！主人公の諒だ！」

すずか「今晚は皆さん！！後書き限定キャラのすずかです！」

まずは！

3人「AIさんありがとうございました！！」

今回はライ先生とコラボだ！！

諒「つ、遂に一真さんが・・・緊張してきた・・・」

落ち着けて！！

航も来るから安心しろって！！

諒「あ、ああ・・・」

それじゃあ次回予告だ！！

すずか、頼むな！！

すずか「はい！！

次回 裏世界の帝王の少年と黒の聖騎士の男と生まれ変わった男の子」

それじゃあ

諒「次回も!!」

3人「お楽しみにー!!」

第67話 裏世界の帝王の少年と黒の聖騎士の男と生まれ変わった男の子（前書）

ライ先生とコラボ!!

なのに、全然上手く書けなかった・・・

本当にごめんなさい!!!

しかも、航はネタバレが含まれます

もう本当の本当にごめんなさい!!

今回は名言コーナーはお休みです!!

第67話 裏世界の帝王の少年と黒の聖騎士の男と生まれ変わった男の子

side一真

俺は今、“あるデジモン”を追い掛けるためにパラレルモンの力を
使い、世界と世界の狭間に来ている

一真「ゼロ、奴の居場所は解ったか？」

俺は相棒のゼロに聞く

ゼロ「なんとかかな。だが、その世界は少し特殊な世界のような……」

特殊な世界？

そんなの関係ねえ！

722

一真「目の前に現れた敵はただぶつた斬るだけだ！」

俺はいつだってそうだった

昔も今もな！！

ゼロ「ふん、お前らしな……平行世界の名前は『流星のロックマン』だ。」

一真「解った……待ってるよ、ヴィヴィオ！」

俺は流星のロックマンに向かった

side航

航「コロナモン、ルナモン、この方向でいいんだよな？」

コロナモン「ああ、このまま真直ぐ向かえば“あのデジモン”が逃げた世界だぜ！」

ルナモン「早く向かわないと何をするか解ったもんじゃないよ！！」

俺はパラレルモンに力を借り、“あるデジモン”を追い掛けている

航「解ってる！！急ごう！！・・・待っててね、ヒカリちゃん！！」

俺達は平行世界に向かった

side諒

諒「月牙天衝！！！」

ぐわああああああ・・・

俺は突然現れた大量のダークティラノモンを月牙天衝で消した
今回、嫌な予感がしたのでなのは達はWAXAで待機してもらっている

フォルテ「諒、東に1500mに大量のスカルグレイモンの反応！」

！西に2000mに大量のオロチモンの反応だ！！」

くそっ、あまりにも距離が離れすぎている！！

影分身じゃ歯が立たないのは目に見える

どうすれば……

ドカーーーーン！！

ドカンドカーン！！

目を瞑って考えていると東と西から爆発音が聞こえた

諒「な、何があったんだ、フォルテ！！？」

フォルテ「……オロチモンとスカルグレイモンの反応がロストした……」

ば、バカな！？

なのは達はWAXAにいるから此処には絶対にいないはず……
一対誰が……

フォルテ「！？諒、東西から高速で何かごとちに向かってきている！！」

な！？

諒「もしかしたら敵かも知れない！！氷輪丸を召喚してくれ！！」

フォルテ「わかった！！」

フォルテは氷輪丸を出してくれた

諒「正解!!!大紅蓮氷輪丸!!!!」

俺は右手に大紅蓮氷輪丸、左手に天鎖残月を持って東西から来る何かに構えた

そしてそこに現れたのは

「ん？何だ、デジモンじゃないのか・・・」

「僅かにデジモンが居た形跡があるから、この人は味方だ。」

デジタルワールドを守護するロイヤルナイツの一員で、“孤高の戦士”や“空白の席”の主と呼ばれているデジモン『アルファモン』

自然の力を操る“オリンポス十二神”族に数えられていて、太陽級の火炎エネルギーを秘めているデジモン『アポロモン』とこちらも同じく、自然の力を操る“オリンポス十二神”族に数えられていて、月の表情（光と影）のような二面性を持つデジモン『ディアナモン』に乗っている白髪の男の子が現れたのだ

諒「えっ・・・と、貴方達は誰ですか？俺の名前は新井 諒です。」

何故貴方達は此処に居るんですか？」

「俺か？俺の名前は御剣 一真。理由は俺の大切な家族があるデジモンに攫われたから追い掛けてきた。」

「俺の名前は加藤 航。理由は一真と同じで、大切な人があるデジモンに攫われたから追い掛けてきた。こっちの二体は俺のパートナー

デジモンだ。」

俺が自己紹介をすると二人も自己紹介してきた

諒「最後に聞いていいですか？貴方達は転生者ですか？」

一真・航「嗚呼^{うん}」

なるほど・・・

諒「だったら俺は貴方達の味方です。俺も転生者です。それに、此処は俺の世界です。好き勝手にしてる奴を叩きのめしたいですから。」

二人は大切な人をこの事件のボスに攫われたと考えた方がいい

個人個人で戦うより、チームを組んで戦ったほうが効率も良く安全だ

二人は俺の提案を聞き、少し考え込んで答えてくれた

一真「俺はヴィヴィオを救い、俺の家族に手を出した奴をぶった斬ればいい。お前等と手を組んでやるよ。」

航「俺もヒカリちゃんを救って、攫った奴を消せばいい。俺も手を組むぜ！」

二人は手を組んでくれた

諒「じゃあ早くボスを探しな」その必要はないぜ。「どついう意味ですか、一真さん？」

もしかして既にボスの場所が解つたのかな？

一真「ボスの方からお出ました。ゼロ、グレイソード、ガルルキャノン、セット！」

ゼロ「グレイソード、ガルルキャノン、セット」

一真さんはボスが来ると言い、グレイソードとガルルキャノンを出した

俺は天鎖残月と大紅蓮氷輪丸を構え、航はアポモンとディアモンに指示を出した

一真「来たぞ・・・」

ドスーーーーン！！！！

一真さんがそう呟くと目の前に大きな固まりの様な物が落ちてきて、土煙が上がった

「フン、此処まで追ってくるとは・・・」

その声が聞こえ、俺達は煙が晴れるのを待った

一真「テメエは俺の大切な家族を攫ったからな。テメエを倒し、ヴィヴィオを助けるまで俺は何処までも追い掛ける。死んで詫びる・・・」

航「お前をあの時完全に倒しておけば、こんな事にはならなかった。だから、俺達が責任を持ってお前を倒さなきゃいけないだろ・・・」

「

一真・航「アポカリモン」

諒「!!!?!」

俺はその名を聞いて漸く全てを理解した

平行世界を移動できるのはデジモンの中ではパラレルモンだけ

だが、二人の実力ならパラレルモンを倒すくらいなら造作もない

だが、相手がアポカリモンなら話は別だ

アイツは、死んだデジモンの力を使うことができる

なので、死んだパラレルモンの力を自分の物にすれば平行世界を移

動できる

デジモンを呼び出す事もできる

ボスは俺が想像してた以上の相手だった

アポカリモン「フン、貴様等が私を倒す理由はいいつらの為だろ。」

土煙が晴れ、アポカリモンは姿を現すとそう言って指を差した

指の先には、結界のような物で動きを封じられている二人の女の子
がいた

一真「ヴィヴィオー!!!」

航「ヒカリちゃん!!!」

二人は女の子に叫ぶ

アポカリモン「ふはははは!!!どうだ、久しぶり「うるせえよ」

!?!?ぐわあああああ!!!」

一真さんはアポカリモンが話している途中に、一瞬でアポカリモンに近づきグレイソードで腕を斬り、アポカリモンに言った

一真「テメエの話なんか聞いたつてしようがねえんだよ。テメエがしなきゃ事は俺達の大切な人を攫い、関係ねえ諒の世界に来た事を後悔することだぜ！！ガルルキャノン！！」

一真さんはゼロ距離でガルルキャノンを撃った

航「お前を早く倒して俺達は帰るんだよ！！アポロモン、ディアナモン！！」

アポロモン「ソルブラスター！！」

ディアナモン「アローオブ・アルテミス！！」

航が二体に指示を出すとアポロモンはソルブラスターを、ディアナモンはアローオブ・アルテミスをアポカリモンに放った

アポカリモン「ぐわああああああ！！！！！！？」

二体の必殺技はアポカリモンに直撃し、アポカリモンは悲鳴をあげた

一真「諒、航！！決めるぞ！！」

諒・航「はい！！！！」

俺達は一真さんに言われ武器を構えた

航はアポロモンとディアナモンを神々しい姿に変えた

航「俺だけができるデジモンのバーストモード化!!行きます!!」

航がそう言うのと俺と一真さんもアポカリモンに突っ込んだ

そして!!

諒「月牙天衝!!!」

一真「オールデリート!!!」

航「ファイアブリザード!!!」

俺と一真さんはアポカリモンを斬り、アポロモンとディアナモンは神々しい剣でアポカリモンを斬った

アポカリモン「ぐわあああああああ……」

アポカリモンは悲鳴をあげて消えていった

一真「世話になったな。」

諒「いえ、助けられたのは俺の方ですし。ヴィヴィオちゃんが無事で良かったですね。」

俺達はその後、ヴィヴィオちゃんとヒカリちゃんを救い出し、面倒臭いから暁に後の事は頼み、展望台に来ている

一真「まあお前がそう言うんならそれでいい。ヴィヴィオ、お礼を言えよ。」

ヴィヴィオ「ありがとうね!!」

諒「どういたしまして。」

航「諒、ありがとな。俺もお前に助けられた。」

諒「俺は殆ど何もしてないって。助けたのは航だからな。まっ、真さんみたいに受け取っとくよ。」

ヒカリ「ありがとうね、諒君!!」

諒「どういたしまして。」

一真「それじゃあ俺達は帰るわ。」

諒「あっ、待ってください!!これを持って行ってください!!航もな!!それは俺の携帯番号です。何かあったら電話してください!!直ぐに駆け付けますから!!」

俺はそう言って二人に携帯番号が書かれた紙を渡した

一真「一応貰っとく、じゃあな。」

ヴィヴィオ「バイバイ!!」

そう言って一真さん達はは自分の世界に帰っていった

航「それじゃあ、俺達も帰るわ。また会おうぜ!!」

ヒカリ」「さよなら!!」

そして、航達も自分の世界に帰っていった

諒「俺達の世界を守ってくれてありがとうございます。――真さん
・航・・・また、いつか会いましょう。」

俺は雲一つない空に言った

第67話 裏世界の帝王の少年と黒の聖騎士の男と生まれ変わった男の子（後書

ライ先生ごめんなさい!!

作者の松上です!!

諒「無事に終われた・・・どうも、主人公の諒だ。」

すずか「初のコラボ、おめでとー!!後書き限定キャラのすずかです!!」

まずは!!

3人「ライ先生ありがとうございます!!」

初のコラボがライ先生だったのは驚きだ

上手く書けなかったのは残念だったが・・・

諒「一真さんの口調とか必死で頑張って書いてたしな。」

それだけコラボは難しいって事だよ

だが、俺はもつと頑張ってコラボも面白く書けるように頑張るぜ!!

諒「まつ、頑張れや。」

ああ!!

それじゃあ今回は此処まで!!

すずか、頼むな!!

すずか「はい!!」

次回 AM三賢者の試練

それじゃあ

諒「次回も！」

3人「お楽しみにー！！！」

第68話 AM三賢者の試練(前書き)

やっと出せたよ・・・

今回名言を教えてくださいましたのはジェスター「アーカムさんです!!」

シャーロック・ホームズで

「証拠材料がすっかり集まらないうちから、推理を始めるのはたいへんな間違いだよ。判断が偏るからね。」

「暴力をふるう者には必ず暴力がはねかえってくる。ひとのために穴を掘る者は、必ず自分がその穴に落ちるのだ。」

「芸術のために芸術を愛する者にとっては、細かなとるにたらぬものなかにこそ、強い満足を汲み取る場合がしばしばあるものだ。」

Byシャーロック・ホームズ

ありがとうございました!!

第68話 AM三賢者の試練

side 諒

一真さんと航と事件を解決させて一週間が経った

俺はスバルとアマケンに来ている

理由は、スバルの流星マークのペンダントが突然光り出したから

なので、俺達は天地さんに見てもらおうと思い、アマケンに来たのだ

スバル「それにしても、何で突然光り出したのかな？」

諒「さあな。」

俺は口では知らないと言ったが、光った理由を知っている

“AM三賢者”

ペガサスマジック、レオキングダム、ドラゴンスカイの三体の電波体の事だ

この三体は、スバルに新しい力を授けるため此処に来る

ペンダントが光るのは三体が来たという合図だ

これが、ペンダントが光った理由だ

スバル「何か解ればいいんだけどね。」

諒「そうだな。」

俺達は天地さんに会いに向かった

天地「これは返すよ。」

スバル「ありがとうございます。それで何か解りましたか？」

俺達は天地さんを訪ね、ペンダントを見てくれるよう頼み、それが終わったので、スバルは天地さんに聞いた

天地「はっきりと言うよ。・・・解らないんだ。」

スバル「えっ!？」

スバルは天地さんの答を聞いて声を出して驚いた

天地「此処にある最新の機械を使っても何も解らなかった。一体何なんだろうか・・・」

天地さんは手に頭を置いて考え込んだ
すると・・・

ピカン ピカン ピカン

ペンダントが光りだした

スバル「うわっ!?!?まただ!?!」

諒「天地さん、これは何かを知らせてるに違いありません!?!もしかしたら、敵かもしれないので外に出ます!?!ですから、外には絶対に出ないください!?!行くぞ、スバル!?!」

俺は天地さんにそう言い、スバルの手を掴んでアマケンの屋上に向かった

諒「スバル、電波変換するぞ!!」

スバル「うん!!」

諒「電波変換!新井諒、オン・エア!!」

スバル「電波変換!星河スバル、オン・エア!!」

俺達は電波変換し、アマケンのウェーブロードに乗った

ウォーロック「・・・!!?来るぞ!!」

ウォーロックが叫ぶと目の前が眩しい光りに包まれた

・

・

・

・

俺は目を開けた

そこには、AM三賢者のシャドウがいた

スバル「うつ・・・!!?あ、貴方達は誰ですか?」

スバルも目を開け、目の前にいる三賢者に名前を聞いた

「我の名はペガサスマジック。」

「我の名はレオキングダム。」

「我の名はドラゴンスカイ。」

ペガサス・レオ・ドラゴン「我等、AM三賢者!!」

ウォーロック「な!? AM三賢者だど!!!?」

ウォーロックは三体を見て驚いた

そりゃそうだよな、目の前に自分の故郷の三賢者がいるんだもな

諒「それで、何しに来たんだ?」

俺は少しだけ(、、、、)威嚇しながら聞いた

レオ「我等はお主、星河スバルに力を与えにやってきた。」

ペガサス「今、FM星人がこの地球を征服しに来ているのは知っておるな? 今までは、はつきり言っただけ弱かったが、これから先は幹部の者が地球に来る。」

ドラゴン「そこで、お主に新しい力を授けようと思う。だが!!」

レオ「只でやるわけにはいかん。お主には我等の試練を受けてもらう!!」

ペガサス「試験の内容は、我等AM三賢者を倒すことだ。どうだ、受けるか?」

スバル「わかりました、貴方達の試練を受けます!!」

話がどんどん進んでいってるな

まあ、今回は俺の出番はないけどな

諒「スバル、今回は俺はお呼びじゃないみたいだな!!先に帰ってるわ。」

俺はスバルにそう言い、帰ろうとした

ペガサス「何を言っておる。お主も試練を受けてもらうぞ。」

・

・

・

・

諒「は？」

第68話 AM三賢者の試練（後書き）

やっと三賢者が出せた・・・
あっどうも、作者の松上です

諒「俺も試練ってどういう事だよ？よう、主人公の諒だ。」

すずか「言葉の通りだと思うけど。後書き限定キャラのすずかです
！」

まずは！！

3人「ジエスター」アーカムさんありがとうございました！！

すずかの言う通り、言葉の通りだぞ

諒「まあ、別にいいんだがよ。」

しかし早いよなー

諒「何がだ？」

航の小説が40話越えた
しかも、この小説も90話越えるぞ

諒「毎日更新だからな。」

まあな、そろそろ勉強するか・・・
それじゃあ今回は此処まで！！

すずか、頼むな！！

すずか「はい！！」

次回 VS ペガサスマジック

それじゃあ

諒「次回も！！」

3人「お楽しみにー！！」

第69話 VSペガサスマジック（前書き）

スバルのキャラが・・・

気にしない方はどうぞ

今回名言を教えてくださいたのは夢原 勇樹さんです!!

『男も女もみんな変体…だからお互いに貧りあつもの、…でもそこに愛が無ければ子供は出来ないのよ?』

By 夢原mather

凄い事を言う母親ですね・・・

第69話 VSペガサスマジック

side 諒

諒・スバル「全力全快!!!スターライト・・・ブレイカー!!!」

ドカーン!!!

俺とスバルは今、ペガサスマジックに管理局の白いm「魔王じゃないもん!!!!」・・・なのはの必殺技を放った
本来なら、スバル一人でやらなきゃいけないが、何故俺まで戦っているのか説明するぜ!!!

回想スタート!!!

諒「は？」

俺も試練を受けなきゃならんだ

俺は意味が解らず、気の抜けた声で返事をしてしまった

ペガサス「お主もこの地球を護る者選ばれたのだ。お主からは、我らの力を感じる。何処で我らの力を手に入れたのは聞かないでおく。だが、お主が持っている我らの力は不完全なものだ。」

不完全？

そんなわけないだろ

俺はアイスペガサス・ファイアレオ・グリーンドラゴンになれる
何処が不完全なんだ？

レオ「お主達には我々の究極の姿をマスターしてもらおう。」

俺がそう思っているとレオキングダムが話してきた
……究極の姿？

ドラゴン「我々は今まで沢山の者に力を授けてきた。しかし、それを完全にコントロール出来る者は存在しなかった。しかし、お主達は今まで我等が感じたことのない力を秘めておる。そこで、お主達に我等の究極の姿、『ブレイクキング』になれるよう試練を出す。その為に新井 諒、お主にも試練を受けてもらう。」

ブレイクキングって事は、ペガサス・レオ・ドラゴンの力を一つにした姿だろう……

確かにその力があればこれから先、役に立つな
ブレイクキングになるためには、試練を受けるしかないのか……

諒「解った、俺も試練を受けるぜ!!!」

ペガサス「なら、最初の相手は我だ。二人で掛かってこい。」

諒「なら遠慮はいらねえな!!!」

回想終了!!!

スバル「管理局の白い魔王の必殺技をくらったんだから、僕達の勝

ちだね！！！！」

なのは「私は魔王じゃないもん！！！！」

スバル「……なのはちゃん？」

なのはは居ないぞ

それは幻だぞスバル

しかも、完全に倒してないしな

ペガサス「驚いた、まさか此処まで強いとは……」

スバル「！？なら今度は管理局の黒い死神の技だ！！いくよ、諒君
！！！！」

フェイト「私は黒だけど、死神なんかじゃないよ！！」

スバル「フェイトちゃん？」

スバル「……お前ってキャラそなんだったか？」

そう思いながら必殺技をチャージした

諒・スバル「雷光一閃！！！プラズマザンバー……ブレイカー
！！！！」

ドカーーン！！！！

スバル「今度は管理局の狸の技だ！！！！」

はやて「誰が狸や！！！！」

スバル「はやてちゃん？僕って疲れてるのかな？」

スバル、お前絶対原作知ってるよな！！？

諒・スバル「響け終焉の笛！！ラグラロク・・・ブレイカー！！！！」

ドカーーン！！！！

これだけ必殺技打ち込めば勝つたたる・・・

スバル「止めは管理局のツンデレの必殺技だ！！！！」

ティアナ「私はツンデレじゃないよ！！！！」

スバル「きつと疲れてるんだ！！！！そうだ、間違いない！！！！」

スバル、お前には驚かない・・・

諒・スバル「絶望を打ち砕く光！！！！シャイニング・・・ブレイカー！！！！」

ドカーーン！！！！

スバル「よしっ！！！！」

スバル、お前の方が魔王や死神に見える・・・

ペガサス「こ、此処までする必要は有ったのか？我でなかったら死

んでたぞ・・・グフツ」

ペガサス、次から手加減する
ごめんな・・・

スバル「僕達は合格なの？」

スバル、お前は鬼か

少しは休ませてやれよ

ペガサス「あ、ああ。まずは第一試練合格だ。」

レオ「次は我だ。」

スバル「そうですか！・・・ニヤ（黒笑み）」

スバル、恐ろしい奴・・・

第69話 VSペガサスマジック（後書き）

90話更新!!

頑張った作者の松上です!!

諒「自分で言うなよ・・・主人公の諒だ。」

すずか「おめでとう松上君!!後書き限定キャラのすずかです!!」

まずは!!

3人「夢原 勇樹さんありがとうございました!!」

今回はスバルが壊れたな・・・

諒「あいつは絶対リリなの知ってる!!絶対知ってるぞ!!」

それは置いといて

諒「置いとくのかよ!!」

次回も壊れるぞ

諒「スバルファンの皆さん、本当にすみませんort」

それじゃあ今回は此処まで!!

すずか、頼むな!!

すずか「はい!!」

次回 VSレオキングダム」

それじゃあ

諒「次回も!!」

3人「お楽しみにー!!」

第70話 VSレオキングダム（前書き）

短い！！大切な話なのに！！！！

自分の文才のなさを恨みたい！！

実際に恨めたとしてもマジで恨まない

これが人間の本性・・・

すいません、調子に乗りました・・・

今回も名言コーナーはお休みです

すいません、最近

第70話 VSレオキングダム

side 諒

諒「スバル、今日からお前は“WAXAの冷血の悪魔”だ!!」

スバル「・・・は？」

俺がスバルの異名を言うと、スバルは驚いた顔になった

諒「俺も悪魔って言われてるけど・・・お前も十分悪魔だったぞ!!」

スバル「ぼ、僕は悪魔じゃないよ!!しかも、何で“冷血”なのさ!!!？」

何でって、決まってるだろ・・・

諒「相手の倒し方が酷いからだ!!」

スバル「僕は誰かさん達と違って普通なのに・・・ort」

レオ「・・・初めてもいいか？」

あっ、忘れてた・・・

諒「あ、ああ。それじゃあ始めようぜ!!」

レオ「行くぞ!!」

スバル「究極進化！！ハイパームゲン……」

えっ、いきなり必殺技？

スバル君、君は何考えてんの？

スバル「ブレイカー！！！！」

レオ「くっ！！」

レオキングダムはぎりぎりハイパームゲンブレイカーを避けた

スバル「冷血の悪魔なら冷血の悪魔らしい戦い方をしないとね……究極進化！！パーフェクト……」

あれ？もしかして、スバルがこうなったのは俺のせい？

スバル「ブレイカー！！！！」

レオ「レオブレイザー！！！！」

レオキングダムはレオブレイザーをパーフェクトブレイカーに向かって放った

ドカーーン！！！！

スバル「くっ、くそ……」

レオ「ま、まさかこれほどの威力とは……」それぞれの技は中間

地点でぶつかり合って、威力は互角だった

このままだとお互いの体力が無くなって、引き分けになってしまう
俺が居なければの話だな

諒「究極進化!!!ハイパーコンゴウ・・・ブレイカー!!!」

俺はレオキングダムの後ろからハイパーコンゴウブレイカーを放った

レオ「!?!?しまった!?!」

レオキングダムは俺の存在に気が付いたが既に遅かった

諒・スバル「うおおおおおおおおおおお!!!」

レオ「ぐわあああああああ!!!?!?!?!」

レオキングダムは悲鳴をあげて倒れた

スバル「・・・・・・・・ニヤ（黒笑み）」

諒「!?!?頼む、スバル!!帰ってきてくれ!!!お前は悪魔じゃないからさ!!!頼むort」

俺は、これ以上スバルがおかしくならない様に土下座しながら言った

スバル「・・・・・・・・あれ?僕は一体?」

悪魔化してる時の記憶が無いとかご都合主義だろ・・・

（お前も十分ご都合主義によって此処までこれたんだぞ）

変な電波をキャッチしたが、無視だ

ドラゴン「見事だ、予想以上の強さだ！次が最終試練だ！！我を倒すのだぞ！！」

最終試練か・・・

諒「なら、本気で行くぜ！！！！」

第70話 VSレオキングダム（後書き）

今回は次回予告だけ

次回 VSドラゴンスカイ

それじゃあ次回もお楽しみにー！！

第71話 VSドラゴンスカイ(前書き)

今回も短い・・・

スランプ気味だ

今回名言を覚えてくれたのはジエスター!!アーカムさんです!!!

ルパン三世で

『怖いのは、死ぬことじゃなくて退屈なこと。』

Byルパン三世

『また、つまらぬモノを斬ってしまった。』

By右川五右衛門

『おのれルパンめ、まんまと盗んでいきおった。』

『いえ、あの方はなにも盗んでいってはいませんわ。』

『いえ、奴はとんでもないものを盗んでいきましたぞ。』

『えっ?』

『あなたの心です。』

By銭型警部&mp;クラリス

ありがとうございました!!

第71話 VSドラゴンスカイ

side 諒

スバル「全力全快!!!スターライト……」

諒「雷光一閃!!!プラズマザンバー……」

諒・スバル「ブレイカー!!!!」

ドラゴン「ドラゴンサイクロン!!!!」

ドカーーン!!!

俺達は最終試練でドラゴンスカイと戦っている

ペガサスマジック・レオキングダムの戦いでかなり疲れた
手加減しながら戦ってるから余計にしんどい

諒「バトルチップ、ロングブレード・踏み込み斬!!!」

スバル「バトルカード、リュウエンザン・スイゲツザン!!!」

俺はロングブレードを出し踏み込み斬で、スバルはリュウエンザン
とスイゲツザンを出しウォーロックアタックでドラゴンスカイの目
の前で行った

諒「おらぁ!!!!!!」

スバル「はああ！！！！」

しかし、ドラゴンスカイはそれを紙一重で避けた

諒「ちっ！バトルチップ、フレイムソード・アクアソード！！」

スバル「くそっ！バトルカード、ライメイザン・タイボクザン！！」

諒・スバル「はああああああああ！！！！！！！！」

俺達は連続でドラゴンスカイを斬り付ける

しかし、これも紙一重で避けられる

ドラゴン「どうした！！お主等の實力はこんなものか！！？弱すぎるぞ！！！！」

ブチッ×2

あっ、ダメだ

諒「俺達が手加減してやってるのに、随分と言ってくれるじゃねえか！！！！」

スバル「少し・・・頭を冷やそうか？」

ドラゴン「あっ、いや・・・その・・・」

諒「究極進化！！！！最後の月牙・・・」

スバル「究極進化！！！！パーフェクト・・・」

ドラゴン「す、すまん……何でもするから許してくれ……！」

何でもするだって？

諒「だったら俺達の必殺技を受けろ……！」

ドラゴン「えっ？」

諒「天衝……！！……！」

スバル「ブレイカー……！！……！！……！」

ドラゴン「ぎゃああああああああああ……！！……！！……？」

この光景を見ていたペガサスマジック・レオキングダムはこう思っただろう

（力を授けなくても、十分強くな？）

第71話 VSドラゴンスカイ（後書き）

スランプ気味で今回も後書きは次回予告だけ

次回 ブレイクキングだ！！ テスト台は？

お楽しみにー！！

第72話 ブレイクキングだ！！ テスト台は？（前書き）

ブレイクキングになる話

モブFM星人が出てきます

今回名言を教えてくださいましたのはWindさんです！！！！

スーパーロボット大戦で

『誰にどう作られたか分からねえ過去に縛られてどうするんだ！？
大事なのはこれからのことだろうがっ！！』

Byアラド・バランガ

『理由はどうあれ、これはお互いの存在をかけた戦いだ。…ここで
砕け散れば過去も未来もなくなる。ならば、やることは一つ、……
どんな敵であろうとも、討ち貫くのみ！』

Byキヨウスケ・ナンブ

『殺しあい、壊しあい、奪い合う世界を維持しようという理論…間
違っているのさ、たぶんな…！』

Byアクセル・アルマー

ありがとうございました！！！！

第72話 ブレイクキングだ！！ テスト台は？

side 諒

俺達は無事に試練を乗り越えた

まあ、ドラゴンスカイは少し離れた場所で黒焦げになって気絶しているがな

レオ「おめでとう、お主達は我等の試練を乗り越えた。これにより、お主達にスターブレイクとダブルブレイク、ブレイクキングの力を授ける。」

ペガサス「星河はまず、我とスターブレイクをコントロールするために特訓する。新井はレオキングダムとダブルブレイクをコントロールするために特訓する。まずはそこからだ。」

まあ、そりゃそうだな

順番にやってかないとぶっ倒れるしな

諒「じゃあ早速変身するぜ。スターブレイク！！！！・・・ファイアレオ！！！！」

俺はレオキングダムの力を授かったスターブレイク、ファイアレオになった

ここで注意だ

俺はスバルと見分けがつくようにマントを羽織っていて、天鎖斬月は炎の剣になっていた

しかも、スバルと被るのがいやなので体の色は黒にした

他の変身の姿も基本黒い

なので、言い換えるとしたらブラックレオだろう

レオ「体が黒でマントとはまた・・・」

レオキングダムは俺の姿を見て驚いていた

諒「スバルと見分けがつかだろ？じゃあ・・・行くぜ！！ダブルブレイク！！・・・ペガサス×レオ！！！」

俺がダブルブレイクをするとまた姿が変わっていた

背中からペガサスの羽根が生えており、右手に持っていた天鎖斬月は氷の剣になっていた

諒「変身するたびに天鎖斬月が変わるのか・・・」

レオ「ああ。私の力の時はファイアブレード、ペガサスマジックの力の時はアイスブレード、ドラゴンスカイの力の時はウッドブレードだ。ダブルブレイクの際は二つの力が使える。外見も代えれるぞ。さあ、最後の力を解き放つのだ！！！」

レオキングダムは俺に説明してくれた後、最後の力を使うよう言うてきた

諒「ふうー・・・」

俺は目を閉じ、心を落ち着かせる

諒「！！？トリプルブレイク！！！！！」

俺がそう叫ぶと氷、炎、木の葉の竜巻が俺を包んだ
しかし、痛くも痒くもない

諒「……ブレイクキング!!!!!!」

レオ「凄い……短時間で此処まで出来るとは……」

レオキングダムは俺を見て驚いていた
まあ、伊達に毎日特訓してるからな

俺は自分の姿を見た
ペガサスの羽根、レオの足、ドラゴンの胸部、茶色のマント、青と
赤と緑の光が螺旋状になっている剣
まあ、体は黒だけど

諒「スゲエな、これで合格なのか？」

俺は今だに驚いているレオキングダムに聞いた

レオ「あ、ああ。まさか此処までドカーン!!!!!!」
?ま、まさか、星河まで完成したのか!？」

スバルもチートだな

「プクプクプク、遂に見つけたプク!!!!お前達をおいらが倒して
やるプク!!!!」

出た、モブFM星人
まっいいか

ブレイキングの力のテスト台になってもらうぜ！！

諒「お前がテストに協力してくれるだろ！！！！」

俺はそう言ってキャンサーバブルに斬り掛かった

第72話 ブレイクキングだ！！ テスト台は？（後書き）

久しぶりです！！作者の松上です！！

すずか「皆さんお久しぶりです！！後書き限定キャラのすずかです
！！」

ツカサ「此処に来るのも久しぶりだ。皆さん、久しぶりです！！双
葉ツカサです！！」

まずは！！

3人「Windさんありがとうございました！！」

早いよなー、もう90話だよ

ツカサ「それは置いといて、何で僕が此処に呼ばれたの？」

諒曰く「疲れた・・・」だそうだ

ツカサ「そ、そうなんだ・・・」

すずか「次回は来るのかな？」

知らん

ツカサ「そ、速答って・・・」

それ以外言葉は思いつかん

それじゃあ今回は此処まで！！
すずか、頼むな！！

すずか「はい！！」

次回 VS キャンサーバブル」

それじゃあ

ツカサ「次回も！」

3人「お楽しみにー！！」

第73話 VS キャンサーバブル（前書き）

ネタが浮かんだから書けた

まあ楽しんでください

今回名言を覚えてくれたのはムラサメさんです!!

NARUTOで

『だがオレは……その結果には興味はない……すべてはどう生きるかだ。』

抗い、戦い続けること、それがオレの……生きるということだ!!

Byサバタ

『真っ直ぐ自分の言葉を曲げねえ……オレの……忍道だ!!』

Byナルト

『ナイスガйнаポーズをしてまで男が格好をつけた以上約束は死んでも守るんだ!』

Byガイ

ありがとうございました!!

第73話 VS キャンサーバブル

side 諒

諒「アトミック……ブレイザー!!!」

キャンサーバブル「ブクーーー!!!?!?!?」

俺は今、キャンサーバブルを敵（テスト相手）として現在進行形で攻撃している

ゲームの中では、自由に何時でも戦闘できた

アニメでは、結果から言えばスバル（ミソラ）の仲間になった
だが、この世界はそのどちらにも当てはまらない
なので、俺のテスト人形になってもらっている

諒「エレメンタルサイクロン!!!」

俺はその場で高速回転し、木の葉の竜巻を作りキャンサーバブルを攻撃した

キャンサーバブル「ぶぎゃあああああああ!!!?!?!?」

悲鳴がおかしいぞ

まあ気にしないがな

諒「マジシャンフリーズ!!!」

俺はエレメンタルサイクロンをキャンサーバブルに攻撃し終わった後、直ぐにキャンサーバブルの下に巨大な魔法陣を出して、一瞬にして凍らせた

レオ「凄いな。此処まで我等の技を使いこなすとは……」

レオキングダムは、俺の戦いを見て驚きながらも誉めてくれた
だが、もっと驚いてもらうぜ!!!

諒「受けてみる、ペガサス・レオ・ドラゴンの必殺技のバリエーシ
ョンを!!!!」

台詞といい、言い方といい、なのはだな……

本当、フェイト可哀想だよな

あの距離でスターライトブレイカーを喰らったんだから……
まあ、俺には関係ないがな!!!!

諒「サテライト……」

俺は赤・青・緑色の光が螺旋状になっている剣を両手で持った

そうすると、ペガサス・レオ・ドラゴンの頭になった

そして、光を吸収し始めた（イメージは仮面ライダーWサイクロン
ジョーカーエクストリームのマキシマムドライブ）

キャンサーバブルは未だに凍っているため逃げれない

只、凍っているが目から涙が出ていた

凍ってるのに涙が出るのかよww

さっさと終わらせるか!!!

諒「ブレイカー……!!!!!!」

俺はサテライトブレイカーを放った

赤・青・緑の光線がキャンサーバブルを直撃した

キャンサーバブルは悲鳴をあげずに倒れた

まだ、必殺技は終わってないのにな

諒「完全勝利！！！！」

言い方がパチンコのエヴァが使徒を倒した時に言い方だな

(作者はエヴァ好きです！！)

また何か聞こえたが今回も無視だ

(ひ、酷い！！！！)

諒「どうだった、俺の戦いは？」

(スルーかよ！！？もういい！！！！)

うざかった

レオ「お主は“悪魔”か“魔王”と言われておらんか？」

魔王は俺の家に居る、高まて「私は魔王じゃないもん！！！！」……
・あいつ、エスパーか？

諒「一応“WAXAの最強の悪魔”って言われてるぜ。」

レオ「やはりか……」

何だよやっぱりって！？

俺だって、好きで言われるわけじゃないぞ！！

偶々WAXAで遊んでたらそう言われたんだ！！
俺は悪くない！！

諒「スバルの所に行こうぜ。」

レオ「拗ねたな。」

拗ねてないから！！

只、機嫌が悪いただけだからな！！
勘違いするなよ！！

レオ「まだまだ子供だな。」

グサツ！！

諒「うわあああああああん！！！！スバル、レオキングダムが奇
めてくるよお！！！！！！」

泣いてないぞ！！

只、目に塵が沢山入ったから泣いてるんだぞ！！
決して悲しいから泣いてるんじゃないからな！！

俺は皆に説明しながらスバルの所に走って向かった
二回言うぞ！！

決して悲しいから泣いてるんじゃないからな！！

第73話 VS キャンサーバブル（後書き）

諒が壊れたWWW
作者の松上です!!

すずか「最近、キャラ崩壊が多くない？あつ、後書き限定キャラのすずかです!!」

暁「今日は俺が呼ばれたぜ!!久しぶりだな、暁シドウだ!!」

まずは!!

3人「ムラサメさんありがとうございます!!」

何時もこんな感じだったらしいのに・・・

暁「更新の話は置いて、何故俺は呼ばれたんだ？」

今回は「勘違いすんなよ!!泣くんじゃない!!一人になりたいんだ!!!!」だそうだ

暁「新種のツンデレか？」

知らん

暁「一言かよ・・・」

ツンデレに興味はないからな

すずか「じゃ、じゃあ、どんな人が好みなの？」

すずか「みたいな素直な子」

すずか「はう………// // //」

どうした、すずか？

暁「気絶してるぞ、ストレートすぎだ。」

マジで好みなんだからしょうがない

暁「そ、そうか。」

ああ、それじゃあ今回は此処まで！！

すずか！！……はダメだから、暁、頼むぞ！！

暁「おう！！」

次回 その後は……」

それじゃあ

暁「次回も！！」

2人「お楽しみにー！！」

第74話 その後は・・・（前書き）

完全にスランプだ・・・

どうしよう・・・

今回も名言コーナーは休みです

本当にすいません

第74話 その後は・・・

side 諒

全快は少し変になってすまなかった

俺もあれくらいで拗ねるなんてまだまだ子供だな・・・

謝罪はこれくらいにしといて

諒「スバルー！！」

スバル「あつ、諒君！！その姿がブレイクキングなんだね！？」

スバルは俺の姿を見て驚いていた

スバルはペガサスにスターブレイクした姿だった

諒「まあな、それでブレイクキングにはなれたのか？」

スバル「まだなんだ。スターブレイクがやっとなんだ。」

そりゃそうだ

いきなりブレイクキングになるのは俺^{チート}だけでいいからな

諒「そのうちなれるさ。それより今日は帰らねえか？流石に皆心配してるかもしれないからな。」

アマケンに来て、かなり時間が経ったので皆心配してるかもしれない

スバル「そうだね・・・そういえば、ペガサス達はどうするの？」

そういえばそうだな・・・

この世界はゲームと違うからな

ペガサス「我等はこの辺りに滞在するつもりだ。」

レオ「新井はともかく、星河には教えなければならぬ事があるからな……」

ドラゴン「用件があるなら此処まで来てほしい。我等も出来る限りお主等の用件を聞こう。」

ドラゴン、お前って復活してたのか……
別にいいんだが……

諒「じゃあ帰るわ。レオ、キャンサーバブルを頼むわ。」

レオ「はあー、解った。」

話が解る！！

諒「じゃあなー！」

スバル「ありがとうございます！」

そして俺達は家に帰った

第74話 その後は・・・（後書き）

次回予告だけ

次回 委員長から誘われた 別に変な意味はないぞ

それじゃあ次回もお楽しみにー！！

第75話 委員長から誘われた 別に変な意味はないぞ（前書き）

甲子園から更新です！！

テストが近いのに、俺は何をしてんだよort

今回名言を覚えてくれたのはジエスター「アーカムさんです！！」

シャーマンキングで

「やったらやり返す。でも大切なのは心だ。オイラ達にはその覚悟がある。」

By麻倉 葉

「何かをしようとするとき必ず賛成する人と反対する人がいる。それはみんな大切に行っているものが違うから。」

By小山田まん太

ありがとうございました！！！！

第75話 委員長から誘われた 別に変な意味はないぞ

side 諒

AM三賢者達と出会って数日が経った

今日は日曜日なので学校は休み

なので、今日は皆と出掛ける事にした

メンバーは俺、なのは、フェイト、はやて、ティアナ、スバル、ミソラ、ツカサだ

待ち合わせ時間は午前10時にバス停前だ

現時刻は9時45分

皆はお洒落するみたいなのでさっきから部屋に籠もってる

なので、話相手がいない

だから、俺は目を瞑り精神統一をしている

俺は感情に流されやすいので、精神統一はかなり重要なのだ

・

・

・

・

なのは「りよ、諒くん？」

なのはの声が聞こえたので俺は目を開けた

そこに居たのは俺の服を着たなのは達だった

諒「……………ドッキリ？」

はやて「違つて、今回はマジや。」

今回？

何時かするのか？

何故俺の服を着てるんだ？

解らん・・・

なのは「今日は諒くんの服を着たくなつたから、ダメかな？」

はあー、そんな泣きそつな顔をされたらダメだつて言えないだろう。
・
・

諒「はあー、今日だけだからな・・・」

全員「ありがとう!!」

俺がそう言つと皆が俺に抱きついてきた
やっぱ俺つて、ミソラにフラグを建てたのか？
ミソラはスバルだと思つたんだけどなあ

pipipipipipipi!!!

そんな事を思つていたら携帯が鳴つた
・・・着信音設定しといた方が良いよな
そんな事を思いながら電話に出た

諒「もしもし？」

委員長「私だけだ。」

諒「……お掛けになった番号は現在使われていないか、電波の届かない場所に居ます。またのお電話をお待ちしております。」

そう言つて俺は電話を切つた

フェイト「諒、今の電話だよね？何であんな事言つたの？」

そんなの決まつてるだろ

諒「電話の相手がつるさいのだったから！！以上！！」

俺がそう言つと皆解つてくれた

皆、俺の事ちゃんと解つてくれて嬉しいぞ

俺は皆の頭を撫でた

全員「////////」

皆の顔が赤くなつた

抱き付いてくる時は恥ずかしがらないのに、何で俺がすると赤くなるんだ？

俺には永遠に解らないな

pipipipipipipi!!!

そう思つてたらまた電話が鳴つた

諒「はぁ……もしもし？」

俺は嫌々電話に出た

委員長「何で電話切るのよ!？」

何でって……

諒「面倒臭いから!以上!」

委員長「いつもな怒ってるけど、まあいいわ。今日貴方暇でしょ？私が貴方と遊んであげるわ!嬉しく思いなさい!」

諒「別にお前と遊ぶ気ないし。それに、今日はなのは達と出掛けるから。それからもう電話してくるなよ、お前と話すと疲れるから。じゃあな!」

そう言っで電話を切った

あいつがそう言っで事は今日が蛇か……

諒「早く行こうぜ、そろそろ時間になりそうだ。」

俺はそう言っでバス停に向かった

第75話 委員長から誘われた 別に変な意味はないぞ（後書き）

甲子園に居る作者の松上です!!

諒「どつから更新してんだよ!!?よう、主人公の諒だ。」

すずか「テストが近いのに大丈夫?あつ、後書き限定キャラのすずかです!!!」

フェイト「皆、久しぶり!!!フェイトです!!!」

まずは!!

4人「ジェスター!!アーカムさんありがとうございました!!!」

マジで俺、何してんだろ——ort

諒「赤点は絶対にとるなよ、解ってるか?」

解ってるよ!!!

只……勉強に身が入らん——ort

すずか「頑張つて!!!」

フェイト「赤点とつたら携帯没収かもよ?」

勉強しないと!!!

だが、阪神を応援だ!!!

諒「（大丈夫かよ・・・）」

今回は此処まで！！

すずか、頼むな！！

すずか「はい！！

次回 久しぶりに遊ぶか・・・戦わないぞ」

それじゃあ

諒・フェイト「次回も！！」

4人「お楽しみにー！！」

第76話 久しぶりに遊ぶか・・・戦わないぞ(前書き)

話が中途半端だ・・・

本当にすみません

今回名言を覚えてくれたのはAIさんです!!

ガンダムSEEDで

『止める!もう止めるんだ!こんな戦い!本当に滅ぼしたいのか!
?君たちも!全てを!』

Byアスラン・ザラ

ガンダム種デスで

『自分だけ分かったような綺麗事を言うな!!お前の手だって、
で!何人もの命を奪っているんだぞ!!!』

Byアスラン・ザラ

ガンダム00で

『君は現実を知らなすぎる!自分のいる世界くらい、自分の目で見
たらどうだ・・・!!』

Byティエリア・アーデ

ありがとうございました!!

第76話 久しぶりに遊ぶか・・・戦わないぞ

side 諒

俺達がバス停に着くと、既にスバルとツカサが居た

諒「ワリイ、少し遅れた。」

俺は二人を待たせてしまった事を謝った

スバル「大丈夫だよ、僕達も今来た所だから。」

ツカサ「そうだよ。」

親友は優しいよな・・・

諒「皆も親友を作れよ!!！」

なのは「誰に言ってるの?」

そんなの決まってるじゃん

諒「この話を読んでくれてる神様（読者）に言ったんだ。」

ミソラ「諒くん、メタ発言は止そうよ。」

おつといけない、自重しないとな

はやて「ほなジャンケンするでー!! 諒君とスバル君とツカサ君は
出さんといてなー!!！」

ジャンケンって・・・ああ、解った

ツカサ「何のジャンケンをするのかな？」

諒「座席決めだろ・・・」

俺がそう言うと二人は納得した

全員「ジャンケン・・・ホイ!!!」

そういえば、ジャンケンに何時も勝ってたのって確か・・・

なのは「やったー!!!私が諒くんの隣だー!!!」

全員（なのは以外）「ま・・・負けたort」

えつと、皆さん？

それは俺の服なんですよ

こんな所でort状態になったら、服が汚れるんですけど

諒「はぁ・・・」

スバル「ど、ドンマイ・・・」

スバル、慰めるな

なんか惨めになるからさ

ツカサ「今日は思いっきり遊ぼう、諒君。」

ツカサ、当たり前だ

久しぶりに遊びに行くんだから、思いつきり遊ばないと損だ

なのは「あつ、バスが来たよ!!」

さて、思いつきり遊ぶか!!!

諒・スバル・ツカサ「はあー・・・」

俺達はベンチに座ってため息を吐いた

ツカサ「予想はしてたけど、まさか此処まで長いなんて・・・」

ツカサ、今日はもっと長くなるぞ

スバル「二時間だよ・・・どうして女の子は買い物が高いのかな？」

スバル、俺達に聞かれても解らん

俺達は男だからよ

だけど・・・長い

なのは達はデパートに着くと、直ぐに服屋に籠もった

予想はしてたが長すぎる

俺達が遊ぶ時間が減ってしまう

あの手を使うか・・・

諒「俺達だけで遊びに行かぬ?どうせ、まだ掛かりそうだしよ。も

しもの事があれば電話すればいいし、行こうぜ?」

俺は二人に言った

ツカサ「そうだね、僕達も楽しまないとね。」

スバル「だったらゲーセンに行かない?」

ゲーセンか・・・

最近行ってなかったしな

諒「そうだな、ゲーセンに行こうぜ。パチンコ打ちたいしな。」

パチンコ打ってみたかったんだよなあ

今まで打った事ないしな

ツカサ「諒君って本当に小学生?」

ちよつと待つてくれよ・・・

転成する前が13歳

転成して11歳だから・・・

諒「精神年齢は24歳だぜ。」

ツカサ「・・・大丈夫だよ、諒君。今から病院に連れて行ってあげるから、安心して。」

諒「アホな事は言うな。さっさと行くぞ。」

俺は狂ってないのに、何故病院に行かないかんだ

ツカサ「ピ・・・ポ・・・p」「何してんだよ！！？」「今から病院に電話してあげるから少し待っててね。」

こいつはマジだぞ！！

諒「電話するのを止めないと・・・解った？（ニコッ）」

ツカサ「りよ、了解。」

解ればいい

諒「早く行くつぜ。」

そう言って俺達はゲーセンに向かった

第76話 久しぶりに遊ぶか・・・戦わないぞ(後書き)

明後日テストだよort

作者の松上ですort

「 諒「ort状態で話すな、面倒臭い。あつ、どうも、主人公の諒だ。」

「 すすか「頑張つて、松上君!!あつ、今晚は、後書き限定キャラのすすかです!!」

ティアナ「今回は私、新井ティアナが来たよ!!」

まずは!!ort

4人「AIさんありがとうございました(ort)」

テスト嫌だなあort

諒「だから、ortは止める!!止めないとバラすぞ?」

お前つて本当、物騒だよなort

俺の心の広さに感謝しろよ

諒「意味が解らん。」

ティアナ「それにしてもテスト大丈夫なの?」

解んねえ、勉強はしてるけどよお

諒「航海しないように勉強しろよ?」

勿論!!それじゃあ今回は此処まで!!
次回はキャラ設定だ!!

諒「またするのかよ・・・」

ああ、ミソラ達のこと書かないといけないしな

諒「あつ・・・そ。」

はあ、お前って俺に冷たい時が多いよな

諒「それが主人公だ。」

もういい。それじゃあ皆さん!!

すずか・ティアナ「次回も!!」

4人「お楽しみにー!!」

キャラ設定パート8（前書き）

今回はキャラ設定です

短いですが・・・

今回名言を覚えてくれたのはWindさんです!!

TOVで

『友に誓った！変えてみせると!!』

Byフレン・シーフォ

TODで

『信じること、信じ続けること、それが本当の強さだ!』

Byスタン・エルロン

ラーゼフォンで

『守るんだ…俺が…皆を……守るんだあ—————!!』

By神名綾人

新機動戦記ガンダムW Endless Waltzで

『せっかく手に入れた平和なんだ。誰かがなんとかしてやんねえとな……』

Byデュオ・マックスウェル

ありがとうございました!!

キャラ設定パート8

追加ヒロイン

ひびき
響ミソラ

CV：福圓美里

代表作：流星のロックマンシリーズ（響ミソラ役）、T O L O V E
るシリーズ（金色の闇「ヤミ」役）

性別：女

年齢：11才

身長：151.9cm

体重：???kg

容姿：原作と同じ

性格：原作以上に明るく、とても優しい

能力：電波変換

備考：諒の事が好きだが告白していない、自分が皆に希望を与える歌手になった時に告白するよう決めている、なのは達もミソラが諒の嫁になることに賛成している、歌手活動は休止中、現在諒の家で生活している

ミソラのパートナー

ハープ

CV：氷上恭子

代表作：流星のロックマン（ハープ役）、劇場版ポケットモンスター
I ミユウツীর逆襲（アイ役）

性別：女

能力：電波変換、ミソラのバトルのアシスト、ブラザーバンドの契

約、電話、メールなど

性格：マイペースで気紛れ、派手好き

備考：ミソラの相棒、ミソラを利用し地球を征服しようとしたが諒の歌などを聴いて止めた、ミソラの恋を応援している、諒達の歌がお気に入り

心強い協力者

あまぢ
天地まもる

性別：男

性格：優しいの一言に尽きる

備考：諒達の力の事を知っている数少ない人物、スバルの父親の星河大吾の元部下、諒達の心強い味方、諒達のバンドグループ“ヒカリ”のファン

発明大好きなアマケン職員

うたかい
宇田介しんすけ

性別：男

性格：原作と違いかなり友好的

備考：天地同様諒達の力を知っている数少ない人物、現在マテリアウェーブを開発中、天地同様諒達のバンドグループ“ヒカリ”のファン、しかも熱狂的な

心優しき先生

育田^{いくた}みちのり

性別：男

性格：責任感が強く、他人優先をよくする

備考：諒達の先生、諒達の力の事を知っている数少ない人物、諒達の力のことは諒との約束があるため誰にも話していない

キャラ設定パート8（後書き）

なんとか書けた

どうも、作者の松上です

諒「勉強しろよ。よう、主人公の諒だ。」

すずか「本当に勉強大丈夫？あつ、後書き限定キャラのすずかです
！！」

はやて「今回はウチや！！八神はやてです！！」

ますは！！

4人「Windさんありがとうございました！！」

もう直ぐ100話・・・

諒「テスト期間中に100話ってついてないよな。」

まあな、記念でもしようかな？

はやて「何するんや？」

できればコラボがいいけど、そんな人いないから、決まってるない

すずか「大丈夫なの？」

解らん、今の俺が不安なのはテストだ

諒「じゃあ勉強しろよ!!!」

してるよ!!!

だけど、自信が無くて

はやて「頑張り、何も始まってない時から諦めたらあかん!!!」

諒「どっかで聞いたぞ、その名言!!!」

はやて「気のせいや」

それじゃあ今回は此処まで!!!

すずか、頼むな!!!

すずか「はい!!!」

次回 パチンコшы・・・邪魔する奴は誰だ?」

それじゃあ

諒・はやて「次回も!!!」

4人「お楽しみに!!!」

お知らせ

お知らせです!!

諒「何を知らせるんだ？」

今日から執筆活動を休止する

・

・

・

・

諒「はああああああああ!!!!?お前、何言ってるんだよ!」

あつワリイ、重要な事が抜けてた

『テスト勉強があるから、テストが終わるまで執筆活動を休止する』
だ

諒「驚かせるなよ・・・」

悪いな、でもリアルに勉強にしないとやばいんだ

諒「なるほどね・・・」

だから、今日からテストが終わるまで執筆活動を休止します
勝手に休止してすみません

15日にテストが終わるので、15日から執筆活動を再開する予定
なので、待っていてください!!

諒「こんな無理なこと言っで悪いな。」

それじゃあ次回にお会いしましょう!!

第77話 パチンコしよ・・・誰だ邪魔する奴は？（前書き）

な、なんとか更新が出来た・・・

無理矢理ですが・・・

第77話 パチンコしよ・・・誰だ邪魔する奴は？

side 諒

諒「久しぶりだなあ」

俺はゲーセンに来てそう言った

転生してから中々来れなかったので、久しぶりにゲーセンに来たのだ

ツカサ「・・・」

ツカサはある紙を見ていた

諒「どうしたんだ、ツカサ？」

ツカサ「ん？ああ、これを見ていたんだよ。」

ツカサは紙を俺に渡してきた

スバル「それは何、諒君？」

スバルは俺に聞いてきた

諒「少し待ってっつて、えー何々

『本日は三人対三人のミニサッカーをします。勿論、優勝したチームには景品があります。優勝したチームには本店のパチンコの玉を10000玉プレゼント！！！！』

・・・参加決定！！！！」

スバル「え、ええー！！！！！！！！？」

ツカサ「やっぱり」

スバル、これは決定事項だ

ツカサ、少しはリアクションしろ

そう思いつつ俺達はエントリーしに行った

諒「さて、俺達の番だな。」

俺達はギリギリミニサッカーにエントリー出来て、会場である屋上に来た

勿論、チームメイとはスバルとツカサだけ

「オイオイ見てみるよ、あいつら!」

「何だ、ガキじゃないかよお!」

「ガキは家に帰ってママのおっぱいでも吸ってる、ハハハ!」

対戦相手の高校生らしき奴らが俺達に言ってきた

・・・殺すか・・・

「それでは、始め!!--!!」

Piiiiiiii!!

審判が始まりの笛を鳴らした

「俺様のシュートを受けてみるよ!!!」

男はボールを蹴ろうとした

スバル「ゴー・トゥー・ヘルV3」

スバルはボールを奪った

「な!? ガキ、何しやがった!!!」

一人が叫ぶ

スバル「少し・・・反省しようか? 流星ブレードV3」

スバルはそのままゴールに向かって流星ブレードを放った

「こんなボールは俺様が止めてやる!!!」

誰がこれで終わりって言った?

俺は飛んできたボールをタイミング良く足の間を跨がせた
そうすると、ボールに氷が集まった

そして、俺はボールを蹴った

諒「チェイン!!! エターナルブリザード!!!」

ボールはスピードを増してゴールに向かった

「こ、こんなボールくらいなら、お、俺様は片手でも止められるぜ
!!!」

へえ、ならもつと威力を出すか

諒「ツカサ!!!」

俺が叫ぶとツカサは俺に頷き、ボールに向かった

ツカサ「チエイン!!!天空・・・落とし!!!」

ツカサは天空落としをして、さらにボールの威力をあげた

「う、うわああああああ!!!?」

キーパーの男は泣きながら避けた
なので

Piiiiiiii!!!

「ゴォォォール!!!」

諒「おい、まだやるのか?」

俺はびびってる男に聞いた

「き、棄権する!!!こんな化け物達を相手できるか!!!」

そう言っつて高校生3人は、走って逃げていった
しかし

諒「棄権の宣言さえすりゃ無傷で帰してやったのに・・・」

スバル「残念だね・・・」

ツカサ「まっただね・・・」

俺達は近くに落ちていたサッカーボールを高校生に蹴った

諒・スバル・ツカサ「カオスブレイクG5!!!!!!」

『ぎゃあああああああああああ!!!!!!?』

悲鳴が聞こえるが俺達は悪くない

『お、俺達も棄権だ!!!!!!』

俺達の試合を見て、ミニサッカー参加者が全員棄権した

「えっ・・・と、優勝は新井君達のチームです。その、優勝チームに贈られるパチンコの玉、10000玉をプレゼントです。」

よし!!!!これでパチンコが打てる

エヴァ、アクエリオン、仕事人、北斗の拳etc・・・
楽しみだな!!!!

諒「よし、早速打ちなへ、蛇だー!!!!!!」・・・ぶっ殺す!
!!!スバル、ツカサ、行くぞ!!!!!!」

スバル・ツカサ「りよ、了解。」

俺が楽しむ時間を削るんだ

生きて還れると思つなよ・・・
そつ思いながら蛇が沢山出てきている場所に向かった

第77話 パチンコしよ・・・誰だ邪魔する奴は？（後書き）

今回は次回予告だけ

次回 VSオヒュカス・クイーン

お楽しみに！！

第78話 VSオヒュカス・クイーン（前書き）

流星のロックマンシリーズで一番嫌いなキャラだから、戦いが適当だ・・・

後悔はしていない！！

何故かすつきりしてる！！

今回名言を教えてくださいましたのはレイフォンさんです！！

グレンラガンで

『もしとか、たらとか、ればとか、そんな思いに惑わされるな。自分の選んだ一つのことを、お前の宇宙の真実だ。』

Byカミナ

『俺たちの求める明日はてめえの決める明日じゃねえ！俺たちが俺たち自身が、無限の宇宙から選び出した俺たちの明日だ！』

『なめんじゃねえ。時間だろうが空間だろうが多元宇宙だろうが、そんなこと知ったことじゃねえ。てめえの決めた道をてめえのやり方で貫き通す！それが俺たち大グレン団だ！』

Byシモン

『無茶で無謀と笑われようと、意地が支えの喧嘩道。』

『壁があつたら殴って壊す、道がなければこの手をつくる』

『心のマグマが炎と燃える、超絶合体グレンラガン』

『俺を！』

『俺たちを！』

『誰だとおもっていやがる！！！！』

B Y N M O N & a m p . カ ミ ナ

ありがとうございました……！

第78話 VSオヒュカス・クイーン

side 諒

諒「死ね死ね死ね死ねやゴラァー！！！！！！！！！！」

俺はあの後、スバルと電波変換し蛇の電波ウイルスを殺している
俺はパチンコを打つ時間を減らされたのでかなり切れてる
なので、ボスと戦う前にイライラを少しでも減らそうと頑張ってい
るが……

諒「（ストレスが）全然減らん！！！！！！」

スバル「（敵が）確かに全然減らないね。」

おお、スバルも俺と同じ気持ちなのか！！

諒「さつさと（ストレスを）減らすぞ！！！！」

「うん、（敵を）減らそう！！！！」

そして俺達は少し？思い違いながら敵を倒して行った

ボス登場ー！！！！

しかし……

諒「キモいな……」

スバル「キモいね・・・」

オヒユカス・クイーン「なんですてえー！！！！！！！！！！？」

あつ聞こえてたんだ

キモいから直視できねえ

スバルに頼むか・・・

諒「s「嫌だ！！！」まだ一言も話してないぞ！！！」

スバル「どうせ僕に、あれを倒すよつおつとしたんでしょ！！僕
は絶対嫌だからね！！！」

嘘だろort

此処でスバルとうるさいのかブラザーになるのに・・・
はあ・・・

オヒユカス・クイーン「無視してんじゃないわよ！！！」

うるさい・・・

さっさと終わらせるか・・・

諒「フォルテ、千本桜を頼む。」

俺はフォルテに千本桜を出させ、オヒユカスクイーンに構えた

諒「正解・・・千本桜景敵」

俺がそう言つと俺達の周りに千本桜が千本現れた

オヒュカス・クイーン「な!!?」

驚いてる、驚いてる

さっさと、終わらせますか!!!

諒「散れ……」

俺がそう言つと千本桜は桜の花びらのように散り、オヒュカス・クイーンの姿が見えなくなるように覆った

中から悲鳴のような物が聞こえるが、無視だ無視!!

その後、俺達はウエーブアウトして、一応原作通りにしたかったの
で、うるさい奴の親に万華鏡写輪丸で幻術を見せて転校の話無く
させた

早くパチンコ打ちてえー!!

そう思いながらゲーセンに向かった

第78話 VSオヒュカス・クイーン（後書き）

レイフォンさんありがとうございました！！

今回は次回予告だく

次回 パチンコが打てる！！！！

次回は何時更新するか分かりませんが、お楽しみにー！！

第79話 パチンコが打てる!!! (前書き)

これ更新したら勉強だよ……はあ

誰か代わりにテスト受けてくれないかな？

居たら逆に怖いけど……

今回は名言コーナーはお休みです

第79話 パチンコが打てる!!!

side 諒

俺達は蛇を倒し（苛め）、ゲーセンに向かっている

諒「何打とうかなあ・・・アクエリオン？北斗の拳？必殺仕事人？どれも捨てがたいし・・・」

スバル「僕は牙狼を打ってくるよ。」

そう言つて玉の三分の一を持っていった

余談だが、スバルとツカサにパチンコの楽しさを教えた

一人で打つとか淋しいしな

ツカサ「じゃあ僕はスーパー海物語を打ってくるよ。」

そう言つてツカサも玉を持って行ってしまった

諒「皆バラバラかよ・・・まあいいか・・・やっぱあれを打つか。」

俺は自分の玉を持ってある台に向かつて移動した

カヲル「やあ、僕を待っていてくれたのかい？それとも、大当りを待っていたのかい？おめでとう、ようやくその時がやってきたようだ。パチンコ・・・全回転があるという事実は、幸せに繋がる。嬉しいことだよ。」

俺は今、エヴァを打ってまーす
しかも、全回転を出してしまった
皆に注意な

この世界にパチンコがあるのはご都合主義だから深く考えるなよ！
俺と約束だぜ！？

カヲル「人は無から何も作れない・・・人は何かに継らなければ何も出来ない・・・人は神ではありませんから。」

このシーンを見てカヲル君のファンになった！！
凄く格好良いぜ！！

カヲル「分かっていますよ、その為に僕は此処に居ますから。全てはリリンの流れのままに・・・さあ行くよ、おいでアダムの分身、そしてリリンの下部。」

スバル「凄い、全回転だよ・・・」
スバルが何時の間にか俺の隣に座ってみていた

カヲル「エヴァシリーズ・・・アダムより生まれし・・・人間にとつて忌むべき存在・・・それを利用してまで生き延びようとする・・・リリン・・・僕には分からないよ。」

ツカサ「凄い事言ってるね・・・でも、格好良い・・・」

ツカサも俺の隣に来て座っていた

カヲル「アダム、我らの母たる存在・・・！？違う・・・これは、リリス！！そうか、そういう事かリリン。」

「おいおい、全回転だぜ!!」

「このゲーセンのパチンコって中々全回転は出ないんだろ？」

「あの坊主、やるじゃねえか。」

俺の周りにはゲーセンに来ていた奴が集まっていた
正直暑い……

カヲル「待っていたよ、シンジ君。……君は死すべき存在ではない。……君達には未来が必要だ。……ありがとう、君に会えて良かったよ。」

ブシュ!!!

カヲル「当りとはずれは等価値ではないんだ。パチンコにおいてはね……」

諒「よつしゃー!!!!!!」

パチパチパチ（ry

スバル「おめでとう!」

ツカサ「おめでとう!」

『おめでとう!』

諒「……ありがとう。」

ゲーセンの皆と絆が高まったぜ、これは

なのは「皆、何してるの？」

諒・スバル・ツカサ「ギクツ！！？」

俺達は後ろを見た

そこには、両手に紙袋を沢山持って、顔は笑っているが目は笑っていないのは達が居た

フェイト「何で私達を置いてこんな楽しい所に来てるのかな？」

はやて「ちよつとこつち来て話そうや。」

聞いちゃダメだ！聞いちゃダメだ！聞いちゃダメだ！聞いちゃダメだ！聞いちゃダメだ！聞いちゃダメだ！聞いちゃダメだ！聞いちゃダメだ！！！！

ティアナ「大丈夫、怖い事は何もないから。」

逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！逃げなきゃダメだ！！！！

諒「ん」逃がさないよ。「な！？ミソラ、離してくれ！！！」

逃げようとしたが、ミソラに捕まってしまった

スバルはなのはとティアナに、ツカサはフェイトとはやてに捕まっていた

諒・スバル・ツカサ「ご、ごめんなさい！許してください！！！」

俺達は心から謝った
だが、

全員「O・H・A・N・A・S・H・Iしよつか？」

O・H・A・N・A・S・H・Iされてしまった・・・

第79話 パチンコが打てる!!! (後書き)

今回も次回予告だけ

次回 VS ウルフ・フォレスト

次回もお楽しみに!!!

第80話 VSウルフ・フォレスト(前書き)

長いよ……

しかも、スバルが更にチート化……

本当にこの小説は大丈夫か？

気にしたら負けだと思っけど

今回も名言コーナーはお休みです

最近すいませんort

第80話 VS ウルフ・フォレスト

side 諒

スバル「アトミック・・・ブレイザー!!!!」

ウルフ・フォレスト「オリヤッ!!!!」

今、スバルとウルフ・フォレストが戦っている

オヒュカス・クイーンとの戦いから一週間が経って、スバルと特訓していたらウルフ・フォレストが現れた

こいつも、キャンサー・バブルと同じで俺達の敵だ

俺が倒しても良いんだが、スバルにも戦わせないといけないので今回は俺は見ているだけだ

スバルはスターブレイクでファイアレオになっている

スバル「くっ、レオの力だけじゃ勝てない!! ヒカリ、ヤミ、行くよ!!!!」

ヒカリ・ヤミ「はい(おお)!!!!」

スバルはヒカリのライトソード、ヤミのダークガンを出した

ウルフ・フォレスト「お前の攻撃は俺様には届かんわ!!!!!!・・・
・ウォーーーーーン!!!!!!」

ウルフ・フォレストは遠吠えをすると、地面から小さな狼のウイルスが沢山現れた

スバル「!? オリヤー!!!!」

スバルは一瞬驚いたが直ぐに小さな狼を斬っていった

ワオーン！！！！

狼共は俺の方にまで来た

諒「身の程を知れ！！フォルテ、ソウルユニゾンだ！！」

フォルテ「嗚呼、ソウルユニゾン！！！！カーネルソウル！！！！」

フォルテがそう叫ぶと、俺の体は光に包まれた

マントは健在だが右手に持っていた天鎖斬月は紫の光の剣になり、騎士の様な鎧を身につけた

諒「お前等に技を使う必要もねえ！！！！オラァ！！！！！！」

俺は狼を斬っていった

sideスバル

スバル「ライトブレード！！！！ダークキャノン！！！！」

僕はライトソードとダークガンを使い、ウルフ・フォレストが召喚した狼のウィルスを倒している
でも、数は減る傾向はない

此処は賭けてみるか！！

スバル「ウォーロック!!」

ウォーロック「任せろ!!!.....ロックオンしたぜ!!!」

よし、これなら!!

スバル「ウォーロックアタック!!!」

僕はウォーロックアタックでウルフ・フォレストの目の前に一瞬で移動し、ライトソードで大きく斬り、ダークガンをゼロ距離で撃った

ウルフ・フォレスト「グハツ!!!」

少しはダメージがあるみたいだが、まだ倒せそうじゃない

スバル「ウォーロック、試してみるよ。」

ウォーロック「な!?バカかお前は!!特訓でも満足に変身出来ないんだぞ!!此処で変身して失敗したらどうなるか分かってんのかよ!!!?」

分かってるさ、だからこそ変身するんじゃないか

スバル「ウォーロック.....僕を信じて。」

僕はウォーロックに言った

ウォーロック「.....勝手にしろ!!!」

.....ありがとう、ウォーロック

スバル「ヒカリ、ヤミ、二人は待機状態に戻って。」

ヒカリ・ヤミ「はい（ああ）。」

ヒカリとヤミは待機状態のブレスレットに戻った

ウルフ・フォレスト「はあ・・・何をするきだあ・・・」

ウルフ・フォレストは肩で息をしながら聞いてきた

スバル「僕の切り札さ、行くぞ！！！！ダブルブレイク！！！！」

僕はグリーンドラゴンのカードをプレゼンションした

side 諒

諒「オラオラオラオラア！！！！！！」

俺は剣を使い狼達を消していつている

しかし、ボスを倒さない限りこいつらは無限に出てくる
どうする、新井 諒・・・

1・面倒臭い、ボスを倒そう

2・面倒臭い、スバルが倒すのを待とう

3・面倒臭い、全員倒そう

3だな・・・だが、コマンド全てに『面倒臭い』があるってどうよ
ort

ワオーーン!!!

お前等は俺に落ち込ませる時間もくれないのか・・・
くれたって良いよな、何で空気を読まないの？
少し・・・反省しようか？

諒「ダークネスオーブ『ドカーーン!!!!!!』・・・誰だよ、
人が必殺技を使おうとしたのにort」

俺は爆発音がした方を見た

だが、煙がそこを覆っているので何も見えない

諒「一体何があったんだよ・・・白眼!!!」

俺は狼達を攻撃しながら、白眼で煙が覆っている場所を見た

そこには、ボロボロのウルフ・フォレストとペガサスとレオの姿を
したスバルの姿が見えた

諒「まさか・・・ダブルブレイクが出来たのか？」

ウォーーン！！！！

ウザイ・・・

諒「火遁・豪火球の術！！！」

俺は膨大のチャクラを練り込んだ特大の火遁・豪火球の術を使った

ウォー・・・

狼達は完全に消えた

諒「ふう・・・スバルの所に向かうか！！！」

俺はスバルの所に向かった

sideスバル

スバル「・・・成功・・・だよな？」

ウォーロック「嗚呼、成功だ！！こいつはスゲエ、力が溢れてきや

がる！！！！」

ウォーロックの言う通り、力が溢れてきている
ダブルブレイクでこの強さなら、ブレイクキングはどれくらい強い
んだ？

ウルフ・フォレスト「フン、姿が変わっただけじゃないか！！」

それはどうかな！？

スバル「ハアアアアアアアアア！！！！」

僕はウルフ・フォレストの下に巨大な魔法陣を出した

ウルフ・フォレスト「な、何だこの巨大な魔法陣は！！？」

これが僕の全力全快の！！！！！！

スバル「マジシャン・・・・・・・・フリーズ！！！！！！」

ウルフ・フォレスト「グア・・・・・・・・」

ウルフ・フォレストは短く悲鳴をあげ凍った

諒「お前はバグキャラか！！？」

突然、諒君が叫んできた

失礼な、僕はバグキャラじゃない！！

普通の男の子だ！！

二回言うよ！！！！

僕は普通の男の子だ！！！！

side 諒

俺がスバルの所に着くと、スバルはダブルブレイクしていた

諒「ダブルブレイクを成功させたのか・・・土壇場に強いよな、スバルの奴・・・」

スバルってマジで土壇場に強かったか？

スバル「ハアアアアアアアアアア！！！！」

スバルが突然叫んだ

そしたら、ウルフ・フォレストの下に巨大な魔法陣が現れた

諒「マジシャンフリーズ・・・だよな？それにしても、デカ過ぎだろ・・・」

普通なら直径5mくらいなのだが・・・

諒「直径10mはあるだろう・・・」

スバル「マジシャン・・・フリーズ！！！！！！」

スバルがそう叫ぶと高さが15mくらいある氷の塔が現れた

諒「お前はバグキャラか！！？」

俺はスバルに叫んだ

第80話 VSウルフ・フォレスト（後書き）

今回も次回予告だけ

次回 学芸会の稽古だ!!!

それじゃあ次回もお楽しみに!!!

第81話 学芸会の稽古だ!!! (前書き)

後一日でテストが終わる!!!

テストが終われば更新スピードも・・・変わらないな

まあ、早くテストが終わってほしいことに変わりはないけど

今回名言を覚えてくれたのはジェスター「アーカムさんです!!

封神演義で

「釣れますか?」

「大物がかかったようだのう。」

By 姫昌 & amp ; 太公望

「何かを成すには誰かの犠牲がつきものなんだよ

それが大きな事であればあるほど犠牲の数も比例する

でも僕らは決して自分を捨てているわけじゃない

自分で決めた事だから同情も哀れみもいらない

ただ、悲しんでくれれば いい・・・」

By 普賢真人

すいません、楊の言葉で読めない漢字が有ったので載せれませんでした

本当にすいませんort

第81話 学芸会の稽古だ!!!

side 諒

委員長「今から学芸会でする物を決めるわよ!!!」

煩いのが前に立ってそう叫んだ

ウルフ・フォレストと戦って既に三日が過ぎた

ツカサ「何をするんだらうね？」

俺の右隣の席に座っていたツカサが聞いてきた
一応、席順を覚えておくれ

男 女 煩い奴 男 男

キザマロ ゴン太 スバル 女 女

ミソラ 俺 ツカサ ティアナ 男

なのは フェイト はやて 男 男

女 男 男 女 女

となっている

まあ、俺達の席が固まってるのはアフロデイがしてくれた
席替えしても、余り代わりはない

取り敢えず、ツカサに話し掛けられたから答えを返すか

諒「分かんねえ。だが、あの煩いのが納得する物だらう。」

ツカサ「・・・確かにね。」

俺の答えを聞いて、ツカサは納得したようだ

委員長「何か良い案はないの!!!?・・・ゴン太、何か案を出しなさい!!!」

ゴン太「ええー!!!?」

ゴン太・・・ドンマイ

スバル「諒君、学芸会でライブとか出来ないの?」

スバルが後ろを向いて聞いてきた

諒「出来ると思うけどよ、それだったら俺達のライブじゃん。学芸会は皆でするもんだろ?」

ゴン太「じゃ、じゃあヒカリのライブってのはどうでしょう?」

ゴン太、お前・・・盗み聞きしてたる?

『そつだそつだ!!!ヒカリのライブにしようぜ!!!』

『このクラスには、ヒカリのメンバーが全員居るし!!!』

『私もヒカリのライブに賛成!!!』

『俺もだ!!!』

『私も!!!』

ゴン太の意見にクラスの全員が賛成した

委員長「ま、待ちなさいよ!!!ヒカリのライブをするとしても、私達は何をやるのよ!!!?学芸会は皆でするものよ!!!」

煩いのが正面な事を言ってる

天変地異でも起きるんじゃないか?

キザマロ「それなら心配ありません!!!」

キザマロ、此処で変な事言えば爆発するぞ
煩いのが

キザマロ「このクラスには諒君が居ます!!!諒君はヒカリの曲全部の作詞・作曲もしてるんです!!!だから、僕達も作詞・作曲をしてもらって、歌を歌えば良いんです!!!!!!」

・

・

・

・

諒「ハアアアアアアアアア!!!?意味が分かんねえよ!!!何で俺g「良い考えよ、キザマロ!!!それで行きましよう!!!!!!」
人の話を聞けよ!!!!!!」

俺はキザマロを睨みつけた

キザマロは何かのチラシを俺に見せてきた

えー、何々

『 ×デパート10周年記念!!!全てのアイテム4割引!!!このチラシを持ってゲームセンターに行くと、パチンコの玉200000個プレゼント!!!!詳しくは裏面を!!!!』

俺はキザマロにOKサインを見せた

パチンコが無料で打てるとか、俺ついてるな!!!
この前はなのは達に・・・話すのは止めよう

委員長「じゃあ歌いたっていう人、手を挙げて!」

そう言うとかラスの半分が手を挙げた

中には、スバルやツカサ、ゴン太にキザマロ、更に煩いのみで手を挙げていた

委員長「意外に多いわね・・・まあ良いわ。新井君、明日までに曲をつくって!」出来るか!!! たった一日で何曲も作れるわけないだろうが!!!!」そこをなんとかしなさい!!!命令よ!!!!」

こいつ、委員長だからって好き勝手言いやがって!!!

諒「なら、俺は曲を作らない!!!!」

そう言うって俺は腕を枕にして眠った

煩いのが叫んでいたが気にしない

俺は意識を失った

「りよ……ん」

誰だよ……俺の名前を読んでる奴は……

「諒くん、起きてよ。」

この声は……ミソラか？
面倒臭い que 起きるか……

諒「……ふああ……おはよう、ミソラ。いったいなんだよ？」

俺は目を擦りながらミソラに聞いた

ミソラ「今から学芸会の練習だから、体育館に集合だよ!!」

練習って……誰が練習するんだよ……

ミソラ「取り敢えず起きて!!」

諒「分かったよ……」

俺は両手を上に挙げて固まった筋肉を解した

ミソラ「さ、早く行こ!!」

ミソラは俺の手を掴んで走りだした

諒「み、ミソラ、眠いからゆっくり行こうぜ……」

まだ、意識が覚醒してないから体が怠い

ミソラ「もー、しょうがないなー。」

そう言っつてミソラは走るのを止めて、歩いてくれた
だが、やっぱり手を掴んだままだが・・・

諒「やっぱ俺達の練習なのねort」

俺とミソラは体育館に着いたが、俺は舞台を見てortになった
何故なら、なのは達がギターなどの音合わせをしていたからだ
しかも、体育館にはコダマ小学校の全校生徒が座っていた

ミソラ「頑張つてね、諒くん!!」

ハー普「応援してるわよ!!」

はあ、やっぱしないとイケないか・・・

諒「分かったよ、やりゃいいんだろ・・・はあ・・・」

俺は溜息を吐いて舞台に向かった

なのは「あつ、諒くん!!今から練習するから音合わせしてね!!」

そう言っつて俺のギターを渡してきた

何故此処にあるんだよ・・・

フェイト「諒が寝てる間に、練習することが決まってね。フォルテの中に私達の楽器があるから、借りたよ！」

フェイトはそう言ってフォルテを見せてきた

はやて「取り敢えず、一曲目はフェイトちゃんが歌うからな。」

ティアナ「ギターを格好良く弾いてね、お兄ちゃん！！頑張ったら私が（自主規制）してあげるからね！！」

諒「はやて、了解した。ティアナ、それをするのはまだまだ先だ。」

俺は二人にそう言って音合わせをした

マジでフェイトは何を歌うんだろか……

……あの歌かもしれないな……

俺はギターの音を合わせながら考えてた

第81話 学芸会の稽古だ!!! (後書き)

今回も次回予告だけ

明日から後書きも真面目に書きます

すいません

次回 俺達の歌を聴け!!!

それじゃあ次回もお楽しみに!!!

第82話 俺達の歌を聴け!! (前書き)

テストが終わった!!

漸く更新が出来る!!

まあ、ちよくちよく更新してただけどさ・・・

今回から執筆活動を本格的に再開します!!

楽しんでください!!

今回の話は歌ばかりです・・・

しかも、全部俺の好きな歌です・・・

知らない曲があれば、題名を検索してください

絶対に出てきますから!!!

・・・俺は何をしてんだ?

今回名言を覚えてくれたのはケイさんです!!

EI Shaddaiーエルシャダイーで

『イーノック、人が持つ唯一の力、それは自らの意志で進むべき道を選択することだ。おまえは常に人にとって最良の未来を思い、自由を選択していけ。』

『見る、また奇妙な奴が出てきたぞ。』

『焦る必要はないさ、時間はいくらでもあるんだ。』

『そんな準備で大丈夫か？』

Byルシフェル

ありがとうございました！！！！！！

第82話 俺達の歌を聴け！！

side 諒

俺はギター之音合わせが終わった

はやて「諒君、これが今日練習する曲やで。」

はやてはそう言って俺に一枚の紙を渡してきた

諒「……なあ、はやて？マジでこれ歌うのか？」

俺はその紙を読んで疑った

何故なら、ソロの曲を一人一曲歌うからだ

はやて「当たり前やで、ソロは学芸会で歌う事になったんや。やか
ら、練習しなあかんやろ？」

俺が寝てる間にそんな事が決まっていたのか……
はやてに一理あるな……はあ、面倒臭い

諒「そうだな。で、誰がMCするんだ？」

全員「諒くん(君)(お兄ちゃん)だよ。」

何で俺なんだよort

何時も俺がしてんじゃねえかort

今日くらい俺じゃなくてもいいだろort

スバル「諒君、そろそろMCやってくれないかな？」

スバル、何故お前が此処に居るんだよ？
しかも、MC勝手に決められてるしort
もうヤケクソだ！！

諒「やりやいいんだろ！！！」

俺はマイクをスバルから受け取った
なのは達もそれぞれの場所に行った

諒「あー、あー、聞こえてますか？」

『聞こえてまーす！！！！』

凄い声のポリリズムだな

まあ、全校生徒が此処に居るから当たり前か

諒「えー、今日俺達のクラスは学芸会で歌を歌うことになりました。
なので、俺達がクラスの見本になろうと思いい此処で歌うことになり
ました。今日歌う曲は全部ソロで、学芸会で歌う曲です。もし良か
つたら、俺達と歌ってください！！！」

『りょうかーい！！！！』

皆、歌ってくれるみたいだな

じゃあ行きますか！！

諒「最初はフェイト・新井が歌います！！盛り上がって行くぞ！！
！」

俺はそう言いフェイトと場所をチェンジし、はやてを見た
はやては一度頷き、叫んだ

はやて「ワン・トゥー・ワン・トゥー・スリー・フォー！！！！」

その掛け声に合わせて、俺達はギターを弾き始めた
そして、フェイトは歌い始めた

）！！

パチパチパチパチ（ry

フェイトが歌い終わったら大きな拍手が鳴った

フェイト「ありがとうございますー！！！！」

フェイトが頭を下げてお礼を言った

俺はフェイトが頭を上げると、マイクを持って話し始めた

諒「まだまだ続くぜー！！体力は大丈夫かー！？」

『だいじょーぶ！！！！』

大丈夫だな！！

諒「次は高町なのはが歌います！！行くぜー！！」

はやて「ワン・トゥー・ワン・トゥー・スリー・フォー！！！！」

俺は言い終わるとなのはと場所をチェンジし、はやてが掛け声を掛

け、俺達はギターを弾き始めた

）

パチパチパチパチ（ry

なのは「ありがとー！！！！」

なのは手を振りながらお礼を言った
俺はマイクを持ち、また話した

諒「乗ってきたぞー、まだ行けるよなー！？」

『あたりまえー！！！！』

ならこっから更に乗ってもらうぜ！！

諒「次は新井ティアナが歌うぜ！！頑張っていくぜー！！」

俺は言い終わるとティアナの所に向かった

俺はティアナとバトンタッチをして、俺がキーボードを弾く

俺ははやてに合図をした

はやて「ワン・トゥー・ワン・トゥー・スリー・フォー！！」

はやては俺の合図に気付き、掛け声を掛け俺達は演奏し始めた
そして、ティアナは歌いだした

）！！

パチパチパチパチ（ry

ティアナ「ありがとねー！！」

ティアナは皆にピースをしながらお礼を言った

俺はティアナとバトンタッチし、マイクを持った

諒「残す曲は後二曲！！最後までこのテンションで行くぞー！！！！」

『おおー！！！！！！』

頑張つてやるぜ！！

諒「次は八神はやてが歌うぜ！！まだまだ行くぜー！！」

俺は言い終わるとはやてとバトンタッチした

諒「ワン・トゥー・ワン・トゥー・スリー・フォー！！！！」

俺が掛け声を掛け、皆が演奏しだした

そして、はやてが歌いだした

）
）
！

パチパチパチパチ（ry

はやて「皆ー、ありがとうなー!!!」

はやては両手を振りながら、皆にお礼を言った

そして俺は、はやてとバトンタッチをし、マイクを持った

諒「いよいよこの曲でラストだー!!!ラストスパートするぞー!
!!!」

『おおー!!!』

最後だ、頑張るぜ!!

諒「ラストは俺、新井諒が歌うぜ!!!行くぞー!!!」

はやて「ワン・トゥー・ワン・トゥー・スリー・フォー!!!」

俺がそう言うとはやてが掛け声を掛け、皆が演奏し始めた

そして、俺は歌いだした

...

パチパチパチパチ（ry

諒「ありがとうなー!!!皆で頑張って学芸会を盛り上げていこう
ぜー!!!」

『お——！——！——！』

諒「それじゃあ皆ー、最後まで聴いてくれてありがとうなー！——！」

全員「ありがとうー！——！」

俺達のライブは成功した

諒「あれ、何で俺等ライブしてんだ？もともと練習のために、此処に来たんじゃなかったのか？」

全員「あ……」

第82話 俺達の歌を聴け!!（後書き）

久しぶりの後書きだ!!どうも、作者の松上です!!

諒「本当に何日ぶりだろうか・・・主人公の諒だ。」

すずか「皆さん、お久しぶりです!!!後書き限定キャラのすずかです!!」

ツカサ「今回から、この後書きに出演することになったツカサです。」

まずは!!

4人「ジェスター!!アーカムさん、ケイさんありがとうございました!!!」

やっとテストが終わったぜ!!

諒「それじゃあ、前みたいな更新スピードになるのか?」

ネタが思いついたらの話だ

だが、最低一話は更新するぜ

ツカサ「そうなんだ・・・そういえば、次回は紅夜先生とコラボだったよね?」

嗚呼!!

ちゃんと書けたか不安だけだよ・・・

すずか「諒君も紅夜先生の作品の世界に行くんだよね？」

諒「嗚呼、すっかり楽しんでくるぜ！！！！・・・序でに技の「ピ
ーも」

お前、変な事はするなよ？

諒「しない！！！！・・・多分」

はあ、もういい

それじゃあ今回は此処まで！！

すずか、久々に頼むな！！

すずか「はい！！！！」

次回 裏世界の帝王の少年と死神の名を継ぐ青年」

それじゃあ！！

諒・ツカサ「次回も！！」

4人「お楽しみにー！！！！」

第83話 裏世界の帝王の少年と死神の名を継ぐ青年（前書き）

今回は紅夜先生とコラボです！！

だが、諒はサポートです

まあ、コラボする時はそうなんだけどね・・・

今回名言を教えてくださいなのは遊戯王さんです！！

遊戯王シリーズで

『未来に絶望なんてするな、俺達はまだ何にも遣り遂げちゃいないじゃないか』

『俺は自分の心の闇を乗り越えてみせる』

BY遊城十代

『悪を倒すためなら悪にでもなり、この弱肉強食の世界を力により支配しなければならぬ』

『俺が何度攻撃してこようが……俺が勝つ！何故なら俺は霸王だからだ！』

BY霸王十代

『オレに小細工は通用しない』

BY二十代

『未来とは無限。過去は一筋の足跡でしかない。俺にとって過ぎ去った過去など何の意味も持たない。』

BY海馬瀬人

ドラえもんで

『障害があつたらりのりこえればいい！道をえらぶということは、かならずしも歩きやすい安全な道をえらぶってことじゃないんだぞ。』

『毎日の小さな努力の積み重ねが、歴史を作っていくんだよ！！』
Byドラえもん

『…人間のすることってわからない。どうして敵を助けるの。』
『ときどき理屈に合わないことをするのが人間なのよ。』
Byリリル&mp…しずか

ありがとうございました！！！！

第83話 裏世界の帝王の少年と死神の名を継ぐ青年

side 翔

翔「何処だよ、此処は・・・」

俺は周りを見渡してそう呟いた

俺は愛沙と出掛けていたのだが、突然黒い穴に落ちた

俺が居る場所は沢山の扉があつた

翔「さつさと帰・・・ん、何だあれは？」

俺が見た扉は他の扉と違い、黒いオーラを纏っていた

翔「・・・嫌な予感がする。少し行ってみるか。」

俺は黒いオーラを纏った扉に入った

side 諒

諒「オリヤアアアアアアアアアア!!!」

ザシュ!!!

俺は鏡花水月を解号し、オオクワモンを斬った

オオクワモンは悲鳴を上げずに消えた

諒「一体何でオオクワモンが・・・って考えなくてもいいか。本人

に聞けば良いんだから、な！！！！」

俺は天鎖斬月で月牙天衝を何も無い（、、、、）空に放った

「ちっ、やっぱり気付いてたか！！」

そして空から突然、漆黒の竜人が現れた

諒「俺をバカにするのも大概にしとけ、ブラックウオーグレイモン。」

「

俺は天鎖斬月と鏡花水月を、ブラックウオーグレイモンに構えながら言った

ブラックウオー

BWグレイモン「けっ、俺は雑魚をバカにするのが楽しみなんだよ。だから無理だな、雑魚が！！」

ナルシスト？

デジモンにも個性があるが、ナルシストは人間でもデジモンでもキモいな……

BWグレイモン「雑魚相手に俺が戦うまでもない。出てこい！！」

BWグレイモンがそう叫ぶと突然、青いメタルグレイモンとスカルグレイモンが現れた

諒「一々面倒臭い事をするよな！！」

BWグレイモン「黙れ雑魚が！！雑魚は雑魚らしく死ねば良いんだ

よ……！！」

BWグレイモンが叫ぶとMグレイモンが俺に突っ込んできた
俺は天鎖斬月と鏡花水月をMグレイモンに構えた

ドカーーン!!!

突然、Mグレイモンが地面に倒れた

否、倒されたと言った方がいいたろう

何故そう言うのかと言うと、人がMグレイモンの上に乗っていたからだ

「子供相手に三人で戦うとか、お前等ふざけてんのか？」

Mグレイモンに乗っていた人は俺の前に来て、そう言った

諒「貴方は誰ですか？俺の名前は新井 諒って言います。」

こんな状況でも自己紹介をする俺を誉めてほしい

「俺か？俺の名は黒宮 翔って言う。ちょっと待ってる、あいつらは俺が消してやるからよ。」

諒「待ってください、俺も戦います！！俺が戦う相手だったんですから！！」

翔さんは戦い慣れしてるかもしれないが、BWグレイモンは俺も戦わないと危険だ

翔「・・・分かった、だが俺も戦うぜ。だから、刀を貸してくれ。流石に素手で戦うわけにはいかないからな。」

刀貸せつて、素手でMグレイモンを倒したわけ？
一真さん並の実力者だね

諒「分かりました、これをどうぞ。」

俺は鏡花水月を翔さんに渡した

BWグレイモン「雑魚が調子に乗ってんじゃねえ！！Mグレイモン、
^{スカル}Sグレイモン、雑魚を消せ！！！」

BWグレイモンはMグレイモンとSグレイモンに命令した

翔「この刀の戦い方が頭に流れてくる。諒、お前がやったのか？」

翔さんの言葉に俺は頷いた

諒「戦い方も分からない刀で戦うのは危険ですから。ある程度、理解しておいた方が良いでしょう？」

翔さんはかなりの刀の使い手だ

普通に戦っても勝てるかもしれないが、鏡花水月の戦い方を知れば
『鬼に金棒』だし・・・

翔「数分待つてろ。砕ける『鏡花水月』」

ザシュツ！！！！

翔さんがそう行った瞬間、MグレイモンとSグレイモンが真っ二つに斬れた

BWグレイモン「な!!!?その雑魚、何をした!!!?」

BWグレイモンは翔さんに叫んだ

諒「簡単なことさ、鏡花水月の能力は完全催眠。お前が見ていた翔さんは幻だったんだ。翔さんは解号した後、直ぐにMグレイモンとSグレイモンを斬った。それだけだ。」

鏡花水月の能力も凄いが、それを完璧に使いこなしている翔さんも凄いぜ

やっぱりこの人も俺と同じで、他人の為に戦ってるんだんじゃないと此処まで強くはなれない

BWグレイモン「ふざけんなあ!!!雑魚は死ぬんだ!!!これは世界の定めなんだ!!!雑魚は強者にやられるんだ!!!消えてなくなれ!!!」

BWグレイモンはそう叫ぶと両手を上に上げた

翔「諒、あれはヤベエのか?」

翔さんは鏡花水月を構えながら聞いた

諒「ヤバいです。俺達ならくらつても大丈夫ですが、この近くに町があります。」

俺がそう言つと翔さんは理解してくれたようだ

翔「分かった、なら俺達はあれを消せばいいんだな?」

理解が早くて助かります

諒「それじゃあ頑張りましょう、翔さん!!」

翔「嗚呼、さっさと倒して飯が食いたい。」

翔さんは面白いな

BWグレイモン「消えろ、雑魚!!!ガイアフォース!!!!!!」

BWグレイモンは太陽の様な炎の玉、ガイアフォースを投げてきた

諒「俺がやります。月牙天衝!!!!!!」

俺は翔さんの前に出て天鎖斬月を構え、月牙天衝を放った

月牙天衝はガイアフォースを真つ二つにした

BWグレイモン「な、バカな!!!?」

BWグレイモンは驚いた

当たり前だ

自身の最強の技を簡単に破られたのだから

翔「ナイスだ、諒!!」

翔さんはそう言って、直ぐにBWグレイモンの後ろに回り込んだ
瞬歩じゃね、あの早さ?

翔「お前は少し調子に乗りすぎだ!!」

BWグレイモン「ま、まてて『ザシュツ!!!』グハツ・・・」

BWグレイモンは翔さんの攻撃を防ごうとしたが、既に斬られていた

翔「鏡花水月・・・使いやすいな。」

ドカーーン!!!

翔さんがそう言つとBWグレイモンは爆発して消えた

諒「ありがとうございました。」

俺と翔さんは展望台に来ている

毎度のごとく、暁に処理を任せた

暁「役に立つよな」

電話で数回会話しただけで来てくれるんだから

暁「電話してきたと思つたら、「早く来ないとWAXAを消す」って言われたら誰だつて行くだろうが!!!」

暁の声が聞こえたような・・・

まっ、いいか!!

翔「諒、本当に鏡花水月を貰つていいのか？」

諒「ええ、鏡花水月も使ってもらおう方がいいでしょうから。ただ、今度遊びに行くんで、その時は案内とかしてください。」

やっぱ、違う世界の事を勉強した方がいいよな……序でに写輪眼で技をコピーするがな

翔「分かった、俺の世界に来たときは俺の名前を呼んでくれ。その時は案内する。ありがとな。」

諒「そうそう、これを渡しておきます。俺の携帯番号です。一応持っておいてください。」

そう言っつて俺は携帯番号が書かれた紙を渡した

翔「俺の世界に携帯はないんだが……まあ、一応貰っとく。」

そう言っつて紙を受け取ってくれた

諒「それじゃあ、扉を出しますね。」

俺はパラレルモンの力を使い、翔さんの世界の扉を出した

翔「じゃあな、諒。また何時か会おうぜ。」

諒「はい!!何時かまた!!」

俺がそう言っつと翔さんは一度俺の方を見て頬笑んで、扉に入っていた

諒「ありがとございました……翔さん。」

俺は雲一つない空に、お礼を言った

第83話 裏世界の帝王の少年と死神の名を継ぐ青年（後書き）

コラボ二回目！！

テンションが上がりっぱなしの作者の松上です！！

諒「少しは落ち着けよ。どうも、主人公の諒だ。」

すずか「でもコラボは嬉しい事だよ！！あつ、後書き限定キャラのすずかです！！」

ツカサ「松上さんもすずかちゃんも落ち着いて。やあ、ツカサです。」

まずは！！

4人「紅夜先生、遊戯王さんありがとうございます！！」

コラボが二回目だから少し慣れたな

諒「最初はライ先生だったよな？しかし、翔さんはチートだぞ。」

俺が勝手にやってるだけだぞ

まあ実際、鏡花水月を渡すつもりだったからこの話は良い出来だと思っぞ

ツカサ「そつだね。・・・そついえば、100話投稿記念はどつするの？」

・・・

諒「お前忘れてたたる!？」

嗚呼、忘れてたさ!!

テスト勉強しながら投稿してたんだから!!

ツカサ「でも、この話で106話投稿だよ。」

・・・110話投稿記念をするわ

すずか「既にどんな話にするのか決めたの？」

全然決まってるない!! (キツパリ)

諒「堂々とするなよ。」

まあ考えとくさ

それじゃあ今回は此処まで!!

それじゃあすずか、頼むな!!

すずか「はい!!

次回 遂に来た!! FM王の右腕!!」

それじゃあ

諒・ツカサ「次回も!!」

4人「お楽しみに!!」

第84話 遂に来た！！ FM王の右腕！！（前書き）

今回は少し内容が薄いです

すいません

今回名言（迷言）を覚えてくれたのはジェスター「アーカムさんです！！」

天空の城ラピユタで

『3分間待つてやる』

『あああ、目があ、目があ~~~~あああああ~~~~』

ありがとうございました！！！！

第84話 遂に来た！！ FM王の右腕！！

side 諒

ツカサ「諒くん、ゴミ袋を持ってきてくれない？」

諒「少し待っててくれ！！」

俺達はグリーンランドに来ている

理由は、掃除をするためだ

今回は回想を使って説明するぜ！！

回想スタート！！

昨日の放課後・・・

諒「あー、マジで何を歌わせたら良いんだよお！！」

俺は学校に残って曲選びをしている。

理由は、一日じゃ結局曲は決まらなかったので煩い奴が『今日は残って書きなさい！！良いわね！！？』と言ってきた

反抗しようと思ったが、今日曲を決めないと後々面倒臭いので今回は仕方がなく残って曲を決めている
だが、中々良い曲が思い浮かばない

ツカサ「あれ、諒君、まだ学校に残っていたんだ。」

ツカサが教室の扉から顔だけを入れて俺に気付き、声を掛けてきた

諒「嗚呼、今回は仕方がなしに残ってる。」

俺がそう言つと、ツカサは頬笑みながら自分の席に座つた

ツカサ「頑張つてね。・・・あつ、そうだ。」

ツカサは俺を応援の言葉を言った

そしたら、突然何かを思い出したような声を出した

ツカサ「諒君、今度の日曜日って暇かな？」

日曜日か・・・

諒「フォルテ、日曜日って予定が入ってたか？」

俺はポケットから携帯を出し、フォルテに聞いた

フォルテ「日曜日か？・・・否、日曜日は何の予定もないぜ。」

諒「だとき。」

ツカサ「実はさ、今度の日曜日にグリーンランドのボランティア活動が有つて、諒君達にも参加してほしいんだ。ダメかな？」

グリーンランド？

・・・そういえば、ジェミニがまだ居たな
やっぱ、ツカサを利用する気か？

ゲーム通りなら既にこの時点で、ジェミニが地球に来ているが今だに姿を現さないよな・・・

もしかしたら、この時にツカサの体を奪う気か？

この世界のFM星人は無理矢理人の体を奪って電波変換出来るから
な・・・
参加するか!!

諒「嗚呼、参加するぜ！後、なのは達も参加してくれると思っぜ。」

ツカサ「そう？ありがとうね!!」

諒「親友の頼みだからな。断る理由が無いしな。」

そんな事が有ったので、俺はグリーンランドに居る

グループ別にボランティア活動をしている

俺とツカサ、スバルのグループ

なのは・フェイト・ミソラ影分身の俺のグループ

ティアナ・はやて・影分身の俺のグループ

影分身の俺は一真さんと翔さんに変化している

何故影分身を出したのかと言うと、ジエミニが今日来るかもしれない
いからだ

ジエミニは個人的に倒したいので、影分身を出しているわけだ

スバル「少しは綺麗になつたよね？」

スバルはタオルで汗を拭きながら聞いてきた

ツカサ「そうだね、さっきと全然違うよ。」

ツカサはスバルの言葉を肯定した

諒「影分身を作りゃ一日で片付けれるのに……」

スバル・ツカサ「アハハハハハ!!」

スバルとツカサは俺の言葉を聞いて笑った

諒「アハハハハハ!!」

俺も声を出して笑った

「フ、貴様の体を奪わせてもらおう!!」

ツカサ「!?!?うわああああああ!!!!」

諒・スバル「ツカサ(君)!!?」

突然声が聞こえたと思ったら、ツカサが大声を出して苦しみだした

ツカサ「りよ……うくん……すば……るく……ん……にげ……
て……!?!?うわああああああ!!!!」

ツカサは俺達に途切れ途切れだったが逃げるよう言った
だが、ツカサは大声を出して苦しみだした

諒「!?!?スバル、電波変換だ!!」

スバル「わ、分かった!!」

諒・スバル「電波変換!新井諒(星河スバル)、オン・エア!!」

俺達は電波変換しツカサを見た

ツカサ? 「・・・フン、随分と粘ったが無駄だったようだな。」

目の前に居るツカサは、何時もと口調が変わっていた

ツカサ「まあ良い・・・其処に居るのだろ、新井諒、星河スバル!
」

やはりな・・・

スバル「諒君、ツカサ君の様子が変だよ!! 一体どうなってるの!
?」

スバルはツカサの様子が変わったので、かなりテンパっていた

諒「スバル、分からねえか? ツカサから出ている邪悪なオーラが・・・
」

スバルは俺の言葉を聞くと、目を瞑り神経を集中させた

スバル「・・・!? FM星人!!! ま、まさか、ツカサ君の体に!
?」

気付いたみたいだな

諒「嗚呼・・・ウォーロック、お前なら分かるだろ? ツカサの中に
居るFM星人が。」

ウォーロック「嗚呼、糞ム力つく野郎だったから嫌でも分かるよ。」

ツカサ? 「貴様等は俺が殺してやるつ。電波変換! 双葉ツカサ、オン・エア!」

あいつは電波変換し、ウェーブロードに着た

ツカサ? 「久しぶりだな、ウォーロック・・・」

ウォーロック「俺は二度と会いたくなかったぜ!! ジェミニ!!」

ウォーロックはツカサの体に乗っ取ったFM星人、ジェミニの名を叫んだ

第84話 遂に来た！！ FM王の右腕！！（後書き）

今日返ってきたテストも欠点が無く、安心して作者の松上です

諒「今の所は無事だが油断は禁物だぜ。よう、主人公の諒だ。」

すずか「原作の私は難しい学校に通ってたなあ。今晚は、後書き限定キャラのすずかです！！」

暁「今回からちょっとだけ参加の暁だ。それからすずか、メタ発言は止める。」

まずは！！

4人「ジェスター！！アーカムさんありがとうございました！！」

いやー、テストが欠点が無くて安心安心

諒「今の所はだろ？」

暁「それにしても、ツカサがジエミニに乗っ取られるなんてな・・・」

まあ一番長くなるかもしれないぜ、FM星人の戦いの中じゃ

すずか「やっぱり、スバル君は戦うの？」

それは言えない

だが、ツカサとスバルの友情は壊れない

勿論、諒との友情もな

諒「それを聞いて安心した。」

そうか？

ツカサは流星のロックマンシリーズで俺の好きなキャラランキングにミソラと同率一位だからな
ゲームやアニメ通りにはしたくないんだよ

すずか「松上君、私のことは好きなの？」

ミソラ達はlikeですずかはloveだから安心しろ

すずか「ま、松上君／／／／／」

暁「犯罪だー！！ロリコンだー！！逮捕だー！！」

すずか「暁さん・・・少しO・H A・N A・S H I I ようか？」

暁「え？」

諒「さーて、次回予告して終わるか。」

そうだな

次回 VS ジェミニ・スパーク パート1

暁「ちよっ、ちよつと待てよ！！否、待ってください！！俺を見捨てないでくれ！！否、見捨てないでください！！」

俺には何も聞こえない!!
それじゃあ次回も!!

松上・諒「お楽しみにー!!それじゃあ解散!!」

暁「まつ、待ってくださいーい!!!!」

すずか「それじゃあ始めようか?」

ゴキツ!!

暁「ぎゃあああああ!!!!?腕が反対を向いたー!!!!!!
?」

松上・諒「(暁、次回はアフロディを呼ぶから、もう逝け。)」

すずか「まだ終わらないよ。」

暁「不幸だあああああ!!!!!!」

第85話 VS ジェミニ・スパーク パート1 (前書き)

俺的には頑張った!!

だから誉めて!!!

今回の話にイレギュラーが登場!!

名言コーナーは今回はお休みです!!

第85話 VS ジェミニ・スパーク パート1

side 諒

諒「遂にFM王の右腕が登場だな。」

スバル「!?こ、こいつがFM王の右腕!？」

スバルはFM王の右腕と聞いて、ジェミニ・スパークを睨み付けた

ジェミニ・スパーク白「フン、確かに俺はFM王の右腕だが……
……FM王の側近は俺だけじゃない!!!」

!?

諒「何だと!?お前以外に側近が居るのか!?!？」

チツ、此処に来てのイレギュラーか

コイツが地球に来るといふ事は、側近の方が強いといふ事だ

ジェミニ・スパーク黒「フン、お喋りは此処までだ!?!俺は早くお前等を殺したい!?!グチャグチャにしてやりたい!?!お前等の悲鳴が聞きたい!?!殺し合いの始まりだ!?!」

そう言つて黒は俺に、白はスバルに向かって行つた

諒「此処だとジェミニの戦いが有利になつちまう!?!」

ジェミニ・スパーク黒「ハッハッハッ!?!?!俺達の戦い方を知つてるようだな!?!?!ロケットナックル!?!」

諒「何回も戦ったからな！！！！月牙天衝！！！！」

俺は飛んでくるロケットナツクルを月牙天昇で防いだ

ジェミニ・スパーク黒「俺と何回も戦った事があるだど！？ふざけんのもいい加減にしろよ！！！！エレキソード！！！！」

ジェミニ・スパーク黒は俺にエレキソードで斬り掛かってきた俺は直ぐに印を結んで、斬られるのを待った

ザシュツ！！

ジェミニ・スパーク黒「ハツハツハツ！！！！まさかこの程度とはな、他の奴等の話じゃもっと強いと聞いていたが此処まで拍子抜けだとはな！！！！」

ジェミニ・スパーク黒は完全に勝利した事によって、警戒を解き笑っていた

だが、それが命取りだ！！！！

諒「ガイア・・・フォース！！！！」

ジェミニ・スパーク黒「！？ぐわああああああああ！！！！！！！！」

ジェミニ・スパーク黒は悲鳴をあげながら吹っ飛んだ

諒「誰が拍子抜けだった？」

俺はドラモンキラーで、ジェミニ・スパーク黒を指差しながら行った

ジェミニ・スパーク黒「て、テメエ！！何でお前は無傷なんだ！？

お前は俺が斬った筈だ！！」

ジェミニ・スパーク黒は立ち上がり大声で聞いてきた

諒「簡単な事だ、お前が斬った奴は俺じゃなかった。それだけだ。」

俺の言葉を聞くと、ジェミニ・スパーク黒は斬られた俺の場所を見た

ジェミニ・スパーク黒「か、変わり身の術だと！？貴様は忍者か！

？」

忍者だ

俺はダウンロードしたウォーグレイモンの力を解除し、元の姿に戻った

そして、瞬歩でジェミニ・スパーク黒の後ろに回り込み首を掴んで、ジェミニ・スパーク黒と離れた場所に移動した

俺はドリームアイランドの外れに来た

俺はジェミニ・スパーク黒を前に投げた

ジェミニ・スパーク黒「ば、バカな！？一瞬でこんな場所に来れる筈がない！！！貴様、何をした！？」

何って……

諒「瞬歩。」

ジエミニ・スパーク黒「ふざけるのもいい加減にしるお!!!ロケットナツクル!!!」

ジエミニ・スパーク黒は俺にロケットナツクルを放ってきた

諒「さて、こいつを使うのは初めてかな?まあ、いいさ!!!フォルテ、蛇尾丸を出してくれ!!!」

俺はロケットナツクルを必要最小限の動きだけで躲し、フォルテに叫んだ

フォルテ「蛇尾丸、召喚!!!!」

フォルテがそう叫ぶと俺の前に蛇尾丸に召喚された

ジエミニ・スパーク黒「そんな刀で俺を倒すつもりか?俺を舐めるのもいい加減にしるお!!!!」

ジエミニ・スパーク黒はそう叫ぶと電気を溜めだした

諒「な!?それは二人が揃って使える技だろうか!?!?」

一人で使えるなんて……

ワザワザ二人を離れた意味が無いじゃん!!!

ジエミニ・スパーク黒「意味ワカネエ事を言ってるじゃねえ!!!」

これで終わりだあああああああ!!! ジェミニ・・・サ
ンダー!!!」

ジェミニ・スパーク黒が放った巨大な雷の技、ジェミニサンダーが
俺に向かってきた

諒「吠える『蛇尾丸』」

俺は蛇尾丸を始解し、ジェミニサンダーに構えた

ジェミニ・スパーク黒「そんな刀で俺の最強の技が防げると思っ
てるのかあああ!!!」?

誰が防ぐだつて?

諒「上条当麻じゃないが、その強気な幻想を打ち砕いてやるよ・・・
・・・解!!!」

ドッカーン!!!

side ジェミニ・スパーク黒

ドッカーン!!!

俺が放った俺自身の最強の技、ジェミニサンダーがあいつを倒す音
が響いた

ジエミニ・スパーク黒「フン、俺に掛かればあいつを殺すことなど造作もないんだよ。スコーピオン（、、、）の奴、何が『油断するな。』だ。油断する価値もねえじゃねえか。早く戻って星河スバルを殺さねえとな。」

スコーピオンの陰口を叩きながら、星河スバルの所に向かおうとした

グオオオオオン……

ジエミニ・スパーク黒「!？」

獣の鳴き声が聞こえた

ジエミニ・スパーク黒「チツ、煙が凄すぎて何も見えねえ。」

あいつの居た場所は砂煙が凄くて何も見えない

グオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!

「誰が負けたんだ？誰を殺しに行くんだ？スコーピオンってのは一体どんな奴なんだ？まあ、後でゆっくり話してもらうかな……」

砂煙が晴れると其処には、巨大な骨で出来た様な蛇と毛皮の羽織を羽織っているあいつが居た

「行くぜ、狒狒王蛇尾丸!！」

そう言つて巨大な蛇が俺に突っ込んできた

side 諒

スコープオン・・・

それがFM王の側近でイレギュラーか・・・

取り敢えず、ヒカルを救わねえとな!!!

諒「誰が負けたんだ？誰を殺しに行くんだ？スコープオンってのは一体どんな奴なんだ？まあ、後でゆっくり話してもらうがな・・・」

俺がそう言つとジェミニ・スパーク黒は驚いた顔をした

まあ、普通はそうなるよな

自身の最強の技を使ったのに無傷で立つてんだもんな
狒狒王蛇尾丸を盾にして護つたんだがな・・・

諒「行くぜ、狒狒王蛇尾丸!!!」

俺は狒狒王蛇尾丸をジェミニ・スパーク黒に向かわせた

ジェミニ・スパーク黒「何故お前は戦う!!!？何故お前は怖じ気付くことなく戦えるんだあ!!!？何故なんだあああああ!!!」
「？」

ジェミニ・スパーク黒は空中に飛んで狒狒王蛇尾丸の攻撃を避け、俺に叫んだ

諒「俺は何時も恐がってるさ。俺は皆が憧れるようなヒーローじゃない。自分の都合の為に幾つもの命を奪ってきた。だが、俺は後悔していない。俺の大切な人達を護るためなら、俺は罪人になっても構わない。だから!!!俺は!!!俺の大切な人達を傷付けるお前等に戦いを挑める!!!怖気付く事なく戦える!!!これが、俺の戦える理由だ!!!!!!」

ジェミニ・スパーク黒「ふざけるなあ!!!人間は他人の為に戦わない!!!何時もどんな時だって私利私欲の為にしか戦わない!!!だから、殺すのだ!!!お前も殺してやる!!!全てを終わらせてやる!!!!!!ジェミニ!!!!!!」

それが、お前の本心が・・・

諒「親友の体を返してもらっぞ・・・」

ジェミニ・スパーク黒「サンダアアアアアアアアアアアア!!!
!!!!!!」

さっきの数十倍あるジェミニサンダーを放ってきた
だが・・・無駄だ!!!!!!

諒「狒狒王蛇尾丸

・シャイニング・・・カイザーデルタ・・・俺達の必殺技を一つに!!!!!!

全てを乗り越える希望の力!!!!!!

パーフェクトエンド・・・ブレイカアアアアアアアアアア!!
!!!!!!

俺は皆の必殺技を一つにした最強の技、パーフェクトエンドブレイカーを放った

ジェミニ・スパーク黒「グワアアアアア・・・」

ジェミニ・スパーク黒は完全に消え去り、其処に居たのは双葉ツカサだった

諒「何でこっちにツカサが?・・・まあいい、スバルの所に戻らないと。」

俺はツカサ?を担いでスバルの所に向かった

第85話 VSジエミニ・スパーク パート1（後書き）

今回は次回予告だけ！！

次回 VSジエミニ・スパーク パート2

楽しみに！！

第86話 VSジエミニ・スパーク パート2（前書き）

ヤバい、諒の時にネタを使いきったから無茶苦茶だ・・・

マジでヤバい・・・

無理矢理な所がありますが、気にしないで読んでもらえたら幸いです

ラストは在り来たりかも？

今回は名言コーナーはお休みです

後書きで重大発表！！見逃さず、見てください！！

第86話 VS ジェミニ・スパーク パート2

side スバル

ジェミニ・スパーク白「ロケットナックル！」

ジェミニ・スパーク白がロケットナックルを僕に撃ってきた

スバル「バトルカード、ライメイザン・タイボクザン！！」

僕はライメイザンとタイボクザンをプレゼンションした

スバル「はあああああああああ！！！！！！」

ガキンツ！！！！

タイボクザンでロケットナックルを斬り、ロックオンしてジェミニ・スパーク白の目の前に移動しライメイザンで斬り掛かった

ジェミニ・スパーク白「チッ、エレキソード！！」

バチバチバチバチバチバチ！！！！

ジェミニ・スパーク白のエレキソードと僕のライメイザンがぶつかり合い、その衝撃で電気が発生した

ウォーロック「おい、ジェミニ！！テメエが此処に居るって事は、FM王の傍にはあいつ・・・スコーピオンが居るのか！？」

ウォーロックがジェミニ・スパーク白に聞いた

スコープオンって誰？

最後の刺客？

だけど、最後の刺客ならジェミニより強いはずだ！！

ジェミニ・スパーク白「嗚呼、FM王の傍にはスコープオンが居る。だが、お前達がスコープオンと会う事はない！！」

スバル「な、何でさ！？」

僕が聞くとジェミニ・スパーク白はにやりと笑った

僕はその笑みを見て直ぐに、あるバトルカードをプレデクションした

ジェミニ・スパーク白「何故なら、お前等は此処で死ぬからだ！！
！ジェミニサンダー！！」

スバル「バトルカード、オーラ！！」

僕はオーラを纏いジェミニ・スパーク白の攻撃を防いだ

ジェミニ・スパーク白「まだ、終わってねえ！！！ロケットナックル！！！！」

スバル「しまっ！？グハッ！！！！」

ジェミニ・スパーク白はオーラが消えた瞬間、ロケットナックルを撃ってきた

スバル「ゲホッゲホッ、まさか、あの攻撃は・・・」

ジェミニ・スパーク白「そんなもん、囷に決まってるだろうが！！

エレキソード!!」

スバル「バトルカード、リュウエンザン!!」

ガキンツ!!」

僕は直ぐにリュウエンザンをプレゼンションし、対抗した

ウォーロック「スバル、スターブレイクだ!!」

分かってるけどさ・・・

スバル「簡単に言わないでよ!!」

ジェミニ・スパーク白「ロケットナックル!!」

スバル「!?バトルカード、インジブル!!」

僕は一瞬油断したが、直ぐにインジブルをプレゼンションし攻撃を
躲した

ジェミニ・スパーク白「チツ、姿を消しやがった!!出てこい!!」

素直に出てくる人は居ないと思うんだけど・・・

ウォーロック「今だ、スバル!!スターブレイクだ!!」

スバル「ダメだ!!スターブレイクだけじゃ奴には勝てない!!!!
ダブルブレイクだ、ウォーロック!!」

スターブレイクじゃ、ツカサ君を救えない！！
キズナフォースピックバンじゃないと！！

ウォーロツク「分かった！！行くぜ、スバル！！」

スバル「うん！！スターブレイク、レオ！！ダブルブレイク、レオ
×ドラゴン！！！！」

僕はレオとドラゴンの力をプレデクションした

ジェミニ・スパーク白「！？居た、消えろ！！ジェミニサンダー！！！！」

インジブルが消えたらしい
ジェミニ・スパーク白はさっきと比べものならない大きさの電気を撃ってきた

ジェミニ・スパーク白「お前を消し、新井を消し、全人類を消し、地球を俺の物にする！！！！だから、死ねええええええ！！！！」

僕を消すだって？

諒君を消すだって？

皆を消すだって？

ふざけるな・・・

スバル「君を生かしておくわけには行かないね・・・エレメンタルブレイザー！！！！」

ジエミニ・スパーク白「ぐわあああああああああ！……！！？」

僕はドラゴンのエレメンタルサイクロンを作りジエミニ・スパーク白にぶつけた

ドラゴンの技は木属性だ

電気を使うジエミニ・スパーク白は恐らく電気属性

なので、技のダメージは二倍だ

さらに、レオの技をそこに放った

レオの技は火属性

木属性のエレメンタルサイクロンに火属性のアトミックブレイザーを放つことで

スパル「着火して、炎の竜巻に変化する！！」

ジエミニ・スパーク白「

ツ！！

！！！！！！？」

ジエミニ・スパーク白はこの世の言葉じゃない悲鳴をあげた

ウォーロック「スゲエ……だがスパル、何で此処までした？お前の実力なら楽に倒せただろう？」

確かにダブルブレイクしなくても倒せただろう……
だけ……

スパル「あいつには、罪を償ってほしかったからさ。あいつ自身、何をやるうとして、どれだけ大変な事態を招くのかを……」

ウォーロツク「……そうだな。」

ウォーロツクは分かってくれた

炎の竜巻は次第に小さくなっていった

そして完全に消えた時、そこに居たのは邪悪なオーラが無くなったツカサ君だった

スバル「終わったんだね……」

ウォーロツク「取り敢えずはな。」

僕はツカサ君の所に行き、おんぶをした

諒「おーい!!」

諒君の声が聞こえた

僕は諒君の声が聞こえた方角を見た

スバル「諒君、勝ったん……えっ？」

諒「スバル、お前もかてて……は？」

僕と諒君は間抜けな声を出した

何故なら

諒・スバル「ツカサ（君）が二人居る。」

ツカサ君が諒君と僕におんぶされているからだ

第86話 VSジエミニ・スパーク パート2（後書き）

諒が一真に殺される（笑）

ども、作者の松上です

アフロディ「死んでも最高神様に頼んでみるよ。って言うか、何で遺書なんか書いたの！？諒ってバカなの！？」

すずか「バカじゃなくて、現実を全部真面目に受けとめてしまう残念な子だよ。」

アフロディ「あ、アハハハハ・・・」

まあ察しの良い人は分かると思いますが、この小説の主人公（笑）の諒が、ライ先生の小説に出ます

内容は、諒と一真が戦う（一方的に殺られる）話らしいです

まあ、死んでもアフロディが何とかしてくれると思いますが・・・

すずか「そういえば、諒君はどうしたの？」

アフロディ「諒なら、最高神様の所に行って仕事してるよ。」

すずか「何で？」

アフロディ「一真に殺されても生き返させてもらう為に・・・」

まあ一真も手加減してくれる・・・わけないな

感想にも殺る発言をめっちゃしてたし

「すずか「礼服を準備しとく？」

いらんだろ

生き返るし（笑）

アフロディ「最高神様が許可を出したらね。」

そうか？

まあ、いいか！！

それじゃあ今回は此処まで！！

すずか、頼むな！！

すずか「はい！！

次回 ご都合主義万歳！！」

それじゃあ

アフロディ「次回も！！」

3人「お楽しみにー！！」

一方諒はというと・・・

諒「最高神様！！書類の整理が終わりました！！」

最高神「そう？なら次は掃除をしてちょうだい。」

諒「はい！！！！」

最高神「（頑張るわねえ、流石に此処までされたら生き返させないと可愛そうね・・・特別に許可をあげちゃおうかしら？）」

諒「（一真さんに殺される！！遺書は書いたけど、お世話になった人に挨拶し回ったけど・・・けど・・・）死にたくなああああああああい！！！！」

最高神「ほら、サボらない！！」

諒「はい！！！！」

本当に終わり

第87話 ご都合主義万歳!! (前書き)

ネタが切れた・・・

ヤバイよ、ヤバイよ!!!

今回名言(迷言)を覚えてくれたのは遊戯王さんです!!

遊戯王シリーズで

『何度倒しても、俺の怒りは収まらない!!!ぶっ倒しても!ぶっ倒しても!!!ぶっ倒しても!!!』

By遊城十代

『H A N A S E』

By闇遊戯

イナズマイレブンシリーズで

『何も始まってないうちから諦めるな!』

『1人じゃ出来ないことも、2人で力を合わせれば出来るんだ!』

『人間、ダメだと思ったときこそほんとうの力が出てくる』

『無駄な努力なんてない!精一杯の努力はきつと実を結ぶ』

『試練を乗り越えれば、新しい道が見える!』

『俺たちの本当の必殺技は、最後まで諦めない気持ちなんだ!』

『信じてくれる仲間がいる限り、俺は何度でも立ち上がる!』

『諦めなければ、必ずチャンスは来る!』

『大切なのは諦めない心だ!』

『強さの秘密は、守りたいものがいっぱいあるからだ!』

『新しいものを認めて、人は進化していくんだ!』

『自分を信じ、仲間を信じ、できるって信じれば必ずできる!』

『地上最強の仲間がいれば、宇宙最強にも負けない!』

『みんなの気持ちが一つになれば、大きな力になる!』

『仲間がいれば、心のパワーは百倍にも千倍にもなる!』

『仲間は、ずっといつまでも仲間なんだ!』

『自分のやって来た事に自身を持って!』

『楽しいことも、辛いことも、一緒に乗り越えていくのが、仲間なんだ!』

『諦めるな!出来ないと思ふより、どうすればいいのかを考えるんだ!』

B Y 円堂守

『天使よりも悪魔よりも強いものは、人間の絆だ!』

B Y 佐久間次郎

ありがとうございました!!

第87話 ご都合主義万歳！！

side 諒

諒「……………」

スバル「……………」

俺とスバルはある人物達を見つめている。

その人物は、先程迄FM星人により体に乗っ取られ無理矢理戦わせられていた人物。

だが、その人物は一人だった。

だが、その人物は今二人いる。

俺もスバルも、頭をフル活用して何故二人になったか考えている
その人物の名前は、双葉 ツカサ

スバル「本当に分かんないよ。何で二人いるの？」

諒「俺に聞くな。俺だって聞きたいんだ。」

俺達はその会話をした後、また頭を押さえ考えだした。

ツカサA「う、うーん……………」

ツカサB「く、くう……………」

二人のツカサが目を覚ました。

俺とスバルは二人のツカサを凝視した

ツカサA「ん？どうしたの、二人とも？」

ツカサB「何だよ、俺の顔に何かついてんのか？」

ツカサA・B「うん（は）？」

・

・

・

・

ツカサA「ええ~~~~~!!!!!!」

ツカサB「はあ~~~~~!!!!!!」

取り敢えず、二人が落ち着くのを待とう・・・

少し待ってね

諒「落ち着いたか？」

ツカサA・B「うん（嗚呼）・・・」

二人のツカサは落ち着いたようだ

諒「まずは、お前等の名前を言ってくれ。」

まさかの二人ともツカサだったら笑うぞ
・・・マジで

ツカサA「僕は双葉　ツカサだよ。」

うんうん

ツカサB「俺は双葉　ヒカルだ。」

うんう・・・ん？

スバル「ヒカル君？」

ヒカル「ん、何だ？」

m a j i d e s u k a ?

諒「少し待ってる。フォルテ、アフロディに電話。」

フォルテ「了解。」

そう言っつて俺はアフロディに電話した

アフロディ『もしもし、久しぶりに電話してきたね。どうしたんだい？』

諒「嗚呼、ツカサとヒカルが別れた。」

アフロディ『……は？』

諒「俺だってそんな間抜けな声を出した。たがら、調べてほしい。」

アフロディ『わ、分かったよ。原因が分かりしだい電話するよ。』

諒「嗚呼、頼むわ。」

そう言つて電話を切つた

ツカサ「……」

ヒカル「……」

スバル「……」

諒「……」

き、気まずい

な、何で皆喋んないの!?

喋る内容は沢山あるだろ!?

何で皆下を向いてんの!?!?
頼む、誰が話し掛けてくれッ!?!!

ツカサ「あ、あの!?!」

ツカサ、ナイスだ!?!!

俺は心の中でツカサを誉めた
まあ、後で誉めるがな・・・

スバル「ど、どうしたの、ツカサ君?」

スバル、何故そこまで動揺してんだ?
お前が話してるわけじゃないだろ・・・

ツカサ「ヒカル・・・なんだよね?」

ツカサはヒカルを見て聞いた

ヒカル「そうだが、一体どうしたんだよ?」

ヒカルは答え、ツカサに聞いた

ツカサ「い、否、今までちゃんと会った事がなかったからさ・・・
何時も心の中で話すしかなかったからね・・・」

諒「ツカサ、お前は嬉しいんだろ?ヒカルに会えて。」

ツカサ「・・・うん!」

そうだよな、家族だもんな・・・

・・・家族・・・か・・・
本当の親父と御袋・・・か・・・
・・・会わないとな・・・

スバル「ん？どうしたの、諒君？」

スバルが俺に話し掛けてきた

諒「何でもないよ。」

キ〜ラ〜キ〜ラ〜光る青春ラインを

携帯が鳴った

諒「アフロディ、何か分かったか？」

アフロディ『勿論さ、ツカサとヒカルが別れたのは多分、ジェミニのせいなんだ。』

ジェミニのせい？

諒「詳しく説明してくれるか？」

アフロディ「うん。本来、ツカサは自分からジェミニに協力して電波変換してたでしょ。でも今回は無理矢理ジェミニに電波変換させられた。だから、ツカサとヒカルはジェミニの力と戦ったんだ。その時、ジェミニがある細工をしたんだ。』

諒「ある細工？」

アフロディ『うん。ツカサの体には、ツカサとヒカル、二人の人格があるでしょ？幾らFM王の右腕のジェミニと言えど、たった一人で二人の人格に勝てると思うかい？しかも、ツカサとヒカルは諒と時々特訓を一緒にしてるんだよ？』

諒「大体分かった。つまり、ジェミニがツカサの体をもう一つ作って、そっちにヒカルの人格を送った。そして電波変換したんだな？ジェミニは負けたが、ヒカルの体は既にこの世に存在する。だから、ヒカルという人間は此処にいるんだな？」

アフロディ『その通り！！』

話が専門？すぎだろ・・・
取り敢えず・・・

諒「アフロディ？」

アフロディ『もう準備はしたよ。ヒカルの戸籍は作ったよ。生き別れになった双子の弟という設定で、住んでる家はツカサと一緒にだから。』

話が早くてありがたい

諒「分かった、ありがとな。」

アフロディ『本当、最高神様が気分屋だったから出来たんだよ。』

気分屋万歳！！！！

ご都合主義万歳！！！！

アフロディ『じゃあ切るね。』

諒「ありがとな。」

そう言っつて電話を切った

諒「それじゃあ、アフロディが教えてくれたことを言っぞ。実はな・
・・・

少し待っつてね!!

・・・・つて事だ。ツカサ、ヒカル、分かったか？」

ツカサ・ヒカル「うん（嗚呼）」

物分かりが良くて、俺は嬉しいぞ

スバル「それじゃあ、なのはちゃん達に報告しにいこうよ。時間が
時間だから今日はこれで終わりだしね。」

諒「否、敢えて黙っつておこう。明日の朝、皆をびっくりさせようぜ
!!良いよな、ヒカル？」

ヒカル「嗚呼、明日の朝が楽しみだぜ……」

ヒカル「あ、あはははは……」

スバル「諒君、O・H・A・N・A・S・H・Iされても知らないからね。」

大丈夫だ!!!……多分

諒「それじゃあ、そろそろ帰ろうぜ。久々に卍解したから腹が減った。」

狒狒王蛇尾丸つて、大紅蓮氷輪丸や千本桜景蔵と違って凄い体力がいるんだよなあ……

まあ、威力なんかは大紅蓮氷輪丸を超えてるからプラマイ0なんだけどな……

ツカサ「じゃあ、僕達は後から行くよ。」

ヒカル「じゃあな、諒、星河。」

諒「おう、また明日!!!」

スバル「気を付けてね!!!」

そう言っつて俺達は別れた

まあ、その後ツカサの事を聞かれたが『先に帰った。』と言っつたら納得してくれた

そして、そのまま家に帰って飯を食って、お風呂に入って、布団にダイブした

明日の朝がどうなるかを予想しながら……

第87話 ご都合主義万歳！！（後書き）

今日返ってきたテストも欠点がなくて安心して作者の松上です

諒「此処に来るのは久しぶりだな・・・主人公の諒だ。」

すずか「良かったね、松上君！！後書き限定キャラのすずかです！！」

ツカサ「家族が出来て凄く嬉しいツカサです！！」

まずは！！

4人「遊戯王さんありがとうございます！！」

マジでネタが切れた・・・

諒「今回の話でネタが切れたのか？」

嗚呼、マジでやばいよ・・・

ツカサ「でも、ありがとう！！ヒカルと家族にしてくれて。」

どういたしまして

次回にアンケートでもするか・・・

すずか「何のアンケートをするの？」

学芸会に出てくれる人

諒「確かに、翔さん達だけじゃ淋しいからな。」

だろ？

次回に詳しく書きますが、学芸会に参加してくれる人、大募集！！
人数は多すぎるのはダメですが、出てくれる人は教えてください！！
必ず出しますから！！

すずか「誰を出してほしいかをちゃんと教えてください！！後、お
土産を持ってきてくれると助かります！！」

諒「それじゃあ、次回に会おうぜ！！」

それじゃあ！！

4人「さよならあ！！！！」

アンケートだ！（前書き）

学芸会の参加、待ってまーす！！

参加方法は本文を見てください！！

アンケートだ！

松上「アンケートです！！！」

諒「松上、後書き読んでない人が分からんだろ。ちゃんと説明しろ。」

松上「分かってるよ。実はですね、『ペガサス・レオ・ドラゴン編』が終わったら学芸会をします。それですね、学芸会に参加してくれる人を大募集してます！！！」

諒「余り沢山の人を連れて来られると、松上が壊れるから沢山は来れないから、少人数で来てもらいたいんだ。」

松上「来てくれる方は必ず出します！！！」

諒「ただ、来る時にお土産を持ってきてほしいんだ。お土産は何でもいいぜ。」

松上「上記の条件を呑んでくれる方は参加してください！！参加してくれる方は感想で教えてください！！！」

諒「強制ではないが、出来るだけ参加してほしい。」

松上「それじゃあ」

諒「学芸会の参加を！」

松上・諒「待つてまーす！！！！！」

アンケートだ！（後書き）

学芸会の参加、待ってまーす!!

参加の締切は『ペガサス・レオ・ドラゴン編』が終わったからです!!

それじゃあ次回予告です!!

次回 転校生は生き別れの双子の弟（笑）

次回もお楽しみに!!

第88話 転校生は生き別れの双子の弟(笑)(前書き)

この話を読む前に、ライ先生の『漆黒の聖騎士と虚無の担い手』を読む事をお薦めします

理由は、諒がその小説に出たからです!!

この話は、その話を書いたものですから・・・

強制はしませんが、『漆黒の聖騎士と虚無の担い手』の本文を読んで、後書きを読んで、活動報告の『とある日の御剣家の様子』を読むと、諒が何故そうなったか分かります

今回名言を教えてくれたのはジエスター!!アーカムさんです!!

新機動戦記ガンダムWで

『逃げも隠れもするが、嘘はつかない、デュオ・マックスウェルだ』
『地球で見る月は綺麗だなあ。コロニーで見る月は、はっきり見えすぎて、まるで墓場のようだった。俺はいつまでこの月を見ていられるのかな』

『俺と一緒に…地獄へ行こうぜ!』

Byデュオ・マックスウェル

ありがとうございました!!

なのはちゃん達は期待通りの反応をしてくれた
ミソラちゃんが居ないのには理由がある

諒君のお世話をしている

諒君も学校を休んでいる

何故学校を休んでいるのかと言うと、家で『ごめんなさい』をずっと
と呟いているからだ

ジェミニ・スパークの戦いの後、WAXAがドリームアイランドを
調査しにきた

調査しに来た理由は、ドリームアイランドに大きなクレータや、大
きな火事の後があるからだ

暁さんには事情を説明しているが、ドリームアイランドに住む人達
がWAXAに調査するよう頼んだ

なので、WAXAは渋々調査をした

調査するにあたってWAXAは『学校や仕事を臨時で休んでもらい
たい。買い物も出来るだけ避けてほしい。』と言った

渋々とは言え、調査は調査

邪魔をされたくない

なので、学校や仕事も臨時に休みになった

コダマ小学校も例外ではなく、4日の臨時の休みをとった

諒君はその休みを利用して、諒君の憧れの人である一真さんの所に
向かった

まあ、葬式の準備やお世話になった人に挨拶していたが・・・

僕はなのはちゃん達と模擬戦をしたりして休みを過ごした

だけど昨日、諒君が帰ってきたんだけど

諒「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな
さいごめんなさいごめんなさい」ry

をずっと部屋の隅で呟いていた

フォルテ曰く『諒は凄かった。あの・・・あの・・・うつ、あいつは漢だ！！（泣）』らしい

まあ、無事だったから良かったんだけどさ・・・

そして今日の朝、諒君の様子は変わらなかった

あのまま学校に行けば大変な事になる

なので、今日は学校を休む

その時僕が、『諒君一人で家に居るのは大丈夫なの？』と聞くと、
なのはちゃん達はジャンケンをした

ジャンケンに勝った人が諒君のお世話をするらしい

その勝負に勝ったのがミソラちゃんだ

なので、諒君とミソラちゃんは学校に来ていない

先生「それじゃあ双葉 ヒカルに質問がある奴、手をあげる。」

先生がそう言うと、僕とツカサ君以外が手をあげた

先生「それじゃあな・・・ゴン太、お前が質問しろ。」

先生がそう言うと、ゴン太は大喜びをし、他の皆は悔しそうな顔をした

ゴン太「なあ、何で今まで学校に来なかったんだ？」

ゴン太がヒカル君に聞くと皆が頷いた

ヒカル「俺はツカサとは生き別れになった（設定）。だが、漸くツカサの居場所が分かった（設定）。だから、この学校に来た（設定）」

何故だろ、設定って言葉が聞こえるような・・・

ツカサ君も苦笑いをしていた
皆はヒカル君の言葉を聞いて驚愕していた

先生「それじゃあ授業を始めるぞ。双葉、あのサングラスの様な物
を持つてる子の隣を今日は使ってくれ。その席の子は、今日は休み
だからな。明日、双葉の席を準備する。」

ヒカル「了解。」

そう言つてヒカリ君は諒君の席に座つた

ヒカル「・・・星河、新井はどうした？」

ヒカル君が小さい声で聞いてきた

スバル「後で話すよ。」

ツカサ「僕も聞いてもいいかい？」

ツカサ君が聞いてきた

スバル「うん、一時間目の授業が終わつたら屋上に来て。そこで話
すよ。」

ツカサ・ヒカル「わかつたよ（了解）。」

二人はそう言つて先生を見た
僕は手を枕にして目を瞑つて、眠つた

第88話 転校生は生き別れの双子の弟（笑）（後書き）

前書きからライ先生の小説の宣伝をしちゃった
でも、後悔はしてない！！

スバル「どうも、諒君の代わりに来たスバルです！！」

すずか「スバル君が此処に来るのは久しぶりじゃない？どうも、後書き限定キャラのすずかです！！」

ツカサ「諒君・・・頑張ったね。どうも、ツカサです。」

まずは！！

4人「ジェスター！！アーカムさんありがとうございます！！」

ライ先生の話は凄かった

手に汗握る戦いだっただぜ！！

俺も、あんな戦闘描写が書けるようになってやるぜ！！

スバル「少しの間は戦いはないんだよね？」

松上「嗚呼、少しは日常編を書こうと思ってよ。最近、戦いばっかだったからよ・・・」

ツカサ「日常編を書くのは良いけどさ、何を書くの？」

松上「まだ考えてない。でも、この時にコラボでもしようかなあか
と思ってるぜ。」

すずか「コラボしてくれる人は居るの？」

松上「マキサさんかな？」

スバル「何で疑問系？」

松上「しても良いって言うてくれたけど、ちょっと前だったからよ。改めてもう一回聞くつもりだ。そこから、コラボするか考える。」

ツカサ「そうなんだあ・・・」

松上「嗚呼、それじゃあ今回は此処までにしよう。それじゃあすずか！頼むな！！」

すずか「はい！！」

次回 説明するよ！！・・・あれ、何で死亡フラグが？」

スバル「ちよつ、ちよつと待ってよ！！そのタイトルは何！？」

松上「それじゃあ！！」

ツカサ「次回も！！」

スバル「む、無視しないでよ！！」

3人「お楽しみにー！！」

スバル「ちよつ、ちよつとー！！！！」

第89話 説明するよ!!!・・・何で死亡フラグが?(前書き)

マジで何でこうなったんだ?

最初に言っときます!!

この話はかくなり甘い!!

このネタを知ってる人はいるのだろうか?

苦情はしないでくださいね!!

俺自身、マジでこうなったのかわかりませんから

今回名言を教えてくださいなのはAIさんです!!

はじめの一步で

『努力した者が全て報われるとは限らん、しかし!成功した者は皆
すべからく努力している!!』

BY 鴨川源二

ありがとうございました!!

第89話 説明するよ！！・・・何で死亡フラグが？

sideスバル

キーン・コーン・カーン・コーン

授業終了の合図を報せるチャイムがなった

僕は、重い目蓋を無理矢理開けた

先生「気を付け、礼！！」

生徒「ありがとうございます！！」

先生が合図を言うと皆は挨拶をした

僕は挨拶をして、屋上に行こうとした

ツカサ「スバル君、少し待って！」

ツカサ君の声が聞こえたので、僕は振り返り後ろを見た

スバル「どうしたの、ツカサ君？」

僕はツカサ君に聞いた

ツカサ「ヒカルが・・・」

スバル「あっ・・・忘れてた。」

ツカサ君の言葉を聞いて思い出した

転校生は休み時間に質問と言う名の地獄を乗り越えなければならぬ
僕はヒカル君の席を見た

ヒカル君の席の周りは質問しに来た人で囲まれており、ヒカル君の姿が見えなかった

スバル「どうしよう、このままじゃ休み時間が終わっちゃうよ。」

はやて「なら、ウチ等が力を貸したるか？」

僕が悩んでいるとはやてちゃん達が言ってきた
確かに心強いが、一体どうやってヒカル君を助けるんだろ？

はやて「まあ見とき！・・・すうー・・・」

はやてちゃんは、僕にそう言って空気を吸った
何をする気だろ？

はやて「・・・ミソラちゃんに告白しとる男子がおるでえ！・・・」

な、何言ってるの、はやてちゃん！！
そんな嘘が皆に「その男子を殺せえ！！！！！！」嘘・・・

「ミソラちゃんは俺達のアイドルなんだあ！！！！」

「何処のどいつだあ、独り占めしようとした奴はあ！！！！」

「血祭りじゃあ！！！！行くぞお！！！！」

『おおー！！！！！！』

男子達はそう言って教室を出ていった

「誰だろっね、ミノラちゃんに告白した男子って？」

「面白そうだね、行ってみようよ！ー！」

『そうしよう！ー！』

女子達も男子の後を追った

ヒカル「ふうー、助かったぜ。鬱陶しいたらありゃしない。さ、屋
上に行こ……どうした？」

ヒカル君は僕とツカサ君に聞いてきた

スバル「な、何でもないよね、ツ、ツカサ君？」

ツカサ「そ、そうだよ。な、何もないよ、ヒカル。」

僕達は動揺しながらも答えた

ヒカル「??ま、お前等がそう言うなら気にはしない。それより、
早く屋上に行こうぜ。」

ヒカル君はそう言って屋上に向かった

なのは「……やっぱり。」

スバル「やっぱり?」

フェイト「気にしないでいいよ、早く屋上に行こう。」

フェイトちゃん達も来るんだ
ま、その方が説明しやすいしね！！
僕達は屋上に向かった

何でこうなったの？

なのは「早く話した方が身の為だよ、スバル君？」

フェイト「そうだよ、私達は別に怒ってるわけじゃないよ。」

はやて「フェイトちゃんの言う通りやで。ただ、何でスバル君はヒカル君が来た時、驚かなかったか聞いているだけや。」

ティアナ「話してよ。」

今の僕の状況を説明するよ

僕はなのはちゃん達に囲まれ、正座しているんだ
屋上に来て直ぐに座らされたんだ

ツカサ君とヒカル君は見て見ぬ振りをしている

ヒカル君、君の為に屋上に来たんだから味方になってよ！！

ツカサ君、君も同罪なんだから『PHAOTM MINDS』を歌
って現実逃避しないでよ！！

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「さ、話してよ！！！！」

ごめん、諒君

僕も命が惜しい

安心して、骨は拾って上げるから・・・

帰ってきてくれたって……何故だろ、俺自身もそんな感じがする
諒「取り敢え「諒くん、目が覚めたんだね!!!」「み、ミソラ!!
急に抱きつくな!？」

フォルテに今の状況を聞こうとしたら、ミソラが扉を開け急に抱き
ついてきた

ミソラ「よかった、よかったよお」

ミソラは泣いていた
何故泣く必要がある？

ま、まさか、リニスさんに深い眠りにつかされてたのか!?
か、一真さん以上だ

一真さんの伝言を伝えようとする人にそんな事をするなんて!!
今度行く時は気を付けて行こ
取り敢えず、ミソラを慰めるか……

諒「悪かったなあ、心配させて。……なのは達は？」

俺はミソラの頭を撫でながら聞いた

ミソラ「なのはちゃんたちはがっこうだよ……それより。」

なのは達は学校か……
帰ってきたら謝らないとな
……それより？

ミソラ「今……この家には私と諒くんしかいないの……//
//」

なのは達が居ないからそうなるな・・・
何故顔を赤くしながら言う？

ミソラ「・・・ごめんね。ん!!」

諒「ん!？」

ミソラは何かの飲み物を飲み、突然ミソラがキスをしてきた
そして、何かの液体を飲まされた
そしたら、急に眠気が・・・

諒「あ・・・あれ?ね、ねむけが・・・」

おれはいしきをうしなった

sideミソラ
どどどどじよう・・・

ハーブ「やるじゃない、ミソラ!!睡眠薬を口移して飲ませるなんて」

ミソラ「だ、だって、なのはちゃん達がキスしてるのを見ると、
その、えつと・・・羨ましくて!!!」

皆、おはよしのキスとか理由をつけて諒くんにキスをしてるんだも
ん!!!!

わ、私だって諒さんとキスしたかったんだもん！！
でも、どうしよう

ミソラ「ハープ、これからどうしよう？」

ハープ「そうね・・・そうだ、諒さんと寝ちゃいなさい　そこまで
やっちゃったし、ね？」

え、ええー！！！！！？

一緒にね、寝るなんて・・・

でも、なのはちゃん達は何時も寝てるよね・・・

・・・きよ、今日くらい良いよね？

ミソラ「は、ハープ、お、お昼になったらお、起こしてね／＼／＼」

ハープ「はい　それじゃあフォルテ、お邪魔虫は退散よ」

フォルテ「はあ・・・分かったよ。」

ミソラ「ふ、二人とも！？」

ハープとフォルテは何処かに行っちゃった

ミソラ「・・・もう良いや。」

私は諒さんに抱きついて寝転がった

ミソラ「お休み、諒くん。」

私は諒さんにそう言って目を瞑った

第89話 説明するよ!!!・・・何で死亡フラグが?(後書き)

松上「マジで何でこうなったんだ?ども、作者の松上です。」

すずか「今回は諒君とツカサ君もお休みです。理由は皆さんの考えにお任せします。後書き限定キャラのすずかです!!!」

まずは!!!

2人「AIさんありがとうございます!!!」

松上「何回も言ったが、何でこうなったんだ?」

すずか「でも、羨ましいなあ。」

!?

松上「(さ、寒気がする・・・)と、取り敢えず、今回は書く事がないから、次回予告をしよう。すずか、頼むな。」

すずか「・・・はい」

松上「(何故、間が開いたんだ?)」

すずか「次回 記憶が無いのに怒られるってどうよ?」

松上「それじゃあ次回も!!!」

2人「お楽しみにー!!!」

すずか「……それじゃあ松上君。」

松上「な、何だ？」

すずか「……久しぶりにしよ」

松上「皆さん、本当にすみませんort」

すずか「それじゃあ……」

松上「著作権限、強制終了!!!」

すずか「気持ち良くなる」

第90話 記憶が無いのに怒られるってどうよ？ (前書き)

話が思いつかなかった・・・

本当にスランプだよ・・・

はあ・・・

今回名言を覚えてくれたのは虚空さんです!!

Fate / stay nightで

『姫さんを悪い奴から助け出すのはいつだって英雄の仕事だ、そう
だろう?』

Byランサー

『私たち二人でこの勝負キッチリ勝ちにいくなだからね』

『逃げてもいいけど辛いだけよ。どうせ勝野はわたしなんだから』

By遠坂凛

『敵に勝つ己の姿を幻視しろ。そして。理想を抱いたまま溺死する
がいい』

『身体を剣に。血潮を鉄に。遥かな高みへ。己が限界を超えてもな
お飽くことなく挑み続ける』

Byアーチャー

『バーサーカーは絶対に負けない!』

『さあ。狂いなさいバーサーカー!』

Byイリヤスフィール

『難しいはずはない 不可能なことでもない もとよりこの身はただそれだけに特化した魔術回路!』

『完璧な模造品を作れ 敵を騙し自らをも騙しうる完全無欠なイメージを作りだせ!! 形だけではなく想像の理念を 制作に及ぶ技術を 成長に至る経験を 蓄積された年月までをも複製し あらゆる工程を凌駕しつつくし 今 ここに幻想を結び剣と成す!』

B Y衛宮士郎

『剣よ 我が呼び声に応えよ!! 汝の名は「勝利すべき黄金の剣」!』

『シロウ…… アナタが私の鞘だったのですね』

『シロウ…… 私はアナタを愛している』

B Yセイバー

『少年よ この子を頼む』

B Yバーサーカー

『雑種に名乗る謂われはない 失せるがいい、道化!』

B Yギルガメッシュ

F a t e来たー!!!

ありがとうございました!!!

第90話 記憶が無いのに怒られるってなんじゃ…

side 諒

・

・

・

あ、暑い・・・

諒「・・・あ、暑すぎる。」

俺は余りの暑さに目が覚めた

俺は水を飲みに行こうと立ち上がろうとした

諒「・・・何で体が動かないんだ？」

俺は立ち上がろうとしたが、体が動かなかった

俺は周りを見て、状況を確認した

俺の部屋、俺の布団、携帯^{フォルテ}、少し膨れている毛布

・・・膨れた毛布？

俺は膨れていた方を見た

俺の他に誰かが寝ている

俺は左手を使い、毛布をどかした

そこには

ミソラ「ん・・・むにゃむにゃ・・・」

幸せそうに寝ているミソラの姿があった

諒「・・・本当に何時の間にフラグを建てたんだ？」

俺はそう呟きながら布団から出た

俺は時間を見た

時刻は午後四時七分前だった

諒「・・・寝すぎだろ、軽く六時間は寝てるぞ・・・っていうか、
何で俺は寝てたんだ？」

記憶が全然無い

どうしょ、最近記憶が無くなる事が多いな・・・
惚けだしたのか？

この歳で惚けるのは不味いだろ・・・
今度、アフロディに見てもらおう。」

フォルテ「何をさつきから独り言を言ってるんだ。」

突然、フォルテが話し掛けてきた

と言っか、口に出してたのか？

うわあ、スゲエ恥ずかしい・・・
取り敢えず、

諒「フォルテ、展望台に行くぞ。体を動かしたい。」

フォルテ「お前、何も覚えてないのか？」

何を覚えてないって？

確かに、今日の記憶が一部思い出せないが覚えてないから大したことじゃないだろ

諒「覚えてねえよ。忘れる程だから、大した記憶じゃねえよ。」

俺はそう言つて携帯をポケットに入れ、玄関に向かった

諒「さて、早く行つてとつk」ただいま・・・」帰ってきたみたいだな。」

俺が自分の部屋の扉を開けようとしたら、なのは達の声が聞こえた

）

携帯が鳴った

諒「メールか？・・・スバルだ。」

俺は携帯を開け、音楽を止めた

メールを受信したようだ

しかも、送ってきた相手がスバルだった

諒「えゝ、何々

『安心して、骨は拾って上げるから。』

・・・何が言いたいんだ？」

骨を拾われる様な事を俺はしたのか？

・・・記憶にねえな

ま、気にしないがな！！

俺は自分の部屋の扉を開けた

そこには、笑顔だが目の奥では笑っていないのは達がいた

諒「え、えっと、ど、どうしたんだ？」

俺は怯えながら聞いた

なのは「諒くん、少し私達とO・H A・N A・S H Iしない？」

・・・は？

諒「何でお話される必要があるんだ？」

俺はなのは達に嫌な事はしてない筈だが・・・

フェイト「諒、O・H A・N A・S H Iした後は私達のお願いを聞いてもらうかね。」

諒「だから、何でお話されなきゃダメなんだよ？意味が分かんねえし・・・」

記憶に無いぞ、お話される事なんか・・・

はやて「諒君、誤魔化したらあかんぞ。覚えとるやろ、O・H A・N A・S H Iされる記憶が・・・な？」

・・・覚えてない

どうしよう・・・

ティアナ「その顔は覚えてない証拠だね。なら、無理矢理思い出させて上げるよ。」

ゾッ!!

こ、殺される!!

動け、動けよ!!

今動かなきゃ、俺は動かなきゃ、俺は死んじゃうんだ!!

そんなの嫌なんだ!!

だから・・・動けよお!!!!

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「少し、反省しようか?」

諒「不幸だあー!!!!!!!!」

俺はそこで意識を手放した

本当に俺は何をしたんだ?

第90話 記憶が無いのに怒られるってどうよ？（後書き）

松上「完全にスランプだ。どうも、作者の松上です。」

ツカサ「スランプか、遂になっちゃったね。どうも、ツカサです。」

すずか「今回も諒君はお休みです。どうも、後書き限定キャラのすずかです。」

ツカサ「すずかちゃん、今回はどうしたの？ 凄く嬉しそうだけど・・・」

すずか「久しぶりに松上君と気持ち良くなったから。」

松上「・・・はあ。」

ツカサ「・・・頑張れ、松上さん。」

松上「嗚呼・・・まずは。」

3人「虚空さんありがとうございました!」

松上「スランプだ・・・」

ツカサ「大丈夫なの?」

松上「嗚呼、今回は番外編だから大丈夫だ。」

ツカサ「番外編? 110話更新記念だね。それで、何をするの?」

松上「まあ、思いついたネタをするだけだ。だから、大丈夫だ。」

すずか「私達も出るんだよね？」

松上「嗚呼、番外編だしな。」

ツカサ「大丈夫なの？」

松上「番外編〃何でもやってOKと言う方程式だ。」

ツカサ「は、ハハハハハハ・・・」

松上「じゃあ、今からネタを考えるから今回は此処までだ。すずか、頼むな。」

すずか「はい！」

次回 番外編 仮面ライダー編

松上「それじゃあ」

ツカサ「次回も！」

3人「お楽しみにー！！！」

番外編 仮面ライダー編（前書き）

番外編が長くなってしまった・・・

そのくせに終り方が中途半端だ・・・

今回は名言コーナーはお休みです

少し分かりにくい所があるかもしれませんが、大きな心で見てくだ
さい

番外編 仮面ライダー編

松上「今回は1110話投稿記念。そして、PV180000越え及び17000越え記念で番外編をやるうと思います。はつきり言って、読まなくても本編には関係ありません。ですので、無理して読まなくても大丈夫です。今回から少しだけ番外編を書こうと思います。本編を期待した方すいませんort。今回は仮面ライダーの番外編です。まあ、楽しみにしておいてください。それでは、スタート!!!」

これまでの――

仮面ライダーディケイドは――

紅「貴方は十個の世界を回り、全ての世界を平和にしなければなりません。」

松上「世界が破滅の未来に向かっているのは、お前が原因なんだから!!!だから俺がお前を倒してやる!!!超変身!!!!」

「すずか「聞いています、貴方は悪魔だと！！私が貴方を倒します！
！」

なのは「諒くんは私を救ってくれた。だから、私は諒くんが世界の破壊者だなんて思わない。私は諒くんの事を信じてるから・・・」

フェイト「諒、自分を信じて。他人の意志を尊重するのも大事だけど、自分の意志を失わないで。」

はやて「諒君がどんな人間でも構わへん。諒君は諒君や。自分がしたい事をしたらええ。」

ミソラ「諒くんは負けない。諒くんには沢山の仲間がいるから・・・
諒くんは決して負けることはないの！！」

「暁「いいか諒。人生は自分で決めるんだ。他人に決められるんじゃない、自分で決めるんだ。お前が笑顔になれる人生を見せてくれよ。」

ティアナ「諒くん・・・うっう、お兄ちゃん。お兄ちゃんなら世界を救えるよ！！辛かったり、悲しかったり、誰かと一緒に居たい時は私を頼ってね！！私達は仲間だから！！」

光子朗「全ての敵は大シヨッカー。諒君ではありません。戦いましょう！！世界を救うために、皆を救うために！！」

ツカサ「君のお陰でこの町は護られた。君は破壊者じゃない。誰かを護る仮面ライダーだ。そうでしょ、相棒？」

ヒカル「嗚呼、諒は仮面ライダーだ。俺達は誰かの為に戦っている。その誰かを脅かす敵は必ず倒す。絶対に負けんじゃねえぞ！！」

諒「今まで色んな世界を旅した。クウガの世界、キバの世界、龍騎の世界、ブレイドの世界、電王の世界、ファイズの世界、響鬼の世界、アギトの世界、カブトの世界、ダブルの世界・・・だが、これで俺の旅も終わる。そうだろ・・・鳴滝。」

諒がそう言うと、諒の前に灰色のオーロラが現れた
そして、オーロラが消えると沢山の怪物と一人の人間が現れた

鳴滝「そうだ、ディケイド。貴様は此処で死ぬ。世界は我ら、大シヨッカーの物になるのだ！！だから、貴様は邪魔な存在！！さあ、怪人達！！ディケイドを殺せえ！！！！」

鳴滝がそう叫ぶと、怪人達は諒に向かって走りだした

諒「俺は負けない。俺は世界を救う!!」

諒は白いバツクル、ディケイドライバーを腰に巻き一枚のカードを
取出した
そして

諒「変身!!」

諒はカードをディケイドライバーに挿入した

『KAMEN RIDE DECADE!』

そうすると、諒の姿が変わった

9つの影が集約し、ライドプレートが突き刺さる
そして、マゼンダの色がスーツについた

諒「さ、最後の戦いだ!!」

諒はそう叫び走りだした

諒「松上、力を借りるぞ!!」

諒は最初に出会った人物、松上の名を言い一枚のカードを出した
それをバツクルの中に挿入した

『KAMEN RIDE KUGA!』

そうすると、諒の姿がまた変わった

赤を基調とした鎧の様な体

鍬形を連想させるような顔

古代の戦士、仮面ライダークウガになった

諒「オリヤア!!!」

諒は向かってきたグロンギを思いっきりパンチした

パンチされたグロンギは後ろにぶっ飛んだ

だが、グロンギは仲間のグロンギを見向きもせず諒に向かって攻撃してきた

諒「ハアアア!!!」

諒はグロンギの攻撃を躲しつつ攻撃していた

『人間風情が調子に乗るんじゃないやねえ!!!』

諒「グハッ!!!」

諒の後ろにいたファンガイアが、諒を攻撃した

諒はそれに気付かなかったので、攻撃をマトモにくらってしまった

諒「クツ・・・吸血鬼なら吸血鬼だ!!!力を借りるぜ、すずか!!!」

諒は二つ目の世界で出会った人物、すずかの名を叫んでカードを取り出した

それをバツクルの中に挿入した

『KAMEN RIDE KIBA!』

そうすると、クウガの姿から変わった
赤い体は紅い体へ、鋏形の様な顔から螭の様な顔に
右足には鎖が巻き付けられていた

諒「オラッ!！」

諒は攻撃してきたファンガイアに蹴りを入れた
その蹴りをくらったファンガイアは一瞬仰け反った

諒はそれを見逃さず、直ぐにバツクルにカードを挿入しようとした

諒「これできm」させるかよっ!！」!??うわあああ!!!?」

諒がカードを挿入しようとしたら、イメージが諒を攻撃した

諒はイメージに気付くことが出来ず、攻撃をくらいぶっ飛ばされた

諒「はあ・・・はあ・・・イメージならコイツだ!!はやて、力を借り
るぜ!！」

諒ははやての名を叫び、バツクルにカードを挿入した

『KAMEN RIDE DENO!』

キバの姿からまた変わった

『チッ、電王か!!!』

イメージは諒の姿を見てそう叫んだ

諒「行くぜ行くぜ行くぜ!!!!!」

諒はデタラメは剣捌きでイマジン達を斬っていった
斬られたイマジン達は次々に倒れていった

諒「これで決める!!」

諒はカードをバツクルに挿入した

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEN
O!』

諒が持っている剣に力がチャージされた
諒はイマジンに斬り掛かろうとした
だが

『キシヤアアアアアアア!!!!』

諒「ゲハッ!!!」

ワームが諒の背中を攻撃した

諒はイマジンに集中していたせいで攻撃を避ける事が出来なかった

『早くくたばるんだ!!』

諒「ガハッ!!!」

諒がワームの攻撃をくらい倒れそうになったところを、アンノーン
が諒に近付きを攻撃した
攻撃された諒はオルフェノクの所へぶっ飛ばされた

『フン、早くくたばれよ!!』

オルフェノクは飛んできた諒を思いつきり蹴った

諒「ぐわああああああああ!!!!?」

諒は怪人達の中心に蹴り飛ばされた

そして変身が解け、人間の状態に戻った

諒は所々から血が出ていた

諒「ち・・・くしょう。」

諒は土を握り締め、悔しそうに鳴滝を見た

鳴滝「どうだデイケイド!! 貴様など我らの敵ではない!! 貴様は偽善者なのだ!! 己の運命を呪い、苦しみながら死ぬがいい!! 殺れ、怪人達!!!!」

鳴滝がそう叫ぶと、怪人達が諒に向かって走りだした

ドシユンドシユン（ry

怪人達の足元に銃弾が撃たれた

そのせいで、怪人達は立ち止まった

鳴滝「な、何者だ!!?」

鳴滝が辺りを見渡しながら叫んだ

「僕の大切なお宝（親友）を殺させないよ。」

諒の前に灰色のオーロラが現れ、そこから青い銃、ディエンドライバーを持った少年が現れそう言った

鳴滝「おのれ、ディエンドお！！貴様までもが我らの敵になるのかあ！！？」

鳴滝が、ディエンドライバーを持った少年に叫んだ

「嗚呼、諒君は僕のお宝（親友）だからね。親友を死なすわけにはいかないからね。」

ディエンドライバーを持った少年は鳴滝にそう言い、諒の方へ向いて手を差し伸べた

「大丈夫かい、お宝（親友）？」

諒「な・・・んで、きたんだ、すばる・・・」

諒はディエンドライバーを持った少年、スバルの手を掴み立ち上がった

スバル「僕はお宝（親友）が死にそうなのに楽しんでいられないさ。それに、此処に来たのは僕だけじゃないけどね。」

スバルがそう言うと、諒とスバルの周りに幾つもの灰色のオーロラが現れた

「諒、何で一人で戦おうとしたんだ？俺達は仲間だろ？まあ俺とお前は最初会った時は戦ったけどよ・・・」

「松上君、私も諒君と戦っちゃったよ。でも、直ぐに仲良くなったけどね。」

「諒くん、無理しないでよ。私達は諒くんが傷つくのが見たくないんだよ。」

「諒、こんなになるまで頑張ったんだね。でも、勇気と無謀は違つよ。」

「でも安心し。ウチらが来たからにはもう大丈夫や！！」

「だから、一緒に戦おう！！お兄ちゃん！！」

「諒、これがお前の運命か？こんな運命なら、俺が壊してやる。だから、お前は楽しんで生きれる運命にしてやる！！」

「諒くん、こんな所で負けないで！！私は・・・ううん、私達皆は諒くんが勝つ事を信じてる！！だから、諦めないで！！」

「諒君・・・って言っても皆が言いたい事を全部言っちゃいましたね。僕が言える事はただ一つです。一緒に戦いましょう！！」

「皆が傷付く姿を見たく無かったんだよね。でも、諒君が傷付けば悲しむ人が居るんだよ。それを分かっていたの？分かっていたのならばそれはハードボイルドじゃないね。」

「おい、お前がハードボイルドを語るな。はつきり言って、似合っ

てないからな。」

そこには、諒のお陰で救われた人物達が立っていた

スバル「諒君、君は人を救うために戦ってるんでしょ？なら、僕達は君を救うために戦うよ。何故なら」

スバルはそこで一呼吸おいた

全員「仲間だから!!!」

全員が諒を見て、そう言った

諒は驚いたが、直ぐに皆の顔を見て頬笑んだ

鳴滝「無駄だ!!!此処には大量の怪人達!!!お前達はたった十三人!!!勝てると思ってるのか!!!」

鳴滝は諒達に叫んだ
だが

諒「思ってるさ。俺は一人じゃない。俺には沢山の仲間がいる。俺達は私利私欲の為に戦ってるんじゃない。俺達は誰かの為に戦ってるんだ。だから、俺達は負けない!!!」

諒は鳴滝にそう叫んだ

鳴滝「お前達は一体何なんだあ!!!?」

鳴滝は諒達に大きな声で聞いた

全員「通りすがりの仮面ライダーだ！！覚えておけ！！！」

諒達はそう答えるとそれぞれ変身のモーションをとった

松上「フンッ！！はあああああああ………変身！！！」

松上は両手を腰に当てるようにした

そうすると松上の腰に超古代民族リントのベルトが出現した

そして右手を左斜め上に突き出し、右手をゆっくり左に動かした

そして、素早く両手を右のベルトの部分に移動させ、右手の甲でボタンを押した

そうすると、松上の姿は戦闘種族グロンギと戦う古代の力を持つ戦士、仮面ライダークウガに変身した

すずか「いくよ、キバット！！！」

キバット「しゃあ！！異世界でもキバっていくぜ！！！！ガブッ！！！」

すずかは、空を飛んでいたキバットバット三世にそう言った

キバットバット三世は気合いを入れ、すずかの左手の甲に噛み付いた
そうすると、すずかの顔にステンドグラスの様な模様が現れた

すずか「変身」

すずかはそう言い、キバットバット三世を腰のベルトに逆さに差し込んだ

そうすると、すずかの姿はファンガイアと戦う宿命を背負った戦士、仮面ライダーキバに変身した

なのは「頑張るよ！！！」

なのははそう言って、左手に持っていたカードデッキを前に突き出した

そしたら、突然なのはの腰に不思議な形をしたバツクルが現れた
なのはは、左手を引き右手を左斜め上に突き出した
そして

なのは「変身!!」

なのはは左手に持っていたカードデッキをバツクルに挿入した
そうすると、なのはの姿はドラゴンをモチーフにしたドラゴン型の
ライダー、仮面ライダー龍騎に変身した

フェイト「私も!!」

フェイトは長方形の形をしたバツクルに一枚のカードを挿入し、腰
にバツクルを当てた
そうすると、バツクルからカードの様な物が出てきて腰に巻き付いた
そして

フェイト「変身!!」

『TURN UP』

フェイトがそう叫びバツクルを回転させる
そうすると、バツクルからヘラクレスオオカブトのマークが描かれ
たラウズカードが現れフェイトを包んだ
そうすると、フェイトの姿はヘラクレスオオカブトをモチーフとし
剣術を得意とする戦士、仮面ライダーブレイドに変身した

はやて「準備はええか、モモタロス？」

モモタロス「当たり前だぜ!!!」

はやて（モモ）「行くぜ!!!」

はやては、自身が契約しているイメージ、モモタロスに聞いた
モモタロスは大丈夫と言い、はやてに憑依した
そして、はやてに憑依したモモタロスは腰にベルトを巻いた
そして電車のパスみたいな物を左手に持った

はやて（モモ）「変身ッ!!!」

はやてに憑依したモモタロスは、左手に持っていた電車のパスの様な物を荒々しくベルトにスキャンさせた

『SWORD FORM』

そうすると、はやての姿は人間と契約したイメージから時の運行を守るライダー、仮面ライダー電王に変身した

ミソラ「涼くんは私が護る!!!」

ミソラはファイズドライバーを腰に巻き、変わった形をした携帯、ファイズフォンを右手に持った

『555 SUTANDING BY』

ミソラは携帯の5のボタンを三回押し、ENTERボタンを押した
そして携帯を閉じ、真っ直ぐ上に上げた

ミソラ「変身!！」

ミソラはそう叫びファイズフォンをファイズドライバーに差し込んだ

『COMPLETE』

そうすると、ミソラの姿はオルフェノクの魔の手から人類を守るライダー、仮面ライダー555に変身した

暁「それじゃあ俺も頑張りますか。」

リーン

暁は楽器のような物、変身音叉・音角を鳴らし額の前まで持ってきた

暁「・・・変身」

そうすると、暁の姿は音撃で魔化魍を退治する鬼と呼ばれるライダー、仮面ライダー響鬼に変身した

ティアナ「さ、行くよ!！」

ティアナはそう言い、腰に両手を当てるようにした
そうすると変身ベルト、オルタリングが現れた

ティアナ「はああああああ・・・」

右手を腰に当て、左手をゆっくり前に出していった
そして

ティアナ「変身!!」

ティアナはそう言って両手を両腰に当てた
そうすると、ティアナの姿は多彩なフォームを操る覚醒した龍のラ
イダー、仮面ライダーアギトに変身した

光子朗「来てください、カブトゼクター!!」

光子朗が左手を上げ、カブトゼクターを呼んだ
そうすると、空からカブトゼクターが現れた

光子朗「行きます!!」

光子朗はベルトを巻き、カブトゼクターをベルトに挿入した

光子朗「変身」

『 HENSIN 』

光子朗「キャストオフ」

『 CAST OFF CHANGE BEETLE 』

そうすると、光子朗の姿は宇宙生命体ワームと戦う光を支配せし太
陽の神のライダー、仮面ライダーカブトに変身した

ツカサ「それじゃあ僕達も行くよ、相棒!」

『 JOKER 』

ヒカル「嗚呼！！」

『CYCLONE』

ツカサとヒカルは特殊なベルト、Wドライバーを腰に巻き、特殊なメモリ、ガイアメモリを鳴らした

ツカサ・ヒカル「変身！！」

ヒカルは、CYCLONEメモリをWドライバーの左側に入れた
そしたら、ヒカルのCYCLONEメモリは消えて、ツカサのW
ドライバーに移動した

そして、ツカサはCYCLONEメモリをちゃんと差し込み、J
O
KERメモリをもう一つの穴に差した
そして、Wドライバーを横に倒した
そうしたら、ガイアメモリの力で変身した二人で一人のライダー、
仮面ライダーWに変身した

『CYCLONE×JOKER』

スバル「それじゃあ僕も行くよ！！」

スバルは、一枚のカードを取出しディエンドライバーに挿入した

スバル「変身！！」

『KAMEN RIDER DIEND!』

そうすると、スバルの姿が変わった

9つの影が集約し、ライドプレートに突き刺さる
そして、シアンの色がスーツについた
スバルは仮面ライダーディエンドに変身した

諒「さあ、もう一頑張りしますか!！」

諒は一枚のカードを取り出した

諒「変身!！」

『KAMEN RIDER DECADE!』

諒がディケイドライダーにカードを差し込んだ
そうすると、諒の姿が変わった

9つの影が集約し、ライドプレートに突き刺さる
そして、マゼランの色がスーツについた
諒は仮面ライダーディケイドに変身した

諒「・・・行くぞ!！」

諒達は怪人達に向かって走って行った

番外編 仮面ライダー編（後書き）

今回は次回予告だけ

次回 番外編 仮面ライダー編

次回もお楽しみに！！

番外編 仮面ライダー編（前書き）

今回はマキサ先生とコラボです！！

しかも、今までで一番無理矢理です！！

本当にすいませんでしたort

今回名言を覚えてくれたのは勇往邁進さんです！！

DOG DAYSで

『んなもん怖いに決まってんでしょ

正直言えば、すんげえ怖い！

けど…

少しくらい怖いのより！

少しくらい痛いより！

期待に応えられない方が、ずっと辛い！

僕を信じて待つてくれる誰かに！

悲しい思いをさせる方が、一億倍辛いんだ！』

Byシンク・イズミ

ありがとうございました！！

番外編 仮面ライダー編

諒達が戦っている場所から少し離れた場所・・・

ヒューン

突然、灰色のオーロラが現れた

そしてオーロラが消え、一人の青年が立っていた

その青年の特徴は、少し長い黒髪で、両目の色黒、身長は中学生くらい、身長、顔は上に位置する顔、右手には不思議な形をしたベルトを持っていた

「此処は一体・・・」

青年は周りを見渡し、自分が何処にいるのか理解しようとした

ドッカーーン!!!

突然、大きな爆発音が鳴り響いた

「な、何だ!？」

青年は、大きな爆発音を聞き少しパニックになっていた

「あ、あれは!?!」

青年の視線の先には、大きな煙が上がっていた

「行ってみよう!?!」

青年は、煙が上がっている場所に向かって走りだした

諒「な、何なんだよ・・・」

諒・・・否、諒達は啞然していた

諒達は先程まで怪人達と戦っていた
戦っていたのだ

しかし、今は戦っていない

何故なら、一体の怪人(、、、)が全ての怪人を殺してしまった
からだ

スバル「あれ程の怪人達を一瞬で殺すなんて・・・」

スバルは、デイエンドライバーを謎の怪人に構えながら言った

鳴滝「フハハハハハ!!! どうだ、我ら大ショッカーが作り出した
最強の怪人は!!!!!! いくら貴様等が強くて、最強の怪人は倒せ
まい!!!!!!」

鳴滝は諒達に叫びながら言った

諒「鳴滝！！あの怪人は一体何なんだ！！？」

諒は、謎の怪人に意識を集中しながら鳴滝に聞いた

鳴滝「フハハハハ！！あの怪人の名は“アルティメットD”！！破壊だけの為に作られた、最強の兵器だ！！！」

鳴滝は笑いながら諒達に説明した

諒達は、鳴滝の言葉を聞いて更に警戒した

スバル「だったら怪人達を一瞬で殺せたのも理解できるね。」

スバルは、デイエンドライバーをアルティメットDに構えながら言った

鳴滝「奴が現れた以上、お前達に勝ち目はない！！諦めて死ぬんだな！！フハハハハハハ！！！」

鳴滝はそう言って、灰色のオーロラに入ってしまった

ツカサ「どうする？鳴滝みたいに逃げるっていう選択肢もあるけど。」

ツカサは皆に聞いた

だが、誰もツカサの案に賛成する人は居なかった

ツカサ「・・・当たり前か。僕達は仮面ライダーだ。皆を苦しめる様な奴が目の前に居るのに、それを倒さないわけないか。」

ヒカル「分かってんなら最初から言つなよ。」

ヒカルがそう言うと、諒達はアルティメットDに構えた
そして、諒達がアルティメットDに走りだそうとした時

「待つてええええええ!!!」

遠くからストップを求める声が聞こえた
その声を聞き、諒達は走りだすのを止めた

諒「誰だ？此処は無人世界。人間は居ない筈だが……」

諒は声を出した人物を考えていた

「はぁ……はぁ……俺も戦うよ。」

諒達の横に、肩で息をしている青年が現れた

諒「アンタは誰だ？それに、アンタは戦えないはずだ。何処かに隠れてろ。」

諒はアルティメットDに意識を集中させながら青年に質問し、隠れるよう促した

「はぁ……はぁ……俺の名前は木利野 雅紀。14歳だ。それに心配無用。何故なら俺も……」

青年、雅紀は諒にそう言ってアルティメットDを見ながら不思議な形をしたベルトを腰に巻き、一枚のカードを取り出した
そして

雅紀「仮面ライダーだ！！変身！！」

『KAMEN RIDE DECHAOS!』

カードをバツクルに挿入した

雅紀の姿は変わった

9つの影が集約し、ライドプレートに突き刺さる
そして、紺の色がスーツについた

ボロボロの黒いマントを羽織っており、瞳の色は血の様な真っ赤だった

諒「な！？アンタも仮面ライダーだったのか！？」

諒・・・否、諒達は雅紀を見て驚いた

雅紀「まあね。それより、敵はもう待ってくれないみたいだよ。」

雅紀の言葉を聞いて、諒達はアルティメットDを見た

アルティメットDは、ゆっくり歩いて諒達の所に向かってきていた

雅紀「あいつは強いよ。」

諒「知ってるのか、あいつの事を！？」

雅紀の言葉を聞き、諒は雅紀に聞いた

雅紀「間接的だけどね。だから、今の状態（、、、）だと負けるよ。」

雅紀は“今の状態”という部分を強調していった

諒は、雅紀が何を言いたいのか分かり直ぐにある物を取り出した
スバルも、諒が取り出した物を見て雅紀が何を言っているか分かり、
スバルもある物を取り出した

雅紀は、二人が取り出した物を見て頷いた

諒とスバルはある物、ケータツチを装着した

『HYPER SHINING BLASTER ARMED S
R V I V E K I N G R I S I N G U L T I M A T E E M P E
R O R S U P E R C L I M A X X T R E M E』

松上達の頭上にカードが浮かび、それがかぶさる

そして、諒の前にもカードが現れた

『FINAL KAMEN RIDE DECADE!』

デイケイドのカードが額に収まり、カードが変わる

そして、装甲が変わって諒は仮面ライダーデイケイド コンプリ
トフォームへと進化した

『G4 RYUGA OGA GRAVU KABUKI COR
KASASU ARKE SKAL』

スバルの後ろに仮面ライダーG4、リュウガ、オーガ、グレイブ、
歌舞鬼、コーカサス、アーク、スカルが現れた
そして、スバルの前にカードが現れた

『FINAL KAMEN RIDE DIEND!』

デイエンドのカードが額に収まり、カードが変わる

そして、装甲が変わってスバルは仮面ライダーディエンド コンプレイトフォームに進化した

雅紀「さ、あいつが暴れる前に倒そう。」

雅紀の言葉を聞き、諒達は頷いた

諒「……行くぞ!!!」

全員「うん（嗚呼）!!!」

諒達はアルティメットDに向かって走り出した
アルティメットDも、諒達に向かって走り出した

すずか「行くよ、フェイトちゃん!!!」

フェイト「分かった、すずか!!!」

すずかとフェイトは、皆より早く走りアルティメットDに近づいた

『ギシャアアアアアアア!!!』

アルティメットDは、叫びながら近づいてきたすずかとフェイトに殴り掛かった

しかし、それは綺麗に避けられた

すずか「ザンバットソード!!!」

すずかは、持っていたザンバットソードでアルティメットDを斬った

斬！！！！

『ギシャアアアアアアア！！！！！！』

アルティメットDは、斬ってきたさすがに殴り掛かるうしたが、すずかは直ぐに上にジャンプした

そうすると、アルティメットDの前に5枚の黄金に輝くラウズカードが現れた

そして、一番後ろのラウズカードの後ろにフェイトが剣を構えていた
そして

フェイト「ロイヤルストレートフラッシュ！！！！」

フェイトは、5枚のラウズカードに斬撃を飛ばした

斬撃は、ラウズカードを壊しながらアルティメットDに向かった
そしてロイヤルストレートフラッシュは、アルティメットDに直撃した

『ぎ、ギシャアアアアアアア……』

アルティメットDは、ロイヤルストレートフラッシュをくらって仰け反った

それを見逃す諒達ではない

はやてとツカサ（ヒカル）とティアナと暁は、直ぐにアルティメットDの懐に入り込み切り掛かった

はやて「踏み込み切り落とし！！！！」

ツカサ（ヒカル）「プリズムブレイク！！！！」

『FINAL ATTACK RIDER DIED DIE
ND!』

『FINAL ATTACK RIDER DE DE DE
HAOS!』

カードを挿入し終わると諒と雅紀は飛び上がり、スバルはディエン
ドライバーをアルティメットDに構えた
諒の前には平成ライダーのマーク、雅紀の前には平成ライダーのカ
ード、スバルの前にはケータッチで呼び出したライダー達のカード
が現れた
そして

諒「ディメンションキック!!!」

スバル「ディメンションシュート!!!」

雅紀「ディメンションブレイカー!!!」

3人の必殺技が放たれた
だがアルティメットDは避けられなかった
何故なら、体が既に動かなかったからだ
なので、アルティメットDは3人の技をくらった

『ギシャア・・・アアア・・・』

アルティメットDは、そのまま倒れた

ドッカーーン!!

アルティメットDは、爆発し死んだ

雅紀「それじゃあ、俺は自分の世界に帰るよ。」

諒「嗚呼・・・だが、何で雅紀はこの世界に連れてこられたんだろ
うな？」

雅紀「分かんないさ・・・だけど、世界が俺を呼んだのかもしれないな。」

諒「そうかも、な。」

諒は雅紀の言葉を肯定した

雅紀「じゃあな、異世界の仲間の仮面ライダー。」

諒「じゃあな、大切な仲間の仮面ライダー。」

2人はそう挨拶し、握手をした

そして、雅紀は灰色のオーロラの中に入り、消えた

スバル「それで、これからどうする？」

スバルは諒に聞いた

諒「大シヨツカーは完全に壊滅してない。奴らがいる限り、全ての世界に平和は無い。だから、奴らを倒しに行く。」

スバル「1人で？」

スバルは諒に聞いた

皆も諒を見た

諒「そんなわけないだろ。俺1人の力で大シヨツカーを倒せるわけない・・・だから」

諒はそこで言葉を止め、皆の方に振り返った

諒「俺に力を貸してくれ。」

諒は頭を下げ、皆に頼んだ

全員「当たり前だ(だよ)(や)(です)!!」

笑顔で諒に言った

諒「ありがとう、皆。・・・それじゃあ、行こう！助けを待っている人の所へ!!」

全員「おお!!」

諒達がそう言うと灰色のオーロラが現れた
そして諒達はオーロラの中に入っていった
助けを求める人たちを救うために・・・

番外編 仮面ライダー編（後書き）

松上「本当に今回は頑張った。ども、作者の松上です。」

諒「だが、無理矢理な所があったな。よう、主人公の諒だ。」

すずか「私も出てた。どうも、後書き限定キャラのすずかです。」

ツカサ「僕とヒカルがWかあ。まっ、楽しめたから良いか！〜どうも、ツカサです。」

松上「まずは！〜！」

4人「勇往邁進さんありがとうございました！〜！」

松上「本当に大変だった。ケータッチの部分とか、英語の綴りが違うか心配だ。」

諒「確かにな．．．」

ツカサ「まだ番外編は続くの？」

松上「分かん。本編はネタが浮かばないし、番外編は疲れるし．．．」

すずか「それじゃあ、次回予告出来ないよ。」

松上「嗚呼、分かってる。だから、今回は次回予告は無しだ。」

諒「それで大丈夫なのか？」

松上「ネタが思い浮かぶのを待つき。」

ツカサ「頑張つてね。」

松上「おう！！それじゃあ皆さん！！！」

諒・すずか・ツカサ「次回も！！！」

4人「お楽しみにー！！！」

風邪をひいてしまった

どうも、作者の松上です。

実は今日、風邪になってしまいました。

吐き気はMAX、体が怠い、シンドイ・・・

挙げれば限りがありません。

その為、今日は学校を休んでいます。

正直な話、こうやって書いているのもシンドイです。

ですから、風邪が治るまで執筆活動を休ませてもらいます。

本当にすいません。

風邪が治りしだい、執筆活動を再開します。

応援してくれている皆さん、本当にすいませんでした。

必ず、今週中には復活する（予定）なので！！

待っていてください！！

ご迷惑を掛けてしまって、本当にすいませんでした

番外編 諒とスバルの本気の戦い（前書き）

お久しぶりです!!

無事風邪が治りました!!

俺の持てる力を全て浸かって書きました

楽しんでもらえたら幸いです!!

今回は名言コーナーを休みます

楽しんでください!

番外編 諒とスバルの本気の戦い

松上「ども、作者の松上です。今回も番外編を書いちゃいました！まあ題名通り、今回は諒とスバルがマジバトルをします。諒とスバル、親友でもありライバルでもある。その二人が遂に本気で戦う！！頑張つて戦闘描写を書きました！！楽しんで読んでください！！」

ある砂漠の無人世界

無人世界なのだから、人は存在しない

しかし、そこには二人の人がいた

しかも、二人とも子供だ

片方の子供は、オレンジの髪で、目付きを直せば女の子に間違われそうな顔をしていた

もう片方の子供は、茶髪のツンツンヘヤー、両手には白と黒のブレスレットをし、不思議な形をしたサングラスを掛けており、こちらも女の子に間違われそうな顔をしていた

しかし、二人は列記とした男の子だ

話を戻そう

二人の少年はお互い向き合つて、立っているだけだった

遠くから見れば何も感じない

しかし、二人に近づくと半端じゃないくらいの殺気を二人は放たれていた

「やっと本気で戦えるな、スバル。」

オレンジの髪をした少年が茶髪のツンツンヘヤーの少年、スバルに言った

スバル「そうだね。此処なら誰も居ないから本気を出しても大丈夫
そうだね、諒君。」

スバルはオレンジの髪をした少年、諒にそう言った
二人は笑顔だった

しかし、その笑顔は普通の人が見れば怖じ気付く程の恐怖を与える
笑顔だった

諒「それじゃあ、始めるか。」

諒はそう言っつて、ズボンのポケットから黒い携帯を取り出した

スバル「そうだね。」

スバルは、自身の左腕に付いている箱の様な物、トランサーに何か
を打ち込んだ
そして

諒「電波変換！新井 諒、オン・エア！」

スバル「電波変換！星河 スバル、オン・エア！」

諒は携帯を、スバルはトランサーを上へ上げそう叫んだ
そうすると、二人は光に包まれた

光は次第に納まっていき、二人の姿が見えるようになった
しかし、二人の姿は大きく変化していた

諒は、黒を基調とした体、蝸をイメージする様な頭、少しボロボロ

の茶色のマント、右手には漆黒の日本刀を持っていた
対するスバルは、青を基調とした体、胸には流星のマーク、茶髪
のツンツンヘヤーは健在で、左手は狼の様な顔になっていた

諒「デジヒュージョンじゃないんだな・・・」

諒はスバルの姿を見て、そう言った

スバル「諒君こそ、クロスヒュージョンじゃないんだね。」

スバルも負けずと諒に言った

諒「最初は小手調べだ、よ!!」

諒はそう言っで、右手に持っていた漆黒の日本刀、天鎖斬月でスバルに切り掛かった

スバル「!?バトルカード・リュウエンザン!!」

スバルは直ぐに気付き、バトルカード・リュウエンザンを狼の口に入れた

そうすると、狼の頭から炎が荒々しく燃える刀になった

スバル「おりゃあ!!」

ドーン!!!

諒の天鎖斬月とスバルのリュウエンザンがぶつかり合った

その瞬間、大きな爆発音が砂漠に鳴り響いた

諒「リュウエンザン一枚で、俺の天鎖斬月を防げると思ってんのか！！！」

諒は、リュウエンザンを力で消しさりスバルに斬り掛かった

スバル「！？うわあああああああ！！！！」

スバルは、対処することが出来ず天鎖斬月の餌食になり、そのまま吹っ飛ばされた

諒「まだ終わってねえぞ！！！！」

諒はそう叫んで、スバルに瞬歩で近づいた

瞬歩とは、BLEACHに出てくる死神が使う技である

これは、字の通り一瞬でその場に行ける技である

諒は、瞬歩でスバルに近づいた瞬間、諒は天鎖斬月でスバルに斬り掛かった

スバル「！？バトルカード・スーパーバリア！！」

スバルは、諒の攻撃に気付きバトルカード・スーパーバリアを狼の口に入れた

そうすると、スバルの体を包むオレンジのバリアが出現した

ガキンツ！！

諒の攻撃はスーパーバリアによって防がれてしまった
その瞬間、スバルはバトルカードを狼の口に入れた

スバル「バトルカード・スイゲツザン！！！！おおりやああ！！！！」

スバルは美しい形をした刀、バトルカード・スイゲツザンを出現させ
諒に斬り掛かった

諒「！？グハツ！！」

諒は、それを避ける事が出来ずスイゲツザンの餌食になった
此处を狙えばスバルは勝てる
スバルは、諒に斬り掛かった

諒「！？千鳥流し！！！！」

諒は直ぐにスバルに気付き、体を千鳥で覆う技、千鳥流しを發動させた

スバル「！？バトルカード・ライメイザン！！」

スバルは千鳥流しに気付き、直ぐにスイゲツザンからライメイザン
に切り替えた

何故切り替えたのかと言うと、スイゲツザンの属性は水

それに対し千鳥流しの属性は電気

水は電気を通す

もしあのまま斬り掛かっていたら、スバルは二倍のダメージをくら
うところであった

なので、同属性のライメイザンに切り替えたのだ

バチイツ!!!

電気と電気がぶつかり合い、激しいイナズマが諒達の周りに現れた

諒「行くぞ!!!」

諒は一つの魔法陣を出現させた

そして、エネルギーを溜め始めた

スバル「!?!」

スバルはそれに気づき、その場を離れ、スバルも魔法陣を出現させ
エネルギーを溜め始めた

そして、諒はエネルギーを溜め終わった

諒は魔法陣をスバルに向けた

そして

諒「全力全開!!!スターライト……ブレイカー!!!!!!」

スバルに放った

それと同時に、スバルもエネルギーが溜め終わった

スバルは、魔法陣をスターライトブレイカーに向けた

そして

スバル「雷光一閃!!!プラズマザンバー……ブレイカー!!!!!!」

スバルはプラズマザンバーブレイカーを放った

ドッカーーン!!!!

スターライトブレイカーとプラズマガンバーブレイカーは大きな爆
発音を鳴り響かせ、相殺した

二人は技が相殺されたのに動く気配がなかった
何故なら

スバル「準備運動はこれくらいかな？」

スバルはそう諒に言った

諒「そうだな、体も大分暖まってきたしな。十分だろ。」

諒は、スバルの言葉を肯定した

そう、二人はまだ本気を出していなかった

あの様な戦闘が本気ではなかった

まだ、二人にとっては準備運動にすぎなかった

しかしそれは、今から本気で戦うと意味する

諒・スバル「ふうー・・・」

二人は目を閉じ、心を落ち着かせた

暫しの沈黙

ヒューヒューヒュー

その場には風の音しか聞こえない
そして、二人は同時に目を開け叫んだ

諒「デュークモンCクリムゾンモードM×うずまき ナルト×基山 ヒロト×大紅蓮
氷輪丸！！！クロスヒュージョン！！！！！！」

スバル「デジヒュージョン！！！！星河スバル×ヒカリ・ヤミ！！！！
オーバードライブ！！！！モードオメガ！！！！」

二人がそう叫ぶと、二人は光に包まれた
光はまばゆい光を放ちながら輝いていた
そして数秒経って光が納まり、二人の姿が見えた
しかし、二人の姿は大きく変化していた

諒の姿は、背中に氷の翼が生えており、髪の色は紅、服装はオレンジと黒を基調とした服とズボン、そして右手には神剣ブルトガングを、左手には神槍グングニルを持っていた
一方スバルは、白を基調とした鎧、表面が白色・裏面が赤色のマントを羽織っており、右手には青の狼の頭、左手にはオレンジの恐竜の頭になっていた

諒「久しぶりにお前のバーストモードが見れた。」

諒は、スバルを懐かしむ目で見た

スバル「諒君こそ。クロスヒュージョンするのは久しぶりでしょ。」

スバルも諒にそう言った
こんな会話がされているが、お互い全く隙を見せない

諒「そうだな、最近はこの力を使わなくても勝てるから、な！！！！」

諒はそう言つて、神剣ブルトガングでスバルに斬りに掛かった

スバル「!?!」

スバルは一瞬驚いたが、直ぐに落ち着き左手を横に振つた
そうすると、恐竜の口から剣、グレイソードが現れた

スバル「ハアツ!!!!」

ドッカーーーーーーン!!!!!!

二人の剣がぶつかり合った
先程の爆発音とは比べものにならないくらいの大きさの爆発音が砂
漠に鳴り響いた

諒「クツ……」

スバル「ウツ……」

お互い力をフルに使っている
なので、剣が動くことはなかった
単純に考えれば、スタミナの切れた方が負けだろう
しかし、この戦いはそんなチマチマした戦いではない
諒は直ぐに神槍グングニルを構え、スバルに突き刺そうとした

スバル「!?!?オリヤツ!!!!!!」

しかし、スバルはそれにいち早く気づき右手の狼の頭で防御した

諒「ウツ・・・クツ・・・！」

スバル「ハアツ・・・グツ・・・！」

二人は、お互いを観察しあつた

一瞬でも目を離せば、相手を見逃してしまうからだ
しかし、このままやり続けても体力を削るだけ
そう思つたのか、二人は同時に後ろに跳んだ

諒「まさか此処まで強くなつてるとはなあ。正直驚いたぜ。」

諒は神剣ブルトガングを構えながら、スバルを誉めた

スバル「諒君こそ。あれだけ特訓したのに全然追い付けてないよ。
やっぱり諒君は強いんだね。」

スバルもグレイソードを諒に向けながら誉めた
二人は親友でもあり、ライバルでもある
二人はお互いの事を知っている
だからこそ、相手を誉めたのだ

諒「・・・行くぞ!!!」

スバル「うん!!!」

諒とスバルは走りだした

諒「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

スバル「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

二人は叫びながら攻撃した

ガキンガキンガキンツ（ry

二人の姿は消え、剣と剣が何度もぶつかり合う音しか聞こえない

二人のスピードは肉眼では捉えられない程のスピードだ

しかし、二人はお互いをしっかりと捉え斬り掛かっている

この戦いは既に達人のレベルを超えている

諒「インビンシブルソード!!!」

諒は、神剣ブルトガングでスバルに斬り掛かった

しかし、スバルはその攻撃を焦ることなく、グレイソードで対処した

スバル「グレイソード!!!」

スバルは、グレイソードに力を溜め神剣ブルトガングに攻撃した

ドツカーーーン!!!

また大きな爆発音が砂漠に鳴り響いた

既に幾つものクレーターが出来ていたが、新たにクレーターが出来た

諒「チツ、神劍ブルトガングを消されるなんてな……」

諒はそう言った

諒の手から、神劍ブルトガングが無くなっていた

スバル「なんとか消せたみたいだね……」

スバルはそう言った

しかしスバルのグレイソードは、罅が入っており後一回でもぶつかれば折れてしまいそうだった

諒「だったら、これで行くぜ!!!!」

諒は、右手に大玉螺旋丸を作り出し上空に投げた

そして、回転しながら大玉螺旋丸の所に行き、ボールの様に蹴った

諒「天空……落とし!!!!」

大玉螺旋丸は、スバルに向かって蹴られた

スバルは、焦ることなく狼の頭を横に振った

スバル「……」

スバルは、ガルルキャノンを構えエネルギーを溜めた
そして、放った

スバル「ガルルキャノン!!!!」

ドッカーーン!!!!

天空落とすとガルルキャノンは爆発し、相殺した
二人はこうなる事を理解していたのか、既に走りだしていた
諒は神槍グングニルを、スバルはグレイソードを構えて

諒・スバル「これで、最後だあ！！！！！」

二人はそう叫び、必殺技を放った

諒「クオ・ヴァデイス！！！！！」

スバル「オールデリート！！！！！」

ドッカーーーーーーン！！！！！！！！

今日一番の爆発音が、砂漠に鳴り響いた
そして、砂が舞い上がり諒達は砂煙に包まれた

ガキンッ！！！！

そんな音が聞こえた
しかし、砂煙のせいで全く何も見えない
しかし、声は聞こえてきた

「俺の……勝ち……のようだな。」

「そう・・・みたいだね・・・」

そのような声が聞こえた
そして、砂煙が納まった

そこには、右腕でガルルキャノンを押さえ、氷で出来た刀でスバルの首下を当てている諒の姿

ガルルキャノンを押さえられ、氷で出来た刀で首下を当てられているスバルの姿

つまりスバルが負け、諒の勝ちが決まった

スバル「まだ諒君には届かない、か・・・」

スバルはその場に座り込み、少し悲しい顔をした

諒「落ち込むなよ、スバル。それに、俺はまだまだ弱いよ。だからこそ、強くなるために努力してるんだろ？」

諒も座り込みそう言った

此れ程の戦闘が出来て弱いと言う

何故か？

諒は一度、平行世界の人物、御剣 一真に敗北しているからだ
敗北して分かること

勝利して分かることより遙かに多い

だから、諒は強くなるために特訓している
誰だってそうだ

必ず一度は負ける

運動・勉強・運・・・挙げれば限りがない
人は負けて強くなる

自分の苦手な所、自分の得意な所、それらは負けて初めて分かる
諒も負けて強くなった

スバル「そう・・・だね。僕達は弱い。だからこそ、特訓して強く
なろうとしてるんだよね。」

スバルは、諒の言葉を聞き元気を取り戻した

諒「初めから強い奴なんていない。強い奴は必ず、何処かで努力し
ている。それも血の滲むような努力をな。」

スバル「・・・そうだね。」

スバルは諒の言葉を肯定した

スバルの目には何かを決意した目になっていた

諒「ん？・・・何か決めたのか？」

諒はスバルの目を見て、聞いた

スバル「決めたよ。僕は、強くなる。強くなって、諒君、僕は君に
勝ってみせる！！」

スバルは立ち上がり、諒に言った

諒は、スバルの言葉を聞いて笑った

諒「おもしれえ、やってみろよ。だが、簡単には負けねえぜ。」

スバル「勝つさ、必ずね。」

スバルは笑って諒に言った

諒「じゃあ、その時が来るのを嫌々待つてるよ。」

諒はそう言って扉を出した

スバル「まっ、楽しみにしててよ!!」

スバルはそう言って扉を開け、扉の中に入っていった

諒「・・・待つてるよ、お前に背中を任せられる日を・・・」

諒はそう言って扉の中に入って扉を閉めた

そして、砂漠から扉が消えた

他人には短く、二人には長い戦いが幕を閉じた

諒の勝利

何時かはスバルが勝利するかもしれない

しかし、それはそれで良い

何故なら

二人はライバルだから・・・

松上「どうでしたか？諒とスバルの本気の戦いは？俺は、戦闘描写を此処まで書いたのは初めてです。諒とスバル、親友でもありライバルでもある。よくあるパターンですが、これを表現するのは大変でした。久しぶりにクロスビュージョンとバーストモードも書きました。次回から本編に戻ります!!次回から遂にFM王との戦いです!!謎のイレギュラー、スコープオン!!奴の目的は一体何なのか!?諒とスバルは、皆を救えるのか!!?応援よろしく!!」

番外編 諒とスバルの本気の戦い（後書き）

今回は次回予告だけ

次回 イレギュラー

次回もお楽しみに！！

第91話 イレギュラー（前書き）

リリなのあのキャラが!?

やっぱりリリなののキャラは可愛いキャラが多いよなあ

今回名言を覚えてくれたのはライトさんです!!

仮面ライダー電王で

『弱かったり運が悪かったり何も知らなかったとしても何も知らないこと言訳にはならない。』

やらなきゃいけないと思ったらやるよ。』

B Y野上良太郎

『カードはお守りじゃないんだ。使ったときに使わなきゃ、意味がないんだよ!』

B Y桜井侑斗

ありがとうございました!!

第91話 イレギュラー

side 諒

俺達は今、学芸会に向けて練習している
えっ、曲は何時考えてあの後どうなったのかって？

曲は思い付きだ

一人一人の曲を考えられる分けないだろ
だから、グループを作って歌わすんだよ

なのは達とは・・・うん、デートしたら許してもらえる事になった
マジで俺が何をしたのは覚えてないがな・・・

ミソラとは・・・うん、なのは達と同じで寝る時も一緒だ
やっぱフラグを建ててしまったようだ

フラグメーカーだぜ、俺

まあ一真さんと違って、俺はちゃんと好意を持たれてるのは分かっ
ているがな

あっ

諒「ゴン太、早く自分のポジションに走れ！キザマロ、テンポが遅
い！S、音程がズレてる！」

ゴン太「はあ・・・はあ・・・りよ、了解だ。」

キザマロ「わ、分かりました！」

委員長「誰がSよ！？それに、私は音程はあってるわよ！！！」

本当、二人は素直なのにコイツは・・・

諒「だったら俺はもう二度と指摘もしねえし教えもしねえ。お前等

だけでやれ。ワザワザ残って練習に付き合ってるのに、何だよその態度はよ?」

人がせつかく残ってやって練習に付き合ってるのに、そんな事を言われたらやる気が無くなるだろ
コイツは分かってるのか?

諒「ゴン太、キザマロ、お前等は関係ないから教えてやるよ。じゃあな。」

俺はそう言って体育館から出て行った

諒「さて、買い物にでも行くか。」

俺はスーパーに向かった

sideスバル

無心

無心

無心

無心になれ

無心

無心

無心

無心になるんだ

戦いに冷静は付き物

無心になるんだ

無心になるんだ

ウォーロック「スバル？」

無心になれ

ウォーロック「無視すんじゃないやねえよ、スバル。」

無心に・・・

ウォーロック「目を開ける！！スバル！！」

無・・・

ウォーロック「スバルー！！目を開けるー！！スバルー！！」

プツンッ！！

スバル「何なのさ、ウォーロック！？僕は精神統一してたのに！！
邪魔しないでよー！！」

僕はウォーロックに切れた

ウォーロック「す、スマネエ。だがよ、あそこに変な奴が居るんだぜ。」

変な人？

僕はウォーロックが指差した所を見た

そこには、展望台の柵に座って鼻歌を歌っている女の子がいた

「
　　」

僕は女の子に近づいた

「
　　」

スバル「えっ？」

女の子が突然話しだした

「歌は心を潤してくれる。リリンが生み出した文化の極みだよ。」

その台詞って……

「新世紀エヴァンゲリオンに出てくる渚　カヲルが言った台詞だよ。私は、この台詞の言う通りだと思うんだ。歌は心を潤してくれる。嬉しい時も辛い時も……どんな時でも歌は心を潤してくれる。そう思わない、星河　スバル君？」

スバル「どうして僕の名前を？」

僕は少し身構えながら女の子に聞いた

「私はスバル君の全てを知ってるよ。私の名前はギンガ・ナカジマ。よろしくね、スバル君」

女の子、ギンガちゃんが笑顔で僕に言ってきた

第91話 イレギュラー（後書き）

松上「ギンガ登場ー！！ども、作者の松上ですー！！」

諒「ギンガがカヲル君の台詞を・・・スゲエ格好良いぜー！！よう、主人公の諒だ。」

すずか「勘のいい人はギンガちゃんがどんな人なのか分かるんじゃないのかな？どうも、後書き限定キャラのすずかです。」

ツカサ「それにしても、僕がどんな歌を歌うのか楽しみだ。どうも、ツカサです。」

松上「まずはー！！」

4人「ライトさんありがとうございましたー！！」

松上「ギンガ登場ー！！カヲル君の台詞を言ったー！！テンションが上がるぜー！！」

諒「だなー！！だがよ、すずかの言う通り勘のいい人は分かるんじゃないか？ギンガがどんな奴なのかをよ。」

松上「だろうな。でもよ、スバルにもフラグを建てさせたかったんだ。お前が色々したからよ。」

諒「悪かったな・・・」

すずか「松上君、ツカサ君達は何を歌うの？」

松上「それは言えねえな。だが、グループだ。全員の曲はな。」

ツカサ「そうなんだ・・・」

松上「それじゃあ今回は此处までだ。それじゃあすずか、頼むな！
！」

すずか「はい！！」

次回 ギンガとスバル」

松上「それじゃあ！」

諒・ツカサ「次回も！！」

4人「お楽しみにー！！！！」

第92話 ギンガとスバル（前書き）

早くもギンガの正体が・・・

まっ、これからもっと面白くするぞー!!

今回名言を覚えてくれたのはジエスター!!アーカムさんです!!

新機動戦記ガンダムWで

『お前を殺す』

『任務・・・完了』

『俺は、死なない!!』

BYヒイロ・ユイ

言ったらキャラ崩壊だな、この名言は・・・

第92話 ギンガとスバル

sideスバル

スバル「ギンガちゃん？」

僕が名前を言うと、ギンガちゃんは笑顔になった

ギンガ「何かな？」

スバル「どうしてギンガちゃんは、僕の事を知っているの？」

ギンガちゃんは可愛い・・・違う違う！！

ギンガちゃんは怪しい！！

だから、簡単には信用できない！！

ギンガ「どうしてって言われても・・・興味ある男の子を知っているのは女の子として普通だと思うんだけどな。やっぱりダメだったかな？」

な！？／／／／／

きよ、興味があるって／／／／／

スバル「だ、ダメじゃないけどさ・・・／／／／／」

くっ、絶対僕の顔は赤いよ／／／／／

僕はギンガちゃんの顔を見た

ギンガ「??どうしたの？」

顔を傾け聞いてきた

か、可愛い／＼／＼／

ウォーロツク「プハハハハハッ！！！スバル、顔が赤いぜ！！！何照れてんだよ！！！プハハハハハハッ！！！」

ギンガちゃんがいるから文句を言えない

ウォーロツク、覚悟していてよ

ギンガ「ウォーロツク、そんな事言っちゃダメだよ。」

スバル「ウォーロツク「！！？」」

ど、どうしてギンガちゃんがウォーロツクの事を！？
って言うか、ウォーロツクの声が聞こえてたの！？

ギンガ「私は少し特殊な人間なんだ。電波や電波体の姿や声が聞こえるんだ。だから私はウォーロツクの事が分かるんだ。」

へえ、そうなんだ・・・えっ！？

スバル「ほ、本当なの！？」

じゃ、じゃあ、もしかして・・・

ギンガ「うん、スバル君が電波体になれる事だって知ってるよ。」

そ、そんなあ・・・

ギンガ「他にも、スバル君の親友の諒君・なのはちゃん・フェイト

ちゃん・はやてちゃん・ティアナちゃん・ミソラちゃんも電波体になれる事だつて知ってるよ」

う、嘘・・・

ギンガ「あつ、もうこんな時間だ！そろそろ帰らないと！！それじゃあスバル君、また明日ね！！」

スバル「あつ、うん！また明日！！」

ギンガ「じゃあねえ！！」

ギンガちゃんは手を振りながら帰っていった

スバル「・・・ウォーロック・・・」

ウォーロック「嗚呼、分かってるぜ。あいつは何か隠してるみたいだ。」

スバル「うん。」

何か隠してるみたいけど・・・

可愛かったな

「ふう、買った買った まさか今日がスーパーの大安売りセールだったなんてな。今日の俺はついてるぜ!!」

フォルテ「諒、既に十八時を回ってるぞ。急いで帰らないと煩いんじゃないのか？」

マジかよ・・・

俺は時計を見た

十八時二十四分五十六秒

早く帰らないとなのは達にお話・・・O・H・A・N・A・S・H・Iさん
ちまうな

・・・早く帰ろ

諒「ん？展望台から人が・・・スバルか？」

俺は展望台から出てきた人影を見た

あれは・・・ダメだ、遠くて分かんねえ

諒「まつ、誰だろうと関係ないか。」

俺は買い物袋をフォルテの中に入れて家に向かって歩きだした

sideギンガ

私・・・俺は廃棄工場に来た

此処は既に俺のアジトだ

俺はパソコンを起動させた

「……調査の結果は？」

パソコンの画面に、ある電波体が映し出された

ギンガ「今日、星河 スバルとウォーロックに接触。少なからず信頼を獲得。このまま進めば、星河 スバルを利用出来ます。」

俺はパソコンに映っている電波体に今日の事を報告した

「そう……か。しかし貴様の様な電波体が、その様な女の体に乗っ取るとはな。」

ギンガ「ジエミニは二重人格の男の体に乗っ取りましたが、結果は敗北。新井 諒達を倒すのに必要なのは、心に大きな闇を持っている人間。人間の闇は、我らの力を増大してくれます。」

俺は詳しく説明した

「流石はワシの側近だな、スコープオン（、、、、、、）（）」

ギンガ「有り難いお言葉ありがとうございます、FM王（、、、、）（）」

FM王「喜ばしい報告を待っているぞ。」

そう言っただけで通信が切れた

スコープオン「……必ず貴様を俺の駒にしてやる。仲間割れをさせてやる！！待っている！！新井 諒！！星河 スバル！！！！」

俺は、天井に穴の開いた場所から月を見ながら叫んだ

第92話 ギンガとスバル（後書き）

今回は次回予告だけ

次回 究極の選択

次回もお楽しみに！！

第93話 究極の選択（前書き）

シリアスな話が続きます

ですが無理矢理です

やっぱり難しいな、シリアスな話は・・・

今回名言を教えてくださいましたのはAIさんです！！

ガンダム00で

『行こう、彼らの母星へ。俺達は分かり合う必要がある』（刹那）

『いいの？』（ティエリア）

『いいも悪いもない。ただ俺は、生きている意味が合った』（刹那）

『みんな同じだ、生きている！』（刹那）

『生きようとしている』（ティエリア）

『だが、何故こうもすれ違う？』（刹那）

『なまじ知性があるから、些細なことを誤解する』（ティエリア）

『それが嘘となり、相手を区別し・・・』（刹那）

『分かり合えなくなる』（ティエリア）

『たぶん、気付いていないだけなんだ』（ティエリア）

『だから、示さなければならぬ。世界はこんなにも、簡単だとい

うことを・・・！』（刹那）

By 刹那 & amp; ティエリア

ありがとうございました！！！！

第93話 究極の選択

sideスバル

ギンガちゃんと出会って一週間が経った

僕は毎日、ギンガちゃんに会うために展望台に行っている

今日も僕は、学校が終わって直ぐにギンガちゃんに会うために展望台に向かっている

学校で探したんだけど、どのクラスにもいなかった

なので、展望台に向かっている

ウォーロック「・・・スバル、あいつの事をどう思う?」

ウォーロックが聞いてきた

スバル「ギンガちゃんの事?そりゃ可愛いよ。」

ウォーロック「はああ?お前何言ってんだよ?俺は、あいつが怪しいかどうかを聞いたんだよ。」

う、嘘!?

ぼ、僕はてっきりギンガちゃんが可愛いかどうかを聞いたのかと思っただよ・・・

ウォーロック「そうか・・・スバル、お前、あいつに惚れたろ?」

な!?!?!?!?!

スバル「な、何言ってるのさ!?ぼ、僕がぎ、ギンガちゃんに!?じよ、冗談は止めてよ!!!?!?!?!?!?!」

ば、僕は一生懸命弁解した／／／／／
だけど、顔は赤いし、言葉をかなり動揺して、噛み噛みだ／／／
／／

こ、これじゃあ何を言っても無駄だよ／／／／／

ギンガ「何の話をしてるの？」

スバル「ウォーロックがね・・・えっ？」

ギンガ「昨日ぶりだね、スバル君」

後ろにギンガちゃんがいた

スバル「い、何時から居たの、ぎ、ギンガちゃん！？／／／／／
／／」

僕は更に顔を赤くして、動揺しながら聞いた

ギンガ「スバル君がウォーロックに必死に弁解してる所・・・かな
？でも、何を言ってるのか聞き取れなかったけどね」

ギンガちゃんは笑いながら言ってきた

そ、そんな可愛い顔をされたら僕・・・／／／／／

ギンガ「スバル君、顔が赤いけど大丈夫？」

ギンガちゃんが心配そうな顔で僕に聞いてきた
うっ、その顔も可愛い／／／／／

僕にはギンガちゃんを護る力がある！！

諒君は、大切な人を護るために強くなった

僕も何時か、大切な人を護るために力を使いたい！！

初めて好きになった女の子、ギンガちゃんを護りたい！！！！

ギンガ「・・・本当に私を護ってくれるの？」

ギンガちゃんは不安そうに聞いてきた

スバル「大丈夫！！！！約束するよ！！！！」

僕はそう叫んだ

ギンガ「じゃあ言うね。・・・私の命を狙ってるのは・・・」

僕は耳に神経を集中させた

ギンガ「

スバル君の親友である、新井 諒

えっ？

ギンガ「私は新井 諒に命を狙われてるの。」

ちよっ！？

スバル「ちよっと待ってよ、ギンガちゃん！！！何で諒君がギンガちゃんの命を狙うのさ！！？意味が分からないよ！！！」

きつとギンガちゃんの言い間違いや人違いの筈だ！！

諒君は、人の命を狙うような事はしない！！

諒君は、僕やなのはちゃん達を救ってくれて、ゴン太や宇田海さんを救った！！

今まで一緒に過ごしてきたけど、諒君はそんな事をするわけない！！

ギンガ「全ては真実なんだよ、スバル君。新井 諒の力は、もともと違う人の力なんだよ。人を殺して自分の力にする。新井 諒はそうやって力を手に入れてきたんだよ。」

嘘だ……

だって諒君の力は、神様から貰ったって……

ギンガ「新井 諒は転生者なの。新井 諒は、神様から相手の力を

奪う力を授かったの。そして最初に忍者の末裔を殺し力を奪った。それからどんどん人を殺し、力を手に入れていった。なのはちゃん達に優しくしているのも、力を奪うためなんだよ。今まで皆を護っていたのは、信頼を得るためなんだよ。スバル君、君は騙されていたんだよ。」

嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、
嘘だ、嘘だ、ウソだ、ウソだ、ウソだ、ウソだ、ウソだ、ウソだ、
ウソだ、ウソだ、ウソだ、うそだ、うそだ、うそだ、うそだ、うそだ、
うそだ、うそだ、うそだ、うそだ、うそだ、うそだ、うそだ、うそだ、
ウそだ、うソダ、ウそだ、うソダ、ウそだ、うソダ、ウそだ、うソダ、
ダ、ウそだ、うソダ、ウそだ、うソダ、ウそだ、うソダ、ウそだ、
うソダ、嘘だ！！！！！！！

スバル「違う！！諒君はそんな事は……」

僕はそこで言葉に詰まってしまった

ギンガ「やつぱり……スバル君も薄々感ずいてたんでしょ？それに……スバル君は私のことを護ってくれてるんでしょ？……まさか、嘘を吐いたの？」

ギンガちゃんは泣きそうな顔をした

スバル「ち、違うよ！！！！」

ギンガ「じゃあ私と新井 諒、どっちを信じてくれるの！？答えてよ！！！！スバル君！！！！」

僕は……

スバル「僕は

ギンガちゃんを信じるよ。諒君、否、新井 諒は、僕が倒してみせる！！そして、僕はギンガちゃんを護る！！！」

第93話 究極の選択（後書き）

今回からシリアスな話が続きますので、アニメの予告風にしてみます

スバル「僕は信じていたのに！！！！」

諒「いきなり何すんだ、スバル！！？」

スバル「煩い！！僕はお前、新井 諒を殺す！！！！覚悟しろ！！！！」

諒「何故かは知らんが、お前の目を覚まさせてやるよ！！！！」

スバル「僕はお前を殺してやる！！！！」

次回 悲しい戦いの始まり

次回もお楽しみに！！

第94話 悲しい戦いの始まり(前書き)

悲しい戦いが始まってしまっ……

今回名言を覚えてくれたのはT-waveさんです

ひぐらしのなき頃に 祭で

『口の利き方の問題じゃない魂の問題だッ！』

村の一員のために立ち上がれない腰抜けは引ッ込んでろッ！』

B Y前原圭一

『……圭一を、許しましょう』

B Y古手梨花

『……もう一度……』

もう一度、あの時に戻らせてくれ……。

そうしたら、……今度こそ俺は、二人を救っッッ！』

B Y赤坂衛

ありがとうございました！！

第94話 悲しい戦いの始まり

side 諒

諒「ふああ・・・ねむい」

ツカサ「諒君、着いて最初の言葉がそれって言うのはどうかと思うよ。」

俺達は今、ベンサイドシティに来ている

まあ理由は、ミソラの家物を整理整頓するためだ

今日は学校が創立記念日だったから休みであって、それを利用して来てるんだがな

だが、今回はスバルが不参加だ

誘おうと思ったんだが、何故かは分からんがブラザーバンドが切れていた

多分、間違えて切ってしまったんだろう

俺も、転生する前は間違えて切ったことがあったしな
だから、会つのが気まずいんだろう

なのは「ん？・・・ねえ、あれってスバル君じゃないかな？」

なのはは、指差しながら言ってきた

俺達は、なのはが指差した方を見た

そこには、スバルがポツンツと立っていた

諒「あんな所で何をしてんだ、スバルは？」

俺達は疑問符を頭に浮かべながら、スバルに近づいた

諒「スバル、何をしてんだ？」

スバル「……………」

無視！？

俺ってスバルに何かしたか！？

思い出せ、俺！！

最近物忘れが激しいが、こればかりは思い出せ！！！！

……………ダメだ、全然思い出せねえ

スバル「……………てたのに」

スバルが口を開いて何か言った

だが、声が小さくて何を言っているかは聞き取れなかった

諒「何だって、スバル？」

俺はスバルに聞いた

！？

スバルの目には、憎悪で満ちていた

スバル「僕は信じていたのに！！！！」

スバルはそう叫ぶと、デジフュージョンをしてライトブレードで斬り掛かってきた

諒「な!？」

俺は直ぐに瞬歩でなのは達の所に移動し、避けた
何してんだよ、スバルは!？」

諒「いきなり何すんだ、スバル!！？」

スバル「煩い!！僕はお前、新井 諒を殺す!！！覚悟しろ!！！」

諒「はああああ!！!？意味が分かんねえよ!！!ふざけるのも大概にしろ、スバル!！!」

スバル「煩い!！!僕に話し掛けるな!！!」

スバルはダークガンで俺を狙って撃ってきた

諒「!？バカ野郎!！!フルパワーシールドV3!！!」

俺は直ぐにフルパワーシールドV3を発動し、皆を護った

なのは「ど、どうしちゃったの、スバル君は!？」

諒「分からん!！!だが、今のスバルは俺を殺そうとしてやがる!！!
!」

フェイト「な、何で!？諒とスバルは親友なんですよ!！！」

諒「そんな事、俺が知るか!！!？だが、今のあいつは本気だ!！!
俺も本気で戦わないと負ける!！!だから皆は、この町の人を安全な場所まで非難させてくれ!！!ツカサとヒカルは、暁に連絡を頼

む！！！！」

全員「うん（分かった）！！！！」

皆はそう言っただけから離れていった

諒「フォルテ、スバルにFM星人は取付いていないよな！？」

フォルテ「嗚呼！！スバルの体は至って正常だ！！だからスバルは、自分の意志でお前を殺そうとしている！！！！」

意味が分かんねえよ！！！！

諒「本気でスバルを止める！！！！フォルテ、クロスヒュージョンだ！！！！」

フォルテ「電波変換！！！！クロスシステム起動！！！！アルファモン×波風 ミナト×大紅蓮氷輪丸×ファイディオ・アルデナ×ブライ！！！！クロスヒュージョン！！！！」

フォルテがクロスシステムを起動させると、俺の姿は変わった
アルファモンの金色の羽根、波風 ミナトのような金髪、ファイディオの髪型、右手に大紅蓮氷輪丸、左手にブライソードが追加されていた

諒「何故かは知らんが、お前の目を覚まさせてやるよ！！！！」

スバル「僕はお前を殺してやる！！！！」

諒「行くぞ！！！！」

俺とスバルの殺し合いが始まった・・・

第94話 悲しい戦いの始まり（後書き）

今回もアニメの予告風で予告します!!

ギンガ「星河 スバル、お前は新井 諒の体力を削るだけで良い。
後は・・・」

諒「スバル、教えてくれ!!!何で俺を殺そうとするんだ!!!」

スバル「僕は君に裏切られた!!君はどんな時でも他人を護るために戦つてると思ってた!!!だけど君は、私利私欲のために戦つた!!!君は僕達の心を弄んでたんだ!しかも、君は僕達をも殺そうとしている!!!だから僕は君を殺すんだ!!!」

ギンガ「チツ、防がれたか・・・まあ、死ぬ順番が変わっただけだから余り関係は無いがな・・・」

暁「これ以上、お前の好き勝手にはさせない!!」

ギンガ「最後に言っておく・・・新井 諒を殺したのは・・・
お前だ(、、、)」

第95話 世界の希望の光、死す（前書き）

シリアスだ・・・

今回の話は誰が予想できたでしょうか？

今回名言を教えてくださいましたのはジエスター「アーカムさんです!!」

デビルテイクライシリーズで

『楽しすぎて、狂っちまいそうだ!』

『青空は誰の頭上にも平等に広がる』

Byダンテ

ありがとうございました!!

第95話 世界の希望の光、死す

sideギンガ

全ては計画通り

ギンガ「だが、まさかあの二人が此処まで力を持っているとはな．．．」

俺はビルの屋上で、新井 諒と星河 スバルの戦いを見てそう呟いた
俺の目の前の景色は、あらゆるビルは崩壊し、道路には幾つもの溝
とクレーターが出来ており、既に廃墟となりつつあるベンサイドシ
テイ

ドッカーン！！！！

500m先のビルが崩壊し始めた

ギンガ「星河 スバル、お前は新井 諒の体力を削るだけで良い。
後は．．．」

俺は電波変換し、二人にはれないように近づいていった

side三人称

諒「オーデイン．．．ソード！！！！」

諒は大玉螺旋丸を作り出し、それをサッカーボールのように蹴った

スバル「へブンスナツクル!!!」

スバルはオーディンソードに、光の衝撃破であるへブンスナツクルを放った

ドツカーン!!!

二人の技は相殺し、砂煙があがった

諒「スバル!!!何で俺を殺そうとしてんだ!?俺とお前は、親友だろぅが!!!」

諒は、スバルに叫んだ

スバル「僕に話し掛けるな!!!デスクロウ!!!」

砂煙の中から、悪魔の手が伸びてきた

諒はそれに気付き、大紅蓮氷輪丸で防ぐ

諒「クツ・・・俺がお前に一体何をしたって言うんだよ!?俺は、お前に殺される理由が思いつかねえ!!!」

諒は、デスクロウを防ぎながら叫んだ

スバル「へブンスゲート!!!ブラッディストリーム!!!」

スバルがホーリーエンジェモンとヴァンデモンの技を使った
諒はそれに直ぐに気付き、大紅蓮氷輪丸を構えた

そうすると、諒の周りに氷の粒手が沢山現れた

そして、それを自分の前に集め一つの巨大な氷の盾を作った

諒「名前を考えるのは後だ！！取り敢えず、防ぐ！！！」

諒はブライソードを上に向けて、氷の盾を持ち構えた

そうすると、ブラッディストリームが音速の速さで向かってきた

諒は焦ることなく氷の盾をブラッディストリームに構えた

ガキンツ！！！！

ブラッディストリームは簡単に防がれた

しかし、氷の盾に少し罅が入っていた

スバル「バーストモード起動！！オーバードライブ！！！！モードオ
メガ！！！！」

スバルは、バーストモードを発動させ諒に突っ込んだ

諒は、落ちてきたブライソードを持ちスバルに突っ込んだ

ガッキーン！！！！！！

剣と剣がぶつかった

ドッカーーン!!!!!!

剣と剣がぶつかって、その衝撃波で諒達の周りのビルが大きな音を発して崩壊した

諒「おおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

スバル「はあああああああああ!!!!!!」

二人はそう叫ぶと、二人の姿が消えた

二人は光速の世界に入ってまた殺し合いが始まった

sideツカサ

暁「何だと!? 諒とスバルが殺し合いをしてるだと!!!? 分かった、直ぐに向かう!!! ツカサ達は、なのは達の手伝いをしてくれ!!!」

そう言って暁さんの電話が切れた

ツカサ「どうして・・・」

ヒカル「分かんねえよ・・・うつ」

ヒカルが突然頭を押さえて座り込んだ

ツカサ「ひ、ヒカル!?・・・うっ、ぼ、ぼくも」

僕も頭に痛みが襲い掛かってきた
ど、どうしただ・・・

僕達は倒れた

そして、意識が薄れていった

「これで全ての残留データが揃った。」

そんな声が聞こえた

僕は目を上に向けた

そこには、0と1のデータで出来た玉のような物を持っていた女の子が立っていた

僕は、それを確認すると意識を失った

sideギンガ

ギンガ「オックス、ギグナス、リブラ、キャンサー、ウルフ、オヒユカス、ジエミニ・・・そして、昨日殺したクラウン・・・全ての残留データが揃った。・・・さて、そろそろ行くか」

俺はそう言ってウェーブロードに乗って全速力で走りだした

ギンガ「さ、お前達の命も此処までだ・・・」

俺は指の骨を鳴らし、そう言った

ギンガ「新井 諒・・・星河 スバル・・・お前達は死ぬ。」

side 三人称

ドツカーン！！ドツカーン！！（ry

何も無い場所から大きな爆発音が、町に響いている
だが、耳を澄ませばある金属音が聞こえる

ガキンツ！！ガキンツ！！ガキンツ！！（ry

剣と剣がぶつかる音

だが、何も見えない

何故なら諒とスバルは、光速の世界で殺し合いをしているからだ

諒「氷竜旋尾！！！」

スバル「ガルルキャノン！！！」

突然諒とスバルの姿が現れ、技が放たれた

氷の技同士、お互い中心で音も発てずに相殺し合った

諒「スバル、教えてくれ！！！！何で俺を殺そうとするんだ！！！」

諒はスバルに叫んだ

スバル「僕は君に裏切られた！！君はどんな時でも他人を護るために戦ってると思ってた！！！！だけど君は、私利私欲のために戦って

た！！！君は僕達の心を弄んでたんだ！しかも、君は僕達をも殺そうとしている！！！だから僕は君を殺すんだ！！！」

スバルは諒に叫んだ

諒はスバルの話を聞いて驚愕した

当たり前だ

意味が分からない理由で殺されようとしているのだから

スバル「さ、これで止めだ！！！」

スバルはグレイソードを構えた

諒は今だに驚愕していた

スバル「オーダーリート！！！」

スバルは諒に斬り掛かった

諒「！？スバル！！！」

諒はある何かに気づき、瞬歩で移動した

スバル「ど、何処に行った！？」

ザシュツ！！！！

スバルは、諒を探しているとスバルの後ろから聞いた事のない音が鳴った

スバルは直ぐに後ろを向いた

そこには

諒「・・・グフツ・・・」

ギンガ「チツ、防がれたか・・・まあ、死ぬ順番が変わっただけだから余り関係は無いがな・・・」

スバルを護るために漆黒の刀で心臓を貫かれていて口から血を出している諒の姿と、諒の姿を見て狂喜しているギンガの姿があった

sideスバル

どうして？

新井 諒が僕を庇ってるの？

どうして？

ギンガちゃんが電波変換してるの？

どうして？

ギンガちゃんが僕を殺そうとしたの？

どうして？

新井 諒は僕の顔を見て満足そうな顔してるの？

どうして？

約束したのにギンガちゃんは僕を裏切ったの？

どうして？

新井 諒だけじゃくて僕を殺そうしてるの？

どうして？

どうして？

どうして？

どうして？

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
シテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテドウシテ・・・

ギンガ「フン、まだ分かっていないようだな。星河 スバル！！・・・
・お前は騙されたんだよ！！！！」

う、嘘だ！！

ギンガ「俺はFM王の側近、そして最後のシ者！！！！スコアピオン
だ！！！！」

嘘だ・・・

ギンガ「俺は、この女の体に乗っ取りお前に近づいた！俺の力だけ
じゃ、お前と新井 諒を殺すことは出来ない。だから考えたのさ。
・・・同士討ちを、な」

うそだ・・・

ギンガ「俺を信頼させ、新井 諒を信頼させなくする。そして、お
前達を同士討ちさせる計画だ。お前は簡単に俺の計画に乗った。そ
して、デタラメな新井 諒の情報をお前に教えた。そして、お前は
新井 諒を殺す様誘導した。そして今日、お前達は殺し合いを始め
た。だが、実力は略互角。お前達は、お互いを殺すことは出来ない。
だから、俺はお前達の体力が切れるのを待った。そして、お前が油
断した時に俺はお前を殺そうとした。だが、新井 諒に防がれてし
まった。まあ遅かれ早かれ死ぬだったし、計画に支障は無かった
がな。」

ウソダ・・・

ギンガ「お喋りは此処までだ。・・・お前も、死ね！！」

ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ
ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ
ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ
ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ
ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ
ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ
ウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダウソダ

side 三人称

スコープオンが、もう一つの漆黒の刀を出しスバルに斬り掛かった

ガキンツ！！！！

だが、それは防がれた

ギンガ「ば、バカな！！？お前は、心臓を貫かれたんだぞ！！何故お前は動けるんだ！！！！？」

スコープオンは驚愕しながら叫んだ

何故なら、諒がスコープオンの攻撃を大紅蓮氷輪丸で防いだからだ

ギンガ「クツ、まだ生きているならもう一度心臓を貫いて」そうはさせるか!!!」「い、何時の間に!？」

スコープオンが諒の心臓を貫こうとすると、暁達が現れそれを防いだ
暁「これ以上、お前の好き勝手にはさせない!!!」

なのは「今直ぐ諒君から離れて!!!」

フエイト「じゃないと殺すよ!!!」

はやて「ウチ等の堪忍袋は既に切れとんねん!!!早く、その汚い手を離しい!!!」

ティアナ「私は、今直ぐお前を殺したい!!!お兄ちゃんから離れれば、一瞬で殺してあげる!!!」

ミソラ「私達の目の前に現れないで!!!」

暁達は武器を構え、そう叫んだ

ギンガ「……まあいいだろう。今回の目的である二つの内一つは完了した。……お前等、よく聞け!!!一週間後、俺達は地球に総攻撃をかける!!!まあ準備なり死ぬ覚悟なりしとくんだな!!!それと、星河 スバル!!!!」

スコープオンは、スバルの名を叫んだ

ギンガ「最後に言うておく……新井 諒を殺したのは……お前だ(、、、)」

そう言つてスコーピオンは消えた

諒「．．．み．．．ん．．．な」

諒が小さい声で皆を呼び掛けた

諒「い．ま．ま．．．で．．．あ．．．り．．．が．．．
．．．．．と．．．．．な．．．．．」

諒はそう言い終わると電波変換が解けた

暁「諒！！？」

暁は直ぐに諒を支え、ビルの屋上に移動した

暁「．．．．．」

なのは「暁さん、早く諒くんを病院に連れて行かないと！！！」

フェイト「そうだよ！！！！じゃないと！！！！」

暁は諒を見ていた

なのは達は諒を病院に連れて行こうと言うが、暁は動く気配が無かつた

スバルは暁の近くに立っていたが、今にも倒れそうなくらい不安定な立ち方だった

暁「無駄だ・・・」

暁は小さく言った

はやて「無駄やない！！諦めたらあかんねん！！！」

ティアナ「私達はどんな時でも諦めなかったでしょ！！！！諦めない
でよ！！！！」

ミソラ「暁さん、早く病院へいって無駄なんだよ！！！」な、何
で!?!」

暁はミソラの言葉を遮って叫んだ

暁「何故なら、諒は

死んだから・・・

」

暁がそう言った瞬間、スバルは倒れた

暁「す、スバル!？」

暁は直ぐにスバルを支え、スバルを見た

スバルは目が死んでいた

暁が死んだ事実を知り、スバルの心が粉々に砕かれた

なのは「う・・・そ」

フェイト「いや・・・しんじたくない」

はやて「ウチは認めへん!!!」

ティアナ「もう、何も信じられない!!!」

ミソラ「・・・」

なのはは諒の死を嘘だと必死に認めようとし、フェイトは諒の死を認めようとせず、はやては諒の死から逃げ出し、ティアナは全ての絆を信じられなくなり何処かへ飛んでいき、ミソラは立ったまま気絶していた

21XX年、5月26日、午後3時47分07秒

星河 スバル・精神崩壊の重体
高町 なのは、フェイト・新井、八神 はやて、新井 ティアナ、
響 ミソラ・精神崩壊危機の重体
双葉 ツカサ、双葉 ヒカル・手足などを骨折により重傷
その他、ベンサイドシティの住民・重軽傷

被害・ベンサイドシティ全て及びその近辺

世界の希望の光、新井 諒
親友を護り

死す

第95話 世界の希望の光、死す（後書き）

今回もアニメ風の予告です

ヨイリー「奇跡・・・を待ってるそうよ。諒君が生き返る奇跡を、
ね。」

アフロディ「あの二人なら、諒を救えるかもしれない!!!」

神威「分かりました、諒さんを助けます。だから、今直ぐ俺をその
世界に送ってください。」

次回 援軍はチートの弟子

次回もお楽しみに!!

第96話 援軍はチートの弟子(前書き)

あの戦いから少し経った日の話です

やはり、シリアスですね・・・

今回は名言コーナーはお休みです

第96話 援軍はチートの弟子

sideアフロディ

アフロディ「りよ、諒!!!?」

僕は神界で諒が死んでしまっと思って思わず声を出してしまった

最高神「ど、どうしたの!?!」

最高神様が現れて、僕に聞いてきた

アフロディ「た、大変です!!!?りよ、諒が死んでしまったんです!!!」

僕は、最高神様に大声で言った

最高神「な、なんですって!?!?・・・で、でも、死んだ本人が来てないわよ。」

えっ!?!?

僕は周りを見渡した

だけど、諒らしい人物はいなかった

アフロディ「な、何で!?!?死んだ人間は必ず此处に来るはずなのに!?!?どうして!?!?」

どんな人間でも、どんな死に方でも、どんな世界でも、死んだら必ずこの神界に来る

だけど、諒はいない

どうして……

最高神「……どちらにせよ、彼は死すべき存在ではない。生き返らせたいたのは山々なんだけど、私達が此処を離れるわけにはいかな
いし……彼女に力を借りましょう。」

彼女？

最高神「そうと決まればモタモタしてる場合じゃないわ！！行くわ
よ、アフロディー！！」

そう言っつて僕の手を掴んできた

アフロディ「ど、何処に行くんですか！？そ、それに、どうやって
諒を生き返らせるんですか！？」

僕が最高神様に聞くと、頬笑みながら僕を見てきた

最高神「ある転生者と唯一話が出来る人物の所よ！！その転生者な
ら、彼を生き返らせるはずよ！！」

ほ、本当ですか！？

で、でも、その転生者って誰の事なんだ？

最高神「その転生者の名前は

神威・・・

「

side 暁

俺と長官・ヨイリー博士は、会議室にいる
だが、会議室はかなり重い空気だった

長官「・・・暁、皆の状態は？」

長官は、重い口を開き俺に聞いてきた
俺は、資料を手に取り話そうとした
だが、俺は言いたくなかった
視界が霞んでいた

ヨイリー「シドウちゃん、これを・・・」

ヨイリー博士は俺にハンカチを渡してきた
そうか・・・泣いているから視界が霞んでいたのか・・・
俺はハンカチを借り、涙を拭いた

暁「ありがとうございます・・・ヨイリー博士。」

俺はハンカチを丁寧に折畳み、ヨイリー博士に返した

ヨイリー「良いのよ、別に・・・ただ・・・今回は辛過ぎるから・・・」

ヨイリー博士も目に涙を蓄めながら言ってきた

長官「辛い事を言わせようとしてすまない。だが、皆の状態を知っているのはお前だけなんだ。」

長官は本当に辛そうな顔をして謝ってきた

暁「いえ、大丈夫ですから・・・」

俺はそう言って資料をちゃんと持った

暁「スコープオンの事件から三日が経ちました。皆の状況を話します。まず双葉 ツカサと双葉 ヒカルは、手や足などが骨折の重傷・・・」

俺はそこで一度呼吸をした
そして、長官に言った

暁「新井 諒は、スバルを庇い心臓を貫かれ死にました。星河 ス

バルは、新井 諒の死などのせいで精神崩壊の重体。

高町 なのはは、諒の死を今だに受け入れることが出来ず部屋に閉じこもっています。このままでは精神崩壊の危機になりうる可能性があるがあるので重体。

フェイト・新井は、諒の死のせいで部屋ですっと泣いています。フェイトも、なのは同様精神崩壊の危機になりうる可能性があるので重体。

八神 はやては、諒の死から逃げ出し部屋で暴れていました。医療班が薬をうち今は部屋で落ち着いていますが、なのはとフェイト同様精神崩壊の危機になりうる可能性があるので重体。

新井 ティアナは、諒の死のせいで誰も信じる事が出来なくなり局員などを攻撃していました。睡眠薬を吸わし部屋で寝かせましたが、上記の3人同様精神崩壊の危機になりうる可能性があるので重体。

響 ミソラは、諒の死のせいで気絶し、今だに目を覚ましません。目を覚ますと精神崩壊の危機になりうる可能性があるので重体。その他、ベンサイドシティの住民などは重軽傷。

ベンサイドシティは、9割が崩壊しています・・・クソッ!!」

ドカンッ!!

俺は皆の状況などを言い終わると、机を思いつきり殴った

血が出ていたが、そんな事は気にしなかった

長官「・・・ヨイリー博士、フォルテ達の状態は？」

長官は、ヨイリー博士に聞いた

ヨイリー「フォルテちゃんは、自力で諒君と電波変換して細胞や器

官の死亡を食い止めてるわ。でも、フォルテちゃんの体力を考えても長くて3日ね。スーツエーモンちゃん達は、なのはちゃん達の精神的ダメージを一緒なくらい受けたから今は研究班が皆を治しているところよ。ウォーロックちゃん・ヒカリちゃん・ヤミちゃんは、スーツエーモンちゃん達以上の精神的ダメージを受けたから、今にも消えそうよ。研究班は、こちらをメインにしているわ。」

長官「得たものより失ったものの方が大きい……か。」

長官はヨイリー博士の話聞いてそう呟いた

暁「ヨイリー博士、何故フォルテは電波変換しているんですか？」

認めたくはないが、諒は死んだ

今更細胞や器官の死などを防いでもしようがないはずだが……

ヨイリー「奇跡……を待ってるそうよ。諒君が生き返る奇跡を、ね。」

そう、か

長官「暁、一週間後にFM星人が地球に攻めてくるんだっただよな？」

暁「そうです……」

長官「……今日の午後八時まで休憩を取ろう。色々あったからな。」

長官がそう言ったので、会議は一時中断となった

sideアフロディ

最高神「それで、あの子達の力が必要なよ。協力してちょうだい。」

「

女神「分かりました！！早速あの子に連絡を取りますね！！」

女神様がある人物に連絡を取り始めた

最高神「私達が出来るとは此処までよ。後は、あの子達に任せましょう。」

アフロディ「・・・分かりました。」

僕は、自分の仕事場に戻ろうとした

そ、そうだ！！

あの二人なら・・・

アフロディ「最高神様、僕、少し用事を思い出したのでこれで失礼します！！」

僕は最高神様に頭を下げ、ある人物達の所へ向かった

アフロディ「あの二人なら、諒を救えるかもしれない！！！！だって

本当の父親と母親なんだから!!!

「

side 神威

神威「.....」

俺は今、山の中で精神統一をしている

何時もは体ばかり鍛えていたから、偶には心を鍛えようと思ってな

女神「聞こえてる?」

突然女神様の声が聞こえた

神威(どうしたんですか、女神様?)

俺は心で話した

女神『君に救ってほしい人物が居るの。』

神威（俺に、ですか？それに、誰を救うんですか？）

女神『今から話すわ。実はね

（説明中）

・・・それで、新井 諒君を救ってほしいの。って聞いてる？

聞いてますよ、女神様

神威（分かりました、諒さんを助けます。だから、今直ぐ俺をその世界に送ってください。）

絶対に諒さんを生き返えさせる
そして

神威（スコーピオンを殺す！！！！さ、早く送ってください！！！！）

女神様『わ、分かったわ。』

俺の体が消え始めた

神威（スコーピオン、お前は俺が殺す！！！！待ってるよ！！！！）

俺は心の中でそう叫んで諒さんの世界へ行った

神威「諒さん、必ず貴方を生き返させてみせます。必ず。」

次回 希望の死がもたらした状況

次回もお楽しみに!!

第97話 希望の死がもたらした状況（前書き）

今回の話は、俺が書いてるのに泣いちゃいました（笑）

ですが、シリアスですよ

今回名言を覚えてくれたのはジエスター「アーカムさんです!!」

ダイレンジャーで

「気力と妖力は光と影、正義と悪。」

この世のものが全て二極から成り立つように、気力と妖力もまた表裏一体。

もとはひとつなのだ。一つの力を二つに分け、お互いが争いながら永遠に生きてゆく。

これ即ち人間の宿命なのだ。

妖力が減れば気力も減び、気力が残れば妖力もまた残る。

全ては虚しい戦いなのだ。勝負は永久につかない。」

B y道士嘉久

ありがとうございました!!

第97話 希望の死がもたらした状況

sideなのは

なのは「・・・諒くん」

私はベッドに転がって枕を抱き締めながら、諒くんの名前を言った

なのは「・・・諒くん」

認めたくない、認めちゃったら諒くんが居ないことになっちゃっただけど、諒くんはもう居ない

なのは「・・・りょうくん・・・うわああああああああん
!!!!!!」

わたしはかおをまくらにうめながらおおごえでないた

sideフェイト

フェイト「グスツ・・・うつ・・・りょう」

わたしはなきながらりょうのなまえをいった

フェイト「りょう・・・りょう」

わたしはふとんにくるまりないた
もうあえない

もうあのえがおがみれない
もうおはなしすることもできない

フエイト「りょう……うっ、うわああああああわ!!
!!りょう……りょう!!!!」

わたしはさらになみだをながしながらないた

sideはやて

はやて「諒君……諒君」

ウチは椅子に座りながら諒君の名前を言った

はやて「何で……何でなんや」

幾ら呼んでも現実が変わらへん
幾ら呼んでも諒君は生き返らへん
幾ら呼んでもウチの心は晴れへん
やけど

はやて「りょうくん……うわああああああん!!!!
!!りょうくん!!!!ウチは……ウチは!!!!うわあああああ
ああああん!!!!」

なくなっていわれてもむりや
うちはりょうくんとちがってつよくないから

side ティアナ

ティアナ「お兄ちゃん・・・また、私は一人・・・おにいちゃん」

もうはなれないとおもってた

ひとりじゃないとおもってた

おにいちゃんがずっといてくれるとおもってた

ティアナ「おにいちゃん・・・おにいちゃん・・・う、うわあああ
ああああああああん!!!!!!!!!!」

もうわたしをひとりにしないでよ

おにいちゃん!!

わたしはおにいちゃんがないとなにもできないんだから!!

おにいちゃん・・・

side 三人称

ミソラの病室

ミソラは今だに目を覚まさない

他の皆と違って意識は無い

だが、ミソラの顔は暗かった

そして、頬には涙が垂れていた

sideツカサ

僕は右足と左腕を折られた
なので、病院のベッドで寝ている
だけど、体の痛みより心が痛かった
親友の死

自分に力があれば救えたのかもしれない
僕はなんて無力なんだ！！

ツカサ「ごめんね・・・りょうくん・・・うっ、うっうっうっうっ」

ぼくは、じぶんのむりよくさをうらみながらないた

sideヒカル

俺は、左腕と肋骨が数本折れた
ツカサとは別の部屋のベッドで寝ている

ヒカル「クソが・・・」

お前にはまだ礼をしてねえ

なのに

なのに！！

何で死んじまうんだ！！

俺が油断せずあいつを止めていれば・・・
チクシヨウ・・・

ヒカル「チク・・・シヨウが・・・うっ」

おれはこえをころしなならないた

side 三人称

此処はスバルの病室

スバルは、ベッドに座っていた

だが、まるで人形のようなくらい動かない

目は完全に光が消え、食事も摂らず、睡眠もしていない

だが、スバルは辛いと思わなかった

何故なら、精神が完全に崩壊したからだ

スバル「……」

すると突然、スバルの右目から涙が流れた

スバルは、涙を気にすることなくずっと動かなかった

side 暁

俺は今、ある病室の人物を見ている

その人物は、ベッドから少し浮いた状態になっている少年だ

暁「奇跡……か。お前は信じるか、奇跡を？」

俺は少年に聞いた

だが、返事はなかった

暁「聞いたって無駄だよな。なあ、お前ならこんな状況になったらどうしてた？」

俺は少年に聞く

だが、少年は何も答えなかった

暁「諒・・・もし、奇跡が存在するなら生き返ってくれ。俺達は、お前が居ないと何も出来ないんだ。・・・お前と話せて少しは気分が晴れたよ。・・・じゃあな」

俺はそう言って部屋から出た

そして、ドアの前に座った

暁「りょう・・・クソッ・・・クソッ！」

おれはてでめをおさえながらないた

side 神威

神威「何だよ、これは・・・」

俺は目の前に映る光景を見て驚愕しそう呟いた

神威「街が・・・廃墟と化してやがる。これが、諒さん達が戦った戦闘の場所で諒さんが死んだ場所」

俺は、女神様に事情を聞いたので予想をしていたが予想を遙かに超

えていた

崩壊したビル、幾つもの大きなクレーター、辺り一面の瓦礫と砂

神威「諒さん、必ず貴方を生き返させてみせます。必ず。」

俺は心に誓って、女神様が教えてくれた場所に向かった
その場所は

神威「WAXA日本支部・・・」

諒さん達が今も尚苦しんでいる場所、WAXA日本支部に向かった

第97話 希望の死がもたらした状況（後書き）

今日は七夕なので、もう一話更新しますね！！

今回は特別編です

かなり時間は飛びますがね

それではまた後で！！

特別編 七夕の夜に・・・(前書き)

今回は七夕記念です

今回の話は『ペガサス・レオ・ドラゴン編』の後の話です

シリアスばかりな話を書いていたので、スラスラっと書けました
楽しんでもらえたら嬉しいです

特別編 七夕の夜に・・・

side 諒

七月七日・・・

世間一般ではこの日は『七夕』となってる
短冊に願いを書く日、彦星と織姫が一年に一回だけ会える日など様
々な話がある日

俺達は展望台で竹に願い事を書いて、天の川を見ている

勿論、竹は俺が一本貰ってきた

今居るメンバーは、俺・なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミ
ソラ・スバル・ギンガ・ツカサ・ヒカル・白金・ゴン太・キザマロ
と言う何時ものメンバーだ

皆願い事を書いた紙を竹に括り付けていた

諒「ツカサ、お前は何て書いたんだ？」

俺は近くに居たツカサに聞いた

ツカサ「僕かい？僕は、『これからもずっと皆と仲良く過ごせます
ように』って書いたよ。」

ツカサは頬笑みながら言ってきた

やっぱツカサは、優しいよな

諒「ヒカルは何て書いたんだ？」

俺は竹に願い事を括り付けていたヒカルに聞いた

ヒカル「俺か？俺は、『諒に勝てますように！！』って書いたぜ！

！絶対に勝つてやるからな！！」

ヒカルは俺を見ながらそう言ってきた
ヒカルらしいと思ったらヒカルらしいがな

諒「白金にゴン太、キザマロ、お前等は何て書いたんだ？」

俺は三人組に聞いた

委員長「私？私は、『生徒会長になれますように！！』って書いた
わよ！」

ゴン太「俺は、『美味しい牛丼を腹一杯食べますように！！』って書
いたぜ！！」

キザマロ「ゴン太君、その願いは簡単に叶いそうですよ！！僕は、
『身長が140cmになれますように！！』と書きました。後少し
なんですよね……」

三人組はそう言った

白金は、物語通りならなれたよな

でも、確か当選できた理由って学校中の困ってる人を助けたからだ
ったような……

働かされるな、絶対に……報酬を貰わないとな

ゴン太は、いかにもゴン太らしいな

はつきり言っつて、俺がご馳走した時に牛丼を腹一杯食ってたから願
いは叶ってると思うが気にしちゃダメなんだろう

キザマロの願いは……頑張れ！！

諦めなければ何時かきつと叶うぞ！！……多分

諒「それじゃあその熱々のカップルは何て書いたんだ？」

俺は、スバルとギンガに聞いた

まあ聞かなくても分かるんだがな・・・

スバル・ギンガ「僕（私）は、『ギンガちゃん（スバル君）と結婚
出来ますように！』だよ・・・えっ！？／／／／／／／

甘いな

誰かコーヒーを俺にください！！

出来ればブラックを！！

諒「それじゃあ・・・聞かなくていいか。」

なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラ「何でやねん！！」

皆が声を合わせて突っ込んできた

何故に関西弁の突っ込み？

はやてなら分かるが、皆がやると凄い迫力だな・・・

諒「だつてお前等の願い事なんて簡単に分かるんだぜ。何故に聞かないといけないんだ？」

なのは「いいじゃん、聞いてくれたって！！」

フェイト「そうだよ！！それに、諒が予想してるのとは違うかもし
れないよ？」

はやて「諒君、ウチ等にもちゃんと聞いてえな。ウチ等、結構凹む
ねんで。」

ティアナ「はやてちゃんの言う通り聞いてよ、お兄ちゃん! ! ! . . .
何なら布団の中で . . . ウハハハハ」

ミソラ「ティアナちゃん、涎が出てるよ。」

ティアナ「おとと。」

ティアナはほつとくか、聞いたら不味そうだしな

諒「じゃあ皆は何て書いたんだ? 」

俺が聞くと皆は笑顔になって言ってきた

なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラ「『諒くん(諒)
諒君)と結婚できますように! ! !』だよ(や) ! ! !」

やっぱり . . .

ツカサ「ねえ諒君、諒君は何て書いたの? 」

ツカサは俺に聞いてきた

皆も俺の書いた願い事に興味津々だった

俺は少し笑った

諒「教えねえよ! ! !」

俺は皆に言った

全員「え、ええええええええええええええええ! ! ! ! ?」

俺が一番高い所に願い事を括り付けた

スバル「ひ、酷いよ、諒君!！」

ギンガ「わ、私達はちゃんと言ったんだよ!！」

ツカサ「ハハハ、諒君は諒君だね!！」

ヒカル「おい諒!！教えやがれ!！」

なのは「諒くんらしいね。にやはは」

フェイト「やっぱり諒はこうでないかね!フッフ」

はやて「やっぱり諒くんは面白いなあ。ハハハ」

ティアナ「お兄ちゃんの願い・・・ま、まさか!？で、でもそうだったら・・・うへへへ」

ミソラ「ティアナちゃん・・・」

白金「まあ教えてくれなくても良いわ!！今度、しっかり働いてもらうから!！」

ゴン太「俺も教えてくれなくても良いぜ!だが、今度俺に牛丼を奢ってくれよ!！」

キザマロ「だったら僕は、身長を伸ばす方法を教えてくださいね!！」

十人十色

まさにその言葉がぴったりな状況だ
本当に皆、言ってる言葉が違うよな
・・・あっ!?

諒「流れ星だ!!」

全員「えっ!?!何処何処!?!」

諒「スゲエ・・・」

空に大量の流れ星が流れた

俺達はその景色を見て俺達は感動していた

その時、少し風が吹いた

そうすると、俺の願い事が書かれた短冊が揺れた

その短冊に書かれている願いは

『これからも皆の笑顔を護れますように』

俺は視線を皆に移し一度皆の顔を見て、流れ星に視線を戻した

諒「俺の願い・・・聞いてくれよな。」

俺は星空に小さく呟いた

特別編 七夕の夜に……（後書き）

松上「俺の願い事は、『バイトが見つかりますように!!留年しませんように!!』だ!お久しぶりです、松上です。」

すずか「私の願い事は、『松上君と結婚できますように!!』だよ!!皆さんお久しぶりです、後書き限定キャラのすずかです。」

アフロディ「僕の願い事は、『皆の願いが叶いますように。部下がミスしませんように』だよ。どうも、アフロディです。」

松上「しかし七夕記念は書いて良かった。最近シリアスな話ばかりで少し息抜きがしたかったんだよ。」

すずか「でも、もう少しで終わるよね。『ペガサス・レオ・ドラゴン編』」

アフロディ「でも、よく長期コラボしようと思ったよね。」

松上「コラボしませんか?って言われてよ。今までのコラボだってちゃんと本編に繋がってただろ?やるなら面白くコラボしないとよ!」

すずか「今回は神威君と優奈ちゃんだけ?」

松上「否、翔が来てくれるって。」

アフロディ「それだけ?」

松上「そんなわけないだろ。俺が執筆している他の小説の主人公達にも来てもらうよ。」

アフロディ「どうやって?」

松上「・・・(ジー)」

すずか「・・・(ジー)」

アフロディ「ほ、僕がやるの!?!」

松上「嗚呼。前に太一達、選ばれし子供達を全員連れてきただろ? だから、やってくれよ。」

アフロディ「そ、そんなあ・・・」

松上「頑張れよ・・・それじゃあ今回は此処まで!!それじゃあすずか、久しぶりに頼むぜ!!」

すずか「はい!!」

次回 奇跡を呼ぶチートの弟子

松上「それじゃあ!!」

すずか「次回も!!」

3人「お楽しみに!!」

第98話 奇跡を呼ぶチートの弟子（前書き）

ね、眠い・・・

寝不足なので少し無理矢理な所があります

今更ですが、時空の旅人先生とコラボしてます

しかも長期コラボです

第98話 奇跡を呼ぶチートの弟子

side 諒

此処は何処だ・・・

俺は何をしてるんだ・・・

スコピオンはどうなったんだ？

地球はどうなったんだ？

スバルは救えたのか？

だが、一つ分かることがある……

それは……

俺は……

独りだ……

「否、お前は独りなんかじゃないぜ。」

誰だ・・・

「貴方に会うのは久しぶりね。・・・アフロディに感謝しないとね。」

アンタ等は、誰なんだ・・・

side 神威

神威「此处がWAXA日本支部・・・此处に諒さんが居るんだな。」

俺はセットアップし、空を飛んでWAXAの日本支部に来た
場所は女神様に事前に教えてもらっていたので迷わず着いた

ウーウンウーウン（ry

突然警報が鳴った

俺は直ぐに警戒した

「チツ、一週間後じゃないのか!！」

WAXAの扉から、沢山の兵隊を引きつけてきた一人の若い青年が

そう言った

「おい、お前は誰だ！？どうやって此処に来た！？答える！！」

若い大人が殺気を放ちながら聞いてきた

神威「俺の名前は神威です。どうやって来たのかと言つと、セツトアップして来ました。」

俺がそう言つと、皆は首を傾げた

そう言えば、この世界は魔法が存在しないんだつたよな・・・でもどうやって信じてもらおうか？

女神様が言っていた話だと、諒さん以外にも沢山の人が被害にあつたんだよな

早く皆を助けないといけないけど、簡単には信じてもらえないし・・・
・
どうするか・・・

「神威、だつたな。神威、何故此処に来た？」

若い青年が俺に聞いてきた

素直に言つた方が良さそうだな・・・

神威「俺は諒さんと同じ転生者です。」

『！！！？』

俺が言つと全員が驚愕した顔になった

神威「俺は、転生させてくれた女神様にある事を頼まれてこの世界

に来ました。」

「……この世界？ある事？どう言う意味だ？」

若い大人が聞いてきた

神威「諒さん……新井 諒さんを生き返させる事です。」

「し、信じられる分けないだろ！！」

普通はそうだよな……

どうやって信じてもらおうか……

1・頑張つて説得して信じてもらおう

2・戦つて信じてもらおう

3・女神様に頼んで事情を説明して信じてもらおう

誰だ、2の選択肢を出した奴は？

そんな事したら、余計に信じてもらえないだろうが！！

だけど、1は無理だ

女神様の情報だと諒さんを生き返させるためのリミットは多くて三日
もし敵が、生き返させている途中に此処を襲ってきたら俺までやら

れてしまう
やっぱ3だな

神威（女神様、聞こえますか？）

女神『どうしたの？も、もしかして、諒君を生き返させるのに失敗しちゃったの！？』

女神様は勝手に焦っていた

神威（違いますよ。今の俺の状況、分かりますか？俺が何をしたいか分かりますか？）

女神『・・・分かったわ、今直ぐその人達を説得するわ。』

そう言って会話が切れた

どうやって説得させる気だろうか・・・

「！！？わ、分かった！！神威、お前を信じる！！だから、今直ぐに諒を生き返させてくれ！！！」

そう言って、若い大人が俺の手を掴んで走りだした

何を言ったんだ、女神様は？

sideなのは

なのは「うっ、うわああああああああん！！！！！！！」

フェイト「な、なのは!?!」

わたしがいないと、ふえいとちゃんがいきなりわたしのへやには
いつてきた

しかも、ふえいとちゃんはうれしそうだった

なのは「エッグ・・・グスツ・・・どうしたの、ふえいとちゃん?」

わたしはなきながらきいた

フェイト「あ、あのね!?! 諒が!?! 諒が!?!」

りょうくんが、なんなの?

いまは、りょうくんのことをおもいだすとつらいの
だから、やめてほしい

フェイト「諒がね!?! 生き返るかもしれないの!?! だから、な
はも来て!?!」

なのは「えっ!?!」

りょうくんが、いきかえる!?!?

う、うそじゃないんだね!?!?

りょうくんにまたあえる!?!

ないてなんかいられない!?!

なのは「急いで行こう、フェイトちゃん!?!」

フェイト「うん!?!」

私達は、
諒くんの病室に向かった

第98話 奇跡を呼ぶチートの弟子（後書き）

ね、眠い・・・

は、早く寝てネタを考えますので今回は次回予告だけ

次回 世界の希望の光の奇跡

お楽しみに

それでは・・・Z～ZZ

第99話 世界の希望の光の奇跡(前書き)

頑張ってます

そろそろ皆さんに教えてもらった名言を使い始めると思います

今回も名言コーナーはお休みです

第99話 世界の希望の光の奇跡

sideスバル

僕は許されない事をしてしまった

僕は敵の口車に乗ってしまい親友を見殺しにしてしまった

僕は庇ってもらわう資格なんてなかった

どうして僕は生きているんだ

どうして彼じゃなくて僕が生きているんだ

どうして僕じゃなくて彼が死んでしまった

もう、考えるのは止めよう……

僕はもう・・・何も出来ないんだから

「本当にそう思っているのか、スバル？」

！？ど、どうして、君が、此処に！？

「スバル、お前は本当にこれで良いのか？このまま運命から、スコ
ーピオンから、自分から逃げるのか？」

ぼ、僕には逃げるしか選択肢はないんだ！！

僕はスコーピオンに利用されて君を殺したんだよ！！

怖いんだ！！

独りになるのが！！

一度知ってしまった人と触れ合う暖かさを失うのが！！

なのはちゃん達に友達を止められるのが！！

君が僕を捨てるのが！！

怖いんだ！！

「・・・安心しろ、スバル。俺達は誰一人お前を独りにしない。間違いは誰にだつてある。その間違いから逃げるか立ち向かうかはその人次第。だが、お前は立ち向かえる！！何故なら、お前は独りじゃないからだ！！お前には俺・なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラ・ツカサ・ヒカル・暁・長官・ヨイリー博士・ウォーロツク・ヒカリ・ヤミ・フォルテ・スーツエーモン・チンロンモン・シエンウーモン・バイフーモン・ゴン太・キザマロ・白金・天地さん・宇田海さん・大吾さん・アカネさん・先生。お前は独りなんかじゃない。だから、立ち向かえるだろ？」

で、でも・・・

「スバル、お前はギンガを助けたくないのか？」

えっ!？

「ギンガは、スコープオンに体を乗っ取られてしたくない事をするんだぞ！お前は、ギンガを助ける力があるんだ！！」

ギンガちゃん・・・

「後悔する暇があるなら、一人でも多くの人を助けてくれよ!!親友!!」

!?!?!?..そうだね、後悔してる暇なんてないんだよね

ありがとう、僕を親友と言ってくれて..

諒君!!

諒「頑張ってくれよ、スバル!!俺は信じてるぞ!!頑張れよ!!」

ありがとう!!

...行ってくるよ

諒「行ってこい!!そして、自分の運命を乗り越えてこい!!」

スバル「・・・此処は・・・WAXAの医務室だね。」

諒君、見ててね!!

必ずギンガちゃんを救ってみせる!!

君の意志は、僕が受け継ぐ!!

僕は会議室に向かった

s i d e ミソラ

諒くん・・・

私は諒くんのお陰で変わったの

諒くんのお陰で孤独から救われたの

諒くんは私に優しくしてくれた

嬉しかった

凄く嬉しかった

私がマネージャーに復讐しようとした時、私を止めてくれた

優しく抱き締めてきた

好きになっちゃった

格好良かった

諒くんというだけで幸せになれた

だけど、諒くんは死んでしまった

もう幸せを失いたくない

諒くん・・・私も諒くんの所に行きたいよ

「何言ってるんだよ、お前は皆に希望を与える歌手になるんだろ？」

そ、その声は！？

で、でもね、私はもう孤独になるのは嫌なの！！

私は、諒くんが居たから今まで頑張れたの！！

私は・・・私は・・・諒くんの事が好きなの！！

初めて好きになれたのに、諒くんは死んでしまった・・・

もう・・・大切な人を失いたくないの！！

だから私は、死んで諒くんと幸せになりたいの！！

諒「ふざけるな！！ミソラが死んで悲しむ奴の事を考えて言ってるのか！？ミソラの事を待ってる人がいるんだぞ！！辛い事が有ったからって死ぬなんて言うな！！ミソラ、お前の気持ちは知っていた！！だからこそ言う！！・・・生きる！！」

えっ！？

諒「お前には辛い事を乗り越える力がある！！それを乗り越える！
！そうすれば、必ず幸せになれる！！」

で、でも、私は諒くんが居ないと・・・

諒「安心しろ、ミソラ。俺は何時でもお前の傍に居てやる。嬉しい
時も、悲しい時も、一緒に居てやる。絆は決して切れない物なんだ。
過ごした時間なんか絆を大きくするんじゃない。相手を想えば想
う程絆は大きくなる。だからミソラ・・・生きる。」

りょうくん・・・うっ、うっう

諒「泣くな・・・幸せになれよ、ミソラ」

だいすき・・・いまも、そしてこれからもずっと・・・

諒「俺もだ。なのは・フェイト・はやて・ティアナ、そしてミソラ。

俺はお前達が好きだ。・・・頑張れよ、ミソラ」

ミソラ「・・・こゝ、此処は」

諒くん「・・・」

ミソラ「これからも一緒に居てね、諒くん。私、辛い事を乗り越えてみせる。」

ありがとうね・・・りょうくん
私は会議室に向かった

side 諒

「これで良かったのか？」

一人の男が聞いてくる

諒「嗚呼。今の俺があいつらに出来る事だ。なのは達は自力で立ち直った。神威って奴が来たお陰でな。」

「でも、本当にする気なの？止めた方が良いわ。これは貴方が堪え切れるレベルの特訓じゃないわ。」

一人の女が言ってきた

諒「今の俺に、あいつらを護る力はない。これから先、大きな敵と戦わなければならないんだ。だから俺は、強くないといけないんだ!!」

俺は二人の男女を真剣な目で見て言った

「・・・ふう、負けだよ。その決めたところは絶対に曲げない。誰に似たんだか・・・」

「貴方に似たのよ。」

二人はお互い見ながら言った

諒「早く始めてくれ。時間が無いんだ、親父(、)、(・御袋(、)、(」

俺は二人の男女、本当の父親と母親に言った

親父「分かった・・・必ず無事に帰ってこい。俺が言えるのはこれだけだ。」

分かってるぜ、親父

御袋「貴方はあの子達を待たせるのよ。早く帰ってきなさい! 時間にルーズな男は嫌われるわよ」

ハハハ、気を付けるよ、御袋

諒「それじゃあ・・・行ってくる!!!」

俺は向かった

地獄へ・・・

諒「キズナユニゾン（、、、、、、）・・・必ずマスターしてみせる!!!」

グギヤアアアアアアアアアアアッ!!!!!!

諒「行くぞ、地獄に堕ちし闇共!!!!千鳥ッ!!!!」

俺は闇との戦いが始まった

第99話 世界の希望の光の奇跡（後書き）

最近眠気に勝てない・・・

ヤバいな

今回も次回予告だけ

次回 修業×修業！×修業！！

次回もお楽しみに！！

第100話 修業×修業！×修業！！（前書き）

諒は生き返るのか!？

今回名言を教えてくださいましたのはA Iさんです!!

ガンダム00で

『どおーよ、一方的な暴力になす術も無く命をすり減らしていく気分は?』

『立場で人を殺すのかよお?引き金くらい感情で引け!己のエゴで引け!無慈悲なまでに!!』

B yハレルヤ

『へん、ようやくくの気になりやがったか。ならあの女に見せて付けるぜ?本物の超兵つてやつをな!!』

B yアレルヤ& a m p ;ハレルヤ

『戦うさ!僕たちの行動に未来がかかってる!!』

『自ら引き金を引こうとせず、罪の意識すら持とうとしない奴に・
・僕は・・・、ガンダムマイスターは・・・!負ける訳にはいかな
いんだ!!』

B yアレルヤ

ありがとうございました!!

第100話 修業×修業！×修業！！

side 神威

俺は今、WAXAの会議室にいる

理由は、諒さんを生き返させるためだ

その為、WAXAの職員の人達が沢山此処に居る

暁「悪いな、さっきは疑っちゃってよ。」

神威「いえ、誰でも最初は疑いますから。」

この人は暁 シドウさん

このWAXAの若きエースらしい

さっき自己紹介をお互いしあつた

それにしても・・・

神威「暁さん、何でまだ諒さんを生き返させちゃダメですか？」

俺が此処に来て既に10分は経過している

なのに、未だに生き返させてくれない

暁「諒の親友達を待つてるんだよ。親友が生き返るのに、部屋で落ち込んでちゃダメだろ？」

神威「成る程・・・」

暁さんって優しいんだな

「お、遅くなりました！！」

「てい、ティアナが中々出てくれなくて!！」

「ま、まだ始まってないよな!？」

「ほ、本当にごめんなさい!！」

扉から4人の声が聞こえた

俺は4人に視線を移した

神威「なのは？それに、フェイト？」

4人の内2人は俺が知っている人物だった

何でこの世界に？

女神（此処は平行世界よ。同じ人間が存在したっておかしくないわよ!）

女神様が教えてくれた

神威「これで全員ですか？」

暁「嗚呼、こゝ失礼します。〴〵・・・な!？」

暁さんの言葉を遮って2人の声が聞こえた

俺達は扉から聞こえてきた2人の声の主を見た

暁さん、否、この場に居る俺以外の皆が2人を見て驚いていた

「すみません、皆に迷惑を掛けました。」

茶髪のツンツンヘアの少年が頭を下げ皆に謝った

「でも、逃げてばかりじゃいけないって教えられました。」

ピンクの髪の少女が皆に言った

「勝手かもしれないけれど、僕も皆と戦います!!」

少年が真剣な目で皆に言った

「これ以上、皆を恐がらせないために!!」

少女が真剣な目で皆に言った

暁「お、お前等、心の方は・・・」

暁さんが二人を心配しながら聞いた

「大丈夫です!!」

二人は同時に暁さんに言った

多分、これで全員だろう

神威「それでは、今から諒さんを生き返させます!!」

俺はそう言ってロザリオを掛けた

さっきの少年と少女は暁さんに説明してもらった

俺は精神を落ち着かせた

そうすると、俺の隣に一人の少女が現れた

髪と瞳の色が蒼で、美少女に位置する少女だ

神威「優奈、諒さんを頼むな!!」

俺は少女、優奈にそう言った

優奈「任せてよ!!・・・ザオリク!!」

優奈は死者を生き返させる技、ザオリクを諒さんに使った
そうすると、諒さんの体が眩しく光った

そして、光が収まると俺達は諒さんの周りに集まった

俺は心臓に手を当てた

ドクン ドクン ドクン

心臓はちゃんと動いていた

神威「ふう・・・成功です!!」

俺がそう言うのと皆は大声を出して喜んだ

涙を流して喜んでる人、抱き締め合って喜んでる人、握手をして喜
んでる人

俺はその光景を見て頬笑んでた

優奈「おかしいよ」

優奈が突然そんな事を言った

優奈のそんな言葉を聞き、皆が静かになった

神威「どう言う意味だ、優奈？」

俺は優奈に聞いた

優奈「うん。生き返させるのは成功したんだけど、何て言うのかな、魂が無いって言った方が良いのかな。諒さんの体には、魂が無いの。」

・

・

・

・

『は？』

俺達は声を合わせて間抜けな声を出した
意味が分からない

優奈「上手く説明できないんだけど、諒さんはちゃんと生きてるの。でも、諒さんの魂は此処に居ないの。此処にある諒さんの体は、中身の無いただの入れ物なの。」

それじゃあ魂は一体・・・

暁「優奈・・・だったな。諒は生き返ったんだな？」

暁さんは優奈に聞いた

優奈「はい。諒さんは生き返りました。魂が体に戻れば目が覚めると思っています。」

優奈は暁さんに丁寧に言った

暁「そうか・・・皆聞いてくれ!!!」

暁さんは大きな声で皆に言った

皆は暁さんに視線を移した

暁「諒は生き返った!!!だが、諒はスコーピオンの攻撃で魂が無くなっている!!!」

暁さんがそう言うと皆が騒めき始めた

暁「静かにしろ!!!」

暁さんがそう叫ぶと皆は喋るのを止めた
スゲエ・・・

暁「諒はきつと魂になっても何処かで強くなろうとしているはずだ!!!あいつはそう言う奴だ!!!だが、俺達も強くならなければならぬ!!!何時も諒にはかり頼っていてはダメだ!!!あいつが帰ってくるまで、俺達が地球を護るんだ!!!命令する!!!今から修業し、FM星人を迎え撃てるようにしろ!!!そして、諒に『お帰り』と安心して言えるようにするんだ!!!分かったか!!!?」

『おおー!!!』

暁さんの言葉で皆の心が一つになった
そして、WAXAの職員の人達は会議室を出ていった

暁「神威、優奈、お前達も俺達に力を貸してくれないか？」

暁さんは俺達に聞いてきた

そんなもん、答えは決まってる！！

神威・優奈「はい！！俺達（私達）も力を貸します！！！」

暁「ありがとな、二人とも。それじゃあ早速俺達も修業に入ろう。
諒を安心させるためにな。」

俺達も修業に入った

言い忘れてたが、皆とも自己紹介をして友達になった

その中でも、スバルさんは他の皆と違って体の中に大きな力が眠っているような気がした

side 諒

諒「ハア・・・ハア・・・くっ!？」

俺は片膝をついた

流石は地獄

倒しても倒してもうじゃうじゃと出てきやがる

諒「だが・・・俺は負ける訳にはいかないんだあ！！！」

俺は天鎖斬月を口寄せで出して走りだした

諒「はあああああああああああ!!!!!!」

地獄の闇との戦いが再び始まった

sideアフロディ

諒も皆を護るために地獄で修業している
スバル君達も諒を護るために戦っている
皆、護るために戦っている

アフロディ「僕も力を使わないとね。早速、最高神様の所へ行かないと!!!」

僕は最高神様の所へ向かった
諒、僕が出来る唯一の事をするよ!!!

第100話 修業×修業！×修業！！（後書き）

今回も次回予告だけ！！

次回 始まる戦い

次回もお楽しみに！！

第101話 始まる戦い(前書き)

戦う前の話です

スバル達の覚悟・・・

それは何なのか・・・

本編へ急げ！！

今回は名言コーナーはお休みです

誤字・脱字があれば教えてください

第101話 始まる戦い

side 神威

俺達は今、誰も居ない街（、、、）にいる

修業を始めて4日が経った

今日が地球の運命を決める日だ

結局、諒さんは一度も目を覚まさなかった

だけど、その事を皆は落ち込んではいない

むしろ喜んでいた

諒さんのお陰で地球は救われていた

地球は諒さんが居ないと何も出来ないと思われてしまう

だからこそ、この戦いは諒さん抜きで戦って勝たないといけない

俺と優奈は既にセットアップしている

なのはさん・フェイトさん・はやてさん・ティアナさん・ミソラさ

んは電波変換をしている

暁さんと長官はデジヒュージョンしている

その他のWAXAの局員の人達も武器を構えて敵が来るのを待っていた

神威「・・・来るぞ。」

俺がそう言つと皆は警戒した

そして、空から大量のジャミンガーが現れた

暁「必ずスコープピオンは来ている！！油断するなよ！！！！」

暁さんが、皆にそう叫んだ

その時だった

『俺の名前を呼んだか？』

空から幾つもの声が聞こえた
だが、どの声も同じ声をしていた

俺達は空を見た
そして驚愕した

そこには、暗黒の姿と言っても過言ではない姿をしている化け物が
沢山居たからだ

スバル「何で此処にデジモンが・・・」

スバルさんが暗黒の姿をした化け物の事を“デジモン”と言った
デジモン・・・一真さんの所にいたような生物達と同じか？
だけど、一真さんの所にいたデジモンが可愛く見える

「俺達はダークロイヤルナイツ。スコピオンのコピー体だ。俺達
はデジモンの力を手に入れた。」

「だが、デジモンの力は余りにも強大だった。」

「だから、FM星人の残留データを生け贄に差出し俺達はデジモン
の力を手に入れた。」

「この力は最強だ！体の中から最強の力が溢れてくる！！」

「この力を使えば、地球を侵略どころか太陽系から消す事も可能だ
！！」

「手始めにお前達を倒してやるぞ。」

「だが、今のお前達は俺達に怖気付く事なく立ち向かってくるだろう。」

「だから、お前達に俺達の力を見せてやるよ!!」

そう言うと一体が指を鳴らした

ドッカーーン!!!!

暁さんの隣のビルが一瞬にして消えた

全員『だから?』

俺達は声を合わせてスコープオン達に言った

なのは「貴方達が強い事くらい分かった。」

フェイト「今更その強さを見せられても私達は怖気付かないよ。」

はやて「ウチ等を怖気付かせようとしたみたいやったけど、はつきり言って無駄や!!」

ティアナ「私達が貴方に勝てるかどうか分からない。だけど!!」

スバル「僕達は勝つ事を諦めない!!何故なら!!」

ミソラ「諦めない気持ちは諒くんが何時も持っていたから!!」

暁「それを俺達が!!」

皆がそこで一呼吸置いた
そして、スコープオン達に言った

全員『受け継いだから!!!!』

皆がそう叫ぶと、スコープオン達が切れた

『ならば、貴様等に絶望を見せてやる!!!!』

そう言っつて俺達に突っ込んできた

暁「・・・行くぞ!!」

暁さんの掛け声で俺達もスコープオンに突っ込んだ
地球を護る戦いが始まった

第101話 始まる戦い（後書き）

今回は久々にアニメ風の予告です

スバル「どうしてお前達に勝てないんだあ……!!」

「ロイヤル……セイバー……!!」

神威「うわああああああああああああ……!!……!!……!!」

優奈「きゃああああああああああああ……!!……!!……!!」

「もう良いや、死んじゃえ……!!」

「俺も一応騎士だ。全力でお前を倒そう。」

諒「昔も……今から……未来でも……お前達の希望の光になつてやる……!!」

次回 圧倒的実力の差

次回もお楽しみに……!!

第102話 圧倒的な実力の差（前書き）

すみません、スランプになりました

無理矢理がさらに無理矢理に・・・

本当にすみません

今回は名言コーナーはお休みです

第102話 圧倒的な実力の差

sideスバル

僕と暁さん・長官はバーストモードをしているのに、なのはちゃん・フェイトちゃん・はやてちゃん・ティアナちゃんはデジヒュージョンしているのに、ミソラちゃん・神威君・優奈ちゃんは力をフルに使っているのに

勝てない

「油断していいのか!？」

僕と同じ姿をした黒のオメガモンが僕に斬り掛かってきた
僕は直ぐにグレイソードでそれを防いだ

スバル「くっ・・・」

徐々に僕の方へ剣が近付いてきた

「バカな奴だ。あのまま精神を崩壊させておけば良いものを・・・無駄死にをしたクスに何か言われたのか？」

ブチッ!!

僕の中にある何か切れた

スバル「ダメレエエエエエエ!!!!!!!!!!!!」

僕は力で相手の剣を押し返し斬った

「グッ・・・」

黒いオメガモンは、僕に斬られた場所を押さえながら直ぐに後ろへジャンプした

スバル「お前に諒君の何が分かるんだ！！？何も知らないくせに、口からデタラメを言うな！！！」

僕はそう叫び、グレイソードを構え黒いオメガモンに突っ込んだ

side 神威

リミッターを解除しているのに、龍人強化をしているのに、相手にダメージを与えられねえ！！

相手は黒い鎧を纏い槍と楯を持った騎士のようなデジモン、デュークモンだった

「フン、この程度か・・・期待外れにも程がある。」

何だと！！

神威「そのへらず口を今直ぐ消してやる！！月牙・・・天衝！！！」

俺は漆黒の刀、天鎖斬月から必殺技の月牙天衝を放った

月牙天衝は黒いデュークモンに向かって徐々にスピードを上げていった

「俺を舐めるのもいい加減にしる。」

そう言って、持っていた黒の楯で月牙天衝を防ぎやがった

神威「な!?!」

俺は驚いた

俺の全力の月牙天衝を意図も簡単に防いだからだ

「今度は俺の番だ。」

そう言うと、黒の槍に黒の光を集めだした

あ、あの技は!?!

優奈「任せて!?!私が防いでみせる!?!」

優奈は俺の前へ来て、シールドを張った

ダメだ!?!

あの攻撃を俺は知っている!?!

だけど、俺が知っている攻撃をあれは凌駕する!?!

「ロイヤル……」

ま、間に合わない!?!?

「セイバー!?!」

俺達にドス黒い極太の光線が放たれた

優奈は余裕そうにシールドに力を込める
だが

砕けた

シールドは

簡単に

「本当にこれが全力か？」

黒いマグナモンと黒いデュナスモンは余裕な顔をして俺達に言ってきた

俺達にはもう、体力も時間の残されてない

次の一撃に賭けるしか・・・

「もう良いや。死んじゃえ!!」

「お前達にはもう用はない!!」

そう言っただけは必殺技を放とうとした

俺と長官も残された力を使い必殺技を放とうとした

そして

「エクストリーム・ジハード!!」

「ブレス・オブ・ワイバーン!!」

二体の必殺技が、俺と長官の必殺技を放つ前に俺達に放たれた俺達は、必殺技を貯めるのに必死だったから防御できなかった

暁「ぐわああああああああ!!!!!!!!!!?」

長官「うわああああああああ!!!!!!!!!!?」

おれたちは、にたいのひっさつわざをくらいどろにたたきつけられた

でじひゅーじょんはとけ、からだぜんしんにいたみをかんじるからだのかんかくがもうない

くろいまぐなもんとくろいでゆなすもんが、おれとちようかんのまえにおりてきた

side 三人称

街から離れた荒野に、八体のデジモンが戦っていた

四聖獣の姿をした少女達と黒いロイヤルナイツの姿をした敵

デジモンの力だけを見れば四聖獣の姿をした少女達が有利だ

しかし、戦況はその真逆だ

体中から血を流している四聖獣の姿をした少女達

全く傷が付いていない黒いロイヤルナイツの姿した敵

なのは「ハア・・・ハア・・・ま、負けない。」

紅を基調とした四聖獣の朱雀の姿をした少女、高町　なのはが息を切らしながらそう言った

フェイト「ハア・・・ハア・・・私達は決めたんだ。」

青を基調とした四聖獣の青竜の姿をした少女、フェイト・新井がなのは同様息を切らしながら言った

はやて「ハア・・・ハア・・・ウチ等が諒くんを護るって決めたんや。」

翠を基調とした四聖獣の玄武の姿をした少女、八神　はやてがフェイトの言葉に続けて言った

ティアナ「ハア・・・ハア・・・だから、此処で諦めるわけにはいかないの。」

白を基調とした四聖獣の白虎の姿をした少女、新井　ティアナが黒い姿をしたロイヤルナイツに言った

だが、黒いエグザモン・黒いスレイプモン・黒いアルフォースブイドラモン・黒いクレニアムモンはその言葉を聞いて四人を嘲笑った

「フン、精々頑張るんだな。」

「だが、この一撃で貴様等は負ける。」

「逃げても構わない。だが!！」

「貴様等が避けたら地球は吹っ飛ぶと思え!!！」

黒いエグザモン・黒いスレイプモン・黒いアルフォースブイドラモン・黒いクレニアムモンはそう言って必殺技を放とうとした

なのは達は、残された力を使い対抗するために必殺技を溜め始めた

そして

「アヴァロンスゲート!!!!！」

「ビフロスト!!!!！」

「シャイニングVフォース!!!!！」

「エンド・ワルツ……！」

四体の黒いロイヤルナイツはなのは達に必殺技を放った

なのは「紅炎……！」

フェイト「蒼雷……！」

はやて「霧幻……！」

ティアナ「金剛……！」

四人の少女は、体力の全てを必殺技に注ぎ放った

だが

四人の必殺技は

意図も簡単に

打ち消された

なのは・フェイト・はやて・ティアナ「きゃああああああああああ
ああああ!!!!!!」?

なのは達は悲鳴をあげ、なのはとフェイトは地面に落とされ、はやてとティアナは地面に叩きつけられた
デジヒュージョンも解け、体から所々血が出ていた
なのは達の見ている景色は霞んでいた
そして、なのは達の前に黒いロイヤルナイツ全員が降りてきた

sideミソラ

私はなのはちゃんのスターライト、フェイトちゃんのプラズマザンバー、はやてちゃんのラグラク、ティアナちゃんのシャイニングブレイカーを黒いロードナイトモンに放ってる
私は全力で黒いロードナイトモンと戦っている
なのに、相手は傷一つ付いていない
私は体中ボロボロだ
もう、右腕の感覚が無い
でも、諦めない！！
諒くん、私に力を貸して！！！！

「お前と遊ぶのも疲れた・・・これで止めを刺してやるよ！！！！」
黒いロードナイトモンは、必殺技を溜め始めた
私は、最後の力を振り絞って左手に力を溜めた
そして

「アージェントファイアー！！！！」

黒いロードナイトモンは、私に向かって必殺技を放ってきた

私も、左手を黒いロードナイトモンに向けて必殺技を放った

「ポジトロンレーザー……！」

私は、これで勝てると思った

だけど

私の放ったポジトロンレーザーは

なのに・・・

なのに!!!

スバル「どうして僕はお前に勝てないんだあ!!!」

僕はグレイソードで、黒いオメガモンに斬り掛かりながら叫んだ
僕は体中悲鳴をあげている

少しでも体を動かすと激痛が走る

なのに、黒いオメガモンには傷が最初に付けた物以外無く、無傷だった

「フン、少しは強くなったと思ったが・・・とんだ勘違いだったよ
うだな。」

黒いオメガモンは、僕を嘲笑うかのように言った
前までの僕だったら諦めていたかもしれない

だけど!!!

スバル「僕は諦めない!!!僕は・・・僕は・・・!お前を倒す!!!」

僕はガルルキャノンを黒いオメガモンに構え、エネルギーを溜めながら叫んだ

「そうか・・・俺も一応騎士だ。全力でお前を殺そう。」

黒いオメガモンはそう言って、僕にガルルキャノンを構えて言った
きた

そして、僕と黒いオメガモンはエネルギーを同時に溜め終わった

スバル「「ガールル……」」

放った

スバル「「キャノン!!!!!!」」

僕は最低でも互角だと思った

だけど

僕の放ったガールルキャノンは一瞬で消え

黒いオメガモンの放ったガールルキャノンが

僕に直撃した

スバル「う、うわあああああああああ！！！！！！？」

ぼくはひめいをあげながらじめんにたたきつけられた

そのせいで、でじひゅーじょんがとけた

からだじゅうにかんかくがない

いしきもきえそうだ

もう……だめなのかな？

けっきよく……ぼくにはりょうくんのかわりはできないのかな？

しぬ……のかな？

くろいおめがもんがぼくのまえにおりてきた

「フツ、最後に教えてやる。お前の仲間全員俺達に負けた。」

みんな……

side三人称

WAXAの局員達は、ジャミンガー達によって壊滅と言っても過言ではない

地球に残された唯一の希望であったスバル達ですら、黒いロイヤルナイトの姿をしたスコープオン達に完敗・手も足も出なかった

スバル達は、自身の最強の技を使った

だが、それ以上にスコープオン達の技は強かった

相殺どころかぶつかる事さえ無かった

一瞬にして消え去り、スバル達に大きなダメージを与えた

そして、スバル達は反撃どころか立つ事さえ出来ない

黒いロイヤルナイトの姿をしたスコープオン達は、スバル達に止め

を刺そうとしていた
誰もが絶望し、諦めていた
だが、スバル達はそんな想いよりも遙かに凌駕する想いが合った
その想いとは

『諒（君）（くん）（さん）・・・』

世界の希望の光、新井 諒の事だ
そして、黒いロイヤルナイツの姿をしたスコピオン達はスバル達
に止めを刺そうとした

『死ねええええ！！！！！！！』

その時だった！！！！

「ダークネスオーバーロード！！！！！！！！！！」

「ジエミニサンダー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

空から二つの攻撃が放たれ、その二つの攻撃は、幾つかに分離し黒いロイヤルナイツの姿したスコープイオン達に向かった

『!!!!!!?』

黒いロイヤルナイツの姿をしたスコープイオン達は、その攻撃に気が付き紙一重で避けた

ドツカーーン!!!!!!

大きな爆発音が至る場所から聞こえた
街に居た者は攻撃が放たれた空を見た
スバル達も、頑張って空を見た

そこに居たのは

「・・・悪いな、皆。少し遅れた!」

「遅れたのに威張っちゃダメだよ、ヒカル。」

「説教すんなよ、ツカサ!!!」

黒と白の同じ姿をした電波人間、双葉 ツカサと双葉 ヒカル
そしつ

「・・・悪いな、帰ってくるのが遅くなった。だが、お前等にはもう傷一つ付けさせねえから安心してくれ!!!」

黒を基調とした体、蝙蝠をモチーフとした姿、茶色の少しボロボロのマント、右手に漆黒の日本刀を持った電波人間

一度親友の為に命を落とした人間

誰もが生き返るのを望んでいた人間

誰もが帰ってくる事を信じていた人間

世界を救った人間

世界の希望の光である人間

この世界のイレギュラーである人間

「昔も・・・今から・・・未来でも・・・お前等の希望の光になつてやる!!!」

新井 諒

此処に復活！……！！

第102話 圧倒的な実力の差（後書き）

スランプなので、今回は次回予告だけ

次回 世界の希望の光、復活！！

次回もお楽しみに！！

第103話 世界の希望の光、復活！！（前書き）

スランプなので、長くありません

本当にすいませんort

今回名言を覚えてくれたのは時空の旅人さんです！！

FAIRYTAILで

『こんな素敵な魔法が、もうすぐ無くなるなんてさ。考えたくもねえじゃん』

Byヒューズ

『だから殺すのか？オレたちの仲間もエクシードも、てめえらの事情で殺すのか』

Byナツ・ドラグニル

『そうだよ。永遠の魔力を手にする為の贄なんだ』
Byヒューズ

『ふざけんな！！！！オレの仲間は今、生きてる！！！！エクシードも生きてる！！！！魔力があるうとなかろうが、大事なものは生きてるって事だろ！！！！命だろーが！！！！』

Byナツ・ドラグニル

ありがとうございました！！

第103話 世界の希望の光、復活！！

side 諒

諒「ふう・・・白眼！！」

俺は白眼を発動させ皆の場所や状況、敵の力量を調べた
なのは達は戦える体じゃない

WAXAの局員の皆も、ほぼ壊滅状態で死人こそ居ないが重体の人
が沢山

それに対し黒いロイヤルナイツの姿をしたスコーピオン達は全然余
裕で体力もMAXに近い

諒「・・・大体分かった。」

俺は白眼を止め、そう呟いた

ツカサ「諒君、僕達は何をすれば良いの？」

ヒカル「お前の指示が無いと俺達も動けねえ。」

ツカサとヒカルが俺に聞いてきた

俺とツカサ・ヒカルが放った攻撃などで皆の動きは止まっている
確か此処から一番遠くに居る奴は・・・神威と優奈だな

諒「ツカサとヒカルは、神威と優奈を此処に連れてきてくれ。あの
二人は俺から少し離れている。だから、二人の体力を回復させる事
が出来ない。・・・頼めるか？」

俺は二人に聞いた

二人は俺の顔を見て、ゆっくり頷いてくれた

ツカサ「任せて！」

ヒカル「それじゃあ行ってくるぜ！！」

二人はそう言っつて神威と優奈が居る場所まで行つた

俺はそれを確認するとある術を発動させた

諒「影分身の術！！」

俺が影分身の術を発動させると、俺の周りに8体の影分身が現れた

諒「皆を此処へ。」

俺がそう言つと、影分身達は一齐に皆の所へ向かつた

俺はそれを確認し、白眼を再び発動させ皆の状況を見始めた

sideツカサ

諒君のお陰で僕とヒカルの怪我が治つた

諒君のお陰で僕とヒカルに戦う力を手に入れた

諒君はこの力の事を“キズナユニゾン”って言っていた
僕達もその力の事は詳しく知らない

だけど、諒君が手に入れた新しい力なんだと思う

ヒカル「おいツカサ！！あれはヤバいんじゃないか！！」

ヒカルの声を聞いて僕は神威君達の所を見た

ツカサ「!?!い、急ごう!?!」

僕とヒカルは、全速力で神威君達の所へ向かった
何故なら

黒いデュークモンが

神威君と優奈ちゃんに

ロイヤルセイバーで

殺そうとしていたからだ

side 神威

くそ・・・

ちからがまったくはいらねえ・・・

かんぜんにゆだんしてた・・・

ここでまけるなんてな・・・

これじゃあ、ししょうにかおむけできないな・・・

なのはたちにだまってこのせかいにきたけど、あいつらいまごろなにしてるかな・・・

りょうさんがきてくれて、すこしはきぼうがみえたけど・・・

くろいでゆーくもんがおれとゆなに、ろいやるせいばーをはなとうとしてやがる・・・

ここからじゃあ、りょうさんが、がんばってもまにあわない・・・
もう・・・

むりだな・・・

おれはめをつむり、ろいやるせいばーがくるのをまった・・・

「サラバ、異世界の人間よ!!」

さ、やっつけてくれ・・・

「ロイヤル・・・セイバー!!!!」

くろいでゆーくもんがそうさけんだしゆんかん、おれはだれかにおんぶされた

ドッカーーーーン!!!!

とおくからおおきなばくはつおんがきこえる

「目を開ける。まだ、戦いは終わっちゃいないんだぜ。」

だれかのこえがきこえた

おれは、がんばってとじたまぶたをあけた
そこにはおれをおんぶしている、たたかいはじまるまえまでびよ
うしつにいたはずのふたば ひかるさん
ゆなをおひめさまだっこしている、ひかるさんどうようたたかうま
えまでびようしつにいたはずのふたば つかささんがいた

優奈「・・・つ・・・かさ・・・さん？」

ゆなが、とぎれとぎれにつかささんのなまえをいった

ツカサ「安心して優奈ちゃん、僕が君を護る。だから、生きる事を
諦めないで。」

つかささんが、やさしいほほえみでゆなにいった

優奈「は・・・はい／／／／／」

ゆなはかおをあかくしながらつかささんにいった

ヒカル「急いで諒の所へ行こうぜ。あいつは、もう待ってくれない
みたいだから。」

ひかるさんは、くろいでゆーくもんをみながらそういった
くろいでゆーくもんは、やりをかまえながらおれたちにはしってき
ていた

ツカサ「そうだね・・・優奈ちゃん、少し揺れるけど我慢してね。」

ヒカル「神威もな。」

おれたちはふたりのことばにうなずいた
そして、ふたりはものすごいすぴーどでりょうさんのところへはし
りだした

side 諒

ツカサとヒカルは、無事に神威と優奈を連れて此処に向かってきて
いる

影分身達も、なのは達を此処へ連れて向かっている
だが、予想通り黒いロイヤルナイツの姿をしたスコーピオン達も此
処に向かっていた

諒「影分身の術・・・」

俺は新たに影分身を10体出した

俺は目で皆を見ると皆は頷いて何処かへ行った

そして暫くすると、最初に出した影分身達とツカサとヒカルが帰っ
てきた

皆はウエーブロードになのは達を寝かせていった
そして、影分身達は消えた

諒「さて、皆を回復させますか!!!」

そう言って俺はあるプログラムを起動させた

フォルテ「キズナユニゾン、開始!!!キズナユニゾン、開始!!!」

フォルテがそう叫ぶと皆の体は神々しい光に包まれた

ツカサ「これって・・・」

ヒカル「俺達の怪我を治した・・・」

ツカサとヒカルは、俺の技を見て驚いた

この技は、俺が新しく身に付けた最強の回復呪文と言っても過言ではない技

その名も

諒「シャイニングヒール・・・」

俺がそう言うと、なのは達を包んでいた神々しい光は一瞬強く光ったが直ぐに消えた

そしてそこには、傷が完全に無くなったなのは達が居た

なのは「う・・・うん・・・ここは？」

なのはを初めとし、皆が起きた

俺は皆に近づいた

諒「皆、何処か痛い所は無いか？」

俺は皆に聞こえるように言った

皆は、俺の顔を見て驚愕していた

諒「驚くのは後だ。今は、スコープオン達を倒す事が先決だ。」

俺がそう言うと、皆の顔が真剣になった

スバル「諒君・・・聞きたい事があるんだ。」

スバルが俺の顔を見ながら言ってきた

余り時間が無いな・・・

諒「俺が答えれる範囲ならな。」

俺がそう言うと、スバルは先程以上に真剣な顔で俺を見てきた
皆も、俺の顔を真剣に見ていた

スバル「諒君・・・君は・・・生きてるんだよね？」

何だ、そんな事が

諒「生きてるさ。だから、この戦いを早く終わらせてパーティーで
もやろうぜ!!」

俺が笑いながらそう言うと、皆は頷いてくれた

さて、この力の本当の力を見せてやる!!

諒「キズナユニゾン、オーバードライブ!!!」

俺はそう叫びながら右手をあげた

そうすると、俺達は光に包まれた

第103話 世界の希望の光、復活！！（後書き）

今回も次回予告だけです

本当に申し訳ないort

次回 キズナユニゾン

次回もお楽しみにー！！

第104話 キズナユニゾン（前書き）

すみません!!

間違えてこの話を消してしまいました!!

ですので、急いで執筆しました!!

なので、キャラの話している内容やキャラの姿の説明が大分変わっています!!

ですから、昨日の話は忘れてこの話で読んでください!!

本当にごめんなさい!!ort

今回名言を教えてくださいたのは虚無さんです!!

CROWNで

『もしこの世に運命というものが存在するならそいつはぼくにケンを売っているとしたか思えない』

BY剣太郎〓吏亜〓剣皇

ネギまで

『誰かを恨んだり 何かから逃げ出して手に入れた力でも……それは立派なあなたの力です。ネギ先生』

BY四葉 五月

『思いを通すは何時も力ある者のみ』

B Y超 鈴音

『おじいちゃん言ってました。わしらの魔法は万能じゃない わずかな勇気が本当の魔法だって』

『自分のこと脇役なんて言わないでください。みんな……主役なんですよ』

B Yネギ・スプリングフィーリド

『すでに決まった運命？

決まった運命なんかに従うくらいなら俺がその運命を壊してやる！！自分以外の誰かに運命を決められてたまるか！！』

B Yメア・スプリングフィールド（二次小説のオリ主）

更に、プレゼントまでくれました！！

諒には、斬刀『鈍』^{ナマクラ}、妖刀『星砕き（銀魂の銀さんの木刀）』、雷刀『鬼哭斬馬刀』

なのは達には、指南書『好きな人の喜ばせ方』、『デートスポット百選』

ありがとうございます！！

もし、プレゼントしてくれたら特別編で使っていきますので……！！

第104話 キズナユニゾン

side 諒

光が収まると俺達の姿が変わっていた

俺のは、服装はなのはの服を男バージョンにした白の服

右手には天鎖斬月が健在だが、左手にはフェイトの武器である大きな黒い鎌の様な物を持っている

背中からは、はやての背中に生えていた黒い羽根が俺の背中から生えていた

両腰には、ティアナの武器である拳銃がホルスターに挿入されている

スバルは、AM三賢者が与えてくれたスターブレイクの力を完全に使いこなした者がなれる最強のスターブレイクの姿・ブレイクキングの姿をしていた

ミソラは、ギターは健在だが服装がインペリアルドラモンFMの鎧ファイターモードを身に纏っていた

神威は、太陽の戦士・シャイングレイモンBMをイメージする姿だった

紅い鎧を身に纏い、背中から炎の翼が生えており、右手には漆黒の日本刀の天鎖斬月を・左手には炎で出来た剣のコロナブレイズソードを持っていた

優奈は、セラフィモンとオファニモンをイメージする姿だった
服装こそ変わっていないが、背中からセラフィモンの黄金に輝く羽根が生えており、両手にはオファニモンの黄金の槍と黄金色と翠で出来た楯を持っていた

ツカサは、完全なウォーグレイモンに変化していた

両手にはドラゴン系に最強と言っても過言ではな無い武器・ドラモンキラーを装備している

鎧もウォーグレイモンそのものだった

ヒカルは、完全なブラックメタルガルルモンの姿をしていた

全身がデジタルワールド最強の硬さを誇る鉱石・クロンデジゾイドメタルで覆われており、背中から黄色のウイングが出ていた

暁と長官は、姿こそ変わっていないが手に持っていた武器が変化されていた

暁は、神槍グングニルが腰に収められており代わりにオメガモンの武器の一つであるグレイソードを装着していた

長官は、オメガブレードは健在だがもう片方の手に暁同様オメガモンの武器の一つであるガルルキャノンが装着されていた

だが、なのは・フェイト・はやて・ティアナの姿が何処にも無かった

スバル「こ、この姿は・・・ブレイクキング!？」

神威「スゲエ力だ。これが、諒さんが俺に与えてくれた力・・・」

優奈「わ、私の回復魔術を上回ってる。こ、こんな事が・・・」

暁「これは・・・オメガモンのグレイソード。」

長官「私は・・・オメガモンのガルルキャノン。」

ツカサ「凄い・・・これがキズナユニゾンの力なんだ。」

ヒカル「ブラックメタルガルルモン・・・俺にぴったりの姿じゃねえか!!」

ミソラ「・・・あれ？なのはちゃん達が居ない。」

皆は、それぞれ違う反応を見せた

なのは達が居ないのには理由がある

諒「なのは達は、俺の中に居る。なのは達の力を俺が借りてるからな。」

俺がそう言うと、ミソラは不満顔になり・他の皆は驚いていた

ミソラ「ズルいよ。なのはちゃん達だけ・・・」

ミソラは少し拗ねてしまった

その姿がまた可愛かった

なのは「凄いよ!!私達、諒くんの中に居る!!」

フェイト「これがキズナユニゾンの力・・・本当に凄い。」

はやて「諒君の中・・・なんか気持ちええな。」

ティアナ「私とお兄ちゃんが一つに・・・!!?こ、これは私とお兄ちゃんが（自主規制）してる時と同じだよ!!」

なのは達も、俺の中でそれぞれ違った反応を見せた

だが、ティアナに関しては何も言えない

言える事は一つ

・・・自重しろ

!?

・・・影分身が2体を残して全部消えた

俺が出した影分身は、2体以外は黒いロイヤルナイツの姿をしたスコープオン達の足止めを行ってもらう為に出した

2体は、WAXAの局員の手当てに向かってもらった

死人こそ居ないが、重体の人が沢山居たからだ

さて・・・

諒「スバル。」

俺はスバルの名を呼んだ

スバルは俺に前を呼ばれたので俺を見てきた

諒「此処から東へ1500mに・・・ギンガ、スコープオンの本体が居る。」

全員『!!?』

俺がそう言うと、皆が驚いた

そりゃそうだ

スコープオン本体がこの近くに居るのだからな

諒「スバル、お前がスコープオンを倒せ。」

スバル「な!？」

スバルは、余りにも驚いたので声を出した

他の皆は、俺の顔を真剣に見ながら黙って聞いてくれていた

諒「スバル、お前は俺と約束したよな？『ギンガを必ず救う』って。だから、お前がギンガを救いに行け。」

スバル「で、でも・・・」

何遠慮してんだ

諒「スバル、ギンガはお前の事を待っているんだぞ。ギンガの意志は、スコープピオンの中で生きている。ギンガは完全に乗っ取られていない。ギンガは、お前に救いを求めているんだ。女の子の期待を裏切るのか、スバル？」

俺はスバルの目を真剣に見ながら言った

皆を待っている時に、スコープピオン本体を見つけた

俺が倒しに行こうとしたが、ギンガはスバルに助けを求めている
スコープピオン本体を倒してギンガが助かるかなんて分からない
それなら、ギンガが自分の力でスコープピオンを追い出せば良い
だが、ギンガの意志は大分弱まっている

そこに、スバルに助けを求めている

スバルがスコープピオンと戦えば、ギンガを救う事が可能かもしれないからだ

スバル「・・・分かったよ、諒君。・・・僕、ギンガちゃんを助けに行くよー!!」

スバルは真剣な目で俺を見てきた

諒「頼むぜ、親友。これが終わったらギンガも誘ってパーティーでもしようぜー!!」

俺は、拳をスバルの前に出した

スバルは、俺の拳を見ると自分の拳を俺の拳に当ててきた

スバル「任せて、親友。必ず、ギンガちゃんを救ってみせる!!」

スバルはそう言って空を飛んだ

諒「・・・行くぞ!!!」

全員『おう(うん)(はい)!!!』

俺の合図で、スバルはスコープオン本体の所へ・俺達は黒いロイヤルナイツの姿をしたスコープオン達の所へ向かった

さあ、第二ラウンドの始まりだ!!!

第104話 キズナユニゾン（後書き）

虚無さんありがとうございました！！

今から最新話を執筆するので、今回も次回予告だけです！

次回 集う平行世界の仲間

次回もお楽しみに！！

第105話 集う平行世界の仲間（前書き）

今回から沢山の先生達とコラボします！！

雨季先生・ムラサメ先生・紅夜先生とコラボです！！

そして、沢山のオリキャラも登場します！！

キャラの口調があっているか心配です

心を広く持って読んでください

今回は名言コーナーはお休みです

第105話 集う平行世界の仲間

sideアフロディ

僕は今、神界に居る

そして、僕の前には沢山の人間が居る

本来なら此処には、人間は居ない

だが、僕や最高神様・他の神々の力で皆を呼んだ

僕は、此処に呼んだ理由を皆に話している

アフロディ「諒達の居る世界に、とてつもなく大きなイレギュラーが現れた！諒達はそれに気付いていない、だから君達にイレギュラーを対処してほしいんだ！！」

僕は皆に頭を下げ、力を貸してもらおうよう頼んだ

諒達が知らないイレギュラーが、諒達に迫ろうとしている

諒達は、スコープオン達やFM王の事で頭が一杯だ

だからこそ、最高神様が勧める皆に頼んだ

「諒にはヒカリちゃんの時の恩があるからな・・・良いぜ、力を貸すぜ！」

イナズマイレブンに出てくる吹雪 士郎（覚醒前）の姿をした男子、加藤 航君が僕に言ってくれた

「俺自身、諒と関わりが無いが世界のピンチなんだろう？だったら、俺も力を貸すぜ。」

BLEACHに出てくる日番谷 冬獅郎の姿をしている男子、佐藤 劉君も僕に言ってくれた

「俺だつてないさ。だけど、手を差し伸ばせば助かる人が居るんだ。俺の力が役に立つかどうか分からないが、俺も力を貸すぜ！」

イナズマイレブンに出てくる南雲 晴也の姿をした男の子、南雲モトキ君もそう言ってくれた

「そうだな。助かる命を見捨てるようなクズには、俺はなりたくない。俺自身、戦う力が無いが俺の力が必要なら、俺は力を貸すぜ！」

新世紀エヴァンゲリオンに出てくる渚 カヲルの姿をした男の子、レインボー君もそう言ってくれた

「まあ一応神威は俺の弟子だからな。弟子を助けるのは師匠の努めだし、俺も力を貸すぜ。・・・後、諒って奴にも興味があるしな。・・・一真の嫁共の愚痴を言い合いたい。」

青白い髪に青っぽい目をし二十代くらいの男性、一条 要さんが言ってくれた

・・・最後の言葉は聞こえたが何も聞こえなかった
聞いてしまったら後戻り出来無さそうだったから・・・

「俺はあいつに何度か力を貸してもらったからな。それに、俺は仲間と認めた奴は絶対に見捨てない。だから、俺も力を貸すぜ。」

機動戦士ガンダム00（ファーストシーズン）に出てくる刹那の姿をした男性、黒宮 翔さんが言ってくれた

「俺と諒は余り話した事が無いが、あいつは俺達の世界で力を貸してくれた。その時の恩がまだ返せていない。その時の恩を此処で返

すために俺も力を貸すぜ。」

機動戦士ガンダムSEED DESTINYに出てくるシン・アスカの姿をした男性、アルティメットが翔さんの言葉に続けて言ってくれた

「僕もです。僕に力はありません。ですが、必ず諒君の力になる事がある筈なんです。だから、僕も力を貸します！」

赤みが掛かった茶色の髪の毛をし中学二年生くらいの男子、泉光子郎君が僕の目を見ながら言ってくれた

「諒・・・何故だろう、闇の力を使える者同士だから他人とは思えないのだろうか・・・」

「俺もだ。俺も諒が他人とは思えない。・・・この謎を解決させる為に、こんな所で死んでもらっちゃ困る。アフロディ・・・だったな、俺も力を貸してやる。」

「オレもだ。」

僕にそう言ってくれた二人の男子、サバタさんとアレックスさんが言ってくれた

僕は涙が出そうになった

でも、泣いている時間は無い

僕は涙を拭って神の力を解放した

トントントントントントン(ry

神界が大きく揺れ始めた

だけど、皆はその揺れに臆することなくただ立っていた
やはり、彼達に頼んで正解だったみたいだね!!

アフロディ「はあああああああああ!!!!!!!!」

僕は神の力を100%を手集中させた
そして

アフロディ「集え!! 神々の力!! 轟け!! 神の力を受けし勇者達
!! 集え!! 平行世界の神の力を授かりし絆を守りし者達よ!!」

僕は皆に手を向け、神々しい光を放った

ヒューーーーーーン

光が皆を包み込む

光は徐々に薄れていく

ピカーーーーーーン

光が完全に消えると、そこには誰も居なかった

アフロディ「諒の事を……頼むよ、皆。」

僕は誰も居ない部屋にそう呟いた

第105話 集う平行世界の仲間（後書き）

雨季先生・ムラサメ先生・紅夜先生！！

ありがとうございます！！

キャラの口調などが違う場合は、直ぐに教えてください！！

今回も次回予告だけ

次回 神威と優奈 パート1

次回もお楽しみに！！

第106話 神威と優奈 パート1（前書き）

今日、地域野球の試合に呼ばれました

そして、熱中症になってしまいました

今も頭がボーッとしてます

もしかしたら、変な所があるかもしれないので御了承下さい

今回は名言コーナーはお休みです

第106話 神威と優奈 パート1

side 神威

神威「月牙天衝!!!」

俺は月牙天衝を敵に放った

「効かぬわ!!!」

ガキンツ!!!

だが、月牙天衝は簡単に防がれた

俺は今、黒いデュークモンの姿をしたスコープオンと戦っている

あれから、俺は優奈とペアを組んで皆と別れた

そして、優奈と敵に向かっていると黒いデュークモンと黒いオメガモンに出会った

そして、言葉を交わすことなく戦いが始まった

俺は黒いデュークモンと、優奈は黒いオメガモンと戦っている

俺は諒さんのキズナユニゾンの力で黒いデュークモンと互角、否、黒いデュークモンを上回る力で戦っている

優奈は防御力と回復力に特化しているが、攻撃力は余り高くない
幾ら諒さんから力を得ても、黒いオメガモンを倒す程の攻撃力は持っていない

なので俺が黒いデュークモンを倒して、優奈を助けに行かないといけない

優奈は、防御力が諒さんのキズナユニゾンの力で更に強化されてるため今の所は無事だ

だが、この力はかなり体力を奪われる

強力すぎる為か俺達がコントロール出来ていないか、それは分からない

だが、余り長くは戦えない

此処で体力を使い過ぎるわけにはいかない

俺は天鎖残月と新しい武器であるコロナブレイズソードを構えた

そして、黒いデュークモンに構えて走った

黒いデュークモンも、黒い槍と黒い楯を構えて俺に向かって走ってきた

神威「オラアアア!!!」

「ハアアア!!!」

ガツキイイイン!!!!!!

お互いの武器がぶつかり合い、大きな音が鳴り響いた

俺の天鎖残月は黒いデュークモンの黒い楯で防がれており、コロナ

ブレイズソードは黒い槍とぶつかり合っている

力は互角なので全く武器が動く気配が無い

只でさえこの姿を維持するのに体力を消費するのに、こんな所で体力を無駄遣いしている暇は無い!!

神威「うおおおおお!!!」

俺は力を更に強め、黒いデュークモンを少しずつ後ろへ押していった

「ま、負けるかあ!!!」

黒いデュークモンも、力を入れてきた
なので、また俺達の武器は動かなくなった
少し、少しで良い!!
隙を見せる!!

「お前が隙だらけだぜ!!!オラアツ!!!」

「グハツ!!!?」

突然背中から誰かの声が聞こえてきたと思ったら、脇腹を思いつき
り蹴られた

俺は短い悲鳴を出してビルの屋上に叩きつけられた

神威「だ、誰だ・・・!」

俺は直ぐに立ち上がり、天鎖残月とコロナブレイズソードを構えな
がら叫んだ

優奈「神威君!!!」

突然優奈が俺の隣に来た

黒いオメガモンはどうしたんだ?

神威「優奈、黒いオメガモンはどうした!?お前の攻撃力じゃ、あ
いつを倒せないだろ!?!」

優奈が此処に来た理由で考えられる事は二つある

1・優奈が黒いオメガモンから逃げて此処に来た

2・この優奈は偽物で、俺を油断させ攻撃しようとしている

1の場合は優奈には有り得る

優奈自身、攻撃力は余り無い

優奈は防御力に特化している

だが、防御するのに体力がかなり消費する

しかも、俺達はキズナユニゾンの力を維持するのに体力を使う

なので、体力が残り少ないので此処に来た

2の場合も十分考えられる

俺を不意打ちしてきた奴が、優奈に化けて俺を攻撃しようとしているとも考えられる

コイツ等の化ける力は異常だ

化けた奴の力を完全にコピー出来る

俺は優奈も警戒しつつ辺りを見渡した

「フン、そっちの奴に助けを求めに来ていたのか。」

！？

俺は直ぐに上を見た

そこには、黒い槍を構えた黒いデュークモンと、黒いガールルキャノンを構えた黒いオメガモンが居た

どうやら此処に居る優奈は本物のようだ

俺は二体に天鎖残月とコロナブレイズソードを、優奈は黄金色の槍と黄金色と翠の楯を構えた

多分、あの二体は俺達に必殺技を放ってくるだろう

しかも、既に二体は必殺技を溜め終わっている

避ける事も可能だが、避けるとこの街が消える

俺達はあの威力を知っている

だからこそ、避けずに武器を構えた

「おいおい、また隙だらけだぜ!!」

!?

後ろからまた声が聞こえた

俺達は直ぐに後ろを向いた

そこには、体全体が光っている黒いマグナモンが立っていた

「エクストリーム・ジハード!!」

黒いマグナモンが、俺達に必殺技を放ってきた

俺達は、黒いデュークモン達に攻撃する事に集中していた為、防衛が出来なかった

俺達は目を瞑り、攻撃が来るのを待った

「やれやれ、油断するとはお前もまだまだな。」

!?

突然そんな声が聞こえた

ドッカーン!!!

すると、俺達の前で爆発音が鳴り響いた

俺達は目を開け、現状を把握しようとした

俺達の前に一人の大人が立っていた

俺達に怪我はない

デュークモン達は驚いた顔をしていたが上に居る

マグナモンは俺達の前立っている大人を睨み付けていた

「全く、お前は俺の弟子か？まだまだだな、お前は・・・」

俺達の前立っている大人が、俺に対して言ってきた

見た目は二十代前半で青白い長髪、青っぽい目をしている大人

俺はこの大人を知っている、否、知っていると言っレベルじゃない

「一応お前も俺の弟子だから、助けてやる。そこでポーツとしてな
いで武器を構えろ、神威。」

その人は俺に言ってきた

俺と優奈は直ぐに武器を黒いデュークモン達に構えた

神威「助けに来てくれてありがとうございます、師匠！！」

俺は背中合わせしている大人、俺の師匠である一条 要師匠にお礼
を言った

要「お礼がしたかったらこの世界の酒を後でくれ。分かったか？」

ハハハ、師匠らしい

だけど、師匠が来たから無様な姿は見せられないな！！

要「・・・行くぞ!!」

神威・優奈「はい!!」

師匠の合図で、俺達は敵に突っ込んだ

第106話 神威と優奈 パート1（後書き）

今回は次回予告だけ

次回 神威と優奈 パート2

次回もお楽しみに！

第107話 神威と優奈 パート2（前書き）

今回は神威と優奈の戦い！！

神威にある変化が！！

今回名言を教えてくださいましたのは仮面ライダーディケイドさんです！！

炎神戦隊ゴーオンジャーで

『正義のヒーローは、世界を救ってナンボなんだよおっ！！』
By 江角走輔

ありがとうございました！！

第107話 神威と優奈 パート2

side 神威

俺と優奈は黒いデュークモンと、師匠は黒いオメガモンと黒いマグナモンと戦っている

本当なら一対一で戦うのだが、俺と優奈に一対一で戦って勝つ体力は余り残っていない

それを師匠は知ってたのか、自分から二体と戦いに行った俺と優奈に出来る事は、黒いデュークモンに勝つ事！！

神威「月牙天衝！！」

俺は漆黒の日本刀・天鎖斬月から黒い残撃・月牙天衝を放った

これは囷

月牙天衝の威力じゃ、あいつの楯に簡単に防がれる

なので、0距離から天鎖斬月かコロナブレイズソードで斬るしかない

俺は黒いデュークモンが、月牙天衝を防ぐのを待った

「フン、芸が無い・・・！？グハツ！！！」

黒いデュークモンがそう言って月牙天衝を楯で防ごうとすると、防いだ衝撃で黒いデュークモンは後ろに倒れた

神威「何でだ・・・さっきは簡単に防がれたのに？」

俺は疑問に思った

体力がまだ有った時の月牙天衝は簡単に防がれた

なのに、体力が余り無い今の月牙天衝は防がれたがその衝撃に耐え切れず後ろに倒れた

何で？

優奈「!?!?か、神威君、背中羽根が!?!?」

優奈が突然、俺の背中に生えている紅色の羽根を指差しながら叫んだ
俺は背中に生えている紅色の羽根を見た

神威「・・・は？」

俺は背中羽根を見て間抜けな声を出した
何故なら、背中に生えている紅色の羽根が黒色に変色していたからだ
何で？

これもシャイングレイモンBMの力なのか？
でも、何で今更その力が？

・・・まあ良い!
これで力が少し強くなったんだ!
残りの体力はもう余り無い!
次で決めないと俺達の負けだ!
これで決める!

神威「優奈、援護を頼む!!」

俺は黒いデュークモンに神経を集中させながら、優奈に言った

優奈「任せて!コイツを倒して皆でパーティー!!」

優奈は元気にそう言った

そうだ、これが終われば皆でパーティーだ!
師匠に酒を準備しないとイケないが、諒さんに聞きたい事がある
絶対に・・・

勝つ！！

神威「行くぞ！！」

俺は全速力で黒いデュークモンに近付いた

黒いデュークモンは一瞬、驚いたが直ぐに武器を構えて俺に突っ込んできた

やはり、スコーピオンと言えど槍使いは槍使い！

槍の最大の弱点、見つけたぜ！！

「ハアアアアア！！！！」

黒いデュークモンが、叫びながら槍を突き出してきた

俺はその瞬間、黒いデュークモンの下にしゃがんだ

そして、直ぐに天鎖斬月で黒いデュークモンの右腕を斬った

ザシュツ！！！！

「！？」

ツ！！！！！！！！！！」

黒いデュークモンは、この世の言葉では無い言葉で悲鳴をあげた

斬られた右腕は地面に落ちた瞬間、0と1のデータになって完全に消えた

黒いデュークモンの右腕の傷からも、0と1のデータに分解されていた

槍の弱点

槍とは、一点に力を集中させたもの

その力は剣を凌駕する力を持っている
だが、弱点もある

一撃には強いが、放った後が隙だらけになってしまう
今まで必殺技の“ロイヤルセイバー”を警戒して気付かなかったけ
ど、俺と黒いデュークモンは打ち合いが略無かった
その事を思い出し、この作戦に出た

この作戦は大きな賭けだったが、俺の勝ちみたいだ

神威「これで・・・止めだ!!!」

俺は全身全霊を込めて黒いデュークモンの体に大爆発を起こした

神威「ファイナルシャイニングバースト!!!!!!!」

優奈は十個のクリスタルを召喚し、黒いデュークモンにぶつけた

優奈「セフィロートクリスタル!!!!!!!」

ドッカー—————!!!!!!

ザシユザシユザシユザシユザシユツ!!!!!!!

大きな爆発音と大きな刺さる音が響いた

「・・・・・・・・」

黒いデュークモンは悲鳴をあげ、0と1のデータに分解していき消

えた

神威「……ぷはあ、な、なんとか勝てた。」

俺は尻餅を付いた

それと同時にキズナユニゾンの力とセツトアップが解けた

優奈「神威君、要さんは大丈夫なの？」

優奈が俺の隣に座って聞いてきた

優奈もキズナユニゾンとセツトアップが解けていた

俺は師匠が戦っている方を見た

ドッカーーン！

ドッカーーン！

ドカドカーーン！

爆発音がずっと鳴り響いていた

黒いデュークモンとの戦いに集中していたので、今の今まで気付かなかった

だけど大丈夫

神威「師匠なら大丈夫。師匠は俺が知ってる中でトップを争う強さだから。……それに、今俺達が行ったって師匠の邪魔になるだけ

だからな。」

優奈「・・・そうだね。」

俺が優奈にそう言つと、優奈は納得した

俺達は座りながら、師匠が戦っている方を見た

神威「（頑張ってください・・・師匠!!）」

第107話 神威と優奈 パート2（後書き）

後書きの語り合いは最終決戦の前に復活すると思います

次回 要のチートの強さと・・・

次回もお楽しみ!!

第108話 要のチートの強さと・・・（前書き）

今回は要がメインの話です

要を上手く表現できたか不安です

それから、今回から天照大神先生とコラボです!!

凄い沢山の先生達とコラボ出来て嬉しい限りです!!

今回名言を教えてくださいなのはAIさんです!

『命は、作るものじゃない!! 奇跡を生む力だ!!』

『弱い者いじめはする奴はもっと弱い奴がすることだ!!』

BY AI

ありがとうございます!!

第108話 要のチートの強さと・・・

side要

俺は今、黒いオメガモンと黒いマグナモンの姿をしたスコープイオン
つて奴と戦っている

コイツ等は、さっきまで神威と優奈と戦っていたが俺が乱入してコ
イツ等が俺に切れ戦いを挑んできた

だが、俺としても都合だった

神威と優奈の体力は、殆ど尽きかけていた

一対一で神威達が勝てる可能性は極めて低い、否、ほぼ0だろう
だが、黒いデュークモンの姿をしたスコープイオン一団なら神威達も
勝てるだろう

「グレイソードッ!!!」

黒いオメガモンの姿をしたスコープイオンが、グレイソードで俺に斬
り掛かってきた

他人から見れば十分速いのだろうが、俺はその速さを超える速さで
斬り掛かってくる奴を知っており戦った

なので、俺から見ればスローモーションに見える

俺は紙一重でグレイソードを避け、黒いオメガモンの姿をしたスコ
ープイオンの胸を殴った

要「オラッ!!!」

バキッ!!!

ブチユツ!!!

「ぐ、グハツ!!!?」

俺が殴った場所の鎧が砕け、そのまま黒いオメガモンの姿をしたスコープオンの胸を貫いた

貫かれた穴から、0と1のデータが溢れだした

俺は直ぐに腕を引っ込抜き、そのまま後ろにジャンプをした

「お、オメガモンツ!!!?」

黒いマグナモンの姿をしたスコープオンが、黒いオメガモンの姿をしたスコープオンに名前を叫びながら近付き肩を貸した

「ぐ、グハツ!!!フウ!!!フウ!!!き、貴様だけは、フウ!!!絶対に、フウ!!!殺す!!!」

黒いオメガモンの姿をしたスコープオンは、憎しみや恨みと言った負の感情が籠もった目で俺を見ながら叫んできた

そして黒いオメガモンの姿をしたスコープオンが、俺にガールルキヤノンを構えてきた

黒いマグナモンの姿をしたスコープオンも、必殺技を放とうとしていた

ドカーン

遠くから爆発音が聞こえた

俺は爆発音がした方角を見ると、大きな黒い煙が上がっていた

・・・神威達は無事に勝ったんだろ、多分

さて、俺もそろそろ決めるか

早くこの世界の酒が飲みたいしな

俺は針の様な魔力弾を幾つも出現させた

数は大体・・・百は軽くあるだろ

目の前を見ると、既に二体は必殺技を溜め終わっており俺に放とうとしていた

そして

「ガルルキャノンッ！！！！！！」

「エクストリーム・ジハードッ！！！！！！」

冷気の砲弾と光の光線が、俺に向かって放たれた

だが、力任せに放たれた必殺技など破壊するのに造作も要らない
これで止めだ

要「ニードルマシンガン！！！！」

俺は針の様な魔力弾を、ガルルキャノンとエクストリーム・ジハードに連射した

ドシューーン！！！！

ガルルキャノンとエクストリーム・ジハードは俺のニードルマシンガンに一瞬で消され、黒いオメガモンの姿をしたスコープピオンと黒いマグナモンの姿をしたスコープピオンに向かっていった

「「！！！！！！？」」

二体はニードルマシンガンを全て直撃し、悲鳴を上げずに0と1のデータとなって消えた

要「ふう、まあ暇潰しくらいにはなったな。・・・あいつ等を回収しますか。」

俺はそう言っつて、神威と優奈が居る場所に向かった

東エリア

神威・優奈・要VSデュークモン・オメガモン・マグナモン

勝者

神威・優奈・要

sideアフロディ

アフロディ「こ、こんな事が！！？」

僕は地球のある場所を見て、大声を出して驚いた
僕の叫び声を聞いて、最高神様が僕に近付いてきた

最高神「ど、どうしたの!？」

僕は何度か深呼吸をし、焦る気持ちを落ち着かせた

アフロディ「最高神様、イレギュラーです。しかもこのイレギュラーは、僕達ですら予想出来なかったイレギュラーです。今の地球に、このイレギュラーと戦える人間は居ません!急いで平行世界から救援を!！」

このイレギュラーと今現在、戦える人は居ない
皆、スコープイオン達と戦っている

だが、このままイレギュラーを見逃してしまったら地球は破壊されてしまう!

最高神「・・・彼に頼みましょう。私達が頼める人は、彼しか居ないわ。」

彼?

誰なんだ・・・

最高神「この世界の彼に頼めばきっと、私達に力を貸してくれる筈よ。急いで!！」

アフロディ「わ、分かりました!！」

僕は急いである世界に向かった

side??

「フツ!!ハツ!!」

僕は、機動六課の訓練場で一人で剣を振っている
強くなる為

皆を護れる為
負けない為

そんな想いを心の中で思いながら、僕は剣を振っていた

「・・・たの・か・・・して・ださい。」

!?

突然、声が聞こえた

僕は剣を構えて、辺りを見渡した
しかし、怪しい人物の姿や気配が全く無かった
だが、確かに誰かの声が聞こえた

シューーン

僕の目の前に突然、黄緑の髪をした男の子?が現れた

「すみません、貴方の力を貸してください!!」

男の子?が突然、僕に頭を下げて『力を貸してくれ』と頼んできた

「ちよつ、ちよつと待って!君は誰なの!?!どうして突然現れたの!
!?!何で僕の力が必要なの!?!」

僕は男の子？に質問をした

余りにもこの男の子？は謎が多すぎる

「最初の二つの質問は後で答えます！貴方の力が必要なのは、平行世界の僕の友人が危険な目に遇ってるからです！！」

！？

へ、平行世界！？

つまりこの男の子？は、平行世界の・・・

この男の子？の友人が危険な目に！？

た、大変だ！！

「わ、分かった！僕ので良ければ、力を貸すよ！急いで君の友人の場所へ、僕を連れていってくれ！！」

「わ、分かりました！・・・え、えっと」

名前をまだ言ってなかったな

「優星・・・津川 優星！！それが僕の名前だよ！！」

アフロディ「それでは優星さん、貴方を僕の友人の世界に送ります
！！

集え！！神々の力！！轟け！！神の力を受けし勇者！！集え！！平行世界の神の力を授かりし絆を守りし者よ！！」

男の子？が僕に手を向け、神々しい光を僕に放った

優星「・・・無事に着いたのかな？」

僕は辺りを見渡しながらそう呟いた

ドッカーーン!!!

!?

突然、大きな爆発音が聞こえた

優星「あつちに何か遇ったんだな!!!」

僕は急いで爆発音が有った方角に向かって走りだした

第108話 要のチートの強さと・・・(後書き)

まだまだ戦いは続きます
頑張らないと!!

次回 暁と長官 パート1

次回もお楽しみに!!

第109話 暁と長官 パート1（前書き）

今回は暁と長官の話！

学校が休みになったが、宿題の量が半端じゃありません

もしかしたら、投稿出来ない日があるかもしれませんが御了承下さい

今回名言を覚えてくれたのはブラックエースさんです！

スーパーロボット大戦OGで

『黙れ！そして聞け！我名はゼンガー、ゼンガー・ゾンボルト。悪を断つ剣なり！！』

Byゼンガー・ゾンボルト

ありがとうございました！

第109話 暁と長官 パート1

side 暁

暁「グレイソード!!!」

俺はグレイソードで敵に斬り掛かった

「ござかしい!!」

ガキンツ!!

だが、俺のグレイソードは簡単に防がれた

俺は今、黒いスレイプモンの姿をしたスコープオンと戦っている

あの後、俺は長官とペアを組んで皆と別れてスコープオン達を捜しに行った

そして、捜していると黒いスレイプモンと黒いロードナイトモンと出会って

そして二手に別れて、戦いが始まった

俺は黒いスレイプモンと、長官は黒いロードナイトモンと戦っている

俺は諒の新しい力・キズナユニゾンの力でグレイソードとオメガモンの力が少しだけ+されているので、黒いスレイプモンと互角に、否、少しだけ黒いスレイプモンを上回る力で戦っている

多分、長官も俺と同じで黒いロードナイトモンを少しだけ上回る力で戦っているだろう

だが、このキズナユニゾンの力は体力の消費が激しい

余りにも強力すぎる為と俺達がこの力をコントロール出来ていないので、体力をかなり消費をする

だから、長期戦になれば俺達が勝つ可能性は0に近い
しかも、此処で体力を使いすぎるわけにはいかない
まだこの戦いの後に、FM王が居る

“ 諒が居るから大丈夫 ” と思いたくない

幾ら諒が強くても、まだ子供

こんな “ 死と隣り合わせの場所 ” に居るのはダメだ

俺達大人がしつかりしないとイケないんだ

俺は神剣ブルトガングと新しい武器のグレイソードを構えた

そして、黒いスレイプモンに構えて走った

黒いスレイプモンも、俺に武器を構えて走ってきた

暁「オラアアア！！！！！」

「ハアアア！！！！！」

ガツキイイイイン！！！！！！

お互いの武器がぶつかり合い、大きな音が鳴り響いた

お互い、武器と武器で攻撃を防ぎ合っているなのでお互いの体にダメージは無い

力は互角なので、全く武器が動く気配が無い

暁「クウウウ！！！！！」

「アアアア！！！！！」

お互い更に力を入れるが、やはり武器は動かない

只でさえ、この姿を維持するのに体力をかなり消費するのに、こん

な所で体力を無駄遣いしている暇は俺には無い！！
俺が力を入れようとしたら

長官「うわああああああああ！！！！！！？」

長官の悲鳴が聞こえて、俺に衝撃が来た

暁「グハツ！！」

俺はそのまま地面に叩きつけられた

俺の背中には、長官が乗っていた

暁「ちょ、長官！？だ、大丈夫ですか！！」

長官「あ、嗚呼、す、少し油断しただけだ。」

長官はそう言って立ち上がり、上にオメガブレイドとガルクヤノ
ンを構えた

俺も直ぐに立ち上がり、神剣ブルトガングとグレイソードを構えた

「少し油断のしすぎだ。」

「分かっている。」

上には、黒いスレイプモンと黒いロードナイトモンがいた
クツ、俺達の方が圧倒的に不利だ

俺達に残された体力は後僅か

向こうはまだ体力が残っている

このままじゃ、俺達は負けてしまう

救援さえあれば、状況を変えられるが・・・無理な話だな

俺は二体に突っ込もうとした
その時

「俺達が力を貸してやる。」

そんな声が聞こえたと思ったら、俺達の前に突然二人の青年が現れた
一人は諒から聞いた事がある黒宮 翔と言う青年だが、もう一人は
知らない

しかし、翔と言う青年は俺達の味方で間違いないだろう！！

暁「翔とそつちの君！！俺達は諒の仲間だ！！君たちの力を貸して
くれ！！俺達はこの獣の様な奴を倒す、だから、君達があつちを頼
みたい！！頼めるか！！」

二人がこの条件を呑んでくれれば、この戦いは大きく変わる！

翔「分かった、引き受けるぜ。」

よし！！

これなら勝てるかもしれない！！

暁「必ず後で！！」

翔「分かった。」

俺達はそう言い合つと、二体に突っ込んだ

さあ戦いは始まったばかりだ！！

第109話 暁と長官 パート1（後書き）

今回は次回予告だけ

次回 暁と長官 パート2

次回もお楽しみに！

第110話 暁と長官 パート2 (前書き)

暁と長官がメインですが、暁が主役ですね

夏休みの宿題が多い・・・

ハア、面倒だが早く終わらせないと・・・

今回名言コーナーはお休みです

第110話 暁と長官 パート2

side 暁

俺と長官は黒いスレイプモンと、翔ともう一人の青年は黒いロードナイトモンと戦っている

本当なら俺と長官が対一で戦わなければならないが、俺と長官が対一で戦って勝つ可能性は悔しいが0に近い

キズナユニゾンの力であるグレイソード・長官はガルルキャノンは、強力だが体力の消費が激しい

この力が余りにも強力過ぎるのか、俺達の動きに無駄があるのか、俺達がこの力をちゃんとコントロール出来てないのか、それは分からない

だが、俺と長官に長期戦は無理だ

体力が残り僅かで二体を倒すのは、俺達には出来ない

だが、翔ともう一人の青年が来てくれたお陰で勝機は上がった

二体を倒す事は出来なくても、一体を倒す事は俺達にも出来る筈！

悔しいが、俺達は出来る事をする！！

それが、諒に出来る俺達なりの協力だ！

暁「インビンシブルソード！！」

俺は神剣ブルトガングを使う必殺技の“インビンシブルソード”で、黒いスレイプモンに斬り掛かった

「フンツ！！」

だが、黒いスレイプモンは“インビンシブルソード”を紙一重で避けた

だが、避けられる事くらい分かっていた！

俺は直ぐに上にジャンプした

長官「ガールルキャノン!!!!」

ドッカーーン!!!!

長官が黒いスレイプモンに向かって新たな必殺技である“ガールルキャノン”を放った

俺は囧だ

長官の新たな力の攻撃は、一撃必殺の技であるがエネルギーを溜めるのに時間が少し掛かってしまう

なので、俺が黒いスレイプモンに接近戦で戦い長官に向けている神経を全て俺に集中させる

そして、長官がエネルギーを溜め終わったら俺がジャンプをして避ける

これが、俺達の残された体力で戦って勝てる作戦だ

俺は長官の隣に移動し、土煙が上がっている黒いスレイプモンが居る場所を見た

「舐めた真似をしやがって……」

土煙が晴れると、体中傷が付いている黒いスレイプモンが現れそう言った

俺は神剣ブルトガングを腰に直し、代わりに神槍グングニルを出した
長官はオメガブレードを構えた

「これで……貴様等を殺す!!!!」

黒いスレイプモンは、左手の聖弩“ムスペルヘイム”を俺達に構えた
この時俺は、少し前に諒と話したある内容を思い出した

数カ月前・・・

諒「暁、デジモンの武器には“聖”や“神”と言った聖なる武器や
神にしか扱えない武器が存在する。知ってるよな？」

暁「嗚呼、俺がバーストモードを発動させた時に装備している“神
剣ブルトガング”や“神槍グングニル”の事とかだろ？それがどう
したんだ？」

諒「そうだ。デジモン達の中でも“聖”や“神”の武器を使う奴に
適う奴は殆ど居ない。」

暁「それじゃあ、俺は最強の部類に入るのか？」

諒「確かにお前は最強の部類に入る。だが、使い慣れていない“聖
”や“神”の武器を使えば己の体を傷付ける事になる。だがお前は、
体が傷付いていない。何故なら、お前の“神剣ブルトガング”と“
神槍グングニル”は完全な“神の武器”ではないからだ。」

暁「な、そうなのか！？」

諒「当たり前だ。幾らヨイリー博士が天才と言えど、“神の武器”
を造り出す事は不可能だ。・・・だが、俺には出来る。」

暁「な、なら」だが!!」な、何だよ？」

諒「この力を使う時は、覚悟を持って。」

暁「覚悟？」

諒「そうだ、お前の覚悟だ。何の覚悟も無い状態で“神の武器”を使えば、お前は身を滅ぼす。・・・出来るか？」

暁「・・・分からねえ、だが、何時かきつと、覚悟を決めてみせるさ。」

諒「プツ。何だよそれ、覚悟が決まってないのかよ。」

暁「まあな・・・やってくれるか？」

諒「分かったよ・・・覚悟を決めとけよ。」

暁「分かってるよ。」

諒「・・・覚悟、決めませ

俺の覚悟は

暁「俺が護りたい人達に危険を及ぼす奴は、俺が命に代えても護る!!!覚醒しろ!!!“神槍グングニル”!!!」

俺がそう叫ぶと、神槍グングニルは神々しい光を更に輝かせた
俺は長官を見た
長官は俺に頷いた

「貴様等が今更何をしようとしても無駄だア！！死ねエ！！ビフロ
スト！！！」

黒いスレイプモンは、俺達に灼熱の光矢を放つ必殺技・“ビフロ
スト”を放ってきた

長官は、オメガブレードを構えてビフロストに突っ込んだ
そうすると、オメガブレードに刻まれているアルファベット版のデ
ジモン文字が光りだした
そして、ビフロストをオメガブレードで斬り裂いた

長官「オメガブレード！！！」

そうすると、ビフロストは0と1のデータになった（初期化した）

長官「暁イ！！！」

暁「はい！！！」

俺は“神槍グングニル”を黒いスレイプモンに向かって放った

暁「クオ・ヴァデイス！！！」

「！？グワアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

黒いスレイプモンは、悲鳴を上げながら0と1のデータとなって消
えた

俺はそれを確認すると、地面に座り込んだ
座り込んだ瞬間、俺の変身は解けた
長官も変身が解け、座り込んだ

ドッカーン！！

翔達が戦っている場所から、爆発音が聞こえた
俺は立ち上がるつもりだったが、体に力が入らず倒れてしまった

長官「暁、無理をするな。」

暁「で、ですが！」

長官「信じよう、彼達を……」

長官に言われ、俺は翔達が戦っている場所を見た

暁「（無事でいてくれよ、翔！！）」

第110話 暁と長官 パート2（後書き）

ヤバい、最近後書きを真面目に書いてないな・・・

次回 翔とアルティメットの力

次回もお楽しみに!!

第111話 翔とアルティメットのカ(前書き)

夏休みの宿題が凄く難しいよ

特に理科・・・

はあ、難しすぎる

得意教科なのに、難しい

今回名言コーナーはお休みです

第111話 翔とアルティメットの力

side翔

俺とアルティメットは今、黒いロードナイトモンの姿をしたスコーピオンって奴と戦っている

コイツは、さっきまで諒の仲間の暁って呼ばれている人と長官って呼ばれて人と戦っていたが、余りにも不利な状況だったので俺達が乱入した

俺とアルティメットの力はこの世界のイレギュラーを更に生み出しそうだったので、俺は氷輪丸で・アルティメットは鏡花水月で戦っている

ロードナイトモンの強さは、まあまあ強い

本気を出さなくても十分勝てる

だが、油断大敵

俺は諒から貰った氷の力を使える日本刀・氷輪丸を更に使える様にした

アルティメットも、鏡花水月の力をよりコントロールした

俺とアルティメットは、鏡花水月の完全催眠のフルに使い黒いロードナイトモンを徐々に追い詰めている

だが、流石は最強のFM星人？だけの事はある

ロードナイトモンの力を上手く使い、俺達の攻撃を躲し俺達に攻撃をしてくる

「スパイラルマスカレード!!!」

黒いロードナイトモンが、必殺技の一つである“スパイラルマスカレード”で俺達を攻撃してきた

だが完全催眠に掛かっているので、ロードナイトモンは誰も居ない所を攻撃している

しかし、ビルが攻撃され破壊されている

下にはWAXAの局員の人達が、ジャミンガーと戦っている

このままでは、WAXAの局員の人達が怪我をしてしまう

黒いロードナイトモンをこのまま、好き勝手させるわけいけないな
・
・

翔「アルティメット……」

アル「分かっているよ。だが、周りの奴らには被害を出すなよ。」

言われなくても分かっているよ……

俺は氷輪丸を、黒いロードナイトモンに構えて目を瞑り心を落ち着かせた

そして

翔「卍解ッ!!」

俺がそう叫ぶと、周りの温度が急激に下がりだした

そして、俺の姿が変わった

刀を持っていた右手は、腕から連なる巨大な翼を持つ西洋風の氷の龍が俺に纏い、背後には三つの巨大の花のような氷の結晶が浮かんでいた

翔「大紅蓮氷輪丸……」

俺は卍解した氷輪丸、卍解・大紅蓮氷輪丸の名を言った

俺自身、この力をまだ上手く使いこなせていない

なので、俺の周り居ると凍死してしまう

だから、アルティメットは俺から少し離れている

「！？や、奴らは！！」

アルティメットが離れる。鏡花水月の完全催眠が解ける
なので、黒いロードナイトモンの催眠が解けた

翔「郡鳥氷柱！！」

俺は黒いロードナイトモンに、大量の氷柱を放つ技“郡鳥氷柱”を
放った

「！？チツ！！」

黒いロードナイトモンはギリギリで俺の攻撃に気付き、紙一重で俺
の攻撃を避けた

だが、避けられる事くらい予測済み

俺は黒いロードナイトモンに、氷で形成された斬撃を放った

翔「氷竜旋尾！！」

「！？グハツ！！」

黒いロードナイトモンは、俺の攻撃に気付く事が出来ず“氷竜旋尾”
を喰らった

俺は背後にある花の結晶を見た

十二枚あった花の花弁が、後四枚だった

・・・次の一撃で決めないと不味いな

俺は遠くに居るアルティメットに視線を移した

アルティメットは俺の視線に気付くと、溜め息を吐いて頷いた

翔「頼むぜ・・・」

俺はそう呟いて、天相従臨で雨雲を発生させた

「調子に乗るなあ！！アージエントファイアー！！！」

黒いロードナイトモンは、パイルバンカーを使って殴る技“アージエントファイアー”と叫びながら俺の方に走ってきた

アル「お前は完全催眠の中に入った！」

アルティメットがそう叫ぶと、黒いロードナイトモンが急に方向転換した

そして、誰も居ない場所に“アージエントファイアー”をした

・・・準備は完了した！！

翔「百輪の氷の華が咲き終える頃にはお前の命は消えている。」

俺がそう言っていると、天相従臨で発生させた雨雲に穴を空き、大量の雪が降ってきた

そして雪が黒いロードナイトモンに触れると、一瞬で華のように凍り付いた

翔「氷天百華葬・・・」

俺がそう言っていると、街に巨大な氷の華が出来た

アル「俺の出番は余り無かったな。」

翔「否、お前が居なかったらこの技は出来なかった・・・暁と呼ばれていた人達の所へ行こうぜ。多分、あの人達は動けないと思う

からよ。」

俺がそう言っと、アルティメットは頷いた
俺達は、暁と呼ばれていた人達の所へ向かった

西エリア

暁・長官・翔・アルティメットVSスレイプモン・ロードナイトモン

勝者

暁・長官・翔・アルティメット

第111話 翔とアルティメットの力（後書き）

漸く次回でラストバトルが半分終わる

・・・長いな

次回 ツカサとヒカル パート1

次回もお楽しみに！

第112話 ツカサとヒカル パート1(前書き)

無事に書けた、良かった

夏休みの宿題が漸く一つ終わった

でも、まだあるよorz

今回も名言コーナーはお休みです

第112話 ツカサとヒカル パート1

sideツカサ

ツカサ「ガイア・・・フォース!!!!」

ヒカル「コキュートス・・・ブレス!!!!」

僕は“ガイアフォース”を、ヒカルは“コキュートスブレス”を敵に放った

「フン!!!」

「オラア!!!」

ドッカーーン!!!!

だけど、“ガイアフォース”と“コキュートスブレス”は簡単に消された

僕達は今、黒いアルフォースブイドラモンと黒いデュナスモンの姿をしたスコープイオン達と戦っている

諒君達と別れた後、僕とヒカルはペアを組んでスコープイオンを捜した。そしたら、黒いアルフォースブイドラモンと黒いデュナスモンの姿をしたスコープイオン達に出会った。

そして、僕達は直ぐに戦いを挑んだ

僕達は、諒君のキズナユニゾンの力で凄い力を手に入れた。そのお陰で二体と互角、否、二体を上回る力で戦っている。だけど、この力は体力がかなり奪われる

この力が強すぎるのか、僕達が満足にコントロール出来てないのか
分からないけど、僕達はかなり体力を奪われてる
体力が無い〃長期戦が出来ない

もし、長期戦になれば僕達が勝てる可能性は0だ

しかも、此処で体力を使い過ぎると僕達はこの後戦えなくなる

僕達も、漸く戦う力を手に入れたのに最後の最後に見てるだけなん
て嫌だ!!

僕達は何時にも、諒君達に護られてきた

だけど、今度は僕達が諒君達を護るんだ!

僕はドラモンキラーを構えた

ヒカルも二体を睨み、構えた

そして僕達は、二体に向かって走り出した

二体も、僕達に武器を構えて走ってきた

ツカサ「ハアアア!!!」

ヒカル「オラアアア!!!」

「フンッ!!!」

「ドリヤアアア!!!」

ガツキイイイイン!!!!!!

ドッカーーン!!!!!!

お互いの武器や体がぶつかり合って、大きな音が鳴り響いた
お互い100%の力でぶつかり合っているので、武器や体が動く気
配が無い

僕は更に力を入れるけど、やはり武器は動かない
僕達には時間が無い

只でさえ、この姿を維持するのに体力をかなり消費するのに、こ
んな所で体力や時間を無駄遣いしてる暇は僕達には無いんだ!!

ツカサ「ハアツ!!」

ヒカル「オラツ!!」

僕達は力を一瞬抜いて、二体のバランスを崩した瞬間僕達は力をも
う一度力を入れて吹っ飛ばした

僕達は二体を吹っ飛ばした後、後ろにジャンプして距離を取った
そして直ぐに二体を睨み、武器や態勢を構えた

僕達の体力は、さっきのぶつかり合いでかなり消費した

二体は、まだ余裕そうだった

・・・このままじゃ、僕は確実に負けてしまう
助けがあれば・・・ダメだダメだ!!

僕達は自分の力で、二体を倒さないといけないんだ!!
直ぐに誰かを頼ってはダメなんだ!!

僕はその想いを捨てて、二体に突っ込もうとした
その時

「オレ達がお前等に力を貸してやる。」

そんな声が聞こえたと思ったら、僕達の前に突然二人の男の人が現れた

二人は誰なんだ？

僕達に“力を貸してくれる”って言ってたけど・・・
味方・・・なんだよね？

ツカサ「二人は僕達に力を貸してくれるんですか？」

「「嗚呼」」

二人は声を揃えて言ってくれた

今は二人を信じるしか無い

この状況を変えられるのなら、猫の手だって借りたいしね！

ツカサ「僕とヒカル・・・この黒い狼が一体を相手するので、二人はもう一体の相手を頼みたいんですが・・・良いですか？」

僕がそう聞くと、二人は頷いてくれた

良かった・・・

それじゃあ・・・

ツカサ「行くよ、ヒカル！！！！」

ヒカル「嗚呼！！！！」

僕とヒカルは黒いアルフォースブイドラモンに、二人は黒いデュナ

スモンに突っ込んだ

第112話 ツカサとヒカル パート1（後書き）

今回も次回予告だけ

次回 ツカサとヒカル パート2

次回もお楽しみに！！

すみません

松上「どうも、『流星のロックマン 転生者の絆物語』の作者の松上です。」

諒「ども、『流星のロックマン 転生者の絆物語』の主人公の新井諒だ。しかし、松上？」

松上「何だ？」

諒「何故この話を書いたんだ？」

松上「……すまん。今日の地域野球に参加して、熱中症になってしまった。」

諒「……MAZIDE？」

松上「マジっす……更新を期待した皆さん、本当にすみません。」

諒「体は大丈夫なのかよ？」

松上「体が怠い。今も文字を打つだけでシンドイ。」

諒「じゃあもう休め。明日に疲れを残すな。」

松上「すまん……本当に皆さん、更新出来なくてすみません。明日……に更新出来るか分かりませんが、必ず近い内に更新します。……本当にすみませんでした!!！」

第113話 ツカサとヒカル パート2（前書き）

お久しぶりです！

無事に治りました！！

しかも、バイトの面接に合格しました！！

凄く嬉しいです！！

久しぶりですが、名言コーナーはお休みです

すいません

第113話 ツカサとヒカル パート2

sideツカサ

僕とヒカルは黒いアルフォースブイドラモンと、僕達に力を貸してくれた二人の男の人は黒いデユナスモンと戦っている

本来なら僕とヒカルが一对一で戦わないとダメなんだけど、僕とヒカルが一对一で戦って勝つ可能性は・・・悔しいけど0%だ

僕達のキズナユニゾンの力は、ウォーグレイモンとブラックメタルガルルモンの力や技を使う事を可能にする

だけど、強すぎる力には必ずデメリットが存在する

このキズナユニゾンの力のデメリットは、体力の消費が激しい事だけど勝率0%が、僕達に力を貸してくれた二人の男の人が来てくれて二対一にしてくれたお陰で、僕達の勝率が格段に上がった

僕とヒカルが二体を倒す事は不可能だけど、一体だけを倒す事なら僕達にも出来る筈なんだ！

僕達出来る事は、精一杯やる！

それが諒君に出来る、僕達なりの協力だ！！

ツカサ「ガイアフォース！！」

僕は巨大な炎の玉を投げ付ける技の“ガイアフォース”を、黒いアルフォースブイドラモンに放った

「ハアアツ！！」

でも、黒いアルフォースブイドラモンは“ガイアフォース”をジャンプして避けた

だけど、避けられる事は作戦通り！！

ヒカル「コキュートスブレス!!」

「!?!」

ドッカーーン!!!

ヒカルが、黒いアルフォースブイドラモンに必殺技である“コキュートスブレス”を放った

黒いアルフォースブイドラモンは、ヒカルの事を忘れていたので“コキュートスブレス”を喰らった

僕達の戦闘スタイルは“コンビネーション”だ

僕達のコンビネーションは、最強じゃないがかなり強いと僕は想っている

キズナユニゾンの力は、僕達の戦闘スタイルにピッタリとあっているだから、僕達はこの作戦で戦った

正直な話、僕達の体力はほぼ0だ

僕は、嫌、僕達は黒いアルフォースブイドラモンの所を見た

ヒカル「・・・これで消えてなかったら、マジでピンチだぜ。」

ヒカルは、土煙が舞い上がってる場所・黒いアルフォースブイドラモンが居る場所を睨みながらそう言った

僕達は、“ガイアフォース”と“コキュートスブレス”を全力で放った

だから、僕達の体力はキズナユニゾンを維持するだけの分だけしか残ってない

ツカサ「そうだね・・・でも。」

僕はヒカルにそう言った
一つだけ、たった一つだけ黒いアルフォースブイドラモンを倒す方法がある

でも、この方法はリスクが大きい
しかも、それ+大博打だ
だから、この方法は使いたくない

「お前等・・・絶対に殺す!!!」

黒いアルフォースブイドラモンは、そう叫んで僕達の上に飛んだ
そして、胸のV字のアーマーにエネルギーを溜めだした

ヒカル「ど、どうする、ツカサ!？」

ヒカルは焦りながら僕に聞いてきた

・・・賭けてみるしかないな

ツカサ「ヒカル、僕にこの状況を180度引つ繰り返す方法があるんだ。だけど、その方法には大きなリスク・大きな賭けがあるんだ。・・・どうする?」

僕はヒカルにそう言うと、ヒカルは僕を見ながら笑ってきた

ヒカル「このまま無抵抗で死ぬるか。良いぜ、その作戦に乗ってやるよ!」

・・・ヒカルはヒカルだね

僕はヒカルにある指示を出して、僕達は目を瞑った

「遂に諦めたか！！だったら、楽に殺してやる！！シャイニングV
フォース！！！」

僕とヒカルに向かって超熱線が放たれたみたいだ
だけど僕は、目をずっと瞑っている
そして、僕とヒカルは同時に目を開けた

ツカサ・ヒカル「ジョグレス！！！」

僕達がそう言った瞬間、僕は光に包まれ“シャイニングVフォース”を防いだ

光の中で僕とヒカルが一つになっていく

でも、不思議と違和感は無かった

そして、僕とヒカルが完全に一つになった

僕達が完全に一つになると、僕達を包んでいた光が消え去った

「ば、バカな！？」

黒いアルフォースブイドラモンは、僕達の姿を見て驚いた

僕は右手に装備された“グレイソード”を、黒いアルフォースブ
イドラモンに向けて言った

ツカサ・ヒカル「オメガモンX、お前（貴様）を倒すため・・・此
処に見参！！！」

僕達はそう叫んで、黒いアルフォースブイドラモンに突っ込んだ

第113話 ツカサとヒカル パート2 (後書き)

次回予告

次回 オメガモンXとサバタとアレス

次回もお楽しみに!!

第114話 オメガモンXとサバタとアレス（前書き）

バイトが初日から8時間ありました

凄く疲れた・・・

今回も名言コーナーはお休みです

すみません、最近

第114話 オメガモンXとサバタとアレス

sideツカサ

僕とヒカルは、無事にジヨグレス出来た

ジヨグレスした理由とリスク・デメリットに付いて、説明するよ
まずジヨグレスした理由・・・

僕とヒカルの体力は、ほぼ0に近い

その少ない体力で、黒いアルフォースブイドラモンを倒すのは不可能だ

そこで考えたのはジヨグレス

僕達が合体して、黒いアルフォースブイドラモンと戦う

僕はウオーグレイモン・ヒカルはブラックメタルガルモン

ジヨグレス出来るかは不明だが、0%じゃない

もし成功すれば、オメガモンとなって戦う事が出来る

でも、リスクやデメリットもある

まずはリスク

本来、ウオーグレイモンとブラックメタルガルモンはジヨグレス
可能か不可能か分かっていない

ジヨグレスに失敗すれば、僕達は黒いアルフォースブイドラモンと
戦わずに負ける

第二に、体力の問題

ジヨグレスに成功しても、体力が保つかどうか分からない

だけど、この2つのリスクは無かった

ジヨグレスは無事に出来たし、体力も僕とヒカルの体力が+されて
いる

なので問題ない

でも、デメリットに問題があった

オメガモンになった事によって、体力の消費がウオーグレイモン立
ちの2倍だ

なので、僕達の体力が+されていてもオメガモンの姿でいれる時間が3分

直ぐに倒さないと僕達の負けだ

・・・急ごう！

「ぶっ殺してやる！！！」

黒いアルフォースブイドラモンが、僕達にそう叫んで突っ込んできた
僕達は武器を構えて黒いアルフォースブイドラモンに向かって走ろうとした

ドッカーーン！！！！

ドッカーーン！！！！

ツカサ・ヒカル「！！？」

突然、黒いアルフォースブイドラモンが爆発した
僕達は直ぐにその場に立ち止まり、黒いアルフォースブイドラモンを見た

「生きてるか・・・」

「無事みたいだな。」

すると、僕の前に力を貸してくれた二人の男の人が現れた
・・・黒いデユナスモンは！？

ヒカル「お、おい！い、否、な、なあ、黒いデュナスモンはどうしたんだ！？い、否、どうしたんですか！？」

ヒカルは、何度も言い直して二人に聞いた
僕も気になった

アイツの強さは僕達が一番知っている
なのに、どうして二人は此処に？

「アイツか？アイツなら消した。・・・弱かったがな。」

すると、緑色の長髪のポニータールをした男の人が答えてくれた
・・・この二人、僕達より強い
しかも、かなり・・・

「調子に乗るんじゃないやねえ！！！テメエ等を絶対にブチ殺してやる！！！」

黒いアルフォースブイドラモンが、必殺技を叫びながら溜めだした

「雑魚が・・・おい、お前。」

緑色の髪をした男の人じゃない男の人が、僕に話し掛けてきた
僕達は、その人を見た

「俺とアレスがアイツに必殺技を放つ。だからお前は、アイツを消せ。」

「ば、僕達が！？」

「此処はお前達の世界だ。お前達がアイツを倒すんだ。」

僕達は二人に言われたので、頷いた
すると、二人は銃と剣を構えた

ヒュン

そして、一瞬にして消えた

僕達は直ぐに黒いアルフォースブイドラモンの場所を見た
そこには、銃と剣を構えた二人が黒いアルフォースブイドラモンの
後ろにいた

「ダークネスオーバードライブ!!!!!!」

「龍炎刃!!!!!!」

ドツカーーン!!!!!!

ザシュツ!!!!!!

「

ツ!!!!!!!!!!!!」

黒いアルフォースブイドラモンは、この世の言葉じゃない言葉で悲
鳴をあげた

すると、二人は僕達を見てきた

「「今だ!!!!!!」」

僕達は直ぐに頷き、グレイソードに力を込めた

すると、グレイソードに刻まれた文字が光りだした

そして僕達は、黒いアルフォースブイドラモンに斬り掛かった

ツカサ・ヒカル「オールデリート!!!!!!」

ザシュツ!!!!!!

僕達が斬ると、黒いアルフォースブイドラモンは悲鳴をあげずに0と1のデータとなって消えた

・・・あれ？

ヒカル「悪い、ツカサ・・・俺はもう・・・無理だ。」

うん、僕ももう・・・無理だ

僕達はジヨグレスが解け、そのまま倒れた

諒君、僕達はもう無理だ

・・・必ず、生きて返ってきてね

僕はそのまま気絶した

第114話 オメガモンXとサバタとアレス（後書き）

次回は久しぶりに諒が登場！

次回 諒と平行世界の仲間、そして・・・

次回もお楽しみに！！

連絡

どうも、『流星のロックマン 転生者の絆物語』の作者の松上です

今日、サイトから“歌詞表記の禁止”が発表されました

俺の小説には、沢山の歌詞が表記されています

このまま放置していれば、サイトから去らなければなりません

ですので、今から歌詞が表記された話を修正します

ですので、2〜3日は更新出来ないかもしれません

本当に申し訳ありません

学芸会でやる予定だった“諒達のライブ”も急遽中止します

楽しみにしていた皆さん、本当にすいません

第115話 諒と平行世界の仲間、そして・・・（前書き）

久しぶりです！！

な、何とか歌詞が乗ってある話を修正しました

だから、凄く変になってます

『ペガサス・ドラゴン・レオ編』が終わったら、きちんと修正していきます

今回も名言コーナーはお休みです

第115話 諒と平行世界の仲間、そして・・・

side 諒

俺とミソラは今、黒いドウフトモン・黒いエグザモン・黒いクレニアムモンの姿をしたスコープオンと戦っている

キズナユニゾンの力で、なのは・フェイト・はやて・ティアナと合体して俺・キズナユニゾンの力でインペリアルドラモンFMの力を手に入れたミソラは、三体と互角に戦っている

キズナユニゾンに付いて、少しだけ説明しておくぜ

キズナユニゾンは、相手を100%信頼してないと使えない力

その力は多種多様で、相手に新しい力や武器・能力を授けたり、俺と合体する事を可能してくれる力だ

しかも、キズナユニゾンの力を授かった人間は、本来持っている力を20%も上昇させる事もある

だがデメリットも存在する

そのデメリットとは、体力の消費が激しい事だ

俺にはデメリットは存在しないが、キズナユニゾンの力を授かった人間・つまりミソラ達にはこのデメリットが存在する

キズナユニゾンの力に付いては、また今度詳しく話す

・・・話を戻すぜ

俺はフェイトの鎌とティアナの銃を使って・ミソラはポジトロンレーザーとギターを使って戦っている

一体なら簡単に倒せるのだが、三体を倒すと話は変わる

三体は、抜群のコンビネーションで俺とミソラの死角から攻撃してくる

幸い、なのは達が俺に伝えてくれるので今の所、俺達は無傷で戦っているが、時間は余り無い

ツカサ達は、キズナユニゾンの力を受け継いだがスコープオン達に

勝てるかどうかは五分五分だ

ツカサ達の体力が保つかどうかは俺にも分からない

スバルも、ブレイクキングになったとは言え、相手はスコープイオンの本体

考えたくはないが、皆が負ける可能性もあるわけだ

だから、こんな所で時間を無駄にしてる場合じゃない!!

俺は目の前に4つの魔法陣を出現させ・ミソラはポジトロンレーザーをエネルギーを溜めた

俺はエネルギーを貯める必要もなく直ぐに必殺技を放ち・ミソラはエネルギーを溜め終わったので俺と同時に必殺技を放った

諒・なのは「スターライトブレイカー!!!!!!」

諒・フェイト「プラズマザンバーブレイカー!!!!!!」

諒・はやて「ラグナロクブレイカー!!!!!!」

諒・ティアナ「シャイニングブレイカー!!!!!!」

ミソラ「ギガデス!!!!!!」

俺とミソラは三体に、皆の必殺技を放った

そして俺は直ぐに白眼を発動させ、皆の状況を確認した

スバル、スコープイオンと戦ってる

ツカサとヒカル、体力が無くなったので気絶しているが、誰かに担がれて移動している

暁と長官、体力は無くなっているが誰か達に肩を借りて移動している

神威と優奈、誰かに担がれて移動している

ください!!!」

だ、だが光子朗、そう言われても相手は今までの敵とは・・・

光子朗「!?危ない!!!」

光子朗が、俺達の後ろを見ながら叫んだ

俺とミソラは後ろに振り返り、何があったのかを確認した

すると、0と1のデータで体を覆った黒い“何か”が俺達を殺そうと刃物の様な物で斬り掛かってきた

俺達は目を瞑り、攻撃が来るのを待った

「まだ諦めるには、少し速いと思うよ。」

ガキンッ!!!

そんな声が聞こえたと思ったら、刃物と何かがぶつかる音がした

俺達は恐る恐る目を開けた

そこには、俺がよく知る姿・ブラックエースの姿をした人が刃物を剣で俺達を護りながら立っていた

「皆が君を信じて、スバルって言う子の所へ行けと言っているんだから、君は皆を信じてスバルって言う子の所へ行かないと!!!」

一体誰なんだ?

ああ、もう!!!

知らない人が沢山一気に現れたから、頭が付いていかねえ!!!

だが、この人や光子朗の言う通りだな!!!

諒「皆、此処を頼む！！そして、絶対に死なないでくれ！！！」

『はい(うん)(嗚呼)！！』

俺がそう言つと、皆はそう言つてくれた

知らない人が沢山居たが、今は皆を信じる！！

諒「行くぞ、ミソラ！！！」

ミソラ「う、うん！！」

俺とミソラは、全速力でスバルの所へ向かった

死なないでくれよ、皆・・・

俺はそう思いながら、その場を皆に任せた

第115話 諒と平行世界の仲間、そして・・・（後書き）

次回予告だけ

次回 光子朗と航

次回もお楽しみに！

第116話 光子朗と航（前書き）

危ねえ、ギリギリ一話書き上げれた!!

マジでヤバかった

そうそう、今日って言うても後少しなんですけど、初代デジアドの記念日なんですよ

まあ知ってる人が居たら良いですがね

今回も名言コーナーはお休みです

第116話 光子朗と航

side 航

俺は今、平行世界の光子朗さんと協力して黒いエグザモンと戦っている

平行世界の光子朗さんは、“紋章の力”と言う力で、俺達の足場を作ったりアポロモン達のアシストをしている

アポロモン「クツ、やっぱりコイツ、強いぜ!!!」

ディアナモン「さ、流石はロイヤルナイツの姿だけの事はあるね!!!」

俺のパートナーデジモンであるアポロモンとディアナモンが、黒いエグザモンと戦いながらそう俺達に言ってきた

光子朗「航君、^{アトラー}Aカブテリモンの準備が整いました!!!」

光子朗さんが、Aカブテリモンを見て俺に言ってきた

俺は光子朗さんの言葉を聞いて頷いて、アポロモン達を見た

航「アポロモン、ディアナモン!!!後退!!!」

俺が二体に指示を出すと、二体は俺達の所へ来た
そして俺達の後ろから、Aカブテリモンが現れた

Aカブテリモン「行きまっせ!!!光子朗はん!!!」

光子朗「はい!!!」

Aカプテリモンが光子朗さんにそう言うと、光子朗さんは返事をし
て胸に手を当てた
すると、光子朗さんの胸から太陽の様な形をした紋章・勇気の紋章
が現れた

そして、勇気の紋章はAカプテリモンの体を覆った
すると、Aカプテリモンから力が溢れていた

光子朗「勇気の紋章は、攻撃力を上昇させる!!」

光子朗さんがそう言うと、Aカプテリモンの角から巨大な電気が現
れた

Aカプテリモン「ホーンバスター改（光子朗命名）!!!」

ドツカーーーーン!!!!!!

黒いエグザモンは、Aカプテリモンの必殺技?の“ホーンバスター
改”を喰らい、爆発して土煙をあげた

光子朗「や、やったか!？」

光子朗さんは、Aカプテリモンを見ながらそう言った

・・・否、アイツはまだ生きている

こんな簡単に死ぬ様な奴じゃない

「クソガキ共があああああああああ!!!!!!」

土煙の中から、体に少し傷が付いた黒いエグザモンが現れた

「テメエ等は調子に乗り過ぎたあ！！今直ぐに、跡形もなく、この世から消してやるよ！！！」

黒いエグザモンは、俺達にそう言った

・・・そこまで言うのなら、俺達も全力でお前を倒す！！

航「光子朗さん、全力で行きますよ！！！」

俺は右手にオレンジのオーラを、左手に水色のオーラを出して光子朗さんに言った

光子朗「勿論です！！！」

光子朗さんはアカブテリモンをテントモンに退化さす、胸に手を当てて、勇気・友情・愛情・知識・純真・誠実・希望・光の紋章を出して返事をしてくれた

「今更何かをしようたって遅いんだよ！！！」

・・・それはどうかな？

航「見せてやるよ、俺達の全力をな！！行くぜ、アポロモン・デイアナモン！！オーバードライブ！！！」

光子朗「テントモン、ワープ進化です！！！」

俺は二つのオーラを二つのデジヴァイスに、光子朗さんは8つの紋章をテントモンの体の中に入れてそう言った

アポロモン「アポロモンオーバードライブ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ディアナモン「ディアナモンオーバードライブ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

テントモン「テントモンワープ進化!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

アポロモンは炎のオーラを纏ったアポロモンBMになり、ディアナモンは水のオーラを纏ったディアナモンBMになり、テントモンは巨大な黄金のヘラクレスオオカブトをイメージするデジモン・ヘラクルカブテリモンに進化した

「な!?!」

黒いエグザモンは、三体の姿を見て驚いた顔をした
そして、何かを悟った顔になった

・・・“自分の死”を感じたんだな

航「もう、終わりにしよう。」

俺がそう言うと、三体は必殺技を放とうとした
必殺技が放たれる前に、俺は黒いエグザモンに言った

「お前の敗因は、怒りに身を任せた事だ。」

怒りは力を与えるが、冷静な判断力を無くす感情

怒りで我を忘れては、何も解決しない

俺が言い終わると、三体は黒いエグザモンに必殺技を放った

Hカプテリモン「ギガブラスター!!!」

アポロモンBM「ソルブラスター!!!」

ディアナモンBM「アロー・オブ・アルテミス!!!」

ドッカー—————ン!!!!!!!

今日聞いた中で、一番大きな爆発音が鳴り響いた

光子朗「無事に終わりましたね。」

航「そうですね。・・・皆の所へ行きましょう。」

俺がそう言うと、光子朗さんは頷いた

三体のデジモンも、幼年期に退化して俺達の後ろに付いてきた

中心部 第一エリア

航・光子朗・アポロモンBM・ディアナモンBM・ヘラクレルカプ
テリモンVS黒いエグザモン

勝者

航・光子朗・アポロモンBM・ディアナモンBM・ヘラクレルカブ
テリモン

第116話 光子朗と航（後書き）

次回予告だけ

だって時間が無いから

次回 モトキとレインボー

次回もお楽しみに！！

第117話 モトキとレインボー（前書き）

今回はレインボーとモトキの話

・・・うん、スコープイオンの扱いが雑だ

まあ気にしないがな!!

今回は久々に名言を載せます!!

今回名言を覚えてくれたのはAIさんです!!

ガンダムOOで

『兵器でもなく・・・破壊者でもなく・・・俺とガンダムは変わる

』!

『破壊する！俺たちが破壊する！！俺たちの意志でっ！！』

By刹那・F・セイエイ

『よお、お前・・・満足か？こんな世界で・・・俺は・・・嫌だね・・・』

Byニール・ディランディ

ありがとうございました!!

第117話 モトキとレインボー

side三人称

此処は中心部第二エリア

此処には、二人の人間と七体のモンスターが居る

だが、二人の人間と六体のモンスターは固まっているが、一体のモンスターは皆と向かい合わせで立っている

「・・・黙っててもしょうがない。そろそろ殺るか。」

紅色の髪をした一人の人間・南雲　モトキが、向かい合わせに立っているモンスターに言った

「黙れ。お前達は、俺に瞬殺されるんだ。痛み無く殺してやるから、黙っとけ。」

モトキ達と向かい合わせに立っているモンスター・黒いドウフトモンの姿をしたスコープオンがそう言った

黒いドウフトモンがそう言うと、モトキの横に立っていたアッシュグレイの髪の少年が一步前に出た

「瞬殺？冗談は顔だけにしとけよ。・・・お前等がやるうとしてる事が、どれだけの人を悲しませると思ってたんだよ？俺は、否、此処で戦ってる皆は、誰かが悲しんでる顔を見たくないから戦ってるんだ。俺達だけ、お前に負ける訳にはいかないだろうが。」

アッシュグレイの髪の少年・レインボーは、黒いドウフトモンを睨みながらそう言った

レインボーがそう言い終わると、レインボーの後ろに居た六体のモ

ンスター達・ポケモン達が、黒いドウフトモンに身構えた

モトキ「レインさんの言う通りだ。俺達は絶対に勝つ。負けるのはお前、だ!!」

ガツキーーン!!!

モトキはそう言いながら漆黒の日本刀・天鎖斬月を口寄せで出して、黒いドウフトモンの後ろに瞬歩で回り込んで斬り掛かった
だが黒いドウフトモンは、モトキの攻撃をギリギリ感じ取って防御した

だが此処で忘れてはいけない
この場にはもう一人(、、、)、黒いドウフトモンと戦う人間が居る事を

レイン「ロコン、“火炎放射”!!」

レインは、自分の隣に居たポケモン・ロコンにそう指示を出した
ロコンはレインの指示に従い、空気を口から思いっきり吸って吐いた

ブオオオオオオオ!!!

ロコンの口から大量の炎・“火炎放射”が黒いドウフトモンに放たれた

「!?!クツ!!」

“ 火炎放射 ” に気付いた黒いドウフトモンは、紙一重で “ 火炎放射 ” を避けた

ザシユツ！！

その瞬間、モトキは黒いドウフトモンの懐に入り込み、天鎖斬月で斬った

「グハツ！！」

斬られた黒いドウフトモンは、方膝を付いて座り込んだ
すると、急に空が暑くなった

黒いドウフトモンは、空を見上げた
すると、太陽が二つ出来ていた

一つは本物の太陽・もう一つはロコンが “ 日本晴れ ” で作り出した
擬似太陽

それに気付いた黒いドウフトモンは、レイン達が居る場所を見た
すると、ポケモン達はエネルギーを溜めていた
モトキは既に、黒いドウフトモンと距離を取っていた

レイン「ロコン、“ソーラービーム”！！ラプラス、“ハイドロポンプ”！！バンギラス、“破壊光線”！！ボーマンダ、“龍の息吹”！！ルカリオ、“波動弾”！！グレイシア、“冷凍ビーム”！！」

レインが全てのポケモンに指示を出すと、ポケモン達は溜めていたエネルギーを黒いドウフトモンに放った

黒いドウフトモンは避けようとしたが、モトキが与えたダメージの

所為で避けようにも動けなかった

ドツカーーーーン!!!!!!

大きな爆発音が鳴り響いき、土煙が舞い上がった

だが土煙が舞い上がった途端、中から黒いドウフトモンが上に跳んだ

「調子に乗ってるんじゃないねえ!!!!!!今直ぐ、この星ごと消してやるよお!!!!!!」

黒いドウフトモンは、自分が追い詰められている事に怒り、レイン達を見ながら叫んだ

だが、黒いドウフトモンはそこである事に気付いた
モトキが何処にも居ない

黒いドウフトモンは、辺りを見渡しモトキを探した

モトキ「・・・無月」

ザシュツ!!!!!!

ドツカーーーーン!!!!!!

モトキは瞬歩で黒いドウフトモンの前に現れ、必殺技の“無月”を使い黒いドウフトモンを攻撃した

そして黒いドウフトモンが真っ二つになった瞬間、後ろのビルなど

が崩れ去った

モトキ「お前の敗因は、一つの集中し過ぎた事だ。」

モトキは、レインの所へ歩きながら黒いドウフトモンに言った

「あ・・・ああ・・・」

黒いドウフトモンは、0と1のデータになって消えた

レイン「被害を押さえようと思った？」

レインは、ボーマンダ以外のポケモンをモンスターボールに戻しながらモトキに言った

モトキ「あれでも結構押さえた方。手加減して放ったから、疲れた。ボーマンダの上で寝る。皆の所に合流したら、優しく起こして。」

モトキはレインにそう言いながらボーマンダに乗り、器用に転がって寝た

レイン「全く。」

レインは一度溜め息を吐いて、ボーマンダーに乗った
そしてレイン達は、皆の所に向かった

中心部 第二エリア

モトキ・レインとそのポケモン達VS黒いドウフトモン

勝者

モトキ・レインとそのポケモン達

第117話 モトキとレインボー（後書き）

頑張ろう!!

次回（作者曰く）最強の力を持っている劉

次回もお楽しみに!!

第118話 (作者曰く)最強の力を持っている劉(前書き)

な、なんとか書けた

急いで書いたから、凄すご都合主義です！

広い心を持って読んでください

今回は名言コーナーはお休みです

第118話 (作者曰く) 最強の力を持っている劉

side 劉

俺は今、黒いクレニウムモンの姿をしたスコープオンと戦っている

「チツ、雑魚が良い気になるなよ!」

黒いクレニウムモンは俺にそう言って、回し蹴りをしてきた

だが俺は、紙一重で黒いクレニウムモンの回し蹴りを避け、瞬時に千鳥を発動させ、黒いクレニウムモンの胸に向かって放った

ドシュツ!!

「

ツ!!!

!!!!!!」

俺が放った千鳥は、黒いクレニウムモンの胸を貫通した

胸を貫通させられた黒いクレニウムモンは、この世の言葉じゃない言葉で悲鳴をあげた

俺は直ぐに手を引つ込抜き、後ろにジャンプして距離をとった

黒いクレニウムモンは、悲鳴をあげながら完全に狂った目で俺を睨み付けていた

俺は直ぐに右手に螺旋丸を作って黒いクレニウムモンに向かって走りだした

黒いクレニウムモンは、狂った走り方で走りながら俺に突っ込んできた

劉「螺旋丸!!」

俺は、黒いクレニウムモンに螺旋丸を放った

「掛かったな!!」

黒いクレニウムモンは、そう言っただけで俺の螺旋丸を紙一重で避けて俺の右腕を掴んだ
それと同時に、俺の左腕を捻りながら掴んできた

「フツハツハツハツ!!!俺が痛みで狂ったと、本当に思っていたのか?俺を舐めるのもいい加減にしろ!!!」

ボキイツ!!!

劉「!!!?」

俺の左腕が折れた

俺は悲鳴をあげそうになったが、我慢した
俺の左腕は、重力に従い下に下りた

「これでデメエは、片腕しか使えなくなった、な!!!」

ボキイツ!!!

劉「う、ウワアアアアアアアアアアアアアア!!!」

俺は、左腕だけじゃなく右腕も折られた

俺はその痛みに耐えられなくなり、悲鳴をあげた
そして、思いつき蹴られてぶっ飛ばされた

「ワリイな、もう片方の腕まで折っちまった。だが、俺を舐めた罪はデカい。ゆっくり、じっくり、沢山痛み付けてから殺してやるよ。」

「

黒いクレニウムモンは、俺にそう言いながら歩いてきた

俺は痛みを耐えながら、立ち上がって黒いクレニウムモンを睨んだ

「なんだ、まだ立てる元気があるじゃねえか。じゃあ、少し本気になっても良いよな！！！」

黒いクレニウムモンは、そう言って俺に向かって走ってきた

・・・他人の世界だったか使いたくなかったが、使わないとヤバいな
後で消せば問題無いだろう、多分

俺は真っ直ぐ立ち上がって、ある言葉を言った

劉「俺が思いつき蹴った奴は、一時的に能力全てを封印される常識」

俺はそう言って写輪丸を発動させ、黒いクレニウムモンに突っ込んだ

「くたばるんじゃねえぞ！！！」

黒いクレニウムモンはそう言って、肉眼では捉えられないスピードで殴り掛かってきた

だが俺は、写輪丸を発動させているので、紙一重で黒いクレニウム

モンの攻撃を避けた
避けた瞬間、俺は黒いクレニウムモンの腹を思いっきり蹴った
すると黒いクレニウムモンは、簡単にぶっ飛んだ

「グハツ!!!」

短い悲鳴を言って

劉「俺が望めば、どんな事でも可能になる常識”。俺は望む。俺の怪我を完治させる事を望む。」

俺がそう言つと、両腕の痛みが完全に無くなった
そして両腕を回したりしてみたが、痛みは全く無かった

「ば、バカな!!!何故俺の力が封印されているんだ!?しかも、俺は確実に両腕を折った!!!なのに、何故完全に治ってるんだあ!!!」

少し離れた場所に居る黒いクレニウムモンは、大きな声で言った
俺は左手に千鳥・右手に螺旋丸を発動させ、黒いクレニウムモンに聞こえるか聞こえないかと言う微妙な声の大きさを言った

劉「俺の力は“常識を操る程度の能力”。お前の力が突然封印されたのも、俺の両腕が完治したのも、俺がそうなる常識を創った(、)、(、)からだ。・・・俺にこの力を使わせた事を、後悔しながら消える!!!」

俺は言い終わると、黒いクレニウムモンに向かって全速力で走った

「デタラメを言うなアアアアアアアア!!!!!!!!!」

第118話 (作者曰く)最強の力を持っている劉(後書き)

次回予告だけ

次回 漆黒のエース・優星

次回もお楽しみに!!

第119話 漆黒のエース・優星（前書き）

優星の戦い方や口調はこれであってるのか？

一生懸命、小説を読んで書いたから、多分あってる・・・と願いたい

今回は名言コーナーはお休みです

第119話 漆黒のEース・優星

side 優星

僕は今、0と1のデータで覆われた謎の敵と向かい合わせになって立っている

僕は相棒のエクスを構えているのに、0と1のデータで覆われた謎の敵は全く変化が無くそこに浮かんでいた
・・・このままじゃ、時間が勿体ない！！

優星「行くぞ！！」

僕はそう言っで、0と1のデータで覆われた謎の敵にエクスで斬り掛かった

「フツハツハツハツ！！！」

0と1のデータで覆われた謎の敵は突然、笑いだし0と1データが消え始めた

僕は急ブレーキし、急いで距離を取った

優星「一体・・・何が出てくるんだ？」

僕は警戒しながら、0と1のデータで覆われた謎の敵を睨みながら言った

そして0と1のデータが完全に消えると、一体のデジモンが現れた

「ククク、久々の現実世界の為か、少々この姿になるのに時間が掛かったな。」

デジモンは辺りを見渡しながらそう言った

そのデジモンの特徴は、牧師のような服、だが色合いが悪魔の様な服で、その服の所為で目以外の顔の部分は隠れていて、背中には大きな悪魔の羽根が生えていた

・・・なる程、だからアフロディは僕に助けを求めたのか
コイツは、普通の人が戦っても多分、否、絶対に勝てない
かと言って、他の皆はスコープオンって奴の相手で手一杯
・・・必ず、コイツを倒す！！

「ウォーミングアップの為人形まで用意されていて、この世界は俺に優しいんだな。」

悪魔の様なデジモンは、僕に殺気を放ちながら見てきた

こ、コイツ、出来る！！

僕は気を引き締め、エクスをもう一度構え直した

優星「お前に聞く！お前は一体誰なんだ！？スコープオンなのか！？」

僕がそう聞くと、悪魔の様なデジモンは声の高さを上げて言った

「スコープオン？あんな出来損ないと一緒にするな！！俺の名前はコピー体だが“闇の帝王”！！この世界を滅ぼすデジモン！！そして、この姿はデーモン！！デジタルワールドの“七大魔王”と恐れられているデジモンの一体だ！！！！」

・・・滅ぼす、だって？

優星「この世界の人が！動物が！植物が！世界が！君に何をしたら言うんだ！！何の目的で、世界を滅ぼそうとしてるんだ！！？」

僕は声を荒げながら、デジモン、否、闇の帝王のコピー体、否、デ
ーモンに聞いた
するとデーモンは、大声で笑いながら僕に言った

「暇潰し、だよ。」

ザシュツ！！！！

「！？？グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！？」

デーモンがそう言った瞬間、僕はイクスでデーモンの右腕を斬り落
とした

僕は許せなかった

“暇潰し”と言う自分勝手な事で、人を、動物を、植物を、世界を
破壊する事に僕は許せなかった

僕は今まで、色んな罪人を見てきた

何故人を殺そうとしたのかを聞いたら“くを殺す為”や“く”に復讐
する為”と言った理由が殆どだった

だが、“暇潰し”と言う理由だけで人を殺そうとした人は誰一人居
なかった

「き、貴様ア！！！！」

デーモンは僕に殺気を放ちながら睨んできたが、僕はデーモン以上
の殺気を放ちながら見た

優星「お前は僕が倒す。君は僕を怒らせた。僕は僕を怒らせた事を、後

悔するんだ!!」

エクス>Black End Galaxy<

僕は左手に小さな擬似ブラックホールを作り出し、デーモンに投げた
小さな擬似ブラックホールがデーモンに触れると、擬似ブラックホ
ールが大きくなった

僕はエクスを擬似ブラックホールに構えた

優星「ブラックエンド……」

そして、全速力で擬似ブラックホールを斬った

優星「ギャラクシー!!!!!!」

ドッカーーーン!!!!!!

擬似ブラックホールは、大きな爆発音を響かせて爆発した

僕の必殺技の“ブラックエンドギャラクシー”は、擬似ブラックホ
ールを斬るスピードが速ければ速い程威力が高くなる

僕は全速力で擬似ブラックホールを斬った

なので、“ブラックエンドギャラクシー”の威力は最大!!

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

デーモンは悲鳴をあげて倒れた

そして0と1のデータに分解していった

「ククク、まさか一撃で俺が倒されるとはな・・・だが覚えておけ、そして、新井 諒に伝える。俺は近い内に、必ず貴様を、否、この世界を滅ぼすとな!!!!フハハハハハハハハハハハハハハハ・・・」

そう言ってデーモンは完全に消えた

優星「・・・そんな未来には、絶対にならない。諒がこの世界に居る限り。そして、もし諒がピンチになっても、僕達が今回みたいに助けに来る。だから、この世界は滅びたりしない!」

僕は誰も居ない場所にそう言った
そして、僕は皆の所へ向かった

中心部 第四エリア

優星VSデーモン

勝者

優星

第119話 漆黒のエース・優星（後書き）

次回予告だけ〜

次回 激突！スバルVSギンガ

次回もお楽しみに！！

第120話 激突！スバルVSギンガ（前書き）

お久しぶりです!!

待たせてしまつてすいません!!（待つてくれていた人が居るかは知りませんが・・・）

夏休みの宿題＋バイトの所為で、更新が出来ませんでした

短いですが、気にしないでください

・・・次回を頑張ります

今回も名言コーナーはお休みです

第120話 激突！スバルVSギンガ

sideスバル

僕は今、ペガサスの力を使ってギンガちゃん・本体のスコープオンが居る場所に空を飛んで向かっている

ウォーロック「・・・スバル、お前は戦えるのか？」

ウォーロックが突然、僕に話し掛けてきた

勿論ギンガちゃん・本体のスコープオンと戦える・・・と言うと嘘になる

はつきり言っつて、僕も戦えるかどうか分からない

幾ら相手がスコープオンと言えど、体はギンガちゃんの体

僕が戦えば、ギンガちゃんの体を傷付けてしまう可能性だってある

スバル「・・・戦うんじゃない、救うんだ。」

ウォーロック「・・・お前らしいな。」

僕が言うと、ウォーロックはそう言った

戦う事だけが解決策じゃない

ギンガちゃんだけを救い、スコープオンだけを倒す

必ず、必ずそれを可能にする方法がある筈だ

ウォーロック「着いたみたいだな。」

ウォーロックがそう言ったので、僕はそこで進むのを止めた

僕の前には、殺気を放っていて・漆黒の日本刀を右手に持っていて・

漆黒のデジヴァイスを左手に持っている女の子、ギンガちゃん・本

体のスコープオンが居た

ギンガ「フン、お前一人で俺の所に来るとは……お前達は俺を舐めてるのか？」

ギンガちゃん・本体のスコープオンは、僕に更に殺気を放ちながら睨んできた

僕は……

スバル「僕は諒君に信頼されて一人で此処に来たんだ！決して、お前を舐めてる訳じゃない！！」

僕がそう言うと、ギンガちゃん・本体のスコープオンは一瞬驚いた顔をしたが直ぐに大声を出して笑いだした

「プハツハツハツハツハ！！新井 諒が！？お前を！？信頼して！？殺された奴が殺した奴を信頼して！？お前等は頭が狂ってんじやねえか！？プハツハツハツハツハ！！！！」

確かに僕は、お前に騙されたとは言え諒君を殺してしまった後悔し、自分に憎み、希望を捨て、負の考えばかり考えていたでも、諒君は僕に勇気をくれた、励ましてくれた、許してくれた

スバル「君が何と言おうと、僕は諒君を信頼している！！僕は確かにやってはいけない事をしてしまった。だけど、諒君はこんな僕の手を必要としてくれた！！だから、僕は諒君の信頼に応える！！諒君は僕に“お前を倒せ”と言った！！だから、僕はお前を倒す！！」

僕はライトブレードとダークガンを出して、ギンガちゃん・本体のスコープオンに構えた

ギンガ「フン、だったらお前達の“絆”を、俺の手で破壊してやるよ!!!」

ギンガちゃん・本体のスコープピオンは、漆黒のデジヴァイスを上
上げた

すると、ギンガちゃん・本体のスコープピオンは黒い0と1のデータ
に包まれた

ギンガ「後悔しろ・・・たった一人で俺の所に来た事をな。」

スバル「後悔はしない！僕がお前を倒すから!!!」

僕はギンガちゃん・本体のスコープピオンに、そう言った

すると、ギンガちゃん・本体のスコープピオンを包んでいた黒い0と
1のデータが全部消えた

そこに居たのはギンガちゃんの姿ではなく、“空白の席の主”や“
孤高の戦士”と呼ばれる十三番目のロイヤルナイツのデジモン・ア
ルフアモンの姿が立っていた

でも、普通のアルファモンの姿は黒なのに、ギンガちゃん・本体の
スコープピオンの姿は白だった

ギンガ「これが俺の全力だ。お前を全力で殺してやる。」

スバル「僕はギンガちゃんを救い、お前を倒す!!!行くぞ!!!」

僕と白いアルファモンの戦いが始まった

第120話 激突！スバルVSギンガ（後書き）

今回も次回予告だけ

次回 スコーピオン、全てを終わらせよう

次回もお楽しみに！！

第121話 さあ、決着をつけよう（前書き）

ぶ、無事に更新・・・

田舎に帰る車の中から更新・・・

も、文字を打つのが大変だった・・・

今回も名言コーナーはお休みです

第121話 さあ、決着をつけよう

sideスバル

スバル「ハアアアアアアアアアア！！！！」

僕は白いアルファモンに近付き、ライトブレードで斬り掛かった

「フンツ！！！」

ドスツ！！

スバル「グフツ！！！」

僕は白いアルファモンに斬り掛かった、が、カウンターを喰らい腹を思いつきり殴られてぶっ飛ばされた

スバル「ゲホツゲホツ！！！」

僕は呼吸が出来なくなつて、蒸せた

白いアルファモンは、僕の前に来た

ギンガ「“空白の席の主”や“孤高の戦士”と言う異名を持つてるだけの事はある。これ程迄に実力の差があるなんてな・・・」

白いアルファモンは、僕にそう言って嘲笑うかのように笑った

僕は直ぐに立ち上がりバックステップして、ライトブレードとダークガンで白いアルファモンに構えた

スバル「まだ、勝負が、付いた、訳じゃない!!」

僕は途切れ途切れで、白いアルファモンに言った

・・・少しヤバいな

肋骨が二、三本折れてるね、間違いなく

でも、僕は負ける訳にはいかないんだ!

諒君と約束したから・・・

母さんを、天地さんを、皆を、この世界を護りたいから・・・

そして何より・・・

ギンガちゃんを救いたいから!!

スバル「僕は負ける訳にはいかないんだ!!」

僕はライトブレードをグレイソードに・ダークガンをガルルキヤノンに変えて白いアルファモンに突っ込んだ

ギンガ「勇気と死にたがりは別だぞ？」

ドスツ!!

スバル「!!!?」

僕は突然、白いアルファモンに一発(、)殴られた
そして僕は血を吐きながらぶっ飛ばされた

スバル「!!!?グフツ!!」

僕は起き上がれず血を吐き続けた

一発（、、）しか殴られてないのに、体中が悲鳴をあげている
体に力が入らない

目も霞んできた

何で？

ギンガ「アルファインフォース」・・・インターバルに5分も掛
かり使用時間も僅か5秒だが、十分使える」

白いアルファモンは、僕の前に立ちそう言った

“アルファインフォース”・・・だって？

じゃ、じゃあ、僕は一発だけ（、、）殴られたんじゃなくて、何発
も（、）殴られたって言うの・・・？

ギンガ「しかし、ホントにコイツは何しに来たんだ？大口を叩いて
た癖に、随分と弱かったな・・・まあ良いか。」

そうだよ、結局僕はコイツにダメージを与えるどころか、傷一つ付
けてない・・・

諒君は、死んでも僕達を護る為に生き返ってくれて、今も戦ってる
のに・・・

ツカサ君とヒカル君は、大怪我をしたのに無茶をして此処に来て戦
ってるのに・・・

なのはちゃん・フェイトちゃん・はやてちゃん・ティアナちゃん・
ミソラちゃんは、心が完全に壊れて今も不安定な状態で戦ってるの
に・・・

暁さんと長官は、自身の体を傷付けてデジヒュージョンして僕達やこの世界を護る為に戦ってるのに……

神威君と優奈ちゃんも、この世界の人間じゃないのにボロボロになるまで戦ってくれてるのに……

そして何より、ギンガちゃんはスコピオンに体を乗っ取られてやりたくない事をずっとやっていて今でも心で泣いていて、僕達に助けを求めているのに……

僕は……

僕は一体何でこんな所で倒れてるんだ!?

ギンガ「満足に喋る事も出来ないか……だったら……」

白いアルファモンは、漆黒の日本刀を僕に構えてきた

ギンガ「直ぐに楽にしてやるよ。」

……もうダメだ

諦めたくなかったけど、もう僕には、戦うどころか立つ力さえ残ってない……

ごめんね、皆……

僕はもう……

諒「諦めんな!スバル!」

諒・・・君？

なのは『まだ勝つ可能性が残ってるのに、諦めちゃダメだよ！』

なのは・・・ちゃん？

フェイト『スバルはまだ、全力を出して戦ってない！』

フェイト・・・ちゃん？

はやて『諦めるちゅう選択肢を使ってええのは、自分の全てを出し切った人しか使ったらあかん！』

はやて・・・ちゃん？

ティアナ『スバル君は一人で戦ってないんだよ？』

ティアナ・・・ちゃん？

ミソラ『私達が何時も、スバル君の傍で一緒に戦ってるよ！』

ミソラ・・・ちゃん？

ツカサ『例えどれだけ離れていても、スバル君は一人で戦ってないよ！』

ツカサ・・・君？

ヒカル『俺達は絆で繋がってたんだ！』

ヒカル・・・君？

暁『絆の力は、1にも、10にも100にも1000にもなる！
そ
うだろ！？』

暁・・・さん？

大吾『スバル、お前はこれだけの仲間が居てお前を支えてくれる
のに、お前はそれを無視して諦めるのか？』

と、父さん！？

大吾『自信を持って、スバル。自分を信じろ、スバル。俺もお前の傍
で戦ってやる。だから、

立て！！！！

星河 スバル！！！！

」

その瞬間、僕の体に力が漲ってきた

ギンガ「死ねえ!!!」

白いアルファモンは、漆黒の日本刀で僕に斬り掛かってきた

僕は紙一重で白いアルファモンの漆黒の日本刀を避け、ペガサスの翼を使い空を飛んだ

す、凄い!!!

体が全然痛くない・・・それに、今まで以上に体が軽い!!

ギンガ「ば、バカな!? 体の骨を全て痛み付け、立てない体にしたのに・・・有り得ない!!!」

白いアルファモンは、大きな声を出して驚いていた僕だって、自分に対して驚いてるさ

大吾「ブレイクキングは、仲間との絆や信頼が強ければ強い程お前に力を与えてくれる。体が治ったのも、ブレイクキングがお前の体の治癒能力を活性化させたからだ。」

父さんが僕に、ブレイクキングの本当の力に付いて教えてくれた

・・・皆の声が僕に力を与えてくれたんだね

スバル「スコールピオン!僕はまだ、負けてない!!!」

僕はそう言つて、グレイソードとガールキャノンを消した
そして両手を重ねると僕の腕にペガサス・レオ・ドラゴンの頭が現
れた

そして僕は、ペガサス・レオ・ドラゴンの頭にエネルギーを溜めた、
否、勝手に溜まったと言つた方が正確だろう

僕は何もしてないのに、エネルギーが勝手に溜まった

ギンガ「クツ、貴様の好きな様にはさせねえ!!」

そう白いアルファモンが叫ぶと、一瞬にして僕の前に来た

僕は直ぐに防御の構えをとつた

もう間に合わない事は分かつてる

“アルファインフォース”の強さは既に一度体験している
だけど、何か(、)が僕に防御の構えをさせた

ギンガ「!!?ば、バカな・・・」

白いアルファモンは、僕の腹が後数cmで当たる所で拳を止めていた
な、何で!?

ギンガ「スバル君!!」

頭の中にギンガちゃんの声が聞こえてきた

で、でもギンガちゃんは・・・

ギンガ「聞いて、スバル君!私が本当のギンガ・ナカジマ!スバル
君の頑張りを見て、私も諦めないで反撃しようと思つたんだ!私の
出来る事は、スコープオンに“アルファインフォース”を使わせな
い事だけ・・・今のうちに、必殺技を!もう、そう長くは保たない
!!」

スバル「ぎ、ギンガちゃん!!!」

そこでギンガちゃんの声が途絶えた
・・・ありがとう、ギンガちゃん

スバル「ウォーロック、準備は？」

ウォーロック「100%を超えて120%、否、150%フルチャ
ージ完了だ!!!」

流石は僕の相棒の一体だね!

ヒカリ「だったら私達が!」

ヤミ「200%にしてやるぜ!」

ヒカリとヤミがそう言うと、ペガサス・レオ・ドラゴンの頭が更に
輝きだした

スバル「ありがとう、ヒカリ!ヤミ!」

僕はお礼をバックステップして、ペガサス・レオ・ドラゴンの頭を
白いアルファモンに向けた

ギンガ「が、ガキが!!!調子に乗りやがって!!!この地球ごと、消
してやる!!!!」

白いアルファモンが必殺技を放とうとした
だけど!!!

スバル「これで、お前は最後だ!!!
最終奥義!!!サテライト……」

ギンガ「!?お前から消して……クソッ!?このくそガキがあ
!!!」

僕に白いアルファモンは必殺技を放とうとしたが、また体が突然止
まった

ギンガ「スバル君!!!今だよ!!!」

本当にありがとう、ギンガちゃん!!!

スバル「ブレイカー!!!!!!」

ペガサス・レオ・ドラゴンの顔から赤・青・緑の声旋が螺旋状にな
って放たれた

ドッカーン!!!

ギンガ「まだだ……まだ、俺は、死なねえ!!!!!!」

白いアルファモンは、僕の“サテライトブレイカー”を喰らわず受
けとめていた

ウォーロック「スバル、もっとパワーを上げろ!!!!!!」

む、無茶だ！

僕はもう、全力を出してるんだ！！
も、もうこれ以上は・・・

諒「だったら、俺達が力を貸してやるよ！！」

スバル「！？み、皆ア！！」

僕の横に、諒君・なのはちゃん・フェイトちゃん・はやてちゃん・
ティアナちゃん・ミソラちゃんが来てくれた

諒「これで決める！！カイザーデルタ・・・」

なのは「全力全開！！スターライト・・・」

フェイト「雷光一閃！！プラズマザンバー・・・」

はやて「響け終焉の笛！！ラグナロク・・・」

ティアナ「絶望を打ち砕く光！！シャイニング・・・」

ミソラ「究極進化！！パーフェクト・・・」

諒君達は必殺技を一瞬で溜めた

・・・流石は僕の親友であり、仲間であり、ライバルでもある皆だ
！！

そして諒君達は、魔法陣を白いアルファモンに向けた
そして

『ブレイカー！！！！！！！！』

僕はギンガちゃんの体を揺すってギンガちゃんの名を叫んだ

ギンガ「ん……うん……」

するとギンガちゃんは、目を開けた

スバル「だ、大丈夫、ぎ、ギンガちゃん？」

僕はギンガちゃんに聞くと、ギンガちゃんは僕に頬笑んでくれた

ギンガ「大丈夫だよ、スバル君。私をスコープオンから、闇から、救ってくれてありがとう。」

ギンガちゃんはそう言って僕の頬にキスをしてきた
……!?

スバル「ぎ、ギンガちゃん!?!?!?!?!」

僕は顔を赤くして動揺しながらギンガちゃんを見た
ギンガちゃんはずっと頬笑んでいた

「 諒「あゝ、良い雰囲気の所悪いんだが、まだラスボスが残ってるぜ。」

「 諒君達が僕達の後ろに来て言ってきた
そつだ、まだFM王が居るんだつた!
でも僕はもう戦う力は残ってない、悔しいけど……」

ギンガ「……スバル君、私に残された力を、スバル君に与えるね。」

「ギンガちゃんはその言うて、僕に力を分けてくれた

なのは「じゃあ諒くんには私達が力を分けるね！」

フェイト「私達に残された力は少ないけど、皆の力を分けるから。」

諒君はなのはちゃん達から力を分けてもらってた

pipipipipipi!!!

すると突然、僕のトランサーがなった

僕は皆の前に画面を出現させた

そこには委員長やゴン太、キザマロ・天地さんと宇田海さんの顔があった

委員長「ロックマン、いえ、星河君、それに新井君。貴方達の事はゴン太や天地さんから聞いたわ。・・・貴方達には言いたい事が沢山あるわ。でも、今はそんな事を言ってる時間は無い。だから一言一言だけ私達から貴方達に言うわ。・・・“無事に帰ってきなさい”！私達ができる事は、貴方達の無事を祈る事だけ。だから、必ず、無事に帰ってきなさい！！分かったわね！？」

・・・委員長、僕は君の事を誤解してたよ
君は凄く皆の事を心配してくれてたんだね
他の皆も・・・

スバル「分かったよ委員長、それに皆！！僕達は必ず、無事に帰っ

てくる!!」

諒「だから、安心してな。帰ってきたらパーティーをするから、その準備をしておいてくれ。」

僕が言い終わると、諒君が続けてそう言った

委員長『・・・絶対よ!!・・・必ず無事に。』

委員長が言い終わると、通信が切れた

スバル「さあ諒君、ラストバトルをしに行くよ!!」

諒「嗚呼!行くぞ、スバル!!」

僕と諒君は、諒君の力を使ってFM王が居る宇宙に向かった
皆の応援を聞きながら・・・

第121話 さあ、決着をつけよう（後書き）

さて、『ペガサス・レオ・ドラゴン編』もいよいよラストバトル!!

次回も楽しみにしててください!!

次回 ラストバトル!!ライド・オン!!

次回もお楽しみに!!

第122話 ラストバトル!!ライド・オン!!(前書き)

さあ、『ペガサス・レオ・ドラゴン編』も残り僅か!!

しっかり楽しんでください!!

今回も名言コーナーはお休みです!!

第122話 ラストバトル！！ライド・オン！！

side 諒

俺は自身の力を使い、FM王が居る宇宙の電波に向かった

スバルにも俺の力を使い、宇宙の電波でも戦える様にしてある

暫く宇宙に出来たウェーブロードを走っていると、前からある物が
見えてきた

ウォーロック「こ、これは、大吾が乗っていた奴じゃねえか!？」

スバル「此処に、FM王が居るんだね。」

そう、スバルの父親である星河 大吾さんが宇宙で乗っていた機体
であり・FM王が居る場所のキズナ号で俺達の前に姿を現した
俺は中に入れる場所を探し、入れる場所があったので中に入った
スバルも、俺の後ろに付いてきた

キズナ号の中は、少々壊れているが完全に壊れている訳では無かった
フォルテ「諒、此処には酸素がある。一度ウェーブアウトして、体
力を温存して進もう。電波世界では、ウイルスの反応が沢山あるか
らな。」

諒「分かった、スバル、一度ウェーブアウト出来る場所を探して、
ウェーブアウトして進もう。」

俺がスバルにそう言うと、スバルは頷いてくれた
そして俺達はウェーブアウト出来る場所を探し、近くにあったので
ウェーブアウトした

諒「時間が無いんだ、急ごう。」

俺はそう言って堅く閉ざされた扉の前に行った
ゲームでは、この中の電波に入ってスイッチを切り替えないといけ
ないのだが、俺の力を使えばそんな事をする必要は無い
それに、時間が無いし体力を使うのが勿体ない
俺は天鎖斬月を召喚し、扉を素早く縦に斬った

ギイイイイ・・・ドカンッ！！！！

扉はゆっくりと倒れていき、大きな音を出して床に倒れた
俺とスバルは、扉を跨いで奥に進んでいった

フォルテ「諒、この扉の先に今迄感じた事の無い電波の量が溢れて
いる。この先に、FM王が居る筈だ。」

フォルテは目の前の扉の先をサーチして、俺達にそう言ってきた
俺達はあの後、扉を天鎖斬月で無理矢理開けて無傷で奥に進んでい
った

そして俺は今迄通り天鎖斬月で扉を開けようとしたら、フォルテが
そう言うてきた

この扉の先にFM王が居るのなら、この先は電波変換しないと進め
ないな

俺は天鎖斬月を消し、スバルを見た

諒「スバル、この先にFM王が居る。此処から先は、電波変換して

行くぞ。多分、否、確実に戦う事になるだろう。覚悟を今の内に決めといてくれ。」

スバル「覚悟ならもう決まってるよ。僕はFM王を説得して、無事に地球に帰るんだ。そして、皆と楽しくパーティーをするんだ。」

スバルは最初は真剣な顔で・最後は笑顔で俺にそう言ってきたスバル、お前は本当に成長したな
俺は嬉しいよ、親友がこんなに成長してるんだからな

諒「そうだな、FM王を説得して、無事に帰って皆でパーティーだ！！」

俺はそう言っただけ黒い携帯を・スバルは左手に付いたトランサーを構えた
そして

諒「電波変換！新井 諒、オン・エア！」

スバル「電波変換！星河 スバル、オン・エア！」

俺達は携帯とトランサーを上に掲げ、そう叫んだ
そうすると俺達は電波人間になった

俺は黒を基調とした体をし、蝸をイメージする様な頭で、少しボロボロのマントを羽織っており、右手には漆黒の日本刀・天鎖斬月を持っている姿・フォルテの姿をしていた
スバルは青を基調とした体をし、ツンツンヘヤーは健在で、胸には流星マークがあり、右手はウォーロックの頭になっている姿・シューティングスターロックマンの姿をしていた

諒「行くぞ、スバル！」

スバル「うん！」

俺達はFM王が居る扉の先にサイバーインした

諒「・・・やはり、此処にFM王が居る。」

俺はそう呟いた

俺達が居る電腦は、キズナ号がボロボロになった電腦で、殺気が遠くから放たれていて此処からでも分かる

だが、此処で怖じ気付く程俺達は弱くない

俺達はお互い一度顔を見合い、無言で頷き気を引き締めて奥に進んでいった

ウォーロック「フン、ワザワザ俺達をお出向かいか、FM王・・・」

ウォーロックが、階段の上に居る人物・FM王を睨みながらそう言った

俺達はウィルスと戦いながらも、無傷で奥迄来た

そして、階段を上ろうとしたらFM王が階段の上から現れた

「そつだ、FM星人の刺客を全て倒したのだ。貴様等を出向かえるのは当たり前だろ？さ、速く上に上がってこい。」

FM王はそう言って奥に消えていった

俺達は、一度頷き合って階段を上っていった

俺達が階段を上りきると、F M王が椅子に座って俺達を見ていた

F M王「よく来たな、星河 スバル・新井 諒・ウォーロック・フォルテ。」

なる程、俺達の事は全て把握済みと言う訳か・・・

諒「F M王、俺達はお前達に何の危害も加えていない。なのに、何故地球を攻めてきた？」

理由は知っているが、一応聞かないとスバルは知らないからな

F M王「何をバカな事を言っている！？貴様等が先に、F M星を攻撃してきたのだろうが！！この機体で、F M星を攻撃してきたとジエミニとスコピオンから聞いた！！だから、我々も地球を攻撃するのだ！！だが、貴様等の所為で、地球の侵略は疎か、多くの仲間を失った！！だから、コイツで貴様等を倒す！！喜べウォーロック！！F M星人の中で、最初にコイツで殺されるのだからな！！」

F M王はそう言って、後ろから何かを呼んだ

ウォーロック「・・・フン、お前は勘違いをしてるみたいだな。俺はF M星人じゃなくA M星人なんだよ。」

F M王「な！！？」

ウォーロックのカミングアウトに、F M王は信じられない顔をしていた

スバルはA M三賢者にA M星の事を聞いているので、ウォーロック

を見て思い詰めた顔をした

ウォーロック「悪いな、スバル・諒。俺はFM星人じゃなくて、AM星人なんだ。悪かったな、今迄黙ってて・・・」

ウォーロックは、俺とスバルに謝ってきた

スバル「良いよ、ウォーロック。ちゃんと話してくれたんだから。」

諒「俺は知ってたから、別に謝らなくても良かったのに。」

俺とスバルは、ウォーロックにそう言った

FM王「ふざけるなふざけるなふざけるなあ！！！！絶対に貴様等を倒す！！来い、アンドロメダ！！！」

FM王は何故か切れだして、後ろからアンドロメダが現れた

諒「スバル、あれがラスボスだ。あれを倒して、FM王の目を覚まさせてやるうぜー！！！」

スバル「うん！！！」

FM王「殺れ、アンドロメダ！！！」

FM王がアンドロメダにそう命令すると、アンドロメダは俺達に突っ込んできた

俺とスバルは、アンドロメダに突っ込んだ

諒・スバル「ラストバトル！！ライド・オン！！！」

俺達の最後の戦いが始まった

第122話 ラストバトル!!ライド・オン!!(後書き)

次回予告だけ

次回 VSアンドロメダ

次回もお楽しみに!!

第123話 VSアンドロメダ（前書き）

ハア、ラストバトルなのに、短いな・・・

今回も名言コーナーはお休みです

誤字・脱字があれば教えて下さい

第123話 VSアンドロメダ

side 諒

俺とスバルは今、FM星最強の敵・FM王の最後の切り札・この戦いのラスボス・アンドロメダと戦っている

俺はトライプキング・スバルはブレイクキングになって、アンドロメダと互角、否、アンドロメダの力を超えて戦っている

アンドロメダは、俺達の攻撃を喰らい過ぎて既に第二形体になっている

だが、俺達が優勢なものには変わりはない

FM王は、俺達がアンドロメダに優勢で戦っている事に驚いた顔をしながら見ていた

FM王「バカな・・・FM星最強のアンドロメダが、地球人二人に追い詰められているとは・・・」

FM王は、アンドロメダと俺達を交互に見ながらそう呟いた
俺はアンドロメダの攻撃を避けながら、FM王に顔を向けた

諒「FM王、俺の言葉をよく聞け!!!心を持たず、誰も信頼せず、自分の為だけに戦っているお前、お前の命令の通りなら誰でも殺す・惑星を滅ぼすアンドロメダ、そんなお前達に、俺達が負ける訳ないだろ!!!」

俺はFM王にそう叫ぶと攻撃してきたアンドロメダに、手に装備された“イナズマケン”でアンドロメダの右腕を斬り落とした

スバル「僕達はお前達と違い、地球で僕達を待っていてくれる皆を護る為に、僕達が勝つ事を祈ってくれている地球の皆の為に、僕達

は戦っているんだ！！」

スバルは俺の言葉の後、FM王にそう叫んでライトブレードでアンドロメダの左腕を斬り落とした

俺達の言葉を聞いたFM王は、涙を流して俺達を見てきた

俺達はFM王を見て一瞬動きを止めてしまったが、直ぐにまた動きだしてアンドロメダの攻撃を避けだした

FM王「じゃあどうすれば良いと言うのだ・・・武力だけで生きてきたと言うのに、そんな事、我が出来る訳無いだろ！！教えてほしい、我は一体どうすれば相手を信頼したり信頼されたり出来るんだ！？」

諒・スバル「ずっと相手を信頼し続けたら良い！！それだけだ（よ！！！！）」

FM王の言葉に対し時間を空けずに俺達は、FM王に叫んだ相手に信頼されたいのなら、まず自分が相手を信頼しないと始まらない

喧嘩しても相手を信頼して、相手が間違った事をして相手を信頼して、相手が裏切っても信頼する

相手を信頼し続けたら、武力で作った友では無く、本当の友を作る事が出来る

お互いが信頼し続ければ、自然と仲間が出来る

世の中ってのは、俺達が出来ない事ばかり

世の中で生きている俺達ですら、今だによく分かっていない

だけど、例えば世の中が分からなくても信頼出来る仲間が側に居れば、俺達は生きていける

FM王「なら、もし・・・もし我がお前達と信頼し合った仲間にな

りたいと言えば、お前達は我の友となってくれるか？」

諒・スバル「嗚呼（勿論）！！！！」

F M王が俺達に聞いてきたので、俺達は笑顔でF M王に言った
するとF M王は、また涙を流した

多分、否、確実にあの涙は嬉し泣きだと思っ

諒「じゃあF M王、お前の名前を教えろ！お前は既に知ってると思
うが、俺の名前は新井 諒！！お前の新しい親友になる男だ！！」

スバル「僕の名前は星河 スバル！！F M王の新しい親友だよ！！
F M王、君の名前は！？」

俺達が自分の名前を叫ぶと、F M王は涙を拭いて俺達を見てきた

F M王「我の名はケフェウス！！諒、スバル！！我が作り出したア
ンドロメダを、倒してくれ！！」

F M王・ケフェウスが、俺達に下に座り込んで頼んできた

諒・スバル「最初からそのつもりだ（だよ）！！！！」

俺とスバルはケフェウスにそう言うと、アンドロメダと距離を取った
するとアンドロメダは、胸の玉にエネルギーを溜め始めた
良いぜ、俺達の本気の必殺技、お前に見せてやるよ！！

諒「これで決める！！カイザーデルタ・・・」

スバル「最終奥義！！サテライト・・・」

俺はイナズマケンで三角形を描くと、三角形の頂点にベルセルク・シノビ・ダイナソーのマークが現れ、エネルギーが溜め出したスバルはライトブレード・ダークガンをプレスレットにし、ペガサス・レオ・ドラゴンの頭を出し、エネルギーを溜め出した
そして、アンドロメダは俺達に光線を放ってきたが、俺達だって必殺技を溜め終わってるよ!!

諒・スバル「ブレイカーーーーーー!!!!!!」

俺の放った“カイザードルタブレイカー”とスバルが放った“サテライトブレイカー”は、一つに合体してアンドロメダの放った光線に向かって行った

ドッカーーーーーー!!!!!!

俺達の必殺技とアンドロメダの必殺技は、ちよつとお互いの中間でぶつかり合った

威力は互角・・・だけどよ!!!!

諒「俺達は!!!!」

スバル「僕達は!!!!」

俺達が叫ぶと必殺技の威力が上がり、俺達の必殺技がアンドロメダに少しずつ向かって行った
そして

諒・スバル「負ける訳にはいかないんだア！！！！！」

俺達がそうアンドロメダに叫ぶと、アンドロメダの必殺技は俺達の必殺技で消され、俺達の必殺技はアンドロメダに向かって行った

ドツカーーーーン！！！！ドカドカドツカーーーーン！！！！！！

俺達の必殺技を喰らい、アンドロメダは跡形も無く消えた

俺達は何時もの姿に戻り、下に座り込んだ

諒「・・・プハッ！」

スバル「・・・ハハッ！」

「ハハハハハハハッ！！！！！！！」

俺達はお互いの顔を見合って、大きい声を出して笑った
すると、ケフェウスが俺達に近付いてきた

ケフェウス「諒、スバル、ホントに今迄すまなかった。我は、ジエミニとスコープオンに利用され、スバルの父親達が乗ったこの宇宙船を破壊し、そして地球迄侵略しようとした。謝って許してもらえない事は分かっている。だが、謝る他に我が出来る事は無い。ホントに、すまなかった！」

ケフェウスは、頭を下げて謝ってきた

俺とスバルは立ち上がり、ケフェウスの前に立った

諒「ケフェウス、俺達とブラザーになつてくれ。」

スバル「父さんが出来なかつたブラザー契約、僕達としてくれないかな？僕達は、ケフェウスが友達になつてくれたから、今迄の事は全てとは言えないけど、許すからさ。」

ケフェウス「すまない、ホントにすまなかつた。・・・そして、ありがとう、諒、スバル。」

大吾「FM王、否、ケフェウス、君にはしなければならぬ事がある。」

スバル「と、父さん!？」

するとスバルの父親・星河 大吾の声俺達の頭に聞こえた
ホント、原作ブレイクし過ぎだろ、俺・・・

大吾「ケフェウス、君はAM星の復興を手伝わなければならない。
俺も手伝う・・・スバル、勝手に悪いが俺はまだ帰れない。それじゃあな!」

声が聞こえなくなった・・・

おいおい、マジかよ・・・

ケフェウス「・・・そう言う事だ、我は今からAM星へ行き復興させる事を手伝う。諒、スバル、此処で悪いが挨拶をさせてくれ。ありがとう、そしてさよなら。AM星が復興したら、必ず招待する。」

諒「嗚呼、頑張れよ、ケフェウス!」

スバル「さよなら、ケフェウス！」

俺達がそう言くと、ケフェウスはA M星に向かって消えた
さて……

諒「帰るか、皆が待ってる地球へ……」

スバル「うん！」

俺達は、皆が待っている地球へ歩きだした

第123話 VSアンドロメダ（後書き）

さて、次回で『ペガサス・レオ・ドラゴン編』も終わりです！

次回 全てが終わって・・・

次回もお楽しみに！！

第124話 全てが終わって・・・(前書き)

取り敢えず今回の話で『ペガサス・レオ・ドラゴン編』は完結!!

俺自身、「こんな話や終わり方で良いのか?」と思っておりますが、まあ一話から修正していくので気にしないでください

さて、今回も名言コーナーはお休みです

・・・最後迄休みだったな、名言コーナー・・・

第124話 全てが終わって・・・

side 諒

アンドロメダとの戦いから三日が経った

俺とスバルはその後、無事に地球に帰ってこれた

皆にケフェウスの事をちゃんと説明した

そして、俺達を助けに来てくれた平行世界の皆に自己紹介とお礼を言った

その日にパーティーをしようと思ったのだが、俺達がスコープイオン達と戦った街が廃墟と化したので、パーティーを延期して街の復興を手伝った

そして今日、WAXAでパーティーが行われているらしい（・・・）えっ？

何で“らしい”を使ったかって？

だって俺と神威は現在進行形で、要さん・劉・優星さん・アレスさんから

全力を出して逃げてるから

神威「諒さん！現実逃避してないで、皆を倒す方法を考えてくださいよ！！！」

俺の隣を走ってる神威が、俺を睨みながら叫んできた
神威、お前なあ・・・

諒「出来るか！！俺よりチートのお前が逃げてるのに、俺があの
達に勝てる訳無いだろ！！！」

神威「確かに・・・」

俺がそう言くと、神威は納得した

否、納得されたらされたで結構傷付くんだけ・・・

でも、このまま逃げてる訳にはいかないよな！！

何か、力をコピーしないと！！

諒「写輪眼！！！」

俺は写輪眼を発動させ、後ろで俺達を追い掛けてきている要さん達
を見た

要「神威、あの程度の奴に苦戦したんだ・・・少し、俺が鍛えてや
るよ。」

劉「諒さんが俺に勝負を挑んできたんです。命の保障はしますが、
無傷で帰れるとは思わないでください。」

優星「僕は要にいに誘われたから、ごめんね、諒君、神威君。」

アレス「俺はパーティーに出ても、飯が食えないから、コッチに来た。」

・・・何で此処迄俺達は、運が無いんだ？
でも、後悔する前に・・・

諒・神威「逃げるッ!!!」

俺達は捕まったら死ぬかもしれない、命懸けの鬼ごっこを続けた最後の最後に・・・

諒「不幸だア!!!」

俺はそう叫んだ

sideツカサ

僕とヒカルは、WAXAの屋上に来ている

諒君・神威君・要さん・劉君・優星さん・アレスさんは、何処かに行っていて参加していないけど、下ではパーティーが行われているが、僕とヒカルは少し疲れたので屋上に来た

ヒカル「しかし、他の奴は元気だよな……」

ヒカルは、フェンスに背中を預けながら下で行われているパーティーを見ながら僕に言った

僕も下で行われているパーティーを見ながら、ヒカルの言葉に頷いた

ヒカル「しかし、ホントに色々あったな、この事件は……」

ツカサ「……そうだね。」

ホントに、この事件は色々あったな

僕とヒカルが、別々の体になった

諒君が、スバル君を庇って死んでしまった

僕とヒカルに、戦う力が出来た

平行世界から、沢山の人が僕達の応援に来てくれた

ヒカル「ん？……フツ、悪いツカサ、ちょっと便所に行ってくるわ。」

ヒカルはそう言って、エレベーターに向かって歩きだした

僕はヒカルに「分かったよ」と言って、ヒカルに応えた

でも、ヒカルのあの笑みは何だろう？

僕はそう思いながら、下のパーティーに視線を戻した

「あ、あの、つ、ツカサさん！」

ツカサ「ん？」

突然後ろから、名前を呼ばれたので僕は後ろに振り返った

するとそこには、顔を赤くした優奈ちゃんが立っていた

ツカサ「どうしたの、優奈ちゃん？パーティーはまだ終わってないけど……」

優奈「あ、あの、ツカサさんと、一緒に、そ、その、居たかったんですが……ダメですか？／／／／／」

何だ、そんな事か……

ツカサ「良いよ、別に。僕も一人で居るより、誰かと居た方が良くからね。」

僕はそう言っただけで、優奈ちゃんは更に顔を赤くして僕の隣にきた

……何で顔が赤いんだろ？
風邪かな？

優奈「つ、ツカサさん？／／／／／」

僕が考えていると、優奈ちゃんが顔を赤くしながら僕に話し掛けてきた

ツカサ「どうしたの？」

優奈「も、もし、ツカサさんが良ければ、今度、私達の世界に遊びに来てくれませんか？色々とお礼もしたいですし……ダメですか？／／／／／」

ツカサ「良いよ、別に。今度皆で、優奈ちゃん達の世界に遊びに行

かせてもらうよ。その時はよろしくね、優奈ちゃん。」

優奈「は、はい!!!わ、私、待ってます!!!／／／／／」

ツカサ「ありがとね、優奈ちゃん。」

僕はお礼を言うと、優奈ちゃんは更に顔を赤くした

・・・ホントに風邪なのかな？

そう思いながら、上を向いて空を見た

すると、空に一番星が輝いていた

side 暁

俺達は今、WAXAの広場でパーティーをしている

と言っても、諒・神威・要・劉・優星・アレスは何処かに行っていない

ツカサ・ヒカルは疲れたと言ってWAXAの屋上に行ったし、優奈はツカサを追い掛けて屋上に行った

スバルとギンガは、既に家に帰ったから居ない

なので此処に居るのは、俺・長官・なのは・フェイト・はやて・テイアナ・ミソラ・光子朗・航・航のデジモン達・翔・アルティメット・サバタ・レイン・レインのポケモン？達・その他のWAXAの局員達だけだ

翔「暁、体はもう大丈夫なのか？」

翔が俺の横に来て、俺の体の事を心配してくれた

暁「嗚呼、まだ体が怠いが、そこ迄深刻な事じゃない。楽しみめよ！」

俺がそう言うと、翔はパーティーに戻った

さて、明日からまた特訓だな、コリヤ

俺はそう思いながら、料理を食べだした

sideスバル

僕とギンガちゃんは今、コダマタウンの展望台に来ている

僕とギンガちゃんは、展望台のフェンスに体重を掛けて星空を観ている

ギンガ「・・・此処だよね、初めてスバル君と出会った場所は。」

スバル「・・・そうだね。でもギンガちゃんあの時、スコープオンに体を・・・」

ギンガ「・・・うん。スコープオンに体に乗っ取られてた。」

ギンガちゃんは、悲しい顔をしながら僕にそう応えてくれた

僕はそんなギンガちゃんの顔を見て、何も言えなくなった

ギンガ「確かに、スコープオンに乗っ取られて、嫌な事を沢山してきた。だから、スコープオンを今でも憎んでるんだ。・・・でも、少しだけ感謝もしてるんだ。」

スバル「え？」

な!?

僕はギンガちゃんの言葉を聞いて、凄く驚いた
だってスコープピオンは、ギンガちゃんの体を使って辛い事や嫌な事
を散々してきたのに・・・
感謝をする理由が分からなかった

スバル「ギンガちゃん・・・どうしてスコープピオンに感謝をするの
？」

僕は今だに驚きながらも、ギンガちゃんに恐る恐る聞いた
するとギンガちゃんは、僕に笑顔で応えてくれた

ギンガ「だって・・・スバル君と私を、こうやって出会わせてくれ
たから!！」

ギンガちゃんはそう言って、僕に抱き付いてきた
僕は倒れそうになったが、頑張つて踏張った

ギンガ「スバル君・・・」

ギンガちゃんは僕から少し離れて、真剣な目で僕を見てきた

ギンガ「私・・・スバル君の事が好きなんです!!私を助けてくれ
たスバル君が、私を護ってくれたスバル君が、私に優しくしてくれ
たスバル君が!!だ、だから、私と付き合ってください!!／／／
／／／」

ギンガちゃんは顔を林檎の様に赤くして、僕に告白してきた
ギンガちゃん・・・

僕は無言でギンガちゃんを抱き締めた

ギンガ「す、スバル君？／＼／＼／＼」

スバル「僕もギンガちゃんの事が好きです。初めて会ったあの日から、ずっと、ずっと、僕は好きでした。こんな僕でよかったら、ギンガちゃんの彼氏にしてください！！」

ギンガ「・・・うん！！／＼／＼／＼」

僕達は、展望台で無事に恋人同士になった

sideウオーロック

全く、何で俺様がスバル達の為に空気を読んで離れなきゃいけないんだ！！

フォルテ「良いじゃないか、別に・・・」

俺様の隣に、突然フォルテが現れてそう言ってきた
てか、人の心を勝手に読むな！！

フォルテ「好きで読んだんじゃない、嫌でもお前の心は分かるんだよ・・・」

んだと！！

・・・てか、コイツは諒と離れていて良いのかよ？

諒は、要とか言う平行世界の応援組に連れ出されていったが・・・

フォルテ「諒は自分の力で要達を何とかするだろ。・・・それより今は、新しいカップル誕生を祝おうぜ。」

ウォーロック「ケツ、人間はやっぱり分かんねえよ!!!」

俺様はフォルテにそう言っつて、スバル達を見たスバル達は、ホントに幸せそうな顔をしていた

・・・ちゃんと護ってやれよ、スバル

俺様が心の中でそう思うと、フォルテが俺様を見て笑ってきやがったやっぱりコイツは、嫌いだ!!!

ペガサス・レオ・ドラゴン編

完結!!!

第124話 全てが終わって・・・（後書き）

松上「取り敢えず、お疲れエ。」

諒「お疲れさあん。」

スバル「お疲れさまでしたあ。」

松上「取り敢えず、無事に終わったな。」

諒「だが、まだまだ小説の完結は先だぜ。」

スバル「そうだね。」

松上「分かってるよ。今回長期コラボしてくれた時空の旅人先生・雨季先生・ムラサメ先生・紅夜先生・天照大神先生、そして応援してくれた皆さん!!!」

3人「ありがとうございます!!!」

諒「それで松上、暫くは何をするんだ？」

松上「暫くは特別編or番外編を書いていく。そして、毎日更新を三日に一度更新にする。一話から修正しないといけないのもあるが、リアルに勉強がヤバくなってきたから。」

スバル「勝手にこんな事をしてしまって、すみませんでした。」

松上「それでは、次回予告をさせてもらいます。」

次回 特別編 俺とティアナの転生前物語

「

諒「それでは!!」

スバル「次回も!!」

3人「お楽しみに!!!!」

特別編 俺とティアナの転生前物語（前書き）

長くなりそうだったので、区切りの良い所で切りました

暫くは戦闘は無いと思いますので、御了承ください

今回も名言コーナーはお休みです

特別編 俺とティアナの転生前物語

この話は、俺とティアナが転生する前の話・・・

side 諒

俺は今、朝早くから学校で食べる弁当を作っている
何故俺が弁当を作っているのかと言うと、此処の家には俺と義妹しか居ないからだ

俺は此処の家に養子として引き取られた

俺の本当の両親は、俺を家に残して買い物に行った帰りに通り魔に殺された

俺は運良く家に居て殺されはしなかったが、その頃まだ小さかったので一人で生きていくには無理だったので、親父の親友である二人目の父さんと母さんに養子として引き取られた

だがつい最近、二人目の両親も交通事故で死んで、俺と二人目の両親の娘である義妹で今は暮らしているから、俺が弁当を作っているんだ

俺は此処の養子になってから家事を手伝っていたのである程度は出来ていて、二人目の両親が死んでから毎日家事をしていたので一般主婦には負けない位の家事は出来ると自負している

諒「・・・ふう、弁当は完成した。さて、そろそろ起こす時間だな。

「
俺は弁当を作り終えて、今日のやる事を考えながら義妹を起こしに行った

諒「・・・ハア、何で何時もこうなのかな？」

俺は自分の部屋を見て、呆れた顔をしながら溜め息を吐いた
俺はさつき、義妹の部屋に行つて義妹を起こそうと思つたのだが、部屋には誰にも居なかつた
そして嫌な予感をしながら自分の部屋に入ると、俺のベッドで幸せそうに寝ている義妹が居た
ハア、ともう一度溜め息を吐いて、義妹の体を揺すつた

諒「おい、起きろ、朝だぞ、ティアナ！」

俺は義妹・ティアナの体を揺すりながら起こそうとするが、ティアナは全く起きる気配が無い
・・・何でこの言葉を言わないと、ティアナは起きてくれないのかねえ？

ハア、と溜め息を吐いて、ティアナを起こす為の言葉を言った

諒「今直ぐ起きてくれたティアナには、俺が一回だけお願いを聞いてやる。」

ティアナ「！？お、起きたよ、お兄ちゃん！！」

俺が言い終わつた瞬間、ティアナは直ぐに目を覚まして俺に言つて

きた

・・・ホント、何故この言葉を言われたら起きるのか、不思議で仕方がない

諒「取り敢えず、制服に着替えて、顔を洗って、リビングに来い。
お願いはその後だ。」

ティアナ「分かった、お兄ちゃん！」

俺がティアナにそう言つと、ティアナは走って自分の部屋に向かった
朝から元気な事で・・・
俺はそう思いながら、布団を綺麗に直して朝ご飯の準備をする為に
リビングに向かった

俺が朝ご飯の準備をしていると、制服に着替えたティアナがリビング
に来た

ティアナ「お早よう、お兄ちゃん」

諒「嗚呼、お早よう。」

機嫌が良いティアナが挨拶してきたので、俺はティアナの朝ご飯
を机に置いて挨拶をした

そして俺の朝ご飯も机に置いて、椅子に座った

今日は、白ご飯・味噌汁・タマゴサラダ・焼き鮭と言った和風を中
心とした朝ご飯だ

諒「頂きます。」

ティアナ「いったきまーす!!」

俺とティアナは手を合わせてそう言って、朝ご飯を食べだした

諒「ティアナ、今迄何回も言ってきたが、俺のベッドで二度寝をするな。二度寝をするなら、自分のベッドでしろ。」

ティアナ「絶対にイ・ヤ！お兄ちゃんのベッドで二度寝する事で、私は今日一日頑張れるの!!」

ハア、この会話は何回しただろうか・・・

ティアナは聞いて分かる様に、極度のブラコンなのだ

此処迄来たら諦める人も居るが、俺は最後の最後迄諦めない!!

・・・イナズマイレブンの今日の格言に出てきたな、最後の言葉俺はティアナに溜め息を吐きながら朝ご飯を食べ続けた

特別編 俺とティアナの転生前物語（後書き）

松上「久しぶりに後書きを真面目に書くな・・・ども、作者の松上です。」

諒「ホント、久しぶりだよな。ども、主人公の諒だ。」

すずか「お久しぶりです、皆さん！すずかです！」

諒「・・・すずか、お前は休んでる間、何をしてたんだ？」

すずか「え？何って・・・アニメを観ながら諒君達を応援してたよ。」

諒「・・・泣いても良いか？」

松上「止める・・・しかし、日常の話は書きやすくて楽だ。」

諒「そんなに？」

松上「嗚呼、戦闘の話は三時間以上話を考えるのに掛かるが、今回は一時間未満で書けた。」

諒「何だよその差は・・・」

松上「俺に聞かれても応えられん。しかし、暫くは転生前物語の話が続くな。」

すずか「そうなんですか？」

松上「嗚呼……と言っても、二話三話だけだな。」

すずか「ふん……」

諒「それじゃあ今回は俺が次回予告をするぜ！

次回 俺とティアナの転生前物語」

松上「それじゃあ！」

すずか「次回も！」

3人「お楽しみにい！！！」

松上「あっ、言い忘れてたけど、次回からツカサと時空の旅人先生のキャラの優奈が後書きに参加するから。」

諒「Why!？」

松上「向こうが使っても良いですよ、って言ってきたから。」

諒「……OK」

特別編 俺とティアナの転生前物語（前書き）

特別編第二話！！

ホント、ネタが思い付いてしょうがないよ

何時もこれ位思い付いたら良いのに・・・

名言コーナーは・・・何処迄紹介したってけ？

また今度確かめないと・・・

特別編 俺とティアナの転生前物語

side 諒

俺とティアナは今、中学に向かう為に通学路を歩いている

あの後、食器を洗って学校の準備をして直ぐに家を出た

家に居ても、特にする事が無い日は学校に行つて気を紛らわす

まあ朝早くに学校に行つても、部活の朝練で来ている生徒達と少しの先生達しか学校に居ないんだけどな・・・

言い忘れていたが、俺とティアナは同じ年で今年から中学一年だ

俺の方がティアナより誕生日が先なので、俺が兄でティアナが妹と言つた関係なのだ

ティアナ「・・・お兄ちゃん、何か考え事でもしてるの？」

ティアナは俺の右腕に抱き付いてきて、俺の顔を見ながら聞いてきた

諒「否、今日の授業は何だったかな〜って考えてた。・・・今直ぐに俺の腕から離れる、お前のむ、胸が当たってるからよ・・・／／／／／」

俺は顔を赤くして、ティアナと目が合わない様にしながらそう言った
歩く度にティアナの成長中の胸が俺の腕に当たるので、思春期の俺にはキツ過ぎる

しかしティアナは、離れる所か俺に更に密着してきた

ティアナ「ワザと当ててるの お兄ちゃんに私が成長してる事を体で教えて、私に性欲を持ってしまつて家に帰つてお兄ちゃんは私を押し倒して・・・エへへへ／／／／／」

ティアナは話してる途中で自分の世界にトリップしてしまった

ハア、ティアナを見て近所の小母さん達が俺達を見ながらひそひそ話を始めたよ

この光景も慣れた・・・人間の慣れって怖いよな

ティアナ「!?!?・・・お兄ちゃん、私から少し離れていて。アイツ（・・・）が・・・此処に向かって来ている。」

ティアナは険しい顔をして俺から離れて、真剣な目をしてボクシングの構えを取った

否、何でお前がボクシングの構えを性格にしてるんだよ？

しかもアイツ（・・・）を本気で殺るつもりかよ？

そう思っていたら、前から俺達に向かって凄い勢い走って来ている男が見えてきた

「ティ〜〜ア〜〜ナ〜〜!!!!!!」

前から走ってきた男は、ティアナの名前を大声で叫びながらティアナに飛び込んだ

だがティアナは、男の腹に力一杯殴った

「グフツ!!!」

男はティアナに殴られてその場に蹲った

痛いよな、腹を思いつき殴られたら・・・

俺は蹲っている男の肩に手を置いて、男に声を掛けた

諒「大丈夫か、カズ？」

カズ「あ、嗚呼、ティアナに殴られたのなら、俺も本望だ。」

腹を押さえながら男・カズはそう言った

コイツの名前は山本和也やまもと かずや、俺とティアナと同じ年の親友で、ティアナにゾツコンな珍しい男なのだ

俺はコイツの事をカズと読んでいる

ティアナ「私に触れて良いのはお兄ちゃんだけ!!」

ティアナはカズにそう言つて、俺に再び抱き付いてきた

カズは俺を、羨ましそうな目で見てきた

否、義妹に抱き付かれても何とも言えない感情になるから、そんな目をされても俺が困るんだが・・・

しかし、何故ティアナはカズの事を好きにならないんだ？

カズの容姿はBLACK CATのトレインに凄く似ているからイケメンだし、性格はティアナの事になると暴走するが凄く良い、運動と勉強もそれなりに出来て、ティアナにゾツコンなのに・・・

ホント、不思議だよなあ

俺はそう思いながら、学校に向かう為に歩きだした

ティアナは俺にずっと抱き付きながら、カズは立ち上がってティアナの横を歩いた

さて、今日は学校が楽だと良いなあ・・・

特別編 俺とティアナの転生前物語（後書き）

松上「本編のネタは思い付かないのに、特別編や番外編ではネタが思い付く作者の松上です。」

ツカサ「そして何故か、諒君の代わりに後書きに来ているツカサです。」

すずか「皆さんに忘れられていた後書き限定キャラのすずかです（泣）」

優奈「は、初めまして！今回から此処に出演する事になった優奈です！よ、よろしくお願いします！！」

ツカサ「落ち着いて、優奈ちゃん。落ち着けば簡単に出来るからね？（ニコッ）」

優奈「つ、ツカサさん・・・ふにゃあ／／／／／」

ドタッ！！

ツカサ「ゆ、優奈ちゃん！？」

松上「気絶するのが速い、速過ぎるよ。」

すずか「と、取り敢えず次回予告をします

次回 特別編 俺とティアナの転生前物語」

ツカサ「松上さん、僕は優奈ちゃんを病院へ連れていきます!!」

松上「う、うん、が、頑張れ・・・それじゃあ次回も!」

2人「お楽しみにー!!」

ツカサ「頑張つてね、優奈ちゃん!直ぐに病院に連れていくからね!」

諒「・・・何をしてるんだ、アイツ等は?」

特別編 俺とティアナの転生前物語（前書き）

……ヒロインを追加してしまったかもしれない……

ハア、何やってるんだろ、俺……

あっ、今回から地の文の書き方を変えたので、これからもこの書き方で行くのでよろしくお願いします

今回も名言コーナーはお休みです

特別編 俺とティアナの転生前物語

side 諒

あの後、カズが歩きながらティアナにアタックしていたが、その度にティアナが抱き付いてきてカズのアタックを断った。

ホント、俺を挟んでするのは止めてほしかった。

そして無事に学校に着いて、俺達は校舎の階段を上っている。

カズ「それじゃあ、俺達は三階だから……」

ティアナ「お兄ちゃん、何かあったら直ぐに私を呼んでね！直ぐにお兄ちゃんの所へ行くから！」

カズとティアナは、三階へ行く階段の途中で立ち止まって俺に言うてきた。

この学校は、一学年に七クラスも在るマンモス校なのだ。

俺は一組でカズとティアナは五組、一組は二階に在って五組は三階に在るから此処で分かれるんだ。

……しかしティアナ、お前は学校へ何しに来てるんだよ？

諒「嗚呼、また後でな。」

俺はカズにだけそう言つて、自分の教室に向かつて歩きだした。

カズの悲鳴らしき声が後ろから聞こえた様な気がしたが、気の所為だと思って俺は振り返らずに自分の教室に向かった。

諒「お早ようさ〜ん。」

俺は自分の教室の扉を開けて、力の無い声で挨拶をした。
すると、俺の声を聞いて一人の女子が俺の前に来た。

そしてその女子は、俺の前で仁王立ちして俺に指を差してきたき
た。

……人に指を差してはいけないって習わなかったのか、コイツは？

「遂に来たんだね、新井 諒！でも、このボクが居る限り君の命は
此処迄だ！！」

ボクツ娘の女子が、俺に何かのアニメのキャラの台詞を言ってきた。
た。

……ハア、この台詞を言い合うのも何十回もしたのに、一体コイツは何時になつたら飽きてくれるんだよ……

諒「ハア……何を言っても無駄だ！！お前が何をしようとも、俺は
絶対に止まりはしない！！……ハア」

俺は溜め息を吐きながらもそう言っつて、ボクツ娘の女子の横を通
つて、俺は自分の席に行つて座つた。

ボクツ娘の女子は、顔を膨らまして俺の前の席に座つた。

……ハア、今日は一体何を言われるのか……

「今回は何で名前を言ってくれなかったのさあ、ボクはちゃんと名
前を言ったのに……」

ボクツ娘の女子は、顔を膨らまして不機嫌そうに俺に言ってきた。
ハア、今日は名前を言わなかった事に拗ねてんのかよ……

諒「別に良いだろ、何時もお前の変なノリに付き合っつてやってんだ

からよ。」

俺は鞆の中から教科書を机の中に入れながら、俺の前の席に座っているボクツ娘の女子にそう言った。

「ダメだよ、ちゃんと名前前で呼んでくれないと！ボクの名前を呼んでも良いのは諒だけなんだから、ちゃんとボクの名前を呼んでよ！」

俺の前の席に座っているボクツ娘の女子が、俺の右手を両手で握りながらそう言ってきた。

否、じゃあ何で俺だけにしか名前を言わせないんだよ……
でも、名前を言わないとコイツは手を離してくれないしな……
ハア……全く

諒「分かったよ、アルル。これで良いか？」

俺がボクツ娘の女子・アルルの名前を言っと、アルルは不機嫌な顔から笑顔になった。

コイツの名前はアルル・ナジャ、この学校の留学生で、容姿は名前の通りぷよぷよのアルルそっくりなのだ。

アルル「ボクと諒は結ばれる運命なんだよ！だから、夫婦の秘密の挨拶はちゃんとしようね」

アルルは俺の右手を強く握って、目を輝かせながらそう言った。

……何が結ばれる運命だ、誰が夫婦だ？

確かにアルルは可愛いが、俺みたいな奴には勿体ない、否、勿体なさ過ぎる。

まあアルルも、本気で言ってる訳無いよな……

諒「だ」「お兄ちゃんと結婚するのは私だよ!!」……ハア」

俺の言葉を遮って、ティアナがアルルに言った。

……ハア、何時の間に此処の教室に来たんだよ？

あゝあ、アルルとティアナが言い争いを始めた。

俺に静かな時間は無いのか？

……もう良いや、現実逃避と言う名の睡眠をしよう。

俺は両手を枕にして、現実逃避をする為に眠った。

特別編 俺とティアナの転生前物語（後書き）

松上「この話を作って、少し反省をしている作者の松上です……ハア」

ツカサ「だ、大丈夫、松上さん？双葉 ツカサです。」

すずか「げ、元気を出して、松上君！後書き限定キャラのすずかです！」

優奈「え……と、落ち込まないください！優奈です。」

松上「……ホント、何でヒロインを追加する様な話を考えてしまったんだろうか？」

ツカサ「ぼ、僕達に聞かれても誰も分からないよ。」

優奈「そ、そうですね！……あ、あの、つ、ツカサさん？」

ツカサ「ん？どうしたの、優奈ちゃん？」

優奈「こ、この前、何か録音された物を拾いませんでしたか？／／／／」

ツカサ「……拾ったけど、まだ一度も聴いてないんだ。だから、これが終わったら聴くつもり。……何で優奈ちゃんが、拾った事を知ってるの？」

すずか「ツカサ君、女の勘だよ、きっと！！ね、優奈ちゃん？」

優奈「そ、そうです!!そ、それですね、ツカサさんが拾った物、私にくれませんか?／＼／＼／」

ツカサ「えっ?別に良いけど、直ぐに欲しいの?」

優奈「はい!!直ぐに欲しいです!!」

ツカサ「う、うん、わ、分かったよ(な、何で今回の優奈ちゃんは怖く感じるんだろう?)」

松上「ハア、俺は一体何をやってんだか……取り敢えず、次回予告でもするか。

次回 特別編 俺とティアナの転生前物語」

すずか「それでは次回も!!」

4人「お楽しみにー!!」

諒「何だよヒカル、俺に聴かせたい物って?」

ヒカル「否、ツカサが拾ってきた物なんだけだよ、嫌な予感がするから諒も一緒に聴いてほしいんだ。」

諒「まあ……別に良いけどわ。」

ヒカル「それじゃあ……聴くぜ……！」

……

……

……

……

諒「つ、ツカサの奴、スゲエ物を拾ってきていたんだな…… / / /
/ / /」

ヒカル「や、やっぱり俺の予感の外れてなかった……！ / / / / /」

諒「こ、この事は忘れような。ゆ、優奈のイメージに関わる事だからさ…… / / / / /」

ヒカル「わ、分かった…… / / / / /」

特別編 俺とティアナの転生前物語（前書き）

あれ？

何でこんな話になってしまったんだ？

ネタが思い付いたから書いたけど、何故こんな話になったのか今だに分からない……

今回も名言コーナーはお休みです

特別編 俺とティアナの転生前物語

side 諒

「お……！りよ……！」

……誰だよ……人が気持ち良く寝てるのに起こそうとしてくる奴は……

「……きて……っ」

……このまま寝かせてくれよ……俺は色々な事で疲れてるんだからよ……

「起きて！諒！」

俺が心の中で俺を起こそうとしている奴に文句を言っていると、俺に抱き付いてきて耳元で大きな声で叫ばれた。

俺はその所為で完全に目が覚めてしまったので、俺は顔を上げて俺に抱き付いて俺を起こした奴に文句を言おうとした。

諒「誰だよ……人が折角寝ていたのに起こした奴はよ……」

アルル「ボクだよ、諒の将来の妻のボクが諒を起こしたんだよ」

俺が目を擦りながらそう言うと、俺に抱き付いているアルルが俺にそう言ってきた。

……ハア、アルル、お前は俺に心と体を休める時間もくれないのか？

それから、冗談でも“俺の将来の妻”なんて事は言うな、お前が

損するだけだぞ。

諒「それで、俺の睡眠時間を遮って何の用だよ？」

俺が欠伸をしながらアルルに聞くと、アルルが俺の机に水筒と弁当箱を置いた。

……俺の机に水筒と弁当箱を置いて、一体何をする気だよ？

アルル「もうお昼休みだから、一緒にお昼ご飯を食べよ？」

アルルは顔を可愛く傾けて、上目遣いで俺を見ながら聞いてきた。
……うん、凄く可愛いよ、アルルは。

でも、俺なんかこんな可愛い顔をしたら勿体ないな。

アルルの将来の彼氏に、その顔をしてやれば良いのに……
ってか、俺は午前の授業を全て寝て過ごしたのかよ……

諒「分かったよ、……だから、今直ぐ俺から離れてくれ。」

アルルが体を動かすと俺にアルルのむ、胸が当たる…… / / / /

しかも、アルルの胸はティアナより大きいので……違う違う、何を考えてるんだ俺は！！？ / / / / /

と、兎に角、速くアルルに離れてもらわないと睡眠で回復した精神がまた0になってしまう！！ / / / / /

アルル「しょうがないな」

アルルはそう言って俺から離れて、俺の前の席の椅子に座った。

言っても離れてくれない子が身近に居るから、素直に離れてくれる子は凄く嬉しく感じてしまう。

……ホント、素直に離れてくれる子は好感持てるよ。

アルル「ボクと諒、お互い相思相愛だね!!」

アルルが、俺の両手を自分の両手で握りながら俺にそう言ってきた。

……アルル、お前は何時から心の中を読める様になったんだ？

それから、誤解を招く様な事は言わないでくれ。

俺とお前が付き合ってるって思われるだろ……

俺的には嬉しいが、アルル的には迷惑だろうしな。

諒「アルル、速く俺の手を離してくれ。昼飯が食べないからさ……」

アルル「じゃあボクが食べさせてあげるよ!!」

俺はアルルに言ったが、アルルは俺の言う事を聞かずに自分の弁当箱の中の卵焼きを箸で掴んで俺の顔の前に持ってきた。

……此処で、皆が居るのに、付き合っても無いのに、あんな恥ずかしい事を俺にしるって言うのかア!??

……出来るか!!!

俺は自分の弁当箱を開けて箸を取り出そうとしたら、アルルが箸を持っていない手で俺の弁当を奪った。

……何でそんな事をするのかな？

俺にそんな羞恥プレイをさせて、俺に何か恨みでもあるのか、アルル？

アルル「はい、アーン」

アルルは笑顔で俺に卵焼きを口に近付けた。

……もう、どうにでもなれ!!

諒「あ、アーン／／／／／」

パクッ

俺は顔を真っ赤にしながら、アルルに卵焼きを食べさせてもらった。

……は、恥ずかしいじゃねえかアアア！！！！／／／／／
アルルは凄く嬉しそうな顔をしながら、俺の弁当箱を返してくれた。

……良かった、漸く返してくれた。

俺は弁当箱を開けて、箸を取り出して弁当に入っている唐揚げを食べようとした。

アルル「諒、ボクにも“アーン”をしてよ！」

俺が唐揚げを口に入れようとした時、アルルが期待を込めた目で俺を見ながら言ってきた。

……完全に恋人同士がする行為じゃねえか……
何でアルルは、俺とこんな事をしたがるのかねえ？

諒「ほら、アーン」

アルル「アーン」

俺はもう反抗する事を諦めて、何も考えずにアルルに唐揚げを食べさせた。

ドッカーーーーン!!!!!!

ギヤアアアアアアアアアア!!!!!!?

アルル「うん、やっぱり諒の作った物は美味しい」

俺がアルルに唐揚げを食べさせた瞬間、上から何かが暴れる音と誰かの悲鳴が聞こえてきた。

だがアルルは、それを気にする事無く唐揚げの感想を言ってきた。

……確実に、銀行からお金を出してこないといけなくなったな。

俺はそう思いながら、弁当のご飯を食べ続けた。

特別編 俺とティアナの転生前物語（後書き）

松上「ホント、何故こんな話になったのか自分でも分かっていない作者の松上です。」

ツカサ「そんな事僕達に言われても分からないよ……。どうも、ツカサです。」

すずか「でも、特別編だから良いと思うよ。どうも、後書き限定キアラのすずかです！」

優奈「わ、私は何と言えば良いか……。どうも、優奈です!!」

松上「ホント、転生前物語はネタが直ぐに思い付くがよく分からない話ばかりだ……」

ツカサ「他に何か思い付かないの？」

松上「うーん……。あつ、ツカサと優奈がデートする話があるぞ。」

優奈「!!!？」

ツカサ「デートじゃなくて買い物ね、松上さん。」

すずか「つ、ツカサ君……」

松上「……スバルが鈍感じゃない代わりにツカサが鈍感だからな、この小説は……」

優奈「わ、私、頑張ります!!」

松上「否、許可が無いのに話は書けない。だから気合いを入れるな、優奈。」

優奈「は、はい……」

ツカサ「どうしたの優奈ちゃん、元気が無いみたいだけど……?」

松上「（お前の所為だろ、お前の……）」

優奈「だ、大丈夫ですから……」

ツカサ「そう?なら良いけど……」

すずか「えっ……と、それじゃあ次回予告をしますね。

次回 特別編 俺とティアナの転生前物語」

ツカサ「それでは!!」

松上「次回も!!」

4人「お楽しみに——!!」

諒「……何時になったら、特別編は終わるんだ？」

ヒカル「俺に聞くなよ、特別編には出てないんだからよ……」

諒「……そうだな。」

特別編 俺とティアナの転生前物語（前書き）

ヤバい、まさか此処迄長くなるとは予想してなかった……

でも、ネタが思い付くから別に良いか!!

今回も名言コーナーはお休みです

誤字・脱字があれば教えてください

特別編 俺とティアナの転生前物語

side 諒

学校が終わり放課後・・・

ティアナ「お兄ちゃん」

アルル「……………いい、良いな。」

カズ「……………う、羨ましい。」

諒「……………はあ」

俺達は学校が終わり、四人で歩いて帰っている。

あの後、何故か俺が学年主任の先生に呼び出された。

理由は、ティアナが昼休みに何故かは分からないが教室で暴れたらしい。

ティアナが暴れた所為で、窓ガラスが何枚か割れたらしい。

その時、カズが体を張って止めたので被害は少なくて済んだが、カズはその所為で体を少し怪我した。

本人は、何故かは分からないが喜んでいた。

そして放課後、俺はティアナを説教しながら帰っていたのだが、ティアナは何を言っても俺に抱き付いてきて俺の話聞いてくれない。

後ろでは、何故かは分からないが嫉妬のオーラを感じるし…………

はあ、溜め息を吐く事しか出来ないよ…………

アルル「あっ、そうだ！」

俺が心の中で溜め息を吐いていると、アルルが急に何かを思い出した声を出した。

なので俺達は立ち止まって、アルルの顔を？マークを頭に浮かべながら見た。

アルル「実はねボク、この前懸賞に当たったんだ。それでね、遊園地のチケットを四枚貰ったんだ。だからね、今度の日曜日に、皆で一緒に行かない？」

アルルは鞆の中から三枚の遊園地のチケットを取り出して、俺達にチケットを見せながら聞いてきた。

……遊園地……か……

そう言えば最近、中学や家の事で忙しくて全然遊びに行っていなかったな……

久しぶりに、皆で楽しく遊びに行くか。

諒「ありがとよ、アルル。勿論、俺は参加させてもらおうよ。」

俺はアルルにお礼を言って、アルルからチケットを受け取った。

ティアナ「お兄ちゃんが行くなら私も行く！だって、お兄ちゃんと私は一心同体なんだから！」

ティアナは笑顔でアルルからチケットを受け取り、俺の顔を見ながらそう言ってきた。

誰が一心同体だ、誰が。

ってか、さつき歩きながら説教をしたのに、全然反省の色が見えない……

何の為に俺は説教してたんだ……チクショウ！！

カズ「ティアナ」と諒が行くなら俺も行くぜ。何故なら、俺はティアナを護る為に生まれてきた男だからな!!」

カズはティアナの名前の部分を強調して、ティアナを見ながらアルルからチケットを受け取った。

……カズ、お前だけが俺の唯一の希望なんだ!!

ティアナをお前の彼女にしてくれ!!

俺は余裕で二人の中を認めるからさ!!

アルル「じゃあ皆、集合時間は午前十時で何時ものバス停だよ 遅刻したら、普通に置いて行くからね」

アルルが笑顔で俺達にそう言ってきたので、俺達はアルルの顔を見て頷いた。

アルル「それじゃあボク、家はコッチだから!じゃあまた明日ね!!」

アルルはそう言って、横断歩道を渡りながら俺達に手を振ってきた。

諒「また明日な!!」

ティアナ「じゃあね!!」

カズ「チケットありがとな!!……それじゃあ、俺もコッチだからよ!また明日な、二人とも!!」

カズはアルルにお礼を言った後、俺達にそう言ってアルルと逆の横断歩道を走って行った。

諒「今日は色々とありがとな〜！」

ティアナ「……取り敢えず元気だね〜。」

俺とティアナは、走って横断歩道を渡っているカズにそう言った。
ティアナがカズに言った瞬間、カズの走るスピードが上がったの
は言う迄も無い。

諒「……それじゃあ帰るか、ティアナ。」

ティアナ「うん」

そして俺達も、二人とは別の横断歩道を渡って家に帰った。

諒「う……うう、今の夢は……」

俺はまだ太陽が出ていない時間に目を覚まし、体を起こして携帯を開けて時間を確認した。

時刻はまだ、午前三時を過ぎたばかりだった。

フォルテ「……ん？どうしたんだ、諒？こんな朝早くに目を覚まして？」

すると、スリープモードで寝ていたフォルテが目を覚まし、まだ少し眠たそうな顔をしながら俺に聞いてきた。

……あの夢、俺とティアナが転生する前の記憶だったよな。

この世界に転生して既に数年が経ったんだよな……

アイツ等は……カズとアルルは元気なんだろうか？

……久しぶりに、アイツ等に会いたい。

会えなくても良い、一度でも良いからアイツ等の顔が見たい。

……ワリアフロディ、少し俺、あの世界に行ってみるよ。

諒「フォルテ、朝早くて悪いが、少し行きたい世界が在るんだ。……力を貸してくれ。」

フォルテ「俺は別に構わないが……今から行くのか？今日は日曜日だし、太陽が昇ってからでも良いんじゃないか？」

諒「……ワリイ、俺は今直ぐに行きたいんだ。」

俺はフォルテに頼むと、フォルテは少し黙り込んで「分かった」と言ってくれた。

俺はフォルテの言葉を聞いて、急いで服を着替えてリビングに来た。

そして、置き手紙を机の上に置いて、俺は誰も居ない展望台に向かった。

.....

.....

.....

.....

諒「.....やっぱりまだこの時間帯には、皆は寝ているか。」

フォルテ「当たり前だ、まだ午前三時過ぎ。普通は寝ている時間だからな。.....それで、何処の世界に行きたいんだ？」

フォルテが俺に聞いてきたので、俺はフォルテの目を真剣に見ながら応えた。

諒「俺が此処の世界に転生する前に居た世界、俺はその世界に行きたいんだ。」

フォルテ「.....分かった。」

俺がフォルテにそう言うと、フォルテは俺に深く迄追求せず了承してくれた。

俺はその言葉を聞いて、安心して携帯を閉じた。

そして.....

諒「デジモンダウンロード！パラレルモン！」

俺はパラレルモンの“平行世界を移動する力”をダウンロードして、平行世界の扉を出現させた。

フォルテ「……諒、向こうの世界ではお前は死んでいるんだ。だから、絶対に人にバレるな。これだけは絶対に護れ。」

俺が扉を開けようとした時、フォルテが俺に警告と注意をしてきた。

……分かってるさ、俺は既に向こうの世界では居ない存在。だから、アイツ等の顔を見たら直ぐに帰ってくるぞ。

諒「分かったよ、フォルテ。」

フォルテ「……なら良い。」

俺がそう言うと、フォルテは俺を信頼してくれてそれ以上何も言っただけだった。

さて、それじゃあ……

諒「行ってきます。」

俺は小さい声でそう呟いて、扉を開けて中に入って行った。

特別編 俺とティアナの転生前物語（後書き）

松上「ホント、此処迄長くなるとは予想も出来なかった作者の松上です。」

ツカサ「ホントだね、特別編が此処迄続くなんてね……。どうも、双葉 ツカサです。」

すずか「この話の展開からすると、まだ続きそうだよね？どうも！後書き限定キャラのすずかです！」

優奈「えっ……と、松上さん、頑張ってください！皆さんどうも、優奈です！」

松上「否、最初の方は四話位で終わらせ様と思ってたんだけど、ネタが出てくるから何時の間にか長くなっていた。」

ツカサ「そうなんだ……それで、転生前物語が終わったら何を書くつもりなの？」

松上「取り敢えず、“ツカサと優奈のデートの話”・“文化祭の話”・“思い付きの続編”だな。」

優奈「きよ、許可が出たんですね！？（やった！ツカサさんとデートだー！）」

すずか「……思い付きの続編って一体何ですか？」

松上「字の通り、流星のロックマンが終わったら書く予定の続編。」

でも、続編にする作品が多いから、試しに一話書いてみる。」

ツカサ「……どれ位在るの?」

松上「分からん、今でも結構の数が在るが、これからもネタが思い付くかもしれないしな。」

すずか「でも続編の前に、本編を終わらせないと!!」

松上「うっ!……が、頑張ります。」

優奈「それでは、今回は私が次回予告をします!

次回 特別編 俺とティアナの転生前物語」

ツカサ「それでは皆さん!」

すずか「次回も!」

4人「お楽しみにー!ー!ー!」

諒「そうだ、大人になる薬を作ってみよう。」

ヒカル「……急にどうしたんだ?」

諒「否、大した理由は無い。」

ヒカル「おいおい……」

特別編 俺とティアナの転生前物語（前書き）

さて、後少しで転生前物語も終わるな……

長かったな……まあネタが尽きなかったから良かったけど……

今回も名言コーナーはお休みです

特別編 俺とティアナの転生前物語

side 諒

俺はパラレルモンの“平行世界を移動する力”をダウンロードして、俺が転生する前に過ごしていた世界に向かっている。

様々な世界の入り口が、俺の周りに存在していてその数は数えきれない。

“NARUTO”の世界や“BLEACH”の世界、“IS”の世界や“魔法先生ネギま!”の世界など……俺が転生する前に読んでいた漫画の世界の入り口が在る。

行ってみたい世界ばかりだが、今はその世界に行っている時間は無い。

俺はあの世界、俺が転生する前の世界に行つてアイツ等、カズとアルルの顔が見たいんだ。

だから俺はそれ等の世界をスルーして、更にスピードを上げて俺が転生する前の世界に向かった。

すると、俺の目の前に一つの世界の入り口が現れた

フォルテ「……諒、目の前に在る世界の入り口が、お前が転生する前に過ごしていた世界の入り口だ。」

諒「……分かった、ありがとう。」

俺はフォルテにお礼を言って、目の前の世界の入り口にゆっくり近付いた。

……ふう、久しぶりの自分の世界、何か緊張するな。

諒「それじゃあ……行くか。」

俺は小さくそう言って、目を瞑って世界の入り口に入ってしまった。

.....

.....

.....

.....

諒「.....全然、全然変わってないよ。.....ハハ、懐かしいな、この景色。」

俺は入り口に入って目を開けると、目の前には俺が生まれ育った街が殆ど姿を変えずに広がっていた。

そう言えば、この世界は俺が死んでから何年が経ったんだ？

俺はポケットから携帯を取り出して、携帯を開けた。

諒「フォルテ、この世界は俺が死んで何年が経っているんだ？」

フォルテ「ん？.....少し待ってくれ。.....この世界は、お前が死んで既に三年経っている。だから、街にはお前の事を知っている奴が居るかもしれない。」

諒「分かってるよ、絶対に顔見知りには見つからない様にするよ。」

フォルテ「.....なら良い。」

俺がフォルテにそう言うと、フォルテは不安そうな顔をして俺に

そう言った。

さて、久々に帰ってきたんだ、少しは街を見ても良いよな？
顔見知りさえバレなければ、俺は普通の子供なんだし……

諒「じゃあ、行きますか。」

俺はそう言っつて、街に向かって歩き出した。

……

……

……

……

諒「……何で父さん達の墓が、綺麗に掃除されているんだ？」

俺は今、父さん達の墓が在る墓地に来ている。

最初は街に行こうと思ったのだが、俺が死んでティアナもアツチの世界に行ったので、父さん達の墓を掃除する奴が居ない事を思い出し、俺は急遽予定を変更して墓地に来た。

父さん達とは、あの世で会っているし連絡も取り合っているが、
肉体は墓に眠っているので来た訳だ。

来たのは良かったのだが、父さん達の墓はゴミや雑草は全く無く
て、凄く綺麗に掃除されていた。

……誰が父さん達の墓を掃除したんだ？

諒「……おいおい、マジかよ……」

俺は、父さん達の墓の隣に在る墓の名前を見て驚いた。
そこには、俺とティアナの名前が刻まれた墓が在った。
……誰が俺とティアナの墓を？

「……………諒……………なのか？」

俺が俺自身の墓の前で考え込んでいると、後ろから誰かが俺の名前を呼んできた。

……………ま、マズイ、俺の事を知っている顔見知りか？

だ、だが、何で俺を一発で見抜けたんだ？

俺は死んだ時より幼くなっているし、後ろ姿だけで俺だと普通は分かるか？

……………誤魔化せばやり過ごせる、絶対に出来る筈だ。

諒「何を言ってるんですか？俺は諒……………じゃ……………ないに……………決まってる……………だろ……………」

俺は後ろに振り返りながら誤魔化そうとしたが、俺の後ろに居た奴の顔を見て俺は驚愕した顔になった。

俺の後ろに居た奴は、高校一年位の背丈で、右手に花束・左手に掃除用具を持っていて、BLACK CATのトレインに似た顔をした青年・俺の親友のカズが立っていたからだ。

特別編 俺とティアナの転生前物語（後書き）

松上「後少して転生前物語が終わるな……。ども、作者の松上です。」

ツカサ「長かったね……。どうも、双葉 ツカサです。」

すずか「転生前物語が終われば番外編 後書き限定キャラのすずかですー!!」

優奈「って事は、私とツカサさんのので、ででで、デートの話がもう直ぐ……。／／／／／」

松上「さて、今回の話で諒は優星にお仕置きされる事になった。」

ツカサ「……。どうして?」

松上「誰かに見つかったら、優星がお仕置きするって言うてあったから（笑）」

すずか「大丈夫なのかな?」

松上「諒って中途半端なチート転生者だからなく、どうなるかは俺も予想が付かない。」

優奈「頑張ってください、諒さん!!」

ツカサ「それじゃあ、今回は僕が次回予告をするよ。

次回 特別編 俺とティアナの転生前物語」

松上「それでは!!」

すずか「次回も!!」

4人「お楽しみにー!!!!」

諒「さ、寒気がする……」

ヒカル「ティアナが変な事を言ってるんじゃないか？」

諒「……否定してやりたいが否定出来ない、俺の義妹なのに……」

ヒカル「あれはしょうがないって。」

諒「そうだが……。それ以上の物が俺を襲って来そうで寒気がする。」

ヒカル「……俺はティアナ以外なら何も知らん。」

特別編 俺とティアナの転生前物語（前書き）

取り敢えず、転生前物語は終わり〜

何時もの如く、終わり方は中途半端なので……

名言コーナーはお休みです

……何処迄名言を紹介したか忘れました

特別編 俺とティアナの転生前物語

side 諒

カズ「な、何で諒が此処に……？だ、だってお前は、あの日に車に引かれて……。し、しかも、体が小さくなってるし……。ど、どうなってるんだよ……？」

カズが俺を見て凄く動揺しながら、一人でずっと呟いていた。

……何で一番見つかつてはいけない人物の一人のカズに見つかったんだよ……

ってか、何でカズが此処に居るんだよ？

諒「……な、なあ、か、カズ？」

俺がカズに話し掛けると、カズは驚いた顔をして俺を見てきた。

カズ「ほ、ホントに諒なのか？」

カズは目に涙を溜めて、俺にゆっくり近付いてきて、俺と視線を合わせて俺に聞いてきた。

……カズ、お前……

諒「嗚呼、お前の親友の本物の新井 諒だよ……カズ。」

俺がカズに頬笑みながらそう言うと、カズは涙を流して俺を力一杯抱き締めてきた。

く、苦しい……

カズ「ほんものだ……ゆうれいじゃない……げんかくでもない……

ほんもののりようだ……ううう、さみしかった、あいたかった、りよう……！」

カズは涙を流しながら、俺にそう言ってきた。

力一杯抱き締められているが、俺はカズの思いをしって黙ってカズに抱き締められた。

……

……

……

……

カズ「ワリイ、少し取り乱した。」

カズは俺から離れて、申し訳なそうな顔をしながら俺に謝ってきた。

諒「良いよ別に、誰だってカズみたいな反応をするからよ。」

俺は笑いながらカズにそう言うと、カズは俺を懐かしそうな顔をしながら見てきた。
どうしたんだ？

カズ「お前のその顔、ホントに懐かしいよ。」

カズは俺にそう言うと、本当に懐かしそうに、だが何処か切なそうな顔をした。

諒「……カズ、俺はおm「言わなくても良いよ、お前が此処に居るだけで俺は何も望まないからよ。」……カズ……」

俺がカズに秘密を話そうとすると、カズは俺の言葉を遮ってそう言ってきた。

……そんな事を言ったら、俺やティアナの転生した事が言えなくなっちまうじゃねえか……

だが、俺はお前に転生した事を伝えないと、俺の気が晴れない！！

諒「カズ、俺の話聞いてくれ。」

カズ「……分かった。」

俺は真剣な目をしてカズにそう言うと、カズは渋々頷いてくれた。ワリイなフォルテ、俺には親友に嘘を吐く程、人間出来てないんだ。

諒「実はな、俺は……」

(今迄の事を説明中)

……………これが、俺の今迄の話だ。」

俺はカズに、俺が今迄体験してきた事を嘘・偽りなく、正直に、
全て話した。

俺は神様の部下のミスで死んだ事を……………

俺は神様の罪滅ぼしで“流星のロックマン”の世界に、チート能
力を貰って転生した事を……………

転生した世界で、恋人が出来た事を……………

ティアナは、俺を追い掛けてきて“流星のロックマン”の世界に
トリップした事を……………

“闇の帝王”と言う敵のコピー体と、壮絶な戦いを繰り広げた事
を……………

スバルを庇って俺は死んだ事を……………

スコーピオン本体とそのコピー体と、激しい戦いを繰り広げた事
を……………

F M王を説得し、スバルと力を合わせてアンドロメダを倒した事

を……

俺はカズに全てを話した。

俺が話し終わると、カズは無言で何処か嬉しそうな顔をしていた。

カズ「……………一つだけ聞きたい、今でもお前とティアナは元気なんだな？」

諒「嗚呼、元気に暮らしているよ。」

俺がカズにそう言うと、カズは安心した顔をして俺に視線を合わせてきた。

……………よく考えたらカズって高二だから、身長が俺よりも凄く高いんだよな。

カズ「お前等が幸せに過ごしているなら俺は何も言わない。……………確かに二人が俺の前から消えた時はショックだった。だけど、俺はお前等のお陰で今を生きれている。この事は誰にも言わない、俺の心の中に秘密にしておくよ。……………そして最後にお前とティアナに一言、“幸せになってくれ”。」

諒「!!!?」

俺はカズの言葉を聞いた途端、目から涙が流れしてきた。

……………俺達より辛い思いをしたのに、カズ、お前は俺達の幸せを望んでくれるのか……………

諒「あ、ありがとな、カズ……………」

俺は涙を服の袖で吹いてカズにお礼を言うと、カズは俺に笑って

くれた。

……本当にありがとな、カズ……

……そうだ……

諒「カズ、俺さ、お前とアルルの顔を見る為にこの世界に来たんだ。
……アルルが何処に居るか、お前知ってるか？」

俺がカズにアルルの居場所を聞くと、カズは何とも言えない顔を
して立ち上がり、空に指を差した。

カズ「お前が死んでその一年後、旅行の帰りに乗っていた車が交通
事故に巻き込まれて、アルルとアルルの両親は死んだよ……」

諒「！！？……そ、そうか……」

俺はアルルが死んだ事にショックを受けたが、直ぐに正気に戻っ
てカズに返事をした。

……アルル、お前、死んでたんだな……

でもアフロディは、俺に何も言ってくれなかった……

何で、何でなんだ？

カズ「アルルの墓は、お前の墓の左に在る。……手を合わせて行っ
てやれよ。」

カズが俺の墓の左の墓を見ながらそう言ったので、俺は俺の墓の
左に在る墓に移動した。

墓には、アルルとアルルの両親の名前が刻まれていた。

カズ「……今、言う事じゃないが、行方不明者の死亡認定の期間が
七年から三年に短縮されたから、少し前にティアナの名前をお前の

墓に刻んだんだ。」

カズがティアナの名前を刻んだ理由を、丁寧に教えてくれた。
ホント、何時の間にかコツチの世界も変わってたんだな……

俺はそう思いながらアルル達の墓の前に座って、目を瞑って手を合わせた。

カズも俺の隣に来て、俺と同じ様にアルル達の墓に手を合わせた。

諒「(……アルル、お前が死んだって全然知らなかったよ。ごめんな、知ってたら直ぐに顔を出しに来たのに……。でも安心してくれ、俺もティアナも転生して凄く幸せに過ごしてるから。……お前が俺の事をどう思っていたのかは分からないが、今でも俺はお前の事が好きだぞ。まあハーレムを作ってる俺に言われても、気分が悪いだけかもしれないが……。ありがとう、俺の親友で居てくれて。俺、スゲエ楽しかったよ。……また来るよ、その時は皆を連れて来るから。……じゃあな、アルル……)」

……

……

……

……

諒「デジモンダウンロード、パラレルモン！」

俺はパラレルモンの“平行世界を移動する力”をダウンロードし、目の前に平行世界を移動する扉が現れた。

アルルに挨拶をした後、俺とカズは俺が最初にこの世界に来た時

に居た山に移動した。

カズは、俺を見送りに来てくれた。

諒「……色々ありがとな、カズ。」

俺はカズを見てお礼を言うと、カズは俺に頬笑んでくれた。

カズ「別に良いよ、俺達は親友だからな。……次は向こうのお前の親友を皆、この世界に連れて来てくれよ。歓迎するからよ。」

ホント、カズは優しいよ……

俺は無言で頷き、平行世界の扉を開けた。

諒「またな、カズ……」

俺はカズに聞こえる様にそう言って、平行世界の扉の中に入っていった。

カズ「……さよなら、俺の親友、新井 諒……」

俺はカズの言葉を聞いて、平行世界の扉を閉めた。

……

……

……

……

俺が元の世界に帰ってくると、既に太陽が沈み掛かっていた。

フォルテ「全く……ヒヤヒヤさせやがって。」

諒「悪かったな……」

フォルテが文句を言ってきたので、俺は素直に謝った。

……カズ、お前は独りじゃないんだ。

どれだけ世界が離れていても、俺とお前の絆は切れる事は無い。
だから、また会おうな、カズ……

諒「帰るか……」

フォルテ「嗚呼……」

そして俺達は、家に向かって歩き出した。

side アフロディ

さて、諒が遂に彼女の死を知ってしまったか……

「アフロディ、諒がボクが死んだって知った時、どんな顔をしてたの？」

すると、僕の前で座禅を組んでいる一人の女の子が、僕に聞いてきた。

アフロディ「ショックを受けてたよ。……それから、精神統一をし

てるんだから、無心にならないと意味が無いよ。」

「わ、分かってるよ……無心……無心……諒……エへへ……」

ダメだこりゃ……

アフロディ「僕の部下って、本当にミスをしまくるね……。この子とこの子の両親を間違えて殺してしまうなんて……。最高神様以後で、部下を変えて貰おう。」

「諒、もう直ぐボクも諒の所に行くね。諒を護れる位に強くなって……。ハーレムはボクも認めるけど、正妻はボクだからね！」

アフロディ「喝ッ!!」

パシンッ!!

今日も神界は平和だ。

特別編 俺とティアナの転生前物語（後書き）

松上「取り敢えず“転生前物語”は終わり〜。……無事に終わって良かった……」

ツカサ「無事に終わって一安心だよ。……どうも、双葉 ツカサです。」

すずか「次は優奈ちゃんのお楽しみにの話だね!!どうも、後書き限定キャラのすずかです!!」

優奈「つ、つつつ、遂に、わ、わわわ、私とツカサさんの…… / / / / /」

松上「……頑張った、今回の話はマジで頑張った!」

ツカサ「次は僕と優奈ちゃんのお出かけの話だね?」

松上「まあ普通の話じゃないがな……」

すずか「どう言う事?」

松上「ネタバレはしたくないぜ!!」

優奈「ふ、普通じゃない!?! / / / / /」

松上「……ダメだこりゃ。」

ツカサ「それじゃあ今回は僕が次回予告をするね。」

特別編 ツカサと優奈の特別な一日（前書き）

長くなりそうだったから、二回に区切るぜ！！

今回と次回は時空の旅人先生とコラボ！！

後、文化祭に出てくれる人は、感想で誰が出てくれるか教えてください

前に書いてくれた人も、すいませんがもう一度誰が出てくれるか書いてください

お土産を持ってきてくれる場合は、それも感想に書いてください

今回も名言コーナーはお休みです

特別編 ツカサと優奈の特別な一日

side ツカサ

ツカサ「……僕とコッチの世界で一緒にお出かけ？」

優奈『は、はい。わ、私、ツカサさんの世界の色んな場所を、つ、ツカサさんと一緒に出かけたいんです！』

僕は今、平行世界の友達の優奈ちゃんと電話していて、優奈ちゃんが僕達の世界の場所を一緒に出かけたといって頼んできた。

別と一緒に出かけれる事は良いんだけど、僕が知っている場所って限られてるんだよね……

まあ優奈ちゃんに頼られてるみたいだし、出来る限り頑張ってみようかな……

ツカサ「分かったよ、僕が知っている場所は少ないかもしれないけど、頑張って優奈ちゃんを案内するよ。」

優奈『あ、ありがとうございます！！そ、それじゃあ、明後日の朝に、ソチラに行きます！！』

ツカサ「うん、それじゃあ待ってるよ、優奈ちゃん。」

優奈『は、はい！！』

優奈ちゃんはそう言って電話を切ったので、僕もトランサーの電話機能を切って、メモ機能にその事を入力した。

さて、明後日迄に、僕等でも行ける良い場所を探さないと……僕はそう思いながら机に座って、学校の宿題に取り掛かった。

.....

.....

.....

.....

次の日の学校・・・

僕とヒカルは何時も通り、コダマタウンに在るコダマ小学校に登校してきた。

僕は自分の席に座って、優奈ちゃんに何処を案内しようか悩んでいた。

うーん、僕達子供二人で行ける場所って、中々無いんだよね……どうしようかな……？

僕が目を瞑って悩んでいると、僕の席に何かが置かれる音がした。僕は目を開けて確認すると、僕の前には目の下に隈を作っている今にも倒れそうな顔をしている諒君が立っていた。

そして僕の机には、何処にでも売ってそうな普通のオレンジジュースが一本置かれていた。

……何でオレンジジュース？

諒「……つ、ツカサ、あ、明日、優奈にこの世界の良い場所を案内するんだろ？」

諒君が、凄く疲れ切った声で僕に聞いてきた。

何でそんなに疲れ切ってるの？

何で僕と優奈ちゃんが出かける事を……ヒカルかな？

ヒカル「へつくしゅ!!……風邪か？」

僕が心の中でそう思った瞬間、後ろに居たヒカルが嚏をした。

……タイミングが良いね、ヒカル……

諒「そ、それでだ、あ、明日、俺が作ったこのこれをの、飲んでくれ。」

ツカサ「……それは別に良いけどさ……これはオレンジジュースじゃないの？」

僕は机に置かれているオレンジジュースを指差しながら、諒君の顔を見て聞いた。

別に明日じゃなくても、今からでも飲んだら感想が言えるのに、何で明日なんだ？

諒「こ、これは俺が作った“成長ドリンク”だ。こ、これを飲めば、い、一日だけ大人の姿で過ごせる事がで、出来る。だ、だから、この薬を飲んだら、あ、明日は何処にでも行けるだろ？……もう無理、今から寝るから絶対に起こさないでくれ。」

諒君は僕にそう言って、自分の席に危ない足取りで向かって、椅子に座って直ぐに眠り始めた。

……この薬を作る為に、ワザワザ徹夜したのかな？

でも、この薬は明日は凄く役立つよ！

僕が大人の姿になれば、優奈ちゃんを色んな場所に案内出来るよ！

ありがとうね、諒君……

僕は眠っている諒君に、心の中でお礼を言った。

すると授業開始のチャイムが鳴ったので、“成長ドリンク”を鞆

の中に入れて先生の話聞き始めた。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

ツカサ「それじゃあヒカル、夕方には帰ってくるよ。」

ヒカル「どうせ明日は日曜日なんだ、遅く帰って来たって文句は言わねえよ。」

ツカサ「そう言う訳にはいかないよ。.....そろそろ待ち合わせの間だ。それじゃあヒカル、行ってくるよ。」

ヒカル「嗚呼、しっかり楽しんで来いよ。」

僕はヒカルの言葉に見送られて、家を出て優奈ちゃんと待ち合わせをしている展望台に向かった。

僕は諒君から貰った“成長ドリンク”を飲んで、無事に大人に成長出来た。

なので、何時もと視線の位置が高いし、凄く動きやすい。凄いな、大人の姿って……

そう思いながら走っていると、何時の間にか展望台に着いていた。……何時もの半分の時間で来れたよ。

僕は大人の姿に感心しながらも、ゆっくり展望台の階段を上がって行った。

そして階段を上がり切ると、展望台の椅子に一人の女の人が座っていた。

……あれ？

あの女の人、何処か優奈ちゃんと似てるんだけど……

僕はそう思いながら椅子に座っている女の人に近付くと、女の方は僕に気が付いて僕の前迄歩いてきた。

……近くで見ると、本当に優奈ちゃんと似てる……

「ツカサさん……ですよね？」

女の人が、顔を傾けて僕に聞いてきた。

この声って……まさか……

ツカサ「そうだけど……もしかして、優奈ちゃん？」

僕がそう聞くと、女の方は笑顔で僕に頷いてくれた。

……何で優奈ちゃんも成長してるの？

ツカサ「優奈ちゃん、何で優奈ちゃんも大人の姿になってるの？」

優奈「えっ……と、昨日の夜、はやくさんが私に“成長ドリンク”って言う物を送ってくれたんです。」

……はやてちゃん、何ではやてちゃんが“成長ドリンク”を持っていたの？

まあ良いけどさ……

ツカサ「まあ良いや。時間も限られてるんだし、そろそろ行くところ？」

優奈「は、はい！！！！」

僕が頬笑んで優奈ちゃんに聞くと、優奈ちゃんは顔を赤くして返事してきた。

顔が赤いけど……大丈夫だね？

僕は優奈ちゃんの手を握って、バス停に向かって歩き出した。

side 諒

神威「……諒さん、何で俺はこの世界に呼ばれたんですか？」

俺の隣で不機嫌顔している平行世界の俺の友・神威が俺に聞いてきた。

諒「否、俺だって何で此処に居るのか聞きたいよ。ってか、何で俺が“成長ドリンク”を飲んで、大人になっているのかも分かってないのに……」

はやて「ウチ等はツカサ君達が何か在っても助ける事が出来る様いや！そやけど、子供の姿やったら二人を追い掛ける事が出来ひんや

る？やからウチ等は“成長ドリンク”を飲んで大人になってるんや！神威君はウチ等の子供役として呼んだんや。」

神威と反対側に居る俺と同じ“成長ドリンク”を飲んだ大人姿のはやてが、何処か嬉しそうに俺と神威に言ってきた。

……簡単に言えば、ツカサと優奈を付けるんだろ？

二回目だぞ、二人を付けるのは……

神威も、何処か面倒臭そうな顔していた。

神威、お前の気持ちは痛い程よく分かる。

俺だって、休みの日をこんな事で潰したくないよ。

はやて「あっ、二人が手を繋いでバス停に向かったで！！ウチ等も追い掛けるで！アナタ 神威」

俺と神威はご機嫌なはやてに手を引っ張られて、ツカサと優奈を追い掛けた。

……俺と神威は親子関係かよ、今更だが……

特別編 ツカサと優奈の特別な一日（後書き）

松上「取り敢えず、ツカサと優奈の大人姿の説明」。

ツカサは『TOLove』に出てくる“レン・エルシ・ジュエリア”、優奈は『FAIRY TAIL』に出てくる“ウエンディ・マーベル”大人Verです。」

アフロディ「ツカサ君が今回は居ないので、僕が代わりに来ました。

」

すずか「期末テスト前なのに、大丈夫なの？」

松上「……期末テスト前だが勉強に集中出来ない。」

アフロディ「ダメじゃん。」

すずか「欠点は取っちゃダメだよ。」

松上「分かってるよ。時空の旅人先生、神威を勝手に出してしまつて、一話に纏めれなくて、すいませんでした!!!!orz」

アフロディ「それでは、今回は僕が次回予告をします。

次回 ツカサと優奈の特別な一日」

すずか「それじゃあ次回も!!!」

3人「お楽しみにー!!!」

ギンガ「良いなり、デートに行つて……」

スバル「ぼ、僕に言われても……。松上さんに頼んでよ。」

特別編 ツカサと優奈の特別な一日（前書き）

な、長い……

前回の話の二倍は在る気がする……

優奈と神威を上手く書けたか不安だ……

携帯が半分壊れてるから、中々話が書けなかったし……

今回も名言コーナーはお休みです

特別編 ツカサと優奈の特別な一日

side ツカサ

僕と優奈ちゃんは今、バスに乗ってコダマタウンを出て違う街に向かっている。

だけど僕達に、バスの中の人の視線が向いている。

多分、僕の隣に座っている優奈ちゃんを見てるんだと思う。

優奈ちゃん、誰がどう見ても凄く綺麗だもん。

まあ男の人からは、嫉妬の視線を感じるんだけどね……

でも何故かは分からないけど、女の人からは嫉妬とは違う視線を感じる……

何でだろう？

ツカサは“T o L o v e r”に出てくる“レン”の容姿なので凄くイケメンなので、女性からしたら憧れの男性像だからです！！BY
作者

今、変な電波を感じた気がしたけど……気の所為だよな？

僕はそう思いながら、バスの外に視線を移した。

side 諒

……何だよ、このカオスな空気が流れるバスの中は……

神威「諒さん、このカオスな空気をどうかしてください。」

俺の隣に座っている神威が、面倒臭そうな顔をしながら俺に言うてきた。

……何でお前より実力が下の俺が、この空気を何とかしないとダメなんだよ？

俺の持っている力で、この何とも言えない空気をどうか出来ると思っっているのか？

お前の方が、この空気をどうか出来るだろうが……

はやて「ツカサ君達、色んな人に人気やな。まあ美男美女が揃って座つとるからしょうがないけどな……」

神威と反対に座っているはやてが、ツカサと優奈を見ながら小さい声でそう言った。

……はやて、そう言いながらも随分と楽しそうじゃないか。

まあ俺と神威も、ツカサ達の最初のデートの時は楽しみながら追い掛けてたけどさ……

諒「速く目的地に着いてくれよ。」

俺は小さい声でそう呟いて、カオスな空気に耐え切れなくなつて窓の外の景色を見始めた。

side ツカサ

僕と優奈ちゃんは、バスで十五分程度で着く自然が沢山在る街に

やって来た。

前からこの街に来たかったんだけど、今迄忙しかったから中々来れなかった。

僕は此処に来て嬉しいけど、優奈ちゃんはどうなんだろうか？

優奈「自然が沢山在って、凄く落ち着きが在りますね。」

優奈ちゃんは、街を見渡しながら僕にそう言ってくれた。そう言ってくれると、僕も凄く嬉しいよ。

「へーい、か・の・じょ！そんな男と居るより、俺達と仲良く遊ぼうぜー！」

「俺達と一緒に来た方が、コイツと居るより絶対に楽しいって！」

すると突然、僕達の前に二人組の男が現れて優奈ちゃんをナンパし始めた。

……こんな良い場所にも、こう言った人達が居るんだね。

優奈「わ、私はツカサさんと一緒に居ます！だ、だから、貴方達とは行きません！」

優奈ちゃんは二人組にそう言って、僕の背中に隠れて可愛い目で二人組を睨み付けた。

「何だと！？人が下手に出てりゃ良い気になりやがって！！！」

「お前は黙って俺達に付いて来れば良いんだよー！！！」

すると何故か二人組は切れて、優奈ちゃんを無理矢理連れて行く

うとした。

ドカッ！！

「ぐ、グハッ！！」

僕は二人組の顔を三分の一の強さで殴って、優奈ちゃんを抱き寄せた。

優奈ちゃん、今だけは我慢してね？

ツカサ「僕の大切な人を傷付けないでほしいです。……もし、僕の大切な人を傷付けたら……」

僕はそこで言葉を発するのを止めて、軽く二人に殺気を放った。

僕は殺気を放つのが苦手、と言うか嫌いだから余り放ちたくないけど、こう言った人達はこうでもしないと後々大変だからね。

僕は殺気を放った後、優奈ちゃんの手を握ってその場から歩き出した。

うーん、優奈ちゃんには少し怖い思いをさせちゃったかな？

side 諒

ツカサの奴、意外に漢を見せたじゃねえか……

さて、俺はこの二人の後片付けだな。

「て、テメエ、だ、誰なんだよ!？」

二人組の一人が、俺を睨み付けながら大きな声を出して聞いてきた。

全く、その程度の睨みなら“メットール”の方が怖いって。

あつ、“メットール”ってのは、電波世界に居る雑魚ウイルスの中で一番雑魚のウイルスの名前な。

黄色の工事用のヘルメットを被っていて、カービィの手が無い黒い姿で、銀の鶴嘴を持ってるんだ。

「テメエ、無視してんじゃねえ!!」

俺がメットールの姿を思い出していると、二人組の一人が俺に殴り掛かってきた。

ハア、“弱い犬程よく吠える”って言葉が在るけど、コイツ等にぴったりの言葉だな。

俺はそう思いながら瞬歩で男の後ろに回り込み、加減をして首に首刀をして男を気絶させた。

「ば、化け物だアアア!!!」

もう一人の男が、気絶した男を抱き抱えて恐怖の顔をしながら、街外れに向かって走り出した。

……あれだけ恐怖を植え付けたんだから、ツカサと優奈の前には姿を現さないだろ。

はやて「諒君、ソフトクリームを買って来たで」

すると、ソフトクリームを買いに行っていたはやてと神威が帰ってきた。

勿論、俺の奢りだぜ？

……神威の奴、俺の奢りだからって二つも買ってやがるし……

神威「ご馳走様です、諒さん。」

神威はソフトクリームを食べながら俺にお礼を言ってきた。

ハア、買った物はしょうがないよな……

諒「今度は俺が奢ってもらうぞ。」

神威「考えときます。」

俺ははやてからソフトクリームを受け取り食べながら神威にそう言つと、神威は間を開けずに俺に返事をしてきた。

……ハア、諦めよ、ソフトクリームだし……

俺はそう思いながら、ツカサと優奈の後を追いつけた。

side ツカサ

僕と優奈ちゃんは、歩いて自然公園にやって来た。

ツカサ「……ごめんね、優奈ちゃん。怖い思いをさせちゃって。」

僕は優奈ちゃんの顔を見て、申し訳ない気持ちで一杯の状態で優奈ちゃんに謝った。

楽しく過ごせると思っていたのに、あの二人組の所為で優奈ちゃんに迷惑や怖い思いをさせちゃったからね……

優奈「つ、ツカサさんが謝る事じゃありませんよ!!」

優奈ちゃんは笑顔で僕の事を許してくれた。

……やっぱり優奈ちゃんは優しいんだね。

ツカサ「優奈ちゃんは将来、きっと良いお嫁さんになるね。僕が保障するよ。」

優奈「お、お嫁さん！？……ふにゃあ／／／／／」

ツカサ「ゆ、優奈ちゃん！？」

僕が優奈ちゃんにそう言った途端、優奈ちゃんは顔を真っ赤にして倒れた。

僕はギリギリ優奈ちゃんを抱き抱える事が出来たので、優奈ちゃんは怪我をせずに済んだ。

……それにしても、優奈ちゃんって気絶するのが多いな。

ストレスが溜まってるのかな？

まあ別に良いけどさ……

僕は優奈ちゃんを俗に言う“お姫さま抱っこ”をして、近くに在ったベンチに向かって歩き出した。

side 諒

はやて「お、お姫さま抱っこをしたで！？こ、こんな公共の場で！？」

諒「ツカサの奴、優奈が気絶した原因を分かってないな、あの顔は

……」

神威「今回も気絶した時間の方がデートの時間より長くなるな、絶対に……」

俺達は少し離れた場所から、双眼鏡を使って二人の様子を見ていた。

ツカサの奴、フラグを無自覚で強化していつてるよ……

後が大変だな、ツカサも優奈も……

まあ神威の方がツカサより酷いけどさ……

神威「……諒さん、俺の顔に何か付いてますか？」

神威の顔を見ながらそう思っていたら、神威は視線をツカサ達に向けながら俺に聞いてきた。

……器用な事をするな、お前は。

諒「否、お前も将来は苦労するんだなって思っただけさ。」

神威「俺がですか？……意味が全然分かりませんね。」

諒「……ハア、まあ頑張れよ。」

神威「????意味が全く分かりませんが、取り敢えず頑張ります。」

はやて「ええな、お姫さま抱っこされて……（チラッ）／／／／／」

俺と神威がそんな会話をしていたら、はやてが顔を赤くして俺をチラ見しながら言ってきた。

諒「……また今度な。」

俺はそう言っつて、ツカサと優奈を再び見始めた。
はやてが横で喜んでいたのは言う迄も無いがな……

sideツカサ

優奈ちゃんが気絶したので、僕は優奈ちゃんを膝枕してベンチに座っている。

時刻は既にお昼を回っていて、十四時三十分だ。

……優奈ちゃん、今日は随分と長く気絶してるね。

大体、今で軽く三時間は気絶してると思う。

時間が時間なのでお腹が空いたけど、優奈ちゃんを残してお昼ご飯を食べに行くなんて出来ない。

優奈「……う……ううう……」

僕がそう思っていたら、優奈ちゃんが漸く目を覚ました。

ふう、ずっと同じ態勢で座ってたから少し足が痺れてきちゃったな。

ツカサ「お早よう、優奈ちゃん。」

優奈「おはようございます、つかささん……ツカサさん!？」

僕が挨拶をすると、優奈ちゃんも目を擦りながら挨拶をしてくれただけ、直ぐに目を見開いて驚いた顔をして僕の顔を見てきた。
……僕の顔に何か付いてるのかな？

優奈「っ、つつつ、ツカサさん、わ、わた、私はい、一体……！？
／／／／／／」

優奈ちゃんが顔を真っ赤にして、目を背けながら僕に聞いてきた。
何で顔が真っ赤なんだろう？

まあ優奈ちゃん自身は大丈夫そうだから、多分大丈夫だと思うけど……

ツカサ「僕と話してる時に、突然優奈ちゃんが気絶しちゃったんだ。だから、僕が優奈ちゃんを膝枕して優奈ちゃんが起きるのを待ってたんだ。」

僕が優奈ちゃんにそう言つと、優奈ちゃんは今迄以上に顔を真っ赤にして起き上がった。

……本当に何で顔が真っ赤なんだろう？
でもそれを考える前に……

ツカサ「優奈ちゃん、ちょっと遅いけどお昼ご飯にしよう。」

優奈「……は、はい……／／／／／／」

僕がそう言つと、優奈ちゃんは顔を下に向けて小さい声で返事をしてくれた。

僕は優奈ちゃんの手を握って、近くに在る飲食店に向かって歩き出した。

side 諒

諒「……はやて、もう俺達は帰っても良いんじゃないかねえか？」

俺は視線をツカサ達からはやてに移して、疲れた顔をしながらはやてにそう言った。

流石にこれ以上は、尾行を続けるのは不味いと思ったからな。

はやて「そうやね、これ以上は二人だけで仲良くした方がええな。」

神威「それじゃあ、俺はこれで帰れるんですか？」

はやてがそう言うと、神威は何処か期待が籠もった顔をしながらはやてを見ていた。

……そんなに帰りたかったのかよ、神威？

はやて「そうや。やけど、今日は付き合ってもらったから、お土産を買ってあげるわ。諒君の奢りで。」

諒「おい、何で俺が奢らないといけないんだ？」

普通そこは、神威を呼び出したはやてが買うのが当たり前だろ。

何で第三者の俺が、はやての代わりに奢らないといけないんだよ？

神威「諒さん、ゴチになります。」

諒「お前、そのネタは……もう良いよ。」

俺は諦めて、残りのお金を確認しながら二人をジト目で見た。

……今日は金が沢山使われたな、俺は関係無いのに……

sideツカサ

楽しい時間は速く終わるって聞いた事が在るけど、本当に時間が速く流れたよ。

優奈ちゃんのご飯を食べた後、色々な場所に行った。

でも、時間が時間だったので、僕達はコダマタウンに帰ってきて、今は展望台に來ている。

優奈「ツカサさん、今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました。」

優奈ちゃんは笑顔で僕にお礼を言ってくれた。

良かった、優奈ちゃんが楽しんでくれて僕も嬉しいよ。

ツカサ「また何時でも遊びに來てね。僕も出来るだけ、優奈ちゃんが楽しめる場所を探しておくからね。」

優奈「つ、ツカサさんも私の世界に遊びに來てください！み、皆にもつ、ツカサさんの事を紹介したいですし……／／／／／」

そうだね、僕も優奈ちゃんの世界の皆と仲良くしたいしね。

ツカサ「分かった、僕もまた遊びに行くよ。」

優奈「は、はい！ま、待ってます！」

優奈ちゃんはそう言つと、優奈ちゃんの前に平行世界のゲートが現れた。

優奈「ツカサさん、さようなら。」

ツカサ「またね、優奈ちゃん。」

僕が優奈ちゃんに挨拶をすると、優奈ちゃんはゲートに入って自分の世界に帰って行った。

ツカサ「……今度会うのは文化祭の日かな？」

僕はそう呟いて、家に向かって歩き出した。

特別編 ツカサと優奈の特別な一日（後書き）

松上「携帯を買い替えないといけなくなった、可愛そうな作者の松上です。」

暁「自分で可愛そうと言うか、普通？久しぶりだな、皆のヒーローの暁だ！！」

すずか「皆のヒーローと自分で言うのもどうかと……後書き限定キヤラのすずかです！」

はやて「久しぶりに此処に来たで！八神 はやてや！」

松上「テスト期間中だし、携帯は半分壊れるし、運が無さ過ぎだろ……」

暁「でも、“二度ある事は三度ある”って言っぜ？」

松上「……未だ不幸が続くのか……————orz」

すずか「ま、松上君！？」

はやて「作者が落ち込んでるから、今回はウチが次回予告をするので！
次回 番外編 続編がリリなのの世界なら……」

暁「それじゃあ皆！！」

暁・はやて「次回もお楽しみにー！！」

松上「不幸が……不幸が……————orz」

すずか「松上君!？」

諒「……銀行からお金を下ろしてくる。」

ヒカル「神威に何を買ったんだよ？」

諒「買ったんじゃない、買わされたんだ。」

ヒカル「……ドンマイ。」

諒「マジな顔で慰めないで、泣きたくなるから。」

番外編 続編がリリなのだったら……（前書き）

流星のロックマンが終わり次第、続編を書こうと思っ
ていますが、続編に書こうと思っ
ている作品が多過ぎて試しに一話を書いてみ
ました

まあ長くなりそうだったから、二話に分けましたけど……

今回も名言コーナーはお休みです

番外編 続編がリリなのだったら……

side 諒

諒「……………ハハツ、一人で長く生き過ぎたな……………」

俺の名前は新井 諒、今年で103歳になる老人だ。

俺は転生者で、この世界の危機を仲間達と力を合わせ何度も救ってきた。

そして平和に暮らしていたが、仲間達は寿命で俺より先にあの世に逝った。

俺は一人で椅子に座りながら空を見ていると、急に眠たくなってきた。

……………そうか、やっと皆の所へ逝けるんだな。

一人で過ごしている時間は長かったが、それも今日で終わりだ……………
これからは、皆の所に逝ってまたあの頃の様に楽しく過ごせる……………
俺はそう思いながら、目を瞑り息を引き取った。

1418

side アフロディ

僕の名前はアフロディ、人間で言う神様と呼ばれる存在さ。

僕は昔、自分の部下のミスで何人かの人間を間違って殺してしまっ
った。

そして部下の罪滅ぼしの為に所謂チート能力を授けて、彼等が行
きたがっていた世界へ転生させた。

だが今日、僕が転生させた最後の転生者が息を引き取った。

アフロディ「諒、君が転生して行ってきた活躍は様々な神が誉め讃

えた。そして神達が君にもう一度、生を与える事にしたんだ。勿論、君の仲間達の活躍も誉め讃えられているから、君の仲間達も生を与えられるんだ。だから、君は皆ともう一度笑い合える。……だけど、君が生きる世界には今迄以上の闇が存在している。諒なら、その闇とも戦うよな？」

僕は誰も居ない部屋でそう呟き、目の前に一枚の紙を出現させた。その紙には、諒の今迄の行動や個人情報載っている。

僕はその紙の転生先と言う場所に触れて、ゆっくり手を移動させた。

するとその場所は先程と違う文字が書かれていた。

転生先……輪廻転生の輪に入りランダム転生 記憶や能力などを持った状態で“魔法少女リリカルなのは”に“限りなく近い世界”

アフロディ「頑張っつてね、諒。僕は何時迄も君の味方で在り仲間だから。」

僕はそう呟いて、目の前の紙を消した。

side 諒

俺が目を開けると、青い空が広がっておりその空に白い雲が浮かんでいた。

………は？

諒「な、何で俺、未だ生きてるの！？何で全く知らない場所に俺は寝てたの！？何で俺は若返ってるの！？」

俺は上半身を起こして、俺の身に何が起こったのか分からなくな
って、取り敢えず疑問に思った事を大きい声を出して叫んだ。

お、落ち着くんだ、俺……

落ち着いて記憶を辿っていけば、全ての謎が解ける……等。

諒「俺は103歳で、他の皆は俺より速く死んで、そして一人で家
の椅子に座って空を見ていて、眠気が来たから目を閉じて俺は死ん
で、そして目を開けたら実は未だ生きていて、そして体が若返って
いて、見知らぬ場所に寝ていた。……全然分かんねえ！！orz」

何で死んだのに生きてるの、俺！？

何で103歳の爺さんだったのに、推定小学三年の体に若返って
んだ、俺！？

何で家の椅子に座ってたのに、見知らぬ場所で寝てるんだ、俺！？

……はあ、考えたって何も分からねえよ。

諒「取り敢えず、目の前に在る街にでも行って、情報収集でもする
か。」

俺は立ち上がり、俺の目の前に在る街を見ながらそう言って、街
に向かって歩き出した。

……

……

……

……

諒「へえ、中々大きい街じゃん。」

俺は街迄何事も無く来れて、商店街を歩きながらそう言った。
しかし、此処は一体何処なんだ？

俺が知っている物が置いていても可笑しく無いのに、此処に在る物は全部昔の物ばかり。

……俺は過去にでも飛ばされたのか？

否、もし過去に飛ばされただけならば103歳の爺さんの体のままの筈。

だけど俺の肉体年齢は推定小学三年と言った所だ。

諒「……………ん？何だ、コレ？」

俺はその事を考えながら歩いていると、一つの看板を見つけた。

俺はその看板に視線を移して、看板に書かれている文字を読んだ。

諒「『海鳴市』、へえ、此処は海鳴市って言うんだ。俺は知らない名前だけど、日本の何処かって事は分かった。」

俺は此処が日本の何処かだと分かり、少し気分が良くなってまた歩き始めた。

……………う、海鳴市イイイ！！？

俺は走って看板の所に戻り、もう一度看板の文字を読んだ。

看板には『海鳴市』とデカデカと書かれていた。

う、海鳴市って“魔法少女リリカルなのは”に出てくる地名だよな？

な、何で此処に海鳴市が在るんだ？

ってか、俺は“魔法少女リリカルなのは”の世界に居るのか？

そう考えれば、街の売っている物が昔の物ばかりってのは納得出来る。

……でも、何で俺はこの世界に居るんだ？

諒「謎が解決出来たと思ったら、また謎が出てきたよ。」

はあ、と俺は溜め息を吐いて、俺は此処が本当に海鳴市なのかを確かめる為にある場所に向かって歩き出した。

……

……

……

……

諒「……やっぱり此処は、本当に“魔法少女リリカルなのは”に出てくる海鳴市なんだ。」

俺は目の前に在る建物を見て、俺は少し驚きながらそう呟いた。

俺の目の前には“翠屋”と呼ばれる喫茶店が在る。

この“翠屋”と呼ばれる喫茶店は、“魔法少女リリカルなのは”の主人公である高町 なのはの両親が経営している店だ。

店の中は昼過ぎなのでそこ迄客は居ないが、レジには凄く若い女性立っていた。

……多分なのはの母さんの高町 桃子さんだと思うけど、一応最終確認の為に入ってみるか。

俺はそう思いながら店に入ってしまった。

「いらっしやうい。……あら、初めて見る顔ね。」

俺が店に入ると、レジに居た女性（多分桃子さん）が俺にお店ならではの掛け声を言っつて、俺の顔を見てそう言っつてきた。

……今日初めて来たのに、顔を知っつていたら可笑しいですよ。

もし知っつているとしたら、俺と同じで向ここの世界から此処の世界に来た俺の仲間か、桃子さんがエスパーか位かな。

諒「最近この街に引つ越してきたんです、お姉さん。」

「あら、貴方お上手ね。こつ見えても三人の子持ちよ。」

諒「………冗談でしょ？」

原作はある程度知っつてるから三人の子持ちっつて知っつているが、この容姿は可笑し過ぎるっつて！！

だっつて見た目が三十代前半又は二十代後半の容姿だっつて！！

「ホントよ 初めて来たのなら、ようこそ“翠屋”へ！私はこの“翠屋”の高町 桃子よ。」

やはりこの女性は高町 桃子さんだっつたか……

しかしこの容姿は詐欺だ、詐欺。

何を食べたらこの容姿を維持出来るんだらっつるか……

諒「俺の名前は……」

俺はそう思いながら自己紹介しようと思っつたが、此処で疑問に思っつた事が在る。

………本当の親の名字を使えば良いのか、二人目の親の名字を使えば良いのか、ドツチを使えば良いんだ？

桃子「えっ……と、どうしたの？」

俺が考え込んでいると、桃子さんが心配そうな顔をしながら俺を見てきた。

……やっぱ、俺の名字は……

諒「すみません、少しボートとしてしまいました……。俺の名前は新井 諒です。取り敢えず、よろしくお願いします。」

桃子「ええ、よろしくね諒君。それで、ご注文は何にする？」

俺は二人目の親の名前を言って挨拶をした。

今迄二人目の親の名字を使っていたから、やっぱ慣れてるんだよな。

……やっぱ何か頼まないといけないよな。

それにもう直ぐ昼だし、此处で昼飯を食べて行こう。

諒「だったら……お子様ランチで……」

俺は少し苦笑いしながら、桃子さんに注文した。

今の俺の肉体年齢は推定小学三年だから、一番無難なお子様ランチを頼んだ。

桃子さんは俺の注文を聞いて、頬笑みながら厨房に居る人（多分 土郎さん）に伝えた。

俺はレジの近くのテーブルに座って、外を見ながらお子様ランチが来るのを待った。

……

……

……

……

諒「しかし、何で俺は“魔法少女リリカルなのは”の世界に来たのか……。何で俺は死んだのに生き返って体も若くなっているのか……。はあ、全然分からねえ。」

俺は公園の椅子に座って、赤い空を見ながらそう呟いた。

あの後俺は、桃子さんが持ってきたお子様ランチを食べて、（何が分らないが）ポケットに入っていたお金を使って代金を払い、林の近くに在る公園に来て時間を潰していた。

ずっと呟いた事を考えていたら、何時の間にか空は赤くなって太陽が地平線に沈み掛けていた。

諒「……取り敢えず、何処かで野宿出来」『誰か………助けて………な！？』

俺は立ち上がって、何処かで野宿出来そうな場所を探しに行こうとした時、頭の中に誰かが助けを求める声が聞こえてきた。

諒「チツ、一体誰なんだよ！！」

俺は舌打ちをしてそう叫んだ後、声がした林の方に向かって走り出した。

番外編 続編がリリなのだったら……（後書き）

松上「世界史と保健のテストが凄く難しかった……。どうも、作者の松上です。」

ツカサ「……欠点じゃないよね？どうも、双葉 ツカサです。」

すずか「明日もテストだから頑張ってね！どうも、後書き限定キャラのすずかです！」

優奈「えっ……と、頑張っって勉強してください！どうも、優奈です！」

松上「テストの話は置いておいて、番外編が此処迄長くなるとは……」

ツカサ「続編はリリなので良いんじゃないかな？」

松上「未だ試したい作品が在るから無理だ！！」

優奈「今回の番外編は皆さんが大人になってる話……。つ、つつつ、ツカサさんの奥さんはだ、誰なんだろう？／／／／／」

松上「優奈、そんなの決まってるだろ？おm「ネタバレはダメだよ！！」ん！！んんー！！」

ツカサ「それじゃあ今回は僕が次回予告をするね。

次回 番外編 続編がリリなのだったら……」

すずか「そ、それじゃあ次回も!!」

4人「お楽しみにー(んんんんん)!!」

ヒカル「続編は俺達の出番は在るのだろうか？」

諒「松上曰く」出すキャラと出さないキャラが居る「らしいぞ。」

ヒカル「簡単に言うと、出すキャラと出さないキャラが決まってるんだな。」

諒「多分な……」

番外編 続編がリリなのだったら……（前書き）

……家庭科のテスト、欠点確定だよ、あれは……

難しいにも程が在る……

さて、久々に名言コーナーをしまーす

先ず最初に名言を教えてくださいましたのは黒翼さんです！

コードギアス 反逆のルルーシュR2で

『撃つて良いのは、撃たれる覚悟の在る奴だけだ！』

『それでも俺は、明日が欲しい！』

Byルルーシュ

次に名言を教えてくださいましたのはAIさんです！

Zガンダムで

『此処の生活は地獄だよ……』

『人の善意を無視する奴は一生苦しむぞ！』

Byアムロ・レイ

逆襲のシャアで

『貴様程急ぎ過ぎもしなければ、人類に絶望もしちゃいけない!!』
Byアムロ・レイ

そして紅夜先生からプレゼントを貰いました!!

諒には、翔がオススメする修業マニュアルを

スバルには、ギンガと上手く行く様に勇から女子心を掴むマニュアルを

ハーブには、役満しすたーずから携帯カラオケセットを

諒ラバーズには、毒リンゴって書かれたリンゴとスタンガンや尋問セットを

ありがとうございました!!

番外編 続編がリリなのだったら……

side 諒

俺は誰かの助けを求める声が聞こえてきたので、俺は走って声が聞こえてきた林の中を走っている。

チツ、林がどう言う構造なのか分からねえから、何処に行ったら良いのか分からねえ！！

俺は心の中で愚痴を言いながら走っていると、少し拓けた場所に出た。

俺は周りを見渡すと、少し離れた場所に倒れている白い動物が居た。

俺は走ってその動物の所に走って、方膝を付いて動物の状態を確認した。

諒「心臓は動いている……。俺が応急であつ……。チツ、誰か来やがった!？」

俺は誰かが此処に向かつて来ているのを察知して、舌打ちをして俺は近くの木の枝に飛び移った。

そして少ししたら、白い動物に茶髪のサイドテールの女の子が走って来た。

諒「……………なのは……………か。」

俺は茶髪のサイドテールの女の子・この世界の主人公の高町 なのはを見ながらそう呟いた。

なのはが此処に来たって事は、あの白い動物はユーノか。

しかし別世界のなのはとは言え、アイツの顔を見るのも久しぶりだな……………

俺がそう思いながらなのは見てみると、なのはに金髪と紫髪の髪をした二人の少女が走ってきた。

確か、金髪がアリサで紫髪がすずかだよな。

……この話、無印の第一話か……

俺がそんな事を考えていると、三人はユーノを抱えて何処かに行ってしまった。

俺は誰も居なくなった事を確認すると、木の枝から飛び降りて地面に移動した。

諒「……さて、どうした物が……」

俺が介入して解決させるのは構わない。

だが、何故俺は此処に居る？

何故俺は生きている？

何故？

諒「……考えたって答えは出てこない。答えが出てこない物を何時迄も考えていたってしょうがない。一度忘れて、今日の事を考えるか。」

俺は小さい声でそう呟き、何処か眠れそうな場所を探しに街に向かって歩き出した。

……

……

……

……

するとなのは近くに居た化け物が、なのはとユーノに攻撃をしようとした。

二人（一人と一匹）は変身する方に意識が行っていて、化け物に気付いていなかった。

俺は天鎖斬月を召喚し、天鎖斬月を持って瞬歩でなのはとユーノの前に移動して、化け物の攻撃を防いだ。

諒「グツ！！……その二人！！」

俺は化け物の力に負けない様に両手に力を込めて、後ろに居る二人（一人と一匹）に大声で話し掛けた。

諒「変身に夢中になってるのは良いが、周りを確認してから変身しろよ、な！！」

俺は二人（一人と一匹）にそう言って、化け物を力で押し返して吹っ飛ばした。

「き、君は！？」

なのはの近くに居た白いフェレット？・ユーノが俺に驚きながら話し掛けてきた。

驚く暇が在るなら、なのはを速く変身させるよ！

諒「通りすがりのお人好しだ。アイツは俺一人の力じゃどうする事も出来ねえ、変身をさせるなら速くさせる！それ位の時間だったら余裕で作れる！」

俺はユーノにそう言って、天鎖斬月を化け物に構えて突っ込んだ。化け物が俺に攻撃してくるが、俺は写輪眼を発動させその攻撃を

避けている。

今更だが、俺が神から貰った力はこの世界でも使える様だ。

俺は化け物の攻撃を避けて、零距离で必殺技の“月牙天衝”をたたき込んだ。

化け物は“月牙天衝”を喰らって一度はグロテスクになったが、直ぐに再生して元の姿に戻った。

……やっぱ俺一人の力じゃ、えっ……と、願いを叶える石？だったかな？

まあ今はそんな事はどうでも良いや。

俺一人のコイツをどうする事も出来ねえ……。

俺がそう思っていたら、後ろからスゲェ力が感じてきた。

……未来の魔王、此処に覚醒だな。

俺はバックステップしながら未来の魔王の隣に移動した。

なのは「こ、この姿……」

なのはは自分の服装を見て、何かを考えていた。

……あれ？

原作ではもつと驚いていた様な……最後に原作を観たのは何十年も前だから今一憶えてないんだよな……。

まあ、今はあの化け物をどうにかする方が先だな。

諒「おい、あれを封印して欲しいんだが？」

俺はなのはの顔を見てそう言うと、なのはは驚いた顔をして俺を見てきた。

……何で驚いてるのは知らないが、俺は時間を稼ぐ事が先決だ。

諒「頼むぞ。」

俺はそう言っつて天鎖斬月を構えて、もう一度化け物に突っ込んだ。俺は少し距離を開けて“月牙天衝”を何度も放ち、化け物に休む暇を与えずに攻撃した。

俺は不意に後ろを向くと、封印の準備が出来ていたので俺はジャンプしてその場から離れた。

なのは「リリカルマジカル、封印すべきは忌まわしき器ジュエルシード、シリアル21封印！」

なのはが化け物に杖を向けてそう言つと、杖から光のリボンの様な物が出てきて化け物に巻き付いて、化け物を貫いた。

……そう言えば、ジュエルシードって名前だったな。

俺はそう思いながら地面に着地して、化け物が居た場所に落ちているジュエルシードを拾った。

諒「ほらよ。」

俺がジュエルシードをなのはに差し出すと、なのははレイジングゲート？で触れた。

すると、俺が持っていたジュエルシードは消えた。

ユーノ「ありがとうございます！」

ユーノが器用に頭を下げて俺にお礼を言ってきた。

しかし、お礼を言う前にやらないといけない事が在る。

それは……

諒「悪いが少し我慢してくれ！」

なのは「ふえ！？」

ユーノ「な!？」

俺はなのはとユーノを抱えて、急いでその場で思いっきりジャンプして木の上に立った。

すると遠くから、パトカーのサイレンが此処に向かって来ている音が聞こえてきた。

諒「少し暴れ過ぎた！」

俺が“月牙天衝”を連発で使ったから、何発か外れて道路などに大きな穴を開けていた。

ユーノ「い、幾ら何でもやり過ぎだよ！」

諒「ウルセエ！俺だって好きでやった訳じゃねえよ！」

俺はユーノにそう言って、急いでその場から離れた。

なのはが謝ってた事に関しては、原作通りだったと言っておこう。

番外編 続編がリリなのだったら……（後書き）

松上「番外編が二話で終われなかった……。しかも、今日在った家庭科のテストが欠点かもしれない……。ども、作者の松上です。」

ツカサ「勉強したんじゃないの？どうも、双葉 ツカサです。」

すずか「夜遅く迄勉強して、朝早くに起きて勉強してたよね？どうも、後書き限定キャラのすずかです。」

優奈「そ、そんなに勉強してたのに欠点なんですか？どうも、優奈です。」

松上「家庭科は勉強せずに、現代国語の勉強ばかりやってた……」

ツカサ「……ダメじゃん！」

松上「だってえ、だってえ、家庭科は勉強しなくても出来るって思ってたんだもん！」

すずか「それでも、少し位は勉強した方が良かったんじゃない？」

松上「だから今、激しく後悔しています……」

優奈「もし欠点だったら？」

松上「……春休み返上して学校に行って勉強。」

優奈「そ、そうなんですか……」。

こ、今回は私が次回予告をします！

次回 番外編 続編がリリなのだったら……」

ツカサ「それでは次回も！」

4人「お楽しみにー！！！」

諒「リリなのが終わったら、次は何の番外編を書くと思う？」

ヒカル「……何か分かるのか、お前は？」

諒「否、分からんから聞ってる。」

ヒカル「おい。」

番外編 続編がリリなのだったら……（前書き）

今回でリリなの編は終わり〜

今回は短いし、終わり方が中途半端ですが気にしないでくれると有り難いです。

今回は名言コーナーはお休みです。

番外編 続編がリリなのだったら……

side 諒

俺はなのはとユーノを抱えて、近くの公園迄やって（逃げて）来た。

しかし、移動してる時になのはが俺の顔をずっと見ていたが、何で見ていたのか理由が分からん。

この世界の（……）なのはとは、今日初めて会ったのに……俺はそう思いながら二人（一人と一匹）を降ろして、向かい合わせになる様に立った。

諒「まあお互い聞きたい事が在るかもしれないが、まずは自己紹介をしようぜ？」

俺が二人（一人と一匹）に提案をすると、二人（一人と一匹）は無言で頷いてくれた。

只、なのはが俺の事をずっと何かを確かめる様な目で見ていたが気にしない

なのは「私の名前は高町 なのは。小学三年生だよ。」

ユーノ「僕の名前はユーノ・スクライア。ユーノが名前で、スクライアが部族名です。」

なのははチラ目で俺を見ながら、ユーノは俺となのはを見ながら自己紹介してくれた。

しかし、何でなのはにずっと見られてるのかね？

俺は何処にでも居る男だし、違うとしたら髪の毛がオレンジで転生者って事だし……

まあその事は後で考えるとするか……

諒「俺の名前は新井 諒。この街に最近引っ越してきた多分小学三年で、とある事情で力を持った普通の少年だ。」

俺が自己紹介をすると、ユーノは苦笑いをしてなのはは驚いた顔をして俺を見てきた。

……何処に驚く内容が在ったんだ？

“とある事情”って所か？

ってか、それしか驚く内容は無いしな。

なのは「諒くん！」

俺が考え込んでいたら、突然なのはが俺に抱き付いてきた。

………は？

諒「な、何をしてるんだよ!?!」

俺は驚いて大きな声を出して聞くと、なのはは泣きながら俺を抱き締めていた。

………な、何で泣いてるんだ？

諒「えっ……と、なのはさん？」

なのは「諒くん……諒くんにまた会えた……」

俺がなのはに話し掛けると、なのはは嬉しそうに泣きながらそう言った。

………また会えた？

何を言ってるんだ、なのはの奴？

俺とこの世界のなのは初めて会ったのに、何でまた会えたって言うんだ？

……ま、まさか！？

諒「な、なのは、お前ってあの世界の？」

俺がなのはに動揺しながら聞くと、なのはは服で涙を拭きながら顔を上げた。

なのは「そつだよ。諒くんと楽しく幸せに暮らしてたのはだよ。」

なのはは笑顔で俺にそう言ってきた。

う、嬉しいよ、確かにまたなのはに会えて凄く嬉しい。

で、でも……

諒「な、何でお前がこの世界に？ってか、そうなるとお前も若返ってるし……。どうなってるんだ？」

俺が頭に手を当てる考え込んでいたら、ユーノの俺の右肩に乗ってきた。

……ごめんユーノ、すっかりお前の事を忘れてた。

ユーノ「僕には分からないけど、二人は実は知り合いだったって事？」

諒・なのは「嗚呼うん」

意外に頭が良いよ、このユーノ！

俺となのはの会話を聞いて、直ぐに俺達の関係が分かるなんて……

ユーノとは良い親友になれそつだな。

……そう言えば……

諒「なのは、お前は家に帰らなくても良いのか？」

原作では家族に黙ってユーノを迎えに来たが、このなのはそんなミスはしないだろう。

俺がなのはにそう言つと、なのは凄く険しい顔になった。

……ま、まさかな……

なのは「急いで帰らないと、お母さん達にバレちゃう！」

なのはは俺達にそう言つて、俺の手を握ってきた。

………何で？

なのは「もしお母さん達にバレてたら………諒くんとユーノくん、一緒に弁解してね！」

諒「な！？」

ユーノ「えっ！？」

なのはは俺とユーノにそう言つて、俺を引っ張って走り出した。

な、何でこんなに力が在るんだア！？

諒「な、何故だアアア！！！？」

ユーノ「お、落ちるウウウ！！！！」

俺達はなのはに引っ張られながら近所迷惑になる位の声の大きさに叫んだ。

でも、随分と久しぶりになのはと話が出来て嬉しかったのは秘密だ。

……なのはがこの世界に居たって事は、他の皆もこの世界に居るのだろうか？

俺はそう思いながらなのは家に引っ張られて行った。

番外編 続編がリリなのだったら……（後書き）

松上「秋休みをvery enjoy中の松上です!!」

ツカサ「勉強とバイトをしなよ?……どうも、双葉 ツカサです。」

すずか「欠点な教科が3つも在るかもしれないんだからね?後書き限定キャラのすずかです!」

優奈「えつ……と、勉強しないと後悔しますよ!どうも、優奈です!」

松上「馬鹿野郎!!」

3人「えつ?」

松上「秋休みだったのに、何で好きでもない勉強をせなアカンのだ!?!二十字以内で答える!!」

ツカサ「留年しない様にする為にだよ。」

すずか「高校を卒業する為にだよ。」

優奈「就職試験に合格する為ですよ。」

松上「き、きつちり二十字以内で言いやがった……——orz」

すずか「松上君がダメになったので、今回は私が次回予告をします!

次回 番外編 続編がとあるだったら……」

ツカサ「それじゃあ次回も！」

3人「お楽しみにー！ー！」

松上「勉強するべきか……否、折角の秋休みだし……でも……」

暁「次は俺も出れるよな？」

諒「……………さあ？」

暁「……………出れねえのかよ。」

番外編 続編がとあるだったら……（前書き）

今回はとあるが続編だったらの話です。

まあ今回はアニメの話を使っていますが、続編がとあるに決定したら漫画の方を使っていきます。

とあるはシリアスな話は無く、殆どネタの話なので……

今回も名言コーナーはお休みです。

番外編 続編がとあるだったら……

side 諒

諒「当麻、何で俺がお前と一緒に外食をしないとイケないんだよ？」

俺は隣に歩いている男子高校生・上条かみじょう 当麻とうまに面倒臭い声の低さで聞いた。

俺の名前は新井 諒あらい じょう、少し普通と違った高校生だ。

俺は転生者と呼ばれる存在で、神様（の部下）に間違つて殺された人間だ。

まあ神様にも色々在ったらしくて、部下の罪滅ぼしの為に俺にチート能力を授けて呉れて別世界に転生した。

そしてその世界で俺は沢山の原作ブレイクをして、仲間達と力を合わせて世界の敵と戦った。

でも俺も転生者とは言え人間だから、寿命には勝てなかった。

俺は寿命で死ぬと、目の前に物凄く笑顔で立っていた神様が居た。神様曰く、俺が転生して行ってきた事を見てい様々な神様達が議論をして俺にもう一度“生”を与えてくれたらしい。

そして能力や記憶を持ったまま新しい世界・つまり今の世界に転生した。

この世界は“とある魔術の禁書目録”に限りなく近い世界だと分かった。

そして原作が始まる迄修業しながら生活していて、原作の舞台で在る学園都市にやって来て能力を見せたら“完全創造者パーフェクトクリエイター”と言う中二病名を貰った。

普通に天鎖斬月と氷輪丸を召喚して、月牙天衝と氷天百華葬をやつたら付けられた。

しかも、学園都市に数人しか居ないLEVEL5の第零位に残念ながら位置付けされてしまった。

だが俺はLEVEL6計画には参加していない、否、参加させて貰っていない。

アレイスター・クロウリー（学園都市の統括理事長）曰く、俺は今の時点でほぼ無敵に近い存在で、その気になれば第一位のアクセラレー行を一瞬で殺せるらしい。

そんな俺がLEVEL6に迄上り詰めたら、人間界に俺と戦える奴は居なくなるらしい。

まあ俺は全ての生物に宣戦布告する気は無いし、LEVEL6にも興味が無いしな。

まあLEVEL6計画に参加させれない代わりに、色々と権限を呉れたんだけどな。

俺はLEVEL6計画を潰す気だし、ソッチの方が俺的には良いしな。

さて、俺の今の状況と説明はこれ位にしとくか。

俺は高校生で、明日から夏休みなのだ。

明日から夏休みなので、隣の部屋に住んでいる親友の上条 当麻に夕食を誘われたのだ。

上条 当麻はこの世界の主人公で、右手には最強と言っても過言では無い“幻想殺し（イマジンプレイカー）”を宿しているのだ。

だがこの“幻想殺し（イマジンプレイカー）”は厄介なデメリットを持っていて、どんな小さな幸せも消してしまい不幸を呼ぶと言うデメリットが存在するのだ。

これは右手が空気に触れているだけで発動するので、コイツの近くに居たら不幸になってしまうのだ。

当麻「明日から夏休みなんだし、偶にはパアツとしようぜ！」

諒「でもお前、小萌先生に補習と言う名のラブコールが来てるんだろ？」

当麻「……………」

当麻が言ってきたので俺が直ぐに突っ込むと、当麻は苦笑いしながら無言になった。

何で無言になって俺より前を歩くんだよ。

意味が分かんねえよ。

諒「当麻、少し買い物して行くから、先に行つててくれよ。」

俺はスーパーのセールを見て、当麻に先に行く様言った。

当麻「わ、分かった。何時ものファミレスだからな。」

諒「分かった。」

俺がそう言うと当麻はファミレスに向かって歩き出し、俺はスーパーのカゴを手に持ってスーパーに入つて行った。

……………

……………

……………

……………

諒「今日は色々安かったから得したな。」

俺はスーパーで安売りしていた野菜などを買って、買い物袋に入れた野菜などを見ながらそう言った。

金はLEVEL5だから沢山貰えるが、無駄なく効率的に使わないと絶対に後悔するからな。

俺は買い物袋を持って当麻が居るファミレスに向かって歩いていった。

すると前から……

「……待てや糞ガキイイ!!」「」

当麻「りよ、諒!!」

沢山の不良に追い掛けられている当麻が俺に向かって走って来た。

……不幸をワザワザ呼びやがって!!

俺は買い物袋を何もインストールされていない(……………
……)漆黒の携帯を取り出して、買い物袋の携帯に納入させて当麻と一緒に走り出した。

諒「何で俺迄不幸に巻き込むかな、無自覚フラグメーカー不幸青年!?」

当麻「長いわ!!不幸なのは認めるが、無自覚フラグメーカーでは無い!!」

俺が当麻に走りながら文句を言うと、当麻も走りながら俺に突っ込んで来た。

お前は(多分)未来に無自覚フラグメーカーになるんだよ!

えっ?

何で能力を使って逃げたり倒したりしないかって?

そんな事したらジャツジメント(学園都市の風紀委員的な役所)が後々煩いからだよ!

だから相手の体力が尽きる迄走るんだよ!!

諒「次、右に曲がるぞ！」

当麻「あ、嗚呼！」

「「「さっさと止まれや、糞ガキ共オオオ！！」「」

俺も対象になってる！？

.....

.....

.....

.....

当麻「はあ.....はあ.....や、やっと振り切れた。」

諒「体力無さ過ぎだぞ、当麻。」

当麻「お前が無駄に在り過ぎるんだって.....」

無駄と言っな、無駄と.....

転生してから毎日休まず修業して身に付けた努力の結晶だぞ。

それから当麻、鉄橋の道のと真ん中で肩で息をするなよ。

今は人が居ないが、明らかお前が其処に居ると迷惑だぞ。

諒「俺は先に家にかえるぞ、当麻。速く家に帰って食材を冷蔵庫に入りたいからな。」

俺は携帯を当麻に見せながら言うと、当麻は肩で息をしながら何度も頷いた。

さて、不幸に巻き込まれない様にさっさと退散するか。えっ？

何で不幸に巻き込まれるって分かったか？

後ろからゆっくり此処に向かって歩いてくる誰かが居るからだよ。流石にこれ以上、晩飯を食べなかつたら俺が倒れちまう。

諒「じゃあな、当麻。」

俺は当麻にそう言って家に向かって歩き始めた。

……それにしても、俺達を付けて来た奴は誰なんだろうか？

「熱血教師気取りな訳、アンタ？」

俺が家に向かって歩き始めた瞬間、後ろから当麻に話し掛けた女子の声が聞こえてきた。

……この声、まさかな……

俺は振り返って、当麻に話し掛けた女子を見た。

そこには、花のヘアピンを付けた茶髪の中学生の少女が立っていた。

……俺と話す時と口調が違い過ぎねえか、アイツ？

「ねえ、超電磁砲^{レールガン}って知ってる？」

花のヘアピンをした茶髪の少女は当麻に話ながら、ポケットからゲーセンのコインを取り出した。

……此処に居たら巻き込まれる確率100%!!

ドツシユユユンツ!!!

諒「な!？」

ガキイイイインツ!!!

俺はその場から帰ろうとした瞬間、花のヘアピンを付けた茶髪の少女が俺に“超電磁砲”を放って来た。

俺はそれにいち早く気付いて天鎖斬月を召喚して、両手に力を込めて“超電磁砲”を防いだ。

だがその所為で、俺は当麻から離れた場所迄吹っ飛ばされた。

諒「イテテ……あ、アイツ、少し説教をしてやらねえとな……!」

俺は天鎖斬月を杖にして立ち上がり、“超電磁砲”を放った花のヘアピンを付けた茶髪の少女に少し苛立ちながらそう言った。

そして当麻達の所に行こうとした時、前から青い電気が俺の前から凄い勢いで向かってきた。

……またかよ!!

諒「月牙天衝!!!」

俺は急いで天鎖斬月に力を込めて、必殺技の“月牙天衝”を青い電気に放った。

すると青い電気は一瞬にして消えた。

……当麻の“幻想殺し（イメージブレイカー）”で威力が無くな

当麻「りよ、諒ウウウウウウ！……！！……！！？」

美琴「お、お兄ちゃアアアアアアアアアん！……！！……！！？」

俺は当麻とミロの声を聞きながら意識を手放した。

番外編 続編があるとあったら……（後書き）

松上「文化祭の準備をサボっちゃまった作者の松上です。テヘッ」

ツカサ？「松上がやったら気持ち悪いから止める。どうも、双葉
ヒク……ゲフンゲフン、双葉 ツカサだ。」

すずか「でも、そんな松上君も……ゴクツ、有りだと思つ。どうも、
後書き限定キャラのすずかです！」

優奈「……何時もとツカサさんが違う様な？どうも、優奈です！」

松上「今回は完全にギャグの話だな。」

ツカサ？「ギャグでも何時もより長いよな？何で何時もこれ位書け
ないんだよ？」

グサツ x 5

松上「そ、其処迄言わなくても……————orz」

すずか「それじゃあ松上君、向こうに行って気持ち良い事をしよう
か？」

松上「……断る……！」

松上はログアウトしました。

すずか「……………逃がさない！」

すずかはログアウトしました。

ヒカル「……………やっと出て行った。」

優奈「あつ、やっぱりヒカルさんでした。」

ヒカル「……………お前、俺がツカサじゃないってよく見破れたな。」

優奈「あ、当たり前じゃないですか！！だ、だって……………／／／／」

ヒカル「はいはい、お前の気持ちはツカサ以外知ってるから。」

優奈「はう……………／／／／」

ヒカル「最近真面目に後書きがされてないから来たのに……………。何故真面目に出来ないのかね？……………さて、今回は真面目に次回予告をす
るぜ。」

次回 続編があるとあるだったら……………
次回も楽しみにしていてくれ。」

ツカサ「んー!!んー!!」

諒「……ツカサ、人の趣味に文句を言いたくないが、自分の体を縄で縛って藻掻き苦しむ趣味はちょっと……」

ツカサ「んー!!んんんー!!」

諒「痛い!!痛いから!!器用に脛を蹴るな!!」

ヒカル「……チツ、真面目に終われなかった。」

スバル「此処が真面目になる事は永遠に無いと思うよ。」

ヒカル「……俺は諦めねえぞ。」

スバル「……頑張つてね。」

ヒカル「嗚呼。」

番外編 続編がとあるだったら……（前書き）

久しぶりに投稿〜！

だけど、とあるの番外編は今回で終わりです！

余り長くやってたら、他の番外編や本編が書けないので……

名言コーナーは突然ですが、今回を保って終了させてもらいます。

すみません、突然で……

番外編 続編がとあるだったら……

side 諒

・

・

・

・

諒「……う、ううう、」

俺は重たい瞼を頑張って開けて、顔を動かして俺が今置かれて
いる状況を確認した。

場所……俺の部屋、時間……大体何時も起きてる時間帯、俺の体
……少し痺れるが健康、部屋の状況……普通じゃ考えられない暑さ。
部屋には当麻が運んでくれたと思うから後で朝ご飯を誘ってやる
う、どうせ何時も不幸で朝ご飯を食べれてないと思うからな。

……体が痺れるのはミコの所為だから、今度会ったら高町 なの
は流O・HA・NA・SHIをしてやる。

美琴「クシユンツ！……お兄ちゃんが私の話でもしてるのかな？そ
うだったら嬉しいな」

学園都市の何処かに居る俺の義妹のミコが噓をした様な気がした。

……変な事も言ってた様な気もするがな。

俺はそう思いながら体を起こして、部屋の状況を確認した。

クーラー……完全に故障、冷蔵庫及び食材……冷蔵庫もクーラー
と同じで故障・食材は暑さにやられて全て腐っている、他の電化製
品は携帯以外は全滅していた。

……ミコに絶対に弁償させてやる！

諒「……はああ、気分を変えて布団でも干すか。」

俺は深い溜め息を吐いて、布団を干す為にベランダの窓を開けた。
すると其処には、洗濯物と一緒に干されている銀髪シスターが居
た。

………は？

諒「誰だよ、この子？」

俺は素直な感想を取り敢えず言って頭の中を整理させて、目を瞑

ってどうしてこうなったかを考えた。

俺が服やパンツをベランダに干した時は、この子は干されていなかった。

だから俺は洗濯物を干した後、当麻と一緒に外出して晩飯を食べに行っただよな。

……じゃあ俺が外出している間or俺が気絶してる時に干されたと考えた方が普通だよな。

……変態か、この子？

自分の家……否、シスターだから協会か。

自分の協会で干されていたら良いのに……

「お……」

諒「……お？」

俺が銀髪シスターを心の中で変態と決めつけていたら、ベランダに干されていた銀髪シスターが何かを呟きだした。

……怖いな、おい。

「おな……」

諒「お腹が痛いのか？トイレだったらこん」お腹減ったから何か食べさせてくれたら嬉しいな！」「……」

俺が銀髪シスターの言葉を予想して銀髪シスターに言っていたら、銀髪シスターは俺の言葉を遮って笑顔で俺に言ってきた。

……は？

諒「……部屋に入ろうぜ、話はそっからだ。」

俺は銀髪シスターにそう言いながら銀髪シスターを抱えて、そのまま玄関に移動して靴を履いて隣の部屋に住んでる当麻を呼びに行った。

ピンポーン！

俺は当麻の部屋のインターホンを押して、腕に抱えている銀髪シスターに視線を移した。

諒「自己紹介が未だだったな。俺は新井 諒、一応LEVEL5の第零位だ。」

「この状況で自己紹介はどうかと思うけど……私の名前はインデックスって言うんだよ。」

俺が銀髪シスターに自己紹介をすると、銀髪シスター・インデックスは笑顔で自己紹介してくれた。

インデックスって……“禁書目録”って意味だよな、確か？
明らかに偽名だよな……協会での名前か、インデックスって？

ガチャッ！

俺が考え込んで、当麻の部屋の扉が勢い良く開いた。

俺は身の危険を感じたので、右に大きく移動した。

すると部屋から当麻が勢い良く飛び出してきて、そのまま頭から壁に突っ込んだ。

……………ドンマイだな、無自覚フラグメーカー不幸青年・上条 当麻よ。

当麻「イテテ……朝から不幸だ。」

当麻は手で頭を押さえながら、痛そうな顔をしながらそう呟いた。

当麻、不幸なのはお前の右腕が原因だから諦める。

俺がそう思っていたら、当麻が突然俺を真剣な顔をしながら見えてきた。

そして当麻はゆっくり立ち上がって、俺の両肩に手を置いてきた。

当麻「諒、俺はお前がどんな奴でもお前の味方だぞ。」

すると当麻は、少し涙目になりながら俺にそう言ってきた。

……………不幸続きで頭のネジが何本か抜けたか、当麻？

当麻「お前がロリコンだったのは知らなかった。だが、其れも個人個人の好みだから何も言わない。だけど諒、我慢出来ずに誘拐しちまってよ……俺も付いて行ってやるから、ジャツジメントに自主し「調子に乗るなよ!!」ブハッ!？」

当麻が泣きながら俺に変な事を言ってきたので、俺は当麻の腹を思いつきり殴った。

当麻は腹を殴られて、余りにも大きなダメージだったので倒れてそのまま気絶した。

インデックス「……………りょうってロリコンなの?」

すると突然インデックスが、少し恐怖した顔をしながら俺を見えてきた。

……不幸なのは俺なのかもしれないな。

諒「何でロリに欲情しないといけないんだよ？俺は其処迄飢えてないから安心しろ。」

俺はインデックスにそう言って、インデックスを持っていない方の手で当麻の足を掴んでそのまま自分の部屋に入った。

インデックスは、何処か嬉しそうな残念そうな顔をしていた。

……全く意味が分からないな、コイツ等は……

……

……

……

……

当麻「やっぱり諒の飯は美味しいな！」

インデックス「凄く美味しいよ、特にこの野菜サラダ！疲れを吹っ飛ばす為にちょっと酸っぱくしてる所が憎いよねー！」

俺の目の前には、暴飲暴食の親友とシスターが居る。

当麻は俺と同じで食材が全て腐っていて、非常食に買っていたカッパラーメンを流し台にぶちまけ、財布を探していたらクレジットカードを踏み碎いたらしい。

……まあ親友だし不幸だから沢山食べても何時もの事だから良いんだが、銀髪シスターことインデックスは遠慮を知らなさ過ぎだろ。笑顔で机に置かれてある料理を食べてるんだよ。

だから、俺が昨日買った食材は今日だけで全部無くなり、しかも俺が食べようとしても直ぐに無くなる。

……インデックスの腹はブラックホールだな、おい。

当麻「お前、中々料理を見る目が在るな！」

インデックス「君こそ、こんな料理を知ってるなんて凄いや！」

当麻とインデックスはハイタッチをして、また料理を食べ始めた。
……コイツ等、ホントに遂さつき出会った仲かよ？

諒「はああ、マジで腹減った。」

「「じゃあ食べれば？」」

諒「お前等が食べてるから食べれないんだよ！」

「「あつ、そうだな（そうだね）」」

俺が二人に大声を出してそう言うと、二人は左右対称に頭を掻いて笑いながらそう言うてきた。

こ、コイツ等……

諒「……当麻、インデックス？」

「「えっ？……ヒッ!?」」

俺が二人に話し掛けると、二人は何故か（……）恐怖した顔をして料理を食べるのを止めた。

何で食べるのを止めたんだ？

何で恐怖した顔をしてるんだ？
まあ良いか、だって二人は……

諒「少し……O・H A・N A・S H Iしようか？」

二人は俺に拷問……ゲフンゲフン、O・H A・N A・S H Iされるんだからな。

「ぎゃ、ぎゃああああああ（ぎゃ、ぎゃああああああ）！！！！
？」

朝早くから、二人の悲鳴がマンションから聞こえた様な聞こえなかつた様な……

俺は聞こえたよ、目の前でね！

でも、何故かは分からないけどその悲鳴が心地良く聞こえてしまった。

最後に皆に一つ、一つだけ言っておきたい！

俺は“バーサーカー狂戦士”みたいに狂ってないし、至って正常だから変な考えを持たないでくれよな！

これはお兄さんとの最初で最後の約束だから、絶対に護ってくれよ！

番外編 続編がとあるだったら……（後書き）

今回は忙しいので次回予告だけ。

次回 番外編 続編がISだったら……

次回もお楽しみな！！

番外編 続編がISだったら……（前書き）

最近流行っている一夏ISをやってみました。

後、今回初めて男のオリキャラを出してみました。

厨二病キャラを上手に表現出来たか不安です……

第の口調も不安ですがね……

今回から「」の前の名前を無くしますので……

誤字・脱字が在れば教えて下さい。

番外編 続編がISだったら……

side 諒

「お兄ちゃん、一緒に帰る」

「嗚呼。」

百点満点の笑顔で俺に話し掛けてきた義妹に、俺は短くそう応えて荷物をランドセルに入れてランドセルを背負って教室から出た。

俺の名前は新井諒、この世界の最初の転生者だ。

俺が居る世界は“IS”と呼ばれる世界に近い世界で、俺はこの世界で第二人生を楽しんでいる。

俺の第一人生は普通の中学生だったが、神・アフロディの部下のミスで俺は死んでしまった。

神・アフロディは、部下の罪滅ぼしの為に所謂チート能力を俺に授けてくれて、俺が行きたがっていた世界へ転生させてくれた。

俺は第二人生を其の世界の仲間と時には楽しく凄し、時には世界を護る為に一緒に戦い、時には小さな事で喧嘩をし、俺にとって掛け替えの無い人生になった。

だが幾ら俺が転生者とは言え、体は人間なので人間の運命である寿命には勝てなかった。

俺は第二人生を終えて、何の無念も無く神界に行った。

神界に行つて俺を出迎えてくれたのは、神・アフロディを始めとする神々達だった。

何でも、俺が転生して行つてきた行動を見て最高神達が俺にもう一度“生”を与える事になったらいい。

そして俺は“IS”と呼ばれる世界に近い世界に転生して、第三人生を平和に過ごす事を決めた。

そしてこの世界の主人公の織斑 一夏の義兄として転生した。

この世界の織斑 一夏は、原作と違い男じゃなくて女だった。
まあ“IS”と呼ばれる世界に近い世界だし、こう言った違いは
在る物だと思うので気にしなかった。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

すると俺の義妹の一夏が、顔を傾けて上目遣いで俺に聞いてきた。
はあ、俺の知っている義妹は変態の度を超えていたから、一夏の
様な普通の義妹にはマジで癒される。

「別に何でm「一夏、俺と一緒に帰ろう！」……」

俺が一夏に話している時、アイツが俺の話の話を遮って一夏にそう言
つてきやがった。

俺はこの世界の最初の転生者と言ったが、最初と付けたのには理
由が在る。

少し前に、またしても神・アフロディの部下がミスをしたらしい。
何でも、また間違えて人を殺したらしい。

此処迄なら未だ良い。

此処からが面倒臭くなつたんだ。

神・アフロディの部下によって殺された奴は、ハーレムを目指す
から“IS”に行きたいと望んだらしい。

勘の良い奴なら分かると思うが、神・アフロディの部下は俺が居
るこの世界にソイツを転生させやがった。

ソイツが一夏に話し掛けた二人目の転生者だ。

俺はコイツの事が嫌いで基本無視、否、基本拒絶している。

何故なら、コイツは私利私欲の為にしか貰った力を使わないし、

根本的にコイツの事が嫌いだ。

コイツの名前は月光神げっこうしんや也で、コイツは銀髪のオッドアイのイケメ
ンで、ニコポ・ナデポでフラグを建てようする最低野郎だから、俺

は月光の事がマジで嫌いだ。

「嫌だ！私はお兄ちゃんと一緒に帰るんだから！」

一夏は月光にそう言って、俺の腕に抱き付いて月光を睨み付けた。言い忘れていたが、一夏は俺と同じで月光の事がマジで嫌いだ。

「照れてるんだな？可愛いな、一夏は。」

すると月光は笑顔で一夏にそう言いながら、一夏の頭を撫でようとしてきた。

俺は直ぐに一夏の頭に向かってきた月光の手を捻って、かなり強めに関節技を決めた。

「イテテツ！な、何するんだよ！？早く離せよ！」

月光は俺を睨みながらそう言って来たが、俺は其の睨みに怯える事無く月光に殺気を放った。

「一夏が嫌がつてるのに未だ気付かないのか、お気楽野郎。お前の汚い手で一夏の頭を汚すんじゃねえ。」

俺はそう言って月光の手を離すと、月光はマイナスな感情が含んだ目をしながら俺を睨んできた。

「俺がこの世界の主人公なんだ。モブの癖に調子に乗ってるんじゃないぞ。」

月光は俺にしか聞こえない位の声の大きさでそう言って、一夏に笑顔で「一夏、また明日な！」と言って何処かに行きやがった。

月光が何処かへ行くと、一人のポニーテールの少女が俺と一夏に近付いてきた。

「大丈夫だったか、一夏、諒？」

「うん、月光君には何もされてないから……」

「何かしてきたとしても返り討ちにしてやるがな、そうだろ箒？」

「勿論だ。」

この子の名前は篠ノ之箒しののけ、俺達の幼なじみの少女だ。

少し前迄、俺と月光以外の男子に虐められていたが、俺がマジギレして男子達をO・H A・N A・S H Iして助けた。

其の以来、更に箒と仲良くなった。

「箒ちゃん、私の心配をしてくれるのは嬉しいけど、箒ちゃんも月光君に言い寄られてるんだから気をつけてね。」

すると一夏は、少し涙目になりながら箒に忠告した。

……月光の奴、自分の野望の為なら相手の事は考えねえのかよ。
アイツとはマジで対立した方が良さそうだな。

「大丈夫だ。もし危険になったとしても、諒が必ず助けに来てくれるからな。……だろ？」

「……嗚呼、助けを求められたら誰であろうと助けるさ。」

箒が信頼した顔をしながら俺に聞いてきたので、俺は真剣な顔をして箒にそう言った。

俺の力で誰かが助けられるのなら、俺はどんな危険が待っていたとしても助ける。

其れが俺が力を得た理由であり、俺の存在価値なんだからな。

「……この話はもう終わりにして、早く家に帰ろ！早く帰らないとお姉ちゃんが心配するよ！」

すると一夏は、俺と篝の手を握って笑顔で俺達に言ってきた。

……確かに、早く帰らないと面倒臭いからな。

篝も俺と同じ事を思ったのか、面倒臭そうな顔をしていた。

「確かに。これ以上、学校に残っている理由は無いしな。」

「そうだな。」

俺達は一夏にそう言って、靴を履き替えて学校から出た。

俺を真ん中に、三人仲良く手を繋いで家に帰った。

うん、平和はマジでサイコーだ。

番外編 続編がISだったら……（後書き）

松上「バイト、マジで辞めたい……。ども、作者の松上です。」

すずか「……松上君、大丈夫？どうも、後書き限定キャラのすずかです！」

ツカサ「其れ、先週からずっと言ってない？どうも、双葉 ツカサです。」

優奈「い、一体どうしたんですか？」

松上「……もう、嫌になってくる。今のバイトをして分かった事がある、俺には作る仕事は向いていない。」

ツカサ「そ、そうなの？」

松上「嗚呼。だから年末迄我慢して働いて、年明けには違うバイトをする。」

すずか「親は？」

松上「母さんには了解を得ている、父さんは未だだ。」

優奈「それじゃあ頑張って下さいね！」

松上「おう！さて、今回は俺が次回予告をするぜ！

次回 続編がISだったら……」

「すずか「それじゃあ次回も！」

4人「お楽しみにー！」

ヒカル「松上の将来の夢を知ってるか？」

諒「地方公務員か金持ちニート。」

ヒカル「差が在り過ぎだろ、其の夢……」

諒「知らねえよ。」

番外編 続編がISだったら……（前書き）

今回は前話から数年経った話です。

と言っても、原作には入っていませんので……

やっぱり戦闘描写を書くのは難しいな……

コツとかって無いのかな？

在るなら教えて貰いたいです。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

番外編 続編がISだったら……

side 諒

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」。

数年前、とある人物によって発明された物で、世界中に存在する
いかなる兵器よりも劣らない「究極の機動兵器」。

とある人物とは、俺の親友である篠ノ之篤しののあつの姉である篠ノ之束博しののゆづね
士だ。

束博士によつてISは発表され、其の直ぐ後に起きた“ある事件”
を境に急速に世界に広がっていった。

ISを動かせるのは“女性”のみ、兵器として使われ始めたIS
は世界各国の抑止力えなり、其れを維持する為に“女尊男否”の社
会が当然となつていった。

だが、女性にしか動かせないISを、俺は、俺とアイツは間違つ
て動かしてしまった（アイツは意図的に動かしたが……）

其の所為で世界中がパニックになり、俺とアイツはIS学園と言
う学校に行く事になった。

俺とアイツはお互いを拒絶し合っているので、お互いの情報を知
らない、知りたくない。

そして今、IS学園のとあるアリーナでとある人物と向き合つて
いる。

「諒、今からお前の前に居る人物・山田君と模擬戦をして貰う。」

すると俺の義姉である千冬ねえが、俺の前に居る人物・山田さん
の事と模擬戦をしてくれって言ってきた。

「山田 真耶です、よろしくね新井君。」

「新井 諒です、今日はよろしくお願いします。」

山田さんが俺に自己紹介をして頭を下げてきたので、俺も山田さんに自己紹介をして頭を下げた。

「……挨拶は済んだな、ISを展開させてくれ。」

俺と山田さんが同時に頭を上げると、千冬ねえが俺達にISを展開させる様言ってきた。

すると山田さんは、一秒も掛からない内にISを展開させて俺に構えを取ってきた。

俺は目を瞑って深呼吸をして心を落ち着かせて、ゆっくり目蓋を開けて力を解放した。

「……デジモンコンプリート、ウォーグレイモン。」

俺は小さい声でそう呟くと、俺の体は一瞬にして変わった。

両腕にはリユウ種族には絶大な威力を発揮する武器・“ドラモンキラー”を装備し、背中には太陽のマークが描かれたシールド・“ブレイブシールド”を装備した勇気の力で進化した竜戦士のデジモン・ウォーグレイモンになった。

俺の姿を見て、山田さんは一瞬驚いた顔をしたが直ぐに真剣な顔になった。

「……昨日戦った子とは全く違う。」

山田さんは、俺の姿を警戒しながら見てそう呟いた。

千冬ねえは俺の力を知っているの、顔の表情を一つも変えずに俺を見ていたが……

……しかし、昨日戦った子って事は、アイツも山田さんと戦った

のか……

まあアイツが勝とうが負けようが、俺には全然関係ないがな……

「さ、時間が勿体無いですから始めましょう。」

俺が山田さんにそう言うと、山田さんは俺に集中していて無言で俺の言葉に頷いてくれた。

俺はドラモンキラーを山田さんに構えて、何時でも動ける様に意識を山田さんに集中させた。

「それでは……始め!!」

千冬ねえが言った瞬間、俺達は空中に飛び上がり近距離戦で戦い始めた。

俺は山田さんの攻撃を紙一重で避けて、カウンターを決めて確実にダメージを与えていく。

右手のドラモンキラーで山田さんの攻撃を防ぎ、左手のドラモンキラーで山田さんの腹を（加減して）殴った。

そして俺は山田さんと距離を開けて、両手にエネルギーを溜めて其れを一気に膨張させて山田さんに構えた。

そして直ぐに山田さんに其のエネルギーを放った。

「ガイアフォースッ!!」

俺が放った膨張したエネルギー・ウォーグレイモンの必殺技の“ガイアフォース”は、速いスピードで山田さんの所へ向かって行った。

しかし山田さんは、“ガイアフォース”に気付いて体を反らして避けた。

だが、山田さんが“ガイアフォース”を避ける事は計算済みだ!

「デジモンコンプリート、メタルガルルモン！」

俺はウォーグレイモンから姿を変えて、体をデジタルワールドで伝説の金属と言われているクロンデジゾイドメタルに覆われた友情の力で進化したデジモン・メタルガルルモンに変身した。

そして俺は口にエネルギーを溜めて、其のエネルギーを山田さんに一気に放った。

「コキュートスブレスッ！！」

俺の口から一気に放たれた冷氣・メタルガルルモンの必殺技の“コキュートスブレス”は、“ガイアフォース”に気を取られていた山田さんへ向かって行った。

山田さんは漸く“コキュートスブレス”に気付いたが、気付くのが少し遅くて“コキュートスブレス”を喰らった。

「其処迄！」

俺が山田さんに攻撃を更に仕掛けようとした時、千冬ねえが模擬戦終了を告げてきた。

なので俺は直ぐにデジモンコンプリートを解いて、人間の姿になって山田さんの所へ向かった。

山田さんの所へ行くと、山田さんはIS状態から人間の状態になって座っていた。

「強いですね新井君、昨日戦った子とは全然違います。」

山田さんが俺の存在に気付いて、頭を欠きながら悔しそうに俺に言ってきた。

……山田さんのこの言葉から推測すると、アイツは山田さんに負けたのか……フッ、良い様だ。

「すいません、大技を放ってしまつて……立てますか？」

俺は“ガイアフォー”と“コキュートスブレス”を放つた事を謝つて、山田さんと目線を合わせて立てるかどうかを聞いた。

幾らISを展開していたとは言え、究極体の技・冷気を一気に放つ“コキュートスブレス”を喰らつたから何か在つたら大変だからな。

俺が山田さんに聞くと、山田さんは恥ずかしそうに苦笑いをしてきた。

「恥ずかしいんですが、さっきの攻撃でちよつと立てなくて……」

「……そうですか。」

俺は山田さんの答えを聞いて、山田さんにそう言つて俗に言うお姫様抱っこをして山田さんを移動させた。

「あ、新井君！？／／／／」

「俺の所為で立てなくなつたんです、これ位しないとダメですよ。」

山田さんが顔を赤らめて俺の顔を見ながら話し掛けて、俺は申し訳ない顔をして山田さんの顔を見ながらそう言つた。

すると山田さんは、顔を更に赤らめて俺から目を反らした。

……嫌われたのか、俺は？

「……諒、何故山田君をお姫様抱っこしている？羨ま……ゲフンゲ

フン、破廉恥過ぎるぞ。」

すると千冬ねえが俺と山田さんの顔を交互に見て、何か不満そうな顔をしながら俺に言ってきた。

「俺の攻撃の所為で山田さんが立てなくなっただから、これ位して当然だろ？それより、俺は合格or不合格……ドツチな訳？」

「そうか、好きで山田君をお姫様抱っこした訳では無いんだ……そうかそうか。」

「……聞いている、千冬ねえ？」

「お、おお、ちゃんと聞いているぞ。勿論合格に決まってるだろ、ちやんとした合格通知はまた後日に届くから、今日は家に帰れ。一夏とお前の合格パーティーをするぞ。」

すると千冬ねえは、何処か嬉しそうな顔をしながら俺に言ってきた。

「そうか……合格か、何か合格したから安心したな。」

「分かった、山田さんを保健室的な部屋に連れろ」「否、山田君は私が連れて行くからお前は速く家に帰ってパーティーの準備をしてくれ。」「……了解。」

千冬ねえが俺の言葉を遮って言ってきたので、俺は素直に山田さんを千冬ねえに預けて敬礼して了解した。

今の千冬ねえ、何故か分からないけどマジで怖いんだよ。

こつ言う時は素直に言う事を聞かないと、命が幾つ在っても足りないからな……

「山田さん、また入学式に会いましょう。千冬ねえ、寄り道せず
帰って来てくれよ。」

俺は二人にそう言って、アリーナから走って出て行った。

さて、今から晩飯の食材を買って来ないとな……

一度家に帰って、義妹の一夏と一緒に行くか。

俺はそう思いながら、IS学園を出て行った。

番外編 続編がISだったら……（後書き）

松上「今やっっている飲食店のバイト、後八日で辞めれる!!どうも、作者の松上です。」

すずか「……幾らなんでも速くない?どうも、後書き限定キャラのすずかです。」

ツカサ「……未だ一ヶ月しか経ってないよ?どうも、双葉 ツカサです。」

優奈「ど、どうして辞めるんですか?どうも、優奈です。」

松上「俺には飲食店のバイトは合ってなかったから。シフト五日入りたいと希望してるのに二日や三日しか入ってないから。先輩が余りにもウザいから。ストレスが溜まって10kg前後重れたから。」

ツカサ「理由が多いよ!?!」

すずか「でも、他にバイトが在るの?」

松上「昨日、荷物の仕訳のバイトの面接に行ってきた。其処に採用されたら其処に行く。」

優奈「……ダメだったらどうするですか?」

松上「優奈、人間はネガティブになったらダメなんだ。前だけを見てない!」

ツカサ「バイトを辞める理由が凄くネガティブだと思っただけど
？」

松上「……………さて、次回予告をするぜ。」

ツカサ「無視!?!」

松上「次回 番外編 続編がバカとテストと召還獣だったら……………」

すずか「久しぶりにスバル君やツカサ君が出来ます!」

ツカサ「……………久しぶりの出番だね。」

優奈「其れじゃあ次回も……………」

4人「次回もお楽しみに!!」

スバル「……………僕の出番が久しぶりに在るんだね。」

諒「らしいな。」

暁「俺の出番は在るのか!?!」

諒「……………」

暁「……………チクソウ」

諒「……………ドンマイ」

番外編 続編がバカとテストと召還獣だったら……（前書き）

後五回でバイトが辞めれるぜよ！

速く、今直ぐに辞めたいぜよ！

今回はオリジナルの話と振り分け試験の話だぜよ！

誤字・脱字・変な所が在れば教えてくれぜよ！

番外編 続編がバカとテストと召還獣だったら……

sideアフロディ

ウーウーウー！！

『No.10032世界、転生者新井 諒の居る世界に問題が発生！直ちに修正に迎え！！』

「な、何だって！？」

僕は何時も通り神の仕事をしていると、突然天界に非常ベルが鳴り響いて諒が居る世界に問題が発生した事を告げてきたので、僕は驚きながら急いで世界管理室に向かった。

僕が世界管理室に向かっていると、他の世界にも問題が発生してイレギュラーが生まれて僕以外の神は其のイレギュラーを対処するのにバタバタしていた。

僕は横目で其れを見ながら走り続けると、漸く世界管理室の扉の前にやってきた。

僕は嚴重にロックされた鍵を慌てずに解除していつて、思いつきり扉を押して部屋に入った。

すると其処には、僕の部下であり諒達を間違えて殺した人物・見習い天使が居た。

「クッ、実験が失敗した上にイレギュラーを生み出してしまうなんて……！」

「何をしてるんだ!!」

見習い天使は僕が部屋に入ってきた事に気付かず、独り言を言っていたので僕は大きな声を出して見習い天使に話し掛けた。

すると僕の声で現実に戻ってきた見習い天使は、ゆっくり顔を僕の方に向けてきた。

「あ、アフロデイ様!？」

「此処で一体何をしてるんだ!! 此処は最高神様以外出入り禁止の部屋、何で見習い天使の君が入ってるんだ!!」

僕の顔を見て驚いた顔をしながら僕の名前を言ってきたので、僕は眉間に皺を寄せて見習い天使に大きな声を出して聞いた。

「ぼ、僕は只、僕のミスで合体してしまった世界を元に戻そうとただけです!……で、でも、操作パネルを操作していたら間違っただけの世界をリセットしてしまったって、“バカとテストと召還獣”の世界をベースにしてみましたって、其れを直そうとしたら……」

「……そうか。……君を見習い天使にしたのが僕の間違いだったんだ。」

「……えっ?」

僕は見習い天使の勝手な行動を起こした理由を聞いて、僕の中に在る何かが切れて見習い天使を威圧しながらそう言った。

そんな勝手な理由で他の世界の皆に辛い思いをさせ、神々に多大な迷惑を掛け、被害者である諒達の世界をリセットして其処に違う世界を合体させて……

「死んだ君が神になりたいと望んだから天使にしたのに、神を目指す努力もせず関係ない人に迷惑を掛けて……」

「あ、アフロディ様？」

僕は見習い天使に話しながら歩いていくと、見習い天使は怯えながら後ろに後退りしていった。

僕が甘い考えをしたからこんな結果になってしまったんだ。

……僕がちゃんと責任を取らないと。

「君には見習い天使の名を剥奪、天使の力を排除、永久地獄に投獄を判決する。」

「な！？ま、待って下さい、アフロディ様！！ぼ、僕は……！！」

僕が見習い天使に罰を言うと言った見習い天使が僕にそうやってきたが、僕は其れを無視して神の力で見習い天使の名を剥奪して天使の力を排除した。

そして空中にエネルギーを出現させ、背中に黄金の羽根を出現させて宙を飛んだ。

僕はエネルギーを圧縮させてサッカーボール位の大きさにして、一回転して踵で其れを元見習い天使に蹴った。

「ゴッド……ブレイク……！！」

「い、嫌だアアアアアア！！！！？」

ドツカアアアアアアアア！！！！！！

僕が技名を言うと、元見習い天使は叫んで僕の技を喰らった。

そして大きな爆発が起こると、見習い天使は其の場から消えて永久地獄に墮ちた。

僕は其れを確認して急いで操作パネルを操作して、イレギュラーを全て排除・間違った設定の修正を行った。

だけど、諒の世界は既にリセットされていて“バカとテストと召還獣”の物語が始まっていた。

「クソッ！！……また、また諒達に多大な迷惑を掛けてしまった！……修正プログラムに追加、諒の召還獣を今迄の記憶を持ったフォルテに修正。」

僕は僕が唯一出来る罪滅ぼしをする為、諒の召還獣を諒の今迄の相棒だったフォルテに修正した。

僕はフォルテに天界で起こった事・諒達に起こった変化を伝えた。

……ごめんね、諒。

もう二度とこんな事は起こさないから。

僕は涙を流して心の中で諒に謝り、最高神様や他の神々達にこの事を伝えに行った。

この天界の事件から十年以上の歳月が経った。

side 諒

俺の名前は新井諒、少し変な力を持った男子高校生、容姿は髪がオレンジ以外は普通、得意科目は社会全般、苦手科目は保健だ。

得意科目と苦手科目を言ったのにはちゃんと理由が存在する。

俺は今、俺が通っている高校・文月学園で振り分け試験を受けているからだ。

高校一年の時は愉快？な友人達と楽しく？過ごして、二年のクラスを決める為に試験を受けてる。

「（え）、何々？1919年にはベルサイル条約、1929年には世界恐慌、では1939年には何が起こったか？」

俺は目で問題を読んで、答案用紙に“第二次世界大戦開戦”と書いた。

うん、社会全般は得意科目だから凄く簡単で楽だわ。

そう思いながら問題を解いていると、何時の間にかテストの問題を終えていた。

俺はテストが終わったのでカンニング行為と間違われぬ背伸びをして、固まった筋肉を解していた時……

ガッシャーン！×2

突然誰かと誰かが倒れた音が教室に響いたので、俺は立ち上がって倒れた奴等を確認した。

「姫路さん！？それにテストロッサさん！？」

俺と同時に立ち上がった俺の親友の男子生徒が、倒れた奴等の名前を言った。

……って、

「瑞希！！フェイト！！」

俺は急いで二人の名前を言って倒れている二人の所に行き、二人を優しく抱き上げた。

二人の顔は真っ赤で呼吸が荒く、そして何より凄じ熱だった。

「ひ、酷い熱だ。……先生、保健室に行く許可を呉れ！」

俺は教室に居る監督先生に保健室に行く許可を大声を出して求めた。

このままじゃ二人の体が危険だし、何よりこんな熱じゃテストなんて出来る訳が無い。

だが先生は、俺達に近付いてきてとんでも無い事を言ってきた。

「其れは良いが、試験中に退席すると“無得点”扱いになるが其れでも良いかね？」

「な、何を言ってるんだよアンタは！？今はそんなくだらない事を言ってる場合じゃ無いだろうが！瑞希とフェイトは酷い熱で意識が朦朧としてるんだぞ！アンタは仮にも先生だろうが！」

俺は先生の言った事に切れて、瑞希とフェイトを見ながら先生に訴えかけた。

だが先生は俺の言葉を全く真剣に聞き入れておらず、眼鏡を片手

で上げて俺を見てきた。

「健康管理もテスト勉強の一つだ。其れを分かっている健康管理が出来なかったのは自業自得だ。君がどうこう言った所で、無得点扱いになるのに変わりはない。」

「な!？」

「速く席に戻りたまえ。君も無得点扱いにするぞ、新井。無得点扱いが嫌なら席に戻れ、二人を保健室に連れて行きたいなら無得点扱いになるんだな。」

ブチッ!!

先生、否、オッサンが俺にそう言った瞬間、俺の中に在る理性が完全にぶち切れた。

「……おい、」

「何だ、速く席へオラッ!!」「グハッ!？」

バキヤア!!!

俺は思いつきりオッサンの顔を殴り飛ばし、オッサンを痛みで気絶させた。

俺の身体能力は他の奴よりずば抜けていて、何故かは分からない

が漫画の『BLEACH』の技や『NARUTO』の忍術が使えるんだ。

まあ今はそんな事はどうでも良いか、今は二人を保健室に連れて行く事が先決か。

「よっこいしょ。悪かったな騒がしくしてしまって、皆は引き続きテストを頑張れよ。」

俺は二人を器用に背負って、俺を見ている皆に謝って保健室に向かった。

「我慢してくれよ、今保健室に向かっているからな。」

俺は意識が朦朧としている二人にそう言つと、二人は安心したのか疲労が溜まっていたのか同時に寝てしまった。

さて、オッサンを殴ったから“観察処分者”になるかもしれないが、別に後悔もしてないから別に良いか。

「失礼します、病人が出たので連れて来ました。」

俺は保健室の扉を開けて、先生にそう言いながら保健室に入った。

番外編 続編がバカとテストと召還獣だったら……（後書き）

ツカサ「どうも、双葉 ツカサです。」

優奈「どうも、優奈です。」

ツカサ「……………」

優奈「……………」

ツカサ「…………二人足りないよ！！何で一番此処に居なきゃいけない二人が居ないの!？」

優奈「わ、私に聞かれても……………」

ツカサ「未だツツコムよ！今回は出番が在るって言うってたのに出番が無かったよ！」

優奈「つ、ツカサさん……………」

ツカサ「少しO・HA・NA・SHIをしなといけないね。」

優奈「つ、ツカサさんが壊れてきたので急いで次回予告をします！
次回 続編がバカとテストと召還獣だったら……………」

ツカサ「ガイアフォー스로O・HA・NA・SHI?それともジエ
ミニサンダーでO・HA・NA・SHI?」

優奈「じ、次回もお楽しみに！ツカサさん、戻ってきて下さい！！」

諒「……………松上は？」

スバル「提出物を頑張ってる。」

諒「ちゃんとした理由だったな。」

スバル「そうだね。」

暁「……………すずかは？」

諒「松上のみぞ知る世界。」

スバル「……………大変だね、松上さん。」

番外編 続編がバカとテストと召還獣だったら……（前書き）

はあ、漸く話が書けた。

取り敢えず今回で番外編は終わり〜。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

番外編 続編がバカとテストと召還獣だったら……

side 諒

ジリリリリリリ（ry

カチツ！！

俺はセツトしていた目覚ましで目を覚まし、目覚ましを止めて重い目蓋を開けた。

時刻は六時五十分、今から弁当の準備などをしても十分間に合う時間だ。

俺は欠伸をして体を起こそうとした時、今迄眠っていた体の感覚器官が何かを感じ取った。

誰かが俺の上に乗っていて、体を起こす事が出来なく動けない。俺は少し焦りながら布団をめくると、俺の上には幸せそうに寝ている俺の義妹が寝ていた。

……また勝手に入ってきたのかよ、今日で何回目だ？

俺は寝ている義妹に呆れながら義妹を体の上から退かして起き上がり、パジャマから学校の制服に着替えてキッチンに向かった。

自分で言うのも何だが主婦顔負けの手際の良さで弁当と朝食を作った。

俺が弁当や朝食を作っているのには理由がちゃんと在る。

俺は元々この家の夫婦の子供じゃない、この家の夫婦の親友の子供だった。

だが俺の本当の父親と母親は俺が幼稚園児の時に通り魔に殺され、

俺の両親の親友であるこの家の夫婦・俺の二人目の両親に養子として引き取られた。

だけど二人目の両親も俺が小学生の時に交通事故で死んで、俺と二人目の両親の娘・俺の義妹しかこの家には居ないんだ。

俺達二人を引き取ってくれる親戚は居なかったので、俺達二人だけで今迄頑張ってきたんだ。

「お兄ちゃん！」

すると突然、そんな声が聞こえたと思ったら誰かが後ろから俺に抱き付いて来た。

俺は特に驚く事も無く、抱き付かれたまま朝食を机に運んだ。

「ティアナ、準備は出来たのか？」

「勿論だよ！」

俺が俺に抱き付いている義妹・ティアナに聞くと、ティアナは俺の前に回って百点満点の笑顔で俺に答えた。

ティアナ、本名新井　ティアナは俺にとつて唯一の家族で、俺が居ないと何も出来ない兄離れ出来ない困った義妹だ。

まあこんなティアナだけど、可愛い所が在るから俺もつつい甘やかしちまうんだよな。

「さ、速く飯を食べて学校に行こうぜ。」

「うん！」

俺達は椅子に座って、手を合わせて「頂きます」と言っって朝食を食べ始めた。

sideフェイト

私は今、親友の高町　なのは・八神　はやて・響　ミソラと一緒に学校に向かっている。

「しかしフェイトちゃん、本当に運が悪いな。振り分けテストの日に熱が出るなんてな。」

すると私の隣を歩いているはやてが、笑いながら私にそう言ってきた。

確かに振り分けテストの日に熱が出て無得点扱いになっちゃったけど……

「でも悪い事ばかりじゃなかったよ。」

「……えっ?」「」

「りよ、諒が私を背負って保健室に運んでくれたんだ。／／／／」

「……え、ええええええええ!!?」「」

私があの日を思い出して顔を赤くして皆にそう言うと、皆は少し間を開けて大きな声を出して驚いた顔をした。

熱で意識が朦朧としちゃって倒れちゃったけど、諒が私の事を本当に心配してくれて無得点扱いになるのにも関わらず私を保健室に連れて行ってくれたんだよね。

「りよ、諒くんにおんぶされたなんて……」

「う、羨まし過ぎるで……」

「何かテストを真面目に受けて損しちゃったな……」

するとなのは達が本当に残念そうな顔をして私を見ながらそう言うてきた。

私達つて皆、諒の事が好きなんだよね……

他にも諒の事が好きな子が沢山居るから、ライバルが凄く多いんだけど……

何故かなのは達の事だけライバルと思えないんだよね。

私はそんな事を思いながら学校に向かって歩いて行った。

そう言えば私、無得点扱いだから今年はFクラスだったけ？

仲良く出来るかな？

side 諒

俺達は朝食を食べ終わって、荷物を持って高校に向かってる。

出た時刻で普通に歩いたらギリギリ間に合う時間帯なので、俺達はのんびりと迄は言えないが普通に歩いていた。

俺とティアナは何時もの景色を見ながら桜が沢山在る道歩いてると、突然ティアナが俺の腕に抱き付いて来た。

はあ、毎日言ってるが離れてくれないから若干諦めてるんだよね。俺は少し疲れた顔をしながら歩いていると、俺達の高校の校門が見えてきて、校門には一人の先生が仁王立ちで立っていた。

「お早うございます、西村先生。」

「お早う、新井兄妹。」

俺達は校門に仁王立ちしている先生・西村先生に挨拶した。

西村先生、本名西村 宗一先生、科目は“補修”、趣味はトライアスロン、皆からは“鉄人”と言われている俺がこの学校で信頼出来る数少ない先生だ。

「今日も兄妹仲良く登校か、お疲れさん。」

「ありがとうございます、西村先生。」

「其れはどう言う意味、西村先生？お兄ちゃん？」

西村先生が俺とティアナの顔を一度見て俺の顔を見てそう言うてくれたので、俺は疲れた顔をしながら西村先生にそう言うてティアナが頬を膨らまして拗ねて聞いてきた。

……義妹じゃなかったら襲つてた、性的な意味で。

思春期真っ直中の俺にティアナの様な可愛い女子が俺に抱き付いて来たり、胸を当ててきたり、笑顔で会話されたりすると正直な話、マジでキツいんだって。

……えっ？

シスコン？

……認めたくないが世間では俺の事をそう言うだろう、多分。

「新井^{バカ}兄妹、受け取れ。」

「今、新井と書いてバカと読みませんでした？」

西村先生が俺達にそう言っ封筒をそれぞれ渡してきたので、俺はジト目で先生を睨みながらそう言っ封筒を受け取った。

封筒には綺麗な字で『新井 諒』と『新井 ティアナ』と書かれている。

この封筒には振り分け試験の結果が入っている。

この高校、文月学園は成績ごとにAクラスからFクラスに振り分けられていて、Aクラスが成績が良くて、逆にFクラスが成績が悪い。

この点が文月学園の他の高校と変わっている所の一つだ。

まあクラスで成績も異なっていれば設備と環境も違うんだ。

Aクラスは設備にノートパソコン、個人エアコン、プラズマディスプレイ、リクライニングシートetc...

とにかく豪華で最高な1年が約束されてる訳だ……幾ら何でも金を掛け過ぎじゃね？

逆にFクラスはと言うと、親友の話ではひび割れた黒板に座布団、カビ臭い畳etc...

コッチは鬱気味で最悪な1年が約束されている訳だ……この差は余りにも酷くねエか？

そう思っるのは俺だけなのか？

「すまないな、新井兄程の生徒ならAクラスなど軽々行けた筈なのに。……あの時、俺が居れば……」

すると突然、西村先生が俺に申し訳ない顔をしながら謝ってきた。

俺は封筒を開けて中に入っていた書類には、『新井 諒、Fクラス及び観察処分者を命ずる』と書かれていた。

俺は其の書類を手で破いて粉々にして、桜吹雪と一緒に風に乗せて飛ばした。

「気にしてませんよ、俺がやりたくてやった事ですから。其れに、

我慢出来なくなったら戦争をやったら良いしね。」

「……フツ、そうか。ならば早く教室に行け、遅刻するぞ！」

「了解ッス！」

「はい！」

西村先生に真剣な顔をしてそう言つと、西村先生は不適に笑つて俺達にそう言つてきたので、俺達は走つて教室に向かった。

後ろから「吉井、お前は馬鹿だ。」と言つ声が聞こえてきたが、特に気にする事も無く俺達は走り続けた。

……
……
……

「所でティアナ、お前は何処のクラスだ？まあお前の頭ならBクラスは余裕だろ、それともAクラスか？」

俺達はFクラスに向かう為に廊下を歩いていると、ふとティアナのクラスの事が頭を過ぎつたので隣を歩いているティアナに聞いた。俺達は去年はAクラスで過ごしていたので頭は其れなりに賢い。

だが俺は観察処分者になつてFクラス。

ティアナは何の関係も無いのでBクラスは余裕、今年もAクラスかもしれない。

「Fクラスだよ！」

「……………は？」

「振り分け試験の日、お兄ちゃんがFクラスになるって予知したから、テストの回答欄全部に『お兄ちゃん大好き！』って書いたんだよ！」

「……………はあああ。」

俺はティアナから教えられた衝撃的な事実にも、心の底から溜め息を吐いてFクラスに向かった。

コイツは何しに学校に来てるんだ、全く訳が分からん。そんな事を思いながら歩いていると、Aクラスの前に俺達はやってきた。

俺は扉の窓から中の奴等にバレない様に覗くと、教室には俺の親友達の姿が在った。

アイツ等は無事にAクラスになれたんだ、良かった良かった。

俺は少し安心して時計を見ると、後少してチャイムが鳴りそうだった。

俺達は其れを三回確認して、無言で互いの顔を見て頷いて全速力でFクラス迄走った。

……………

……………

……………

……

「ハア……ハア……や、やっと着いた。」

「い、幾ら何でも遠過ぎるよ……」

俺達はFクラスの扉の前で膝に手を置いて肩で息をして、Fクラス
の遠さに愚痴を言いながら呼吸を整えた。

予想より時間が掛かったから、チャイムが鳴って俺達は完全に遅
刻してしまった。

去年はFクラスじゃなかったし遅刻してしまったから、せめて第
一印象は良くしとかねエとな。

「すみません、遅刻してしまいました。」

「とつとと座れ、このウジ虫野郎。」

ヒュッ！！

「……次、言ったらホントに刺す。」

い、今起こった事をありのままに話すぜ。

俺はFクラスの扉を開けて申し訳ない顔をしながら謝って入った
んだ、すると俺の親友の坂本 雄二が俺だと気づかず暴言を吐い
てきた。

雄二が暴言を吐いた瞬間、俺の後ろからカッターナイフが飛んで
きて雄二の頬を掠めたんだ。

俺が後ろを見ると、ゴミを掃除する様な目で手にカッターナイフ

を準備しているティアナが立っていたんだ。

妄想？

違う、これは俺の目の前で起こった現実なんだ！！

「あ、りよ、諒だったのか。わ、わ「其れが人に謝る言葉？態度？姿勢？」すいませんでしたアアア！！！！orz」

雄二が俺だと気づいて俺に謝ろうとした時、ティアナが雄二の言葉を遮ってそう言ったので雄二は素晴らしい土下座で俺に謝ってきた。

「ま、まあ雄二も俺だと分からなかったんだ、気にするなつて。」

俺は雄二に苦笑いしながらそう言って、ティアナにカッターを仕舞う様に目で指示して教室に入った。

「「「諒！！」「」」

すると教室の後ろの方から誰か達に呼ばれたので、俺達は俺が呼ばれた場所に向かった。

其処には俺の親友の三人が座っていた。

「オツス、フェイトに秀吉に美波。これから一年よろしくな。」

俺は親友のフェイト・秀吉・美波に笑顔で無難な挨拶をして座った。

三人は俺の顔を見て顔を赤くしたが、ティアナの顔を見て目から火花を出していた。（冗談抜きで。）

すると馬鹿の代名詞と言っても過言じゃない俺の親友の一人の吉井 明久が入ってきて雄二と漫才の様な会話をして、其の途中にこ

のクラスの先生が入ってきた。

さて、今年は濃い一年になりそうだ。

俺はそう思いながら窓ガラスが無い窓から空を見た。

……酷過ぎだろ、この教室。

マジで戦争を起こさないと駄目だな。

番外編 続編がバカとテストと召還獣だったら……（後書き）

スバル「僕の出番は!？」

ギンガ「私の出番も無かった!？」

松上「ワリイ、君達は思いつかなかった。」

「嘘だ!！」

松上「嘘じゃない!！」

ツカサ「……僕の出番は？」

松上「……えっ?」

ツカサ「僕の出番が無かったよ。」

松上「だ、だから話が思い……其の左手に構えたエレキソードを今直ぐに下ろしなさい!！」

ツカサ「だが断る!！」

松上「ことわ」「エレキソード!！」ぎゃあああああああああ
!?!?!?!?」

スバル「カイザーデルタブレイカー!！」

ギンガ「デイバインバスター!！」

ヒカル「落ち込むなって、俺も出てないんだからよ。」

暁「————orz」

「「……はぁぁ」

第125話 本編よ、俺は帰ってきた！（前書き）

久々に本編に戻ったよ！

……長かったね、特別編と番外編。

あつ、今週の木曜からテスト一週間前なので更新が出来ないかもし
れませをので。

後書きに大切な事を書いていますので、後書きもちゃんと見て下さい。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

第125話 本編よ、俺は帰ってきた！

Side 諒

「本編よ、俺は帰ってきた！！」

「い、行き成り何を言ってるのさ？」

「……言わなくちゃいけないのかと思つてさ。」

「……そう。」

俺は少し大きな声でそう言うとスバルが聞いてきたので、俺は素直に思つた事を言つたらスバルは少し呆れた顔をして返事をした。アンドロメダの戦いから数週間の歳月が経つて、俺達は何時も生活に戻つて学校生活を過ごしている。

スバルの恋人となつたギンガ・ナカジマはスコープオンに体をずっと憑依されていたので、今はWAXAで検査も兼ねて入院している。

まあ体には特に大きな異常は見られなかつたらしいし、後少して退院出来るらしいから心配する事は無いんだがな……

スバル、お前絶対に心の中で俺の事を馬鹿にしただろ？

「新井君、星河君！今から私が話すから黙りなさい！」

「わ、ワライ……」

「い、ゴメン……」

すると教卓の前に立っている委員長が、俺とスバルを睨みながら注意してきたので俺達は素直に謝った。

この前返は俺の方が強かったのに、何故委員長の方が強いんだろ
うか？

……俺には絶対に分からないから、今度スバルに聞いてみるか。
そんな事を思いながら黒板を見ると、二週間後に行われる文化祭の事と『文化祭の出し物は何にするか？』が表示されていた。

初日は俺・なのは・フェイト・はやて・ティアナはライブだから
クラスの出し物には不参加だけど、残りの六日間は参加出来るから
ちゃんと考えないとな……

「……だから、我がクラスは一週間で二つの出し物をしようと思っ
てるわ！！」

委員長はそう言って教卓を叩いて、俺達に自分の考えを訴えてき
た。

……ワリイ委員長、話を聞いてなかったから全然分からなかった。

「月・火・木は喫茶店、水・金・土はお化け屋敷をする予定だけど
……何か質問は在る？」

委員長は文化祭の日程を言って、教室を見渡して俺達に聞いてき
た。

……えっ、皆は質問しないの？

き、気まず過ぎるだろ、おい。

俺はそう思いながら手を上げると、クラスの皆の視線が俺に向け
られた。

きゅ、急に全員が視線を俺に向けるなよ！！

「新井君、質問は何かしら？」

「あ、嗚呼。喫茶店って普通の喫茶店をするのか？お化け屋敷のお化けはどうするんだ？」

委員長に当てられたので、俺は立ち上がって委員長に質問をした。料理なら簡単な物ならこのクラスの全員（一部を除く）は作れるし、本格的な物でも俺やなのは達だったら作れる。

だけど、委員長が普通の喫茶店をする訳が無い。

絶対に普通じゃない喫茶店をやらされる可能性が在るから、俺は聞いたんだ。

お化けに関してもそうだ。

布を被って普通に驚かせるお化け屋敷に、委員長が納得する訳が無い。

絶対に何かさせられる可能性が在るので、俺は喫茶店の事と同時に聞いたんだ。

「普通の喫茶店じゃないわ。皆には色んな格好をして働いて貰う、俗に言う“コスプレ喫茶店”ね。」

委員長がそう言った瞬間、男子全員（俺・スバル・ツカサ・ヒカルを除く）と一部の女子が騒ぎ出した。

……未だ質問の答え、全部返して貰ってないんだけど……

「静かにしなさい！！」

委員長が教卓を叩いて同時にそう言うと、一瞬にして騒いでいた奴等が黙った。

……何処の軍隊ですか、このクラスは？

「……今のが一つ目の質問の答えよ。お化け屋敷のお化けは新井君、

貴方が何とかしてちょうだい。」

「……………は？」

委員長は俺に指さしながらそうやってきたので、俺は余りにも驚き過ぎて間抜けな声を出してしまった。

ナ、ナニヲイッテイルンダロウカアノヒトハ？

オレニナントカシロツテキコエタケド、オレノキキマチガイダヨネ？

「皆が驚くお化けを用意してね、新井君。」

委員長は俺にそう言って話を再び進め始めた。

提案者の委員長やクラスメイトは何もせず、俺一人でお化けを用意しろと？

……………良いぜ、俺にお化けを用意させた事を絶対に後悔させてやるよ。

「……………嗚呼、任せておけよ。」

「え、ええ、お、お願いするわ。」

俺は完全に悪人面の笑みを浮かべて委員長にそう言って椅子に座ると、委員長は何故か（……………）怯えた顔をして俺にそう頼んできた。

何で怖がってるのかな、俺には全く分からないよ。

「えつ……………と、家族や友人は呼んでも良いからね。勿論、人数制限とか無いから沢山呼んでも良いわ。」

へえ、人数制限が無しで友人を呼んでも良いのか……
だったら平行世界から沢山呼ぼう、そうだそうしよう。
さて、一体誰を呼ぼうか？

第125話 本編よ、俺は帰ってきた！（後書き）

さて、今回はキャラ達はお休み。

まあ何故かって言われたら最終確認をする為。

文化祭に出てくれる方、最終確認をするので感想に出てくれるキャラを表記して下さい。

マジですいません。

次回 さて、平行世界に行こうか

次回もお楽しみに！

諒「何回確認するんだよ？」

ヒカル「石橋を叩いて渡れって言葉が似合うな。」

諒「叩き過ぎだろ。」

ヒカル「まあな。」

第126話 さて、平行世界に行こうか（前書き）

今回から長期コラボ！

そして今回はコラボする三つの作品の世界に行きます。

勿論、今回書かれてない作品もコラボしますので。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

第126話 さて、平行世界に行こうか

side 諒

はい、展望台に一人で突っ立っている新井諒です。

まああのクラス会議？が在った金曜日から翌日、つまり今日は土曜日で学校は休み。

仕事も今日は無いので、家で久し振りにずっと寝ようと思っていたのだが、なのは達が「家を本格的に掃除する！」って宣言したので家を追い出された訳だ。

しかし何だ、どうして今日に限って皆用事が在って誰も居ないんだよ？

スバルはギンガのお見舞いをする為にWAXAに行ったし、ツカサとヒカルは孤児院の行事で何処かに遠足に行ったし、委員長達は文化祭で使うのに必要な物を買いに行ったし、なのは達に至っては先程言った通り掃除するし……

あれ、俺って今日一人で過ごさないとダメって事？

うわ、一人で過ごすとか何年振りだろうか、ってか今更一人で一日を過ごせる訳無いだろ。

「おい。」

「忘れてた、お前が居たのをすっかり忘れてたよ。」

俺が空を見ながら少し嘆いているとフォルテが話し掛けてきたので、俺は元気になってフォルテにそう言うところフォルテは少し切れた顔をしながら俺を見てきた。

あつ、少し怒っちゃったか、でもフォルテって最近陰がうす、それ以上の事を考えたら上半身と下半身がお別れするぞ。「……ま、まあ一人じゃないから良いか。」

「さてフォルテ君、我々で一体何をして時間を潰そうか？」

「……もうツッコまん。時間を潰したいなら、平行世界の仲間を文化祭に招待したらどうだ？」

俺がシャーロック・ホームズ風にフォルテに聞いたが、フォルテはツッコんで呉れず時間の潰し方を教えて呉れた。

ツッコんで呉れなかったのは少しショックを受けたが、平行世界の皆を文化祭に呼ぶのは良い考えだな。

“思い立ったが吉日”って言うし、今から皆の所に行くか！！

あっ、でも今回は俺の知らない人達も呼んで交流した方が良くもな、良い機会だし。

そうと決まれば……

「影分身の術！！」

俺は“影分身の術”を発動して三体影分身を出して、パラレルモンの能力をダウンロードして平行世界の扉を出現させた。

「……じゃ、また後で！！」

影分身達は俺にそう言っつて、パラレルモンの能力で出現させた扉の中に入って行った。

さて、俺も平行世界に行くとしますか。

俺が行かないといけないのは……優星さんの世界・神威の世界・要さんの世界か。

……優星さんや神威は来て呉れると思うけど、要さんは来てくれるのか？

ってか、要さんが来て楽しめる物が在るのか？

ま、まあ最悪の場合、俺が戦って楽しんで貰えば良いか。

……瞬殺されるか逃げ回るしか出来ないけど。

俺はそう思いながらパラレルモンの能力で出現させた扉の中に入
って行った。

さて、まずは優星さんの世界に行くか。

.....

.....

.....

.....

「無事に到着出来た！」

俺は目の前に在る建物を見て、少し感激しながらそう言った。

俺の目の前に在る建物は“機動六課”、“魔法少女リリカルなのは
Strikers”に出てくる重要な建物だ。

……転生前から思ってたんだけど、Strikersでのなのは
達って大人だよな？

少女では無いと思うんだけど……気にしちゃダメなんだろう、大
人の事情って物なんだろう。

しかし、どうやって優星さんに会おうか。

ハッキリ言ってしまうえばこの中に入るのは赤子の手を捻るより簡
単なんだけど、これは世間一般では不法進入って言う。

だけど、堂々と正面から入って「優星さんに会わせて。」って言
って会わせて呉れる訳無いし……

あゝ、どうしようかな？どうしようかな？。

「まっ、飛んでたら良い案が浮かぶだろ。……多分。」

俺はそう言つて“ゴットノウズ”の純白の羽根を生やして、取り敢えず空を飛んで散歩しようとした。

「おゝい、其処で何してるのー!!」

すると機動六課の入り口から誰かが出てきて、俺に大きな声を出して話し掛けてきた。

……もう少し早く出て来て呉れたら、ワザワザ“ゴッドブレイク”の羽根を生やさなくても良かったのに……

俺は心の中で少し愚痴を言いながら下に降りて、話し掛けて来た人物と目線が同じになる位置で降りるのを止めた。

「えっと、君は一体？」

機動六課の制服を着ている金髪の女性が、苦笑いしながら俺に聞いてきた。

うん、優星さんの嫁の一人のフェイトさんだな。

さて、何て言つて優星さんを呼んで貰おうか？

……止めた、もうフェイトさんに頼もう。

「俺の名前は新井諒、平行世界から来た優星さんの友達？です。今度俺の通っている学校で文化祭があるので、優星さんを招待してきました。良かったら来て下さいと伝えて下さい。詳しい事はまた後日、招待券と一緒に手紙を送ります。」

「うん、ちゃんと優星に伝えておくね。」

「ありがとうございます。では、未だ招待しないといけない人が居

るので。」

俺はフェイトさんにそう言って、パラレルモンの力を使って平行世界の扉を出現させて中に入って優星さんの世界を去った。

.....

.....

.....

.....

「.....この前にも此処に来たが、まあ気にしちゃダメだ。」

俺は前に在る家を見ながら、自分に言い聞かせる為にそう言ってインターホンを押した。

ピンポーン

「はーい!!」

俺がインターンを押すと、家から元気な少女の声が聞こえて来て扉が開いた。

扉を開けたのは、茶髪でサイドテールをしているこの世界の原作の主人公の高町なのはだ。

「この間ぶりだな、なのは。」

「あつ、諒さん！この間ぶりですね、今日はどうしたんですか？」

俺がなのはに挨拶をすると、なのはは元気に俺に挨拶をしてどうしたのかを聞いてきた。

神威が出て来ないのを見ると何処かに修行に行ってるんだろう、まあ今日は神威が居なくても良いから別に居なくても良いけどさ……

「今度、俺が通ってる学校で文化祭をするんだ。詳しい事はまた後日、招待券と一緒に手紙で送るから。……って事を、神威に伝えて呉れないか？」

「はい！！……あの、私達もその文化祭に行っても？」

「招待券を貰った奴は何人とも一緒に来て良いんだ。神威と一緒に来な。」

俺がそう言うと、なのはは嬉しそうな顔をして「はい！！」って返事してくれた。

さて、優星さんと神威には（間接的だが）伝えたから、後はどうやって誘おうか決まってるない要さんだけだな。

「じゃ、俺は未だ誘う人が居るから今日はもう行くわ。じゃあ文化祭に会おうな。」

「はい！！楽しみにしてます！！」

……

……

.....

.....

「.....要さんは此処で何をしてるんだ？」

俺は無事に要さんの居る世界にやって来た、やって来たのだが.....

「俺の知らない世界だな。.....まっ、知らなくても要さんだったら特別な事が無い限り死なないだろう。」

俺はそう言いながら街を歩いて、要さんが居そうな場所（酒場など）を搜した。

しかし、完全に俺の服装って浮いてるよな。
どんな格好かって？

白のカッター（ボタン全開）と黒のジーンズだ。

あゝ、もうちょっと要さんが居る世界に付いてちゃんと調べてたら良かったよ。

「おっ、在った在った。」

そんな事を思いながら歩いていると少し大きな酒場を見つけたので、俺は周りの目を無視して酒場に入った。

酒場に入った瞬間、要さんを見つけた。

否、要さんって基本目立つし周り空気少し違うからさ。

俺は酒場に居る奴等の視線に少しビビりながら要さんに近付いた。

「要さん。」

「ん？……久しぶりだな。」

俺が話し掛けると、要さんは俺にそう挨拶をして酒を飲み始めた。え、えええ、久しぶりに会ったのにこの反応の薄さ……

要さんだからって言ったらお終いだけど、もう少し反応をして欲しかった。

ま、まあ良いや。

「今度、俺が通ってる学校で文化祭をします。良かったら来て下さい。」

「俺の他に誰か来るのか？」

「俺が呼んだのは神威と優星さん。影分身を使って他にも呼んでますから、結構な人が来ると思います。」

俺が要さんにそう言うと、要さんは少し考える動作をして俺の顔を見てきた。

「ソツチで何か出来るか？」

「えっ？……俺の教室内だったら多分何でも出来ますよ。只、お化け屋敷もするんで、その日以外だったら。」

「そうか……分かった。文化祭、楽しみにしてる。」

要さん、貴方は一体何をやる気ですか？

変な事はしないで下さいね、他の奴等にバレたら色々と面倒臭いので……

「じゃあ帰ります。」

「嗚呼、またコツチに来いよ。」

俺がそう言っただけで帰ろうとしたら、要さんが不気味な笑みを浮かべながら俺にそう言ってきた。

……死亡フラグが建った気が物凄くするんだけど……

「ま、まあ暇だったら来ます。」

俺は無難な事を要さんに言って、酒場を出て人気の無い場所に移動してパラレルモンの能力を使って自分の世界に帰った。

さて、急いで招待券と説明文を書かないとな……

第126話 さて、平行世界に行こうか（後書き）

松上「高校生活の憂鬱」

すずか「行き成りどうしたの？」

松上「明日は忌々しい持久走が在る日なんだよ、すずか君。」

ツカサ「あゝ、確か12分間走だっけ？」

松上「6分間走でさえシンドかったのに、倍の12分間走とかマジで逝く。」

優奈「い、逝っちゃダメです！」

松上「逝く逝く、絶対に逝くって。」

ツカサ「言い切ったよ、この人。」

優奈「それより、今回から長期コラボですね。」

すずか「凄いよ今回は。正直、こんなにキャラが居て大丈夫なの？
って思う位の量の作品とコラボだから。」

松上「我が輩の辞書に“不可能”と言う文字は無い！！」

ツカサ「でも持久走は無理って言ってなかった？」

松上「……次回予告をするか。」

ツカサ「無視!？」

松上「次回 文化祭だよ!全・員・集・合!！」

すずか「それじゃあ次回も!」

4人「お楽しみにー!!！」

暁「出番を下さい。」

諒「……多分次回から在るだろ。」

暁「我が生涯に一片の悔い無し!!！」

ヒカル「それ言ったら死ぬんだぜ?」

第127話 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート1（前書き）

やっと文化祭、でも短い。

まあ次からは無駄に長くなる………とりたい。

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

第127話 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート1

side 諒

只今後からのライブの為に体育館でギターなどのセッティングをしている、文化祭実行委員副委員長（笑）の新井諒です。

まあ文化祭実行委員副委員長（笑）に付いては俺も昨日知ったんだ、黒板の横に貼られていた手紙を読んだらその手紙には文化祭実行委員の事が書いていて、知らない間に俺は文化祭実行委員副会長になっていた。

……人権に反してないか？

まあ委員長に言ったら視線だけでぶっ殺される（冗談抜きで）の言わない、まあ委員長にそんな勇気が必要な事を言う奴は居ないがな。

文化祭開始の時刻は午前十時、今の時刻は午前九時半で後三十分で開演だ。

と言っても、俺達のクラスは今日は“コスプレ喫茶店”をするから、衣装は準備出来てるし料理もある程度は作ってあるから問題無い。

まあ俺達はどんなコスプレをさせられるのかは未だに聞かされておらず、俺達がどんなコスプレをするのか知ってるのは委員長だけだ。

おっ、何時の間にか楽器のセッティングが終わってたな。

「さて、後は緊張せずに歌えば終了だ。」

「諒君達は何度も人前で歌ってるから大丈夫だけど、僕達は人前で歌うなんて今日が初めてだから緊張するって。」

俺は立ち上がって綺麗に並べられた椅子を見ながらそう言つと、

何時の間にか隣に居たスバルが苦笑いしながら俺に言って来た。

まあ人前で歌うつてのは緊張するが、慣れたら結構楽に歌えるんだよな。

……人間、不自然な事が慣れるから怖いんだよな。

「まつ、気楽に行こうぜ。……そうだ、ギンガは今日は来るのか？」

「うん、ヨイリー博士から許可を貰ったからね。母さんと一緒に来るらしいよ、暁さんも一緒に来るらしいけど暁さんはパトロールをするらしいよ。」

俺はスバルに緊張を少しでも解く様にそう言ってギンガの事を聞くと、スバルは緊張した顔から嬉しそうな顔をしてギンガの事と暁の事を教えてくれた。

ヨイリー博士が許可を呉れたって事は、もう少して退院出来るって事だよな？

久しぶりに話が出来るから嬉しいが、暁が来るなんてな……

プライベートで来るならO・H A・N A・S H Iしようと思ってたが、今日はちゃんとした理由で来るらしいし、パトロールをして呉れるんだからO・H A・N A・S H Iは無しにしておいてやろう。……そうだ、今の内に作戦を実行しとくか。

「ツカサー、今直ぐ君に言わなければならない事が在るからカモン！」

「えっ……分かった！」

俺は作戦を第一段階に進める為にツカサにそう言うと、ツカサは少し不思議そうな顔をしながら走って俺達の所に来た。

すると近くに居た数人の女子達が、「新井君×双葉君……死んで

も良い。」とか呟きながら鼻血を出してぶっ倒れた。

……この学校には非常識な人間ばかりだな、何で小学五年なのに腐女子なんだよ。

真剣に転校を考えた方が良いのか？

この学校の校長も俺が脅し……ゲフンゲフン、O・H A・N A・S H I しただけで文化祭を一週間に延ばして呉れたし。

O・H A・N A・S H I した理由？

聞いても面白くないから聞かない方が良いと思うぞ、只俺がO・H A・N A・S H I したお陰で社会が少しだけ良くなったと思うぞ。

「どうしたの、諒君？」

「ツカサ、“優奈”が文化祭は“お前”と“一週間”“ずっと”“一緒”に“二人きり”で回りたいらしいぜ。」

ツカサがやって来て俺に聞いて来たので、俺は色んな部分を強調して言った。

ツカサは人の恋心に関しては無駄に鋭い癖に、自分に向けられる恋心に関しては有り得ない位鈍いんだよ。

現に優奈の好意に未だに気付いていない……彼処迄嘘を吐くのが下手な優奈が言う事を信じるんだもん。

鈍感と言うか純真と言うか……

「優奈ちゃんか？……分かったよ、今日来るんだよね。自分の出番や仕事の時以外は成る可く優奈ちゃんと一緒に行動するよ。」

「そうしろ。……話はこれだけだ。」

ツカサが少し目を瞑って考えたが直ぐに目を開けてそう言ってきたので、俺はツカサにそう言って舞台から降りた。

さて、最終検査しに教室に戻るか……

『……では諸君、これ等の事を守って一週間を過ごして欲しい。』

俺達は教室で椅子に座って、スピーカーから流れる校長の文化祭の挨拶を聞いている。

時刻は午前九時五十九分三十秒、後三十秒で午前十時になって文化祭の始まりだ。

クラスの女子達はコスプレをしていて、男子達はエプロンを巻いている。

取り敢えず先ずは客を集める事が第一なので、女子のコスプレ姿で客をこれでもか！？って言う位迄集める。

なのはの格好は電波変換した時と同じ服装、フェイトとはある魔術の禁書目録に出てくるインデックスの格好、はやては新世紀エヴァンゲリオンに出てくる中学の制服、ティアナは何故か旧ス＋水＋猫耳＆尻尾、ミソラは丈の短いミニスカのメイド服、委員長は何故かチャイナ服を着ていた。

……何処からその服を持ってきたんだよ。

まあ俺達男子は完全に裏方だから良いけどね。

と言っても、コスプレしたなのは達に発情した馬鹿な屑（男子）達がなのは達に襲いかかるうとしたから、スバルとツカサとヒカルと一緒にぶっ潰したから、男子は俺達四人しか居ないんだけどな。

まあ忙しくなったら影分身を使って人手を使えば良いし、女子の
数人を此方に回して貰えば多分行けると思う。

そう思っていたら、秒針が十時迄後十秒を切った。

俺は校門が見える窓辺に移動して、速く中に入ろうとしている人
だけかりを見た。

10……

9……

8……

7……

6……

5……

4……

3……

2……

1……

『コダマ小学校文化祭を始めるZO!』

校長の気持ち悪い声と同時に校門が開き、沢山の人達がコダマ小
学校に入って来た。

目を凝らして良く見れば、俺が招待した平行世界の仲間達も中に入ってきた。

さて、皆が楽しみにしていたコダマ小学校文化祭なんだ、ちゃんと成功させねエとな。

第127話 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート1（後書き）

松上「さて、キャラ達が文化祭だから作者の松上と、」

すずか「後書き限定キャラのすずかが後書きをお送りします！」

松上「明日は体験入学と言う物が在って、何故かは分からんが学校に行かねばならん。」

すずか「なのに嫌そうな顔はしてないよ？」

松上「否さ、学校にPSPを忘れちゃってさ。忘れたって気付いたのは家に帰って来た時だったんだよ。」

すずか「あつ、明日学校だからPSPを取りに行けるんだね？」

松上「ピンポン！そして来週の木曜、『魔法少女リリカルなのは A・S・GOT』の発売日だな。」

すずか「お金は足りるの？」

松上「微妙、限定版を予約したんだけどPSPを買ったからお金が6000円しか無いんだよ。」

すずか「ぜ、全然足りてないよ!？」

松上「お年玉を前払いして貰う、じゃないと買えない。」

すずか「そ、其処迄して買いたいんだ……」

松上「勿論。……皆さんは買っただろうか？……まあ良いや。さて、今回は此処迄！」

次回 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート2」

すずか「それじゃあ次回も！」

松上・すずか「お楽しみにー！！！」

暁「よし、出れるフラグが建った！」

ヒカル「優奈、ツカサを墮とせ。……字が違う？ワザとに決まっているだろ。」

第128話 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート2（前書き）

神無嶋人先生の活動報告を読んで知ったんですが、明日から一月三日までこのサイトは閉鎖されるらしいです。

……完全に予定が狂ったアアアア！！

チクソウ、何てこつたい！！

……はあ、今後はストックを矯めて行くでしょう。

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

第128話 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート2

side 諒

俺は今、手際良く注文された料理を作って、それを料理を取りに来たなのは達に持って行かせている。

俺達男子組（気絶してた奴等は無理矢理起こした）は、喫茶店を開いている俺達のクラスの隣のクラスで料理を作っているんだ。

此処のクラスの奴等は、屋上で何かをするらしかったので教室を借りている訳だ。

まあ生徒だけに料理させる事は流石に許されていないので、家庭科の先生や教育実習の先生が此処を見てくれている。

しかし、料理出来るのは俺とツカサとヒカルだけだと思っていたが、意外にもスバルや他の男子達も料理が出来るんだ。

スバルはアカネさんに料理を習っていて、退院したギンガに料理を作ってあげる為に練習中らしい。

……青春してるな、俺は青春じゃなくて日常生活で身に付けたからな。

他の奴等は「モテたいから！」って理由で料理を作れる様になったらしい。

……まあ頑張つてよ、何時か実が結ぶ事を心の中で祈っておくよ。

「諒くん、お客さんが呼んでるよー！」

すると、電波変換した時と同じ格好をしたなのはが、笑顔で教室に入って来て俺にそう言つて来た。

お客さん？

……平行世界から呼んだ人か？

「ツカサ、悪いけど此処の指揮を頼むよ。」

「えっ？……分かったよ。」

俺はツカサに此処の指揮を任せて、なのとは一緒に隣の教室に移動して俺を呼び出した人の所に行った。

……

……

……

……

「あつ、要さんに優星さん、それにフェイトさん。」

教室に入ると、周りの人よりかなり浮いている人達が居たので近付くと、俺が招待した要さん・優星さん・優星さんの世界のフェイトさんが席に座っていた。

「大分繁盛してるじゃないか。」

「でも、コスプレ喫茶って……」

「……どうして此処の世界の私はシスターさんのコスプレ？」

要さん・優星さん・フェイトさんの順番で、此処の感想を俺にそう言ってきた。

まあ優星さんとフェイトさんは感想と言つより疑問だったけどな。

「余り深く聞かないで下さい、俺も未だに理解していないって言うのが現状ですからね。」

俺は頭を掻きながら三人にそう言つと、要さんは「大丈夫かよ……」っと小さい声で少し呆れた顔をしながら俺にそう言いながら、優星さんとフェイトさんは苦笑いしながら俺を見てきた。

「コスプレは良いけど、どうしてティアナちゃんはある格好なの？」

「……俺だつて聞きたいですよ、優せ……否、師匠。」

優星さんがこの喫茶店で一番の疑問を聞いてきたので、俺はその疑問を一度見て視線を優星さん、否、師匠にそう言つた。

「何故師匠？」

「……この先、色々と苦労しそうなので苦労してそんな優星さんに色々とアドバイスを貰おうかと。」

「……喜べない師弟関係だね。」

俺はティアナを見ながら優星さんにそう言つと、優星さんは溜め息を吐きながら俺にそう言つて来た。

まあ優星さんに言つた理由が優星さんを師匠と呼ぶ理由でもあるんだが、俺の戦闘スタイルと優星さんの戦闘スタイルは似ている部分が結構在るので師匠と呼んで鍛えて貰おうと思つてるのが第一だったりする。

「まあ楽しんで行つて下さいよ、俺が渡した招待券が在れば一部を

除く店やアトラクションは無料で楽しめますから。」

「……分かった（よ）。」「」

「後、他の平行世界の人達も来てますが、問題を起こさないで下さいね。これ以上面倒臭い事はゴメンなので……。あつ、要さん、此処で何かしたかったらこの教室の隅の方がこの教室の前でして下さいね。」

俺は三人にそう言って、「それじゃ、何か在ったら呼んで下さい。」と最後に言っただ教室を出て隣の教室に戻って料理をまた作り出した。

……
……
……

……
……

「ふう、料理を作り終えた後にライブってシンドいな。」

「汗一つかいてない人が言う言葉？」

俺はMyギターの微調整をしながらそう言うと、スバルが汗をタオルで拭きながら俺にそう言って来た。

今の時刻は十一時五十五分、俺達のクラスは今回の文化祭の目玉であるクラスライブをする為に体育館に来ているのだ。

あの後はずっと調理場に居たので、平行世界から来てくれた人と

は会っていないが、一般の人と違うオーラって言うのかな？

まあオーラが違う訳だから何処に居るのか分かる、全員が体育館に集合してる。

一番ステージに近くに居るのは……

「何をして人を探知しようとしてるのは知らないけど、幕を少しメクの方が簡単だと思うんだけど……」

スバルが少し呆れながら、幕をメクって俺にそう言って来た。

……成る程、その手が在った事をすっかり忘れてたよ。

俺はスバルがメクっている幕の隙間から会場を見て、誰が一番ステージの近くに居るのかを確認した。

「……神威のグループが最前列、一番最後列が……何でフォルテとセレナード？」

俺は最前列と最後列の人物に呆気にとられて、思わず三度見をしてしまった。

否、神威のグループが最前列ってのは意外だったんだよ。

何だかんだ言っつて、神威のグループは未だ子供ばかりだから来てくれたとしても後ろの方だと思っただけだよ。

まあ神威のグループは未だ良いよ、未だ三度見する程の驚く事じゃないんだ。

驚くのは平行世界から来てくれたフォルテが俺達のライブに来てくれた事なんだ。

俺の相棒のフォルテと違って、原作に出てくるフォルテなので人間が嫌いな筈なんだ。

今居る世界で人間嫌いが未だマシになってるって風の噂で聞いたが、それでもこんな沢山の人間が居る場所に来てくれたのは驚くぜ。ってか、そもそも文化祭に来てくれた事自体が驚くべき事なんだ。

けどな。

「新井君、星河君、そろそろ始めるからコッチに来てちょうだい！」

俺が心の中で感動していると、委員長が俺とスバルを呼んで来たので、スバルは幕を閉じて俺は微調整を終えたギターを肩から掛けて委員長の所に移動した。

委員長の所に移動すると、皆が肩を組み合って円陣を組んでいたんで俺とスバルはツカサとヒカルの間に入れて貰った。

皆、歌う為の衣装に着替えており、女子達はコスプレ喫茶と同じ衣装（ティアナは教育上よろしくないのでNGとなり、活発な女の子用の浴衣に着替えて貰った。）、男子達はアニメに出てくる男子キャラの様な衣装を着ている。

俺はBLEACHに出てくる黒崎一護の卍解状態の服装、スバルは何故かロックマンエグゼに出てくる光熱斗の服装、ツカサとヒカルはイナズマイレブンに登場する世宇子中のユニフォームとファイアドラゴンのユニフォームを着ている。

他の男子達も、それぞれ意外にも似合っている服装をしている。

「皆、今日迄色々在ったけど、頑張って練習したから後は今日に発表すれば良いだけよ！……って、私も教えて貰っていた立場だから新井君にちゃんと言って貰いましょう。」

すると委員長が俺達の顔を見てそう言って俺を見てそう言つと、皆の視線が俺に集中した。

……何っつー無茶振りだよ、全くよ。

皆は期待した目で見て来るし、ティアナに関しては何かを企んでいる目をして見て来るし……。

ティアナに関してはライブが終わったら尋問……O・H A・N A・S H Iして何を企んでいるか聞くとして、今は皆の期待を裏切らな

い様な事を言わないとな。

「まあ、委員長が殆ど言ったから特に言う事は無いが、努力は絶対に裏切らないから自分を信じろ！そして、今日見に来てくれた人達のテンションを上げて上げて上げてあげまくろうぜ！」

「……オー……！」

俺は皆の顔を見て大きな声でそう言うと、皆は同時に声を揃えて返事をした。

そして楽器を弾く俺・なのは・フェイト・はやて・ティアナ・ミソラはそれぞれのポジションにセットして、今から歌うメンバーはマイクの前に移動して、未だ歌わないメンバーは裏方に移動した。少し緊張しながらスタンバっていると、幕が上にゆっくり上がって行った。

体育館は人で埋め尽くされていて、俺達は余りの人の多さに一瞬圧倒されたが直ぐに持ち直して司会の奴に目を合わせた。

すると司会は俺に無言で頷いて、マイクのスイッチをオンにしてマイクのテストをして話し始めた。

「皆さん、今日は忙しい中、そして数在るイベントの中、僕達のクラスの発表に来てくれて有り難う御座います！」

「今日迄、私達は“ヒカリ”の指導を受けて練習してきました！今日迄努力してきた事を頑張って発表したいと思えます！最後迄楽しんで行って下さい！」

司会がそう言うと体育館に居る人達は拍手を二人にして、体育館の電気がステージの所以外全部消えた。

そしてシーンっとなつて、体育館の人達全員の視線が俺達に集中

した。
何度もライブをしているとは言え、沢山の人の視線が集中されると緊張する。

俺は目を閉じて数回深呼吸をし心を落ち着かせ、ゆっくり目を開けてはやてを見て頷いた。

はやては俺の合図を見て笑顔で頷き、撥を数回叩いた。
そして、

「ワン！トウー！ワントウースリーフォー！」

〜！！

はやての声の合図で俺・なのは・フェイト・ミソラはギターを弾き、はやてはドラムを叩き出し、ティアナはキーボードを弾き始めた。

最初の曲はクラスで決めた曲で、一番最初に相応しい歌の某緑を英語で表記するeの数が4つのグループの曲だ。

俺達は間違わずにメロディーを作り出し、そしてこの曲を歌う男子二人女子二人が歌い始めた。

スバルが居るグループは某コードなギアス・反逆する人のOPを、ツカサが居るグループは某緑を英語で表記してeの数が4つのグループが歌っている愛の唄を、ヒカルが居るグループは某平成ウルトラマン第一号のOPでジャーニーズが歌っている曲を、委員長・ゴント太・キザマロは某決戦兵器が人類の敵と戦うアニメのOPを、なのは達は中の人繋がりと言う事で中の人を、俺は某死神が人を守る為に戦うアニメの映画第三段の主題歌を歌うんだ。

他にも某鋼の錬金術師の一番最初のOPや某外見は小学生・中身は大人の名探偵のアニメのBとZの人が一番最初に歌った歌や夏の

祭りと言ったらこの曲でしょ！って言うを歌うんだ。

まあ、皆は楽器を弾けないから俺達がぶっ続けで弾くんだけどな。そんな事を思いながら弾いていると、何時の間にか最初を弾き終わっていた。

メンバーの配置換えや歌う人間のチェンジで少し時間が掛かるので、俺は皆に言いたい事が在るのでマイクの前に移動した。

「未だ未だ始まったばかりだ！テンション落とさずに行くぞ！！」

俺がそう言うと、皆は大声を出して応えてくれた。

平行世界から招待した皆も、十人十色だったがちゃんと盛り上がっていた。

俺は安心して自分の場所に戻ると、既に次の歌を歌う奴が準備をしていた。

って、次はツカサが居るグループか……
あっ、神威の世界の優奈のテンションが上がった……

「ねえ、彼処に居るのって優奈ちゃんだよね？」

「嗚呼、お前が出てきてテンションが上がってる優奈だ。」

「……何で僕が出てきてテンションが上がってるのか知らないけど、期待されてるんだったら頑張るよ。」

ツカサは神威の世界の優奈が何でテンションが上がっているのか分かっていないらしいが、期待されてると思って握り拳を作って頑張る様だ。

……鈍感にも程が在るだろ、神威の鈍感も酷いがツカサの鈍感も酷いな。

「まっ、頑張ろうぜ。」

俺はツカサに苦笑いしながらそう言っただけでティアナを見て合図を促すと、ティアナもツカサの鈍感さに苦笑いしながら頷いてくれた。はやては今回の歌は、必要無いのでツカサ達と一緒に歌うんだ。俺達も其処迄ロックな弾き方をせず、語り弾きの様な感じで弾く。そして、

「じゃあ行くよ！」

ティアナはそう言っただけで、キーボードで弾き始めたので俺達もゆっくり弾き始めた。

さうして、頑張っただけで盛り上げていきますか！！

.....

.....

.....

.....

「「「これで、俺（私）（僕）達のライブを終わります！！」「」」

俺達クラスのメンバー全員がステージに集まって、声を揃えてそう言っただけで頭を下げると皆が盛大な拍手をしてくれた。

その後、特に目立つ失敗もせずにライブを進め、全員が歌い切った。漸く最後の閉めをしている訳だ。

でも、皆テンションが高くなってアンコールを求めて来てるんだよな。

俺達は此処迄上手く行くとは思ってなかったから、アンコールの曲なんて何も用意していない。

俺やなのは達が歌えば解決なんだけど、それだとクラスのライブじゃなくて“ヒカリ”のライブだ。

さて、どうした物が……

「お兄ちゃん、私に良い考えが在るよ。」

すると突然、ティアナが俺に近付いてそう耳打ちしてきた。

「……何か変な事を企んでるんじゃないかねェだろうな？」

「企んでないよ。教えてあげるから明日、店番以外の時は二人つきりで回って？／／／／」

俺が少しジト目でティアナを見ながら聞くと、ティアナは顔を赤くして俺にそう言ってきた。

……何で平然とR-18指定のお願いを言う癖に、こつ言った普通のお願いを言う時に恥じらいながら言うんだよ？

……か、可愛過ぎるだろ！！……って、誰だ今シスコンと思った奴は？

可愛いものを可愛いと思って何が悪いんだ！？

「……分かった、明日一緒回ってやる。……それで、どうするんだ？」

俺がそう言うと、ティアナは嬉しそうに「エへへ！」と嬉しそうに笑みを浮かべてステージの隅に居る誰かに手を振った。すると、車椅子に乗っている女子が俺達に近付いてきた。

「「ぎ、ギンガ(ちゃん)!?」「」

そう、俺達のクラスメイトの一人であるギンガ・ナカジマがステージにやって来た。

ギンガが今日文化祭に来るって事は知っていたが、まさかステージに来るなんて……って、ギンガが此処に来たって事は!?

「諒君が思ってる通り、私も歌いに来たんだ。……皆、私と一緒に歌ってくれる?」

するとギンガは俺の思っている事を予測したのか、俺にそう言っ
て不安そうな顔をしながら俺達に聞いてきた。

……はっ、ティアナが考える事だから少し心配してたが、これ以上
に無い最ツ高の考えだ!!

「「勿論!」「」

俺達はギンガにそう言ってそれぞれマイクの前に立って、スバル
とギンガを中央にした。

俺は自分のポジションに移動する前にギンガの隣に行った。

「ギンガ、何を歌うんだ?」

「うん、諒君達が歌ってた“Y E L L”を歌おうと思うんだ。」

「……了解、しっかりと歌えよ!」

俺はギンガから曲を聞いて、ギンガにそう言ってなのは達に曲を
伝えて自分のポジションに移動した。

「最後は僕達全員が合唱する“YELL”です！皆さんも一緒に歌って下さい！」

スバルは皆にそう言って俺に合図してきたので、俺は無言で頷いてなのは達に合図をした。

「じゃ、行くよ！」

ティアナはそう言ってキーボードを弾き始めたので、俺達もメモディに沿ってギターを弾き始めた。

皆、一度も練習してないのにも関わらず、しかも今日一番の歌声で“YELL”を歌った。

そして、俺達のライブは完璧と言っても過言ではない位綺麗な形で終わった。

第128話 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート2（後書き）

松上「今年最後の更新かー。」

すずか「お疲れさま。」

松上「頑張ったよ、でも完ッ全に予定が狂った。」

すずか「でも、年末年始はゆっくりするんだよ？」

松上「ヤだ。宿題は頑張って速く終わらせて、ストックを矯める。」

すずか「そ、そうなんだ……。」

松上「嗚呼、だって今回はコラボしてる人全員出す予定だからな。」

すずか「頑張ってたね？」

松上「おう！それじゃ、次回予告と行きますか！

次回 文化祭だよ！全・員・集・合！！ パート3」

すずか「次の更新は年始からです！」

2人「それでは皆さん、よい年末年始を！」

諒「今年は頑張りました。」

スバル「色々在ったよね？」

諒「俺は童貞を守る一年だった。」

スバル「……お疲れさま。」

諒「……サンキュー。」

2人「それじゃあ皆さん、来年に会いましょうー!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7251s/>

流星のロックマン 転生者の絆物語

2011年12月27日23時55分発行